日本聖公会

祈祷書

救主降生一九五九年改定

日本聖公会祈祷書

日本聖公会教務院

本書は正本に準拠したものであることを
証明する

日本聖公会祈祷書正本保管委員

本書は聖公会の公祷・聖奠（サクラメント）および諸式を
載せたもので日本聖公会の所用に属する

目次

公会暦……一
日課・詩篇表……一五
早祷序式……五八
早祷……六三
晩祷序式……七六
晩祷……八〇
アタナシオ信経……八六
嘆願……九一
諸祈祷・感謝……一〇〇
聖餐式……三七
特祷・使徒書・福音書……一六九
聖洗式……四〇一
公会問答……四一九
堅信式（信徒按手式）……四二八
聖婚式……四三三
産後感謝式……四四八

病者訪問式……四五二
葬送式……四七三
幼年葬送式……四九六
大斎懺悔式……五〇九
聖職按手式……五一七
主教就任式……五五六
礼拝堂聖別式……五六二
牧師任命式……五八四
付録
家族の朝の祈り……五九九
家族の夕の祈り……六〇〇
午祷……六〇四
終祷……六一三
日本聖公会組織成立記念日祈祷……六二四
収穫感謝……六二八
伝道祈祷……六三一
洗礼志願式……六三九
伝道師認可式……六四一
女執事任命式……六四五
逝去者記念……六五二

公会暦

公会暦には祝日と斎日とが定められている。

祝日

祝日には移動祝日と固定祝日とがある。固定祝日は毎年同じ日に当たるが、移動祝日の日取りはその年の復活日をもととして定められる。ただし降臨節の主日の日取りは降誕日をもととして定める。

移動祝日は次のとおりである。

復活日　三月二十一日以後の満月に次ぐ主日（もし満月が主日に当たる時はその次の主日）

復活後月・火曜日

大斎前第三主日　復活日前の第九主日

大斎前第二主日　復活日前の第八主日

大斎前第一主日　復活日前の第七主日

大斎第一主日　復活日前の第六主日
昇天前主日　復活日後の第五主日
昇　天　日　復活日後四十日目
聖霊降臨日　復活日後五十日目
聖霊降臨後月・火曜日
三位一体主日　復活日後の第八主日
降臨節第一主日　降誕日前の第四主日
その他の各主日

固定祝日は次のとおりである。

一　月　一　日　主イエス命名日（受割礼日）
　六　日　顕現日
　二十五日　使徒聖パウロ改心日
二　月　二　日　被献日
　二十四日　使徒聖マッテヤ日
三　月二十五日　処女聖マリヤ蒙告日
四　月二十五日　福音記者聖マルコ日
五　月　一　日　使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日
六　月　十一日　使徒聖バルナバ日
　二十四日　施洗者聖ヨハネ誕生日
　二十九日　使徒聖ペテロ・聖パウロ日
七　月二十五日　使徒聖ヤコブ日
八　月　六　日　変容貌日
　二十四日　使徒聖バルトロマイ日
九　月二十一日　福音記者使徒聖マタイ日
　二十九日　聖ミカエル及び諸天使日
十　月　十八日　福音記者聖ルカ日
　二十八日　使徒聖シモン・聖ユダ日
十一月　一　日　諸聖徒日
　三十日　使徒聖アンデレ日

十二月二十一日　使徒 聖トマス日
二十五日　降　誕　日
十二月二十六日　聖ステパノ日
二十七日　福音記者 使徒 聖ヨハネ日
二十八日　聖嬰児日

斎　日

斎日は次のとおりである。

大 斎 始 日（断食日）
受　苦　日（断食日）
大斎始日以後主日を除いた四十日
聖職按手節
冬　期　降臨節第三主日
春　期　大斎第一主日
夏　期　聖霊降臨日
} 後の水・金・土曜日

秋　期　九月十四日一

（九月十四日が水曜日に当たるときは、その次の週の水・金・土曜日）

昇天前祈祷日　昇天日前の月・火・水曜日
毎　金　曜　日　但し降誕日から顕現日までと復活週及び昇天週の各金曜日を除く
次の祝日の備え日（前日）　但し祝日が月曜日に当たるときは土曜日
降誕日、聖霊降臨日、施洗者聖ヨハネ誕生日、諸聖徒日、使徒聖アンデレ日

主日と他の祝日、または祝日と斎日とが重なるときの規定

一　降臨節第一主日が使徒聖アンデレ日と重なるときは、使徒聖アンデレ日を月曜日に移す。
二　降臨節第四主日が使徒聖トマス日と重なるときは、使徒聖トマス日を月曜日に移す。
三　聖ステパノ日、使徒聖ヨハネ日、または聖嬰児日が降誕後第一主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。
四　顕現日が降誕後第二主日と重なるときは、顕現日を主とする。
五　使徒聖パウロ改心日が顕現後第三主日と重なるときは、使徒聖パウロ改心日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

六　被献日が顕現後第四主日、または大斎前第三・第二・第一主日と重なるときは、被献日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

七　大斎前第三主日が使徒聖パウロ改心日と重なる時は、使徒聖パウロ改心日を月曜日に移す。

八　大斎前第二・第一主日・大斎始日、または大斎節の主日が使徒聖マッテヤ日と重なるときは、使徒聖マッテヤ日をその翌日に移す。

九　大斎第三・第四、または第五主日が蒙告日と重なるときは、蒙告日を月曜日に移す。

一〇　復活前主日と復活後第一主日の間に、蒙告日、福音記者聖マルコ日または使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が来るときは、復活後第一主日後の月曜日に移す。

一一　福音記者聖マルコ日、使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が復活後第二・第三・第四、または第五主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

一二　昇天日が使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日と重なるときは、使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日を翌金曜日に移す。

一三　聖霊降臨日と三位一体主日の間に使徒聖バルナバ日が来るときは、使徒聖バルナバ日を三位一体主日後の月曜日に移す。

一四　施洗者聖ヨハネ誕生日、変容貌日、使徒または福音記者の祝日、聖ミカエル及び諸天使日あるいは諸聖徒日が三位一体節中の主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

一五　降誕日、顕現日、復活日、昇天日、聖霊降臨日、三位一体主日には、当日の特祷だけを用いる。ただし翌日が祝日に当たるときは、晩祷にはその祝日の特祷を晩祷の第二特祷とする。

一六　祝日が土曜日に当たるときは、晩祷にはその祝日の特祷を第一特祷とし、主日の特祷を第二特祷とする。ただし降臨節各主日、大斎第五主日、復活前主日の晩祷には、主日の特祷を第一特祷とし、その固定祝日の特祷を第二特祷とする。

一七　使徒聖マッテヤ日が大斎始日の翌日に当たるときは、大斎始日の晩祷には当日の特祷を第一特祷とし、使徒聖マッテヤ日の特祷を第二特祷とする。

一八　使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が昇天日の前日に当たるときは、当日の晩祷には昇天日の特祷を第一特祷とし、使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日の特祷を第二特祷とする。

一九　使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が昇天日の翌日に当たるときは、木曜日の晩祷には昇天日の特祷を第一特祷とし、使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日の特祷を第二特祷とする。

二〇　週日に祝日が来るときは、祝日の特祷だけを用いる。

第一表　年次移動祝斎日

年次	顕現後主日数	大斎前第三主日 月・日	大斎始日 月・日	復活日 月・日	昇天日 月・日	聖霊降臨日 月・日	三位一体後主日数	降臨節第一主日 月・日
一九六八	五	二・一一	二・二八	四・一四	五・二三	六・二	二四	一二・一
一九六九	三	二	一九	六	一五	五・二五	二五	一一・三〇
一九七〇	二	一・二五	一一	三・二九	七	一七	二六	二九
一九七一	四	二・七	二四	四・一一	二〇	三〇	二四	二八
一九七二	三	一・三〇	一六	二	一一	二一	二六	一二・三
一九七三	六	二・一八	三・七	二二	三一	六・一〇	二三	二
一九七四	四	一〇	二・二七	一四	二三	二	二四	一
一九七五	二	一・二六	一二	三・三〇	八	五・一八	二六	一一・三〇
一九七六	五	二・一五	三・三	四・一八	二七	六・六	二三	二八
一九七七	四	六	二・二三	一〇	一九	五・二九	二四	二七
一九七八	二	一・二二	八	三・二六	四	一四	二九	一二・三
一九七九	五	二・一一	二八	四・一五	二四	六・三	二六	二
一九八〇	三	三	二〇	六	一五	五・二五	二七	一一・三〇
一九八一	五	一五	三・四	一九	二八	六・七	二五	二九
一九八二	四	七	二・二四	一一	二〇	五・三〇	二四	二八
一九八三	三	一・三〇	一六	三	一二	二二	二五	二七
一九八四	六	二・一九	三・七	二二	三一	六・一〇	二三	一二・二
一九八五	三	三	二・二〇	七	一六	五・二六	二五	一
一九八六	二	一・二六	一二	三・三〇	八	一八	二六	一一・三〇
一九八七	五	二・一五	三・四	四・一九	二八	六・七	二三	二九

第二表　移動・固定小祝日

＊符号は移動小祝日

＊聖餐制定記念日　（復活前木曜日）

＊聖餐感謝日　（三位一体主日後の木曜日）

一月　十四日　主教　ヒラリー（三六八年）

十七日　修院長　アントニオ（三五六年）

二十日　殉教者　主教　ファビアン（二五〇年）

二十一日　殉教者　処女　アグネス（三〇五年頃）

二十二日　殉教者　執事　ビンセント（三〇四年頃）

二十四日　殉教者　主教　聖テモテ（第一世紀）

二十六日　殉教者　主教　ポリカープ（一五五年頃）

二十七日　主教　博士　ヨハネ＝キリソストム（四〇七年）

二月　一日　殉教者　主教　イグナシオ（一一〇年頃）

五日　日本殉教者

十一日　日本聖公会組織成立記念日（一八八七年）

三月一日　主教 デビッド（五四四年頃）
七日　殉教者 パペチュアとそのともがら（二〇二年）
八日　博士 トマス＝アクイナス（一二七四年）
十二日　主教 博士 グレゴリー（六〇四年）
十七日　主教 パトリック（四六一年）
十八日　主教 博士 エルサレムのシリル（三八六年）
十九日　聖ヨセフ
二十一日　修院長 ベネジクト（五四〇年頃）
四月三日　主教 リチャード（一二五三年）
四日　主教 博士 アムブローズ（三九七年）
十一日　主教 博士 レオ（四六一年）
十三日　殉教者 ジャスチン（一六七年頃）
二十一日　主教 博士 アンセルム（一一〇九年）
二十三日　殉教者 ジョージ（三〇三年頃）
三十日　処女 シエナのカタリナ（一三八〇年）

五月二日　主教 博士 アタナシオ（三七三年）
四日　寡婦 モニカ（三八七年）
六日　聖ヨハネのラテン門前の受難（第一世紀）
九日　主教 博士 ナジアンザスのグレゴリー（三九〇年頃）
二十六日　主教 カンタベリーのオーガスチン（六〇五年）
二十七日　司祭 博士 ビード（七三五年）
六月五日　殉教者 主教 ボニフェース（七五四年）
九日　修院長 コロンバ（五九七年）
十四日　主教 博士 バシル（三七九年）
二十二日　殉教者 オルバン（三〇四年頃）
二十八日　殉教者 主教 イレネウス（二〇二年頃）
七月二日　処女聖マリヤの訪問
二十日　殉教者 処女 マーガレット（二七八年頃）
二十二日　マグダラの聖マリヤ（第一世紀）
二十六日　アンナ

八月一日　聖ペテロ、鎖を解かる
四日　ドミニコ（一二二二年）
十日　殉教者 執事 ローレンス（二五八年）
十二日　処女 クララ（一二五三年）
十五日　聖母マリヤ安息の日
十八日　ヘレナ（三二八年頃）
二十日　修院長 博士 ベルナルド（一一五三年）
二十八日　主教 博士 オーガスチン（四三〇年）
二十九日　施洗者聖ヨハネの断頭
九月一日　修院長 ジャイルス（七二〇年頃）
八日　処女聖マリヤの誕生日
十四日　聖十字架顕栄日
十九日　主教 セオドル（六九〇年）
二十六日　殉教者 主教 シプリヤン（二五八年）
三十日　司祭 博士 ジェローム（四二〇年）

十月四日　アシジのフランシス（一二二六年）
九日　殉教者 主教 デニス（二八六年頃）
十三日　王 エドワード（一〇六六年）
十一月二日　諸魂日
十一日　主教 マルチン（三九七年頃）
十七日　処女 ヒルダ（六八〇年）
二十二日　殉教者 処女 セシリヤ（二三〇年頃）
二十三日　殉教者 主教 クレメント（一〇〇年頃）
二十五日　殉教者 処女 アレキサンドリヤのカタリナ（三〇七年頃）
十二月二日　ウイリアムス主教記念日（一九一〇年）
三日　フランシス＝サビエル（一五五二年）
四日　博士 アレキサンドリヤのクレメント（二一〇年頃）
六日　主教 ニコラス（三二五年頃）
十三日　殉教者 処女 ルシヤ（三〇三年頃）
二十九日　殉教者 主教 カンタベリーのトマス（一一七〇年）

日課・詩篇表

旧約聖書・新約聖書・旧約聖書外典各巻の書名を次のように略記する。

旧約聖書

略記	書名	略記	書名	略記	書名
創	創世記	歴下	歴代志略下	ダニ	ダニエル書
出	出エジプト記	エズラ	エズラ書	ホセ	ホセア書
レビ	レビ記	ネヘ	ネヘミヤ記	ヨエ	ヨエル書
民	民数紀略	エス	エステル書	アモ	アモス書
申	申命記	ヨブ	ヨブ記	オバデ	オバデヤ書
ヨシュ	ヨシュア記	詩	詩篇	ヨナ	ヨナ書
士	士師記	箴	箴言	ミカ	ミカ書
ルツ	ルツ記	伝道之	伝道之書	ナホ	ナホム書
サム前	サムエル前書	雅	雅歌	ハバ	ハバクク書
サム後	サムエル後書	イザ	イザヤ書	ゼパ	ゼパニヤ書
列上	列王紀略上	エレ	エレミヤ記	ハガイ	ハガイ書
列下	列王紀略下	哀	エレミヤ哀歌	ゼカ	ゼカリヤ書
歴上	歴代志略上	エゼ	エゼキエル書	マラ	マラキ書

新約聖書

略記	書名	略記	書名	略記	書名
マタ	マタイ伝福音書	エペ	エペソ書	ヘブ	ヘブル書
マル	マルコ伝福音書	ピリ	ピリピ書	ヤコ	ヤコブ書
ルカ	ルカ伝福音書	コロ	コロサイ書	ペテ前	ペテロ前書
ヨハ	ヨハネ伝福音書	テサ前	テサロニケ前書	ペテ後	ペテロ後書
使	使徒行伝	テサ後	テサロニケ後書	ヨハ壱	ヨハネ第一書
ロマ	ロマ書	テモ前	テモテ前書	ヨハ弐	ヨハネ第二書
コリ前	コリント前書	テモ後	テモテ後書	ヨハ参	ヨハネ第三書
コリ後	コリント後書	テト	テトス書	ユダ	ユダ書
ガラ	ガラテヤ書	ピレ	ピレモン書	黙	ヨハネ黙示録

旧約聖書外典

略記	書名	略記	書名	略記	書名
エズ弐	エズラ第二書	ソロ	ソロモンの知恵	バル	バルク書
トビト	トビト書	ベン	ベンシラの知恵	三童	三童児の歌

第一表　年間日課及び主日・移動祝斎日詩篇

公会暦	早祷 第一日課・詩篇	早祷 第二日課	晩祷 第一日課・詩篇	晩祷 第二日課
降臨節第一主日	イザ一 一—二〇 詩一、七	黙 二 一—一七	イザ二 一〇—二二 詩四六、四八	ヨハ三 一—二一
月	イザ三 一—一五	マル一 一—二〇	イザ四 二—六	黙 六
火	六	一 二一—四五	八 一六—九七	七
水	九 八—一〇 四	二 一—二二	一〇 五—二三	八
木	一〇 二四—三四	二 二三—三一	一三 一—一四 二	九
金	一四 三—二七	三 一三—二八	一七	一〇
土	一八	四 一—二〇	一九 一—一七	一一
降臨節第二主日	イザ五 一—一七 詩九、一一	黙 二 一八—三六	イザ五 一八—三〇 詩五〇、六七	ルカ一 一—二五
月	イザ一九 一八—二五	マル四 二一—四一	イザ二一 一—一二	黙 一二
火	二二 一—一四	五 一—二〇	二四	一三
水	二八 一—一八	五 二二—四三	二九 一—一四	一四
木	二九 一五—二四	六 一—一三	三〇 一九—三三	一五
金	三一	六 一四—二九	三八 一—二〇	一六
土	四〇 一二—三一	六 三〇—五六	四一	一七
降臨節第三主日	イザ二五 一—九 詩七三	黙 五 七—二二	イザ二六 一—一三 詩七五	マタ三
月	イザ四二 一—一七	マル七 一—二三	イザ四二 一八—四三 一三	黙 一八
火	四三 一四—四四 五	七 二四—八 一〇	四四 六—二三	一九
冬期聖職按手節 水	エレ二三 一—一五 詩一、一五 四四 二四—四五 一三	ヨハ一 八 一一—九 一 一九—二七	エレ二三 四五 一四—二五 一六—三二 詩九二	エペ四 二〇 一—一六
木	イザ四六	マル九 二—二九	イザ四七	黙 二一 一—一四
金	エレ二六 一—一九 詩四二 四八	ヨハ五 九 三〇—五〇 二二—三六	マラ二 四九 一—一三 一—九 詩五一	二一 一五—二七
同 土	イザ四九 一四—二六 マラ三 一—六 詩四三	マル一〇 一—三一 ルカ一二 三五—四八	イザ五〇 四—一〇 マラ三 一六—四五	黙 二三 テモ後一

降臨節第四主日	イザ三〇 六―二一 詩九四	默 一四 一三―一五 四	イザ四〇 一―一二 詩九六―九八	ルカ一 二六―四五			
月	イザ五二 一―一六	マル一〇 三二―五二	イザ五二 一七―五三 一二	ヤコ一			
火	詩三二 一三―五三 一二	一一 一―二五	五四	二			
水	五六 一―八	一一 二七―三三 一三	五七 一五―二一	三			
木	五九	一三 一三―三六	六〇 一―二	四			
金	六〇 一三―二三	一三 三七―一三 八	六一	五			
土	六二	一三 九―三七					
* 降誕日	イザ九 二―七 詩一九、八五						
聖ステパノ日	創 四 一―一〇 詩二、八	使 六	イザ六三 一―一〇 詩一一八	ヨハ一 一四―一八	イザ六一 一〇―六二 九 詩八九 一―三六	ゼカ二 一〇―一三 詩八九 一―三六	イザ四〇 一―一一 詩九六―九八
福音記者使徒聖ヨハネ日	出 三三 九―一九 詩一三、二四	ヨハ一三 三一―三五	一一 一―一六	三 一六―二〇	六二 一―五 詩九七	イザ七 一〇―一四 詩一三二	ルカ一 二六―四五
聖嬰児日	エレ三一 一―一七 詩八、二六	默 六 九―一一	一一 一七―二五	四 二四―三〇	六二 六―一二	歴下二四 一五―二三 詩四五、一一〇、一二三	使 七 五四―八 三
			一一 二六―三一	五 一―一一	六三 七―一九	イザ六 一―八 詩九七	ヨハ壱 五 一―一二
			一二 一―一一	六 一二―一九	六四 一―一〇	イザ四九 一四―二五 詩一二六	マタ一八 一―一〇
			一二 一二―二一	七 一―一三	六五 一―一六		
			一二 二二―三七	八 一―一三	六六 一―一九		
			一三 一―一四	九 一―一五	六六 一〇―二四		
			一三 一五―二一	一〇 一―一六			
			一三 二二―三〇	一一 一―一四			
			一三 三一―三五	一二 一―一四			
			一三 三六―四四	一三 一―一七			
			一四 一―一五	一四 一―一五			
			一四 一六―二四	一五 一―一〇			
			一四 二五―二七	一六 一―一四			
			一四 二八―三三	一七 一―一〇			
			一四 三四―三五	一八 一―一九			
			一五 一―一七	一九 一―一五			
			一五 一八―二八	二〇 一―一六			
			一五 二九―三二	二一 一―一四			
			一五 三三―四一	二二 一―一四			
			一五 四二―四六	二三 一―一一			
			一五 四七―五二	二四 一―一二			
			一五 五三―五八	二五 一―一二			
			一五 五九―六一	二六 一―一四			
			一五 六二―六四	二七 一―一〇			
			一五 六五―六七	二八 一―一二			
			一五 六八―七二	二九 一―一一			
			一五 七三―七六	三〇 一―一六			
			一五 七七―八〇	三一 一―一三			
			一五 八一―八四	三二 一―一二			
			一五 八五―八八	三三 一―一二			
			一五 八九―九一	三四 一―一二			
			一五 九二―九五	三五 一―一二			
			一五 九六―九九	三六 一―一四			
			一五 一〇〇―一〇三	三七 一―一二			
			一五 一〇四―一〇六	三八 一―一二			
			一五 一〇七―一一〇	三九 一―一二			
			一五 一一一―一一四	四〇 一―一二			
			一五 一一五―一一八	四一 一―一二			
			一五 一一九―一二一	四二 一―一二			
			一五 一二二―一二六	四三 一―一二			
			一五 一二七―一三二	四四 一―一五			
			一五 一三三―一三五	四五 一―一二			
			一五 一三六―一四〇	四六 一―一二			
			一五 一四一―一四五	四七 一―一二			
			一五 一四六―一四八	四八 一―一二			
			一五 一四九―一五一	四九 一―一二			
			一五 一五二―一五四	五〇 一―一二			
			一五 一五五―一五八	五一 一―一二			
			一五 一五九―一六二	五二 一―一二			
			一五 一六三―一六五	五三 一―一二			
			一五 一六六―一六八	五四 一―一二			
			一五 一六九―一七二	五五 一―一二			
			一五 一七三―一七五	五六 一―一二			
			一五 一七六―一七八	五七 一―一二			
			一五 一七九―一八二	五八 一―一二			
			一五 一八三―一八五	五九 一―一二			
			一五 一八六―一八八	六〇 一―一二			
			一五 一八九―一九二	六一 一―一二			
			一五 一九三―一九五	六二 一―一二			
			一五 一九六―一九八	六三 一―一二			
			一五 一九九―二〇二	六四 一―一二			
			一五 二〇三―二〇五	六五 一―一二			
			一五 二〇六―二〇八	六六 一―一二			
			一五 二〇九―二一一	六七 一―一二			
			一五 二一二―二一四	六八 一―一二			
			一五 二一五―二一七	六九 一―一二			
			一五 二一八―二二一	七〇 一―一二			
			一五 二二二―二二四	七一 一―一二			
			一五 二二五―二二七	七二 一―一二			
			一五 二二八―二三一	七三 一―一二			
			一五 二三二―二三四	七四 一―一二			
			一五 二三五―二三七	七五 一―一二			
			一五 二三八―二四一	七六 一―一二			
			一五 二四二―二四四	七七 一―一二			
			一五 二四五―二四七	七八 一―一二			
			一五 二四八―二五一	七九 一―一二			
			一五 二五二―二五四	八〇 一―一二			
			一五 二五五―二五八	八一 一―一二			
			一五 二五九―二六二	八二 一―一二			
			一五 二六三―二六五	八三 一―一二			
			一五 二六六―二六八	八四 一―一二			
			一五 二六九―二七二	八五 一―一二			
			一五 二七三―二七五	八六 一―一二			
			一五 二七六―二七八	八七 一―一二			
			一五 二七九―二八二	八八 一―一二			
			一五 二八三―二八五	八九 一―一二			
			一五 二八六―二八八	九〇 一―一二			
			一五 二八九―二九二	九一 一―一二			
			一五 二九三―二九五	九二 一―一二			
			一五 二九六―二九八	九三 一―一二			
			一五 二九九―三〇二	九四 一―一二			
			一五 三〇三―三〇五	九五 一―一二			
			一五 三〇六―三〇八	九六 一―一二			
			一五 三〇九―三一一	九七 一―一二			
			一五 三一二―三一四	九八 一―一二			
			一五 三一五―三一七	九九 一―一二			
			一五 三一八―三二一	一〇〇 一―一二			
			一五 三二二―三二四	一〇一 一―一二			
			一五 三二五―三二七	一〇二 一―一二			
			一五 三二八―三三一	一〇三 一―一二			
			一五 三三二―三三四	一〇四 一―一二			
			一五 三三五―三三七	一〇五 一―一二			
			一五 三三八―三四一	一〇六 一―一二			
			一五 三四二―三四四	一〇七 一―一二			
			一五 三四五―三四七	一〇八 一―一二			
			一五 三四八―三五一	一〇九 一―一二			
			一五 三五二―三五四	一一〇 一―一二			
			一五 三五五―三五八	一一一 一―一二			
			一五 三五九―三六二	一一二 一―一二			
			一五 三六三―三六五	一一三 一―一二			
			一五 三六六―三六八	一一四 一―一二			
			一五 三六九―三七二	一一五 一―一二			
			一五 三七三―三七五	一一六 一―一二			
			一五 三七六―三七八	一一七 一―一二			
			一五 三七九―三八二	一一八 一―一二			
			一五 三八三―三八五	一一九 一―一二			
			一五 三八六―三八八	一二〇 一―一二			
			一五 三八九―三九二	一二一 一―一二			
			一五 三九三―三九五	一二二 一―一二			
			一五 三九六―三九八	一二三 一―一二			
			一五 三九九―四〇二	一二四 一―一二			
			一五 四〇三―四〇五	一二五 一―一二			
			一五 四〇六―四〇八	一二六 一―一二			
			一五 四〇九―四一一	一二七 一―一二			
			一五 四一二―四一四	一二八 一―一二			
			一五 四一五―四一七	一二九 一―一二			
			一五 四一八―四二一	一三〇 一―一二			
			一五 四二二―四二四	一三一 一―一二			
			一五 四二五―四二七	一三二 一―一二			
			一五 四二八―四三一	一三三 一―一二			
			一五 四三二―四三四	一三四 一―一二			
			一五 四三五―四三七	一三五 一―一二			
			一五 四三八―四四一	一三六 一―一二			
			一五 四四二―四四四	一三七 一―一二			
			一五 四四五―四四七	一三八 一―一二			
			一五 四四八―四五一	一三九 一―一二			
			一五 四五二―四五四	一四〇 一―一二			
			一五 四五五―四五八	一四一 一―一二			
			一五 四五九―四六二	一四二 一―一二			
			一五 四六三―四六五	一四三 一―一二			
			一五 四六六―四六八	一四四 一―一二			
			一五 四六九―四七二	一四五 一―一二			
			一五 四七三―四七五	一四六 一―一二			
			一五 四七六―四七八	一四七 一―一二			
			一五 四七九―四八二	一四八 一―一二			
			一五 四八三―四八五	一四九 一―一二			
			一五 四八六―四八八	一五〇 一―一二			
			一五 四八九―四九二	一五一 一―一二			
			一五 四九三―四九五	一五二 一―一二			
			一五 四九六―四九八	一五三 一―一二			
			一五 四九九―五〇二	一五四 一―一二			
			一五 五〇三―五〇五	一五五 一―一二			
			一五 五〇六―五〇八	一五六 一―一二			
			一五 五〇九―五一一	一五七 一―一二			
			一五 五一二―五一四	一五八 一―一二			
			一五 五一五―五一七	一五九 一―一二			
			一五 五一八―五二一	一六〇 一―一二			
			一五 五二二―五二四	一六一 一―一二			
			一五 五二五―五二七	一六二 一―一二			
			一五 五二八―五三一	一六三 一―一二			
			一五 五三二―五三四	一六四 一―一二			
			一五 五三五―五三七	一六五 一―一二			
			一五 五三八―五四一	一六六 一―一二			
			一五 五四二―五四四	一六七 一―一二			
			一五 五四五―五四七	一六八 一―一二			
			一五 五四八―五五一	一六九 一―一二			
			一五 五五二―五五四	一七〇 一―一二			
			一五 五五五―五五八	一七一 一―一二			
			一五 五五九―五六二	一七二 一―一二			
			一五 五六三―五六五	一七三 一―一二			
			一五 五六六―五六八	一七四 一―一二			
			一五 五六九―五七二	一七五 一―一二			
			一五 五七三―五七五	一七六 一―一二			
			一五 五七六―五七八	一七七 一―一二			
			一五 五七九―五八二	一七八 一―一二			
			一五 五八三―五八五	一七九 一―一二			
			一五 五八六―五八八	一八〇 一―一二			
			一五 五八九―五九二	一八一 一―一二			
			一五 五九三―五九五	一八二 一―一二			
			一五 五九六―五九八	一八三 一―一二			
			一五 五九九―六〇二	一八四 一―一二			
			一五 六〇三―六〇五	一八五 一―一二			
			一五 六〇六―六〇八	一八六 一―一二			
			一五 六〇九―六一一	一八七 一―一二			
			一五 六一二―六一四	一八八 一―一二			
			一五 六一五―六一七	一八九 一―一二			
			一五 六一八―六二一	一九〇 一―一二			
			一五 六二二―六二四	一九一 一―一二			
			一五 六二五―六二七	一九二 一―一二			
			一五 六二八―六三一	一九三 一―一二			
			一五 六三二―六三四	一九四 一―一二			
			一五 六三五―六三七	一九五 一―一二			
			一五 六三八―六四一	一九六 一―一二			
			一五 六四二―六四四	一九七 一―一二			
			一五 六四五―六四七	一九八 一―一二			
			一五 六四八―六五一	一九九 一―一二			
			一五 六五二―六五四	二〇〇 一―一二			
			一五 六五五―六五八	二〇一 一―一二			
			一五 六五九―六六二	二〇二 一―一二			
			一五 六六三―六六五	二〇三 一―一二			
			一五 六六六―六六八	二〇四 一―一二			
			一五 六六九―六七二	二〇五 一―一二			
			一五 六七三―六七五	二〇六 一―一二			
			一五 六七六―六七八	二〇七 一―一二			
			一五 六七九―六八二	二〇八 一―一二			
			一五 六八三―六八五	二〇九 一―一二			
			一五 六八六―六八八	二一〇 一―一二			
			一五 六八九―六九二	二一一 一―一二			
			一五 六九三―六九五	二一二 一―一二			
			一五 六九六―六九八	二一三 一―一二			
			一五 六九九―七〇二	二一四 一―一二			
			一五 七〇三―七〇五	二一五 一―一二			
			一五 七〇六―七〇八	二一六 一―一二			
			一五 七〇九―七一一	二一七 一―一二			
			一五 七一二―七一四	二一八 一―一二			
			一五 七一五―七一七	二一九 一―一二			
			一五 七一八―七二一	二二〇 一―一二			
			一五 七二二―七二四	二二一 一―一二			
			一五 七二五―七二七	二二二 一―一二			
			一五 七二八―七三一	二二三 一―一二			
			一五 七三二―七三四	二二四 一―一二			
			一五 七三五―七三七	二二五 一―一二			
			一五 七三八―七四一	二二六 一―一二			
			一五 七四二―七四四	二二七 一―一二			
			一五 七四五―七四七	二二八 一―一二			
			一五 七四八―七五一	二二九 一―一二			
			一五 七五二―七五四	二三〇 一―一二			
			一五 七五五―七五八	二三一 一―一二			
			一五 七五九―七六二	二三二 一―一二			
			一五 七六三―七六五	二三三 一―一二			
			一五 七六六―七六八	二三四 一―一二			
			一五 七六九―七七二	二三五 一―一二			
			一五 七七三―七七五	二三六 一―一二			
			一五 七七六―七七八	二三七 一―一二			
			一五 七七九―七八二	二三八 一―一二			
			一五 七八三―七八五	二三九 一―一二			
			一五 七八六―七八八	二四〇 一―一二			
			一五 七八九―七九二	二四一 一―一二			
			一五 七九三―七九五	二四二 一―一二			
			一五 七九六―七九八	二四三 一―一二			
			一五 七九九―八〇二	二四四 一―一二			
			一五 八〇三―八〇五	二四五 一―一二			
			一五 八〇六―八〇八	二四六 一―一二			
			一五 八〇九―八一一	二四七 一―一二			
			一五 八一二―八一四	二四八 一―一二			
			一五 八一五―八一七	二四九 一―一二			
			一五 八一八―八二一	二五〇 一―一二			
			一五 八二二―八二四	二五一 一―一二			
			一五 八二五―八二七	二五二 一―一二			
			一五 八二八―八三一	二五三 一―一二			
			一五 八三二―八三四	二五四 一―一二			
			一五 八三五―八三七	二五五 一―一二			
			一五 八三八―八四一	二五六 一―一二			
			一五 八四二―八四四	二五七 一―一二			
			一五 八四五―八四七	二五八 一―一二			
			一五 八四八―八五一	二五九 一―一二			
			一五 八五二―八五四	二六〇 一―一二			
			一五 八五五―八五八	二六一 一―一二			
			一五 八五九―八六二	二六二 一―一二			
			一五 八六三―八六五	二六三 一―一二			
			一五 八六六―八六八	二六四 一―一二			
			一五 八六九―八七二	二六五 一―一二			
			一五 八七三―八七五	二六六 一―一二			
			一五 八七六―八七八	二六七 一―一二			
			一五 八七九―八八二	二六八 一―一二			
			一五 八八三―八八五	二六九 一―一二			
			一五 八八六―八八八	二七〇 一―一二			
			一五 八八九―八九二	二七一 一―一二			
			一五 八九三―八九五	二七二 一―一二			
			一五 八九六―八九八	二七三 一―一二			
			一五 八九九―九〇二	二七四 一―一二			
			一五 九〇三―九〇五	二七五 一―一二			
			一五 九〇六―九〇八	二七六 一―一二			
			一五 九〇九―九一一	二七七 一―一二			
			一五 九一二―九一四	二七八 一―一二			
			一五 九一五―九一七	二七九 一―一二			
			一五 九一八―九二一	二八〇 一―一二			
			一五 九二二―九二四	二八一 一―一二			
			一五 九二五―九二七	二八二 一―一二			
			一五 九二八―九三一	二八三 一―一二			
			一五 九三二―九三四	二八四 一―一二			
			一五 九三五―九三七	二八五 一―一二			
			一五 九三八―九四一	二八六 一―一二			
			一五 九四二―九四四	二八七 一―一二			
			一五 九四五―九四七	二八八 一―一二			
			一五 九四八―九五一	二八九 一―一二			
			一五 九五二―九五四	二九〇 一―一二			
			一五 九五五―九五八	二九一 一―一二			
			一五 九五九―九六二	二九二 一―一二			
			一五 九六三―九六五	二九三 一―一二			
			一五 九六六―九六八	二九四 一―一二			
			一五 九六九―九七二	二九五 一―一二			
			一五 九七三―九七五	二九六 一―一二			
			一五 九七六―九七八	二九七 一―一二			
			一五 九七九―九八二	二九八 一―一二			
			一五 九八三―九八五	二九九 一―一二			
			一五 九八六―九八八	三〇〇 一―一二			
			一五 九八九―九九二	三〇一 一―一二			
			一五 九九三―九九五	三〇二 一―一二			
			一五 九九六―九九八	三〇三 一―一二			
			一五 九九九―一〇〇二	三〇四 一―一二			
			一五 一〇〇三―一〇〇五	三〇五 一―一二			
			一五 一〇〇六―一〇〇八	三〇六 一―一二			
			一五 一〇〇九―一〇一一	三〇七 一―一二			
			一五 一〇一二―一〇一四	三〇八 一―一二			
			一五 一〇一五―一〇一七	三〇九 一―一二			
			一五 一〇一八―一〇二一	三一〇 一―一二			
			一五 一〇二二―一〇二四	三一一 一―一二			
			一五 一〇二五―一〇二七	三一二 一―一二			
			一五 一〇二八―一〇三一	三一三 一―一二			
			一五 一〇三二―一〇三四	三一四 一―一二			
			一五 一〇三五―一〇三七	三一五 一―一二			
			一五 一〇三八―一〇四一	三一六 一―一二			
			一五 一〇四二―一〇四四	三一七 一―一二			
			一五 一〇四五―一〇四七	三一八 一―一二			
			一五 一〇四八―一〇五一	三一九 一―一二			
			一五 一〇五二―一〇五四	三二〇 一―一二			
			一五 一〇五五―一〇五八	三二一 一―一二			
			一五 一〇五九―一〇六二	三二二 一―一二			
			一五 一〇六三―一〇六五	三二三 一―一二			
			一五 一〇六六―一〇六八	三二四 一―一二			
			一五 一〇六九―一〇七二	三二五 一―一二			
			一五 一〇七三―一〇七五	三二六 一―一二			
			一五 一〇七六―一〇七八	三二七 一―一二			
			一五 一〇七九―一〇八二	三二八 一―一二			
			一五 一〇八三―一〇八五	三二九 一―一二			
			一五 一〇八六―一〇八八	三三〇 一―一二			
			一五 一〇八九―一〇九二	三三一 一―一二			
			一五 一〇九三―一〇九五	三三二 一―一二			
			一五 一〇九六―一〇九八	三三三 一―一二			
			一五 一〇九九―一一〇二	三三四 一―一二			
			一五 一一〇三―一一〇五	三三五 一―一二			
			一五 一一〇六―一一〇八	三三六 一―一二			
			一五 一一〇九―一一一一	三三七 一―一二			
			一五 一一一二―一一一四	三三八 一―一二			
			一五 一一一五―一一一七	三三九 一―一二			
			一五 一一一八―一一二一	三四〇 一―一二			
			一五 一一二二―一一二四	三四一 一―一二			
			一五 一一二五―一一二七	三四二 一―一二			
			一五 一一二八―一一三一	三四三 一―一二			
			一五 一一三二―一一三四	三四四 一―一二			
			一五 一一三五―一一三七	三四五 一―一二			
			一五 一一三八―一一四一	三四六 一―一二			
			一五 一一四二―一一四四	三四七 一―一二			
			一五 一一四五―一一四七	三四八 一―一二			
			一五 一一四八―一一五一	三四九 一―一二			
			一五 一一五二―一一五四	三五〇 一―一二			
			一五 一一五五―一一五八	三五一 一―一二			
			一五 一一五九―一一六二	三五二 一―一二			
			一五 一一六三―一一六五	三五三 一―一二			
			一五 一一六六―一一六八	三五四 一―一二			
			一五 一一六九―一一七二	三五五 一―一二			
			一五 一一七三―一一七五	三五六 一―一二			
			一五 一一七六―一一七八	三五七 一―一二			
			一五 一一七九―一一八二	三五八 一―一二			
			一五 一一八三―一一八五	三五九 一―一二			
			一五 一一八六―一一八八	三六〇 一―一二			
			一五 一一八九―一一九二	三六一 一―一二			
			一五 一一九三―一一九五	三六二 一―一二			
			一五 一一九六―一一九八	三六三 一―一二			
			一五 一一九九―一二〇二	三六四 一―一二			
			一五 一二〇三―一二〇五	三六五 一―一二			
			一五 一二〇六―一二〇八	三六六 一―一二			
			一五 一二〇九―一二一一	三六七 一―一二			
			一五 一二一二―一二一四	三六八 一―一二			
			一五 一二一五―一二一七	三六九 一―一二			
			一五 一二一八―一二二一	三七〇 一―一二			
			一五 一二二二―一二二四	三七一 一―一二			
			一五 一二二五―一二二七	三七二 一―一二			
			一五 一二二八―一二三一	三七三 一―一二			
			一五 一二三二―一二三四	三七四 一―一二			
			一五 一二三五―一二三七	三七五 一―一二			
			一五 一二三八―一二四一	三七六 一―一二			
			一五 一二四二―一二四四	三七七 一―一二			
			一五 一二四五―一二四七	三七八 一―一二			
			一五 一二四八―一二五一	三七九 一―一二			
			一五 一二五二―一二五四	三八〇 一―一二			
			一五 一二五五―一二五八	三八一 一―一二			
			一五 一二五九―一二六二	三八二 一―一二			
			一五 一二六三―一二六五	三八三 一―一二			
			一五 一二六六―一二六八	三八四 一―一二			
			一五 一二六九―一二七二	三八五 一―一二			
			一五 一二七三―一二七五	三八六 一―一二			
			一五 一二七六―一二七八	三八七 一―一二			
			一五 一二七九―一二八二	三八八 一―一二			
			一五 一二八三―一二八五	三八九 一―一二			
			一五 一二八六―一二八八	三九〇 一―一二			
			一五 一二八九―一二九二	三九一 一―一二			
			一五 一二九三―一二九五	三九二 一―一二			
			一五 一二九六―一二九八	三九三 一―一二			
			一五 一二九九―一三〇二	三九四 一―一二			
			一五 一三〇三―一三〇五	三九五 一―一二			
			一五 一三〇六―一三〇八	三九六 一―一二			
			一五 一三〇九―一三一一	三九七 一―一二			
			一五 一三一二―一三一四	三九八 一―一二			
			一五 一三一五―一三一七	三九九 一―一二			
			一五 一三一八―一三二一	四〇〇 一―一二			
			一五 一三二二―一三二四	四〇一 一―一二			
			一五 一三二五―一三二七	四〇二 一―一二			
			一五 一三二八―一三三一	四〇三 一―一二			
			一五 一三三二―一三三四	四〇四 一―一二			
			一五 一三三五―一三三七	四〇五 一―一二			
			一五 一三三八―一三四一	四〇六 一―一二			
			一五 一三四二―一三四四	四〇七 一―一二			
			一五 一三四五―一三四七	四〇八 一―一二			
			一五 一三四八―一三五一	四〇九 一―一二			
			一五 一三五二―一三五四	四一〇 一―一二			
			一五 一三五五―一三五八	四一一 一―一二			
			一五 一三五九―一三六二	四一二 一―一二			
			一五 一三六三―一三六五	四一三 一―一二			
			一五 一三六六―一三六八	四一四 一―一二			
			一五 一三六九―一三七二	四一五 一―一二			
			一五 一三七三―一三七五	四一六 一―一二			
			一五 一三七六―一三七八	四一七 一―一二			
			一五 一三七九―一三八二	四一八 一―一二			
			一五 一三八三―一三八五	四一九 一―一二			
			一五 一三八六―一三八八	四二〇 一―一二			
			一五 一三八九―一三九二	四二一 一―一二			
			一五 一三九三―一三九五	四二二 一―一二			
			一五 一三九六―一三九八	四二三 一―一二			
			一五 一三九九―一四〇二	四二四 一―一二			
			一五 一四〇三―一四〇五	四二五 一―一二			
			一五 一四〇六―一四〇八	四二六 一―一二			
			一五 一四〇九―一四一一	四二七 一―一二			
			一五 一四一二―一四一四	四二八 一―一二			
			一五 一四一五―一四一七	四二九 一―一二			
			一五 一四一八―一四二一	四三〇 一―一二			
			一五 一四二二―一四二四	四三一 一―一二			
			一五 一四二五―一四二七	四三二 一―一二			
			一五 一四二八―一四三一	四三三 一―一二			
			一五 一四三二―一四三四	四三四 一―一二			
			一五 一四三五―一四三七	四三五 一―一二			
			一五 一四三八―一四四一	四三六 一―一二			
			一五 一四四二―一四四四	四三七 一―一二			
			一五 一四四五―一四四七	四三八 一―一二			
			一五 一四四八―一四五一	四三九 一―一二			
			一五 一四五二―一四五四	四四〇 一―一二			
			一五 一四五五―一四五八	四四一 一―一二			
			一五 一四五九―一四六二	四四二 一―一二			
			一五 一四六三―一四六五	四四三 一―一二			
			一五 一四六六―一四六八	四四四 一―一二			
			一五 一四六九―一四七二	四四五 一―一二			
			一五 一四七三―一四七五	四四六 一―一二			
			一五 一四七六―一四七八	四四七 一―一二			
			一五 一四七九―一四八二	四四八 一―一二			
			一五 一四八三―一四八五	四四九 一―一二			
			一五 一四八六―一四八八	四五〇 一―一二			
			一五 一四八九―一四九二	四五一 一―一二			
			一五 一四九三―一四九五	四五二 一―一二			
			一五 一四九六―一四九八	四五三 一―一二			
			一五 一四九九―一五〇二	四五四 一―一二			
			一五 一五〇三―一五〇五	四五五 一―一二			
			一五 一五〇六―一五〇八	四五六 一―一二			
			一五 一五〇九―一五一一	四五七 一―一二			
			一五 一五一二―一五一四	四五八 一―一二			
			一五 一五一五―一五一七	四五九 一―一二			
			一五 一五一八―一五二一	四六〇 一―一二			
			一五 一五二二―一五二四	四六一 一―一二			
			一五 一五二五―一五二七	四六二 一―一二			

	火	三	六 一—一八	四	四 三—五 一一
	水	五	六 一九—三四	六	五 一二—二八
	木	七	七	八	テサ後一
	金	九	八 一—一七	ミカ一	二
	土	ミカ二	八 一八—三四	三	三
顕現後第一主日		イザ四九 一三—二三 詩四六、四七	マタ一七 一—一三	イザ六一 詩一八	マタ二
	月	ミカ四 一—五 一	九 一—一七	ミカ五 二—一五	ガラ一
	火	六	九 一八—三四	七	二
	水	ホセ一	九 三五—一〇 二三	ホセ二 一—一三	三
	木	二 一四—二三	一〇 二四—四二	四 一—一一	四 一—五 一
	金	五 八—六 六	一一	八	五 二—二六
	土	九	一二 一—二一	一〇	六
顕現後第二主日		イザ四五 一四—四四 五 詩二七、三六	エペ一	イザ四四 六—二三 詩六八	マル一 三五—四五

	月	ホセ一一	マタ一五 二二—五〇	ホセ一二	コリ前一 一—二五
	火	一三 一—一四	一五 一—二三	一四	一 二六—二 一六
	水	ゼパ一	一五 二四—四三	ゼパ二	三
	木	三	一五 四四—五八	ナホ一	四
	金	ナホ二	一四	三	五
	土	ハバ一	一五 一—二八	ハバ二	六
顕現後第三主日		イザ四五 九—二五 詩四二、四三	エペ二	イザ四六 三—一三 詩三五、三四	マル七 二四—三七
	月	ハバ三 三—一九	コリ前七	マラ一	コリ前八
	火	マラ二 一—一六	九	二 一七—三 一三	一〇 一—一一 一
	水	三 一三—四 五	一一 二—三五	オバ全	一二 一—二七
	木	ヨエ一	一二 二八—一三 一三	ヨエ二 一—一四	一四 一—一九
	金	二 一五—二七	一四 二〇—四〇	二 二八—三 八	一五 一—三四
	土	三 九—二一	一五 三五—五八	エレ一 一—一〇	一六

顕現後第四主日	イザ四八 一二—二三 詩六〇、六三	エペ三	イザ五四 一—一四 詩七四	ルカ七 一—一〇	
月	エレ一 一一—一九	コリ後一 一—二 一一	エレ二 一—一三	コリ後二 一二—三 一八	
火	四 一—一八	四	五 一—一九	五	
水	五 二〇—三一	六 一—七 一	六 一—二一	七 二—一六	
木	七 一—二八	八	八	九	
金	九 一—二四	一〇	一〇	一一	
土	一四	一二 一—一三	一五	一二 一四—一三 一三	
顕現後第五主日	イザ五九 一二—二〇 詩九九、一一二	エペ五 一五—六 九	イザ六三 七—一六 詩一〇六	マル二 一—一二	
月	エレ一七 一—一八	使 一五 一—二九	エレ一七 一九—二七	使 一五 三〇—一六 五	
火	一八 一—一七	一六 六—四〇	二〇	一七 一—一五	
水	二三 九—三二	一七 一六—三四	三〇 一—二二	一八 一—二三	
木	三一 一—二〇	一八 二四—一九 七	三一 二三—四〇	一九 八—二〇	
金	三五 一—一三	一九 二一—四一	三三 一四—二六	二〇 一—一六	

土	三五 一—一一	二〇 一七—三八	三五 一二—一九	二一 一—一六	
顕現後第六主日	イザ四一 八—二〇 詩八〇、八一	ヤコ二 一—一三	イザ三四 一—一〇 詩七八	ヤコ三	
月	エレ三六 一—一二	使 二一 一七—三六	エレ三六 一三—三三	使 二一 三七—二二 二九	
火	三八 一—一三	二二 三〇—二三 一一	三八 一四—二八	二三 一二—三五	
水	三九	二四 一—二三	四〇 一—一二	二四 二四—二五 一二	
木	四二	二五 一三—二七	四三	二六	
金	四四 一—一九	二七 一—二六	四四 二〇—三〇	二七 二七—四四	
土	五〇 一—二〇	二八 一—一五	五一 五三—六四	二八 一六—三一	
大斎前第三主日	創一 一—二 三 詩一〇四	ヨハ一 一—一八	創二 四—二五 詩一四七、一四八	黙 四	
月	創 三	マタ一五 二九—一六 一二	創 四 一—一六	ロマ一	
火	六	一六 一三—二八	七	二	
水	八 一—一四	一七 一—二三	八 一五—九 一七	三	
木	一一 一—九	一七 二四—一八 一四	一一 二七—一二 一〇	四	

金	一三	一八 一五—三五	一四	五	
土	一六	一九 一—一五	一七 一—二三	六	
大斎前第二主日	創 三 詩 一三九	コリ前 一〇 一—一三	イザ 二二 一五—二三 詩 二五、二六	コリ前 四 一—九	
月	創 一八	マタ 一九 一六—二〇 一六	創 一九 一二—二九	ロマ 七	
火	二一	二〇 一七—三四	二二 一—一九	八 一—一七	
水	二三	二一 一—二三	二四 一—二八	八 一八—三九	
木	二四 二九—六七	二一 二三—四六	二五 七—三四	九	
金	二六	二二 一—三三	二七 一—四〇	一〇	
土	二七 四一—二八 七	二三 三四—二三 一三	二九 一—二〇	一一	
大斎前第一主日	創 一二 一—九 詩 一五、二〇、二三	コリ前 一二 四—三一	創 六 五—二二 詩 三〇、三一	ヨハ壱 三 一六—二四	
月	創 三一 一—二一	マタ 二三 一三—三九	創 三一 二二—三二 二	ロマ 一二	
火	三二 三—三〇	二四 一—二八	三三	一三	
大斎始日 水	イザ 五七 一五—二二 詩 六、三二、三八	マル 二 一三—二二	イザ 五八 詩 一〇二、一三〇、一四三	ヘブ 三 一二—四 一三	

木	創 三五 一—二〇	マタ 二四 二九—五一	創 三七	ロマ 一四	
金	三九	二五 一—三〇	四〇	一五	
土	四一 一—四〇	二五 三一—四六	四一 四一—五七	一六	
大斎第一主日	創 一三 詩 五一	マタ 九 一—一七	創 八 詩 六、三二、一四三	マル 一四 一—二六	
月	創 四二	マタ 二六 一—三〇	創 四三	ピリ 一	
火	四四	二六 三一—五六	四五 一—一五	二	
春期聖職按手節 水	エゼ 二 四五 一六—四六 七 詩 二六	二六 五七—七五 九 三五—一〇 二〇	エゼ 三 四六 二六—四七 一三 詩 四 一六—二七	コリ前 一 一八—三一	
木	創 四七 一三—三一	マタ 二七 一—二六	創 四八	ピリ 四	
金	エゼ 三三 四九 一—三二 詩 一六 一—二〇	ルカ 九 二七 二七—五六 五七—一〇 二四	エゼ 三四 四九 三三—五〇 二六 詩 七七 一—一六	コロ 一 一—二〇	
同 土	出 一 エゼ 三四 一七—三一 詩 一〇	マタ 二七 五七—二八 二〇 ヨハ 二一 一五—二三	出 二 一—二二 エゼ 三七 一—一四 詩 三三	コリ前 三	
大斎第二主日	創 一八 一—一五 詩 一一九 一—三二	ルカ 一五 一一—三二	創 九 一—一七 詩 一一九 三三—七二	マル 一四 二七—五二	

月	出 二 二三—三 二二	ヨハ 一 一—二八	出 四 一—二三	コロ 二 八—三 二
火	四 二七—六 一	一 二九—五一	六 二—三〇	三 一二—四 一
水	七 八—二四	二	八 一—一九	四 二—一八
木	八 二〇—九 一二	三 一—二一	九 一三—三五	ピレ 全
金	一〇 一—二〇	三 二二—三六	一〇 二一—一一 一〇	エペ 一
土	一二 一—二〇	四 一—二六	一二 二一—三六	二

大斎第三主日

月	創 一八 一六—三三 詩 一一九 七三—一〇四	ルカ 一八 一—一四	創 三 一—一五 詩 一一九 一〇五—一四四	ロマ 五 一二—二一
火	出 一二 三七—五一	ヨハ 四 二七—五四	出 一三 一—一六	エペ 三
水	一三 一七—一四 一四	五 一—二三	一四 一五—三一	四 一—一六
木	一五 一—二六	五 二四—四七	一五 二七—一六 三五	四 一七—三〇
金	一七	六 一—二一	一八	四 三一—五 二一
土	一九	六 二二—四〇	二〇 一—二一	五 二二—六 九
	二二 二〇—二三 一七	六 四一—七一	二三 一八—三三	六 一〇—二四

月	出 二四	ヨハ 七 一—二四	出 二五 一—二二	テモ 前 一 一—一七
火	二八 二九—四一	七 二五—五三	二九 三八—三〇 一六	一 一八—二 一五
水	三二	八 一—三〇	三三	三
木	三四	八 三一—五九	三五 二〇—三六 七	四
金	四〇 一七—三八	九	レビ 六 八—三〇	五
土	レビ 一九 一—一八	一〇 一—二一	二五 一—二四	六

大斎第四主日

月	出 一 七—二 一〇 詩 一一九 一四五—一七六	ルカ 一八 三五—一九 一〇	創 二四 二九—六一 詩 三九、四〇	マル 一五 一—二〇
火	出 二六	ヨハ 七 一—二四	出 二五 一—二二	テモ 前 一 一—一七
水	二八 二九—四一	七 二五—五三	二九 三八—三〇 一六	一 一八—二 一五
木	三二	八 一—三〇	三三	三
金	三四	八 三一—五九	三五 二〇—三六 七	四
土	四〇 一七—三八	九	レビ 六 八—三〇	五
	レビ 一九 一—一八	一〇 一—二一	二五 一—二四	六

大斎第五主日

月	出 二 二三—三 二〇 詩 二二	マタ 二〇 一七—二八	出 六 二—一三 詩 五一	マル 一五 二一—三九
火	民 六	ヨハ 一〇 二二—四二	民 九 一五—二三	テト 一 一—二 八
水	一一 一〇—三三	一一 一—四四	一二	二 九—三
木	一三 一七—三三	一一 四五—五七	一四 一—二五	テモ 後 一
金	一六 一—三五	一二 一—一九	一六 三六—一七 一三	二
	二〇	一二 二〇—五〇	二二 一—三五	三

土	二三 三六—二三 二六	一三	二三 二七—二四 二五	四	
復活前主日	出 一一 詩六一、六二	マタ二六	イザ五二 一三—五三 一三 詩八六、一三〇	ルカ二〇 九—二六	
復活前月曜日 月	ホセ一三 一—一四 詩一三、二五	ヨハ一四 一—一四	ホセ一四 詩二六—二八	ヨハ一四 一五—三一	
同 火曜日 火	イザ四二 一—九 詩三一	一五 一—一六	ソロ二 一二—二三 詩八八	一五 一八—二七	
同 水曜日 水	民 二一 四—九 詩四一—四三	一六 一—一五	レビ一六 一—二四 詩五四、五五	一六 一六—三三	
同 木曜日 木	哀 一 一—一四 詩五六、六四	一七	哀 三 一—三三 詩二三、一〇九	一三 一—三五	
受苦日 金	創 二二 一—一八 詩二二	一八	イザ五〇 四—一〇 詩四〇、六九	一九 三一—四二	
復活前日 土	ゼカ九 九—一二 詩二三、三〇、一四二	ペテ前二 一一—二五	ヨブ一九 二一—二七 詩一一五—一一七	ヨハ二 一三—二二	
復活日 日	出 一二 一—一四 詩二、一六、一二一	黙 一 四—一八	出 一四 五—三一 詩一一三、一一四、一一八	ヨハ二〇 一一—一八	
復活後月曜日 月	出 一五 一—一八 詩六六、六七	ルカ二四 一—一二	イザ一二 詩九二、一〇〇	黙 七 九—一七	

同 火曜日 火	イザ二五 一—九 詩九八	ペテ前一 一—一二	二六 一—一九 詩一四五	マタ二八 一—一〇	
水	六一	一 一三—二五	雅 二 八—一七	ヨハ二一 一—一四	
木	ヨブ一四 一—一五	テサ前四 一三—一八	ダニ一二	マル五 二一—四三	
金	王下四 八—三七	使 一七 一六—三一	ゼパ三 一四—二〇	ルカ七 一一—一七	
土	エレ三一 一—一四	二六 一—二三	ミカ七 七—二〇	ヨハ一一 一七—四四	
復活後第一主日	イザ五一 一—一六 詩三、五七	ルカ二四 一三—三五	出 一五 一—一八 詩一〇三	ヨハ二〇 二四—三一	
月	申 一 三—一八	使 一 一—一四	申 一 一九—四六	使 一 一五—二六	
火	二 一—二一	二 一—二一	二 二六—三五	二 二二—四七	
水	三 一八—二九	三 一—四四	四 一—二四	四 五—三一	
木	四 四一—四九	四 三二—五一	五 一—二一	五 一二—六七	
金	五 二二—三三	六 八—七一六	六	七 一七—三四	
土	七 一—一一	七 三五—八三	七 一二—二六	八 四—二五	
復活後第二主日	出 一六 一—一五 詩一二〇—一二三	ヨハ五 一九—二九	出 二四 詩六五、六六	ヨハ二一 一—一四	

月	火	水	木	金	土
申 八	九 一〇―一九	一一 一―一三	一三 一―一四	一六 一―二〇	一八 九―一三
使 八 二六―四〇	九 三二―四三	一〇 二四―四八	一一 一九―三〇	一三 二五―一三 一三	一三 四四―一四 七
使 一五 一―一二	一五 三六―一六 五	一七 一―一五	一八 一―一三	一九 八―二〇	コリ前一五 三五―五八
使 九 一―三一	一〇 一―一三	一一 一―一八	一三 一―二四	一四 八―二八	ヨハ二一 一五―二五
使 一五 二三―三五	一六 六―四〇	一七 一六―三四	一八 二四―一九 七	一九 三一―四一	二〇 一七―三八

月	火	水	木	金	土
復活後第三主日					
申 二一 三―三一 八	二六	二九 一〇―二九	三一 一―一三	三一 三〇―三二 一四	三三
出 三二 一―一四 詩一二四―一三七					
ペテ前二 八―二三	使 二一 一―一六	二一 三七―二二 二一	二三 一二―三五	二四 一四―一五 一二	二六 一―一八
出 三三 七―一三 詩八一、八四	申 二四 五―一三	二八 五八―六八	三〇	三一 一四―二九	三二 一五―四七
ルカ一六 一九―三〇	使 二一 一七―三六	二二 三三―二三 一二	二四 一―一三	二五 一三―一七	二七 一六―三一
出 三五 三〇―三六 七 詩一四五、一四六	申 二六 一九―三〇	二七 一―一三	二八 一―一三	二九 一―一八	三〇 一―一六
復活後第四主日					
出 三四 一―一〇 詩一二八―一三一	ヨシ一	三	五 一三―一六 二〇	九 三―一七	一一 四三―二二 八
ルカ一六 一九―三一	使 一一 一―一六	一二 三七―二三 二一	一三 一二―三五	一四 一四―一五 一三	一五 一―一五
出 三五 三一―三六 七 詩一四五、一四六	ヨシ二	四 一―一五 一	七	一〇 一―一五	一一 九―三四
ルカ一六 一九―三一	使 一一 一七―三六	一二 三三―二三 一二	一四 一―一三	一五 一三―一七	一七 一六―三一
出 三六 三二―三七 一四 詩一四五、一四六	ヨシ三	五	八	一一	一二
ルカ一六 一九―三一	使 一二 二六―四三	一四 一―一三	一五 一―一三	一六 一―一三	一七 一―一八
復活後第五主日					
申 三四 詩一三二―一三四	ヨシ四	一四	一五	一六	一七
昇天前月 申 七七―一三 詩一〇四	使 一三 二六―四三	一四 一―一三	一五 一―一三	一六 一―一三	一七 一―一八
祈祷日 火 同 一一 八―二一 詩八〇	マタ六 五―一八	六 一―一五	七 一―一三	八 一―一三	九 一―一三
同 水 ヨエ二 二一―二七 詩一四四	ルカ五 一―一一	六 一二―一六	七 一―一〇	八 一―一〇	九 一―一〇
昇天日 木 列下二 一―一四 詩八、一二	ヨハ六 三一―四〇	四一	四二	四三	四四
	ヨハ一七	一八	一九	二〇	二一

聖霊降臨後	金	士 五六—六三	ヘブ二
月曜日	土	四 一—一三	四 一—一三
昇天後主日	土	イザ六五、一七—二五 詩九二、一—九六	ルカ二四 三六—五三
聖霊降臨日	月	士 六、一—一四	ヘブ五 一—一〇
	火	七	八
	水	九 二六—五七	九 二五—二八
	木	一一 二九—一三七	一〇 一九—三九
	金	一四	一二 一—一三
	土	一六 四—三一	一三
聖霊降臨後	月	エゼ一一 一四—二〇	ヘブ一一
月曜日	月	詩一三九	一一 一—一三
同	火	三七 一—一四	コリ前一三 一—一三
火曜日	火	詩一四七	
聖霊降臨日	火	ヨエ二 二八—三二	ロマ八 一—一七
	水	詩六八	
	木		使 二 一四—三六
	金		コリ前一二 一—一三
	土		
	月		
	火		
	水		
	木		
	金	

月	ヨブ一三	ペテ前一 一—二	ヨブ一四	マル四 三五—五 二〇
火	一五 一—一六	一 二三—二 一〇	一六 一—一七 二	五 二一—四三
水	一七 三—一六	二 一一—三 七	一八	六 一—二九
木	一九	三 八—四 六	二一	六 三〇—五六
金	二二	四 七—一九	二三	七 一—二三
土	二四	五	二五 一—二六 一四	七 二四—八 一〇

三位一体後第二主日

月	ヨブ二七	ペテ後一	ヨブ二八	マル八 一一—九 一
火	二九 一—三〇 一	二	三一 一三—四〇	九 二—二九
水	三二	三	三三	九 三〇—五〇
木	三八 一—二一	ユダ全	三八 二二—四一	一〇 一—三一
金	三九	ヨハ壱一 一—二 六	四〇	一〇 三二—五二
土	四一	二 七—二九	四二	一一 一—二五

ヨシ二 詩一〇、一二、一三

マル二 二三—三 一九半

サム前一六 一—一三 詩一五—一七

使 二 一—二一

三位一体後第三主日

月	箴一 一—一九	ヨハ壱三 一—一二	箴一 二〇—三三	マル一一 二七—一二 一二
火	二	三 一三—四 六	三 一—二六	一二 一三—二四
水	三 二七—四 一九	四 七—二一	四 二〇—五 一四	一二 三五—一三 一三
木	六 一—一九	五	八	一三 一四—二七
金	九	ヨハ弐全	一〇 一—二三	一四 一—二六
土	一一 一—二五	ヨハ参全	一二 一〇—二八	一四 二七—五二

三位一体後第四主日

月	箴一四 九—二七	ロマ一	箴一五 一八—三三	マル一四 五三—七二
火	一六 三一—一七 一七	二 一—一六	一八 一〇—二四	一五 一—四一
水	二〇 一—二二	二 一七—二九	二二 一—一六	一五 四二—一六 二〇
木	二四 二三—三四	三	二五	ルカ一 一—二三
金	二六 一二—二八	四	二七 一—二三	一 二四—五六

ヨシ三 詩一八

マル三 一九半—三五

サム前一七 一—一一 詩一九—二一

使 二 二二—四七

ヨシ五 一三—六 二〇 詩二四、二五

マル四 二一—四一

サム前一八 一—一六 詩二二、二三

使 三 一—一六

金	詩一一八	詩一〇一一一	詩一五〇一六	
第三週 主日 後	ヨシ 詩一一八、一二五	マル 六一三	サム前 詩一六 一四―一三〇	ルカ 八 一―一三
月	サム前一	ロマ 六	サム前二 一―一三	ルカ 一一 一―一三
火	一三―一六	七	三	一三―一五三
水	四	八 一―一七	七	一三 一―一三
木	八	八 一六―一九	九 一―一五	一四 一―一三〇
金	九 一六―一〇 一六	九	一〇 一七―一七	一四 一三―一四
土	一一	一〇	一二	一五 一―一六
第三週 六 主日 後	土 詩一三五、一三六	マル 一三一―一七 一三	サム後一 詩一三六、一三七	使 六
月	サム前一三	ロマ 一一 一―一四	サム前一四 一―一三	ルカ 一九 一七―一九
火	一四 一四―一六	一二 一五―一六	一五	二〇 一―一九
水	一六	一三	一七 一―一〇	二〇 一〇―一六一三
木	一七 一三―一五	一三	一八 一五―一八 一六	二一 一五―一七 一〇

金	一九	一四	二〇 一―一七	七 一一―一五
土	二〇 一六―四二	一五 一―一三	二一 一―一三 五	七 三六―五〇
第三週 七 主日 後	土 詩一三五 一―一三	マル 九 一四―一九	サム後七 一―一六 詩一三七	使 八 三六―九
月	サム前一三 六―一三	ロマ 一五 一四―一三	サム前一三	ルカ 八 一―一三
火	一四	一六	一三 一―一六	八 一三―一六
水	一六	コリ前一 一―一五	一六 一―一五	九 一―一七
木	一三	一 一六―一一 一六	サム後一	九 一八―五〇
金	サム後一 一―一五 一	一三	一七―一九	九 五一―六一
土	一五 一―一三	一四 一―一七	一八	一〇 一―一四
第三週 八 主日 後	ルツ 詩一九 一―一八 一四〇	マル 九 三〇―五〇	サム後七 一六―一九 詩一四一 一―一八	使 一〇 一―一三
月	サム後七	コリ前一四 一八―一五 一三	サム後八	ルカ 一〇 五四―一二
火	九	一五	一〇	一一 一―一六
水	一三 一六―一四 一四	一七	一四 一五―一五 一三	一一 一九―五四

木	詩三五 三一三七	八	六	三 一一四	
金	七 一一三	九	七 三四一三八	三 三五一三五	
土	六 一九一三	一〇 一一一二	九 一一三	三 四一一三九	
第三十一主日後	サム前 詩四六、四七 一一一二	マル 一〇 一七一三	サム後 詩四四、四五 一一一三	使 一〇 一四一四八	
月	サム後 六 一四一四三	コリ前 一一 一一三五	サム後 三一一七	ルカ 三一 一〇一三五	
火	四	三 一一七	列上 一 五一三	四 一一四	
水	列上 一 三一三五	三 一六一一五 一三	歴上 三一一九	四 三五一一五 一〇	
木	歴上 六 一一一九	四 一一九	一九 一〇一三〇	四 三五一三	
金	列上 三	四 一〇一四〇	列上 四 一一三四	五 一一	
土	五	五 一一三四	六 一一四	七 一一九	
第三十一主日後	サム前 詩五〇、五一	マル 一一 一八一四	サム後 詩五一、五二 一一一三	使 五 一一一九	
月	列上 八 一一三	コリ前 五 三五一五六	列上 八 一一三五	ルカ 七 一〇一三七	
火	六 四一一九	六	一〇	八 一一三〇	

水	二 一一一三	コリ後 一一一三	一八 三一一九 一〇		
木	三 一三五一三一 一〇	一 一三一一三七	一九 一一一六		
金	四 一一一〇	三	歴下 一九 一九一四八		
土	歴下 五	四	二〇 一一一六		
第三十一主日後	ホセ詩五六、一一六 五七	ロマ 一 一一三五	エレ詩六一 一一一八 一六二	マタ 四 一三一一五 一〇	
月	歴下 五	コリ後 五	歴下 六	ルカ 一〇 一七一二一 四	
火	列上 六 一五一二四	六 一一一七 一	列上 七	二 五一一三六	
水	六 一一一五	七 一一一六	八 一六一四六	三 一一一六	
木	九	八	三	三 一九一三五	
金	三 一一四〇	九	歴下 一〇 一一三〇	三 五四一七一	
土	列下 一	一〇	列下 一一 一一三	三 一一三五	
第三十一二主日後	ホセ詩五二 一一九	ロマ 五 一一一	エレ詩六六 一一一六	マタ 五 一一四八	
月	列下 四 一一三七	コリ後 一一	列下 五	ルカ 三五 一六一四九	

火	月	土	金	木	水	月
聖ステファノ 一二-一七	聖ヨハネ 一二-二六	聖ヨハネ 一二-一七	聖ヨハネ 一-一四	聖ヨハネ 一-一	聖ヨハネ 一-一四	聖ヨハネ 一-一四
詩 三一	詩 三一	詩 三一	詩 三一	詩 三一	詩 三一	詩 三一
使 六-八	使 七-一	使 七-二	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一
使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一
使 七-二	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一	使 七-一
使 七-一

第三十六主日後	土	ヨブ詩	一四―一六	ペテ前	一―一七	ダニ詩	一―一三
	金		一四―一六		一―一七		一―一三
	木		一四―一六		一―一七		一―一三
	水		一四―一六		一―一七		一―一三
	火		一四―一六		一―一七		一―一三
	月	エゼ	一四―一六	ペテ前	一―一七	ダニ詩	一―一三
第三十七主日後	土	ヨブ詩	一四―一六	ペテ前	一―一七	箴詩	一―一三
	金		一四―一六		一―一七		一―一三
	木		一四―一六		一―一七		一―一三
	水		一四―一六		一―一七		一―一三
	火		一四―一六		一―一七		一―一三
	月	エゼ	一四―一六	コロ	一―一一	エゼ	一―一三

第三十八主日後	土	ヨブ詩	一四―一六	テサ前	一―一七	箴詩	一―一三
	金		一四―一六		一―一七		一―一三
	木		一四―一六		一―一七		一―一三
	水		一四―一六		一―一七		一―一三
	火		一四―一六		一―一七		一―一三
	月	エゼ	一四―一六	テサ前	一―一七	箴詩	一―一三
第三十九主日後	土	ヨブ詩	一四―一六	テモ前	一―一七	箴詩	一―一三
	金		一四―一六		一―一七		一―一三
	木		一四―一六		一―一七		一―一三
	水		一四―一六		一―一七		一―一三
	火		一四―一六		一―一七		一―一三
	月	エゼ	一四―一六	コロ	一―一一	エゼ	一―一三

月	ゼカ三 一一—一五	テモ前一 一六—二 一五	ゼカ四	ヘブ五 一一—六 二〇
火	六 九—一五	三	ハガ二 一〇—二三	七
水	エズ五	四	エズ六	八
木	七	五	八	九 一—一四
金	九	六	一〇 一—一九	九 一五—二八
土	ネヘ一	テモ後一	ネヘ二	一〇 一—一八

三位一体後第二十主日

月	ヨブ三八 詩一一四、一一五	コロ三 一三—四 六	ヨブ二八 詩一二四—一二七	マタ一三 四四—五八
火	ネヘ四	テモ後二	ネヘ五	ヘブ一〇 一九—三九
水	六 一—七 四	三	八	一一 一—一六
木	九 一—二三	四	九 二三—三八	一一 一七—四〇
金	一三	テト一	ダニ二 一—二四	一二 一—一三
土	ダニ二 二五—四九	二	四 一—一八	一二 一四—二九
	一四 一九—三七	三	七 九—二八	一三

月	ダニ九 一—一九	ヤコ一	エレ五 二〇—三一 詩一二八—一三〇	マタ一四 一三—三三
火	一〇	三	ダニ九 二〇—二七	ヤコ二
水	エス一	五	一二	四
木	三	ペテ前一 二三—二 一〇	エス二	ペテ前一 一—二二
金	五	三 八—四 六	四	二 二—三 七
土	八	五	六 一—七 一〇	四 七—一九
			九 一—一〇 三	ヨハ壱一 一—二 六

三位一体後第二十二主日

月	ハバ一 一—一四 詩一一八	ヤコ一 一—一八	エレ一〇 一—一六 詩一三二—一三四	マタ一六 一—一六
火	伝一	ヨハ壱二 七—二九	伝二 一—二三	ヨハ壱三
水	三 一—一五	四	三 一六—四 六	五
木	四 七—一六	ヨハ弐全	五	ヨハ参全
金	六	使一	七 一—一四	使二 一—二二
	七 一五—二九	二 二三—四七	八	三 一—四 四

土	九	四 五—三一	一〇	四 三一—五 一一	
三位一体後第二十三主日	ネヘ一 詩一一〇、一三五	ルカ一六	箴二 詩一三七—一三九	ヨハ九	
月	ベン一 一—一〇	使 五 一二—六 七	ベン一 一一—三〇	使 六 八—七 一六	
火	二	七 一七—三四	三 一七—二九	七 三五—八 三	
水	四 一一—二八	八 四—二五	四 二九—六 一	八 二六—四〇	
木	六 一四—三一	九 一—三一	七 二七—三六	九 三二—四三	
金	一〇 六—二四	一〇 一—二三	一一 七—二八	一〇 二四—四八	
土	一四 二〇—一五 一〇	一一 一—一八	一五 一一—二〇	一一 一九—三〇	
三位一体後第二十四主日	ネヘ二 詩一三六	ルカ一七 一—一九	箴八 二二—三六 詩一四〇—一四二	ヨハ一〇	
月	ベン一六 一七—三〇	使 一二 一—二四	ベン一七 一—二四	使 一二 二五—一三 一二	
火	一八 一—一四	一三 一三—四三	一九 一三—三〇	一三 四四—一四 七	
水	二一 一—一七	一四 八—二八	二二 七—二二	一五 一—二二	
木	二二 二七—二三 一五	一五 二二—三五	二四 一—二二	一五 三六—一六 五	

金	二四 二三—三四	一六 六—四〇	二七 三〇—二八 九	一七 一—一五	
土	三一 一—一一	一七 一六—二四	三四 九—二六	一八 一—二三	
三位一体後第二十五主日	箴一三 詩四九	ルカ二二 一—三八	箴一四 三一—一五 一七 詩七九、八三	ルカ二二 三九—七一	
月	ベン三五	使 一八 二四—一九 七	ベン三七 七—一五	使 一九 八—二〇	
火	三八 一—一四	一九 二一—四一	三八 二四—三四	二〇 一—一六	
水	三九 一—一一	二〇 一七—三八	三九 一三—三五	二一 一—一六	
木	四二 一五—二五	二一 一七—三六	四三 一—一二	二一 三七—二二 二三	
金	四三 一三—三三	二二 二三—二三 一一	五〇 一—二四	二三 一二—三五	
土	五一 一—一二	二四 一—二三	五一 一三—三〇	二四 二四—二五 一二	
三位一体後第二十六主日	ミカ二 詩八四、一四四	ルカ二三 一—二五	ミカ五 二—一五 詩一〇五	ルカ二三 二六—五六	
月	エズ壱四 三三—四一	使 二五 一三—二七	トビ四 一—一九	使 二六	
火	トビ一三	二七 一—二六	バル一 一五—二一 一〇	二七 二七—四四	
水	バル二 一一—三五	二八 一—一五	三 一—八	二八 一六—三一	

木	三 九—三七	マタ一 一八—二五	四 三六—五九	マタ二
金	マカ弐四 七—一七	三 一—一二	マカ弐六 一二—三一	三 一三—一七
土	七 一—一九	四 一—一一	七 二〇—四一	四 一二—二五
降臨節前主日	ベン一一 詩一四五	ヘブ一一 一—一六	マラ三 一三—四五 詩一四七—一五〇	ヘブ一一 一七—一二 二
月	ソロ一	マタ五 一—一六	ソロ二	黙一
火	三 一—九	五 一七—四八	四 七—二〇	二 一—一七
水	五 一—一六	六 一—一八	六 一—二一	二 一八—三六
木	七 一五—八四	六 一九—三四	八 五—一八	三 七—二二
金	八 一九—九一八	七 一—一四	一〇 一五—一一 一〇	四
土	一一 二一—一三 二	七 一五—二九	一二 一二—二一	五

第二表　固定祝日日課・詩篇（降誕日から顕現日までは第一表に掲げる）

公会暦	早祷 第一日課・詩篇	早祷 第二日課	晩祷 第一日課・詩篇	晩祷 第二日課
使徒聖アンデレ日	ゼカ八 二〇 詩三四	（前夕） ヨハ一 三五—四二	イザ四九 一—六 または ベン一四 二〇—二七 詩九七	コリ前一 一八—三一
			エゼ四七 一—一二 詩九六、一〇〇	ヨハ一三 二〇—三六半
使徒聖トマス日	ヨブ四二 一—六 詩二七	（前夕） ヨハ一四 一—七	サム後一五 一七—二一 詩一二一	ヨハ一一 一—一六
			イザ四三 八—一三 詩一一二、一一三	ペテ前一 三—九
使徒聖パウロ改心日	イザ四九 一—一三 詩六六	（前夕） ガラ一 一一—二四	エレ一 四—一六 詩一、一九	ピリ三 一—一六
			イザ四五 一八—二五 詩六七、一三八	使 二六 一—二三
被献日	サム前一 二一—二八 詩八四	（前夕） ヘブ一〇 一—一〇	出一五 一一—一六 詩一一五、一二三	ガラ四 一—七
			ハガ二 一—九 詩四八、一三四	ロマ一三 一—五

誕生洗者聖ヨハネ日	聖使徒パルナバ日	聖使徒ヤコブ・ボアネリゲ日	変容貌日	聖使徒ペテロ・ウィンクラ日	聖使徒ヤコブ日	聖福音記者マタイ日	ト使徒聖マリヤ・イルバ日	聖使徒マッテヤ日
（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）
マラ詩一三〇 一六	ヨブ詩一三九 一一七	ヨハ使一 一四	ヨブ詩一三九 一一三	ヨハ使一 四一五	エレ詩一三四	マル一 四一〇	ベンヤ詩一〇三 一三一三 または 一〇五 一一六	ベイザ詩一三六 一一三
イザ詩一四三 五一一三	イザ詩一四〇 一一一三	使九 三六一三	出詩一七四 一九一三五	ヨハ一 四一五	エレ詩一三九、一四三 一一三	使一三 一四	エゼ詩一三六、一四四 一一三	ベテ前一 三一一一
ルカ一 五一一三	マタ一 一八一三	ロマ五 一一一三	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	テモ後一 一一一	使一三 五一一三 一三	マタ一 一八一三	ヨハ壱一 五一九
ヨハ壱一 五一九	使一〇 一七一三五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マタ一一 一一九	ロマ五 一一一三	マタ一 一八一三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ヨハ三一 一五一三	使一〇 一七一三五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
マタ一一 一一九	使一〇 一七一三五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五

使徒聖マタイ記者日	ト使徒聖マリヤ・イルバ日	聖使徒ヤコブ日	変容貌日	聖使徒ペテロ・ウィンクラ日	聖使徒ヤコブ日	聖福音記者マタイ日	ト使徒聖マリヤ・イルバ日	聖使徒マッテヤ日
（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）	（前夕）
テモ前六一九	ベテ前一 三一一 一〇	エレ詩一三四	出詩一七四 一九一三五	ベテ前一 三一一 一〇	エレ詩一三四	マル一 四一一〇	ベ列ン上詩一三六、一四四 一七一一〇 または 一一六	マタ三
列上詩一三五、一四七 一一三	エゼ詩一四三 一〇一七 一五一六	列下詩一一一 一一六 一一三	出詩九七、九八 一三一八	列上詩一九九、二〇 一一六	列下詩一一一 一一六 一一三	エレ詩一三九 一一五	エゼ詩一三六、一四四 一一三	エゼ詩一三六 一一七
創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	出詩九七、九八 一三一八	列上詩一九九、二〇 一一六	出詩九七、九八 一三一八	出詩九七、九八 一三一八	列下詩一一一 一一六 一一三	列上詩一九九、二〇 一一六	出詩九七、九八 一三一八
エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	列上詩一九九、二〇 一一六	列上詩一九九、二〇 一一六	出詩九七、九八 一三一八	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	列上詩一九九、二〇 一一六
列上詩一三五、一四七 一一三	列上詩一三五、一四七 一一三	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	列上詩一九九、二〇 一一六	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五
テモ前六一九	テモ前六一九	列上詩一三五、一四七 一一三	列上詩一三五、一四七 一一三	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六	創詩一六、一七 一〇一七 一五一五	列上詩一三五、一四七 一一三	エゼ詩一三六、一四七 一〇一七 一五一六
マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六	マラ詩一四、六
エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七	エゼ詩一三六 一一七
ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三	ヨハ三一 一五一三
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五
ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五	ヨハ一 四一五
マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三	マル一三 一一四三
ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五	ルカ四五 一五五

[illegible]	箴 五 一—一三 詩 一一九 一—一六	マタ 一九 一六—三〇	歴上 一九 九—二四 詩 一九、一一二	ルカ 一八 九—一七
聖ミカエル及び諸天使日	列下 六 八—一七 詩 八、九一	使 一三 一—一二	エゼ 一〇 八—一二 詩 一四八、一五〇	黙 五
福音記者聖ルカ日	イザ 六一 一—六 詩 六七、九六	使 一六 六—一八	ダニ 一二 一—三 詩 三四	黙 一〇
使徒聖シモン・聖ユダ日	イザ 二八 九—一六 または ベン 二 詩 一一八	ルカ 六 一三—二三	イザ 五五 詩 一〇三	ルカ 一 一—四
諸聖徒日	ダニ 一二 一—一三 または ソロ 五 一—一六 詩 一、一五	黙 一九 四—一六	イザ 五五 または ベン 三八 一—一四 詩 一四七	コロ 四 二—一七
			イザ 四 二—六 詩 六六	エペ 二 一一—二三
			エレ 二三 三—八 詩 六二、一二一	ヨハ 一四 一五—二九
			ダニ 七 九—一八 または ソロ 三 一—九 詩 九七、一一二	ヘブ 一一 三二—一三 二
			マラ 三 六—四三 または ベン 四四 一—一五 詩 一四八、一五〇	黙 二一 二二—二三 五

第三表　記念日及び感謝日日課・詩篇

この表の日課・詩篇にかえて平日のものを用いてもよい。

公会暦	早祷 第一日課・詩篇	早祷 第二日課	晩祷 第一日課・詩篇	晩祷 第二日課
日本聖公会組織成立記念日	イザ 四二 一—一三 詩 六七、七二	コロ 一 一—一三	イザ 四九 一—一三 詩 四六、一一一、一二三	エペ 三
聖堂記念日	列上 八 二三—三〇 詩 一三二	ヨハ 一〇 二三—三〇	ハガ 二 一—九 または 創 二八 一〇—二三 詩 四八、八四、一二二	コリ 前 三 九—一七 または ヘブ 一〇 一九—二五
収穫感謝日	申 八 または 申 二六 一—一一 詩 六五、一四七	使 一四 一—一八 または テサ 前 五 一二—二三	申 一一 八—二一 または イザ 一二 詩 一〇四、一四五	ピリ 四 四—七 または テモ 前 六 六—一九

第四表　平日詩篇

毎月この順序に従って用いる。
三十一日には三十日のものをくり返す。

	早禱	晩禱	早禱	晩禱
一日	一―五	六―八	七九―八一	八二―八五
二日	九―一一	一二―一四	八六―八八	八九
三日	一五―一七	一八	九〇―九二	九三、九四
四日	一九―二一	二二、二三	九五―九七	九八―一〇一
五日	二四―二六	二七―二九	一〇二、一〇三	一〇四
六日	三〇、三一	三二―三四	一〇五	一〇六
七日	三五、三六	三七	一〇七	一〇八、一〇九
八日	三八―四〇	四一―四三	一一〇―一一三	一一四、一一五
九日	四四―四六	四七―四九	一一六―一一八	一一九・一三
一〇日	五〇―五二	五三―五五	一一九・三三―七三	一一九・七三―一〇四
一一日	五六―五八	五九―六一	一一九・一〇五―一四四	一一九・一四五―一七六
一二日	六二―六四	六五―六七	一二〇―一二五	一二六―一三一
一三日	六八	六九、七〇	一三二―一三五	一三六―一三八
一四日	七一、七二	七三、七四	一三九、一四〇	一四一―一四三
一五日	七五―七七	七八	一四四―一四六	一四七―一五〇
一六日	七八―八〇	八一―八三	一四七―一四九	一五〇―一五二
一七日	八四―八六	八七―八九	一五〇―一五二	一五三―一五五
一八日	九〇―九二	九三―九五	一五三―一五五	一五六―一五八
一九日	九六―九八	九九―一〇一	一五六―一五八	一五九―一六一
二〇日	一〇二―一〇四	一〇五―一〇七	一五九―一六一	一六二―一六四
二一日	一〇八―一一〇	一一一―一一三	一六二―一六四	一六五―一六七
二二日	一一四―一一六	一一七―一一九	一六五―一六七	一六八―一七〇
二三日	一一九・一―一六	一一九・一七―三二	一六八―一七〇	一七一―一七三
二四日	一一九・三三―四八	一一九・四九―六四	一七一―一七三	一七四―一七六
二五日	一一九・六五―八〇	一一九・八一―九六	一七四―一七六	一七七―一七九
二六日	一一九・九七―一一二	一一九・一一三―一二八	一七七―一七九	一八〇―一八二
二七日	一一九・一二九―一四四	一一九・一四五―一七六	一八〇―一八二	一八三―一八五
二八日	一一九・一七七―一七六	一二〇―一二五	一八三―一八五	一八六―一八八
二九日	一二六―一二九	一三〇―一三四	一八六―一八八	一八九―一九一
三〇日	一三五―一三八	一三九―一四二	一八九―一九一	一九二―一九四

第五表　特選詩篇

特別な礼拝、集会などに用いる。

一	造り主	八、一九。三三。六五、一一一。一四五。一四七。	
二	贖い主	三三。一〇三。一一一。一一六。一一三、一一四。一三〇、一三八。	
三	さばき主	一、一一。七。四六、九七。五〇。六二、八二。七五、七六。	
四	神の栄光	一八・一一九。二九、九九。三六・五一二、四六。一四八、一五〇。	
五	王なる神	二四、九三。四六、四七。九九。一一二、一四六。七二。八九・一一八。九六、九七。九八、一四五。	
六	神の知恵	三三。一〇四。一一一、一三九。一四五。一四七。	
七	神の律法	一九。五〇。六二、一一一。一一九。一四七。	
八	神の摂理	二三、一二一。三四。三七・五五、一二四。八九・一一六。一三九。一四五。一四六。	
九	神の慈愛	二三、一〇〇。五七、六一。六二、六三。七三。七七。一〇三。一一八。一四五。	
一〇	受肉降世	二、一一〇。八、一一三。八五、一一一。八九・一一九。一〇二・一五。一三二。	

一一　受難　二二。三一。三四。三五。三七。四〇・一一三。四二。五四、一三〇。六九・一一二、二九一三六。八八。一一六。

一二　公会　四六、一一一。四八。八四。一二二、一三三。一四七。

一三　礼拝　五。二六、四三。六三、六五。六六。六七、一二二。八四、一三八。九六、一〇〇。一〇二・一五。一一六。

一四　感謝　三〇、六七。六五。九二、一〇〇。九八、一一一。一〇三。一〇七。一一六。一三四、一三八。一四五。一四七。一四八、一五〇。

一五　祈願　五。一七。二〇、二八。三一。五四、六一。八四。八六。一四一・一四、一四二。

一六　信頼　二七。三一。五七、一四六。六二、六三。七一。七三。七七。八四。九一。一一八。一二一、一二四、一二五。一二三、一四三。

一七　避け所なる神　四、二〇。一七。三七。四六。四九。五四。六〇。六一。七一。九一。一〇三。一二一、一四六。

一八　神の指導　二五。四三、八五。八〇。一一一、一一二。

一九　悩みの時　三、一一。一二、一三。一八・一一九。二〇、四六。三〇、一四六。四〇。四九。五七、八五。六二、六三。八〇。八六。九〇。一〇七・一一六。一一八。一四四。

二〇　正義　一、一五。一一、一二、一八・二〇一三四。一九。二六。三四。四〇・一一三。九二。一一一、一一二。

二一　平和　二九、四六。七六。八五。九八、一〇〇。一二四、一二五、一二六。

二二　はかなき世　三九。四九。九〇。一〇二・一五。

二三　永生の希望　一六、一四六。四二。三〇、四九、一二一。六六。七三。一〇三。一一六。一三九。

二四　朝　三、二〇。五、六三。九〇。一四三。

二五　夕　四、三一・一一六、九一、一三四。一三、一二一。一六、一七。七七。

二六　痛悔　六、三二、三八、五一、一〇二、一三〇、一四三。

二七　陪餐準備　二三、三六・五一三。二五。二六、四三。四一。六三。八四、一二二。八五。八六。一三〇、一三三。一三九。

二八　陪餐後感謝　八、一五。一八・一一九。一九。二七。二九、三〇。三四。一〇〇、一一〇。一〇三。一一八。一四五。一五〇。

早禱序式

主日には早禱につづいて聖餐式を行なわないとき、この序式を用いる。他の日にも用いてよい。
司式者は次の聖語の一節または数節を朗読する。

主はその聖なる宮にましませり、全地その御前に默すべし　ハバクク書二章二〇節

日のいずる所より日の入る所までの国々のうちに、わが名は大いならん。又いずこにても、香と清きささげ物をわが名にささげん。そはわが名、国々のうちに大いなるべければなりと万軍の主言いたもう　マラキ書一章一一節

主よ、わが岩よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いを、御心にかなわしめたまえ　詩一九篇一四節

もし悪人そのなせる悪を離れて、律法と正しきを行なわば、その命を救い生かすべし　エゼキエル書一八章二七節

我はわがとがを知る、わが罪は常にわが前にあり　詩五一篇三節

願わくは御顔をわが罪よりそむけ、わがすべての不義を消したまえ　詩五一篇九節

神の求めたもう供え物は砕けたる魂なり。神よ、なんじは砕けたる悔いし心を軽しめたもうまじ　詩五一篇一七節

なんじら衣を裂かずして心を裂き、なんじらの神・主に帰るべし。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ大いにして、災いをなすを悔いたもうなり　ヨエル書二章一三節

我ら主にそむき、我らの神・主の言葉に従わず、我らの前に設けたまいし律法の道を歩まざりしが、あわれみと赦しは主たる我らの神にあり　ダニエル書九章九、一〇節

主よ、公義をもて我を懲らしたまえ。怒りたもうなかれ、恐らくは我ほろびん　エレミヤ記一〇章二四節

なんじら悔い改めよ、天国は近づきたり　マタイ伝三章二節

立ちてわが父にゆきて言わん、「父よ、われは天に対し、またなんじの前に罪を犯したり。今よりなんじの子ととなえらるるに、ふさわしからず」と　ルカ伝一五章一八、一九節

主よ、なんじのしもべのさばきに、かかわりたもうなかれ。そは生ける者ひとりだ

に、御前に義とせらるるはなし
もし罪なしと言わば、これ、みずから欺けるにて、まこと我らのうちになし。もしおのれの罪を言いあらわさば、神はまことにして正しければ、我らの罪をゆるし、すべての不義より我らを清めたまわん

ヨハネ第一書一章八、九節

司式者は次の勧告をする。かっこの中は省いてもよい。

勧告

愛する兄弟よ、「聖書にしばしば、しるせるごとく、天の父・全能の神は罪を懺悔すべきことを勧めたもう。我ら多くの罪を犯したれば、包みかくすことなく、まことに悔やみ、謙そんなる心にてこれを言いあらわし、父の深きあわれみによりて赦しを求むべし。これはいつにてもなすべきことなり。しかれども相ともに集まりて、父の御手より受けし大いなる恵みを謝し、御名をほめ、御言葉をきき、からだと魂とに必要なるものを願う時には、格別になすべきことなり。ゆえに」恵みの御座にむかい、きよき心と静かなる声をもって懺悔し奉るべし

一同ひざまずいて次の懺悔をする。

懺悔

あわれみ深き全能の父よ、我らは迷える羊のごとく父の道を離れ、多くおのれの工夫と欲に従い、主の聖なる律法をおかし、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなし、全きところあることなし。しかれども父よ、主イエス＝キリストをもって世の人に約したまえるごとく、罪に悩める者をあわれみたまえ。悔やめる者をかえしたまえ。あわれみふかき父よ、願わくは今よりのち神を敬い、正しきを行ない、身を修めて、御名の栄光をあらわすことを、イエス＝キリストのいさおによりて得させたまえ　アーメン

赦罪

特に示したときのほか、一同でアーメンと言う。但し、アーメンの前に「。」の、くぎり符号があるとき、司式者は言わない。以下これにならう。
司祭は立って次のように言う。

我らの主イエス＝キリストの父・全能の神は、罪びとの死ぬることを好まず、悪より帰りて生くることを望み、又その仕えびとに権威をあたえて、主の民に罪の赦しを告ぐることを命じたまえり。神は、まことに悔い改めて福音を信ずる者をことごとく赦

したもう　願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪を赦し、恵みと力を与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを。アーメン

早禱（毎朝の祈り）

一同ひざまずき、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者　主よ、我らの口を開きたまえ
会衆　我ら主の誉れをあらわすべし
司式者　神よ、すみやかに我らを救いたまえ
会衆　主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

ここで一同立つ。

司式者　父と子と聖霊に栄光あれ
会衆　始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり　アーメン
司式者　なんじら主をほめまつれ
会衆　主の御名をほめまつるべし

ここで次の詩を歌いまたは唱える。降誕節、顕現日とその後の七日間、復活節、昇天節、聖霊降臨節、三位一体主日、その他の祝日には第八節以下を省いてもよい。復活日とその後の六日間は、この詩にかえて復活の頌（二六八頁）を用いる。

詩九十五篇

一 いざ我ら主にむかいてうたい＝　救いの岩に向かいて喜ばしき声をあげん
二 我ら感謝をもてその御前にゆき＝　主に向かい歌をもて喜ばしき声をあげん
三 主は大いなる神なり＝　もろもろの神にまさされる大いなる王なり
四 地の深き所みなその手にあり＝　山の頂もまた神のものなり
五 海は神のもの、その造りたもうところなり＝　かわける地もまたその手にてつくりたまえり
六 いざ我ら拝みひれ伏し＝　我らを造れる主の御前に、ひざまずくべし
七 主は我らの神なり＝　我らはその牧の民、その手のひつじなり
八 きょうなんじら御声をきけよかし＝　なんじら荒れ野にて神を試み、かつ怒らしし日のごとく、心をかたくなにするなかれ
九 その時なんじらの親たち我をこころみ＝　我をためし、わがわざをみたり
一〇 我その世のために憂いて、四十年を経たり＝　われ言えり「彼らは心あやまれる民、わが道を知らざりき」

一一 このゆえに我いきどおりて誓えり＝　「彼らはわが休みに入るべからず」と

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩篇

ここで、定められた詩篇を歌いまたは唱える。但し詩九十五篇は重ねて用いない。一篇終わるごとに栄光の頌を用いる。

第一日課

日課を朗読する前に、「――(書)第一章一節より」と言い、読み終われば、「第一日課終わる」と言う。第二日課のときもこれにならう。第一日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。但し復活日から三位一体主日までを除く平日には万物の頌を用いてもよい。降臨節、大斎前節、大斎節の主日、斎日、平日および聖職按手節（聖霊降臨節を除く）には万物の頌を用いる。

賛美の頌

一 我ら神をほめまつり＝　神を主なりと信認す
二 全地はとこしえの父を＝　あがめたてまつる
三 御使いと天のうちの、ちからあるもの＝　みな主にむかいて歌い

四　ケルビムとセラビム＝　絶え間なく歌いていわく
五　聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな＝　万軍の神なる主
六　主の栄光あるみいつ＝　天地に満つと
七　栄光ある使徒のくみ＝　みな主をほめまつる
八　誉れある預言者のむれ＝　みな主をほめまつる
九　白き衣の殉教者のたい＝　みな主をほめまつる
一〇　天下の聖公会＝　みな主を信認す
一一　そは、はかり無き＝　みいつある父
一二　まことなるひとりの御子＝　なぐさめ主なる聖霊なり
一三　キリストよ＝　主は栄光の王なり
一四　主は父の＝　とこしえにいます御子なり
一五　主は人を救わんため、人となりたもうとき＝　おとめの胎をも厭いたまわざりき
一六　主は死の苦しみに勝ちて＝　すべての信徒のため天国の門を開きたまいぬ
一七　主は父の栄光のうちにて＝　神の右に座したまえり

一八　またふたたびきたりて＝　我らをさばきたもうことを信ず
一九　ゆえに尊き血にて贖いたまいししもべを＝　助けたまわんことを祈りたてまつる
二〇　我らを主の聖徒につらねて＝　限りなき栄光を得させたまえ
二一　主よ、主の民をすくい＝　主のゆずりをさきわいたまえ
二二　彼らをやしないて＝　とこしえに、いだきたすけたまえ
二三　われら日々に＝　主をあがめまつる
二四　我ら世々かぎりなく＝　御名をほめまつる
二五　主よ、きょう我らをまもりて＝　罪を犯すことなからしめたまえ
二六　主よ、我らをあわれみたまえ＝　我らをあわれみたまえ
二七　主よ、我ら主にたよれり＝　我らをあわれみたまえ
二八　主よ、我は主にたよれり＝　我に限りなく恥なからしめたまえ

万物の頌

平日には三節から二十五節までを省いてもよい。

一　主の万物よ、主を祝い＝　世々歌いあがめまつれ

二 主の御使いよ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
三 もろもろの天よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
四 空の上の水よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
五 主の万軍よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
六 日と月よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
七 空の星よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
八 雨と露よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
九 風よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一〇 火と熱よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一一 冬と夏よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一二 露と霜よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一三 あられと寒さよ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一四 氷と雪よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ

一五 夜と昼よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一六 明かきと暗きよ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一七 いなずまと雲よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一八 地よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
一九 山と岡よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二〇 地に生うるすべての草木よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二一 泉よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二二 海と川よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二三 鯨とすべて水に泳ぐものよ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二四 空を飛ぶ鳥よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二五 野獣と家畜よ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二六 世の人よ、みな主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ
二七 イスラエルよ、主を祝いヨ　世々歌いあがめまつれ

二八 主の祭司よ、主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
二九 主のしもべよ、主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
三〇 義人の魂よ、主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
三一 心きよく、へりくだる者よ、主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
三二 ハナニヤとアザリヤとミサエルよ、主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
三三 父と子と聖霊を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ
三四 天の大空にまします主を祝いまつれ　世々歌いあがめまつれ

第二日課

第二日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。この頌の前にその日にふさわしい聖歌を用いることができる。ザカリヤの頌にかえて詩百篇を用いてもよい。

ザカリヤの頌

一 ほむべきかな、主イスラエルの神よ　その民をかえりみて、あがないをなし
二 我らのために救いの角を興し　そのしもべダビデの家に立てたまえり
三 これぞ、いにしえより聖預言者の口をもて言いたまいしごとく
四 我らをあだより、すべて我らを憎む者の手より救い　取りいだしたもう救いなる
五 我らの先祖にあわれみをたれて　その聖なる契約をおぼし
六 我らの先祖アブラハムに誓いし御誓いを忘れずして
七 我らをあだの手より救い　生涯主のみまえに
八 聖と義とをもて　おそれなく仕えしめたもうなり
九 幼な子よ、なんじはいと高き者の預言者ととなえられん　これ主の御前にさきだち行きて、その道をそなえ
一〇 主の民に罪のゆるしによる救いを　知らしむればなり
一一 これ我らの神の深きあわれみによるなり　このあわれみによりて、あしたの光うえよりのぞみ
一二 暗きと死の陰とに座する者をてらし　我らの足を平和の道にみちびかん
一三 父と子と聖霊に　栄光あれ
始めにあり、今あり　世々限りなくあるなり　アーメン

ここで聖餐式にうつることができる。またその前に嘆願を用いてもよい。

一同使徒信経を歌いまたは唱える。

使徒信経

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず
我はそのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ず
とめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、
死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、
全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさば
きたまわん
我は聖霊を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限り
なき命を信ず　アーメン

一同ひざまずく。以下、恵みのための祈りまでを歌ってもよい。

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らに日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

ここで司式者は立つ。

司式者　主よ、あわれみを我らに現わしたまえ
会衆　主の救いをあたえたまえ
司式者　主よ、正しきをもって主の仕えびとを装いたまえ
会衆　主の聖徒を喜ばせたまえ
司式者　主よ、主の民を救いたまえ
会衆　主のゆずりを祝したまえ
司式者　主よ、この世を安らかに治めたまえ
会衆　地のはてまで戦いをやめしめたまえ

司式者　神よ、我らの心をきよめたまえ
会衆　我らより聖霊を取りたもうなかれ
司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者　我ら祈るべし

特禱

ここで当日の特禱を用い、つづいて次の二つの特禱を用いる。

平安のため

親しみを好み、平安をあたえたもう神よ、主を知るはこれ限りなき命なり、主に仕うるはこれ全き自由なり。願わくは常にしもべらを守り、すべて攻めきたる敵を防ぎ、いかなる強きあだをも恐れず、堅く主にたよりて安んずることを得させたまえ。大能の主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

恵みのため

天の父・かぎりなく生ける全能の神よ、我らを今朝まで安全に至らせたまえるごとく、今日も大いなる力をもって守りたまえ。願わくは罪に陥らず、危うきことにもあわず、常に主の導きをこうむり正しき行ないをなすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで司式者はひざまずき、諸祈祷、嘆願、感謝を用いてもよい。終わりに次のように言う。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン

晩祷序式

晩祷の前にこの序式を用いてもよい。
司式者は次の聖語の一節または数節を朗読する。

主はその聖なる宮にましませり、全地その御前に默すべし　ハバクク書二章二〇節
日のいずる所より日の入る所までの国々のうちに、わが名は大いならん。又いずこにても、香と清きささげ物をわが名にささげん。そはわが名、国々のうちに大いなるべければなりと万軍の主言いたもう　マラキ書一章一一節
主よ、わが岩よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いを、御心にかなわしめたまえ　詩一九篇一四節
もし悪人そのなせる悪を離れて、律法と正しきを行なわば、その命を救い生かすべし　エゼキエル書一八章二七節
我はわがとがを知る　わが罪は常にわが前にあり　詩五一篇三節
願わくは御顔をわが罪よりそむけ、わがすべての不義を消したまえ　詩五一篇九節

神の求めたもう供え物は砕けたる魂なり。神よ、なんじは砕けたる悔いし心を軽しめたもうまじ　詩五一篇一七節
なんじら衣を裂かずしてこころを裂き、なんじらの神・主に帰るべし。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ大いにして、災いをなすを悔いたもうなり　ヨエル書二章一三節
我ら主にそむき、我らの神・主の言葉に従わず、我らの前に設けたまいし律法の道を歩まざりしが、あわれみと赦しは主たる我らの神にあり　ダニエル書九章九、一〇節
主よ、公義をもて我を懲らしたまえ。怒りたもうなかれ、恐らくは我ほろびん　エレミヤ記一〇章二四節
なんじら悔い改めよ、天国は近づきたり　マタイ伝三章二節
立ちてわが父にゆきて言わん、「父よ、われは天に対し、またなんじの前に罪を犯したり。今よりなんじの子ととなえらるるに、ふさわしからず」と　ルカ伝一五章一八、一九節
主よ、なんじのしもべのさばきに、かかわりたもうなかれ。そは生ける者ひとりだに、御前に義とせらるるはなし　詩一四三篇二節

もし罪なしと言わば、これ、みずから欺けるにて、まこと我らのうちになし。もしおのれの罪を言いあらわさば、神はまことにして正しければ、我らの罪をゆるし、すべての不義より我らを清めたまわん

ヨハネ第一書一章八、九節

司式者は次の勧告をする。かっこの中は省いてもよい。

勧告

愛する兄弟よ、「聖書にしばしば、しるせるごとく、天の父・全能の神は罪を懺悔すべきことを勧めたもう。我ら多くの罪を犯したれば、包みかくすことなく、まことに悔やみ、謙そんなる心にてこれを言いあらわし、父の深きあわれみによりて赦しを求むべし。これはいつにてもなすべきことなり。しかれども相ともに集まりて、父の御手より受けし大いなる恵みを謝し、御名をほめ、御言葉をききき、からだと魂とに必要なるものを願う時には、格別になすべきことなり。ゆえに」恵みの御座にむかい、きよき心と静かなる声をもって懺悔し奉るべし

一同ひざまずいて次の懺悔をする。

懺悔

あわれみ深き全能の父よ、我らは迷える羊のごとく父の道を離れ、多くおのれの工夫と欲に従い、主の聖なる律法をおかし、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなし、全きところあることなし。しかれども父よ、主イエス＝キリストをもって世の人に約したまえるごとく、罪に悩める者をあわれみたまえ。悔やめる者をかえしたまえ。あわれみふかき父よ、願わくは今よりのち神を敬い、正しきを行ない、身を修めて、御名の栄光をあらわすことを、イエス＝キリストのいさおによりて得させたまえ　アーメン

司祭は立って次のように言う。

赦罪

我らの主イエス＝キリストの父・全能の神は、罪びとの死ぬることを好まず、悪より帰りて生くることを望み、又その仕えびとに権威をあたえて、主の民に罪の赦しを告ぐることを命じたまえり。神は、まことに悔い改めて福音を信ずる者をことごとく赦したもう。願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪を赦し、恵みと力を与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを。アーメン

晩　禱　（毎夕の祈り）

一同ひざまずき、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者　神よ、すみやかに我らを救いたまえ
会衆　主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

ここで一同立つ。

司式者　父と子と聖霊に栄光あれ
会衆　始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり　アーメン

司式者　なんじら主をほめまつれ
会衆　主の御名をほめまつるべし

詩　篇

ここで、定められた詩篇を歌いまたは唱える。一篇終わるごとに栄光の頌を用いる。

第一日課

第一日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。この頌の前に、その日にふさわしい聖歌を用いてもよい。

聖なるおとめマリヤの頌

一　わが心、主をあがめ＝　わが霊は、わが救い主なる神を喜びまつる
二　そのはしための卑しきをも＝　顧みたまえばなり
三　見よ今よりのち、よろず代の人われを幸いとせん＝　全能者われに大いなることをなしたまえばなり
四　その御名は聖なり＝　そのあわれみは世々かしこみ恐るる者に臨むなり
五　神は御腕にて力をあらわし＝　心のおもいのおごれる者をちらし
六　勢いある者を位よりおろし＝　卑しき者を高うし
七　飢えたる者をよき物に飽かせ＝　富める者をむなしく去らせたもう
八　また我らの先祖に告げたまいしごとく、アブラハムとその子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

第二日課

第二日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。

シメオンの頌

一　主よ、今こそ御言葉にしたがいて＝　しもべを安らかに行かしめたもうなれ
二　わが目は、はや＝　主の救いを見たり
三　これ、もろもろの民の前に＝　備えたまいしもの
四　異邦人をてらすひかり＝　御民イスラエルの栄光なり
　父と子と聖霊に＝　栄光あれ
　始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

一同使徒信経を歌いまたは唱える。

使徒信経

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず
我はそのひとり子、我らの主イエス＝キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん
我は聖霊を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ず　アーメン

一同ひざまずく。以下、みたすけのための祈りまでを歌ってもよい。

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

ここで司式者は立つ。

司式者　主よ、あわれみを我らに現わしたまえ
会衆　主の救いをあたえたまえ
司式者　主よ、正しきをもって主の仕えびとを装いたまえ
会衆　主の聖徒を喜ばせたまえ
司式者　主よ、主の民を救いたまえ
会衆　主のゆずりを祝したまえ
司式者　主よ、この世を安らかに治めたまえ
会衆　地のはてまで戦いをやめしめたまえ
司式者　神よ、我らの心をきよめたまえ
会衆　我らより聖霊を取りたもうなかれ
司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者　我ら祈るべし

特祷

ここで当日の特祷を用い、つづいて次の二つの特祷を用いる。

平安のため

もろもろの聖なる望み・よき思い・正しきわざのもとなる神よ、願わくは、しもべらに世のあたえ得ざる平安をあたえ、主の戒めに従うことを決心せしめ、また主の守りによりてあだを恐れず、おだやかに世を渡ることを得させたまえ。救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

みたすけのため

主よ、御光をもって我らの暗きを照らし、主の大いなるあわれみをもって今夜の危うきを防ぎたまわんことを、御子・われらの救い主イエス＝キリストのいつくしみによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで司式者はひざまずき、諸祈祷、嘆願、感謝を用いてもよい。
終わりに次のように言う。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン

アタナシオ信経

この信経は三位一体主日に、使徒信経にかえて歌いまたは唱える。他の日にも用いることができる。

一　救われんと願う者は＝　聖公会の信仰箇条を奉ずること最も肝要なり
二　この信仰箇条を乱すことなく、全く守る者にあらざれば＝　必ず世々限りなく滅ぶべし
三　聖公会の信仰箇条は次のごとし＝　唯一の神に三位あり、三位は一体なり
四　三位を乱さず＝　一体を分かたずして拝むべきことなり
五　父一位、子一位＝　聖霊一位なり
六　されど父も子も聖霊も神たることは一つなり＝　その栄光ひとしく、みいつ限りなし
七　父のかくあるごとく、子もかくあり＝　聖霊もかくあるなり
八　父も造られず、子も造られず＝　聖霊も造られず

九　父も量りなく、子も量りなく＝　聖霊も量りなし
一〇　父も限りなく、子も限りなく＝　聖霊も限りなし
一一　されど限りなき者は三つにあらず＝　ただ一つなり
一二　また造られざる者は三つにあらず、量りなき者も一つ、量りなき者も一つなり
一三　父も全能、子も全能＝　聖霊も全能なり
一四　されど全能なる者は三つにあらず＝　ただ一つなり
一五　父も神、子も神＝　聖霊も神なり
一六　されど三つの神にあらず＝　ただ一つの神なり
一七　父も主、子も主＝　聖霊も主なり
一八　されど三つの主にあらず＝　ただ一つの主なり
一九　キリスト教の真理によれば三位をおのおの神と信認し＝　主と信認せざるを得ず
二〇　聖公会の教理には＝　三つの主ありと言うことを禁ず
二一　父は、たれよりも成りたるにあらず＝　造られず、生まれざるなり

二三　子はただ父よりの者にして、成りたるにあらず＝　造られず、生まれたるなり
二三　聖霊は父と子よりの者にして、成りたるにあらず＝　造られず、生まれず、ただいずるなり
二四　一つの父あり、三つの父あらず、一つの子あり、三つの子あらず＝　一つの聖霊あり、三つの聖霊あらず
二五　この三位は前後あることなく＝　また大小あることなし
二六　三位は皆ともに限りなく＝　ともに等しきなり
二七　さればすべてのことにおいて前に言えるごとく、一体に三位あり＝　三位は一体なりとして拝むべし
二八　救われんと願うものは＝　三位一体を、かくのごとく思わざるべからず
二九　また限りなき救いに至らんがためには＝　主イエス＝キリストの肉体となりたまいしことをも、まことに信ずるは肝要なり
三〇　それ正しき信仰は＝　神の子・主イエス＝キリストの、神また人たるを信じて言い表わすことなり

三一　神とは父の性にてよろず世のさきに生まれ＝　人とは母の性にてこの世に生まれたまえることなり
三二　主は全き神・全き人にして＝　霊魂と肉体とを備えたまえり
三三　その神性によれば父と等しく＝　ただ一つのキリストなり
三四　神また人なりといえども二つにあらず
三五　その一つなるは、神性を肉体に変ぜしによらず、ただ一つなるによる
三六　全く一つなり＝　これ両性を混ぜしによらず、ただ一つのキリストなり
三七　霊魂と肉体にて一つの人なるごとく＝　神と人にて一つのキリストなり
三八　主はわれらを救わんがために苦しみを受け、よみにくだり＝　三日目に死にし者のうちよりよみがえり
三九　天に昇り、父の右に座したまえり＝　かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん
四〇　そのきたりたもうとき、すべての人、そのからだをもってよみがえり＝　おのおのその行ないを述ぶべし

四　善を行ないし者は限りなき命に入り＝　悪を行ないし者は限りなき火に入るべし

四　これ聖公会の信仰箇条なり＝　まことに、これを確信する者にあらざれば救わることを得じ

父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

嘆願

日曜・水曜・金曜・昇天前祈祷日に用いる。その他のときに用いてもよい。

司式者　天の父なる神よ

会衆　我らをあわれみたまえ

司式者　世を贖いたまいし子なる神よ

会衆　我らをあわれみたまえ

司式者　父と子よりいずる聖霊なる神よ

会衆　我らをあわれみたまえ

司式者　至聖にして栄光ある三位一体の神よ

会衆　我らをあわれみたまえ

司式者　主よ、我らと先祖とのとがを思いたもうことなく、また我らの罪を罰したもうことなかれ。あわれみふかき主よ、尊き血にて贖いたまいし民を赦し、世

世怒りたもうことなかれ

会衆　主よ、赦したまえ

司式者　すべての罪・災い、悪魔のてだて、主の怒り・かぎりなき罰より

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　心暗きこと、高慢・虚栄・偽善、ねたみ・憎み・恨み、及びすべての無慈悲より

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　淫行その他すべての重き罪、また世と肉と悪魔の欺きより

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　雷電・暴風、洪水・地震・火災、疫病・ききん、戦争・凶殺・急死より

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　徒党・密計・むほん、邪道・異端・分裂、及び心をかたくなにし、主の御言葉と戒めを軽んずることより

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　主の肉体と成りたまいしこと、降誕・割礼・洗礼・断食、また試みられたまいしことにより

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　主の大いなる憂いと血の汗、十字架とその苦しみ、尊き死と葬り、栄光ある復活と昇天、また聖霊の降臨により

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　我らの災いのとき、また幸いのとき、死ぬる日にも、さばきの日にも

会衆　主よ、救いたまえ

司式者　主なる神よ、我ら罪びとの願いをききき、天下の聖公会を治め、正しき道に導きたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくは主教・司祭・執事の心を照らして、まことに主の道を悟らせ、又その教えと行ないにて、これを宣べ伝えさせたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは主の刈り入れ場に働く者をおくりたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは主の民を祝し、これを守りたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは我らに主を愛し、主をおそれ、ねんごろに主の戒めに従う心を与えたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは主のすべての民にますます恵みを加え、慎みて御言葉をきき、真心にてこれを守り、聖霊の実を結ばしめたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくはすべて迷える人、また欺かれたる人を、まことの道に導きたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは立てる者を強め、心弱き者を助け、倒れたる者を起こし、ついにサタンを我らの足の下に打ち伏せたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは天皇・大臣・議員および行政官に才能・知識を与えたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは裁判官を導き、裁判を公平にし、正義をまもる恵みを与えたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは万国に和睦と太平を与えたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは危うき者を助け、貧しき者を救い、災いのうちにある者を慰めたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは旅びと、産婦・病人・幼な子をまもりたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくはみなしご・やもめ・よるべなき人、しいたげらるる人を守り、これを養いたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくは、ひとやにある者と、とりこをあわれみたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくはすべての人をあわれみたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくは地の産物を栄えしめ、これを守りて我らの用にあてたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくは我らを憎み、そしり、悩ます者を赦し、その心を改めさせたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　願わくはまことに悔ゆる心を与え、我らの罪と怠りと過ちとをことごとく赦し、また御言葉に従いて行ないを改むるために聖霊の恵みを与えたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

司式者　神の子よ、我らの願いをききたまえ

会衆　神の子よ、我らの願いをききたまえ

司式者　世の罪を除きたもう神の小羊よ

会衆　我らをあわれみたまえ

司式者　世の罪を除きたもう神の小羊よ

会衆　主の平安を与えたまえ

司式者　キリストよ、我らの願いをききたまえ

会衆　キリストよ、我らの願いをききたまえ

ここで聖餐式または大斎懺悔式にうつってもよい。

司式者　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主よ、憐れみを我らにあらわしたまえ
会衆　我ら主にたよれり
司式者　我ら祈るべし
父よ、あわれみをもって我らの弱きをみそなわし、御名の栄光のために我らの受くべき災いを防ぎたまえ。また悩みのうちにあるとき、全く主のあわれみにたより常に清き行ないをもって主に仕え、主の誉れをあらわすことを得させたまえ。我らのとりなし・主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで適当な祈りを用いてもよい。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン

諸祈祷・感謝

祈祷

一 教会・教区のため
二 総会・教区会のため
三 教区主教選挙のため
四 聖職按手のため(一)―(二)
五 聖職に召さるる人の増さんため
六 聖職と信徒のため
七 神学校のため
八 伝道のため(一)―(四)
九 洗礼志願者のため
一〇 堅信式志願者のため
一一 信徒一致のため(一)―(二)
一二 主日厳守のため
一三 万民のため
一四 日曜学校のため
一五 諸学校のため
一六 病院・療養所のため
一七 新年祈祷(一)―(二)
一八 豊年のため
一九 世界平和のため
二〇 社会正義のため
二一 天皇のため
二二 皇室のため
二三 国会のため
二四 こどものため
二五 誕生日のため
二六 病人のため(一)―(二)
二七 病児のため(一)―(二)
二八 手術を受くる者のため
二九 産婦のため(一)―(二)
三〇 旅行者のため
三一 遭難者のため
三二 逝去者のため(一)―(二)
三三 逝去後三日・一週・一か月記念
三四 逝去周年記念
三五 洗礼を受くるおりなくして世を去りし者のため
三六 随時に用うる祈祷(一)―(七)
三七 キリソストムの祈り

感謝

一 出産のため
二 生まれし幼な子のため
三 病のいやされし者のため
四 旅行を終えし者のため
五 特別なる恵みのため
六 一般的に用いる感謝

祈祷

一 教会・教区のため

天地万物を治めたもう全能の神よ、あわれみをもってわれらの祈りを聞こし召し、この会衆（教区）を祝し、霊的進歩に必要なるものを与えたまえ。願わくは聖職と信徒に恵みをくだし、信仰厚き者を強めてその数を増し、病める者を慰めてこれをいやし、幼き者を祝してこれを守り、悪に陥る者をひるがえして善に向かわせ、眠れる者をさまし、倒れたる者を起こし、悔ゆる者を赦し、この地のすべての未信者を主の救いに入らしめたまえ。願わくは主の道の妨げを除き、主の御名をとのうる人々ことごとく聖公会のうちにありて一致親愛することを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二 総会・教区会のため

とこしえにいます全能の神よ、主は昔、聖霊をもって使徒たちの議会をつかさどり、また御子イエス＝キリストによりて世の終わりまで公会とともにいますことを約した

まえり。願わくは今、御名によりて集まれる議会のうちにいまし、愚かと誤り、かたくなと高ぶりを除き、聖霊の大いなる力をもって議員の心を清め、その働きを治めたまえ。又これによりてキリストの福音いずこにも宣べ伝えられ、聞く人々これにしたがい、罪と死とサタンの国は砕け、散りたる羊の群れはついに一つの群れとなり、限りなき命に入ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

三　教区主教選挙のため

すべての良き賜物を与えたもう全能の神よ、願わくは主教を選挙せんとする（――）教区の聖職および信徒代議員に恵みをくだし、聖霊をもって導き、託さるる群れを正しく治め、御名の栄光をあらわし、公会の徳を建つる主教を選ばしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

四　聖職按手のため

聖職按手節中、当日の特祷につづいて、次の祈りのいずれか一つを用いる。

（一）

御子の尊き血をもって聖公会をあがないたまいし全能の神・天の父よ、今その公会をみそなわして主の群れを牧する主教の心を導き、軽々しく人に手をおくことなく、忠実を尽くし、思いをこらして、聖職にかのうう人を選ばせたまえ。また選ばるる人に天の祝福をあたえ、その教えと行ないをもって主の栄光をあらわし、人々を救いに導くことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

すべての良き賜物を与えたもう全能の神よ、主は聖公会のうちに聖職を立て、その位を分かちたまえり。この職務に召さるる者に恵みを与えたまわんことを、せつに祈り奉る。願わくは主の道の真理をもって、彼らに満たし、清き行ないをもって彼らを装い、忠実に主に仕えしめ、御名の栄光を現わし、聖公会の徳を建つることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

五　聖職に召さるる人の増さんため

全能の神よ、願わくは御子のとうとき血にてあがないたまいしこの世をみそなわし、公会の聖職に召さるる人を増しくわえ、その働きによりて御光を輝かせ、救わるる者

の数を満たし、御国をとくきたらしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

六　聖職と信徒のため

とこしえにいます全能の神・すべてのよき賜物を与えたもう父よ、願わくは我らの主教と他の聖職、およびその預かりたる会衆に聖霊をくだし、常に恵みの露を注ぎ、まことに主の御心にかなわしめたまえ。主よ、この願いを我らのとりなしイエス＝キリストの誉れのために許したまえ。アーメン

七　神学校のため

神よ、主は御心にかのう者を尊き務めに召し、聖霊をもってその心を照らし、その生涯をきよめたもう。願わくは御名によりて建てられし神学校をみそなわし、教授・学生を祝し、召されたる召にかのう知識をひたすら求めしめ、常に御子・我らの救い主の教えにしたがい、喜びてその務めを全うすることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

八　伝道のため

（一）

万民の主なる神よ、主のかたちに似せて造られしといえども、いまだ主の愛を知らざる人々をかえりみたまえ。願わくは主の公会の働きを盛んならしめ、御子イエス＝キリストのいさおによりて彼らを迷信と不信より救い、主をあがむることを得させたまえ。我らの救い、またすべて信ずる者のよみがえりと命なる御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

良き羊飼いなる主イエス＝キリストよ、主は迷える者をたずねいだして救わんがために世にくだりたまえり。願わくは御力を現わしてわが国の伝道を盛んならしめ、弱き者をあわれみ知らざる者をさとらせ、悲しむ者を慰め苦しむ者を助け、迷える者を導きて主の群れに加えたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

（三）

神よ、一つの血筋より万民をいだして地の全面に住ましめ、また御子をくだして、遠

き者にも近き者にも、やわらぎを宣べしめたまえり。願わくはわが国の人々を恵みて主を探ることを得させたまえ。またすみやかに約束を遂げ、万国の民に御霊を注ぎたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（四）

全能の神よ、主はもろもろの人の、救いを受け、真理を悟るに至ることを望みたもう。願わくは多くの働き人を刈り入れ場に送り、天よりの力をもって彼らを強め、その働きを祝し、よき実を結ばしめ、ついに異邦人の数みち、イスラエルの人のことごとく救わるる時をきたらせたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

九　洗礼志願者のため

いと高きみくらにいます全能の神よ、地に住む者の卑しきさまをあわれみ、我らを救わんがために御子イエス＝キリストをくだしたまえり。願わくは洗礼を受くる備えをなすしもべらを顧み、彼らに聖霊の助けを与え、ねんごろにまことの道を学び、ついに生まれかわりの洗いを受けて罪の赦しをうるに至らせたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一〇　堅信式志願者のため

神よ、御子イエス＝キリストの教えによりて弟子たちの心をそなえ、聖霊を受くるにふさわしき者となしたまえり。願わくは主教の按手により聖霊の賜物を受くる備えをなすしもべらを顧み、まことに罪を悔やみ、謙そんなる心にて近づき、聖霊の力にて満たされ、生涯忠実に主に仕え、御名の栄光を現わすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一一　信徒一致のため

（一）

主イエス＝キリストよ、主は、我なんじらに平安をのこす、わが平安をなんじらに与うと使徒たちにのたまえり。願わくは我らの罪を思いたもうことなく、公会の信仰をよみし、御心にかのう一致・平安を与えたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

（二）

平和の君・ひとりの救い主イエス＝キリストの父よ、願わくは我らに恵みを与え、すべて一致・平和を妨ぐるものを除きたまえ。からだ一つ、御霊一つ、召されて保つところの望み一つ、主一つ、信仰一つ、洗礼一つ、我ら万民の父一つなるがごとく、心を一つにし、精神を一つにし、真実・平和・信仰・慈愛をもって相結び、思いを同じゅうし、言葉を同じゅうして主をあがむることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一二　主日厳守のため

全能の神よ、主は一週の始めの日を、御子のよみがえりの記念となしたまえり。願わくは主のきよめたまいしこの日を守り、使徒たちの模範に従い、相ともにつどいて主を拝み、御言葉をきき、主の大いなる恵みにあずかりて、身も魂も健やかに、生涯忠実に主に仕うることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

一三　万民のため

すべての人の造り主・守り主なる神よ、主の道を万民に教え、主の救いを万国に知らせたまわんことをこいねがい奉る。ことに願わくはキリストの信徒ととのうる者、みな真理を悟り、信仰を保ちて心を一つにし、相やわらぎ、常に正しき事を行なわしめたまえ。またこころに身になりわいに悩みある人々（ことに主のしもべ――）を父の恵みにゆだね奉る。願わくはおのおのその悩みに応じてこれを助け、これを慰め、苦しみを忍ぶ力をあたえ、ついに患難のうちより救いいだして、幸いなる道に至らせたまえ。これらの事を主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一四　日曜学校のため

全能の神・天の父よ、願わくは我らの日曜学校を祝し、教うる者と教えらるる者の心を照らし、喜びて主の真理を学び、生涯主をあがめ、主に仕うることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一五　諸学校のため

全能の神よ、我らの知恵を得るは、ただ主の賜物によるなり。願わくは御名によりて建てられたる諸学校を恵み、教うる者と学ぶ者を祝して、ともに知識を深め、主の真

理を悟らせ、謙そんなる心にて唯一の神を仰ぐことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一六　病院・療養所のため

全能の神よ、御子イエス＝キリストはあまねく巡りて良き事をなし、もろもろの病をいやしたまえり。願わくは主の御名によりて建てられし（――）病院（療養所）における主のみわざを栄えしめ、病める者をいやし強め、医師・看護婦・職員に知恵と力、愛と忍耐を与えて、絶えずそのなすわざを祝したまわんことを。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一七　新年祈祷

（一）

とこしえにいます全能の神よ、主のしもべら御恵みによりて守られ、過ぎし年月を安らかに送り、無事に新年を迎えて、主の深き慈愛を感謝し、御名をほめ奉る。願わくは、この我らの日に、我らの平安にかかわる事を学び、常に主の恵みに感じ、御心に従いて救いの道を絶えず歩み、ついにとこしえの御国に至る幸いを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

天地の主なる神よ、主は万民を治め、その盛衰をつかさどり、栄光を現わしたまえり。ことにわが国をあわれみ、御心にかなわざることをも見過ぐし、今日まで守りて新年を迎えしめたまいしことを感謝し奉る。願わくは今年もわが国を祝し、もろもろの災いを免れしめたまえ。また我ら相むつみ、相やわらぎ、おのおのその本分を尽くし、国の基いよいよ堅からしめたまえ。愛に富みたもう主よ、わが国たみも他の国たみも皆ひとしくキリストの御国の民となり、もろともに主の栄光を賛美し、主を知る知識の地上に満つる時を、とくきたらしめたまえ。これらの願いを、ほめたたうべき救い主イエス＝キリストの御名によりてささげ奉る。アーメン

一八　豊年のため

この祈りは昇天前祈祷日に用いる。

全能の神よ、主は地を人のために造り、人を主の栄光のために造りたまえり。願わく

は御民の祈りを聞こし召し、御誓いのごとく地の産物を栄えしめ、豊かに刈り入れを与えたまえ。また御言葉の種を豊かに結ばしめ、御名の栄光をあらわさせたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一九　世界平和のため

真理と平和の源なる全能の神よ、不幸にして争い分かれ、大いなる危険におちいりて御心を痛めまつりしことをさんげし奉る。願わくは国々の民みな主の大いなる愛を悟りて、互いに親しく交わる時をとくきたらしめたまえ。また相たずさえて主に仕え、ともに御国の民となることを得させたまえ。万民のためにいけにえとなりて死にたまいし御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二〇　社会正義のため

万民の父なる神よ、主はすべての人みな兄弟としてむつまじく生くることを望みたもう。願わくは不幸にして分かれ争う人々にその本分を悟らせ、正義と公平を保ちて、ともに社会の福祉をはかり、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二一　天皇のため

王の王・主の主いと高き天の父よ、恵みをもって我らの天皇を顧みたまえ。願わくは聖霊の導きによりて、まことに主を敬い、救い主イエス＝キリストを信じ、常に御心に従うことを得させたまえ。また豊かに天の賜物を授け、健やかに、盛んに、命ながく、ついに限りなき幸いに至らしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二二　皇室のため

恵みに富みたもう全能の神よ、我らの皇后・皇太子・すべての皇室をみそなわしたまえ。願わくは聖霊をもって導き、まことに主を信じ、ついに限りなき御国に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二三　国会のため

恵みに富みたもう神よ、わが国のため、ことに国会のために祈り奉る。願わくは議員の心を導き、その図るところにより、国民にまことの平安と福祉とを得させたまえ。救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二四　こどものため

天の父よ、主は御子をもって幼な子らを祝し、天国はかくのごとき者の国なりと教えたまえり。願わくは我らを導き助け、我らに授けたまいしこどもを主の恵みのうちに養い育てしめ、その身も魂も健やかにしてキリストの道を学び、常に公会にありてともに主に仕え、御栄えをあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二五　誕生日のため

主よ、主のしもべ（――）を守りて今日誕生日を迎えしめたまいしことを感謝し奉る。願わくは変わらざる恵みをもって彼を導き、絶えざる助けをもって彼をともない、御名の栄光をあらわし、ついに主の聖徒とともに、限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二六　病人のため

（一）

とこしえにいます全能の神よ、病める主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞きこし召しだまえ。願わくは彼をあわれみ、医師と看護する者とを導き、豊かなる恵みにより、その病をいやし、安きを与え、健やかなる身と魂とをもって主の宮にいたり、感謝をささぐる日をとくきたらしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

慈悲の父・慰めのもとなる神よ、我らが悩むとき主のほかに助くる者なし。あわれみをもって今病める主のしもべ（――）を、みそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは主の慈愛を悟らせて、彼を慰め、悪魔の試みを防ぎ、苦しみを耐え忍ぶ力を与えたまえ。また御心にかなわば彼の病をいやし、生涯主をうやまい、主の栄光をあらわし、ついに主とともに限りなき命の御国に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二七　病児のため

（一）

天の父なる神よ、願わくは今病める幼な子（――）のためにささぐる祈りを聞こし召

し、愛の御手をもって彼を守り、その病をいやしたまえ。慈悲ふかき父よ、御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

全能の神・慈悲の父よ、生死を定むる力はただ主にあり。あわれみの目をもって今病める幼な子（――）をみそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは主の良しとしたもう時に至りて、そのからだの苦しみを除き、平安を与えたまえ。又そのいのち長ろうること御心にかなわば、生涯忠実に主に仕え、主の栄光をあらわす器とならしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二八　手術を受くる者のため

主イエス＝キリストよ、主は御民のからだと魂を救わんがために甘んじてむち打たれ、傷つけられ、苦しみを忍びたまえり。願わくは今手術を受くる主のしもべ（――）に御力を与え、その身と魂をいやしたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもうなり。アーメン

二九　産婦のため

（一）

主よ、願わくはこのしもべを祝し、その憂いを除き、安らかに出産せしめ、その尊きつとめを果たして大いなる喜びを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

あわれみ深き神よ、喜びにも悲しみにも我らはただ主をほめ奉る。願わくは生まるべき者を失いて悲しむこのしもべを慰め、身と魂を健やかならしめ、主に栄光を帰することを得させたまえ。御子イエス＝キリストのいつくしみによりてこいねがい奉る。

アーメン

三〇　旅行者のため

知りたまわざることなく、いましたまわざる所なき全能の神よ、願わくは主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、その旅路を守り、正しき望みをとげしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三一　遭難者のため

慈悲の神・天の父よ、主は世の人を悩ますを喜ばずと教えたまえり。あわれみをもって、悩みにあえる主のしもべ（――）をみそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは彼に恵みを与え、すべてを御手にゆだね、苦しみを忍びて、その災いを益となすことを得させたまえ。また願わくは主の慈悲を悟らせて彼を強め、御顔の光をもって彼を照らし、平安を与えたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

三二　逝去者のため

（一）

万民の主なる全能の神よ、主にありて死ぬる死人は幸いなりと教えたまえり。願わくは主を信じて世を去り、安らかなる眠りにつけるしもべら（――）に豊かなる祝福を与え、彼らのうちに主の始めたまいし良きわざをイエス＝キリストの日まで全うしたまえ。天の父よ、なお世にありて主に仕うる我らも、主の恵みにより、ついに彼らとともに御国にて聖徒の嗣業にあずかるにふさわしき者とならしめたまえ。我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

全能の神よ、主にありて世を去りし者の霊、主とともに生き長らえ、主を信ずる者の魂、肉の重荷をおろして後、主とともにおりて楽しむ。主よ、すでに信仰の馳せ場を走り終わりて、そのやすみに入れる主のしもべのゆえによりて御名をほめ奉る。願わくはよみがえりの日に我らも彼らとともに、わが父に祝せられたる者よ、きたりて世の始めより、なんじらのために備えられたる国を継げとの、いと喜ばしき御声をきくことを得させたまえ。この願いを我らのとりなし・御子イエス＝キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

三三　逝去後三日・一週・一か月記念

主よ、世を去りてすでに三日（一週、一か月）を経たる主のしもべ（――）の魂のために祈り奉る。願わくは変わらざるいつくしみをもって彼を守り、絶えず恵みの露をそそぎたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三四　逝去周年記念

あわれみ深き主なる神よ、我ら今、主のしもべ（――）の世を去りし（――）周年記念の日に当たりその魂のために祈り奉る。願わくは彼にとこしえの安きを与え、絶えざる御光をもって導きたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三五　洗礼を受くるおりなくして世を去りし者のため

万民の造り主・慈悲ふかき全能の神よ、主を知らず、洗礼を受くるおりを得ずして世を去りし者を主の御手にゆだね奉る。願わくはその罪にしたがいて報いたまわず、主のいつくしみの多きによりて報いたまわんことを、御子・我らの救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

三六　随時に用うる祈祷

（一）

主よ、あわれみをもって我らの祈りを助けたまえ。この定まりなき世におるあいだ、変わらざる恵みをもって我らを守り、常に限りなき救いの道を歩ましめたまわんことを。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（二）

全能の神よ、今日われら耳にききし言葉を心に植えたまいて、良き行ないの実を結び御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（三）

主よ、変わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをともない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光を現わし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（四）

全能の神よ、我らは愚かにして願うべきことを知らざれども、主はすべての知恵の源にして、願わざるさきに我らの必要なる物を知りたもう。願わくは我らの弱きをあわれみ、いさおなきによりて、あえて願わざるもの、心暗きによりて願い得ざるものを与えたまえ。御子・われらの主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。

アーメン

（五）

全能の神よ、御子の名によりて祈る人の願いを聞かんと約したまえり。今信仰をもってささげたる祈りに、あわれみの耳を傾け、御心にかのうところを許し、我らの乏しきを助け、御名の栄光をあらわしたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（六）

悔ゆる人の嘆き、憂うる人の望みを軽しめたまわざるあわれみふかき父よ、我らが災いに悩むとき御前にてなす祈りを助けたまえ。また恵みをもって悪魔と人との悪しきてだてを滅ぼし、しもべを守り、いかなる攻めにもそこなわれず、つねに聖公会のうちにて感謝をささぐることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

（七）

人をあわれみ、罪を赦すことを喜びたもう神よ、我らのささぐる祈りを聞こし召したまえ。我らおのおの罪の鎖につながるといえども、ふかき慈悲をもってこれを解きたまわんことを、我らのとりなし・主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

三七　キリストの祈り

今こころを合わせて主に祈る恵みを与えたまえる全能の神よ、御名によりて両三人あつまる時は、その願いを許さんと約したまえり。願わくは我らの益をはかりて望みと願いを遂げしめ、この世においては主の道を悟り、後の世においては限りなき命に至ることを得させたまえ。アーメン

感謝

一　出産のため

天の父・全能の神よ、主のしもべ（――）をみそなわし、つつがなく出産の苦しみと危うきを過ごさせたまえることを感謝し奉る。願わくは御手をのべてこのしもべに御力を与え、身と魂とを健やかならしめ、主の宮にいたりて、御名をほめたとうることを

を得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二　生まれし幼な子のため

神よ、主は我らの救いのために、ひとりの御子をくだし、聖なるおとめマリヤより生まれしめ、また御子によりて、幼な子の天使は常に主の御顔を仰ぐなりと教えたまえり。願わくはこの幼な子を御手に抱き、天の祝福を与えたまえ。また悪の力を防ぎ、洗礼によりて新たに生まれ、生涯主のしもべとなりて、限りなき栄光に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三　病のいやされし者のため

命を与えたもう神よ、このしもべの病をいやしたまいしによりて、ともに感謝し御名をあがめ奉る。主は恵みにみち、世の人を常にあわれみたもう。願わくはこの人に深く主の慈愛を悟らせ、常に主の聖なる道を歩ましめたまえ。この感謝と祈りを聞こしめしたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

四　旅行を終えし者のため

造りたまいしものを常にあわれみたもう主よ、このしもべを守りて、つつがなくその旅路を終わらせたまいしことを、ともに感謝し、御名をほめ奉る。願わくはこの恵みを忘れず、生涯主にたより、主の戒めの道を歩み、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。この感謝と祈りを聞こし召したまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

五　特別なる恵みのため

慈悲ふかき父よ、主はこのしもべに恵みをあらわしたまえることを感謝し奉る。願わくは今ささぐる感謝をうけ、喜びをもって生涯、御心に従うことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

六　一般的に用うる感謝

一同で唱える。

全能の神・慈悲の父よ、我らと人々に豊かなる恵みをくだしたもうことを感謝し奉る。主は我らを造り、我らを守り、この世の物をあたえ、ことに主イエス＝キリストによりて世を贖いて量りなき愛をあらわし、恵みを受くる法を示し、のちの世の栄光の望みをいだかしめたまえり。願わくはこのもろもろの恵みに深く感じ、ただ言葉のみを用

いず、おのれをささげて主に仕え、生涯きよき行ないを用いて主の栄光をあらわすことを、イエス＝キリストによりて得させたまえ。願わくは誉れと栄えかぎりなく父と子と聖霊にあらんことを。アーメン

聖餐式

在籍外の教会で陪餐しようとするときは、前もって、司式者に申し出なければならない。

受聖餐者のうち、明らかに大罪を犯すか、言行で隣人を害して会衆を恥ずかしめた者があれば、司祭はその人に対して、その罪を悔い改め、加えた害を償い、または後に償う決心を明らかにし、会衆の恥をすすがないうちは、陪餐してはならないことを告げなければならない。

また互いに恨みをいだく者があれば、前の規則により、陪餐させてはならない。但し一方が、その受けた害をゆるし、償いを明言し、和を求めているのに、他方が、それを受けいれず恨みを解かないときは、司祭は和を求めている者に陪餐を許し、受けいれない者には許さない。

これらの処置をしたとき、司祭は二週間以内に教区主教に報告する。

勧告

司祭は時々（少なくとも一回は大斎節中）公祷の際、この勧告を朗読する。

会衆は座につく。

愛する兄弟よ、主イエス＝キリストは我らの救いのために、主のからだと血の聖奠を定めたまえり。これ敬虔なる人々これを受けてキリストの十字架と苦しみを記念し、

主により て強くせられんがためなり。我ら罪の赦しを得て天国の幸いにあずかるは、ただ主のいさおのみに因る。このゆえに全能の神・天の父は、その御子・救い主イエス＝キリストを与えて、我らのために死なしめたまいしのみならず、この聖奠により て霊なる糧となしたまいしことを心より感謝し奉るべし。そもそもこの聖奠は、これを受くる人に神の力を与うるものなれども、みだりにこれを受くるは、いと危うきことなれば、その尊きことと危うきこととを考え、軽々しくせず、また神を欺く者のごとくせず、ねんごろにおのれの心をただし、聖書のうちに命じたまえる礼服をつけ、清く潔くして、この聖卓にきたり、神のふるまいにつらなるべし

まず、神の戒めをもって、おのれをしらべ、あるいは思い、あるいは言葉、あるいは行ないにて罪を犯したることを悟らば、これを嘆き、まことに改むることを決心して、全能の神にさんげすべし。もしまた隣に対して罪を犯したることあらば、直ちに和を求め、力を尽くして償いをなし、かつ、おのれの罪の赦しを神に望むごとく、他人の罪をも赦すべし。これらの事をせずして聖餐を受くれば、ただ、おのれの罪を重ぬるのみなり。されば、もし、なんじらのうちに神を罵る者・御言葉をそしる者・姦

淫を行のう者・恨み憎む者・その他重き罪を犯せる者あらば必ず悔い改めよ。しからざればこの聖卓に近づくべからず

また聖餐を受くる者は、神のあわれみを堅く信じ、良心の責めなきこと肝要なり。もし前の方法に従うとも、なお心おだやかならぬ者あらば、我にきたるか、または、ほかの司祭に行きて、その憂いを述べよ。さらば赦罪の恵みと魂を健やかならしむる教えと力とを受けて疑いを去り、良心やすんずることをうべし

堅信式を受けし者は努めて陪餐し、ことに復活節には必ず陪餐すべし。また、その日の食事にさきだちて陪餐するは古来の慣習なり。

準　備

この準備は聖餐式の前に用いる。前夜に勧告、講話、または黙想とともに用いてもよい。

会衆はひざまずき、一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も

与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ

司式者は次の祈りを唱える。

全能の神よ、すべての人の心は主に現われ、すべての望みは主に知られ、すべての密事は主に隠るることなし。願わくは聖霊により我らの心をきよめ、全く主を愛し、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

十戒

各応答の後に、しばらく自らを省みる。

司式者　神このすべての言葉をのべて言いたまわく、我はなんじの神・主なり。我のほかなにものをも神とするなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ、おのれのために、上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの形に似せて偶像をつくり、これにひれ伏し仕うるなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじの神・主の名を、みだりに言うなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ安息日を聖として忘るるなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ父と母とを敬え

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ殺すなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ姦淫するなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ盗むなかれ

会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者　なんじ、偽りの証しを立つるなかれ
会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ
司式者　なんじ、むさぼるなかれ
会衆　主よ、我らをあわれみ、これらの律法を我らの心にしるしたまわんことをこいねがい奉る
司式者　主イエス＝キリストの、のたまえる言葉をも聞くべし
なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なるなんじの神を愛すべし。これは大いにして第一の戒めなり。第二もまたこれに等し、おのれのごとくなんじの隣を愛すべし。律法全体と預言者とは、この二つの戒めによるなり
会衆　主よ、我らをあわれみ、この律法を我らの心にしるしたまわんことをこいねがい奉る
司式者　我ら祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、我らの心とからだを清め、主の律法を踏ましめ、主の言いつけを行なわしめ、大いなる力にていつまでも守りたまわんことを、救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

つづいて聖餐式を行なうときは、以下を省いて直ちに本文にうつる。

懺悔

司式者　我ら全能の神に罪をさんげし奉るべし

一同次のさんげを唱える。

我らの主イエス＝キリストの父・よろずの物の造り主・よろずの人のさばき主なる全能の神よ、我ら思いと言葉と行ないをもって罪を犯し、いくたびとなく主にそむき、主の怒りをひきたることを、悲しみてさんげす。我ら深く悔み、まことに罪を嘆き、これを思いいずるごとに憂い、その重荷に堪えがたし、慈悲ふかき父よ、我らをあわれみたまえ。我らをあわれみたまえ。御子・われらの主イエス＝キリストのいさおによりて、過ぎし罪をことごとく赦し、今よりのち、行ないを改めて常に主に仕え、御心にかない、御名の栄光を現わさせたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい

奉る　アーメン

慰めの言葉

司式者は言う。

真心をもって帰依する人に、救い主キリストの言いたもう慰めの言葉を聞くべし
すべて労する者・重荷を負う者よ、我にきたれ。我なんじらを休ません

マタイ伝一一章二八節

神はそのひとり子を賜うほどに世を愛したまえり。すべてかれを信ずる者の滅びずして、とこしえの命を得んためなり

ヨハネ伝三章一六節

聖パウロの言葉をも聞くべし
キリスト＝イエス罪びとを救わんために世にきたりたまえり。これすべての人の受くべきまことの言葉なり

テモテ前書一章一五節

聖ヨハネの言葉をも聞くべし
人もし罪を犯さば、我らのために父の前に助け主・義なるイエス＝キリストあり。かれは我らの罪のために、なだめの供え物なり

ヨハネ第一書二章一、二節

ここで適当な祈りまたは嘆願を用いてもよい。
聖餐式の直前にこの準備を用いないときは一同立ち、司祭は本文の「主よ、あわれみたまえ　キリエ・エレイソン」の前に次の祈りを用いる。ただし本文を他の式と合わせて用い、主の祈りをすでに用いたときは、この主の祈りを省く。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪を赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ。アーメン

全能の神よ、すべての人の心は主に現われ、すべての望みは主に知られ、すべての密事は主に隠るることなし。願わくは聖霊により我らの心をきよめ、全く主を愛し、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

本文

序祷

ここで聖歌、詩篇中の一篇、または唱える。各節を三回ずつ繰り返してもよい。
一同立って次の言葉を歌いまたは唱える。

主よ、あわれみたまえ　（または）キリエ・エレイソン
キリストよ、あわれみたまえ　キリステ・エレイソン
主よ、あわれみたまえ　キリエ・エレイソン

主日およびその他の祝日には、一同次の頌を歌いまたは唱える。但し降臨節、大斎前節および大斎節の主日には用いない。

いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、人には恵みあれ。全能の父・天の王・主なる神よ、我ら主をほめ、主をたたえ、主を拝み、主をあがめ、主の大いなる栄光のゆえによりて、感謝したてまつる
神の生みたまいしひとり子・主イエス＝キリスト、世の罪を除きたもう神の小羊・父

の御子・主なる神よ、我らをあわれみたまえ。世の罪を除きたもう主よ、我らの祈りをうけたまえ。父の右に座したもう主よ、我らをあわれみたまえ
イエス＝キリストよ、主のみ聖なり。主のみ王なり。主のみ聖霊とともに、父の栄光のうちにいまして、もっともたかし　アーメン

特祷

司祭　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司祭　われら祈るべし

ここで当日の特祷を用いる。

使徒書

会衆は座につき、補式者または司祭は使徒書を歌いあるいは朗読する。読む前に「使徒書は――書第一章一節以下にあり」と言い、終わったとき「ここに使徒書終わる」と言う。
次に一同立つ。ここで聖歌、詩篇中の一篇、または数節を昇階唱として用いてもよい。

福音書

執事または司祭は次の唱和の後、福音書を歌いあるいは朗読する。

朗読者 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

朗読者 聖なる福音は、聖――の福音書 第――章――節以下にあり

会衆 主に栄光あらんことを

福音書が終わったとき、次のように歌いまたは唱える。

会衆 主に感謝したてまつる

説教

説教の前または後に、司祭はその週の祝日、斎日および聖餐を行なう日に関する告示、教区主教の教示、結婚の予告、懲戒等の告示をする。
説教の後に、伝道のため、洗礼志願者のため等の祈りをしてもよい。
説教はニケヤ信経の後にしてもよい。

ニケヤ信経

主日およびその他の祝日には、一同立って歌いまたは唱える。

我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず
我は唯一の主イエス＝キリストを信ず。主は、よろず世のさきに、父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また我らを救わんがために、天よりくだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受け、人性をとり、我らのためにポンテオ＝ピラトのとき、十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座したまえり。また栄光をもって再びきたり、生ける人と死ねる人をさばきたまわん。その国は終わることなし
我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまいし主なり。我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命を望む
アーメン

ここで聖歌を用いてもよい。

懺悔・赦罪

執事または司祭は言う。

主の御心にかのう供え物をささげ、この聖奠を行なわんがために、罪をさんげし奉るべし

会衆はひざまずく。

司祭　父と子と聖霊なる全能の神、及び天の会衆と兄弟の前に、われは思いと言葉と行ないをもって、多くの罪を犯せしことを悲しみてさんげす。神よ、願わくは我をあわれみたまえ。兄弟よ、わがために主なる神に祈らんことを

会衆　願わくは全能の神、なんじをあわれみ、なき命に至らせたまわんことを

司祭　アーメン

会衆　父と子と聖霊なる全能の神、及び天の会衆と師父の前に、われらは思いと言葉と行ないをもって、多くの罪を犯せしことを悲しみてさんげす。神よ、願わくは、あわれみ深き全能の神、なんじらの罪を赦し、恵みと力を与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを

司祭　アーメン

ここで一同立つ。

次に司祭は会衆に向かって言う。教区主教臨席のときは同主教が言う。

司祭　願わくは我らをあわれみたまえ。師父よ、われらのために主なる神に祈らんことを

会衆　アーメン

ここで一同立つ。

奉献

司祭　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

ここで執事または司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

我ら供え物をささげまつるべし

次に左の聖語の一節または数節、あるいは奉献唱（一五二ページ以下）を用いる。

われ主の幕屋にて喜びのいけにえをささげ、歌をもて主をほめたたえん

詩二七篇六節

なんじらの光を人の前に輝かせ。これ人のなんじらが良き行ないを見て、天にいますなんじらの父をあがめんためなり

マタイ伝五章一六節

我に向かいて、「主よ主よ」と言う者、ことごとくは天国に入らず。ただ、天にいますわが父の御心を行のう者のみ、これに入るべし

マタイ伝七章二一節

「与うるは受くるよりも幸いなり」と主イエスの言いたまいし御言葉を記憶せよ

使徒行伝二〇章三五節

神は不義にいまさねば、なんじらの勤労と、さきに聖徒につかえ、今もなお、これに仕えて、御名のために現わしたる愛とを忘れたもうことなし

ヘブル書六章一〇節

信施はここで集め、会衆の代表者はパンとぶどう酒および信施を司祭に渡す。その間に聖歌を歌ってもよい。
司祭はこれをささげる時、次の祈りを用いる。信施を集めないときは、かっこ内の語を省く。

全能の父なる神よ、願わくは我らのささぐる「信施」供え物を受け、我らを祝し恵みたまわんことを。御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

あるいは次の聖語を一同で歌いまたは唱えてもよい。

よろずの物は主より出ず。我らはただ主の御手より受けて主にささげたるなり

歴代志略上二九章一四節

代禱

会衆はひざまずく。司祭は「我ら――のために祈るべし」と言って会衆の黙祷を求めてもよい。
次に司祭は言う。

我ら全公会のために祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、主は聖なる使徒をもって、もろもろの人のために願い祈り、感謝することを教えたまえり。願わくは我らの祈りを聞こし召し、全公会に、まことと親しみを慕う心を与え、御名を唱うる者、みな同じく御言葉の真理によりて一致親愛することを得させたまえ。天の父よ、すべての主教・司祭・執事（ことに我らの主教――）に恵みを与え、その行ないと教えとによりて、主の生けるまことの言

葉を示し、正しく聖奠を行なわしめたまえ。また主の民、ことにこの会衆に天の恵みをくだし、慎みて御言葉を聞き、生涯きよく正しく主に仕うることを得させたまえ。主よ、この定まりなき世にありて、なやめる者、悲しめる者、病める者、貧しき者、その他、災いに会える者を、御恵みをもって強め助けたまえ。また主を信じて世を去りし者を主の守りにゆだね、彼らのためにとこしえの光明と平安を祈り、ことに恵みのあかしとなり、世の光となりし聖徒たちのために御名をほめ奉る。父よ、これらの事を御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

聖別

司祭　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

司祭　なんじら心を挙げよ

会衆　我ら心を主に挙げん

司祭　主なる神に感謝し奉るべし

会衆　そは正当にしてなすべきことなり

司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正当にしてなすべき務めなり

特別序唱（一五二ページ以下）はここで用いる。

ゆえに我ら御使いと御使いのおさ及び天の全会衆とともに、主の尊き御名をあがめ、常に主をたたえて言わん

一同次の言葉を歌いまたは唱える。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の神。主の栄光天地に満てり。いと高きところにホサナ

つづいて、一同、次の言葉を歌いまたは唱えることができる。陪餐の直前に用いてもよい。

ほむべきかな、主の御名によりてきたる者。いと高きところにホサナ

次に司祭は言う。

感謝・賛美・栄光・知恵、ほまれ・ちから・いきおい、世々限りなく全能の父なる神にあらんことを。

主はみことばによりて万物を造り、また我ら人類を救わんがため、ひとりの御子をあたえ、まことの人性をとりてこの世に生まれしめたまえり。御子イエス＝キリストは万民の罪のため、ただひとたび十字架の上にその身をささげ、唯一の全き供え物としてあがないをなし、かつその尊きいけにえと死を記念する式を建てて、再びきたるまで常ににこれを行なえと福音のうちに命じたまえり

あわれみ深き父よ、我らの祈りを聞こし召し、このパンとぶどう酒を受け、みことばと聖霊によりて、これを祝し、聖となして、御子イエス＝キリストの尊きからだと血にあずかることを得させたまえ。

主イエスわたさるる夜、パンを取り（この時パンを手にとる）謝して後これを裂き、弟子に与えて言いたまいけるは、取りて食せよ。これはなんじらのためにだなり。なんじらわが記念としてこれを行なえ。またゆうげ終わりしのち、杯を取りて（この時杯を手にとる）謝し、彼らに与えて言いたまいけるは、なんじら皆この杯より飲め。これは新約のわが血にして、罪を赦さんとて、なんじら及び多くの人のために流すところのものなり。なんじら飲むごとに、わが記念としてこれを行なえ

ゆえに天の父よ、我らは主の愛子・救い主イエス＝キリストの御定めに従い、その尊き苦しみと死、及びよみがえりと昇天を記念し、かつ、これよりいずる大いなる恵みを感謝し、主の御前にこの聖なる命のパンと救いの杯をささげて、御子の命じたまい し記念の祭りを営み、再びきたりたもう日を望み奉る。願わくはこの感謝・賛美のいけにえを天の祭壇に至らせ、ここにてもいずこにても、これにあずかる者みなキリストと一つからだとなり、我らキリストにおり、キリスト我らにいますことを得させたまえ。またこれにより、主を信じて世を去りしものべらとの交わりを保ち、主の聖徒とともに天国の幸いにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る

願わくは我らのうちに働くちからに従いて、我らのすべて求むるところ、すべて思うところよりも、いたくまさる事をなしうる全能の父に、栄光世々限りなく、教会によりて、またキリスト＝イエスによりてあらんことを。アーメン

陪餐

司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

救い主キリストの教えたまいしごとく我ら祈るべし

一同主の祈りを歌いまたは唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

ここで司祭は聖別されたパンをさく。

次に左の唱和を用いてもよい。

司祭　主の平安つねになんじらとともにあらんことを

会衆　なんじの霊とともにあらんことを

つづいて次の頌を歌いまたは唱えてもよい。但し逝去者記念のときは「我らをあわれみたまえ」にかえて「彼らをいこわせたまえ」を、また「主の平安を与えたまえ」にかえて「とこしえのいこいを与えたまえ」を用いる。

世の罪を除きたもう神の小羊よ、我らをあわれみたまえ
世の罪を除きたもう神の小羊よ、我らをあわれみたまえ
世の罪を除きたもう神の小羊よ、主の平安を与えたまえ

一同次の祈りを唱える。

あわれみ深き主よ、我らはあえておのれの正しきによらず、ただ主の大いなるあわれみを頼みて、今みつくえのもとにきたれり。我らはみつくえより落つるくずを拾うにも足らぬ者なれども、主は変わることなく、常にあわれみを施したもう。恵み深き主よ、願わくは我ら、主の愛したもう御子イエス＝キリストの肉を食し、その血を飲み、罪ある我らのからだと魂は、キリストの尊きからだと血にて清められ、我らは常にキリストにおり、キリストは常に我らにいますことを得させたまえ　アーメン

司祭まず陪餐し、次に聖職、会衆の順で陪餐する。分餐のとき、おのおのに次のように言う。

なんじのために与えたまいし主イエス＝キリストのからだ
なんじのために流したまいし主イエス＝キリストの血

ここで聖歌、詩篇中の一篇または数節を陪餐唱として用いてもよい。
聖品が尽きたときは、再度の聖別（一六八ページ）の式文を用い、残ったときはその場で慎んで飲食してしまう。

感謝

司祭　我ら祈るべし

一同次の祈りを唱える。

とこしえにいます全能の神よ、この聖奠にあずかりし者を、御子・我らの主イエス＝キリストの、尊きからだと血の霊なる糧をもって、養いたもうことを感謝し奉る。主またこれによりて深き慈愛をあかしし、御子の尊き死と苦しみのいさおによりて、我らが主の民につらなり御子のからだの肢たることを示し、かつ御国の世継ぎたる望みをいよいよ堅くしたまえり。天にいます父よ、恵みをもって常に我らを助け、御子のいさおにより、身をも魂をも生ける供え物としてささげ、絶えずこの聖なる交わりのうちにありて、主の備えたまいし良きわざを行のうことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。願わくは栄光世々限りなく父と子と聖霊にあらんことを　アーメン

ここで次のように言って陪餐後祷（一五二ページ以下）を用いてもよい。

司祭　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司祭　我ら祈るべし

祝福

司祭（教区主教臨席のときは同主教）は次の語を用いて会衆を祝福する。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み、常になんじらとともにあらんことを。
アーメン

次に左の唱和を用いてもよい。

執事または司祭　いざ我らいでゆかん
会衆　主の御名によりて　アーメン

奉献唱・特別序唱・陪餐後祷

降誕日

当日から八日間用いる。つづいて顕現日の前日までと、被献日および処女聖マリア蒙告日に用いてもよい。

奉献唱

天は喜び地は楽しみ、海とそのなかに満つるものとは鳴りどよむべし。そは主きたりたまえばなり　詩九六篇一一、一三節

特別序唱

ことに、ひとりの御子イエス＝キリストを与え、聖霊の働きによりて、その母・おとめマリヤより生まれ、まことの人性をそなえしめたまえり。これ、その罪の汚れなきをもって、我らの罪をことごとく清めんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の神よ、願わくは世に生まれたまいし御子をまことに救い主と信ぜしめ、恵みによりて再び生まれ、神の子とせられしことを日々感謝し、ついにとこしえの命に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

復活日

当日から八日間用いる。つづいて昇天日の前日まで用いてもよい。

奉献唱

まさしくキリストは死人のうちより、よみがえり、眠りたる者の初穂となりたまえりハレルヤ　コリント前書一五章二〇節

特別序唱

ことに御子・われらの主イエス＝キリストの尊きよみがえりのゆえによりて、主をほめ奉る。御子はまことの過越の小羊にして、われらのために供えられ、世の罪をのぞき、その死をもって死をほろぼし、そのよみがえりをもって限りなき命をあたえたまえり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の主なる神よ、御子・われらの主イエス＝キリストは死に勝ちてよみがえりたまえり。願わくは主とともによみがえらせられし我らも、ひたすら天にあるものを求むることを得させたまえ。栄光のみくらに座したもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

昇天日

当日から八日間用いる。つづいて聖霊降臨日の備え日（前日）まで用いてもよい。

奉献唱

かれ高き所に昇りしとき、多くのとりこを率い、人々に賜物をたまえり　ハレルヤ

エペソ書四章八節

特別序唱

ことに主の愛したもう御子・我らの主イエス＝キリストの昇天のゆえによりて感謝し奉る。御子はいと尊きよみがえりの後、明らかに使徒たちに現われ、我らのために住まいを備えんとて、その目の前にて天に昇りたまえり。こは我らを主のいます所に昇らせ、栄光のうちにてともに王たらしめんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

神よ、願わくは常に公会をみそなわし、御子の仰せに従がいて御言葉を宣べ伝え、御国をひろむることを得させたまえ。栄光をもって天に昇りたまいし御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖霊降臨日

当日から七日間用いる。

奉献唱

神よ、御力を奮い起こしたまえ、我らのためにみわざを行ないたまいし神よ、御力をしめしたまえ。王たちはなんじに礼物をささぐ、これエルサレムなるなんじの宮のためなり

詩六八篇二八、二九節

特別序唱

ことに我らの主イエス＝キリストは天にのぼり、父の右に座したまいしのち、公会に聖霊をくだし、その大いなる力によりて万国にとこしえの福音を宣べ伝えしめたまえり。我らは聖霊によりて、やみと惑いのうちより明らかなる光に導かれ、父とその御

子・イエス＝キリストをまことに知ることを得たり。（ゆえに

陪餐後祷

神よ、願わくは聖霊を我らに満たし、御力によりて勇ましく御子をあかしし、その命じたまいしことを守りて、すべての国びとを弟子となすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三位一体主日

他に定めのない主日にも用いてよい。

奉献唱

主よ、たれかなんじを恐れざる。たれか御名を尊ばざる。なんじのみ聖なり

黙示録一五章四節

特別序唱

主は御子と聖霊とともに唯一の主なり。ただ一位にあらずして一体のうちに三位ましませり。我らは父と子と聖霊との栄光ともに等しくして、差別なきことを信じ奉る。

（ゆえに

陪餐後祷

至聖なる三位一体の神よ、願わくは主の恵みによりてまことの信仰を堅く保ち、ついに天にて主の栄光を仰ぎ見ることを得させたまえ。主は一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次の時には左の奉献唱・特別序唱・陪餐後祷を用いてよい。ただし祝日には当日のものを用いる。

降臨節

奉献唱

シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、なんじの王、なんじにきたる

ゼカリヤ書九章九節

特別序唱

ことに、ひとりの御子の降臨によりて、人類に救いを与えたまいしことを感謝し奉る。

御子には大いなる栄光をもって再びきたり、義によりて世をさばきたもう時、すべてのものを新たになしたもうなり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の神よ、御子イエス＝キリストは迷える者を尋ね、これを救わんとてこの世にくだりたまえり。願わくは我らのうちに始めたまいし良きわざを、主の再びきたりたもう日まで成しとげたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

顕現日

当日から八日間用いる。変容貌日にも用いてよい。

奉献唱

全地は主を拝みてうたい、御名をほめうたわん。神をおそるる人よ、皆きたりて聞け。われ神のわがためになしたまえることを告げん

詩六六篇四、一六節

特別序唱

ことに、ひとりの御子イエス＝キリストは、我らと同じ肉体をとりて、栄光を現わしたまえり。これすべての人をやみと惑いのうちより導きいだし、主の大いなる御光に浴せしめんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の神よ、御子・我らの救い主イエス＝キリストによりて、大いなる栄光を現わしたまえり。願わくは御恵みを我らにそそぎ、言葉と行ないをもって主の栄光をあらわし、多くの人をみもとに導くことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

大斎始日より大斎第五主日前日まで

奉献唱

なんじら衣を裂かずして心を裂き、なんじらの神・主に帰るべし。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ大いなり

ヨエル書二章一三節

特別序唱

ことに主イエス＝キリストは、四十日四十夜断食してのち飢え、悪魔にこころみられ

てこれに打ち勝ちたまえり。これわれらの試みらるるとき、主のいさおにより、ばからずして、恵みの御座にきたり、あわれみを受け、恵みと力とを得んがためなり。

（ゆえに

陪餐後祷

悔い改むる者を赦したもう、いつくしみ深き神よ、願わくは我らの祈りを聞こし召し、大いなるあわれみをもって、罪のなわめより解きはなち、御名の栄光を現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

大斎第五主日より復活前水曜日まで

奉献唱

そしりわが心を砕きたれば、我いたく気落ちせり。我あわれみを寄する者を待ちたれど、ひとりだになく、慰むるものを待ちたれどひとりをも見ざりき　詩六九篇二〇節

特別序唱

ことに我らの主イエス＝キリストは人となり、おのれを低くして死に至るまで、十字架の死に至るまで従いたまえり。これ地より挙げられ、すべての人をおのがもとに引き寄せんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

あわれみ深き父なる神よ、主は人類を救わんとて御子イエス＝キリストをこの世につかわしたまえり。願わくは御子の十字架の苦しみのいさおによりて我らを助け、我らを救いたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

復活前木曜日

聖餐感謝日にも用いてよい。

奉献唱

なんじらこのパンを食し、この杯を飲むごとに、主の死を示して、そのきたりたもう時にまで及ぶなり。されば、よろしきにかなわずして主のパンを食し、主の杯を飲む者は主のからだと血を犯すなり

コリント前書一一章二六、二七節

特別序唱

ことに我らの主イエス＝キリストは、世にあるおのれの者を愛し、きわみまで愛したまえり。主はわたさるる夜、弟子たちとともに食卓につき、この聖奠を定めたまえり。これ我らをして主の苦しみよりいずる恵みを受け、そのよみがえりによりて生かされ、主の神性にあずからしめんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

神よ、しもべらに御子の尊きからだと血にあずかることを得させたまえり。願わくは我らをきよめて、いよいよ御子に似ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒または福音記者の日

奉献唱

なんじの子らは先祖たちに代わりて立ち、なんじは彼らを全地に君となさん。我なんじの名をよろず代に知らしめん。ゆえにもろもろの民は世々限りなくなんじに感謝すべし

詩四五篇一六、一七節

特別序唱

ことに御子・我らの主イエス＝キリストにより聖――を召して使徒（福音記者）となしたまいしことを感謝し奉る。これ我らがその伝えし教えを守り、すべての人に恐れなく福音を宣べ伝えんがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の神よ、主は御子によりて（福音記者）使徒聖――を召し、もろもろの恵みをあたえ、地のはてまで福音を宣べ伝えしめたまえり。願わくは我らに恵みをあたえ、彼らの伝えし教えを守り、その模範にならいて、御国をひろむることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖徒日

奉献唱

主よ、すべてのみわざはなんじに感謝し、なんじの聖徒はなんじをほめたたえん

詩一四五篇一〇節

特別序唱

主は聖徒により我らにきよき生涯の模範を与え、我らの召されし望みを堅くしたまえり。これ我らも多くのあかしびとに雲のごとく囲まれ、忍耐をもって信仰の馳せ場を走り、ともに朽ちぬ栄光の冠を得んがためなり。（ゆえに

陪餐後祷

神よ、あがなわれし者は地のはてより御前につどい、御使いとともに主をあがむるなり。願わくは我らに御力を与え、聖徒の模範にならい、勇ましく世と肉と悪魔とに向かいて戦い、御名の栄光をあらわし、ついに御国に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

礼拝堂聖別または聖堂記念日

奉献唱

この宮の後の栄えは、さきの栄えよりも大いならんと、万軍の主言いたもう

ハガイ書二章九節

特別序唱

主のみいつは限りなく、天も地も主を入れ奉るに足らず。されど主は礼拝のために堂をきよめ、信ずる者に恵みを与うるを良しとしたまえり。（ゆえに

陪餐後祷

全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにささげられしこの堂にて、主に祈る人の願いを聞こし召し、豊かなる恵みを与えたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

逝去者記念

奉献唱

今よりのち主にありて死ぬる死人は幸いなり。御霊も言いたもう、彼らはその働きをやめて休まん

黙示録一四章一三節

特別序唱

ことに御子イエス＝キリストによりて、我らによみがえりの望みを与えたまいしこと

を感謝し奉る。我らは死すべき定めを嘆くとも、とこしえの命の約束によりて慰めを受くるなり。そは信ずる者の命は奪わるるにあらずして化するなり。この世の幕屋は朽つるとも、主はとこしえの住みかを天に備えたもうなり。（ゆえに

陪餐後祷

あわれみ深き全能の神よ、願わくは世を去りししもべ（――）の魂をみそなわし、とこしえの光明と平安とを与え、主の全き御旨をなしとげたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

その他の時

奉献唱

われ感謝のいけにえをなんじにささげ、主の御名を呼びまつらん。我わが誓いを主に果たさん、主のすべての民の前にてはたさん　詩一一六篇一七、一八節

陪餐後祷

神よ、しもべらに御子の尊きからだと血にあずかることを得させたまえ。願わくは我らを清めて、いよいよ御子の神性にあずかることを得させたまえ。我らの救いのために人性をとりたまいし御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

再度の聖別

司祭は聖品が分餐の途中で尽きないよう特に注意しなければならない。万一尽きたときは次の祈りを用いて両種を聖別する。

あわれみ深き父よ、我らの祈りを聞こし召し、このパンとぶどう酒を受け、みことばと聖霊によりて、これを祝し、聖となして、御子イエス＝キリストの尊きからだと血にあずかることを得させたまえ

主イエスわたさるる夜、パンを取り（この時パンを手にとる）謝して後これを裂き、弟子に与えて言いたまいけるは、取りて食せよ。これはなんじらのために与うるわがからだなり。なんじらわが記念としてこれを行なえ。またゆうげ終わりしのち、杯を取りて（この時杯を手にとる）謝し、彼らに与えて言いたまいけるは、なんじら皆この杯より飲め。これは新約のわが血にして、罪を赦さんとて、なんじら及び多くの人のために流すところのものなり。なんじら飲むごとに、わが記念としてこれを行なえ。

アーメン

特祷・使徒書・福音書

特祷は他に定めがあるときのほかは当日の前夕から用いる。
主日の特祷・使徒書・福音書は他の指定がない限り、その週の間、毎日用いる。
特祷が「主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る」、または同様の語で終わる時は、これにかえて、「父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る」と言ってもよい。

降臨節第一主日

特祷は降誕日の備え日（前日）の朝まで、毎日その日の特祷につづいて用いる。

特祷

全能の神よ、御子イエス＝キリストは我らを顧み、卑しきさまにて、このはかなき世にくだりたまえり。願わくは今くらきわざを脱ぎ、光のよろいを着る恵みをあたえ、終わりの日に生ける人と死ねる人をさばかんとて、大いなる栄光をもって再びくだりたもうとき、とこしえの命に入ることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治

めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一三章八―一四

なんじら互いに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。それ、「姦淫するなかれ、殺すなかれ、盗むなかれ、むさぼるなかれ」と言えるこのほかなお戒めありとも、「おのれのごとく隣を愛すべし」という言葉のうちにみなこもるなり。愛は隣をそこなわず、このゆえに愛は律法を全うするなり。なんじら時を知るゆえに、いよいよしかなすべし。今は眠りよりさむべき時なり。はじめて信ぜし時よりも今は我らの救い近ければなり。夜ふけて日近づきぬ、されば我ら暗きのわざをすてて光のよろいを着るべし。昼のごとく正しく歩みて宴楽・酔酒に、淫楽・好色に、争い・ねたみに歩むべきにあらず。ただなんじら主イエス＝キリストを着よ、肉の欲のために備えすな。

福音書　マタ　二一章一―一三

彼らエルサレムに近づき、オリブ山のほとりなるベテパゲに至りし時、イエスふたりの弟子をつかわさんとして言いたもう、「向かいの村に行け、やがてつなぎたるろばのその子とともにあるを見ん、解きて我に引ききたれ。たれかもし、なんじらに何とか言わば、『主の用なり』と言え、さらば直ちにこれをつかわさん」。この事の起こりしは預言者によりて言われたる言葉の成就せんためなり。いわく、「シオンの娘に告げよ、見よ、なんじの王、なんじにきたりたもう。柔和にしてろばに乗り、くびきを負うろばの子に乗りて」。弟子たち行きて、イエスの命じたまえるごとくして、ろばとその子とを引ききたり、おのが衣をその上に置きたれば、イエスこれに乗りたもう。群衆の多くはその衣を道に敷き、ある者は木の枝を切りて道に敷く。かつ前に行きあとに従う群衆よばわりて言う、「ダビデの子にホサナ、ほむべきかな、主の御名によりてきたる者。いと高きところにてホサナ」。ついにエルサレムに入りたまえば、都こぞりて騒ぎ立ちて言う、「これはたれなるぞ」。群衆いう、「これガリラヤのナザレよりいでたる預言者イエスなり」。イエス宮に入り、その内なるすべての売り買いする者を追いいだし、両替する者の台・はとを売る者の腰掛を倒して言いたもう、「『わが家は祈りの家ととなえらるべし』としるされたるに、なんじらはこれを強盗の巣となす」。

降臨節第二主日

特　祷

我らを教うるために聖書をしるさせたまいし主よ、願わくは、これを聞き、これを読み、ねんごろに学び、かつ味わいて魂の養いとなさしめたまえ。また願わくは御言葉により て強められ、耐え忍ぶことを習い、御子により て授けたまえる限りなき命の望みをいだき、常にこれを保つことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一五章四―一三

はやくよりしるされたるところは、みな、我らの教えのためにしるしたものにして聖書の忍耐と慰めとにより て望みを保たせんとてなり。願わくは忍耐と慰めとの神、なんじらをしてキリスト＝イエスにならい、互いに思いを同じゅうせしめたまわんことを。これなんじらが心を一つにし口を一つにして我らの主イエス＝キリストの父なる神をあがめんためなり。このゆえにキリストなんじらをいれたまいしごとく、なんじらも互いに相いれて神の栄光を現わすべし。われ言う、キリストは神の真理のために割礼の役者となりたまえり。これ先祖たちの被りし約束を堅うしたまわんため、また異邦人もあわれみによりて神をあがめんためなり。しるして、「このゆえに、われ異邦人のうちにてなんじをほめたたえ、またなんじの名を歌わん」とあるがごとし。またいわく、「異邦人よ、主の民とともに喜べ」。またいわく、「もろもろの国びとよ、主をほめまつれ、もろもろの民よ、主をたたえまつれ」。またイザヤ言う、「エッサイのひこばえ生じ、異邦人を治むるもの起こらん。異邦人は彼に望みをおかん」。願わくは望みの神、信仰よりいずるすべての喜びと平安とをなんじらに満たしめ、聖霊の力により て望みを豊かならしめたまわんことを。

福音書　ルカ　二一章二五―三三

「また日、月、星にしるしあらん。地にては国々の民なやみ、海と波との鳴りとどろくによりてうろたえ、人々おそれ、かつ世界にきたらんとすることを思いて肝を失わん。これ天の万象、ふるい動けばなり。そのとき人々、人の子の力と大いなる栄光とをもて、雲に乗りきたるを見ん。これらのことの起こり初めなば、仰ぎてこうべをあげ

よ。なんじらの贖い、近づけるなり」。　また譬を言いたもう、「いちじくの木、また
すべての木を見よ、すでに芽ざせば、なんじらこれを見てみずから夏の近きを知る。
かくのごとくこれらのことの起こるを見ば、神の国の近きを知れ。我まことになんじ
らに告ぐ、これらの事ことごとく成るまで、今の代は過ぎゆくことなし。天地は過ぎ
ゆかん、されどわが言葉は過ぎゆくことなし」。

降臨節第三主日

特祷

主イエス＝キリストよ、始めにくだりたまいし時、主にさきだちて道を備うる使いを
つかわしたまえり。願わくは今、主の奥義をつかさどる仕えびとをめぐみ、もとれる
者の心を正しき人の悟りに帰らす力を与えて主の道を備うることを得させ、再びくだ
りて世をさばきたもうとき、我らを御心にかのう民となしたまえ。主は父と聖霊とと
もに一体の神にましまして世々統べ治めたもうなり。アーメン

使徒書　コリ前　四章一―五

人、よろしく我らをキリストの役者また神の奥義をつかさどる家づかさのごとく思う
べし。さて家づかさに求むべきは忠実ならんことなり。我はなんじらにさばかれ、あ
るいは人のさばきによりてさばかるることをいと小さき事とし、またみずからもおの
れをさばかず。我みずから責むべきところあるを覚えねど、これによりて義とせらる
る事なければなり。我をさばきたもう者は主なり。されば主のきたりたもうまでは時
に先だちてさばきすな。主は暗きにある隠れたる事を明らかにし、心のはかりごとを
現わしたまわん。そのときおのおの神よりその誉れを得べし。

福音書　マタ　一一章二―一〇

ヨハネ獄中にてキリストのみわざを聞き、弟子たちをつかわして、イエスに言わしむ、
「きたるべき者はなんじなるか、あるいはほかに待つべきか」。　答えて言いたもう、
「行きて、なんじらが見聞きするところをヨハネに告げよ。目しいは見、足なえは歩
み、らい病人は清められ、耳しいは聞き、死人はよみがえらせられ、貧しき者は福音
を聞かせらる。おおよそ我につまずかぬ者はさいわいなり」。　彼らの帰りたるおり、
ヨハネの事を群衆に言いいでたもう、「なんじら何をながめんとて野にいでし、風に

そよぐ葦なるか。さらば何を見んとていでし、柔らかき衣を着たる者は王の家にあり。さらば何のためにいでし、預言者を見んとてか。しかり、なんじらに告ぐ、預言者よりもまさる者なり。『見よ、わが使いをなんじの前につかわす。彼はなんじの前に、なんじの道を備えん』としるされたるはこの人なり」。

降臨節第四主日

特祷は降誕日の備え日（前日）の朝まで用いる。

特祷

主よ、御力をあらわして我らのうちにきたり、大いなるいきおいをもって助けたまえ。我らは罪に妨げられて、おのが前に置かれたる馳せ場を走るに、いたく苦しむゆえ、豊かなる恵みをもってすみやかに我らを救いたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

使徒書　ピリ　四章四―七

なんじら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。すべての人になんじらの寛容を知らしめよ、主は近し。何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝してなんじらの求めを神に告げよ。さらばすべて人の思いにすぐる神の平安はなんじらの心と思いとをキリスト＝イエスによりて守らん。

福音書　ヨハ　一章一九―二八

さてユダヤびと、エルサレムより祭司とレビびとをヨハネのもとにつかわして、「なんじはたれなるか」と問わせし時、ヨハネのあかしはかくのごとし。すなわち言いあらわしていなまず、「我はキリストにあらず」と言いあらわせり。また問う、「さらば何、エリヤなるか」。答う、「しからず」。問う、「かの預言者なるか」。答う、「いな」。ここに彼ら言う、「なんじはたれなるか、我らをつかわしし人々に答えうるようにせよ、なんじおのれにつきて何と言うか」。答えて言う、「我は預言者イザヤの言えるがごとく、『主の道を直くせよと、荒れ野に呼ばわる者の声』なり」。かのつかわされたる者は、パリサイびとなりき。また問いて言う、「なんじもしキリストにあらず、またエリヤにも、かの預言者にもあらずば、なにゆえバプテスマを施すか」。

ヨハネ答えて言う、「我は水にてバプテスマを施す。なんじらのうちになんじらの知らぬ者ひとり立てり。すなわちわが後にきたる者なり。我はそのくつのひもを解くにも足らず」。これらの事は、ヨハネのバプテスマを施しいたりしヨルダンの向かいなるベタニヤにてありしなり。

降誕日　十二月二十五日

特祷は十二月三十一日の夕まで毎日その日の特祷につづいて用いる。

特祷

全能の神よ、ひとりの御子を我らに与え、これをして人性をとり、この時、清きおとめより生まれしめたまえり。願わくは我ら恵みによりて再び生まれ、神の子とせられし者、日々聖霊によりて新たになることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にまします主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヘブ一章一―一二

神むかしは預言者たちにより、多くに分かち、多くの方法をもて先祖たちに語りたまいしが、この末の世には御子によりて、我らに語りたまえり。神はかつて御子を立ててよろずの物の世継ぎとなし、また御子によりてもろもろの世界を造りたまえり。御子は神の栄光のかがやき、神の本質の形にして、おのが力の言葉をもてよろずの物を保ちたもう、また罪の清めをなして、高き所にあるみいつの右に座したまえり。その受けたまいし名の御使いの名にまされるごとく、御使いよりはさらにまさる者となりたまえり。神はいずれの御使いに、かつてかくは言いたまいしぞ、「なんじはわが子なり、われきょうなんじを生めり」と。また「われ彼の父となり、彼わが子とならん」と。またういごをふたたび世に入れたもう時、「神のすべての使いはこれを拝すべし」と言いたもう。また御使いたちにつきては「神は、その使いたちを風となし、その仕うる者を炎となす」と言いたもう。されど御子につきては、「神よ、なんじの御位は世々限りなく、なんじの国のつえは正しきつえなり。なんじは義を愛し、不法をにくむ。このゆえに神なんじの神は、喜びの油をなんじの友にまさりてなんじにそそぎたまえり」と。また、「主よ、なんじ初めに地の基をおきたまえり、天も御手のわざなり。これらは滅びん、されどなんじは常に長らえたまわん、これらはみな衣のごとく

古びん。しかしてなんじこれらを上着のごとくたたみたまわん、これらは衣のごとく変わらん。されどなんじは変わりたもうことなく、なんじのよわいは終わらざるなり」と言いたもう。

福音書　ヨハ　一章一―一四

初めにことばあり、ことばは神とともにあり、ことばは神なりき。このことばは初めに神とともにあり、よろずの物これによりて成り、成りたる物に一つとしてこれによらで成りたるはなし。これに命あり、この命は人の光なりき。光は暗きに照る、しかして暗きはこれを悟らざりき。神よりつかわされたる人いでたり、その名をヨハネという。この人はあかしのためにきたれり、光につきてあかしをなし、またすべての人の彼によりて信ぜんためなり。彼は光にあらず、光につきてあかしせんためにきたるなり。もろもろの人を照らすまことの光ありて、世にきたれり。彼は世にあり、世は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。彼はおのれの国にきたりしに、おのれの民はこれを受けざりき。されどこれを受けし者、すなわちその名を信ぜし者には、神の子となる権を与えたまえり。かかる人は血筋によらず、肉の願いによらず、人の願いによらず、ただ神によりて生まれしなり。ことばは肉体となりて我らのうちに宿りたまえり、我らその栄光を見たり、げに父のひとり子の栄光にして恵みと真理とにて満てり。

聖ステパノ日

特祷

神よ、願わくはこの世において主の道をあかしし、悩みに会う時は、一心に天を仰ぎ、信仰をもって後にあらわるべき栄光を望ましめたまえ。また聖霊に満たされて、はじめの殉教者聖ステパノが、おのれを殺す者のために祈りし模範に従い、我らを悩ます者を愛し、これを祝することを得させたまえ。我らを悩しめらるる者を救いたもう我らの唯一の仲立・尊き主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使　七章五五―六〇

ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたも

十二月二十六日

うを見て言う、「見よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ちたもうを見る」。ここに彼ら大声に叫びつつ耳をおおい心を一つにして駆け寄り、ステパノを町より追いいだし、石にて打てり。証人らその衣をサウロという若者の足もとに置けり。かくて彼らがステパノを石にて打てるとき、ステパノ呼びて言う、「主イエスよ、わが霊を受けたまえ」。またひざまずきて大声に、「主よ、この罪を彼らに負わせたもうな」と呼ばわる。かく言いて眠りにつけり。

福音書 マタ 二三章三四―三九

見よ、我なんじらに預言者・知者・学者らをつかわさんに、そのうちのある者を殺し、十字架につけ、ある者をなんじらの会堂にてむちうち、町より町に追い苦しめん。これによりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にてなんじらが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正しき血は、みななんじらに報いきたらん。まことになんじらに告ぐ、これらのことはみな今の代に報いきたるべし。あエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、つかわされたる人々を石にて打つ者よ、めんどりのそのひなを翼の下に集むるごとく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾たびぞや、されどなんじらは好まざりき。見よ、なんじらの家は捨てられてなんじらに残らん。我なんじらに告ぐ、「ほむべきかな、主の名によりてきたる者」と、なんじらの言うときの至るまでは今より我を見ざるべし。

福音記者 使徒聖ヨハネ日

十二月二十七日

特祷

あわれみ深き主よ、願わくは御光を公会の上に放ち、福音記者 使徒聖ヨハネの教えによりて、真理の光のうちを歩み、ついに限りなき命の光に至らせたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヨハ壱 一章一―一〇

初めよりありしところのもの、我らが聞きしところ、目にて見しところ、つらつら見て手ざわりしところのもの、すなわち命の言葉につきて、――この命すでに現われ、我らこれを見てあかしをなし、そのかつて父とともにいまして今我らに現われたまえる、とこしえの命をなんじらに告ぐ――我らの見しところ、聞きしところをなんじら

に告ぐ、これなんじらをも我らの交わりにあずからしめんためなり。我らは父およびその子イエス＝キリストの交わりにあずかるなり。これらのことを書き送るは、我らの喜びの満ちんためなり。我らが彼より聞きて、またなんじらに告ぐるおとずれはこれなり、すなわち神は光にして少しの暗きところなし。もし神と交わりありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理を行なわざるなり。もし神の光のうちにいますごとく光のうちを歩まば、我ら互いに交わりを得、またその子イエスの血、すべての罪より我らを清む。もし罪なしと言わば、これみずから欺けるにて真理我らのうちになし。もしおのれの罪を言い表わさば、神はまことにして正しければ我らの罪を赦し、すべての不義より我らを清めたまわん。もし罪を犯したる事なしと言わば、これ神を偽り者とするなり、神のことば我らのうちになし。

福音書 ヨハ 二一章一九―二五

イエス、ペテロに言いたもう、「われに従え」。ペテロふり返りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これはさきに夕げのとき御胸によりかかりて、「主よ、なんじを売る者はたれか」と問いし弟子なり。ペテロこの人を見てイエスに言う、「主よ、この人はいかに」。イエス言いたもう、「よし我、彼が我のきたるまでとどまるを欲すとも、なんじに何のかかわりあらんや、なんじは我に従え」。ここに兄弟たちのうちに、この弟子死なずという話つたわりたり。されどイエスは死なずと言いたまいしにあらず、「よしや我、彼が我のきたるまでとどまるを欲すとも、なんじに何のかかわりあらんや」と言いたまいしなり。これらの事につきてあかしをなし、またこれをしるしし者は、この弟子なり、我らはそのあかしのまことなるを知る。イエスの行ないたまいし事は、このほかなお多し、もし一つ一つしるさば、われ思うに世界もそのしるすところの書を載するに耐えざらん。

聖嬰児日

特祷

全能の神よ、むかし幼な子は口の言葉によらず、その死をもって主の栄光をあらわせり。願わくは我らの心の罪悪を殺し、御恵みをもって我らを強め、清き生涯を送らせ、死に至るまで信仰を保ちて、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエ

十二月二十八日

ス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 黙 一四章一―五

われ見しに、見よ、小羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人、これとともにおり、その額には小羊の名および小羊の父の名、しるしあり。われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大いなるいかずちの声のごとし。わが聞きしこの声は琴ひきの立琴をひく音のごとし。彼ら新しき歌を御位の前および四つの生き物と長老たちとの前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人のほかはたれも学びうる者なかりき。彼らは女に汚されぬ者なり、清き者なり、いずこにもあれ小羊の行きたもうところに従う。彼らは人のうちより贖われて神と小羊とのために初穂となれり。その口は偽りなし、彼らは傷なき者なり。

福音書 マタ 二章一三―一八

見よ、主の使い、夢にてヨセフに現われて言う、「起きて、幼な子とその母とを携え、エジプトにのがれ、わが告ぐるまでかしこにとどまれ。ヘロデ幼な子を求めて滅ぼさんとするなり」。ヨセフ起きて、夜の間に幼な子とその母とを携えて、エジプトに去りゆき、ヘロデの死ぬるまでかしこにとどまりぬ。これ主が預言者によりて、「我エジプトよりわが子を呼びいだせり」と言いたまいし言葉の成就せんためなり。ここにヘロデ、博士たちにすかされたりと悟りて、はなはだしく憤り、人をつかわし、博士たちによりてつまびらかにせし時をはかり、ベツレヘムおよびすべてそのほとりの地方なる二才以下の男の子をことごとく殺せり。ここに預言者エレミヤによりて言われたる言葉は成就したり。いわく、「声ラマにありて聞こゆ、嘆きなり、いとどしき悲しみなり。ラケルおのが子らを嘆き、子らのなきゆえに慰められるるをいとう」。

降誕後第一主日

特祷

全能の神よ、ひとりの御子を我らに与え、これをして人性をとり、この時、清きおとめより生まれしめたまえり。願わくは我ら恵みによりて再び生まれ、神の子とせられし者、日々聖霊によりて新たになることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましますイエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ガラ　四章一―七

われ言う、世継ぎは全業の主なれども、おとなとならぬ間はしもべと異なることなく、父の定めし時の至るまでは後見人と家令との下にあり。かくのごとく我らもおとなとならぬほどは、世の小学の下にありてしもべたりしなり。されど時満つるにおよびては、神その御子をつかわし、これを女より生まれしめ、律法の下に生まれしめたまえり。これ律法の下にある者をあがない、我らをして子たることを得しめんためなり。かくなんじら神の子たるゆえに、神は御子の御霊を我らの心につかわして「アバ、父」と呼ばしめたもう。されば、もはやなんじはしもべにあらず、子たるなり、すでに子たらばまた神によりて世継ぎたるなり。

福音書　マタ　一章一八―二五

イエス＝キリストの誕生は、左のごとし。その母マリヤ、ヨセフといいなずけしたるのみにて、いまだともにならざりしに、聖霊によりて身ごもり、その身ごもりたること現われたり。夫ヨセフは正しき人にしてこれを公けにするを好まず、ひそかに離縁せんと思う。かくて、これらの事を思いめぐらしおるとき、見よ、主の使い、夢に現われて言う、「ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを入るる事をおそるるな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。彼、子を生まん、なんじその名をイエスと名づくべし。おのが民をその罪より救いたもうゆえなり」。すべてこの事の起こりしは、預言者によりて主の言いたまいし言葉の成就せんためなり。いわく、「見よ、おとめ身ごもりて子を生まん。その名はインマヌエルととなえられん」。これをとけば、「神われらとともにいます」というこころなり。ヨセフ眠りより起き、主の使いの命ぜしごとくして妻を入れたり。されど子の生まるまでは、相知る事なかりき。かくてその子をイエスと名づけたり。

主イエス命名日（受割礼日）

特祷・使徒書・福音書は顕現日の前日の朝まで毎日用いる。

一月一日

特祷

全能の神よ、主は御子に割礼を受けしめ、これにもろもろの名にまさる名を賜いてイエスととなえしめたまえり。願わくはこの御名によりて、御民に力とやすきを与え、

その尊き御名を万国に宣べ伝うることを得させたまえ。御子イエス＝キリストにより てこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使　四章八―一二

この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う、「民のつかさたちおよび長老たちよ、我らが病める者になしし良きわざにつき、そのいかにして救われしかを、きょうもしたださるるならば、なんじら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の健やかになりてなんじらの前に立つは、ナザレのイエス＝キリスト、すなわちなんじらが十字架につけ、神が死人のうちよりよみがえらせたまいし者の名によることを。このイエスはなんじら家造りに軽しめられし石にして、すみの親石となりたるなり。ほかの者によりては救いを得ることなし、天の下には我らのたよりて救わるべきほかの名を、人にたまいし事なければなり」。

福音書　ルカ　二章一五―二一

御使いたち、去りて天に行きしとき、羊飼い互いに語る、「いざ、ベツレヘムにいたり、主の示したまいし起これる事を見ん」。すなわち急ぎ行きて、マリヤとヨセフと、馬ぶねに伏したるみどり子とに尋ね会う。すでに見て、この子につき御使いの語りしことを告げたれば、聞く者はみな羊飼いの語りしことを怪しみたり。しかしてマリヤはすべてこれらのことを心にとめて思いまわせり。羊飼いは御使いの語りしごとくすべての事を見聞きせしにより神をあがめ、かつ賛美しつつ帰れり。八日みちて幼な子に割礼を施すべき日となりたれば、いまだ胎内に宿らぬさきに御使いの名づけしごとく、その名をイエスと名づけたり。

顕現日

一月六日

特祷

星の導きをもって、ひとりの御子を異邦人にあらわしたまいし神よ、いま信仰により て主を知る者を導き、後の世に主の栄光を見て楽しませたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　三章一―一二

このゆえになんじら異邦人のためにキリスト＝イエスの囚人となれる我パウロ――な

んじらのために我にたまいたる神の恵みの経綸はなんじら聞きしならん、すなわち我まえに簡単に書きおくりしごとく、この奥義は默示にて我に示されたり。なんじらこれを読みてキリストの奥義にかかわるわが悟りを知ることをうべし。この奥義は今御霊によりて聖使徒と聖預言者とに現わされしごとくに、前代には人の子らに示されざりき。すなわち異邦人が福音によりキリスト＝イエスにありてともに世継ぎとなり、ともに一体となり、ともに約束にあずかる者となる事なり。我はその福音の役者とせらる。これ神の力の働きに従いて我にたもう恵みの賜物によるなり。我はすべての聖徒のうちのいと小さき者よりも小さき者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、また万物を造りたまいし神のうちに世々隠れたる奥義の経綸のいかなるものかを現わす恵みを賜わりたり。いま教会によりて神の豊かなる知恵を天のところにある政と権威とに知らしめんためなり。これはとこしえより我らの主キリスト＝イエスのうちに、神の定めたまいし御旨によるなり。我らは彼にありて、彼を信ずる信仰により、臆せず疑わずして神に近づくことをうるなり。

福音書 マタ 二章一―一二

イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生まれたまいしが、見よ、東の博士たちエルサレムにきたりて言う、「ユダヤびとの王として生まれたまえる者は、いずこにいますか。我ら東にてその星を見たれば、拝せんためにきたれり」。ヘロデ王これを聞きて悩みまどう、エルサレムもみなしかり。王、民の祭司長・学者らをみな集めて、キリストのいずこに生まるべきを問いただす。彼ら言う、「ユダヤのベツレヘムなり。それは預言者によりて、『ユダの地ベツレヘムよ、なんじはユダの君たちのうちにていと小さき者にあらず、なんじのうちよりひとりの君いでて、わが民イスラエルを牧せん』としるされたるなり」。ここにヘロデひそかに博士たちを招きて、星の現われし時をつまびらかにし、彼らをベツレヘムにつかわさんとして言う、「行きて幼な子のことをこまかにたずね、これに会わば我に告げよ。我も行きて拝せん」。彼ら王の言葉を聞きて行きしに、見よ、前に東にて見し星、さきだちゆきて、幼な子のいますところの上にとどまる。彼ら星を見て、喜びにあふれつつ家に入りて、幼な子のその母マリヤとともにいますを見、ひれ伏して拝し、かつ宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬など礼物をささげたり。かくて夢にてヘロデのもとに帰るなとの御告げを

こうむり、ほかの道よりおのが国に去り行きぬ。

顕現後第一主日

特祷

主よ、あわれみを施して、主に呼ばわる民の祈りを受けたまわんことをこいねがい奉る。願わくは知恵と力とを与えて、そのなすべき事を悟り、忠実にこれを行のうことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一二章一―五

されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりてなんじらに勧む、おのが身を神のよろこびたもう清き生ける供え物としてささげよ、これ霊の祭りなり。またこの世になろうな。神の御心の善にして喜ぶべく、かつ全きことをわきまえ知らんために心を変えて新たにせよ。われ与えられし恵みによりて、なんじらおのおのに告ぐ、思うべきところを越えてみずからを高しとすな。神のおのおのに分かちたまいし信仰の量りに従い、つつしみて思うべし。人は一つからだに多くの肢あれども、すべての肢その働きを同じゅうせぬごとく、我らも多くあれど、キリストにありて一つからだにして、おのおの互いに肢たるなり。

福音書　ルカ　二章四一―五二

かくてその両親、過越の祭りには年ごとにエルサレムに行きぬ。イエスの十二才のとき、祭りのならわしに従いて上り行き、祭りの日終わりて帰る時、その子イエスはエルサレムにとどまりたもう。両親はこれを知らずして、道連れのうちにおるならんと思い、一日路行きて、親族・知る辺のうちを尋ぬれど、会わぬによりてまた尋ねつつエルサレムに帰り、三日ののち、宮にて教師のなかに座し、かつ聞き、かつ問いいたもうに会う。聞く者はみなそのさときと答えとを怪しむ。両親イエスを見て、いたく驚き、母は言う、「子よ、なにゆえかかる事を我らにせしぞ、見よ、なんじの父と我と憂いて尋ねたり」。イエス言いたもう、「なにゆえ我を尋ねたるか、我はわが父の事をつとむべきを知らぬか」。両親はその語りたもう事を悟らず。かくてイエス彼らとともに下り、ナザレに行きて従い仕えたもう。その母これらの事をことごとく心に納む。イエス知恵も身のたけもいやまさり神と人とにますます愛せられたもう。

顕現後第二主日

特　祷

限りなく生ける全能の神、天地万物を統べ治めたもう主よ、願わくは、あわれみをもって主の民の祈りを聞こし召し、生涯主の平安を保たしめたまわんことを、主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一二章六―一六

われらが持てる賜物はおのおの与えられし恵みにより異なるゆえに、あるいは預言あらば信仰の量りに従いて預言をなし、あるいは務めあらば務めをなし、あるいは教えをなす者は教えをなし、あるいは勧めをなす者は勧めをなし、施す者は惜しみなく施し、治むる者は心を尽くして治め、あわれみをなす者は喜びてあわれみをなすべし。愛には偽りあらざれ。悪は憎み、善は親しみ、兄弟の愛をもてたがいにいつくしみ、礼儀をもて相譲り、努めて怠らず、心を熱くし、主に仕え、望みて喜び、悩みに耐え、祈りを常にし、聖徒の乏しきをにぎわし、旅びとをねんごろにもてなせ。なんじらを責むる者を祝し、これを祝してのろうな。喜ぶ者とともに喜び、泣く者とともに泣け。相互いに心を同じゅうし、高ぶりたる思いをなさず、かえって低きにつけ。

福音書　ヨハ　二章一―一一

三日目にガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこにおり、イエスも弟子たちともに婚礼に招かれたもう。ぶどう酒尽きたれば、母、イエスに言う、「彼らにぶどう酒なし」。イエス言いたもう、「女よ、我となんじと何のかかわりあらんや、わが時はいまだきたらず」。母しもべどもに、「何にてもその命ずるごとくせよ」と言いおく。かしこにユダヤびとの清めの例に従いて、おおよそ九十リットル入りの石がめ六つならべあり。イエスしもべに、「水をかめに満たせ」と言いたまえば、口まで満たす。また言いたもう、「今くみ取りてふるまいがしらに持ち行け」。すなわち持ち行けり。ふるまいがしら、ぶどう酒になりたる水をなめて、そのいずこよりきたりしかを知らざれば（水をくみししもべどもは知れり）はなむこを呼びて言う、「おおよそ人はまず良きぶどう酒をいだし、酔いのまわるころおい劣れるものをいだすに、なんじは良きぶどう酒を今までとめおきたり」。イエスこの第一のしるしをガリラヤの

カナにて行ない、その栄光を現わしたまいたれば、弟子たち彼を信じたり。

顕現後第三主日

特　祷

限りなく生ける全能の神よ、あわれみをもって我らの弱きを顧み、右の御手を伸べて我らを助け、危うき時も悩める時も常に守りたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一二章一六―二一

なんじらおのれをさとしとすな。悪をもて悪に報いず、すべての人のまえに良からんことをはかり、なんじらのなしうるかぎり努めてすべての人と相和らげ。愛する者よ、みずから復讐すな、ただ神の怒りに任かせまつれ。しるして、「主言いたもう、復讐するは我にあり我これを報いん」とあり。「もしなんじの仇飢えなばこれに食わせ、かわかばこれに飲ませよ、なんじかくするは熱き火を彼のこうべに積むなり」。悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。

福音書　マタ　八章一―一三

イエス山を下りたまいしとき、大いなる群衆これに従う。見よ、ひとりのらい病人みもとにきたり、拝して言う、「主よ、御心ならば、我を清くなしたもうを得ん」。イエス手をのべ、彼につけて、「わが心なり、清くなれ」と言いたまえば、らい病ただちに清まれり。イエス言いたもう、「つつしみてたれにも語るな。ただ行きておのれを祭司に見せ、モーセが命じたる供え物をささげて、人々にあかしせよ」。イエス、カペナウムに入りたまいしとき、百卒長きたり、請いていう、「主よ、わがしもべ、中風を病み、家に伏していたく苦しめり」。イエス言いたもう、「われ行きていやさん」。百卒長こたえて言う、「主よ、我はなんじをわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言葉のみをたまえ、さらばわがしもべはいえん。我みずから権威の下にある者なるに、わが下にまた兵卒ありて、これに『行け』と言えば行き、彼に『きたれ』と言えばきたり、わがしもべに『これをなせ』と言えばなすなり」。イエス聞きて怪しみ、従える人々に言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、かかる厚き信仰はイスラエルのうちのひとりにだに見しことなし。またなんじらに告ぐ、多くの

人、東より西よりきたり、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、御国の子らは外の暗きに追いいだされ、そこにて嘆き・歯がみすることあらん」。イエス百卒長に、「行け、なんじの信ずるごとくなんじになれ」と言いたまえば、この時しもべいえたり。

顕現後第四主日

特祷

神よ、我らが多くの危難に囲まれ、弱くして立つことあたわざることを知りたもう。願わくは御力を与えて我らを守り、すべての危難に耐え、すべての試みに打ち勝つことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一三章一―七

すべての人、上にある権威に従うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神によりて立てらる。このゆえに権威に逆ろう者は神の定めにもとるなり、もとる者は自らそのさばきを招かん。長たる者は良きわざの恐れにあらず、悪しきわざの恐れなり。なんじ権威を恐れざらんとするか、善をなせ、さらば彼より誉れを得ん。彼はなんじを益せんための神の役者なり。されど悪をなさば恐れよ、彼はいたずらに剣を帯びず、神の役者にして悪をなすものに怒りをもて報ゆるなり。されば従わざるべからず、ただに怒りのためのみならず、良心のためなり。またこれがために、なんじらみつぎを納む、彼らは神の仕えびとにしてこの務めに励むなり。なんじらその負債をおのおのに償え、みつぎを受くべき者にみつぎを納め、税を受くべき者に税を納め、おそるべき者を恐れ、尊ぶべき者を尊べ。

福音書　マタ　八章二三―三四

イエス舟に乗りたまえば、弟子たちも従う。見よ、海におおいなるあらし起こりて、舟、波におおわるるばかりなるに、イエスは眠りいたもう。弟子たちみもとに行き、起こして言う、「主よ、救いたまえ、我らはほろぶ」。彼らに言いたもう、「なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ」。すなわち起きて、風と海とを戒めたまえば、大いなるなぎとなりぬ。人々怪しみて言う、「こはいかなる人ぞ、風も海も従うとは」。イエスかたに渡り、ガダラびとの地に行きたまいし時、悪霊につかれたるふたりの者、

墓よりいできたりてこれに会う。そのたけきことはなはだしく、そこの道を人の過ぎ得ぬほどなり。見よ、彼ら叫びて言う、「神の子よ、我らなんじと何のかかわりあらん。いまだ時いたらぬに、我らを責めんとてここにきたりたもうか」。はるかにへだたりて多くの豚のひと群れ、食しいたりしが、悪霊ども請いて言う、「もし我らを追いいださんとならば、豚の群れにつかわしたまえ」。彼らに言いたもう、「行け」。悪霊いでて豚に入りたれば、見よ、その群れみながけより海に駆け下りて、水に死にたり。飼う者ども逃げて町に行き、すべての事と悪霊につかれたりし者の事とを告げたれば、見よ、町びとこぞりてイエスに会わんとていできたり、彼を見て、この地方より去りたまわんことを請えり。

顕現後第五主日

特禱

神よ、絶えざる御恵みをもって主の家族なる公会を守りたまえ。願わくは一心に天の恵みを望む者を、御力をもって常に助けたまわんことを、主イエス＝キリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コロ　三章一二―一七

このゆえになんじらは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・なさけ・謙そん・柔和・寛容を着よ。またたがいに互いに忍びあい、もし人に責むべき事あらば互いに赦せ、主のなんじらを赦したまえるごとくなんじらもしかすべし。すべてこれらのものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。キリストの平和をしてなんじらの心をつかさどらしめよ、なんじらの召されて一体となりたるは、これがためなり、なんじら感謝の心をいだけ。キリストの言葉をして豊かになんじらのうちに住ましめ、すべての知恵によりて、詩と賛美と霊の歌とをもて、互いに教え、互いに訓戒し、恵みに感じて心のうちに神を賛美せよ。又なすところのすべての事、あるいは言葉あるいは行ない、みな主イエスの名によりてなし、彼によりて父なる神に感謝せよ。

福音書　マタ　一三章二四―三〇

イエスまたほかの譬を示して言いたもう、「天国は良き種を畑にまく人のごとし。人の眠れる間に、あだきたりて麦のなかに毒麦をまきて去りぬ。苗はえいでて実りた

るとき、毒麦もあらわる。しもべどもきたりて家あるじに言う、『主よ、畑にまきしは良き種ならずや、しかるにいかにして毒麦あるか』。主人いう、『あだのなしたるなり』。しもべども言う、『さらば我らが行きてこれを抜き集むるを欲するか』。主人いう、『いな、恐らくは毒麦を抜き集めんとて麦をもともに抜かん。ふたつながら刈り入れまで育つに任せよ。刈り入れのとき我刈る者に、まず毒麦を抜き集めて、焼くために束ねよ、麦は集めてわが倉に入れよ』と言わん」。

顕現後第六主日

特祷

神よ、ひとりの御子は悪魔のわざをこぼち、我らを神の子・天国の世継ぎとなさんとて世に現われたまえり。願わくは我らこの望みをいだきて御子の清きがごとくおのれを清くし、ついに大いなる威光をもって再び現われたもうとき、天の御国に至りて御子に似ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヨハ壱　三章一―八

見よ、父の我らに賜いし愛のいかに大いなるかを。我ら神の子ととなえらる。すでに神の子たり、世の我らを知らぬにによりてなり。愛する者よ、我らいまだ後いかん、いまだ現われず、主の現われたもうとき我らこれに似んことを知る。我らそのままことの様を見るべければなり。すべて主にによるこの望みをいだく者は、その清きがごとくおのれを清くす。すべて罪を行のう者は不法を行のうなり。罪はすなわち不法なり。なんじらは知る、主の現われたまいしは、罪を除かんためなるを。主には罪あることなし。おおよそ主におる者は罪を犯さず、おおよそ罪を犯す者はいまだ主を見ず、主を知らぬなり。わが子よ、人に惑わさるな、義を行のう者は義人なり、すなわち主の義なるがごとし。罪を行のう者は悪魔より罪を犯せばなり。神の子の現われたまいしは、悪魔のわざをこぼたんためなり。

福音書　マタ　二四章二三―三一

イエス言いたもう、「その時あるいは『見よ、キリストここにあり』、あるいは『ここにあり』と言う者ありとも信ずな。にせキリスト、にせ預言者おこりて大いなるしる

しと不思議とを現わし、なし得べくば選民をも惑わさんとするなり。見よ、あらかじめこれをなんじらに告げおくなり。されば人もしなんじらに『見よ、彼は荒野にあり』と言うともいで行くな、『見よ、彼はへやにあり』と言うとも信ずな。いなずまの東よりいでて西にまでひらめきわたるごとく、人の子のきたるもまたしからん。それ死体のある所には、わし集まらん。これらの日の悩みの後ただちに日は暗く、月は光をはなたず、星は空より落ち、天の万象、ふるい動かん。そのとき人の子のしるし、天に現われん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の力と大いなる栄光とをもて天の雲に乗りきたるを見ん。また彼は使いたちを大いなるラッパの声とともにつかわさん。使いたちは天のこのはてより、かのはてまで四方より選民を集めん」。

大斎前第三主日

特祷

主よ、恵みをもって主の民の祈りを聞きたまえ。願わくは罪のために罰を受くべき者をあわれみ、御名の栄光のために救いたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前　九章二四―二七

なんじら知らぬか、馳せ場を走る者はみな走れども、ほうびをうる者の、ただひとりなるを。なんじらも得んためにかく走れ。すべて勝ちを争う者はなにごとをも節し慎む、彼らは朽つる冠を得んがためにこれをなす。我らは朽ちぬ冠を得んがためにこれをなすなり。かくわが走るは目あてなきがごときにあらず、わが拳闘するは空を撃つがごときにあらず。わがからだを打ちたたきてこれを服従せしむ。恐らくは他人に宣べ伝えて、みずから捨てらるる事あらん。

福音書　マタ　二〇章一―一六

天国は働きびとをぶどう園に雇うために、朝早くいでたるあるじのごとし。一日、一デナリの約束をなして、働きびとどもをぶどう園につかわす。また九時ごろいでて市場にむなしく立つ者どもを見て、「なんじらもぶどう園に行け、相当のものを与えん」と言えば、彼らも行く。十二時ごろと三時ごろとにまたいでて前のごとくす。五時ごろまたいでてしに、なお立つ者どものあるを見て言う、「なにゆえ、ひねもすここに

むなしく立つか」。彼ら言う、「たれも我らを雇わぬゆえなり」。あるじ言う、「なんじらもぶどう園に行け」。夕べになりてぶどう園のあるじその家づかさに言う、「働きびとを呼びて、あとの者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」。かくて五時ごろに雇われし者きたりて、おのおの一デナリを受く。先の者きたりて、多く受くるならんと思いしに、これもまたおのおの一デナリを受く。受けしとき、家あるじに向かいつぶやきて言う、「このあとの者どもは、わずかに一時間働きたるに、なんじは一日の労と暑さとを忍びたる我らとひとしく、これをあしらえり」。あるじこたえてそのひとりに言う、「友よ、我なんじに不正をなさず、なんじは我と一デナリの約束をせしにあらずや。おのが物を取りて行け、このあとの者になんじとひとしく与うるは、わが心なり。わが物をわが心のままにするはよからずや、我よきがゆえに、なんじの目あしきか」。かくのごとくあとなる者は先に、先なる者はあとになるべし。

大斎前第二主日

特祷

神よ、知りたもうごとく、我らはあえておのれのなすところをたのみとせず。願わくは御力をもって我らを守り、すべての災いを免れしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後　一一章一九―三一

なんじらはさとき者なれば、喜びて愚かなる者を忍ぶなり。人もしなんじらを奴隷とすとも、食い尽くすとも、かすめとるとも、おごるとも、顔を打つとも、なんじらはこれを忍ぶ。われ恥じて言う、われらは弱き者のごとくなりき。されど人の雄々しきところは我もまた雄々し、われ愚かにもかく言うなり。彼らヘブルびとなるか、我もしかり、彼らイスラエルびとなるか、我もしかり、彼らアブラハムの末なるか、我もしかり。彼らキリストの役者なるか、われ狂えるごとく言う、我はなおまされり。わが労はさらに多く、獄舎に入れられしことさらに多く、むち打たれしことさらにおびただしく、死に臨みたりしことしばしばなりき。ユダヤびとより四十に一つ足らぬむちを受けしこと五たび、むちにて打たれしこと一たび、破船に会いしこと三たびにして一昼夜、海にありき。しばしば旅行して川の難、盗賊の

難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒れ野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し、苦しみ、しばしば眠らず、飢えかわき、しばしば断食し、凍え、裸なりき。これに挙げざる事もあるに、なお日々われに迫る諸教会の心づかいあり。たれか弱りて我弱らざらんや、誰かつまずきて我燃えざらんや。もし誇るべくば、わが弱き所につきて誇らん。とこしえにほむべき者、すなわち主イエスの神また父は、わが偽らざるを知りたもう。

福音書 ルカ 八章四―一五

大いなる群衆むらがり町々の人、みもとに寄りつどいたれば、譬をもて言いたもう、「種まく者その種をまかんとていず。まくとき道のかたわらに落ちし種あり、踏みつけられ、また空の鳥これをついばむ。岩の上に落ちし種あり、生えいでたれどうるおいなきによりて枯る。いばらの中に落ちし種あり、いばらもともに生えいでてこれをふさぐ。良き地に落ちし種あり、生えいでて百倍の実を結べり」。これらの事を言いて呼ばわりたもう、「聞く耳ある者は聞くべし」。弟子たちこの譬のいかなる心なるかを問いたるに、イエス言いたもう、「なんじらは神の国の奥義を知ることを許されたれど、ほかの者は譬にてせらる。彼らの見て見ず、聞きて悟らぬためなり。譬の心はこれなり。種は神の言葉なり。道のかたわらなるは、聞きたるのち、悪魔きたり、信じて救わるる事のなからんために御言葉をその心より奪うところの人なり。岩の上なるは聞きて御言葉を喜び受くれども、根なければ、しばらく信じて試みのときに退くところの人なり。いばらのなかに落ちしは、聞きてのち、過ぐるほどに世の心づかいと宝と快楽とにふさがれて実らぬところの人なり。良き地なるは、御言葉を聞き、正しく良き心にてこれを守り、忍びて実を結ぶところの人なり」。

大斎前第一主日

特祷

主よ、我らを教えて、愛なくば、いかなる行ないも益なし、愛は平和ともろもろの徳の帯なりとのたまえり。また愛なき者は生けるとも死にたる者と認めたもう。願わくは聖霊をくだして、この最も尊き徳を我らの心に満たしたまえ。ひとりの御子イエス

Ⅱキリストのために聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ前 一三章一―一三

たとい我もろもろの国びとの言葉および御使いの言葉を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響くにょうはちのごとし。たといわれ預言する力あり、またすべての奥義とすべての知識とに達し、また山を移すほどの大いなる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。たとい我わが財産をことごとく施し、またわがからだを焼かるるために渡すとも、愛なくば我に益なし。愛は寛容にして慈悲あり。愛はねたまず、愛は誇らず、高ぶらず、非礼を行なわず、おのれの利を求めず、憤らず、人の悪を思わず、不義を喜ばずして、まことの喜ぶところを喜び、おおよそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛はいつまでも絶ゆることなし。されど預言はすたれ、異言はやみ、知識もまたすたらん。それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず、全き者のきたらん時は全からぬものすたらん。我、わらべの時は語ることもわらべのごとく、思うこともわらべのごとく、論ずる事もわらべのごとくなりしが、人と成りてはわらべのことを捨てたり。今我らは鏡をもて見るごとく見るところおぼろなり。されど、かの時には顔をあわせて相見ん。今わが知るところ全からず、されど、かの時にはわが知られたるごとく全く知るべし。げに信仰と望みと愛とこの三つのものは限りなく残らん。しかしてそのうち最も大いなるは愛なり。

福音書 ルカ 一八章三一―四三

イエス十二弟子を近づけて言いたもう、「見よ、我らエルサレムに上る。人の子につき預言者たちによりてしるされたるすべての事は、成し遂げらるべし。人の子は異邦人に渡され、あざけられ、はずかしめられ、つばきせられん。彼らこれをむち打ち、かつ殺さん。かくて彼は三日目によみがえるべし」。弟子たちこれらのことを一つだに悟らず、この言葉かれらに隠れたれば、その言いたまいしことを知らざりき。イエス、エリコに近づきたもう時、ひとりのめしい、道のかたわらに座して、物請いいたりしが、群衆の過ぐるを聞きて、その何事なるかを問う。人々ナザレのイエスの過ぎたもう由を告げたれば、めしい呼ばわりて言う、「ダビデの子イエスよ、我をあわれみたまえ」。さきだち行く者ども、彼を戒めて、黙せしめんとしたれど、ますます叫びて言う、「ダビデの子よ、我をあわれみたまえ」。イエス立ちとどまり、めしいを

連れきたるべきことを命じたもう。かれ近づきたれば、イエス問いたもう、「わがなんじに何をなさんことを望むか」。かれ言う、「主よ、見えんことなり」。イエス彼に、「見ることを得よ、なんじの信仰なんじを救えり」と言いたまえば、たちどころに見ることを得、神をあがめてイエスに従う。民みなこれを見て神を賛美せり。

大斎始日

特祷は当日の朝から受苦日の前夕まで、毎日その日の特祷につづいてもちい、使徒書・福音書は土曜日までの平日に用いる。

特祷

限りなく生ける全能の神よ、主は造りたまいし物を一つも憎まず、悔い改むる罪びとをことごとく赦したもう。願わくは我らのために新たなる悔ゆる心を造りたまいて、まことに罪を悲しみ、その災いを悟り、慈悲ふかき父の御手より全き赦しを受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヨエ　二章一二―一七

主言いたもう、今にてもなんじら断食と嘆きと悲しみとをなし、心を尽くして我に帰れ。衣を裂かずして心を裂き、なんじらの主なる神に帰れ。主は恵みありて慈悲深く、怒ることおそく、あわれみ大いにして災いを与うるを悔いたもう。主あるいは悔いて立ち帰り、恵みを残して、なんじらの主なる神に素祭と灌祭とをささげしめたもうことなしとたれか知らんや。なんじらシオンにてラッパを吹き、断食を定めておごそかなる集会を呼びつどえ。民を集め、会衆を清め、年寄りたちを集め、わらべと乳飲み子とを集めよ。花婿はその奥のへやより、花嫁はその奥なるねやよりいできたるべし。神の仕えびとたち祭司たちは、門口と祭壇との間に嘆きてかく言わん、「主よ、御民を赦したまえ、主の産業を恥に渡し、これを異邦人に治めさせたもうな。異邦人をしていかでか、『彼らの神はいずこにいますぞ』と言わしむべき」。

福音書　マタ　六章一六―二一

なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面もちをするな。彼らは断食することを人に現わさんとて、その顔色をそこのうなり。まことになんじらに告ぐ、彼らはすでにその報いを得たり。なんじは断食するとき、かしらに油をぬり、顔を洗え。これ断食することの人にあらわれずして、隠れたるにいますなんじの父にあらわれんため

なり。さらば隠れたるに見たもうなんじの父は報いたまわん。なんじらおのがために宝を地に積むな、ここは虫とさびとがそこない、盗人うがちて盗むなり。なんじらおのがために宝を天に積め、かしこは虫とさびとがそこなわず、盗人うがちて盗まぬなり。なんじの宝のある所には、なんじの心もあるべし。

大斎第一主日

特祷

四十日の間われらのために断食したまいし主よ、願わくはおのれに勝つ力を我らに与え、肉を霊に服せしめ、常に主の導きに従い、ますます清くなり、主の栄光をあらわすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後　六章一―一〇

我らは神とともに働く者なれば、神の恵みをなんじらがいたずらに受けざらんことをさらに勧む。神言いたもう、「われ恵みの時になんじに聞き、救いの日になんじを助けたり」と。見よ、今は恵みのとき、見よ、今は救いの日なり。我らこの務めのそしられぬために何事にも人をつまずかせず、かえってすべての事において神の役者のとくおのれをあらわす。すなわち悩みにも、乏しきにも、苦しみにも、打たるるにも、獄舎に入るにも、騒ぎにも、働きにも、眠らぬにも、断食にも、大いなる忍耐を用い、またいさぎよきと知識と寛容と情けと聖霊と偽りなき愛と、まことの言葉と神の力と左右に持ちたる義の武器とにより、また光栄とはずかしめと、悪しき聞こえと良き聞こえとによりて表わす。我らは人を惑わす者のごとくなれども、まこと、人に知れぬ者のごとくなれども、人に知られ、死なんとする者のごとくなれども、見よ、生ける者、懲らさるる者のごとくなれども殺されず、憂うる者のごとくなれども常に喜び、貧しき者のごとくなれども多くの人を富ませ、なにも持たぬ者のごとくなれどもすべての物を持てり。

福音書　マタ　四章一―一一

ここにイエス御霊によりて荒れ野に導かれたもう、悪魔に試みられんとするなり。四十日、四十夜、断食して、のちに飢えたもう。試むる者きたりて言う、「なんじもし

神の子ならば、命じてこれらの石をパンとならしめよ」。答えて言いたもう、「『人の生くるはパンのみによるにあらず、神の口よりいずるすべての言葉による』としるされたり」。ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂に立たせて言う、「なんじもし神の子ならばおのが身を下に投げよ。それは『なんじのために御使いたちに命じたまわん。かれら手にてなんじをささえ、その足を石に打ち当つることなからしめん』としるされたるなり」。イエス言いたもう、「『主なるなんじの神を試むべからず』と、またしるされたり」。悪魔またイエスをいと高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とをしめして言う、「なんじもしひれ伏して我を拝せば、これらを皆なんじに与えん」。ここにイエス言いたもう、「サタンよ、退け。『主なるなんじの神を拝し、ただこれにのみ仕えまつるべし』としるされたるなり」。ここに悪魔は離れ去り、見よ、御使いたちきたり仕えぬ。

大斎第二主日

特祷

全能の神よ、主は我らが自ら助くる力なきを知りたもう。願わくは常に我らを守り、外はからだをそこのう災いを防ぎ、内は魂を攻むる悪念を除きたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　テサ前　四章一―八

兄弟よ、終わりに我ら、主イエスによりてなんじらに求め、かつ勧む。なんじらいかに歩みて神を喜ばすべきかを我らより学びしごとく、また歩みおるごとくにますます進まんことを。我らが主イエスによりていかなる命令を与えしかは、なんじらの知るところなり。それ神の御旨は、なんじらの清からんことにして、すなわち淫行を慎み、おのおの、おのが妻を得て、清く、かつ尊くし、神を知らぬ異邦人のごとく情欲をほしいままにすまじきを知り、かかる事によりて兄弟を欺き、またかすめざらんことなり。すべてこれらのことを行のう者に主の報いしたもうは、わがすでになんじらに告げ、かつあかしせしごとし。神の我らを招きたまいしは、汚れを行なわしめんためにあらず、清からしめんためなり。このゆえにこれを拒む者は人を拒むにあらず、なんじらに聖霊を与えたもう神を拒むなり。

福音書　マタ　一五章二一―二八

イエスここを去りてツロとシドンとの地方に行きたもう。見よ、カナンの女、そのほとりよりいできたり、叫びて、「主よ、ダビデの子よ、我をあわれみたまえ、わが娘、悪霊につかれていたく苦しむ」と言う。されどイエスひとことも答えたまわず。弟子たちきたり請いて言う、「女を帰したまえ、我らのあとより叫ぶなり」。答えて言いたもう、「我はイスラエルの家のうせたる羊のほかにつかわされず」。女きたり拝して言う、「主よ、我を助けたまえ」。答えて言いたもう、「子どものパンをとりて、小犬に投げ与うるはよからず」。女いう、「しかり、主よ、小犬も主人の食卓よりおつる食べくずを食ろうなり」。ここにイエス答えて言いたもう、「女よ、なんじの信仰は大いなるかな、願いのごとくなんじになれ」。娘この時よりいえたり。

大斎第三主日

特祷

全能の神よ、しもべらの願いを顧み、大能の御手を伸べて、すべての敵を防ぎたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　五章一―一四

さればなんじら愛せらるる子どものごとく、神になろう者となれ。またキリストのなんじらを愛し、我らのためにおのれをこうばしきかおりのささげ物としいけにえとして、神にささげたまいしごとく愛のうちを歩め。聖徒たるにかのうごとく、淫行、もろもろの汚れ、またむさぼりをなんじらのうちにてとのうる事だにすな。また恥ずべき言葉・愚かなる話・戯れごとを言うな、これよろしからぬ事なり、むしろ感謝せよ。すべて淫行のもの、汚れたるもの、むさぼるもの、すなわち偶像を拝む者どものキリストと神との国の世継ぎたることを得ざるは、なんじらの堅く知るところなり。なんじら人のむなしき言葉に欺かるな、神の怒りはこれらの事により不従順の子らに及ぶなり。このゆえに彼らにくみする者となるな。なんじらもとはやみなりしが、今は主にありて光となれり、光の子どものごとく歩め。（光の結ぶ実はもろもろの善と正しきとまことととなり）。主の喜びたもうところのいかなるかをわきまえ知れ。実を結ばぬ暗きわざにくみする事なくかえってこれを責めよ。彼らが隠れて行のうことはこ

れを言うだに恥ずべき事なり。すべてかかる事は責めらるるとき、光にて現わさる、現わさるる者はみな光となるなり。このゆえに言いたもう、「眠れる者よ、起きよ、死人のうちより立ち上がれ。さらばキリストなんじを照らしたまわん」。

福音書　ルカ　一一章一四―二八

さてイエスおしの悪霊を追いいだしたまえば、悪霊いでて、おし物言いしにより、群衆あやしめり。そのうちのある者ども言う、「彼は悪霊のかしらベルゼブルによりて悪霊を追いいだすなり」。またある者どもは、イエスを試みんとて天よりのしるしを求む。イエスその思いを知りて言いたもう、「すべて分かれ争う国はほろび、分かれ争う家は倒る。サタンもし分かれ争わば、その国いかで立つべき。なんじらわが悪霊を追いいだすをベルゼブルによると、言えばなり。我もしベルゼブルによりて、悪霊を追いいださば、なんじらの子はたれによりてこれを追いいだすか。このゆえに彼らはなんじらのさばきびととなるべし。されど我もし神の指によりて、悪霊を追いいださば、神の国はすでになんじらに至れるなり。強きもの武具をよろいておのが屋敷を守るときは、その持ち物、安全なり。されどさらに強きものきたりて、これに勝つときは、たのみとする武具をことごとく奪いて、分捕物を分かたん。我とともならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散らすなり。汚れし霊、人をいずるときは、水なきところを巡りて、休みを求む。されど得ずして言う、『わがいでし家に帰らん』。帰りてその家の掃ききよめられ、飾られたるを見、ついに行きておのれよりも悪しきほかの七つの霊を連れきたり、ともに入りてここに住む。さればその人ののちのさまは、まえよりも悪しくなるなり」。これらのことを言いたもうとき、群衆のうちよりある女、声をあげて言う、「さいわいなるかな、なんじを宿しし胎、なんじの吸いし乳ぶさは」。イエス言いたもう、「さらにさいわいなるかな、神の言葉を聞きてこれを守る人は」。

大斎第四主日

特祷

全能の神よ、我ら悪しきわざによりて罰せらるべき者なれども、あわれみをもって我らを赦し、恵みをもって我らを強めたまわんことを、救い主イエス＝キリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ガラ 四章二一―三一

律法の下にあらんと願う者よ、我に言え、なんじら律法を聞かぬか。すなわちアブラハムに子ふたりあり、ひとりは婢しためより、ひとりは自主の女より生まれたりとしるされたり。婢しためよりの子は肉によりて生まれ、自主の女よりの子は約束によりて生まれたり。これ譬あり、ふたりの女は二つの契約なり、その一つはシナイ山よりいでて、奴隷たる子を生む、これハガルなり。このハガルはアラビヤにあるシナイ山にして今のエルサレムに当たる。エルサレムはその子らとともに奴隷たるなり。されど上なるエルサレムは、自主にして我らの母なり。しるして言う、「うまずめにして産まぬものよ、喜べ。産みの苦しみせぬ者よ、声をあげて呼ばわれ。ひとり住みの女よりの子は多し、夫ある者の子よりも多し」とあり。兄弟よ、なんじらはイサクのごとく約束の子なり。しかるにその時、肉によりて生まれし者、御霊によりて生まれし者を責めしごとく今なおしかり。されど聖書は何と言えるか、「はしためとその子とを追いいだせ、はしための子は自主の女よりの子とともに業を継ぐべからず」とあり。されば兄弟よ、我らはしための子ならず、自主の女よりの子なり。

福音書 ヨハ 六章一―一四

イエス、ガリラヤの海、すなわちテベリヤの海のかなたに行きたまえば、大いなる群衆これに従う、これは病みたる者に行ないたまえるしるしを見しゆえなり。イエス、山に登りて、弟子たちとともにそこに座したもう。時はユダヤびとの祭りなる過越に近し。イエス目をあげて大いなる群衆のきたるを見てピリポに言いたもう、「我らいずこよりパンを買いて、この人々に食わすべきか」。かく言いたもうはピリポを試むるためにて、みずからなさんとする事を知りたもうなり。ピリポ答えて言う、「二百デナリのパンありとも、人々少しずつ受くるになお足らじ」。弟子のひとりにてシモン＝ペテロの兄弟なるアンデレ言う、「ここにひとりの わらべあり、大麦のパン五つと小さきさかな二つとをもてり、されどこの多くの人には何にかならん」。イエス言いたもう、「人々を座せしめよ」。その所に多くの草ありて人々座せしが、その数おおよそ五千人なりき。ここにイエス、パンを取りて謝し、座したる人々に分かち与え、またさかなをもしかなして、その欲するほど与えたもう。人々の飽きたるのち弟子た

ちに言いたもう、「すたるもののなきように裂きたる余りを集めよ」。すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの裂きたるを食らいしものの余り、十二のかごに満ちたり。人々そのなしたまいししるしを見て言う、「げに、これは世にきたるべき預言者なり」。

大斎第五主日

特祷

全能の神よ、あわれみをもって主の民を顧み、大いなる恵みをもって常に導き、身と魂とを守りたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヘブ　九章一一―一五

キリストはきたらんとする良き事の大祭司としてきたり、手にて造らぬこの世に属せぬさらに大いなる全き幕屋を経て、やぎと子牛との血を用いず、おのが血をもてただひとたび至聖所に入りて、とこしえの贖いを終えたまえり。もし、やぎ及び雄牛の血、雌牛の灰などを汚れし者にそそぎて、その肉体を清むることを得ば、ましてとこしえの御霊により傷なくしておのれを神にささげたまいしキリストの血は、我らの良心を死にたる行ないより清めて生ける神に仕えしめざらんや。このゆえに彼は新しき契約のなかだちなり。これ初めの契約の下に犯したるとがを贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束のとこしえの嗣業を受けさせんためなり。

福音書　ヨハ　八章四六―五九

イエス言いたもう、「なんじらのうちたれか我を罪ありとして責め得る。我まことを告ぐるに、われを信ぜぬはなにゆえぞ。神よりいずる者は神の言葉を聞く、なんじらの聞かぬは神よりいでぬによる」。ユダヤびと答えて言う、「なんじはサマリヤびとにて悪霊につかれたる者なりと、我らが言えるはうべならずや」。イエス答えたもう、「我は悪霊につかれず、かえってわが父を敬う、なんじらは我を軽んず。我はおのれの栄光を求めず、これを求め、かつさばきしたもう者あり。まことに、まことになんじらに告ぐ、人もしわが言葉を守らば、とこしえに死を見ざるべし」。ユダヤびと言う、「今ぞ、なんじが悪霊につかれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、しかるになんじは、『人もしわが言葉を守らば、とこしえに死を味わわざるべし』と言う。なんじ我らの父アブラハムよりも大いなるか。彼は死に、預言者たちも死に

たり、なんじはおのれをたれとするか」。イエス答えたもう、「我もしおのれに栄光を帰せば、わが栄光はむなし。我に栄光を帰する者はわが父なり、すなわちなんじらがおのれの神と、とのうる者なり。しかるになんじらは彼を知らず、我はかれを知る。もし彼を知らずと言わば、なんじらのごとく偽り者たるべし。されど我はかれを知り、かつその御言葉を守る。なんじらの父アブラハムは、わが日を見んとて楽しみかつこれを見て喜べり」。ユダヤびと言う、「なんじいまだ五十才にもならぬにアブラハムを見しか」。イエス言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬさきより我はあるなり」。ここに彼ら石をとりてイエスに投げ打たんとしたるに、イエス隠れて宮をいでたまえり。

復活前主日

特祷は木曜日の夕まで用いる。

特祷

とこしえにいます全能の神よ、世の人を深く愛し、御子・われらの救い主イエス＝キリストをくだし、これをして我らと同じ肉体をとり、十字架に死にて、万民のために謙そんの模範とならしめたまえり。願わくはその模範にしたがいて苦しみを忍び、またそのよみがえりの幸いにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ピリ　二章五―一一

なんじらキリスト＝イエスの心を心とせよ。すなわち彼は神の形にていたまいしが、神とひとしくある事を堅く保たんとは思わず、かえっておのれをむなしゅうし、しもべの形をとりて人のごとくなれり。すでに人のさまにて現われ、おのれを低うして死に至るまで、十字架の死に至るまで従いたまえり。このゆえに神は彼を高く上げて、これにもろもろの名にまさる名を賜いたり。これ天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもの、ことごとくイエスの名によりてひざをかがめ、かつもろもろの舌の、「イエス＝キリストは主なり」と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せんためなり。

福音書　マタ　二七章一―五四

夜明けになりてすべての祭司長・民の長老ら、イエスを殺さんと相はかり、ついにこ

れを縛り、引きゆきて総督ピラトにわたせり。ここにイエスを売りしユダ、その死に定められたまいしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀をかえして言う、「われ罪なきの血を売りて罪を犯したり」。彼ら言う、「我らなんぞあずからん、なんじみずから当たるべし」。彼その銀を聖所に投げ捨てて去り、行きてみずからくびれたり。祭司長ら、その銀をとりて言う、「これは血の価なれば宮の倉に納むるはよからず」。かくて相はかり、その銀をもて陶工の畑を買い、旅びとらの墓地とせり。これによりてその畑は、今にいたるまで血の畑ととなえらる。ここに預言者エレミヤによりて言われたる言葉は成就したり。いわく、「かくて彼ら値積もられしもの、すなわちイスラエルの子らが値積もりし者の価の銀三十をとりて、陶工の畑の代価にこれを与えたり。主の我に命じたまいしごとし」。さてイエス、総督の前に立ちたまいしに、総督問いて言う、「なんじはユダヤびとの王なるか」。イエス言いたもう、「なんじの言うがごとし」。祭司長・長老ら訴うれども、何をも答えたまわず。ここにピラト彼に言う、「聞かぬか、彼らがなんじにたいしていかにおおくの証拠を立つるを」。されど総督のいたく怪しむまで、ひとことをも答えたまわず。祭りの時には総督、群衆の望みにまかせて、囚人ひとりをこれに赦す例あり。ここにバラバという隠れなき囚人あり。されば人々の集まれる時、ピラト言う、「なんじらわがたれを赦さんことを願うか。バラバなるか、キリストととのうるイエスなるか」。これピラト彼らのイエスをわたししはねたみによると知るゆえなり。彼なお、さばきの座におる時、その妻、人をつかわして言わしむ、「かの義人にかかわることをすな、我きょう夢のうちにて彼のゆえにさまざま苦しめり」。祭司長・長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請わしめ、イエスをほろぼさんことを勧む。総督答えて、彼らに言う、「ふたりのうちいずれをわが赦さん事を願うか」。彼ら言う「バラバなり」。ピラト言う、「さらばキリストととのうるイエスを我いかになすべきか」。みな言う、「十字架につくべし」。ピラト言う、「彼なにの悪事をなしたるか」。彼ら激しく叫びて言う、「十字架につくべし」。ピラトはなんのかいなく、かえって乱にならんとするを見て、水をとり群衆のまえに手を洗いて言う、「この人の血につきて我は罪なし、なんじらみずから当たれ」。民みな答えて言う、「その血は、われらと我らの子孫とに帰すべし」。ここにピラト、バラバを彼らに赦し、イエスをむち打ちて十字架につくるために渡せり。こ

こに総督の兵卒ども、イエスを官邸に連れ行き、全隊をみもとに集め、その衣をはぎて、緋色の上着を着せ、いばらの冠を編みて、そのこうべにかむらせ、葦を右の手に持たせかつその前にひざまずき、ちょうろうしての言う、「ユダヤびとの王、安かれ」。またこれにつばきし、かの葦をとりてそのこうべの上に、「これはユダヤびとの王イエスなり」としるしたる罪状札をおきたり。こちに、上着をはぎて、もとの衣を着せ、十字架につけんとて引き行く。そのいずる時、シモンというクレネびとにあいしかば、しいてこれにイエスの十字架をおわしむ。かくてゴルゴタというところ、すなわちされこうべの地にいたり、苦みを混ぜたるぶどう酒を飲ませんとしたるに、なめて、飲まんとしたまわず。彼らイエスを十字架につけて後、くじをひきてその衣を分かち、かつそこに座して、イエスを守る。そのこうにイエスとともにふたりの強盗、十字架につけられ、ひとりはその右に、ひとりはちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならばおのれを救え、十字架より降りよ」。祭司長らも、また同じく学者・長老らとともに、ちょうろうして言う、「人を救いて

おのれを救うことあたわず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架より降りよかし、さらば我ら彼を信ぜん。彼は神に寄り頼めり、神かれをいつくしまば今救いたもうべし、『我は神の子なり』と言えり」。ともに十字架につけられたる強盗どもも、同じ事をもてイエスをののしれり。昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。三時ごろイエス大声に叫びて、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言いたもう。わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまいしとのこころなり。そこに立つ者のうち、ある人々これを聞きて、「彼はエリヤを呼ぶなり」と言う。ただちにそのうちのひとり走りゆきて海綿をとり、酸きぶどう酒をふくませ、葦につけてイエスに飲ましむ。そのほかの者ども言う、「まて、エリヤきたりて彼を救うやいなや、我らこれを見ん」。イエスふたたび大声に呼ばわりて息絶えたもう。見よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地ふるい、岩裂け、墓ひらけて、眠りたる聖徒の死かばね、おおく生きかえり、イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現われたり。百卒長およびこれとともにイエスを守りいたる者ども、地震とそのありし事とを見て、いたく恐れ、「げに彼は神の子なりき」と言えり。

復活前月曜日

使徒書 イザ 六三章一―一九

エドムより赤き衣をまといてボズラよりきたるこの者はたれぞ、はなやかなるよそおいをなし大いなる力もて進み行くこの者はたれぞ。義をもて語り、救いを施すに強き我なり。なにゆえなんじのよそおいは赤く、なんじの衣は酒ぶねをふむ者のごとくなるか。我はひとりにて酒ぶねをふめり、もろもろの民のなかに我とともにせる者なかりき。われ怒りによりて彼らを踏みにじりたれば、憤りによりて彼らを踏みにじりて彼らの命の血わが衣にそそぎ、わがよそおいをことごとく汚したり。そは刑罰の日わが心にあり、わが贖いの年すでにきたれり。われ見て助くる者なく、さそうる者なきを怪しめり。このゆえにわがかいな我を救い、わが憤り、我をささえたり。われ怒りによりてもろもろの民を踏みにじり、憤りによりて彼らを酔わしめ、その命の血を地に流したり。我は主の我らに施したまえるもろもろの恵みとその誉れとを語り告げ、またそのあわれみに従い、その多くの恵みに従いてイスラエルの家に施したまいたるいつくしみを語り告げん。主は、「まことに彼らはわが民なり、偽らぬ子らなり」と言いたまえり。かくて彼らの救い主となりたまえり。もろもろの悩みの時は主も悩みたまいて御前の使いをもて彼らを救い、その愛となさけとをもて彼らを贖い、いにしえの日にはつねに彼らをもたげ、かつ携え行きたまいたり。しかるに彼らはそむきて、その清き御霊を憂いしめたり。このゆえに主はひるがえりて彼らの敵となり、みずからこれと戦いたまえり。ここにその民、いにしえのモーセの日を思いいだして言えり、「彼らとその群れの牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼らのうち清き御霊を宿らしし者はいずこにありや。栄光のかいなをモーセの右にともなわせ、彼らの前に水を分けて、おのがためにとこしえの名をあげ、彼らをつまずかすことなく、馬の荒れ野を行くごとく、淵を過ぎしめし者はいずこにありや」と。谷にくだる家畜のごとくに、主の御霊かれらをいこわせたまえり。かく御民を導き、おのれのために栄光の名をあげたまえり。ねがわくは天よりみそなわし、聖なる栄光ある御住まいより見たまえ。なんじの熱心と力あるみわざとはいずこにありや、なんじの切なるいつくしみとあわれみとはおさえられて、我に現われず。なんじは我らの父なり、たといアブ

ラハムは我らを知らず、イスラエルは認めぬとも、主よ、なんじは我らの父なり。とこしえよりの贖い主、これぞなんじの名なる。主よ、なにゆえ我らをなんじの道より離れ迷わせ、我らの心をかたくなにしてなんじを恐れざらしめたもうか。願わくはなんじのしもべらのために、なんじの嗣業たるやからのために帰りたまえ。なんじの清き民、地を得て久しからざるに、我らのあだどもなんじの聖所を踏みにじりたり。我らはいにしえよりなんじの治めざりし者のごとく、なんじの御名をもてとなえられざりし者のごとくなりぬ。

福音書 マル 一四章一―七二

さて過越と除酵との祭りのふつか前となりぬ。祭司長、学者らたばかりをもてイエスを捕え、かつ殺さんとくわだてて言う、「祭りの間はなすべからず、おそらくは民の乱あるべし」。イエス、ベタニヤにいまして、らい病人シモンの家にて食事の席につきいたもう時、ある女、価高き混じりなきナルドのにおい油の入りたる石こうのつぼを持ちきたり、そのつぼをこぼちてイエスのこうべに注ぎたり。ある人々憤りて互いに言う、「なにゆえかくみだりに油を費すか、この油を三百デナリ余りに売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを」。しかして女をとがむ。イエス言いたもう、「そのなすに任かせよ、なんぞこの女を悩ますか、我に良き事をなせり。貧しき者は、常になんじらとともにおれば、いつにても心のままに助け得べし、されど我は常になんじらとともにおらず。この女は、なし得る限りをなして、わがからだに、におい油をそそぎ、あらかじめ葬りのそなえをなせり。まことになんじらに告ぐ、全世界いずこにても、福音の宣べ伝えらるるところには、この女のなしし事も記念として語らるべし」。ここに十二弟子のひとりなるイスカリオテのユダ、イエスを売らんとて祭司長らのもとにゆく。彼らこれを聞きて喜び、金を与えんと約したれば、ユダいかにしてかおりよくイエスをわたさんとはかる。除酵祭の初めの日、すなわち過越の小羊をほふるべき日、弟子たちイエスに言う、「過越の食をなしたもうために、我らがいずこに行きて備うることを望みたもうか」。イエスふたりの弟子をつかわさんとして言いたもう、「都に行け、さらば水をいれたるかめを持つ人、なんじらに会うべし。これに従い行き、その入る所の家あるじに、『師言う、われ弟子らとともに過越の食をなすべき座敷はいずこなるか』と言え。さらば整え備えたる大いなる二階座敷

を見すべし。そこに我らのために備えよ」。弟子たちいで行きて都に入り、イエスの言いたまいしごとくなるを見て過越の備えをなせり。日暮れてイエス十二弟子とともに行き、みな席につきて食するとき言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、我ととともに食するなんじらのうちのひとり、われを売らん」。弟子たち憂いてひとりびとり、「我なるか」と言いでしに、イエス言いたもう「十二のうちのひとりにて我とともにパンを鉢にひたす者はそれなり。げに人の子はおのれに就きてしるされたるごとくゆくなり。されど人の子を売る者は災いなるかな、その人は生まれざりしかたよかりしものを」。彼ら食しおる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに与えて言いたもう、「取れ、これはわがからだなり」。また杯を取り、謝して彼らに与えたまえば、みなこの杯より飲めり。また言いたもう、「これは契約のわが血、多くの人のために流すところのものなり。まことになんじらに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、我ぶどうの実より成るものを飲まじ」。かれら賛美をうたいて後、オリブ山にいでゆく。イエス弟子たちに言いたもう、「なんじらみなつまずかん、それは『われ羊飼いを打たん、さらば羊、散るべし』としるされたるなり。されど我

よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに行かん」。ときにペテロ、イエスに言う、「たといみなつまずくとも我はしからじ」。イエス言いたもう、「まことになんじに告ぐ、きょうこの夜、にわとりふたたび鳴くまえに、なんじ三たび我をいなむべし」。ペテロ力をこめて言う、「我なんじとともに死ぬべき事ありともなんじをいなまず」。弟子たちみなかく言えり。彼らゲッセマネと名づくるところに至りし時、イエス弟子たちに言いたもう、「わが祈る間、ここに座せよ」。かくてペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い行き、いたく驚き、かつ悲しみいでて言いたもう、「わが心いたく憂いて死ぬるばかりなり、なんじらここにとどまりて目をさましおれ」。少し進み行きて、地にひれ伏し、もしも得べくばこの時のおのれより過ぎ行かんことを祈りて言いたもう、「アバ父よ、父にはあたわぬ事なし、この杯を我より取り去りたまえ。されどわが心のままを成さんとにあらず、御心のままを成したまえ」。きたりて、その眠れるを見、ペテロに言いたもう、「シモンよ、なんじら眠るか、ひと時も目をさましおることあたわぬか。なんじら惑わしに陥らぬよう目をさまし、かつ祈れ。げに心は熱すれども肉体弱きなり」。ふたたび行き、同じ言葉にて祈りたもう。またきたりて彼らの

眠れるを見たもう、これその目、いたく疲れたるなり、彼らなにと答うべきかを知らざりき。三たびきたりて言いたもう、「今は眠りて休め、足れり。時きたれり。見よ、人の子は罪びとらの手に渡さるるなり。立て、我ら行くべし。見よ、我を売る者近づけり」。なお語りいたもうほどに、十二弟子のひとりなるユダ、やがて近づきたる。祭司長・学者・長老らよりつかわされたる群衆、剣と棒とを持ちてこれに伴う。イエスを売るもの、あらかじめ合図を示して言う、「わが口づけする者はそれなり、これを捕えてしかと引き行け」。かくてきたりてただちにみもとに行き、「ラビ」と言いて口づけしたれば、人々イエスに手をかけて捕う。かたわらに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司のしもべを打ちて、耳を切り落せり。イエス人々に向かいて言いたもう、「なんじら強盗に向こうごとく剣と棒とを持ち、我を捕えんとていできたるか。我は日々なんじらとともに宮にありて教えたりしに、我を捕えざりき、されどこれは聖書の言葉の成就せんためなり」。そのとき弟子みなイエスを捨てて逃げ去る。ある若者、素膚に亜麻布をまといて、イエスに従いたりしに、人々これを捕えければ、亜麻布を捨て裸にて逃げ去れり。人々イエスを大祭司のもとに引き行きたれば、

祭司長・長老・学者らみな集まる。ペテロ遠く離れてイエスに従い、大祭司の中庭まで入り、下役どもとともに座して火に暖まりいたり。さて祭司長らおよび全議会、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。それはイエスに対して偽証する者、多くあれどもその証拠あわざりしなり。ついにある者ども立ちて偽証して言う、「我らこの人の、『われは手にて造りたるこの宮をこぼち、手にて造らぬほかの宮を三日にて建つべし』と言えるを聞けり」。されどなおこの証拠も合わざりき。ここに大祭司、なかに立ちイエスに問いて言う、「なんじ何をも答えぬか、この人々の立つる証拠はいかに」。されどイエス黙してなにをも答えたまわず。大祭司ふたたび問いて言う、「なんじはほむべきものの子キリストなるか」。イエス言いたもう、「我はそれなり、なんじら人の子の、全能者の右に座し、天の雲のうちにありてきたるを見ん」。このとき大祭司おのが衣を裂きて言う、「なんぞほかに証人を求めん。なんじらこのけがし言を聞けり、いかに思うか」。彼らこぞりてイエスを死に当たるべきものと定む。しかしてある者どもはイエスにつばきし、またその顔をおおい、こぶしにて打ちなどし始めて言う、「預言せよ」。下役どもイエスを受け、手のひらにて打てり。

ペテロ下にて中庭におりしに、大祭司のはしためのひとりきたりて、ペテロの火に暖まりおるを見、これに目をとめて、「なんじもガリラヤびとイエスとともにいたり」と言う。ペテロうけがわずして、「我はなんじの言うことを知らず、またその心をも悟らず」と言いて庭口にいでたり。時ににわとり鳴きぬ。はしため彼を見て、またかたわらに立つ者どもに、「この人は、かのともがらなり」と言いいでしに、ペテロ重ねてうけがわず。しばらくしてまたかたわらに立つ者どもペテロに言う、「なんじはたしかに、かのともがらなり、なんじもガリラヤびとなり」。この時ペテロうけい、かつ誓いて、「われはなんじらの言うその人を知らず」と言いいず。そのおりしも、またにわとり鳴きぬ。ペテロ、「にわとり ふたたび鳴く前に、なんじ三たび我をいなまん」とイエスの言いたまいし御言葉を思いいだし、思い返して泣きたり。

復活前火曜日

使徒書　イザ　五〇章五―一一

主なる神わが耳を開きたまえり。我はそむくことをせず、退くことをせざりき。むち打つ者にわが背をまかせ、ひげを抜く者にわがほおをまかせ、恥とつばきとを避くるために、わが顔をおおうことをせざりき。主なる神我を助けたまわん。このゆえに我恥ずることなかるべし。われ顔を火打ち石のごとく堅くして恥じしめらるること無きを知る。我を義とする者近きにあり、たれか我と争わん、我ら相ともに立たん。わがあだはたれぞや、我に近づきたれ。見よ、主なる神われを助けたまわん。たれか我を罪せん。見よ、彼らはみな衣のごとく古びん、しみは彼らを食い尽くさん。なんじらのうちにて主を恐れ、そのしもべの声を聞く者はたれなるか、やみを歩みて光を得ずとも、主の御名を頼み、おのれの神にたよれ。見よ、火をおこし、火のたばを帯ぶる者どもよ、おのが炎のうち、おのが燃やしたる火のたばのうちを歩め。なんじら悲しみのうちに伏すべし。これはわが手より受くるところなり。

福音書　マル　一五章一―三九

夜明くるやただちに、祭司長・長老・学者ら、すなわち全議会とともに相はかりて、イエスを縛り引き行きてピラトに渡す。ピラト、イエスに問いて言う、「なんじはユダヤ人の王なるか」。答えて言いたまう、「なんじの言うがごとし」。祭司長ら、さま

さまに訴うれば、ピラトまた問いて言う、「なにも答えぬか、見よ、いかに多くの事をもて訴うるか」。されどピラトの怪しむばかりイエスさらになにをも答えたまわず。さて祭りの時には、ピラト民の願いに任かせて、囚人ひとりを赦す例なるが、ここに暴動を起こし、人を殺して繋がれおる者のうちに、バラバという者あり。群衆すすみきたりて、例のごとくせんことを願いいでたれば、ピラト答えて言う、「ユダヤびとの王を赦さんことを願うか」。これピラト、祭司長らのイエスをわたししは、ねたみによると知るゆえなり。されど祭司長ら群衆をそそのかし、かえってバラバを赦さんことを願わしむ。ピラトまた答えて言う、「さらばなんじらがユダヤびとの王ととのうる者を我いかにすべきか」。人々また叫びて言う、「十字架につけよ」。ピラト言う、「そも彼はなにの悪事をなしたるか」。彼ら激しく叫びて、「十字架につけよ」と言う。ピラト群衆の望みを満たさんとて、バラバを赦し、イエスをむち打ちたるのち、十字架につくるためにわたせり。兵卒どもイエスを官邸の中庭に連れゆき、全隊を呼び集めて、彼に紫の衣を着せ、いばらの冠を編みてかむらせ、「ユダヤびとの王、安かれ」と礼をなし始め、また葦にて、そのこうべをたたき、つばきし、ひざまずきて拜

せり。かくちょうろうしてのち、紫の衣をはぎ、もとの衣を着せ十字架につけんとて引きいだせり。時にアレキサンデルとルフとの父シモンというクレネびと、いなかよりきたりて通りかかりしに、しいてイエスの十字架をおわせ、イエスをゴルゴタ、解けばされこうべという所に連れ行けり。かくて没薬を混ぜたるぶどう酒をあたえたれど、受けたまわず。彼らイエスを十字架につけ、しかしてたれが何を取るべきと、くじを引きてその衣を分かつ。イエスを十字架につけしは、朝の九時ごろなりき。その罪状札には、「ユダヤびとの王」としるせり。イエスとともに、ふたりの強盗を十字架につけ、ひとりをその右に、ひとりをその左におく。行き来の者どもイエスをそしり、こうべを振りて言う、「ああ、宮をこぼちて三日のうちに建つる者よ、十字架よりおりておのれを救え」。祭司長らもまた同じく学者らとともにちょうろうして互いに言う、「人を救いて、おのれを救うことあたわず、イスラエルの王キリスト、いま十字架よりおりよかし、さらば我ら見て信ぜん」。ともに十字架につけられたる者どもイエスをののしりたり。昼の十二時に、地の上あまねく暗くなりて、三時におよぶ。三時にイエス大声に、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と呼ばわりたもう。これ

を聞けば、わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまいしとの心なり。かたわらに立つ者のうち、ある人々これを聞きて言う、「見よ、エリヤを呼ぶなり」。ひとり走り行きて、海綿に醋きぶどう酒をふくませて葦につけ、イエスに飲ましめて言う、「待てエリヤきたりて、彼をおろすやいなや、我らこれを見ん」。イエス大声をいだして息絶えたもう。聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。イエスに向かいて立てる百卒長、かかるさまにて息絶えたまいしを見て言う、「げに、この人は神の子なりき」。

復活前水曜日

使徒書　ヘブ　九章一六―二八

それ遺言は必ず遺言者の死を要す。遺言は遺言者死にてのちはじめて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。このゆえに初めの契約も血なくして立てしにあらず。モーセ律法に従いてもろもろの戒めをすべての民に告げてのち、子牛とやぎとの血、また水と緋色の毛とヒソプとをとりて、契約書およびすべての民にそそぎて言う、「これ神のなんじらに命じたもう契約の血なり」と。また同じく幕屋と祭りのすべての器とに血をそそげり。おおよそ律法によれば、よろずのもの血をもて清めらる。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。このゆえに天にある物はこれらにまさりたるいけにえをもて清めらるべきなれらにて清められ、天にある物はこれらにまさりたるいけにえをもて清めらるべきなり。キリストはまことのものにかたどれる、手にて造りたる聖所に入らず、まことの天に入りて、今より我らのために神のまえに現われたもう。これ大祭司が年ごとに、ほかの物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれをささぐるためにあらず。もししからずば世の初めよりこのかた、しばしば苦しみを受けたもうべきなり。されど今、世の末にいたり、おのれをいけにえとなして罪を除かんために、ひとたび現われたまえり。ひとたび死ぬることと、死にて後さばきを受くることとの人に定りたるごとく、キリストもまたおおくの人の罪を負わんがためにひとたびささげられ、また罪を負うことなく、おのれを待ち望む者にふたたび現われて救いを得させたもうべし。

福音書　ルカ　二二章一―七一

さて過越という除酵祭、近づけり。祭司長・学者らイエスを殺さんとし、その手だていかにと求む、民を恐れたればなり。時にサタン、十二のひとりなるイスカリオテと

とのうるユダに入る。ユダすなわち祭司長・宮守がしらどもに行きて、イエスをいかにしてわたさんとはかりたれば、彼ら喜びて金を与えんと約す。ユダうべないて、群衆のおらぬ時にイエスをわたさんと良きおりをうかごう。過越の小羊をほふるべき除酵祭の日きたりたれば、イエス、ペテロとヨハネとをつかわさんとして言いたもう、「行きて我らの食せんために過越のそなえをなせ」。彼ら言う、「いずこに備うることを望みたもうか」。イエス言いたもう、「見よ、都に入らば、水をいれたるかめを持つ人なんじらに会うべし。これに従いゆき、その入るところの家にいりて、家のあるじに、『師なんじに言う、われ弟子らとともに過越の食をなすべき座敷はいずこなるか』と言え。さらばととのえたる大いなる二階座敷を見すべし。そこにそなえよ」。彼らいで行きて、イエスの言いたまいしごとくなるを見て過越のそなえをなせり。時いたりてイエス席に着きたまい、使徒たちもともに着く。かくて彼らに言いたもう、「われ苦しみの前に、なんじらとともにこの過越の食をなすことを望みに望みたり。我なんじらに告ぐ、神の国にて過越の成就するまでは我またこれを食せざるべし」。かくて杯を受け、かつ謝して言いたもう、「これを取りて互いに分かち飲め。我なんじらに告ぐ、神の国のきたるまでは、われ今よりのちぶどうの実より成るものを飲まじ」。またパンを取り謝して裂き、弟子たちに与えて言いたもう、「これはなんじらのために与うるわがからだなり。わが記念としてこれを行なえ」。夕げののち杯をもしかして言いたもう、「この杯はなんじらのために流すわが血によりて立つる新しき契約なり。されど見よ、我を売る者の手、我とともに食卓のうえにあり、げに人の子は、定められたるごとくゆくなり。されどこれを売る者は災いなるかな」。弟子たちおのれらのうちにてこの事をなす者は、たれならんと互いに問い始む。また彼らの間に、おのれらのうちたれか大いならんとの争い起こりたれば、イエス言いたもう、「異邦人の王は、その民をつかさどり、また民を支配する者は、恩人ととなえらる。されど、なんじらはしかあらざれ、なんじらのうち大いなる者は若き者のごとく、かしらたる者は仕うる者のごとくなれ。食事の席に着く者と仕うる者とは、いずれか大いなる。食事の席に着く者ならずや、されど我はなんじらのうちにて仕うる者のごとし。なんじらはわが試みのうちに、絶えず我とともにおりし者なれば、わが父の我に任じたまえるごとく、我もまたなんじらに国を任ず。これなんじらのわが国にてわが食卓

に飲み食いし、かつ位に座してイスラエルの十二のやからをさばかんためなり。シモン、シモン、見よ、サタンなんじらを麦のごとくふるわんとて請い得たり。されど我なんじのためにその信仰のうせぬように祈りたり、なんじ立ち帰りてのち兄弟たちを堅うせよ」。シモン言う、「主よ、我はなんじとともに獄舎にまでも、死にまでも行かんと覚悟せり」。イエス言いたもう、「ペテロよ、我なんじに告ぐ、きょうなんじ三たびわれを知らずといなむまでは、にわとり鳴かざるべし」。かくて弟子たちに言いたもう、「財布・袋・くつをも持たせずして、なんじらをつかわししとき、欠けたるところありしや」。かれら言う、「なかりき」。イエス言いたもう、「されど今は財布ある者はこれを取れ、袋ある者もしかすべし。また剣なき者は衣を売りて剣を買え。我なんじらに告ぐ、『彼はとがある人とともに数えられたり』としるされたるは、わが身に成し遂げらるべし。おおよそ我にかかわる事は成し遂げらるればなり」。弟子たち言う、「主、見たまえ、ここに剣二ふりあり」。イエス言いたもう、「足れり」。ついにいでて、つねのごとくオリブ山に行きたまえば、弟子たちも従う。そこに至りて彼らに言いたもう、「惑わしに入らぬように祈れ」。かくてみずからは石の投げらるるほど彼らよりへだたり、ひざまずきて祈り言いたもう、「父よ、御旨ならば、この杯を我より取り去りたまえ、されどわがこころにあらずして御こころの成らんことを願う」。時に、天より御使い現われて、イエスに力を添う。イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈りたまえば、汗は地上に落つる血のしずくのごとし。祈りを終え、立ちて弟子たちのもとにきたり、その憂いによりて眠れるを見て言いたもう、「なんぞ眠るか、立て、惑わしに入らぬように祈れ」。なおも語りいたもうとき、見よ、群衆あらわれ、十二のひとりなるユダ先だちきたり、イエスに口づけせんとて近寄りたれば、イエス言いたもう、「ユダ、なんじは口づけをもて人の子を売るか」。みそばにおる者ども、事のおよばんとするを見て言う、「主よ、我ら剣をもて打つべきか」。そのうちのひとり、大祭司のしもべを打ちて、右の耳を切り落せり。イエス答えて言いたもう、「これにて赦せ」。しかしてしもべの耳に手をつけていやしたもう。かくておのれに向かいてきたれる祭司長・宮守がしら・長老らに言いたもう、「なんじら強盗に向こうごとく剣と棒とを持ちていできたるか。我は日々なんじらとともに宮におりしにわが上に手を伸べざりき。されど今はなんじらの時、また暗きの権威なり」。つい

に人々イエスを捕えて、大祭司の家に引き行く。ペテロ遠く離れて従う。人々、中庭のうちに火をたきて、もろともに座したれば、ペテロもそのなかに座す。ひとりのはしため、ペテロの火の光を受けて座しおるを見、これに目を注ぎて言う、「この人も彼とともにいたり」。ペテロうけがわずして言う、「女よ、我は彼を知らず」。しばらくしてほかの者、ペテロを見て言う、「なんじも彼のともがらなり」。ペテロ言う、「人よ、しからず」。ひとときばかりしてまたほかの男、言い張りて言う、「まさしくこの人も彼とともにありき。これガリラヤ人なり」。ペテロ言う、「人よ、我なんじの言うことを知らず」。なお言い終えぬに、やがてにわとり鳴きぬ。主、振り返りてペテロに目をとめたもう。ここにペテロ、主の、「きょう、にわとり鳴く前に、なんじ三たびわれをいなまん」と言いたまいし御言葉を思いいだし、外にいでていたく泣けり。守る者どもイエスをちょうろうし、これを打ち、その目をおおい、問いて言う、「預言せよ、なんじを打ちし者はたれなるか」。このほかなお多くのことを言いて、そしれり。夜明けになりて民の長老・祭司長・学者ら相集まり、イエスをその議会に引きいだして言う、「なんじもしキリストならば、我らに言え」。イエス言いたもう、「われ言うともなんじら信ぜじ、またわれ問うともなんじら答えじ。されど人の子は今よりのち全能の神の右に座せん」。皆いう、「さればなんじは神の子なるか」。答えたもう、「なんじらの言うごとく我はそれなり」。彼ら言う、「なんぞなおほかに証拠を求めんや。我らみずからその口より聞けり」。

復活前木曜日

使徒書　コリ前　一一章一七―三四

我これらの事を命じてなんじらをほめず。なんじらの集まること、益を受けずして損を招けばなり。まずなんじらが教会に集まるとき争いありと聞く、我ほぼこれを信ず。それはなんじらのうちに是とせらるべき者の現われんために党派もかならず起こるべければなり。なんじらひとつところに集まるとき主の晩餐を食することあたわず。食する時、おのおの人にさきだちておのれの晩餐を食するにより、飢うる者あり、酔い飽ける者あればなり。なんじら飲み食いすべき家なきか、神の教会を軽んじ、また乏しき者をはずかしめんとするか、我なにを言うべきか、なんじらをほむべきか、これにおいてはほめず。

きか、これにつきてはほめぬなり。わがなんじらに伝えしことは主より授けられたるなり。すなわち主イエスわたされたもう夜、パンを取り、祝してこれを裂き、しかして言いたもう、「これはなんじらのためのわがからだなり。わが記念としてこれを行なえ」。夕げののち杯をもさきのごとくして言いたもう、「この杯はわが血によれる新しき契約なり。飲むごとにわが記念としてこれを行なえ」。なんじらこのパンを食し、この杯を飲むごとに主の死を示してその来たりたもう時にまで及ぶなり。さればよろしきにかなわずして主のパンを食し、主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すなり。人みずから省みてのち、そのパンを食し、その杯を飲むべし。みからだをわきまえずして飲み食いする者は、その飲み食いによりてみずからさばきを招くべければなり。このゆえになんじらのうちに弱きもの、病めるもの多くあり、また眠りにつきたる者も少なからず。我らもし、みずからおのれをわきまえなばさばかるる事なからん。されどさばかるる事のあるは、我らを世の人とともに罪に定めじとて主の懲らしめたもうなり。このゆえに、わが兄弟よ、食せんとて集まるときは互いに待ち合わせよ。もし飢うる者あらば、なんじらの集まりのさばきを招くことなからんためにおのが家にて食すべし。

福音書 ルカ 二三章一―四九

民衆みな立ちて、イエスをピラトの前に引き行き、訴えいでて言う、「我らこの人が、わが国の民を惑わし、みつぎをカイザルに納むるを禁じ、かつみずから王なるキリストとのうるを認めたり」。ピラト、イエスに問いて言う、「なんじはユダヤびとの王なるか」。答えて言いたもう、「なんじの言うがごとし」。ピラト祭司長らと群衆とに言う、「我この人にとがあるを見ず」。彼らますます言いつのり、「彼はユダヤ全国に教えをなして民をさわがし、ガリラヤより始めて、ここに至る」と言う。ピラトこれを聞き、そのガリラヤびとなるかを問いて、ヘロデの権下の者なるを知り、ヘロデこのころエルサレムにいたれば、イエスをそのもとに送れり。ヘロデ、イエスを見ていたく喜ぶ。これは彼につきて聞く所ありたれば、久しく会わんことを欲し、何をかしるしを行のうを見んと望みいたるゆえなり。かくて多くの言葉をもて問いたれど、イエス何をも答えたまわず。祭司長・学者ら立ちて手痛くイエスを訴う。ヘロデその兵卒とともにイエスを侮り、かつちょうろうし、はなやかなる衣を着せて、ピラ

トに返す。ヘロデとピラトとさきにはあだたりしが、この日たがいに親しくなれり。ピラト、祭司長らとつかさらと民とを呼び集めて言う、「なんじらこの人を民を惑わす者として引ききたれり。見よ、我なんじらの前にてただしたれど、その訴うるところにつきて、この人にとがあるを見ず。ヘロデもまたしかり、彼を我らに返したり。見よ、彼は死に当たるべきわざをなさざりき。されば懲らしめてこれを赦さん」。民衆ともに叫びて言う、「この人を除け、我らにバラバを赦せ」。このバラバは都に起こりし暴動と殺人とのゆえによりて獄舎に入れられたる者なり。ピラトはイエスを赦さんと欲して、ふたたび彼らに告げたれど、彼ら叫びて、「十字架につけよ、十字架につけよ」と言う。ピラト三たびまで、「彼はなにの悪事をなししか、我その死に当たるべきわざを見ず、ゆえに懲らしめて赦さん」と言う。されど人々、大声をあげ迫りて、十字架につけんことを求めたれば、ついにその声勝てり。ここにピラトその求めのごとくすべしと言いわたし、その求むるままにかの暴動と殺人とのゆえにより て、獄舎に入れられたる者を赦し、イエスをわたして彼らの心のままならしめたり。人々イエスを引き行く時、シモンというクレネびとのいなかよりきたるを捕え、十字

架をおわせてイエスのあとに従わしむ。民の大いなる群れと嘆き悲しめる女たちの群れとこれに従う。イエス振り返りて女たちに言いたもう、「エルサレムの娘よ、わがために泣くな。ただおのがため、おのが子のために泣け。見よ、『うまずめ・子産まぬ腹・飲ませぬ乳は幸いなり』と言う日きたらん。その時人々、『山に向かいて我らの上に倒れよ、丘に向かいて我らをおおえ』と言いいでん。もし青木にかくなさば、枯木はいかにせられん」。またほかにふたりの悪人をも、死罪に行なわんとてイエスとともに引き行く。されこうべという所に至りて、イエスを十字架につけ、また悪人のひとりをその右、ひとりをその左に十字架につく。かくてイエス言いたもう、「父よ、彼らを赦したまえ。そのなすところを知らざればなり」。彼らイエスの衣を分かちてくじ取りにせり、民は立ちて見いたり。つかさたちもあざけりて言う、「彼は他人を救えり、もし神の選びたまいしキリストならばおのれをも救えかし」。兵卒どもも、ちょうろうしつつ近よりて、酸きぶどう酒をさしいだして言う、「なんじもしユダヤびとの王ならば、おのれを救え」。またイエスの上には、「これはユダヤびとの王なり」との罪状札あり。十字架にかけられたる悪人のひとり、イエスをそしりて言い

う、「なんじはキリストならずや、おのれと我らとを救え」。ほかの者これに答え戒めて言う、「なんじ同じく罪に定められながら、神を恐れぬか。我らはなしし事の報いを受くるなれば当然なり。されどこの人はなにの不善をもなさざりき」。また言う、「イエスよ、御国に入りたもうとき、我をおぼえたまえ」イエス言いたもう、「われまことになんじに告ぐ。きょうなんじは我とともにパラダイスにあるべし」。昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうえあまねく暗くなりて、三時におよび、聖所の幕、まなかより裂けたり。イエス大声に呼ばわりて言いたもう、「父よ、わが霊を御手にゆだぬ」。かく言いて息絶えたもう。百卒長このありし事を見て、神をあがめて言う、「実にこの人は義人なりき」。これを見んとて集まりたる群衆も、ありし事どもを見て、みな胸を打ちつつ帰れり。すべてイエスの知るべの者およびガリラヤより従いきたれる女たちも、はるかに立ちてこれらのことを見たり。

受苦日

この日には早祷、嘆願につづいて特祷・使徒書・福音書までで終わってもよい。

福音書の前後の会衆の言葉は用いない。
特祷は当日の朝から用い、早祷・晩祷には最初のものだけを用いる。

特祷

全能の神よ、いつくしみをもって主の家族を顧みたまわんことをこいねがい奉る。主イエス＝キリストはこの家族を救わんために甘んじて裏切られ、悪人の手にわたされ、十字架の上に殺されたまえり。願わくは父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもう主イエス＝キリストに栄光あらんことを。アーメン

とこしえにいます全能の神・聖霊をもって全公会をきよめ常にこれを治めたもう主よ、願わくは公会の肢たるもろもろの人のためにささぐる祈りを受け、おのおのその務めを尽くし、真実に主に仕うることを得させたまえ。救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

あわれみ深き神よ、主は造りたまいし者をことごとく愛し、罪びとの死ぬることを好まず主に帰りて生くることを喜びたもう。願わくは十字架につけられたまいしキリス

トを信ぜざる人々、主を知らざるすべての人々をあわれみ、その知らざるを悟らせ、かたくななるを柔らげ、御言葉を軽んずる心を除きたまえ。ほめ奉るべき主よ、願わくは彼らを主のおりに伴いて一つの群れとなし、ひとりの羊飼い・主イエス＝キリストに従わしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもう御子によりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヘブ 一〇章一―二五

それ律法はきたらんとする良き事の影にしてまことの形にあらねば、年ごとにたえずささぐる同じいけにえにて、神にきたる者をいつまでも全うすることを得ざるなり。もしこれを得ば、礼拝をなす者、ひとたび清められてまた、心に罪を覚えねば、ささぐることをやめしならん。されどいけにえによりて、年ごとに罪を覚ゆるなり。これ雄牛とやぎとの血は罪を除くことあたわざるによる。このゆえにキリスト世にきたるとき言いたもう、「なんじいけにえと供え物とを欲せず、ただわがためにからだを備えたまえり。なんじ燔祭と罪祭とを喜びたまわず。その時われ言う、『神よ、我なんじの御心を行なわんとてきたる。我につきて巻物の書にしるされたるがごとし』」と。

さきには、「なんじいけにえと供え物と燔祭と罪祭と（すなわち律法に従いてささぐる物）を欲せず、また喜ばず」と言い、のちに、「見よ、我なんじの御心を行なわんとてきたる」と言いたまえり。その後なる者を立てんために、その先なる者を除きたもうなり。この御旨にかないてイエス＝キリストのからだのひとたびささげられしによりて我らは清められたり。すべての祭司は日ごとに立ちて仕え、いつまでも罪を除くことあたわぬ同じいけにえをしばしばささぐ。されどキリストは罪のために一つのいけにえをささげて限りなく神の右に座し、かくておのがあだのおのが足台とせられん時を待ちたもう。そは清められる者を一つの供え物にて限りなく全うしたもうなり。聖霊もまた我らにこれをあかしして、「『この日の後、われ彼らと立つる契約はこれなり』と主言いたもう。また、『わが律法をその心におき、その思いにしるさん』」と、言いたまいて、「この後また彼らの罪と不法とを思いいでざるべし」と言いたもう。かかる赦しある上は、もはや罪のためにささげ物をなす要なし。されば兄弟よ、我らはイエスの血により、その肉体たる幕を経て我らに開きたまえる新しき生ける道より、はばからずして至聖所に入ることを得、かつ神の家を治むる大いなる祭司を得、

たれば、心はすすがれて良心のとがめを去り、身は清き水にて洗われ、まことの心と全き信仰とをもて神に近づくべし。また約束したまいし者は忠実なれば、我ら言いあらわすところの望みを動かさずして堅く守り、互いに相かえりみ愛と良きわざとを励まし、集まりをやむるある人のならわしのごとくせず、互いに勧めあい、かの日のいよいよ近づくを見て、ますますかくのごとくすべし。

福音書 ヨハ 一九章一―三七

ここにピラト、イエスをとりてむち打つ。兵卒どもいばらにて冠をあみ、そのこうべにかむらせ、紫の上着を着せ、みもとに進みて言う、「ユダヤびとの王やすかれ」。しかして手のひらにて打てり。ピラトふたたびいでて人々に言う、「見よ、この人をなんじらに引きいだす、これは何の罪あるをもわが見ぬことをなんじらの知らんためなり」。ここにイエスいばらの冠をかむり、紫の上着を着ていでたまえば、ピラト言う、「見よ、この人なり」。祭司長、下役どもイエスを見て叫び言う、「十字架につけよ、十字架につけよ」。ピラト言う、「なんじらみずから取りて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず」。ユダヤびと答う、「我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり」。ピラトこの言葉を聞きてますます恐れ、ふたたび官邸に入りてイエスに言う、「なんじはいずこよりぞ」。イエス答をなしたまわず。ピラト言う、「我に語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか」。イエス答えたもう、「なんじ上より賜わらずば、我に対してなにの権威もなし。このゆえに我をなんじにわたしし者の罪はさらに大いなり」。ここにおいてピラト、イエスを赦さんことをつとむ。されどユダヤびと叫びて言う、「なんじもしこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、おおよそおのれを王となす者は、カイザルにそむくなり」。ピラトこれらの言葉を聞きてイエスをそとに引き行き、敷石（ヘブル語にてガバタ）というところにてさばきの座につく。この日は過越の備え日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、ユダヤびとに言う、「見よ、なんじらの王なり」。彼ら叫びて言う、「除け、除け、十字架につけよ」。ピラト言う、「我なんじらの王を十字架につくべけんや」。祭司長ら答う、「カイザルのほか我らに王なし」。ここにピラト、イエスを十字架につくるために彼らにわたせり。彼らイエスを受け取りたれば、イエスおのれに十字架を負いて、されこうべ（ヘブル語にてゴル

ゴダ）という所にいで行きたもう。そこにて彼らイエスを十字架につく。またほかにふたりの者をともに十字架につけ、ひとりを右に、ひとりを左に、イエスを真中におけり。ピラト罪状札を書きて十字架の上にかかぐ、「ユダヤびとの王、ナザレのイエス」としるしたり。イエスを十字架につけし所は都に近ければ、多くのユダヤびとこの札を読む、札はヘブル、ロマ、ギリシャの言葉にてしるしたり。ここにユダヤびとの祭司長らピラトに言う、「ユダヤびとの王としるさず、我はユダヤびとの王なりと自称せりとしるせ」。ピラト答う、「わがしるしたる事はしるしたるままに」。兵卒どもイエスを十字架につけしのち、その衣をとりて四つに分け、おのおのその一つを得たり。また下着を取りしが、下着は縫い目なく、上よりすべて織りたる物なれば、兵卒ども互いに言う、「これを裂くな、たれがうるか、くじにすべし」。これは聖書の成就せんためなり。いわく、「彼ら互いにわが衣を分け、わがきぬをくじにせり」。兵卒どもかくなしたり。さてイエスの十字架のかたわらには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言いたもう、「女よ、見よ、なんじの子なり」。また弟子に言いたもう、「見よ、なんじの母なり」。この時より、その弟子彼をおのが家に受けたり。この後イエスよろずの事のおわりたるを知りて――聖書の全うせられんために――「我かわく」と言いたもう。ここに酸きぶどう酒の満ちたる器あり、そのぶどう酒のふくみたる海綿をヒソプにつけてイエスの口に差し付く。イエスそのぶどう酒を受けて後言いたもう、「事おわりぬ」。ついにこうべをたれて霊をわたしたもう。この日は備え日なれば、ユダヤびと、安息日に死かばねを十字架のうえにとめおかじとて（ことにこのたびの安息日は大いなる日なるにより）ピラトに、彼らの足を折りて死かばねを取り除かんことを請う。ここに兵卒どもきたりて、イエスとともに十字架につけられたる第一の者とほかのものとの足を折り、しかしてイエスにきたりしに、はや死にたもうを見て、その足を折らず。しかるにひとりの兵卒、やりにてそのわきを突きたれば、ただちに血と水と流れいず。これを見しものあかしをなす、そのあかしはまことなり。彼はその言うことのまことなるを知る。これなんじらにも信ぜしめんためなり。これらのことの成りたるは、「その骨くだかれず」とある聖句の成就せんためなり。またほかに、「彼らおのが刺したる者を見るべし」と言える聖句あり。

復活前日

この日の諸式は受苦日の諸式に準じて行なう。
特祷は当日の朝から用いる。

特祷

主よ、我ら恵みによりて尊き御子イエス＝キリストの死に合う洗礼を受けたり。願わくは常に悪欲を殺し、御子とともに葬られ、ついに死と墓の門をとおりて、復活の喜びに至ることを得させたまえ。我らのために死にて葬られ、よみがえりたまいし御子イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ペテ前　三章一七―二二

もし善を行ないて苦しみを受くること神の御心ならば、悪を行ないて苦しみを受くるにまさるなり。キリストもなんじらを神に近づかせんとて正しきもの、正しからぬ者に代わりて一たび罪のために死にたまえり、彼は肉体にて殺され、霊にて生かされたまえるなり。また霊にて行き、獄舎にある霊に宣べ伝えたまえり。これらの霊はむかしノアの時代に箱舟の備えらるるあいだ寛容をもて神の待ちたまえるとき、従わざりし者どもなり、その箱舟に入り水を経て救われし者は、わずかにしてただ八人なりき。その水にかたどれるバプテスマは肉の汚れを除くにあらず、良き良心の神に対する求めにして、イエス＝キリストのよみがえりによりて今なんじらを救う。彼は天にのぼりて神の右にいます。御使いたちおよびもろもろの権威と力とは彼に従うなり。

福音書　マタ　二七章五七―六六

日暮れて、ヨセフというアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、ピラトに行きてイエスの死かばねを請う。ここにピラトこれをわたすことを命ず。ヨセフ死かばねをとりて清き亜麻布につつみ、岩にほりたるおのが新しき墓に納め、墓の入口に大いなる石をまろばしおきて去りぬ。そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤと墓に向かいて座しいたり。あくる日、すなわち備え日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトのもとに集まりて言う、「主よ、かの惑わすもの生きおりし時、『われ三日ののちによみがえらん』と言いしを、我ら思いいだせり。されば命じて三日に至るまで墓を固めしめたまえ、恐らくはその弟子らきたりてこれを盗み、『彼は死人のうちよりよみがえれり』と民に言わん。しからばのちの惑いは前のよりも、はなはだ

しからん」。ピラト言う、「なんじらに番兵あり、行きて力限り固めよ」。すなわち彼ら行きて石に封印し、番兵をおきて墓を固めたり。

復活日

早祷のとき詩九十五篇にかえて次の頌を歌いまたは唱える。
特祷は当日の朝から用いる。

復活の頌

一　我らの過越の小羊、すなわちキリストは＝　すでにほふられたまえり

二　されば我らは古きパン種を用いず、また悪とよこしまとのパン種を用いず＝　真実と誠との、種なしパンを用いて、祭りをおこのうべし　コリント前書五章七、八

三　キリスト死人のうちよりよみがえりて、また死にたまわず＝　死もまた彼に主となることなし

四　その死にたまえるは罪につきて、ひとたび死にたまえるなり＝　その生きたまえるは神につきて生きたまえるなり

五　かくのごとく、なんじらもおのれを罪につきては死にたるもの＝　義につきては、キリスト＝イエスにありて生きたる者とおもうべし

六　まさしくキリストは死人のうちより、よみがえり＝　眠りたる者の初穂となりたまえり　ロマ書六章九―一一

七　それ死の、人によりてきたりしごとく＝　死人のよみがえりもまた人によりてきたれり

八　すべての人、アダムによりて死ぬるごとく＝　すべての人、キリストによりて生くべし　コリント前書一五章二〇―二二

特祷

全能の神よ、主はひとりの御子イエス＝キリストをもって、死に勝ち、限りなき命の門を開きたまえり。願わくは殊なる恵みをもって我らの心に起こしたもう良き願いをば、絶えざる助けによりて実行することを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コロ　三章一―七

なんじらもしキリストとともによみがえらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリストかしこにありて神の右に座したもうなり。なんじら上にあるものを思い、地にあるものを思うな、なんじらは死にたる者にしてその命はキリストとともに神のうちに隠れあればなり。我らの命なるキリストの現われたもうとき、なんじらもこれとともに栄光のうちに現われん。されば地にある肢体、すなわち淫行、汚れ、情欲、悪欲、またむさぼりを殺せ、むさぼりは偶像崇拝なり。神の怒りは、これらの事により て不従順の子らにきたるなり。なんじらもかかる人のなかに日を送りし時は、これらの悪しき事に歩めり。

福音書　ヨハ　二〇章一―一〇

一週の始めの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ墓にきたりて、墓より石の取りのけあるを見る。すなわち走りゆき、シモン＝ペテロとイエスの愛したまいしかの弟子とのもとに至りて言う、「たれか主を墓より取り去れり、いずこに置きしか我ら知らず」。ペテロと、かの弟子といでて墓に行く。ふたりともに走りたれど、かの弟子ペテロよりとく走りて先に墓にいたり、かがみて布のおきたるを見れど、内には入らず。シモン＝ペテロおくれきたり、墓に入りて布のおきたるを見、またこうべを包みし手ぬぐいは布とともにあらず、ほかのところに巻きてあるを見る。さきに墓にきたれるかの弟子もまた入り、これを見て信ず。彼らは聖書にしるしたる、死人のうちよりそのよみがえりたもうべき事をいまだ悟らざりしなり。ついにふたりの弟子おのが家に帰れり。

復活後月曜日

使徒書　使　一〇章三四―四三

ペテロ口を開きて言う、「われ今まことに知る、神はかたよることをせず、いずれの国の人にても神を敬いて義を行のう者を受けいれたもうことを。神はイエス＝キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音を宣べ、イスラエルの子孫に言葉をおくりたまえり。すなわちヨハネの伝えしバプテスマののち、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に広まりし言葉なるはなんじらの知るところなり。これは神が聖霊と力とを注ぎたま

いしナザレのイエスの事にして、彼はあまねく巡りて艮き事を行ない、すべて悪魔に制せらるる者をいやせり、神これとともにいましたればなり。我らはユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行ないたまいしもろもろのことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。神はこれを三日目によみがえらせ、かつ明らかに現わしたまえり。されどすべての民にはあらで、神のあらかじめ選びたまえる証人、すなわちイエスの死人のうちよりよみがえりたまいし後、これとともに飲み食いせし我らに現わしたまいしなり。イエスはおのれの生ける者と死にたる者とのさばき主に、神より定められしをあかしすることと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じたもう。彼につきては預言者たちもみな、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦しをうべきことをあかしす」。

福音書　ルカ　二四章一三―三五

見よ、この日ふたりの弟子、エルサレムより七マイルばかりへだたりたるエマオという村に行きつつ、すべてありし事どもを互いに語り合う。語り、かつ論じ合うほどに、イエスみずから近づきてともに行きたもう。されど彼らの目さえぎられてイエスたるを認むることあたわず。イエス彼らに言いたもう、「なんじら歩みつつ互いに語り合うことはなんぞや」。彼ら悲しげなるさまにて立ちとどまり、そのひとりなるクレオパと名づくるもの答えて言う、「なんじエルサレムに宿りいてひとりこのごろかしこに起こりし事どもを知らぬか」。イエス言いたもう、「いかなる事ぞ」。答えて言う、「ナザレのイエスの事なり、彼は神とすべての民との前にて、わざにも言葉にも力ある預言者なりしに、祭司長らおよびわがつかさらは、死罪に定めんとてこれを渡し、ついに十字架につけたり。我らはイスラエルを贖うべき者は、このひとなりと望みいたり、しかのみならずこの事のありしより、きょうはや三日目なるが、なお我らのうちのある女たち、我らを驚かせり、すなわち彼ら朝早く墓に行きたるに、死かばねを見ずして帰り、かつ御使いたち現われて、イエスは生きたもうと告げたりと言う。我らのともがらの数人もまた墓に行きて見れば、まさしく女たちの言いしごとくにしてイエスを見ざりき」。イエス言いたもう、「ああ愚かにして預言者たちの語りたるすべてのことを信ずるに心鈍き者よ。キリストはかならずこれらの苦しみを受けて、その栄光に入るべきならずや」。かくてモーセおよびすべての預言者をはじめ、おのれにつ

きてすべての聖書にしるしたる所を説き示したもう。ついに行く所の村に近づきしに、イエスなお進み行くさまなれば、強いて止めて言う、「我らとともにとどまれ、時夕べにおよびて、日もはや暮れんとす」。すなわちとどまらんとて入りたもう。ともに食事の席に着きたもう時、パンを取りて祝し、裂きて与えたまえば、彼らの目開けてイエスなるを認む、しかしてイエス見えずなりたもう。彼ら互いに言う、「道にて我らと語り我らに聖書を説き明かしたまえるとき、我らの心、内に燃えしならずや」。かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子およびこれとともなる者集まりいて言う、「主は実によみがえりて、シモンに現われたまえり」。ふたりの者もまた道にてありし事と、パンを裂きたもうによりてイエスを認めし事とを述ぶ。

復活後火曜日

使徒書　使一三章二六―四一。

兄弟たち、アブラハムの血すじの子らおよびなんじらのうち神を恐るる者よ、この救いの言葉は我らにおくられたり。それエルサレムに住める者およびそのつかさらは、

彼をも安息日ごとに読むところの預言者たちの言葉をも知らず、彼を罪に定めて預言を成就せしめたり。その死に当たるべきゆえを得ざりしかどピラトに殺さんことを求め、彼につきてしるされたる事をことごとく成し終え、彼を木よりおろして墓に納めたり。されど神は彼を死人のうちよりよみがえらせたまえり。かくてイエスはおのれとともにガリラヤよりエルサレムに上りし者に多くの日のあいだ現われたまえり。その人々は今、民の前にイエスの証人たるなり。我らも先祖たちが与えられし約束につきて喜ばしき音ずれをなんじらに告ぐ、神はイエスをよみがえらせて、その約束を我らの子孫に成就したまえり。すなわち詩の第二篇に、「なんじはわが子なり、我きょうなんじを生めり」としるされたるがごとし。また腐れに帰せざるさまに彼を死人のうちよりよみがえらせたまいし事につきては、かくのたまえり。いわく「われダビデに約せし堅き聖なる恵みをなんじらに与えん」。そはほかの篇に、「なんじはなんじの聖者をくされに帰せざらしむべし」と言えり。それダビデは、その代にて神のみむねを行ない、ついに眠りて先祖たちとともに置かれ、かつ腐れに帰したり。されど神のよみがえらせたまいし者は腐れに帰せざりき。このゆえに兄弟たちよ、なんじら知れ。

この人によりて罪の赦しの、なんじらに伝えらるることを。なんじらモーセの律法によりて義とせられ得ざりしすべての事も、信ずる者はみなこの人によりて義とせらる事を。さればなんじら心せよ、恐らくは預言者たちの書に言いたる事きたらん。いわく、「侮る者よ、なんじら見よ、驚け、滅びよ、我なんじらの日に一つの事を行なわん。これをなんじらにつぶさに告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」。

福音書　ルカ　二四章三六―四八

これらのことを語るほどに、イエスそのなかに立ち、「平安なんじらにあれ」と言いたもう。彼らおじ恐れて、見るところのものを霊ならんと思いしに、イエス言いたもう、「なんじらなんぞ心騒ぐか、なにゆえ心に疑いおこるか、わが手わが足を見よ、これ我なり。我をなでて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、なんじらの見るごとし」。かく言いて手と足とを示したもう。彼らあぶりたる魚一きれをささげイエス言いたもう、「ここになにか食物あるか」

のはたれぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらずや。これ水と血とによりてきたりたまいし者、すなわちイエス＝キリストなり。ただに水のみならず、水と血とをもてきたりたまいしなり。あかしする者は御霊なり。御霊はまことなればなり。あかしする者は三つ、御霊と水と血となり。この三つあいて一つとなる。我らもし人のあかしを受けんには、神のあかしはさらに大いなり。神のあかしはその子につきてあかしたまいしこれなり。神の子を信ずる者はそのうちにこのあかしをもち、神を信ぜぬ者は神を偽り者とす。これ神その子につきてあかしせしあかしを信ぜぬがゆえなり。そのあかしはこれなり、神はとこしえの命を我らにたまえり、この命はその子にあり。御子をもつ者は命をもち、神の子をもたぬ者は命をもたず。

福音書 ヨハ 二〇章一九―二三

この日、すなわち一週の始めの日の夕べ、弟子たちユダヤびとを恐るるによりて、おるところの戸を閉じおきしに、イエスきたり彼らのなかに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。かく言いてその手とわきとを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。イエスまた言いたもう、「平安なんじらにあれ、父の我をつかわしたまえるごとく、我もまたなんじらをつかわす」。かく言いて、息を吹きかけ言いたもう、「聖霊をうけよ。なんじらたれの罪を赦すともその罪ゆるされ、たれの罪をとどむるともその罪とどめらるべし」。

復活後第二主日

特祷

全能の神よ、主はひとりの御子を与えて我らの罪のいけにえとなし、またきよき生涯の模範となしたまえり。願わくは深く感謝して、その量るべからざる恵みを受け、日日力を尽くして御跡を踏むことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ前 二章一九―二五

人もし受くべからざる苦しみを受け、神を認むるによりて憂いに耐うる事をせば、これほむべきなり。もし罪を犯して打たるるときこれを忍ぶともなにの功かある。されどもし善を行ないてなお苦しめらるる時これを忍ばば、これ神のほめたもうところ

なり。なんじらはこれがために召されたり、キリストもなんじらのために苦しみをうけ、なんじらをその足跡に従わしめんとて模範を残したまえるなり。彼は罪を犯さず、その口に偽りなく、またののしられてののしらず、苦しめられておびやかさず、正しくさばきたもう者におのれをゆだね、木の上にかかりて、みずから我らの罪をおのが身に負いたまえり。これ我らが罪につきて死に、義につきて生きんためなり。なんじらは彼の傷によりていやされたり。なんじらは羊のごとく迷いたりしが、今はなんじらの魂の牧者たる監督に帰りたり。

福音書 ヨハ 一〇章一一―一六

イエス言いたもう、「我は良き羊飼いなり、良き羊飼いは羊のために命を捨つ。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとは、おおかみの来たるを見れば羊を捨てて逃ぐ、――おおかみは羊を奪い、かつ散らす――彼は雇いびとにて、その羊をかえりみぬゆえなり。我は良き羊飼いにして、わがものは我を知り、わがものは我を知る、父の我を知り、我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨つ。我にはまた、このおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声を聞かん、ついに一つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

復活後第三主日

特祷 全能の神よ、主は迷える者に真理の光を現わし、正しき道に帰らせたもう。願わくは公会の交わりに入れられし人々、皆その奉ずる所にかなわざるものを去り、もっぱらこれにかのうものを追い求むることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ前 二章一一―一七

愛する者よ、我なんじらに勧む。なんじらは旅びとまた宿れる者なれば、魂に逆らい て戦う肉の欲を避け、異邦人のうちにありて行状を麗わしくせよ、これなんじらをそしりて悪を行のう者と言える人々の、なんじらの良き行ないを見て、かえって顧みの日に神をあがめんためなり。なんじら主のために、すべて人の立てたる制度に従え。あるいは上にある王、あるいは悪を行のう者を罰し、善を行のう者を賞せんために王

よりつかわされたるつかさに従え。善を行ないて愚かなる人の無知の言葉をとどむるは、神の御心なればなり。なんじら自由なる者のごとくすとも、その自由をもて悪のおおいとなさず、神のしもべのごとくせよ。なんじらすべての人を敬い、兄弟を愛し、神を恐れ、王を尊べ。

福音書　ヨハ　一六章一六―二二

イエス弟子たちに言いたもう、「しばらくせばなんじら我を見ず、またしばらくして我を見るべし」。ここに弟子たちのうちある者たがいに言う、「『しばらくせば我を見ず、またしばらくして我を見るべし』と言い、かつ『父に行くによりて』と言いたまえるは、いかなることぞ」。また言う、「このしばらくとはいかなることぞ、我らその言いたもうところを知らず」。イエスその問わんと思えるを知りて言いたもう、「なんじら『しばらくせば我を見ず、またしばらくして我を見るべし』とわが言いしを尋ね合うか。まことにまことになんじらに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。なんじら憂うべし、されどその憂いは喜びとならん。女産まんとする時は憂いあり、その期いたるによりてなり。子を産みて後は苦しみをおぼえず、世に人の生まれたる喜びによりてなり。かくなんじらも今は憂いあり、されど我ふたたびなんじらを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、その喜びを奪う者なし」。

復活後第四主日

特祷

全能の神よ、主のほかに罪びとのみだりなる心を治むるものなし。願わくは我らに主の戒めを愛し、主の約束を慕う恵みをあたえ、このはかなき世におるも、常に心をまことの喜びある所に置くことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヤコ　一章一七―二一

すべての良き賜物とすべての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父よりくだるなり。父は変わることなく、また回転の影もなき者なり。その造りたまえる物のうちに我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに真理の言葉をもて、我らを生みたまえり。わが愛する兄弟よ、なんじらはこれを知る。されば、おのおの聞くこと

をすみやかにし、語ることをおそくし、怒ることをおそくせよ。人の怒りは神の義を行なわざればなり。さればすべての汚れと溢るる悪とを捨て、柔和をもてその植えられたるところの、魂を救いうる言葉を受けよ。

福音書 ヨハ 一六章五―一五

イエス弟子たちに言いたもう、「今われをつかわしたまいし者に行く、しかるになんじらのうち、たれも我に『いずこに行く』と問う者なし。ただこれらの事を語りしによりて、憂いなんじらの心にみてり。されど、我まことをなんじらに告ぐ、わが去るはなんじらの益なり。我さらずば助け主なんじらにきたらじ、われ行かばこれをなんじらにつかわさん。彼きたらんとき、世をして罪につき、義につき、さばきにつきて、誤てるを認めしめん。罪につきてとは、彼ら我を信ぜぬによりてなり。義につきてとは、われ父に行き、なんじら今より我を見ぬによりてなり。さばきにつきてとは、この世の君さばかるるによりてなり。我なおなんじらに告ぐべき事あまたあれど、今なんじら得耐えず。されど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。彼おのれより語るにあらず、おおよそ聞くところの事を語り、かつきたらんとする事どもをなんじらに示さん。彼はわが栄光を現わさん、それはわがものを受けてなんじらに示すべければなり。すべて父のもちたもうものはわがものなり、このゆえにわがものを受けてなんじらに示さんといえるなり」。

復活後第五主日

特祷・使徒書・福音書は水曜日の朝まで用いる。

特祷

全能の神よ、すべての良き賜物は主よりいずる。願わくは聖霊の感化にて我らの心に良き思いを起こし、絶えざる導きをもって、これを実行せしめたまわんことを。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヤコ 一章二二―二七

なんじら御言葉を聞くのみにして、おのれを欺く者とならず、これを行のう者となれ。それ御言葉を聞くのみにして、これを行なわぬ者は、鏡にておのが生まれつきの顔を見る人に似たり。おのれをうつし見て立ち去れば、ただちにそのいかなる姿なりしか

を忘る。されど全き律法、すなわち自由の律法をねんごろに見て離れぬ者は、わざを行のう者にして聞きて忘るる者にあらず、その行ないによりて幸いならん。人もしみずから信心ふかき者と思いて、その舌にくつわを着けず、おのが心を欺かば、その信心はむなしきなり。父なる神の前に清くして汚れなき信心は、みなしごとやもめとをその悩みの時に見舞い、またみずから守りて世に汚されぬこれなり。

福音書　ヨハ　一六章二三―三三

イエス弟子たちに言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、なんじらのすべて父に求むる物をば、わが名によりて賜うべし。なんじら今まではなにをもわが名によりて求めたることなし。求めよ、さらば受けん、しかしてなんじらの喜びみたさるべし。我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、あらわに父のことをなんじらに告ぐるとききたらん。その日にはなんじらわが名によりて求めん。我はなんじらのために父に請うと言わず、父みずからなんじらを愛したまえばなり。これなんじら我を愛し、また我の、父よりいできたりしことを信じたるによる。われ父よりいでて世にきたれり、また世を離れて父に行くなり」。弟子たち言う、「見よ、今はあらわに語りていささかもたとえを言いたまわず。我ら今なんじの知りたまわぬとこ

ろなく、また人のなんじに問うを待ちたまわぬことを知る。これによりてなんじの神よりいできたりたまいしことを信ず」。イエス答えたもう、「なんじら今、信ずるか。見よ、なんじら散らされておのおの、おのがところに行き、我をひとり残すとき至らん、いなすでに至れり。されど我ひとりおるにあらず、父われとともにいますなり。これらのことをなんじらに語りたるは、なんじら我にありて平安を得んがためなり。なんじら世にありては悩みあり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」。

昇天日

特祷・使徒書・福音書は、主日を除き、次の木曜日まで用いる。

特祷

全能の神よ、ひとりの御子・我らの主イエス＝キリストの天に昇りましましことを信じ奉る。願わくは我らの心と思いを天に昇らせ、常に主とともにおらしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使一章一―一一

テオピロよ、我さきに前の書を作りて、おおよそイエスの行ない始め、教え始めたまいしより、その選びたまえる使徒たちに、聖霊によりて命じたるのち、挙げられたまいし日に至るまでの事をしるせり。イエスは苦しみを受けしのち、多くの確かなるあかしをもて、おのれの生きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現われて、神の国のことを語り、また彼等とともに集まりいて命じたもう、「エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。ヨハネは水にてバプテスマを施したれど聖霊、なんじらの上に臨むとき、なんじら力を受けん、しかしてエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、および地のはてにまでわが証人とならん」。弟子たち集まれるとき問いて言う、「主よ、イスラエルの国を回復したもうはこの時なるか」。イエスしが、なんじらは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん」。弟子たち集まれこれらのことを言い終わりて、彼らの見るがうちに挙げられたもう、雲これを受けてべきにあらず。されど聖霊、なんじらの上に臨むとき、なんじら力を受けん、しかしス言いたもう、「時また期は父おのれの権威のうちにおきたまえば、なんじらの知る

見えざらしめたり。その昇り行きたもうとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、見よ、白き衣を着たるふたりの人かたわらに立ちて言う、「ガリラヤの人々よ、なにゆえ天を仰ぎて立つか、なんじらを離れて天に挙げられたまいしこのイエスは、なんじらが天に昇り行くを見たるそのごとくまたきたりたまわん」。

福音書　マル一六章一四―二〇

そののち十一弟子の食しおる時に、イエス現われて、おのがよみがえりたるを見し者どもの言葉を信ぜざりしにより、その信仰なきと、その心のかたくなになるとを責めたもう。かくて彼らに言いたもう、「全世界を巡りてすべての造られしものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受くる者は救わるべし。信ずる者には、これらのしるし伴わん。すなわちわが名により悪霊を追いいだし、新しき言葉を語り、へびを握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなばいえん」。語り終えてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に座したもう。弟子たちいでて、あまねく福音を宣べ伝え、主もまたともに働き、伴うところのしるしをもて、御言葉を堅うしたまえり。

昇天後主日

特　祷

栄光の王なる神よ、御子イエス＝キリストに大いなる勝利を与え、天の御国に昇らしめたまえり。願わくは我らを捨ててみなしごとせず、聖霊をおくりて我らを強め、救い主キリストのさきだち行きたまえる所に昇らせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ペテ前　四章七―一一

よろずの物の終わり近づけり、されば慎みて祈りせよ。何事よりもまず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪をおおえばなり。また惜しむことなく互いにねんごろにもてなせ。神のさまざまの恵みをつかさどる良き家づかさのごとくおのおのその受けし賜物をもて互いに仕えよ。もし語るならば、神の言葉を語る者のごとく語り、仕うるならば、神の与えたもう力を受けたる者のごとく仕えよ。これイエス＝キリストによりて事々に神のあがめられたまわんためなり。栄光と力とは世々限りなく彼に帰するなり。アーメン

福音書　ヨハ　一五章二六―一六章四

イエス弟子たちに言いたもう、「父のもとより わがつかわさんとする助け主、すなわち父よりいずる真理の御霊のきたらんとき、我につきてあかしせん。なんじらもまた初めより我とともにありたればあかしするなり。我これらの事を語りたるは、なんじらのつまずかざらんためなり。人なんじらを除名すべし、しかのみならず、なんじらを殺す者みなみずから神に仕うと思うときたらん。これらの事をなすは、父と我とを知らぬゆえなり。我これらの事を語りたるは、時いたりてわがかく言いしことをなんじらの思いいでんためなり」。

聖霊降臨日

特　祷

神よ、この節にあたりて聖霊をくだし、その光をもって御民の心を照らしたまえり。願わくは我らも同じ聖霊によりて正しく万事をわきまえ、常にみちからに満たさるる

ことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう救い主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使二章一―一一

五旬節の日となり、彼らみな、ひとところにつどいおりしに、激しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その座するところの家に満ち、また火のごときもの舌のように現われ、分かれておのおのの上にとどまる。彼らみな聖霊にて満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言葉にて語りはじむ。時に敬虔なるユダヤびとら、天下の国々よりきたりてエルサレムに住みおりしが、この音おこりたれば群衆あつまりきたり、おのおのが国言葉にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎあい、かつ驚き怪しみて言う、「見よ、この語る者はみなガリラヤびとならずや、いかにして、我らおのおのの生まれし国の言葉を聞くか。我らはパルテヤびと、メジヤびと、エラムびと、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、フリギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅びと――ユダヤびとおよび改宗者――クレテびとおよびアラビヤびとなるに、わが国言葉にて彼らが神の大いなるみわざを語るを聞かんとは」。

福音書　ヨハ一四章一五―三一

イエス弟子たちに言いたもう、「なんじらもし我を愛せば、わが戒めを守らん。われ父に請わん、父はほかに助け主を与えて、とこしえになんじらとともにおらしめたもうべし。これは真理の御霊なり、世はこれを受くることあたわず、これを見ず、また知らぬによる。なんじらはこれを知る、彼はなんじらとともにおり、またなんじらのうちにいたもうべければなり。我なんじらを残してみなしごとはせず、なんじらにきたるなり。しばらくせば世はまた我を見ず、されどなんじらは我を見る、われ生くればなんじらも生くべければなり。その日には、我わが父におり、なんじら我におり、我なんじらにおることをなんじら知らん。わが戒めを保ちてこれを守るものは、すなわち我を愛する者なり。我を愛する者はわが父に愛せられん、我もこれを愛し、これにおのれをあらわすべし」。イスカリオテならぬユダ言う、「主よ、なにゆえおのれを我らにあらわして、世にはあらわしたまわぬか」。イエス答えて言いたもう、「人もし我を愛せば、わが言葉を守らん、わが父これを愛し、かつ我らそのもとにきたりて

住みかをこれとともにせん。我を愛せぬ者は、わが言葉を守らず、なんじらが聞くところの言葉は、わが言葉にあらず、我をつかわしたまいし父の言葉なり。これらのことは我なんじらとともにありて語りしが、助け主、すなわちわが名によりて父のつかわしたもう聖霊は、なんじらによろずの事を教え、又すべてわがなんじらに言いしことを思いいださしむべし。われ平安をなんじらに残す、わが平安をなんじらに与う。わが与うるは世の与うるごとくならず、なんじら心を騒がすな、また恐るな。『われ行きてなんじらにきたるなり』と言いしを聞けり。もしわれを愛せば父にわが行くを喜ぶべきなり、父は我よりも大いなるによる。今その事の成らぬさきに、これをなんじらに告げたり、ことの成らんときなんじらの信ぜんためなり。今よりのち我なんじらと多く語らじ、この世の君きたるゆえなり。彼は我に対して何の権もなし、されどかくなるは、我の、父を愛し父の命じたもうところに従いて行のうことを世の知らんためなり」。

聖霊降臨後月曜日

ペテロ口を開きて言う、「われ今まことに知る、神はかたよることをせず、いずれの国の人にても神を敬いて義を行のう者を受けいれたもうことを。神はイエス＝キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言葉をおくりたまえり。すなわちヨハネの伝えしバプテスマののち、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に広まりし言葉なるはなんじらの知るところなり。これは神が聖霊と力とを注ぎたまいしナザレのイエスの事にして、彼はあまねくめぐりて良き事を行ない、すべて悪魔に制せらるる者をいやせり、神これとともにいましたればなり。我らはユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行ないたまいしもろもろのことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。神はこれを三日目によみがえらせ、かつ明らかに現わしたまえり。されどすべての民にはあらで、神のあらかじめ選びたまえる証人、すなわちイエスの死人のうちよりよみがえりたまいし後、これとともに飲み食いせし我らに現わしたまいしなり。イエスはおのれの生ける者と死にたる者とのさばき主に、神より定められしをあかしすることと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じたもう。彼につき

ては預言者たちもみな、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦しをうべきことをあかしす」。ペテロなおこれらの言葉を語りおるうちに、聖霊、御言葉を聞くすべての者にくだりたもう。ペテロとともにきたりし割礼ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物のそそがれしに驚けり。そは彼らが異言を語り、神をあがむるを聞きたるによる。ここにペテロ答えて言う、「この人々我らのごとく聖霊をうけたれば、たれか水を禁じてそのバプテスマを受くることをこばみ得んや」。ついにイエス＝キリストの御名によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請えり。

福音書　ヨハ　三章一六―二一

それ神はそのひとり子を賜うほどに世を愛したまえり、すべて彼を信ずる者の滅びずしてとこしえの命を得んためなり。神その子を世につかわしたまえるは、世をさばかんためにあらず、彼によりて世の救われんためなり。彼を信ずる者はさばかれず、信ぜぬ者はすでにさばかれたり。神のひとり子の名を信ぜざりしがゆえなり。そのさばきはこれなり。光、世にきたりしに、人その行ないの悪しきによりて、光よりも暗きを愛したり。すべて悪を行のう者は光をにくみて光にきたらず、その行ないの責められざらんためなり。まことを行のう者は光にきたる。その行ないの神によりて行ないたることの現われんためなり。

聖霊降臨後火曜日

使徒書　使　八章一四―一七

エルサレムにおる使徒たちは、サマリヤびと、神の御言葉を受けたりと聞きてペテロとヨハネとをつかわしたれば、彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだそのひとりにだにくだらざりしなり。ここにふたりのもの彼らの上に手をおきたれば、みな聖霊を受けたり。

福音書　ヨハ　一〇章一―一〇

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、羊のおりに門より入らずして、ほかより越ゆる者は、盗びとなり、強盗なり。門より入る者は、羊の羊飼いなり。門守は彼のために開き、羊はその声を聞き、彼はおのれの羊の名を呼びてひきい

だす。ことごとくその羊をいだししし時、これにさきだち行く、羊その声を知るによりてしたごうなり。ほかの者には従わず、かえって逃ぐ、ほかの者どもの声を知らぬゆえなり」。イエスこの譬を言いたまえど、彼らその何事を語りたもうかを知らざりき。このゆえにイエスまた言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我はひつじの門なり。すべて我よりさきにきたりし者は、盗びとなり、強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草をうべし。盗びとのきたるは盗み、殺し、滅ぼさんとするのほかなし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり」。

三位一体主日

特祷

とこしえにいます全能の神よ、しもべらに、まことの信仰により、主の三位なる栄光と一体なるみいつとを認めて拝むことを得させたまえり。願わくはこの信仰を堅く守り、もろもろの災いをのがるることを得させたまえ。この祈りを世々統べ治めたもう唯一の神にささげ奉る。アーメン

使徒書　黙四章一―一一

このののち、われ見しに、見よ、天に開けたる門あり。初めに我に語るを聞きしラッパのごとき声言う、「ここに上れ、我このののち起こるべき事をなんじに示さん」。ただちに、われ御霊に感ぜしが、見よ、天に御位設けあり。その御位に座したもう者あり、その座したもう者のさまは碧玉、赤めのうのごとく、かつ御位のまわりには緑玉のごときにじありき。また御位のまわりに二十四の位ありて二十四人の長老、白き衣をまとい、こうべに金の冠をいただきて、その位に座せり。御位よりあまたのいなずまと声といかずちといず。また御位の前に燃えたる七つのともし火あり、これ神の七つの霊なり。御位の前に水晶に似たるガラスの海あり。御位の中央と御位のまわりとに四つの生き物ありて前もうしろも数々の目にて満ちたり。第一の生き物はししのごとく、第二の生き物は牛のごとく、第三の生き物は顔の形人のごとく、第四の生き物は飛ぶわしのごとし。この四つの生き物おのおの六つの翼あり、翼の内も外も数々の目にて満ちたり、昼も夜も絶え間なく言う、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

むかしいまし、今いまし、のちきたりたもう主たる全能の神」。この生き物ら御位に座し、世々限りなく生きたもう者に栄光ととうときとを帰し、感謝する時、二十四人の長老、御位に座したもう者の前に伏し、世々限りなく生きたもう者を拝し、おのれの冠を御位の前に投げいだして言う、「我らの主なる神よ、栄光ととうときと力とを受けたもうはうべなり。なんじは万物を造りたまい、万物は御心によりて存し、かつ造られたり」。

福音書　ヨハ　三章一―一五

ここにパリサイびとにて名をニコデモという人あり、ユダヤびとのつかさなり。夜イエスのもとにきたりて言う、「ラビ、我らはなんじの神よりきたる師なるを知る。神もしともにいまさずば、なんじが行のうこれらのしるしはたれもなしあたわぬなり」。イエス答えて言いたまう、「まことに、まことになんじに告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ることあたわず」。ニコデモ言う、「人はや老いぬれば、いかで生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まることを得んや」。イエス答えたもう、「まことに、まことになんじに告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ることあたわず。肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。なんじら新たに生まるべしとわがなんじに言いしを怪しむな。風はおのが好むところに吹く、なんじその声を聞けども、いずこより来たりいずこへ行くを知らず。すべて霊によりて生まるる者もかくのごとし」。ニコデモ答えて言う、「いかでかかる事どものありうべき」。イエス答えて言いたもう、「なんじはイスラエルの師にして、なおかかる事どもを知らぬか。まことに、まことになんじに告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことをあかしす、しかるになんじらそのあかしを受けず。われ地のことを言うになんじら信ぜずば、天のことを言わんにはいかで信ぜんや。天より下りし者、すなわち人の子のほかには、天に昇りしものなし。モーセ荒れ野にてへびを挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。すべて信ずる者の彼によりてとこしえの命を得んためなり」。

三位一体後第一主日

特祷

すべて寄り頼む者の力なる神よ、あわれみをもって我らの祈りをうけたまえ。我ら生

まれつき弱く、主によらざれば、さらに良きわざをなすことあたわず。願わくは恵みをもって我らを助け、主の戒めをまもり、思いをも行ないをも等しく御心にかなわしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヨハ 壱四章七―二一

愛する者よ、われら互いにあい愛すべし。愛は神よりいず、おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらにあらわれたり。神はその生みたまえるひとり子を世につかわし、我らをして彼により命を得しめたもうによる。愛というは、我らが神を愛せしにあらず、神我らを愛し、その子をつかわして我らの罪のためになだめの供え物となしたまいしこれなり。愛する者よ、かくのごとく神われらを愛したまいたれば、我らもまた互いにあい愛すべし。いまだ神を見し者あらず、我らもし互いにあい愛せば、神われらにいまし、その愛もまた我らに全うせらる。神、御霊を賜いしによりて我ら神におり、神我らにいたもうことを知る。また我ら父のその子をつかわして世の救い主となしたまいしを見て、そのあかしをなすなり。おおよそイエスを神の子と言いあらわす者は、神

彼におり、かれ神におる。我らに対する神の愛を我らすでに知り、かつ信ず。神は愛なり、愛におる者は神におり、神もまたかれにいたもう。かく我らの愛、全きをえてさばきの日に恐れなからしむ。我らこの世にありて主のごとくなるによる。愛には恐れなし、全き愛は恐れを除く、恐れには苦しみあればなり。恐るる者は、愛いまだ全からず。我らの愛するは、神まず我らを愛したもうによる。人もし、「われ神を愛す」と言いて、その兄弟を憎まば、これ偽り者なり。すでに見るところの兄弟を愛せぬ者は、いまだ見ぬ神を愛することあたわず。神を愛する者はまたその兄弟をも愛すべし。我らこの戒めを神より受けたり。

福音書 ルカ 一六章一九―三〇

ある富める人あり、紫の衣と細布とを着て、日々おごり楽しめり。またラザロという貧しきものあり、腫物にてはれただれ、富める人の門におかれ、その食卓より落つる物にて飽かんと思う。しかして犬どもきたりてその腫物をねぶれり。ついにこの貧しきもの死に、御使いたちに携えられてアブラハムのふところに入れり。富める人もまた死にて葬られしが、よみにて苦しみのうちより目を上げてはるかにアブラハムとそ

のふところにおるラザロとを見る。すなわち呼びて言う、「父アブラハムよ、我をあわれみて、ラザロをつかわし、その指のさきを水に浸してわが舌を冷させたまえ、我はこの炎のなかにもだゆるなり」。アブラハム言う、「子よ、思え、なんじは生ける間、なんじの良き物を受け、ラザロは悪しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、なんじはもだゆるなり。しかのみならず、ここよりなんじらに渡り行かんとするも得ず、そこより我らにきたり得ぬために、我らとなんじらとの間に大いなる淵定めおかれたり」。富める人また言う、「さらば父よ、願わくはわが父の家にラザロをつかわしたまえ。我に五人の兄弟あり、この苦しみのところにきたらぬよう、彼らにあかしせしめたまえ」。アブラハム言う、「彼らにはモーセと預言者とあり、これに聞くべし」。富める人言う、「いな父アブラハムよ、もし死人のうちより彼らに行く者あらば、悔い改めん」。アブラハム言う、「もしモーセと預言者とに聞かずば、たとい死人のうちよりよみがえる者ありとも、その勧めをいれざるべし」。

三位一体後第二主日

主に育てられて、御名を敬うものを助けたもう主よ、くすしき摂理のもとに我らを守り、常に主を敬愛する心を与えたまわんことを、御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヨハ壱　三章一三―二四

兄弟よ、世はなんじらを憎むとも怪しむな。我ら兄弟を愛するによりて、死より命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちにおる。おおよそ兄弟を憎む者はすなわち人を殺す者なり。おおよそ人を殺す者の、そのうちにとこしえの命なきをなんじらは知る。主は我らのために命を捨てたまえり、これによりて愛ということを知りたり、我らもまた兄弟のために命を捨つべきなり。世の宝をもちて兄弟の乏しきを見、かえってあわれみの心を閉ずる者は、いかで神の愛そのうちにあらんや。わが子らよ、我ら言葉と舌とをもてあい愛することなく、行ないとまことをもてすべし。これによりて我らまことより出でしを知り、かつ我らの心我らを責むるとも神の前に心を安んずべし。神は我らの心よりも大いにしてすべてのことを知りたまえばなり。愛する者よ、我らが

心みずから責むるところなくば、神に向かいて恐れなし。かつすべて求むるところを神より受くべし。これその戒めを守りて御心にかのうところを行なえばなり。その戒めはこれなり、すなわち我ら神の子イエス＝キリストの名を信じ、その命じたまいしごとく互いにあい愛すべきことなり。神の戒めを守る者は神におり、神もまた彼にいたもう。我らその賜うところの御霊によりてその我らにいたもうことを知るなり。

福音書 ルカ 一四章一六―二四

イエスこれに言いたもう、「ある人、盛んなる夕げを設けて、多くの人を招く。夕げの時いたりて、招きおきたる者のもとにしもべをつかわして、『きたれ、すでに備わりたり』と言わしめたるに、みなひとしく断りはじむ。初めの者言う、『われ田地を買えり、行きて見ざるを得ず。請う、許されんことを』。ほかの者言う、『われ五くびきの牛を買えり、これをためすために行くなり。請う、許されんことを』。またほかの者言う、『われ妻をめとれり、このゆえに行くことあたわず』。しもべ帰りてこれらの事をその主人に告ぐ。家あるじ怒りてしもべに言う、『とく町の大路と小路とに行きて、貧しき者・かたわ者・めしい・足なえなどをここに連れきたれ』。しもべ言う、『主よ、仰せのごとくなしたれど、なおあまりの席あり』。主人、しもべに言う、『道やまがきのほとりに行き、人々を強いて連れきたり、わが家に満たしめよ。われなんじらに告ぐ、かの招きおきたる者のうちひとりだに、わが夕げを味わいうる者なし』」。

三位一体後第三主日

特祷

主よ、祈りする心を我らに与えたまえり。あわれみをもって我らの願いをきき、つねに大能をもって我らを助け、危うきときに守り、なやめるときに慰めたまえ。主イエス＝キリストによりて祈り奉る。アーメン

使徒書 ペテ前 五章五―一一

なんじら皆たがいに謙そんをまとえ、「神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みを与えたもう」。このゆえに神の力ある御手のもとにおのれを低うせよ、さらば時によびて神なんじらを高うしたまわん。またもろもろの心づかいを神に委ねよ、神なん

じらのためにおもんぱかりたまえばなり。つつしみて目をさましおれ、なんじらのあだなる悪魔、ほゆるししのごとく経めぐりて飲むべきものを尋ぬ。なんじら信仰を堅うして彼を防げ、なんじらは世にある兄弟たちの同じ苦しみに会うを知ればなり。もろもろの恵みの神、すなわちとこしえの栄光を受けしめんとて、キリストによりてなんじらを召したまえる神は、なんじらがしばらく苦しみをうくる後、なんじらを全うし、堅うし、強くして、その基を定めたまわん。願わくは力世々限りなく神にあれ、アーメン。

福音書 ルカ 一五章一―一〇

取税人、罪びとども、みな御言葉を聞かんとて近寄りたれば、パリサイびと、学者らつぶやきて言う、「この人は罪びとを迎えて食をともにす」。イエスこれに譬を語りて言いたもう、「なんじらのうち、たれか百匹の羊を持たんに、もしその一匹を失わば、九十九匹を野におき、行きて失せたる者を見いだすまでは尋ねざらんや。ついに見いださば、喜びてこれをおのが肩にかけ、家に帰りてその友と隣人とを呼びあつめて言わん、「我とともに喜べ、失せたるわが羊を見いだせり」。我なんじらに告ぐ、かくのごとく悔い改むるひとりの罪びとのために、神の使いたちの前に喜びあるべし」。

三位一体後第四主日

特祷

すべて寄り頼む者を守りたもう神よ、主によらざれば強きことなく、また清きことなし。願わくは主の導きに従いてこの世の賜物を用い、常にとこしえの賜物を保つことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ロマ 八章一八―二三

われ思うに、今の時の苦しみは、我らの上に現われんとする栄光にくらぶるに足ら

ず。それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現われんことを待つ。造られたるものの むなしきに服せしは、おのが願いによるにあらず、服せしめたまいし者によるなり。されどなお造られたる者にも滅びのしもべたるさまより解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは残れり。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまでともに嘆き、ともに苦しむことを。しかのみならず、御霊の初めの実をもつ我らも、みずから心のうちに嘆きて子とせられんこと、すなわちおのがからだの贖われんことを待つなり。

福音書　ルカ　六章三六―四二

イエス言いたもう、「なんじらの父の慈悲なるごとく、なんじらも慈悲なれ。人をさばくな、さらばなんじらもさばかるる事あらじ。人を罪に定むな、さらばなんじらも罪に定められる事あらじ。人を赦せ、さらばなんじらも赦されん。人に与えよ、さらば与えられん。人は量りをよくし、押し入れ、揺り入れ、溢るるまでにして、なんじらのふところに入れん。なんじらおのが量る量りにて量らるべし」。また譬にて言いたもう、「めしいはめしいを手引するを得んや。ふたりとも穴に落ちざらんや。弟子はその師にまさらず、おおよそ全うせられたる者は、その師のごとくならん。なにゆえ兄弟の目にあるちりを見て、おのが目にあるうつばりを認めぬか。おのが目にあるうつばりを見ずしていかで兄弟に向かいて『兄弟よ、なんじの目にあるちりを取り除かせよ』と言うを得んや。偽善者よ、まずおのが目よりうつばりを取り除け。さらば明らかに見えて兄弟の目にあるちりを取りのぞき得ん」。

三位一体後第五主日

特祷

主よ、この世を安らかに治め、主の公会に安きをあたえ、常に喜びて主に仕えしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ペテ　前三章八―一五

なんじらみな心を同じゅうし、互いに思いやり、兄弟を愛し、あわれみ、へりくだり、悪をもて悪に、そしりをもてそしりに報ゆることなく、かえってこれを祝福せよ。なんじらの召されたるは祝福を継がんためなればなり。「命を愛し、良き日を送らんと

する者は、舌を押えて悪を避け、くちびるを押えて偽りを語らず、悪より遠ざかりて善を行ない、平和を求めてこれを追うべし。それ主の目は義人の上にとどまり、その耳は彼らの祈りに傾く。されど主の御顔は悪を行のう者に向こう」。なんじら、もし善に熱心ならば、たれかなんじらをそこなわん。たとい義のために苦しめらるる事あるとも、なんじら幸いなり。「彼らのおどしを恐るな、また心を騒がすな」。心のうちにキリストを主とあがめよ。

福音書　ルカ　五章一―一一

群衆おし迫りて神の言葉を聞きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、なぎさに二そうの舟の寄せあるを見たもう、漁師は舟をいでて網を洗いいたり。イエスその一そうなるシモンの舟に乗り、彼に請いておかより少しく押しいださしめ、座して舟の中より群衆を教えたもう。語り終えてシモンに言いたもう、「深みに乗りいだし、網をおろして魚を取れ」。シモン答えて言う、「君よ、我ら夜もすがら労したるに何をも得ざりき、されど御言葉に従いて網をおろさん」。かくてしかせしに、魚のおびただしき群れを囲みて網裂けかかりたれば、ほかの一そうの舟におる組の者を差し招きてきたり助けしむ。きたりて魚を二そうの舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。シモン＝ペテロこれを見て、イエスのひざもとにひれ伏して言う、「主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり」。これはシモンもともにおる者もみな取りし魚のおびただしきに驚きたるなり。ゼベダイの子にしてシモンの仲間なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう、「恐るな、なんじ今よりのち、人を生けどらん」。彼ら舟をおかにつけ、いっさいを捨ててイエスに従えり。

三位一体後第六主日

特禱

主を愛する者のために、人の思いに過ぎたる良き賜物を備えたもう神よ、すべての物よりも深く主を愛する愛を我らの心に注ぎ、望むところにまさりたる主の約束のものを得させたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　六章三―一一

なんじら知らぬか、おおよそキリスト＝イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、

その死に合うバプテスマを受けしを。我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合わせられたり。これキリスト父の栄光によりて死人のうちよりよみがえらせられたまいしごとく、我らも新しき命に歩まんためなり。我らキリストにつがれて、その死のさまにひとしくば、そのよみがえりにもひとしかるべし。我らは知る、我らの古き人、キリストとともに十字架につけられたるは、罪のからだ滅びて、このの罪に仕えざらんためなるを。そは死にし者は罪よりのがるるなり。我らもしキリストとともに死にしならば、また彼とともに生きんことを信ず。キリスト死人のうちよりよみがえりてまた死にたまわず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。その死にたまえるは罪につきて一たび死にたまえるにて、その生きたまえるは神につきて生きたまえるなり。かくのごとくなんじらもおのれを罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト＝イエスにありて生きたる者と思うべし。

福音書　マタ　五章二〇―二六

我なんじらに告ぐ、なんじらの義、学者・パリサイびとにまさらずば、天国に入ることあたわず。いにしえの人に、「殺すなかれ、殺す者はさばきに会うべし」と言えることあるをなんじら聞けり。されど我はなんじらに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、さばきに会うべし。また兄弟に向かいて、愚か者よと言う者は、衆議に会うべし。また兄弟に向かいて、愚か者よと言う者は、ゲヘナの火に会うべし。これ者よという者は、ゲヘナの火に会うべし。このゆえになんじもし供え物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨まるる事あるを思いいださば、供え物を祭壇の前にのこしおき、まず行きてその兄弟と和ぼくし、しかる後きたりて、供え物をささげよ。なんじを訴うる者とともに道にあるうちに、早く和解せよ。恐らくは、訴うる者なんじをさばきびとにわたし、さばきびとは下役にわたし、ついになんじは獄舎に入れられん。まことに、なんじに告ぐ、一コドラントも残りなく償わずば、そこをいずることあたわじ。

三位一体後第七主日

特祷

もろもろの良き賜物を与えたもう大能の主よ、御名を愛する愛を我らの心に植え、いつくしみをもって育て、もろもろの善をもって養い、また大いなる恵みをもって絶

えずこの幸いにおらしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　六章一九―二三

かく人の事をかりて言うは、なんじらの肉弱きゆえなり。なんじらもとその肢体をさささげ、汚れと不法とのしもべとなりて不法に至りしごとく、今その肢体をささげ、義のしもべとなりて清きに至れ。なんじら罪のしもべたりしときは義に対して自由なりき。その時に今は恥とするところの事によりて何の実を得しか、これらの事のはては死なり。されど今は罪より解き放されて神のしもべとなりたれば、清きに至る実を得たり、そのはてはとこしえの命なり。それ罪の払う価は死なり、されど神の賜物は我らの主キリスト＝イエスにありて受くるとこしえの命なり。

福音書　マル　八章一―九

そのころまた大いなる群衆にて食ろうべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言いたもう、「われこの群衆をあわれむ、すでに三日我とともにおりて食ろうべき物なし。飢えしままにて、その家に帰らしめば、道にて疲れ果てん。そのなかには遠くよりきたれる者あり」。弟子たち答えて言う、「この寂しき地にては、いずこよりパンを得て、この人々を飽かしむべき」。イエス問いたもう、「パンいくつあるか」。答えて、「七つ」という。イエス群衆に命じて地に座せしめ、七つのパンを取り、謝してこれを裂き、弟子たちに与えて群衆の前におかしむ。弟子たちすなわちその前におく。また小さき魚すこしばかりあり、祝してこれをも、その前におけと言いたもう。人々、食らいて飽き、裂きたる余りを拾いしに、七つのかごに満ちたり。その人おおよそ四千人なりき。イエス彼らを帰したまえり。

三位一体後第八主日

特祷

天地万物を統べ治めたもう神よ、くすしき摂理をもって我らに害あるものを除き、益あるものを与えたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　八章一二―一七

兄弟よ、我らは負いめあれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて生くべきにあらず。なんじらもし肉に従いて生きなば、死なん。もし霊によりてからだの行ないを殺さば生くべし。すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。なんじらはふたたび恐れをいだくためにしもべたる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、これによりて我らはアバ父と呼ぶなり。御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることをあかしす。もし子たらば世継ぎたらん、神の世継ぎにしてキリストとともに世継ぎたるなり。これはキリストとともに栄光を受けんために、その苦しみをもともに受くるによる。

福音書　マタ　七章一五―二一

「にせ預言者に心せよ、ひつじの装いしてきたれども、内は奪いかすむるおおかみなり。その実によりて彼らを知るべし。いばらよりぶどうを、あざみよりいちじくを取る者あらんや。かく、すべて良き木は良き実をむすび、悪しき木は悪しき実をむすぶ。良き木は悪しき実を結ぶことあたわず。悪しき木はよき実を結ぶことあたわず。すべて良き実を結ばぬ木は、切られて火に投げ入れらる。さらば、その実によりて彼らを知るべし。我に向かいて、『主よ、主よ』と言う者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいますわが父の御心を行のう者のみ、これに入るべし」。

三位一体後第九主日

特祷

主よ、我ら主によらざれば一つの良き事をもなすことあたわず。願わくは常に正しき事を思い、これを行のう心を与え、恵みをもって我らを助け、生涯御心に従わしめたまわんことを。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前　一〇章一―一三

兄弟よ、我なんじらがこれを知らぬを好まず。すなわち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海を通り、みな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセにつけり。しかしてみなおなじく、霊なる食い物を食し、みな同じく霊なる飲み物を飲めり。これ彼らに従いし霊なる岩より飲みたるなり、その岩はすなわちキリストなりき。されど彼らのうち多くは神の御心にかなわず、荒れ野にて滅ぼされたり。これらのことは我らの鏡

にして、彼らがむさぼりしごとく悪をむさぼらざらんためなり。彼らのうちのある者にならいて偶像を拝する者となるな、すなわち、「民は座して飲み食いし、立ちて戯る」としるされたり。また彼らのうちのある者にならいて我ら姦淫すべからず、姦淫を行ないしもの一日に二万三千人、死にたり。また彼らのうちのある者にならいて我ら主を試むべからず、主を試みしもの、へびに滅ぼされたり。又かれらのうちのある者にならいてつぶやくな、つぶやきし者、滅ぼす者に滅ぼされたり。彼らが会えるこれらの事はかがみとなれり、かつ末の世に会える我らの訓戒のためにしるされたり。さらばみずから立てりと思う者は倒れぬように心せよ。なんじらが会いし試みは人の常ならぬはなし。神はまことなれば、なんじらを耐え忍ぶことあたわぬほどの試みに会わせたまわず。なんじらが試みを耐え忍ぶことを得んために、これとともにのがるべき道を備えたまわん。

福音書　ルカ　一六章一―九

イエスまた弟子たちに言いたもう、「ある富める人にひとりの支配人あり、主人の持ち物を費しおると訴えられたれば、主人かれを呼びて言う、『わがなんじにつきて聞くところは、これ何ごとぞ、務めの報告をいだせ。なんじこののち支配人たるを得じ』。支配人、心のうちに言う、『いかにせん、主人わが勤めを奪う。われ土掘るには力なく、物請うは恥ずかし。我なすべき事こそ知りたれ、かくせば勤めをやめらるるとき、人々その家にわれを迎うるならん』とて、主人の負債者をひとりびとり呼びよせて、初めの者に言う、『なんじわが主人より負うところ何ほどあるか』。答えて言う、『油、百樽』。支配人いう、『なんじの証書をとり、早く座して五十と書け』。また他の者に言う、『負うところ何ほどあるか』。答えて言う、『麦、百石』。支配人言う、『なんじの証書をとりて八十と書け』。ここに主人、不義なる支配人のなしし事の巧みなるによりて、彼をほめたり。この世の子らはおのが時代の事には、光の子らよりも巧みなり。我なんじらに告ぐ、不義の富をもて、おのがために友をつくれ。さらば富のうする時、その友なんじらをとこしえの住まいに迎えん」。

三位一体後第十主日

特禱

主よ、あわれみの耳を傾けて、しもべの祈りをききたまえ。又その願うところのものを得んために、御心にかのう願いをなさしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前　一二章一―一一

兄弟よ、霊の賜物につきては、我なんじらが知らぬを好まず。なんじら異邦人なりし時、いざなわるるままに、ものを言わぬ偶像のもとに導き行かれしは、なんじらの知るところなり。されば我なんじらに示さん、神の御霊に感じて語る者はたれも、「イエスはのろわるべき者なり」と言わず、また聖霊に感ぜざれば、たれも、「イエスは主なり」と言うあたわず。賜物は異なれども、御霊はおなじ。務めは異なれども、主はおなじ。働きは異なれども、すべての人のうちにすべての働きをなしたもう神はおなじ。御霊の現わしをおのおのに賜いたるは、益を得させんためなり。ある人は御霊によりて知恵の言葉を賜わり、ある人は同じ御霊によりて知識の言葉、ある人は同じ御霊により て信仰、ある人は一つ御霊により て病をいやす賜物、ある人は力あるわざ、ある人は預言、ある人は霊をわきまえ、ある人は異言を言い、ある人は異言を解く力を賜わる。すべてこれらのことは同じ一つの御霊の働きにして、御霊その心に従いておのおのに分け与えたもうなり。

福音書　ルカ　一九章四一―四七

イエスすでに近づきたるとき、都を見やり、これがために泣きて言いたもう、「ああなんじ、なんじももしこの日のうちに平和にかかわる事を知りたらんには――されど今なんじの目に隠れたり。日きたりて敵なんじの回りに塁を築き、なんじを取り囲みて四方より攻め、なんじと、その内にある子らとを地に打ち倒し、一つの石をも石の上に残さざるべし。なんじ顧みの時を知らざりしによる」。かくて宮に入り、商いする者どもを追いいだしはじめ、これに言いたもう、「『わが家は祈りの家たるべし』としるされたるに、なんじらはこれを強盗の巣となせり」。イエス日々宮にて教えたもう。

三位一体後第十一主日

特祷

あわれみを施すとき、ことに全能を現わしたもう神よ、願わくは豊かなる恵みをあた

えて、信仰の馳せ場を走り、ついに主の約したまえる天の宝をうくることを得させたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前　一五章一一―一一

兄弟よ、さきにわが伝えし福音をさらにまたなんじらに示す。なんじらはこれを受け、これによりて立ちたり。なんじらいたずらに信ぜずして、わが伝えしままを堅く守らば、この福音によりて救われん。わが第一になんじらに伝えしは、わが受けしところにして、キリスト聖書に応じて我らの罪のために死に、また葬られ、聖書に応じて三日目によみがえり、ケパに現われ、後に十二弟子に現われたまいし事なり。つぎに五百人以上の兄弟に同時に現われたまえり。そのうちにはすでに眠りたる者もあれど、多くは今なお世にあり。次にヤコブに現われ、次にすべての使徒に現われ、いやはてには月足らぬ者のごとき我にも現われたまえり。我は神の教会を迫害したれば、使徒ととなえらるるに足らぬ者にて使徒のうちいと小さき者なり。しかるにわが今のごとくなるは、神の恵みによるなり。かくてその賜わりし御恵みはむなしくならずして、すべての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我とともにある神の恵みなり。されば我にもせよ、彼らにもせよ、宣べ伝うるところはかくのごとくにして、なんじらはかくのごとく信じたるなり。

福音書　ルカ　一八章九―一四

またおのれを義と信じ、他人を軽しむる者どもにイエスこの譬を言いたもう、「ふたりのもの祈らんとて宮にのぼる、ひとりはパリサイびと、ひとりは取税人なり。パリサイびと、立ちて心のうちにかく祈る、『神よ、我はほかの人の強奪、不正、姦淫するがごとき者ならず、またこの取税人のごとくならぬを感謝す。われは一週のうちに二度断食し、すべて得るものの十分の一をささぐ』。しかるに取税人ははるかに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う、『神よ、罪びとなる我をあわれみたまえ』。我なんじらに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、おのが家にくだり行けり。おおよそおのれを高うする者は低うせられ、おのれを低うする者は高うせらるるなり」。

三位一体後第十二主日

特　祷

とこしえにいます全能の神よ、主は常に我らの祈りにさきだちて聞き、いさおなきしもべの望む所よりも多く与えたもう。願わくは豊かなる恵みを注ぎ、罪を赦して良心の恐れを除き、あえて願い得ざる良きものを与えたまえ。御子イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後　三章四―九

我らはキリストにより、神に対してかかる確信あり。されどおのれはなに事をもみずから定むるに足らず、定むるに足るは神によるなり。神は我らを新約の役者となるに足らしめたまえり。儀文の役者にあらず、霊の役者なり。そは儀文は殺し、霊は生かせばなり。石に彫りしるされたる死の務めにも光栄ありて、イスラエルの子らはそのやがて消ゆべきモーセの顔の光栄を見つめ得ざりしほどならんには、まして霊の務めは光栄なからんや。罪を定むる務めもし光栄あらんには、まして義とする務めは光栄にあふれざらんや。

福音書　マル　七章三一―三七

イエスまたツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経へて、ガリラヤの海にきたりたもう。人々、耳しいにして物言うこと難き者を連れきたりて、これに手をおきたまわんことを願う。イエス群衆のなかより、彼をひとり連れいだし、その両耳に指をさし入れ、またつばきしてその舌にさわり、天を仰ぎて嘆じ、その人に向かいて、「エパタ」と言いたもう、ひらけよとの意なり。かくてその耳ひらけ、舌のもつれただちに解け、正しく物言えり。イエスたれにも告ぐなと人々を戒めたもう。されど戒むるほどかえっていよいよ言い広めたり。またはなはだしく打ち驚きて言う、「彼のなしし事はみな良し、耳しいをも聞こえしめ、おしをも物言わしむ」。

三位一体後第十三主日

特　祷

あわれみ深き、全能の神よ、御民の正しく仕えまつるは、ただ主の恵みによれり。願わくはこの世において忠実に主に仕え、ひたすら主の約束をのぞみ、ついに、御前にいたることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ガラ 三章一六―二二

かの約束はアブラハムとその末とに与えたまいしものなり。多くの者をさすごとく、「なんじの末に」と言えり、これすなわちキリストなり。されば我言わん、神のあらかじめ定めたまいし契約は、そののち四百三十年を経て起こりし律法に廃せらるることなく、その約束もむなしくせらるる事なし。もし嗣業を受くること律法によらば、もはや約束にはよらず、しかるに神は約束によりてこれをアブラハムに賜いたり。されば律法は何のためぞ。これ罪のために加えたまいしものにて、御使いたちを経て中立ちの手によりて立てられ、約束を与えられたる末のきたらん時にまでおよぶなり。（中立ちは一方のみの者にあらず、されど神は唯一にいませり）。さらば律法は神の約束にもとるか、決してしからず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、げに義とせらるるは律法によりしならん。されど聖書はすべての者を罪の下に閉じこめたり。これ信ずる者のイエス＝キリストに対する信仰によれる約束を与えられんためなり。

福音書 ルカ 一〇章二三―三七

イエス弟子たちを顧みひそかに言いたもう、「なんじらの見るところを見る目は幸いなり。我なんじらに告ぐ、多くの預言者も、王も、なんじらの見るところを見んと欲したれど見ず、なんじらの聞くところを聞かんと欲したれど聞かざりき」。見よ、ある教法師、立ちてイエスを試みて言う、「師よ、われとこしえの命を継ぐためには何をなすべきか」。イエス言いたもう、「律法になにとしるしたるか、なんじいかに読むか」。答えて言う、「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、主たるなんじの神を愛すべし、また己のごとくなんじの隣を愛すべし」。イエス言いたもう、「なんじの答は正し。これを行なえ、さらば生くべし」。彼おのれを義としてイエスに言う、「わが隣とはたれなるか」。イエス答えて言いたもう、「ある人、エルサレムよりエリコに下るとき、強盗にあいしが、強盗どもその衣をはぎ、傷を負わせ、半死半生にして捨て去りぬ。ある祭司たまたまこの道より下り、これを見てかなたを過ぎ行けり。またレビびともここにきたり、これを見て同じくかなたを過ぎ行けり。しかるにあるサマリヤびと、旅してそのもとにきたり、これを見てあわれみ、近寄りて油とぶどう酒とを注ぎ、傷を包みておのが獣にのせ、はたごやに連れ行

きて介抱し、あくる日デナリ二つをいだし、あるじに与えて、『この人を介抱せよ。費えもし増さばわが帰りくる時に償わん』と言えり。なんじいかに思うか、この三人のうち、いずれか強盗にあいし者の隣となりしぞ」。彼いう、「その人にあわれみを施したる者なり」。イエス言いたもう、「なんじも行きてそのごとくせよ」。

三位一体後第十四主日

特祷

とこしえにいます全能の神よ、我らに信仰と望みと愛とを増し加え、また主の約したまえるものを得んがために、主の命じたもうところを愛せしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ガラ　五章一六―二四

我言う、御霊によりて歩め、さらば肉の欲をとげざるべし。肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいてたがいに相もとれればなり。これなんじらの欲するところをなし得ざらしめんためなり。なんじらもし御霊に導かれなば、律法の下にあらじ。それ肉の行ないはあらわなり。すなわち淫行、汚れ、好色、偶像崇拝、まじわざ、怨み、争い、ねたみ、憤り、徒党、分離、異端、そねみ、酔酒、宴楽などのごとし。我すでに戒めたるごとく、今また戒む。かかることを行のう者は神の国を継ぐことなし。されど御霊の実は愛、喜び、平和、寛容、なさけ、善良、忠信、柔和、節制なり。かかるものを禁ずる律法はあらず。キリスト＝イエスに属する者は、肉とともにその情と欲とを十字架につけたり。

福音書　ルカ　一七章一一―一九

イエス、エルサレムに行かんとて、サマリヤとガリラヤとのあいだを通り、ある村に入りたもうとき、十人のらい病人これに会いて、はるかに立ちとどまり、声をあげて言う、「君イエスよ、我らをあわれみたまえ」。イエスこれを見て言いたもう、「なんじら行きて身を祭司らに見せよ」。彼ら行く間に清められたり。そのうちのひとり、おのがいやされたるを見て、大声に神をあがめつつ帰りきたり、イエスの足もとにひれ伏して謝す。これはサマリヤびとなり。イエス答えて言いたもう、「十人みな清められしならずや、九人はいずこにあるか。この他国人のほかは、神に栄光を帰せんと

で帰りきたる者なきか」。かくてこれに言いたもう、「立ちて行け、なんじの信仰なんじを救えり」。

三位一体後第十五主日

特祷

主よ、絶えざるあわれみをもって公会を守りたまえ。人は弱きがゆえに、主によらざれば倒るるのほかなし。願わくはすべて害あるものを防ぎ、益あるものを与えて、常に救いの道に導きたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ガラ　六章一一―一八

見よ、われ手ずからいかに大いなる文字にてなんじらに書き送るかを。おおよそ肉において麗わしき見えをなさんと欲する者は、なんじらに割礼をしう。これただキリストの十字架のゆえによりて責められざらんためのみ。そは割礼をうくる者すらみずから律法を守らず、しかもなんじらに割礼を受けしめんと欲するは、なんじらの肉につきて誇らんがためなり。されど我には我らの主イエス＝キリストの十字架のほかに誇

るところあらざれ。これによりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するもまたしかり。そは割礼を受くるも受けぬも、ともに数うるに足らず、ただ尊きは新たに造らるることなり。この法に従いて歩むすべての者の上に、神のイスラエルの上に、平安とあわれみとあれ。今よりのちたれも我を煩わすな、我はイエスのしるしを身に帯びたるなり。兄弟よ、願わくは我らの主イエス＝キリストの恵み、なんじらの霊とともにあらんことを、アーメン。

福音書　マタ　六章二四―三四

人はふたりの主にかね仕うることあたわず、あるいは、これを憎み、かれを愛し、あるいは、これに親しみ、彼を軽しむべければなり。なんじら神と富とにかね仕うることあたわず。このゆえに我なんじらに告ぐ、何をくらい、何を飲まんと命のことを思い煩い、何を着んとからだのことを思い煩うな。命は糧にまさり、からだは衣にまさるならずや。空の鳥を見よ、まかず、刈らず、倉に収めず、しかるになんじらの天の父は、これを養いたもう。なんじらはこれよりもはるかにすぐるる者ならずや。なんじらのうちたれか思い煩いて命をわずかにても加え得んや。またなにゆえ衣のことを

思い煩うや。野のゆりはいかにして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華をきわめたるソロモンだに、その装いこの花の一つにもしかざりき。きょう有りて、あす炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装いたまえば、ましてなんじらをや、ああ信仰うすき者よ。さらば何をくらい、何を飲み、何を着んとて思い煩うな。これみな異邦人の切に求むるところなり。なんじらの天の父はすべてこれらの物のなんじらに必要なるを知りたもうなり。まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物はなんじらに加えらるべし。このゆえにあすのことを思い煩うな、あすはあすみずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

三位一体後第十六主日

特祷

主よ、絶えざるあわれみをもって公会を清め、すべての害を防ぎたまえ。公会はただ主の助けによりて安全なるがゆえに、恵みをもって常にこれを守りたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　三章一三―二一

されればなんじらに請う、わがなんじらのために受くる悩みにつきて気落ちすな、これなんじらの誉れなり。このゆえに我は天と地とにある諸族の名の起こるところの父にひざまずきて願う。父その栄光の富に従いて、御霊により力をもてなんじらの内なる人を強くし、信仰によりてキリストをなんじらの心に住まわせ、なんじらをして愛に根ざし、愛を基とし、すべての聖徒とともにキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さのいかばかりなるかを悟り、その量り知るべからざる愛を知ることを得しめ、すべて神に満てる者をなんじらに満たしめたまわんことを。願わくは我らのうちに働く力に従いて、我らのすべて求むるところ、すべて思うところよりもいたくまさる事をなし得る者に、栄光世々限りなく教会によりて、またキリスト＝イエスによりてあらんことを、アーメン。

福音書　ルカ　七章一一―一七

その後イエス、ナインという町に行きたまいしに、弟子たちおよび大いなる群衆もともに行く。町の門に近づきたもうとき、見よ、かきいださるる死人あり。これはひと

りむすこにて母はやもめなり、町の多くの人々これに伴う。主、やもめを見て、あわれみ、「泣くな」と言いて近より、ひつぎに手をつけたまえば、かくもの立ちとどまる。イエス言いたもう、「若者よ、我なんじに言う、起きよ」。死人、起きかえりて物言い始む。イエスこれを母にわたしたもう。人々みな恐れをいだき、神をあがめて言う、「大いなる預言者、我らのうちに起これり」。また言う、「神その民を顧みたまえり」。この事ユダヤ全国およびもよりの地にあまねくひろまりぬ。

三位一体後第十七主日

特祷

主よ、恵みをもって常に我らの先となりあとともとなりて、絶え間なくもろもろの良きわざを行なわしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書　エペ　四章一―六

されば主にありて囚人たる我、なんじらに勧む。なんじら召されたる召しにかないて歩み、事ごとに謙そんと柔和と寛容とを用い、愛をもて互いに忍び、平和のつなぎの

うちに努めて御霊の賜う一致を守れ。からだは一つ、御霊は一つなり。なんじらが召しにかかわる一つの望みをもて召されたるがごとし。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、すべての者の父なる神は一つなり。神はすべてのものの上にいまし、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいましたもう。

福音書　ルカ　一四章一―一一

イエス安息日に食事せんとて、あるパリサイびとのかしらの家に入りたまえば、人々これをうかがう。見よ、御前に水腫をわずらう人いたれば、イエス答えて教法師とパリサイびとに言いたもう、「安息日に人をいやすことは良しや、いなや」。彼ら黙然たり。イエスその人をとり、いやして去らしめ、かつ彼らに言いたもう、「なんじらのうちその子あるいはその牛、井戸に陥らんに、安息日にはただちにこれを引き上げぬ者あるか」。彼らこれに対してもの言うことあたわず。イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、譬を語りて言いたもう、「なんじ婚宴に招かるるとき、上席につくな。恐らくはなんじよりも尊き人の招かれんに、なんじと彼とを招きたる者きたり

て、『この人に席を譲れ』と言わん。さらばその時なんじ恥じて末席に行きはじめん。招かるるとき、むしろ行きて末席につけ、さらば招きたる者きたりて、『友よ、上に進め』と言わん。その時なんじ同席の者の前に誉れあるべし。おおよそおのれを高うする者は低うせられ、おのれを低うする者は高うせらるるなり」。

三位一体後第十八主日

特祷

神よ、願わくは御民に世と肉と悪魔との、いざないを防ぐ恵みを与え、清き心をいだきて、唯一の神に従うことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前一章四―八

我なんじらがキリスト＝イエスにありて神より賜わりし恵みにつきて常に神に感謝す。なんじらはキリストにありて、もろもろのことすなわちすべての言葉とすべての悟りとに富みたればなり。これキリストのあかしなんじらのうちに固うせられたるによる。かくなんじらはすべての賜物に欠くるところなくして、我らの主イエス＝キリストの現われたもうを待てり。彼はなんじらを終わりまで固うして我らの主イエス＝キリストの日に責むべきところなからしめたまわん。

福音書　マタ　二二章三四―四六

パリサイびとら、イエスのサドカイびとらを黙せしめたまいしことを聞きて相集まり、そのうちなるひとりの教法師、イエスを試むるために問う、「師よ、律法のうちいずれの戒めか大いなる」。イエス言いたもう、「『なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主なるなんじの神を愛すべし』、これは大いにして第一の戒めなり。第二もまたこれに等し、『おのれのごとく、なんじの隣を愛すべし』。律法全体と預言者とはこの二つの戒めによるなり」。パリサイびとら集まりたる時、イエス彼らに問いて言いたもう、「なんじらはキリストにつきていかに思うか、たれの子なるか」。彼ら言う、「ダビデの子なり」。イエス言いたもう、「さらばダビデ御霊に感じてなにゆえ彼を主ととのうるか。いわく、『主、わが主に言いたもう、我なんじの敵をなんじの足の下におくまでは、わが右に座せよ』。かくダビデ彼を主ととのうれば、いか

でその子ならんや」。たれも一言だに答うることあたわず、その日より、あえてまたイエスに問う者なかりき。

三位一体後第十九主日

特　祷

神よ、主によらざれば御心にかのうことあたわざるゆえに、聖霊をもって我らの心を治め、常に導きたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書　エペ　四章一七―三二

されば我これを言い、主にありてあかしす、なんじら今よりのち異邦人の心の空しきに任かせて歩むがごとく歩むな。彼らは思い暗くなりて、そのうちなる無知により、心のかたくなによりて神の命に遠ざかり、恥を知らず、ほしいままにすべての汚れを行なわんとておのれを好色にわたせり。されどなんじらはかくのごとくならんためにキリストを学べるにあらず。なんじらは彼に聞き、彼にありてイエスにある真理に従いて教えられしならん。すなわちなんじら惑わしの欲のために滅ぶべきさきの振まいにつける古き人を脱ぎすて、心の霊を新にし、真理よりいずる義と聖とにて、神にかたどり造られたる新しき人を着るべきことなり。されば偽りをすてておのおのその隣にまことを語れ、我ら互いにえだなればなり。なんじら怒るとも罪を犯すな、憤りを日の入るまで続くな。悪魔におりを得さすな。盗みする者は今よりのち盗みすな、むしろ貧しき者に分け与え得るために手ずから働きて良きわざをなせ。悪しき言葉をいっさい、なんじらの口よりいだすな、ただ時に従いて人の徳を立つべき良き言葉をいだして聞く者に益を得させよ。神の聖霊を憂いしむな、なんじらは贖いの日のために聖霊にて印せられたるなり。すべてのにがき・憤り・怒り・騒ぎ・そしり、及びすべての悪意をなんじらより捨てよ。互いになさけとあわれみとあれ、キリストにありて神のなんじらを赦したまいしごとく、なんじらも互いに赦せ。

福音書　マタ　九章一―八

イエス舟にのり、渡りておのが町にきたりたもう。見よ、中風にて床に伏しおる者を、人々みもとに連れきたれり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう、

「子よ、心安かれ、なんじの罪ゆるされたり」。見よ、ある学者ら心のうちに言う、「この人は神を汚すなり」。イエスその思いを知りて言いたもう、「なにゆえ心に悪しき事を思うか。なんじの罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれかやすき。人の子、地にて罪を赦す権威あることをなんじらに知らせんために」――ここに中風の者に言いたもう、――「起きよ、床をとりてなんじの家に帰れ」。彼おきて、その家に帰る。群衆これを見て恐れ、かかる力を人に与えたまえる神をあがめたり。

三位一体後第二十主日

特禱

いとあわれみ深き全能の神よ、豊かなる恵みを我らに与え、すべて害あるものを防ぎたまえ。また常にからだと魂とに備えをなし、喜びて御心にかのうことを行なわしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　五章一五―二一

されば慎みてその歩むところに心せよ、賢からぬ者のごとくせず、賢き者のごとく

し、またおりをうかがえ、そは時悪しければなり。このゆえに愚かとならず、主の御心のいかんを悟れ。酒に酔うな、放とうはそのうちにあり、むしろ御霊にて満たされ、詩と賛美と霊の歌とをもて語り会い、また主に向かいて心よりかつ歌い、かつ賛美せよ。すべての事につきて常に我らの主イエス＝キリストの名によりて父なる神に感謝し、キリストをかしこみて互いに従え。

福音書　マタ　二二章一―一四

イエスまた譬をもて答えて言いたもう、「天国におのが子のために婚宴を設くる王のごとし。婚宴に招きおきたる人々を迎えんとてしもべどもをつかわすとて言う、『招きたる人々に告げよ、見よ、昼げはすでに備わりたり。わが牛も肥えたる獣もほふられて、すべての物備わりたれば婚宴にきたれ』と。しかるに人々顧みずして、ある者はおのが畑に、ある者はおのが商いに行けり。またほかの者はしもべどもを捕えて、はずかしめ、かつ殺したれば、王、怒りて軍勢をつかわし、かの凶行者を滅ぼして、その町を焼きたり。かくてしもべどもに言う、『婚宴はすでに備わりたれど、招きたる者どもはふさわしか

らず。されば汝ら、ちまたに行きて会うほどの者を婚宴に招け』。しもべども道にいでて良きも悪しきも会うほどの者をみな集めたれば、婚礼の席は客にて満てり。王、客を見んとて入りきたり、ひとりの礼服を着けぬ者あるを見て、これに言う、『友よ、いかなれば礼服を着けずしてここに入りたるか』。彼、黙しいたり。ここに王、侍者らに言う、『その手足を縛りて外の暗きに投げいだせ、そこにて嘆き・歯がみすることあらん』。それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少なし」。

三位一体後第二十一主日

特禱

あわれみ深き主よ、御民の罪を赦し、これに安きを与え、その不義をことごとく清め、おだやかなる心をもって主に仕えしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　六章一〇―二〇

なんじら主にありてその大能の勢いによりて強かれ。悪魔のてだてに向かいて立ち得んために、神の武具をもてよろうべし。我らは血肉と戦うにあらず。政・権威、この世の暗きをつかさどるもの、天のところにある悪の霊と戦うなり。このゆえに神の武具をとれ、なんじら悪しき日に会いてあだに立ち向かい、すべての事を成就して立ち得んためなり。なんじら立つに真理を帯として腰に結び、正義を胸当として胸に当て、平和の福音の備えをくつとして足にはけ。このほかなお信仰の盾をとれ、これをもて悪しき者のすべての火矢を消すことを得ん。また救いのかぶとおよび御霊の剣、すなわち神の言葉をとれ。常にさまざまの祈りと願いとをなし、御霊によりて祈り、また目を覚ましてすべての聖徒のためにも願いてうまざれ。またわが口を開くとき、言葉を賜わり、はばからずして福音の奥義を示し、語るべきところをはばからず語り得るように、わがためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖につながれたり。

福音書　ヨハ　四章四六―五四

イエスまたガリラヤのカナに行きたもう、ここはさきに水をぶどう酒になしたまいしところなり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、イエスのユダヤよりガリラヤにきたりたまえるを聞き、御許にゆきて、カペナウムに下りその子を

いやしたまわんことを請う、子は死ぬるばかりなりしなり。ここにイエス言いたもう、「なんじらしるしと不思議とを見ずば、信ぜじ」。近臣言う、「主よ、わが子の死なぬうちにくだりたまえ」。イエス言いたもう、「帰れ、なんじの子は生くるなり」。彼はイエスの言いたまいしことを信じて帰りしが、くだる途中、しもべども行き会いて、その子の生きたる事を告ぐ。そのいえはじめし時を問いしに、「きのうの第七時に熱去れり」と言う。父その時の、イエスが、「なんじの子は生くるなり」と言いたまいし時と同じきを知り、しかしておのれも家の者もみな信じたり。これはイエス、ユダヤよりガリラヤに行きてなしたまえる第二のしるしなり。

三位一体後第二十二主日

特祷

主よ、絶えざる恵みをもって主の家族なる公会を守りたまえ。願わくは主の守りによりて、すべての災いを免れ、良き行ないをもって熱心に主に仕え、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ピリ　一章三―一一

我なんじらを思うごとに、つねになんじらすべてのために、願いのつどつど喜びて願いをなす。これなんじら初めの日より今に至るまで福音を広むることにあずかるがゆえなり。我はなんじらのうちに良きわざを始めたまいし者の、キリスト＝イエスの日までこれを全うしたもうべきことを確信す。わがかくもなんじらすべてを思うは当然の事なり、わがなわめにある時にも、福音を弁明してこれを堅うする時にも、なんじらはみな我とともに恵みにあずかるによりて、わが心にあればなり。我いかにキリスト＝イエスの心をもてなんじらすべてを恋い慕うか、そのあかしをなしたもう者は神なり。我は祈る、なんじらの愛、知識ともろもろの悟りとによりていやが上にも増し加わり、良し悪しをわきまえ知り、キリストの日に至るまでいさぎよくしてつまずくことなく、イエス＝キリストによる義の実をみたして、神の栄光と誉れとを現わさんことを。

福音書　マタ　一八章二一―三五

ここにペテロみもとにきたりて言う、「主よ、わが兄弟我に対して罪を犯さばいくた

び赦すべきか、七たびまでか」。イエス言いたもう、「いな我、『七たびまで』とは言わず、『七たびを七十倍するまで』と言うなり。このゆえに天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。計算を始めしとき、一万タラントの負債ある家来つれきたられしが、償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子とすべての持ち物とを売りて償うことを命じたるに、その家来ひれ伏し、拝して言う、『ゆるくしたまえ、さらばことごとく償わん』。その家来の主人、あわれみてこれを解き、その負いめを赦したり。しかるにその家来いでて、おのれより百デナリを負いたるひとりの同僚にあい、これを捕え、のどを締めて言う、『負いめを償え』。その同僚ひれ伏し、願いて、『ゆるくしたまえ、さらば償わん』と言えど、うけがわずして行き、その負いめを償うまでこれを獄舎に入れたり。同僚どもありし事を見ていたく悲しみ、行きてありしすべての事をその主人に告ぐ。ここに主人彼を呼びいだして言う、『悪しき家来よ、なんじ願いしによりて、かの負いめをことごとく赦せり。わがなんじをあわれみしごとく、なんじもまた同僚をあわれむべきにあらずや』。かくてその主人、怒りて、負いめをことごとく償うまで彼を獄卒にわたせり。もしなんじらおのおの心より

兄弟を赦さずば、わが天の父もまた、なんじらにかくのごとくなしたもうべし」。

三位一体後第二十三主日

特祷

信仰のもとにして我らの避け所、我らの力なる神よ、願わくは主の公会の祈りを聞こし召し、その信じて願うところを得させたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ピリ　三章一七―二一

兄弟よ、なんじらもろともに我になろうものとなれ、かつなんじらの模範となる我らに従いて歩むものを見よ。そは我しばしばなんじらに告げ、今また涙を流して告ぐるごとく、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。おのが腹を神となし、おのが恥を光栄となし、ただ地の事のみを思う。されど我らの国籍は天にあり、我らは主イエス＝キリストの救い主としてそのところよりきたりたもうを待つ。彼は万物をおのれに従わせ得る力によりて、我らのいやしきさまの

からだを変えて、おのが栄光のからだにかたどらせたまわん。

福音書 マタ 二二章一五―二二

ここにパリサイ人らいでて、いかにしてかイエスを言葉のわなにかけんと相はかり、その弟子らをヘロデ党の者どもとともにつかわして言わしむ、「師よ、我らは知る、なんじはまことにして、まことをもて神の道を教え、かつたれをもはばかりたもう事なし、人のうわべを見たまわぬゆえなり。されば我らに告げたまえ、みつぎをカイザルに納むるは良きか、悪しきか、いかに思いたもう」。イエスそのよこしまなるを知りて言いたもう、「偽善者よ、なんぞ我を試むるか。みつぎの金を我に見せよ」。彼らデナリ一つを持ちきたる。イエス言いたもう、「これはたれの形、たれのしるしなるか」。彼ら言う、「カイザルのなり」。ここに彼らに言いたもう、「さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」。彼らこれを聞きて怪しみ、イエスを離れて去り行けり。

三位一体後第二十四主日

特祷

主よ、大いなるあわれみをもって御民のとがを赦し、その弱きによりて犯せる罪のなわめを解きたまわんことを、救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コロ 一章三―一二

我らは常になんじらのために祈りて、我らの主イエス＝キリストの父なる神に感謝す。これキリスト＝イエスを信ずるなんじらの信仰と、すべての聖徒に対するなんじらの愛とにつきて聞きたればなり。かく聖徒を愛するは、なんじらのために天にたくわえあるものを望むによる。この望みのことはなんじらにおよべる福音のまことの言葉によりてなんじらがかつて聞きしところなり。この福音は全世界にもおよび、実を結びてますます大いになれり。なんじらが神の恵みを聞きて、まことにこれを知りし日よりこのかた、なんじらのうちにしかりしがごとし。なんじらが、我らとともにしもべたるエパフラスより学びたるは、この福音なり。彼はなんじらのためにキリストのまめやかなる役者にして、なんじらが御霊により愛を我らに告げたり。このゆ

えに我らこの事を聞きし日よりなんじらのために絶えず祈り、かつ求むるは、なんじら霊のもろもろの知恵と悟りとをもて神の御心をつぶさに知り、すべてのこと主を喜ばせんがために、その御心に従いて歩み、すべての良きわざによりて実を結び、いよいよ神を知り、また神の栄光の勢いに従いて賜うもろもろの力によりて強くなり、すべての事喜びて忍び、かつ耐え、しかして我らを光にある聖徒の嗣業にあずかるに足る者としたまいし父に感謝せん事なり。

福音書　マタ　九章一八―二六

イエスこれらのことを語りいたもうとき、見よ、ひとりの会堂司きたり、拝して言う、「わが娘いま死にたり。されどきたりて御手をこれにおきたまわば生きん」。イエス立ちて彼に伴いたもうに、弟子たちも従う。見よ、十二年血漏をわずらいいたる女、イエスのうしろにきたりて、御衣のふさにさわる。それは御衣にだにさわらば救われんと心のうちに言えるなり。イエスふり返り、女を見て言いたもう、「娘よ、心安かれ、なんじの信仰なんじを救えり」。女この時より救われたり。かくてイエス会堂司の家にいたり、笛吹く者と騒ぐ群衆とを見て言いたもう、「退け、少女は死にたるにあらず、いねたるなり」。人々イエスをあざ笑う。群衆のいだされしのち、入りてその手をとりたまえば、少女おきたり。このきこえあまねくその地に広まりぬ。

三位一体後第二十五主日には、顕現後第六主日の特祷・使徒書・福音書を用いる。第二十六主日のあるときは、第二十五主日に顕現後第五主日のものを用いる。六主日に顕現後第六主日のものを用いる。

降臨節前主日

特祷

主よ、願わくは御民の心を励まし、喜びて主の御わざにたより、その大いなる恵みによりて御助けにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エレ　二三章五―八

主言いたもう、「見よ、日きたらん、我ダビデのために一つの正しき枝をおこすべし。かれ王となり、統べ治めて栄え、地にて義と公平とを施すべし。その時ユダは救いを得、イスラエルは安きにおらん。その名は、『主われらの義』ととなえられん」。この

ゆえに主言いたもう、「見よ、人々、『イスラエルの子らをエジプトの地より導きいだし主は生きたもう』と言わずして、『イスラエルの家の末を北の国および追いやられし国々より導きいだし主は生きたもう』と言う日きたらん、彼らはおのれの国に住むべし」。

福音書 ヨハ 六章五―一四

イエス目をあげて大いなる群衆のきたるを見て、ピリポに言いたもう、「我らいずこよりパンを買いて、この人々に食わすべきか」。かく言いたもうはピリポを試むるためにて、みずからなさんとする事を知りたもうなり。ピリポ答えて言う、「二百デナリのパンありとも、人々少しずつ受くるになお足らじ」。弟子のひとりにてシモン＝ペテロの兄弟なるアンデレ言う、「ここにひとりのわらべあり、大麦のパン五つと小さきさかな二つとを持てり、されどこの多くの人にはなににかならん」。イエス言いたもう、「人々を座せしめよ」。そのところに多くの草ありて人々座せしが、その数おおよそ五千人なりき。ここにイエス、パンを取りて謝し、座したる人々に分かち与え、またさかなをもしかなして、その欲するほど与えたもう。人々の飽きたるのち、弟子たちに言いたもう、「すたるもののなきように裂きたる余りを集めよ」。すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの裂きたるを食らいしものの余り、十二のかごに満ちたり。人々そのなしたまいししるしを見て言う、「げにこれは世にきたるべき預言者なり」。

使徒聖アンデレ日

特祷

全能の神よ、主は聖なる使徒アンデレに直ちに御子イエス＝キリストの召しに従う恵みを与えたまえり。願わくは我ら御言葉によりて召しをこうむりたる者も、直ちにこれに従い、おのれをささげて、主の命じたもうところを行のうことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ロマ 一〇章九―二一

なんじ口にてイエスを主と言いあらわし、心にて神のこれを死人のうちよりよみがえらせたまいしことを信ぜば、救わるべし。それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救わるるなり。聖書に言う、「すべて彼を信ずる者ははずかしめられじ」

と。ユダヤびとギリシヤびととの分かちなし、同一の主は万民の主にましまして、すべて呼び求むる者に対して豊かなり。「すべて主の御名を呼び求むる者は救わるべし」とあればなり。されどいまだ信ぜぬ者をいかで呼び求むることをせん。いまだ聞かぬ者をいかで信ずることをせん。宣べ伝うる者なくばいかで聞くことをせん。つかわされずばいかで宣べ伝うることをせん。「ああ麗わしきかな、良き事を告ぐる者の足よ」としるされたるごとし。されど、みな福音に従いしにはあらず。イザヤ言う、「主よ、我らに聞きたることをたれか信ぜし」。かく信仰は聞くにより、聞くはキリストの言葉による。されど我言う、彼ら聞えざりしか、しからず。「その声は全地にゆきわたり、その言葉は世界のはてにまでおよべり」。我また言う、イスラエルは知らざりしか。まずモーセ言う、「われ民ならぬ者をもてなんじらにねたみを起こさせ、愚かなる民をもてなんじらを怒らせん」。またイザヤはばからずして言う、「我を求めざる者に、われ見いだされ、我を尋ねざる者に我あらわれたり」。されどイスラエルにつきては、「われ従わずして言いさかろう民に、ひねもす手を伸べたり」と言えり。

福音書　マタ　四章一八―二二

イエス、ガリラヤの海べを歩みて、ふたりの兄弟ペテロと言うシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ちおるを見たもう、彼らは漁師なり。これに言いたもう「我に従いきたれ、さらばなんじらを人を生けどる者となさん」。彼らただちに網を捨てて従う。さらに進みゆきて、またふたりの兄弟、ゼベタイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイとともに舟にありて網を繕いおるを見て呼びたまえば、ただちに舟と父とをおきてしたごう。

使徒聖トマス日

特祷

限りなく生ける全能の神よ、主は聖なる使徒トマスに御子のよみがえりを疑うことを許して福音のあかしをますます堅くしたまえり。願わくは我らに御子イエス＝キリストを疑わざる全き信仰を与えて、御前に責むべき所なからしめたまえ。父と聖霊とともに世々栄光ある主イエス＝キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

十二月二十一日

使徒書　エペ　二章一九―二二

さればなんじらはもはや、旅びとまた宿りびとにあらず、聖徒と同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト＝イエスみずからそのすみの親石たり。おのおのの建物、彼にありて建て合わせられ、いやましに聖なる宮、主のうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊によりて神の御住まいとなるなり。

福音書　ヨハ　二〇章二四―三一

イエスきたりたまいし時、十二弟子のひとり、デドモと称するトマスともにおらざりしかば、ほかの弟子これに言う、「我ら主を見たり」。トマス言う、「我はその手にくぎの跡を見、わが指をくぎの跡に差し入れ、わが手をそのわきに差し入るるにあらずば信ぜじ」。八日ののち弟子たちまた家におり、トマスもともにおりて戸を閉じおきしに、イエスきたり、彼らのなかに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。またトマスに言いたもう、「なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、なんじの手を伸べてわがわきに差し入れよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ」。トマス答えて言う、「わが主よ、わが神よ」。イエス言いたもう、「なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸いなり」。この書にしるさざるほかの多くのしるしを、イエス弟子たちの前にて行ないたまえり。されどこれらの事をしるしはなんじらをしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により命を得しめんがためなり。

使徒聖パウロ改心日

特祷

神よ、主は使徒聖パウロの宣教によりて福音の光を全世界に照らしたまえり。願わくはその改心を記憶し、これを感謝して、その宣べ伝えし聖なる教えに従うことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使　九章一―二二

サウロは主の弟子たちに対して、なおおびやかしと殺害との気を満たし、大祭司にいたりて、ダマスコにある諸会堂への添書を請う。この道の者を見いだしたさば、男女にか

一月二十五日

かわらず縛りてエルサレムに引かんためなり。行きてダマスコに近づきたるとき、たちまち天より光いでて、彼をめぐり照らしたれば、かれ地に倒れて、「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」という声を聞く。彼言う、「主よ、なんじはたれぞ」。答えたもう、「我はなんじが迫害するイエスなり。起きて町に入れ、さらばなんじなすべき事を告げらるべし」。同行の人々、物言うことあたわずして立ちたりしが、声は聞けどもたれをも見ざりき。サウロ地より起きて目をあけたれどなにも見えざれば、人その手を引きてダマスコに導き行きしに、三日のあいだ見えず、また飲み食いせざりき。さてダマスコにアナニヤというひとりの弟子あり、幻のうちに主言いたもう、「アナニヤよ」。答う、「主よ、我ここにあり」。主言いたもう、「起きて真直という町に行き、ユダの家にてサウロというタルソびとを尋ねよ。見よ、彼は祈りおるなり。またアナニヤという人の入りきたりて、ふたたび見ゆることを得しめんために、手をおのがうえにおくを見たり」。アナニヤ答う、「主よ、われ多くの人よりこの人につきて聞きしに、彼がエルサレムにてなんじの聖徒に害を加えしこといかばかりぞや。またここにても、すべてなんじの御名を呼ぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり」。主言いたもう、「行け、この人は異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前にわが名を持ち行くわが選びの器なり。我かれにわが名のためにいかに多くの苦しみを受くるかを示さん」。ここにアナニヤ行きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う、「兄弟サウロよ、主すなわちなんじがきたる道にて現われたまいしイエス、我をつかわしたまえり。なんじがふたたび見ることを得、かつ聖霊にて満たされんためなり」。ただちに彼の目より、うろこのごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり。サウロは数日の間ダマスコの弟子たちとともにおり、ただちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣べたり。聞く者みな驚きて言う、「こはエルサレムにてこの名を呼ぶ者をそこないし人ならずや、またここにきたりしも、これを縛りて祭司長らのもとに引き行かんがためならずや」。サウロますます力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤびとを言い伏せたり。

福音書 マタ 一九章二七―三〇

ここにペテロ答えて言う、「見よ、我らいっさいを捨ててなんじに従えり、されば

にを得べきか」。 イエス彼らに言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、世あらたまりて**人の子**その栄光の位に座するとき、我に従えるなんじらもまた十二の位に座して**イスラエル**の十二のやからをさばかん。またおおよそわが名のためにあるいは家、あるいは兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、あるいは母、あるいは子、あるいは田畑を捨つる者は数倍を受け、またとこしえの命を継がん。されど多くの先なる者あとに、あとなる者先になるべし」。

被献日

特祷

限りなく生ける全能の神よ、この日、宮にてひとりの御子は我らと同じ肉体にてささげられたまえり。願わくは我らも心を清められ、御前にささげられんことを、主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　マラ　三章一―五

見よ、我わが使いをつかわす、彼わが前に道を備えん。なんじらの求むる主はにわかにその宮にきたりたまわん。見よ、なんじの喜ぶ契約の使いきたるべしと万軍の主言いたもう。されどそのきたりたもう日にはたれか立ち得ん。彼は銀を吹き分くる者のごとく、布さらしのせっけんのごとくなれか耐えん、その現われたもう時にはたらん。彼は銀を吹き分けてこれを清むる者のごとく座し、レビの子らを清め、金銀のごとく清くしたまわん。しかして彼らは義をもて主に供え物をささげん。その時ユダとイスラエルとの供え物は昔の日のごとく、いにしえの年のごとく主に喜ばれん。我またなんじらに近づきてさばきをなし、魔術者、姦淫を行のう者、偽りて誓う者、雇いびとの価をかすめ、やもめ、また孤児をしいたげ、異邦人の義をまげ、我を恐れぬ者どもに向かいてすみやかにあかしびとともならんと、万軍の主言いたもう。

福音書　ルカ　二章二二―四〇

モーセの律法に定めたる清めの日満ちたれば、彼ら幼な子を携えて、エルサレムにのぼる。これは主の律法に、「すべてうい子に生まるる男子は主につける聖なる者となえらるべし」としるされたるごとく、幼な子を主にささげ、また主の律法に、「山ばと、一つがいあるいは家ばとのひな二羽」と言いたるに従いて、いけにえを供えん

ためなり。見よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上にいます。また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、このとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法のならわしに従いて、行なわんとてきたりたれば、シメオン、イエスを取りいだき、神をほめて言う、「主よ、今こそ御言葉に従いてしもべを安らかに行かしめたもうなれ。わが目は、はや主の救いを見たり。これもろもろの民の前に備えたまいし者、異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり」。かく幼な子につきて語ることを、その父母あやしみいたれば、シメオン彼らを祝して母マリヤに言う、「見よ、この幼な子は、イスラエルの多くの人のあるいは倒れ、あるいは立たんために、また言い逆いを受くるしるしのためにおかる。――剣なんじの心をも刺し貫くべし――これは多くの人の心の思いの現われんためなり」。ここにアセルのやからパヌエルの娘に、アンナという預言者あり、年いたく老ゆ。おとめのとき、夫にゆきて七年ともにおり、八十四年やもめたり。宮を離れず、夜も昼も、断食と祈祷とをなして神に仕う。この時進み寄りて、神に感謝し、またすべてエルサレムの贖いを待ちのぞむ人に、幼な子のことを語れり。さて主の律法に従いて、すべての事を果たしたれば、ガリラヤに帰り、おのが町ナザレに至れり。幼な子はやがて成長して健やかになり、知恵みち、かつ神の恵みその上にありき。

使徒聖マッテヤ日

二月二十四日

特祷

全能の神よ、主は御子イエスをわたしらしユダのかわりに忠義なるしもべマッテヤを選び、十二使徒につらねたまえり。願わくは常に公会を守りて偽りの使徒を防ぎ、忠実なる牧者をして、これを治め導かしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使一章一五―二六

そのころペテロ、百二十名ばかりともに集まりて群れをなせる兄弟たちのなかに立ちて言う、「兄弟たちよ、イエスを捕うる者どもの手引きとなりしユダにつきて、聖霊ダビデの口によりてあらかじめ言いたまいし聖書は、かならず成就せざるを得ざりしな

り。彼は我らのうちに数えられ、この務めにあずかりたればなり。（この人は、かの不義の価をもて地所を得、またうつ伏しに落ちて真中より裂けて腹わたみな流れいでたり。この事エルサレムに住むすべての人に知られて、その地所は国言葉にてアケルダマととなえらる、血の地所との義なり）。それは詩篇にしるして、『かれの住みかは荒れ果てよ、人その内に住まわざれ』と言い、また、『その務めはほかの人に得させよ』と言いたり。されば主イエス我らのうちに行き来したまいし間、すなわちヨハネのバプテスマより始まり、我らを離れて挙げられたまいし日に至るまで、つねに我らとともにありしこの人々のうちひとり、我らとともに主のよみがえりの証人となるべきなり」。ここにバルサバととなえられ、またの名をユストと呼ばるるヨセフおよびマッテヤのふたりをあげ、祈りて言う、「すべての人の心を知りたもう主よ、ユダおのがところに行かんとてこの務めと使徒の職とより落ちたれば、そのあとを継がするに、このふたりのうちいずれを選びたもうか示したまえ」。かくてくじせしに、くじはマッテヤに当たりたれば、彼は十一の使徒に加えられたり。

福音書　マタ一一章二五―三〇

その時イエス答えて言いたもう、「天地の主なる父よ、われ感謝す、これらのことを賢き者、さとき者に隠してみどり子に現わしたまえり。父よ、しかり、かくのごときは御心にかなえるなり。すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父のほかになく、父を知る者は子また子の欲するままに現わすところの者のほかになし。すべて労する者、重荷を負う者、われにきたれ、我なんじらを休ません。我は柔和にして心低ければ、わがくびきを負いて我に学べ、さらば魂に休みを得ん。わがくびきはやすく、わが荷は軽ければなり」。

処女聖マリヤ蒙告日

特祷

主よ、天の使いの御告げによりて、御子イエス＝キリストの肉体となることを示したまえり。願わくは御恵みを我らの心に注ぎ、御子の苦しみと十字架のいさおにより て、そのよみがえりの栄光に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりていねがい奉る。アーメン

使徒書　イザ　七章一〇―一五

主アハズに告げて言いたもう、「なんじの神なる主にしるしを求めよ、あるいは深き所、あるいは上なる高き所に求めよ」。しかるにアハズ言う、「我はこれを求めじ、我は主を試むることをせじ」。イザヤ言う、「ダビデの家よ、なんじら聞け、人を煩わして小事となし、またわが神をも煩わさんとするか。このゆえに主みずからなんじらにしるしを与えたまわん。見よ、おとめはらみて子を生まん、その名をインマヌエルとのうべし。かれ悪をすて、善を選ぶことを知るころおいにいたりて、牛酪とはち蜜とを食らわん」。

福音書　ルカ　一章二六―三八

その六月目に、御使いガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる、おとめのもとに神よりつかわさる。このおとめは、ダビデの家のヨセフという人といいなずけせしおとめにて、その名をマリヤという。御使い、おとめのもとにきたりて言う、「めでたし、恵まるる者よ、主なんじとともにいませり」。マリヤこの言葉によりて、心いたく騒ぎ、かかるあいさつはいかなる事ぞと思いめぐらしたるに、御使い言う、「マリヤよ、恐るな、なんじは神の御前に恵みを得たり。見よ、なんじみごもりて男子を生まん、その名をイエスと名づくべし。彼は大いならん、いと高き者の子ととなえられん。また主たる神、これにその父ダビデの位を与えたまえば、ヤコブの家をとこしえに治めん。その国は終わることなかるべし」。マリヤ御使いに言う、「われいまだ人を知らぬに、いかにしてこの事のあるべき」。御使い答えて言う、「聖霊なんじに臨み、いと高き者の力なんじをおおわん。このゆえになんじが生むところの聖なる者は、神の子ととなえらるべし。見よ、なんじの親族エリサベツも、年老いたれど、男子をはらめり。うまずめといわれたる者なるに、今はみごもりてはや六月になりぬ。それ神の言葉にはあたわぬところなし」。マリヤ言う、「見よ、我は主のはしためなり。なんじの言葉のごとく、我に成れかし」。ついに御使い、はなれ去りぬ。

福音記者聖マルコ日

特祷

全能の神よ、主は福音記者聖マルコによりて、救いの道を公会に教えたまえり。願わ

四月二十五日

くは我ら益なき教えの風に動かさるることなく、御恵みによりて堅く福音の真理に立つことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　四章七―一六

我らはキリストの賜物の量りに従いて、おのおのめぐみを賜わりたり。されば言えることあり、「かれ高きところに登りしとき、多くのとりこをひきい、人々に賜物を賜えり」と。すでに登りしと言えば、まず地の低きところまで下りしにあらずや。下りし者はすなわちよろずの物に満たんために、もろもろの天の上にのぼりし者なり。彼はある人を使徒とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として与えたまえり。これ聖徒を全うして務めを行なわせ、キリストのからだを建て、我らをしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、また我らはもはやわらべならず、人の欺きごとと惑わしの手だてたる悪巧みとより起こるさまざまの教えの風に吹きまわされず、ただ愛をもてまことを保ち、育ちてすべてのこと、かしらなるキリストに達せんためなり。彼を元とし全身はすべての節々の助けにて整い、かつ連なり、肢体おのおの量りに応じて働くにより、そのからだ成長し、みずから愛によりて建てらるるなり。

福音書　ヨハ　一五章一―一一

我はまことのぶどうの木、わが父は農夫なり。おおよそ我にありて実を結ばぬ枝は、父これを除き、実を結ぶものは、いよいよ実を結ばせんためにこれを清めたもう。なんじらはすでに清し、わが語りたる言葉によりてなり。我におれ、さらば我なんじらにおらん。枝もし木におらずば、みずから実を結ぶことあたわぬごとく、なんじらも我におらずばまたしかり。我はぶどうの木、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの実を結ぶべし。なんじら我を離るれば、なにごともなしあたわず、人もし我におらずば、枝のごとく外に捨てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。なんじらもし我におり、わが言葉なんじらにおらば、何にても望みに従いて求めよ、さらば成らん。なんじら多くの実を結ばば、わが父は栄光を受けたもうべし。しかしてなんじらわが弟子とならん。父の我を愛したまいしごとく、我もなんじらを愛したり、わが愛におれ。なんじら、もし、わが戒めをまもらば、わが愛におらん、我わが父の戒めを守りて、その愛におるがごとし。我これらの事を語

りたるは、わが喜びのなんじらにあり、かつなんじらの喜びの満たされんためなり。

使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日

五月一日

特　祷

全能の神よ、限りなき命をうるは、まことに主を知るにあり。願わくは我ら御子イエス＝キリストは道なり、真理なり、命なりと悟り、聖なる使徒ピリポ・ヤコブの跡を踏みて、限りなき命に至る道を絶えず歩ましめたまえ。御子イエス＝キリストにより てこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヤコ一章一―一三

神および主イエス＝キリストのしもべヤコブ、散りおる十二のやからの平安を祈る。

わが兄弟よ、なんじらさまざまの試みに会うとき、ひたすらこれを喜びとせよ。そは なんじらの信仰のためしは、忍耐を生ずるを知ればなり。忍耐をして全き働きをなさ しめよ。これなんじらが全く、かつ備わりて欠くるところなからんためなり。なんじ らのうちもし知恵の欠くる者あらば、とがむることなく、また惜しむことなく、すべ

ての人に与うる神に求むべし、さらば与えられん。ただし疑うことなく、信仰をもて求むべし。疑う者は、風に動かされてひるがえる海の波のごときなり。かかる人は、主よりなにものをも受くと思うな。かかる人は二心にして、すべてその歩むところの道、定まりなし。低き兄弟は、おのが高くせられたるを喜べ、富める者は、おのが低くせられたるを喜べ。そは草の花のごとく、過ぎ行くべければなり。日いで熱き風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗わしき姿ほろぶ。富める者もまたかくのごとく、その道の半ばにしておのれまず消え失せん。試みに耐うるものは幸いなり、これをよしとせらるる時は、主のおのれを愛するものに、約束したまいし命の冠を受くべければなり。

福音書　ヨハ一四章一―一四

イエス弟子たちに言いたもう、「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みかおおし、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えに行く。もし行きてなんじらのために所を備えば、またきたりてなんじらをわがもとに迎えん、わがおるところになんじらもおらんためなり。なん

じらはわが行くところに至る道を知る」。トマス言う、「主よ、いずこに行きたもうかを知らず、いかでその道を知らんや」。イエス彼に言いたもう、「我は道なり、真理なり、命なり、我によらではたれにても父のみもとにいたる者なし。なんじら、もし我を知りたらば、わが父をも知りしならん。今よりなんじらこれを知る、すでにこれを見たり」。ピリポ言う、「主よ、父を我らに示したまえ、さらば足れり」。イエス言いたもう、「ピリポ、我かく久しくなんじらとともにおりしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、いかなれば、『我らに父を示せ』と言うか。我の父におり、父の我にいたもうことを信ぜぬか。わがなんじらにいう言葉はおのれによりて語るにあらず、父われにいましてみわざを行ないたもうなり。わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我にいたもうなり。もし信ぜずば、わがわざによりて信ぜよ。まことにまことになんじらに告ぐ、我を信ずる者はわがなすわざをなさん、かつこれよりも大いなるわざをなすべし、われ父に行けばなり。なんじらがわが名によりて願うことは、我みなこれをなさん、父、子によりて栄光を受けたまわんためなり。なにごとにてもわが名によりて我に願わば、我これを成すべし」。

使徒聖バルナバ日

特祷

聖なる使徒バルナバに聖霊の殊なる賜物をもって我らを富ませ、又これを用いて常に主の栄光を現わさせたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　使一一章二二―三〇

この事エルサレムにある教会に聞えたれば、バルナバをアンテオケにつかわす。彼きたりて、神の恵みを見て喜び、彼らに、みな心を堅くして主におらんことを勧む。彼は聖霊と信仰とに満ちたる良き人なればなり。ここに多くの人々、主に加わりたり。かくてバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに行き、彼に会いてアンテオケに伴いきたり、ふたりともに一年のあいだかしこの教会の集りにいでて多くの人を教う。弟子たちのキリステアンととなえらるることはアンテオケより始まれり。そのころエルサレムより預言者たちアンテオケに下る。そのうちのひとりアガボと言うもの立ちて、

大いなるききんの全世界にあるべきことを御霊によりて示せるが、はたしてクラウデオの時に起これり。ここに弟子たちおのおのの力に応じてユダヤに住む兄弟たちに助けを送らん事をさだめ、ついにこれを行ない、バルナバおよびサウロの手に託して長老たちに贈れり。

福音書　ヨハ　一五章一二―一六

イエス言いたもう、「わが戒めはこれなり、わがなんじらを愛せしごとく互いに相愛せよ。人その友のためにおのれの命を捨つる、これより大いなる愛はなし。なんじらもしわが命ずる事を行なわば、わが友なり。今よりのち我なんじらをしもべと言わず、しもべは主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、わが父に聞きしすべてのことをなんじらに知らせたればなり。なんじら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。しかしてなんじらの行きて実を結び、かつその実の残らんために、またおおよそわが名によりて父に求むるものを、父の賜わんためになんじらを立てたり」。

施洗者聖ヨハネ誕生日

特祷

全能の神よ、主はくすしき摂理をもって、そのしもべ施洗者ヨハネを生まれしめ、これをつかわして悔い改めの教えを宣べ、キリストの道を備えしめたまえり。願わくは我らその教えに従いて、その行ないにならいて常に真理を語り、はばからずして悪を責め、道のために苦しみを忍ぶことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　イザ　四〇章一―一一

なんじらの神言いたもう、「慰めよ、わが民を慰めよ。ねんごろにエルサレムに語りて呼ばわれ、なんじの不義はすでに赦され、なんじのもろもろの罪は主の御手より倍したる報いを受けたり」。呼ばわる者の声あり、いわく「荒れ野にて主の道をそなえ、さばくにて我らの神のために大路を直くせよ。すべての谷は高く、すべての山と岡とは低くせられ、曲がりたるは直く、けわしきは平かに

六月二十四日

にせらるべし。かくて主の栄光あらわれ、人みなともにこれを見ん。主の口これを語りたまえるなり」。声あり、いわく、「呼ばわれ」。我いう、「なにと呼ばわるべきか」。「人はみな草なり、その栄華はすべて野の草の花のごとし。草は枯れ、花はしぼむ、主の息その上を吹けばなり。げに民は草なり、草は枯れ、花はしぼむ。されど我らの神の言葉はとこしえに立たん」。ああ良きおとずれをシオンに告ぐる者よ、高き山にのぼれ。良きおとずれをエルサレムに告ぐる者よ、力をつくして声をあげよ、声をあげて恐るな。ユダの町々に告げて、「なんじらの神を見よ」と言え。見よ、神なる主すらをのごとくきたり、そのかいなにて統べ治めたまわん。報いはその御手にあり、価はその御前にあり。主は牧者のごとくその群れを養い、かいなにて小羊をいだき、これをそのふところに入れて携え、乳をふくますものをやわらかに導きたまわん。

福音書 ルカ 一章五七―八〇

さてエリサベツ産むときみちて、男子を産みたれば、そのもよりのもの親族の者どもも主の大いなるあわれみをエリサベツにたれたまいしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。八日目になりて、その子に割礼を行なわんとて人々きたり、父の名にちなみてザカリヤと名づけんとせしに、母は答えて言う、「いな、ヨハネと名づくべし」。彼ら言う、「なんじの親族のうちにはこの名をつけたる者なし」。しかして父にこうべにて示し、いかに名づけんと思うか、問いたるに、ザカリヤ書き板を求めて、「その名はヨハネなり」と書きしかば、みな怪しむ。ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物言いて神をほめたり。もよりに住む者みな恐れをいだき、またすべてこれらの事あまねくユダヤの山里に言いはやされたれば、聞く者みなこれを心にとめて言う、「この子はいかなる者にか成らん」。主の手かれとともにありしなり。かくて父ザカリヤ聖霊にて満たされ預言して言う、「ほむべきかな、主イスラエルの神、その民を顧みて贖いをなし、我らのために救いの角を、そのしもべダビデの家に立てたまえり。これぞいにしえより聖預言者の口をもて言いたまいしごとく、我らをあだより、すべて我らを憎む者の手より、取りいだしたもう救いなる。我らの先祖にあわれみをたれ、その聖なる契約をおぼし、我らの先祖アブラハムに立てたまいし御誓いを忘れずして、我らをあだの手より救い、生涯、主の御前に、聖と義とをもて恐れなく仕えしめたもうなり。幼な子よ、なんじはいと高き者の預言者ととなえられん。これ主の御前に先立ち

行きてその道を備え、主の民に罪の赦しによる救いを知らしむればなり。これ我らの神の深きあわれみによるなり。このあわれみによりて、あしたの光、上より臨み、暗きと死の陰とに座する者を照らし、我らの足を平和の道に導かん」。かくて幼な子はややに成長し、その霊強くなり、イスラエルに現わるる日まで荒れ野にいたり。

使徒聖ペテロ・聖パウロ日　六月二十九日

特　祷

全能の神よ、主は御子イエス＝キリストにより、使徒聖ペテロにもろもろの良き賜物を授け、主の群れを飼うことを命じたまえり。願わくは、すべての牧者は忠実に御言葉を宣べ、信徒はその教えに従い、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

神よ、主は使徒聖パウロの伝道により多くの異邦人を公会につらねたまえり。願わくは我らこの聖徒を敬いて殉教を記念する者も、その良き模範にならいて、熱心に御名を宣べ伝うることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

使徒書　使　一二章一―一一

その頃ヘロデ王、教会のうちのある人どもを苦しめんとして手を下し、剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。この事ユダヤびとの心にかなえるを見て、またペテロをも捕う、ころは除酵祭の時なりき。すでに捕えて獄舎に入れ、過越ののちに民の前に引きいださんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に渡してこれを守らせたり。かくてペテロは獄舎のなかに捕われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。ヘロデこれを引きいださんとするその前の夜、ペテロは二つの鎖にてつながれ、ふたりの兵卒のあいだに眠り、番兵らは門口にいて獄舎を守りたるに、見よ、主の使いペテロのかたわらに立ちて、光室内にかがやく。御使い彼のわきをたたき、さまして言う、「とく起きよ」。かくて鎖その手より落ちたり。御使い言う、「帯をしめ、くつをはけ」。彼そのごとくしたれば、また言う、「上着をまといて我に従え」。ペテロいでて従いしが、御使いのする事のまことなるを知らず、幻を見るならんと思う。かくて第

一、第二の固めを過ぎて町に入るところの鉄の門に至れば、門おのずから彼らのために開け、相ともにいでて一つの通りを過ぎしとき、ただちに御使い離れたり。ペテロ我にかえりて言う、「われ今まことに知る、主その使いをつかわしてヘロデの手、およびユダヤの民のすべて思い設けし事より、我を救いいだしたまいしを」。

福音書 マタ 一六章一三―一九

イエス、ピリポ＝カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問いて言いたもう、「人々は人の子をたれと言うか」。彼ら言う、「ある人はバプテスマのヨハネ、ある人はエリヤ、ある人はエレミヤ、また預言者のひとりか」。彼らに言いたもう、「なんじらは我をたれと言うか」。シモン＝ペテロ答えて言う、「なんじはキリスト、生ける神の子なり」。イエス答えて言いたもう、「バルヨナ＝シモン、なんじは幸いなり、なんじにこれを示したるは血肉にあらず、天にいますわが父なり。我はまたなんじに告ぐ、なんじはペテロなり、我この岩の上にわが教会を建てん、よみの門はこれに勝たざるべし。われ天国のかぎをなんじに与えん、おおよそなんじが地にてつなぐところは、天にてもつなぎ、地にて解くところは天にても解くなり」。

使徒聖ヤコブ日

特祷

あわれみ深き神よ、使徒聖ヤコブが御子イエス＝キリストに召されし時、その父を離れ、すべての持ち物をすてて直ちに従いしごとく、我らも世と肉の悪欲を捨て、常に喜びて主の戒めに従わしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使 一二章二―一二章三

そのころエルサレムより預言者たちアンテオケに下る。そのうちのひとりアガボと言うもの立ちて、大いなるききんの全世界にあるべきことを御霊によりて示せるが、はたしてクラウデオの時に起これり。ここに弟子たちおのおのの力に応じてユダヤに住む兄弟たちに助けをおくらん事をさだめ、ついにこれを行ない、バルナバおよびサウロの手に託して長老たちに贈れり。そのころヘロデ王、教会のうちのある人どもを苦しめんとして手を下し、剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。この事ユダヤびとの

心にかないたるを見て、またペテロをも捕う。

福音書　マタ二〇章二〇―二八

ここにゼベダイの子らの母、その子らとともにみもとにきたり、拝してなに事か求めんとしたるに、イエス彼に言いたもう、「なにを望むか」。かれ言う、「このわがふたりの子がなんじの御国にて、ひとりはなんじの右に、ひとりは左に座せんことを命じたまえ」。イエス答えて言いたもう、「なんじらは求むるところを知らず、わが飲まんとする杯を飲みうるか」。彼ら言う、「うるなり」。イエス言いたもう、「げになんじらはわが杯を飲むべし、されどわが右左に座することは、これ我の与うべきものならず、わが父より備えられたる人こそ与えらるるなれ」。十人の弟子これを聞き、ふたりの兄弟の事によりて憤る。イエス彼らを呼びて言いたもう、「異邦人の君のその民をつかさどり、大いなる者の民の上に権をとる事はなんじらの知るところなり。なんじらのうちにてはしからず、なんじらのうちに大いならんと思う者は、なんじらの役者となり、かしらたらんと思う者はなんじらのしもべとなるべし。かくのごとく人の子のきたれるも仕えらるるためにあらず、かえって仕うることをなし、また多くの人の贖いとしておのが命を与えんためなり」。

変容貌日

特祷

神よ、主は選びたまいしあかし人に、御姿のくすしく変わり、御衣の白く輝けるひとりの御子を、山の上にて現わしたまえり。願わくは我らをあわれみ、この世の心づかいを離れて、栄光の王の麗わしきを仰ぎ見ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ペテ後　一章一三―一八

我はなおこの幕屋におるあいだ、なんじらに思いいださせて励ますを正当なりと思う。そは我らの主イエス＝キリストの我に示したまえるごとく、我わが幕屋を脱ぎ去ることのすみやかなるを知ればなり。我またなんじらをしてわが世を去らん後にも、常にこれらのことを思いいださせんと努むべし。我らはわれらの主イエス＝キリスト

のがと、きたりたもう事とをなんじらに告ぐるに、巧みなる造り話を用いざりき、わ**れらは親**しくそのみいつを見し者なり。いとも尊き栄光のうちより声いでて、「これは**わがいつくしむ子**なり、我これを喜ぶ」と言いたまえるとき、主は父なる神より尊き**と栄光**とを受けたまえり。我らも彼とともに聖なる山にありしとき、天よりいずるこの声を聞けり。

福音書　マタ　一七章一―八

六日ののち、イエス、ペテロ、ヤコブおよびヤコブの兄弟ヨハネをひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。かくて彼らの前にてその姿変わり、その顔は日のごとく輝き、そのころもは光のごとく白くなりぬ。見よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現わる。ペテロ差しいでてイエスに言う、「主よ、我らのここにおるはよし。御心ならば我ここに三つのいおりを造り、一つをなんじのため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん」。彼なお語りおるとき、見よ、光れる雲、彼らをおおう。また雲より声あり、いわく、「これはわがいつくしむ子、わが喜ぶ者なり、なんじらこれに聞け」。弟子たちこれを聞きて倒れ伏し、恐るることはなはだし。イエスそのもとにきたり、これにさわりて、「起きよ、恐るな」と言いたまえば、彼ら目をあげしに、イエスひとりのほかはたれも見えざりき。

使徒聖バルトロマイ日

特祷

とこしえにいます全能の神よ、主は使徒聖バルトロマイに御言葉を信じてこれを宣べ伝うる恵みを与えたまえり。願わくは主の公会も御言葉を受け、これを愛し、これを宣べ伝うることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書　使　五章一二―一六

使徒たちの手によりて多くのしるしと不思議と民のうちに行なわれたり。彼らはみな心を一つにして、ソロモンの廊にあり。ほかの者どもはあえて近づかず、民は彼らをあがめたり。信ずるものは男女ともますますおおく主につけり。ついには人々、病める者を大路にかききたり、寝台または床の上におく。これらのうちたれにもせよ、ペ

八月二十四日

テロの過ぎん時、その影になりとおおわれんとてなり。またエルサレムのまわりの町より多くの人々、病める者、汚れし霊に悩まされたる者を携えきたりてつどいたりしが、皆いやされたり。

福音書 ルカ 二一章二四―三〇

弟子たちの間に、おのれらのうち、たれか大いならんとの争いおこりたれば、イエス言いたもう、「異邦人の王は、その民をつかさどり、また民を支配する者は、恩人となえらる。されどなんじらはしかあらざれ、なんじらのうち大いなる者は、若き者のごとく、かしらたる者は仕うる者のごとくなれ。食事の席に着く者ならずや。されど我はなんじらのうちにて仕うる者のごとし。なんじらはわが試みのうちに絶えず我とともにおりし者なれば、わが父の我に任じたまえるごとく、我もまたなんじらに国を任ず。これなんじらのわが国にてわが食卓に飲み食いし、かつ位に座してイスラエルの十二のやからをさばかんためなり」。

福音記者 使徒聖マタイ日

特祷

全能の神よ、主は御子をもって、みつぎとりマタイを召して使徒となし、福音記者となしたまえり。願わくは我らをして世のたからをむさぼる心を捨てて、御子に従わしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ後 四章一―六

このゆえに我らあわれみをこうむりてこの務めを受けたれば、気落ちせず、恥ずべき隠れたる事をすて、悪だくみに歩まず、神の言葉をみださず、まことを現わして神の前におのれをすべての人の良心にすすむるなり。もし我らの福音おおわれおらば、滅ぶる者におおわれおるなり。この世の神はこれらの不信者の心をくらまして、神のかたちなるキリストの栄光の福音の光を照らさざらしめたり。我らはおのれの事を宣べず、ただキリスト＝イエスの主たる事と、我らがイエスのためになんじらのしもべた

る事とを宣ぶ。光、やみより照りいでよとのたまいし神は、イエス＝キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照らしたまえるなり。

福音書　マタ　九章九―一三

イエスここより進みて、マタイという人の収税所に座しおるを見て、「我に従え」と言いたまえば、立ちて従えり。家にて食事の席につきいたもうとき、見よ、多くの取税人、罪びとらきたりて、イエスおよび弟子たちとともにつらなる。パリサイびとこれを見て弟子たちに言う、「なにゆえなんじらの師は、取税人、罪びとらとともに食するか」。これを聞きて言いたもう、「健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。なんじら行きて学べ、『我あわれみを好みて、いけにえを好まず』とは、いかなる心ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとてきたれり」。

聖ミカエル及び諸天使日

特祷

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもって天の使いと世の人との位を立て、その務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる御使いに命じて、地にある我らを守らしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　黙　一二章七―一二

天にいくさ起これり、ミカエル及びその使いたち竜と戦う。竜もその使いたちもこれと戦いしが、勝つことあたわず、天には、はやそのおる所なかりき。かの大いなる竜、すなわち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界を惑わす古きへびは落とされ、地に落とされたり。我また天に大いなる声ありて、「我らの神の救いと力と国と神のキリストの権威とは、今すでにきたれり。我らの兄弟を訴え、夜昼われらの神の前に訴うるもの落とされたり。しかして兄弟たちは小羊の血とおのがあかしの言葉とによりて勝ち、死に至るまでおのが命を惜まざりき。このゆえに天および天に住める者よ、喜べ、地と海とは災いなるかな、悪魔おのが時のしばしなるを知り、大いなる憤りをいだきてなんじらのもとに下りたればなり」と言うを聞けり。

福音書　マタ　一八章一―一〇

そのとき弟子たち、イエスにきたりて言う、「しからば天国にて大いなるはたれか」。イエス幼な子を呼び、彼らのなかにおきて言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、もしなんじら翻えりて幼な子のごとくならずば、天国に入るを得じ。されば己れにてもこの幼な子のごとくおのれを低うする者は、これ天国にて大いなる者なり。またわが名のために、かくのごときひとりの幼な子を受くる者は、我を受くるなり。されど我を信ずるこの小さき者のひとりをつまずかする者は、むしろ大いなるひきうすを首に掛けられ、海の深みに沈められんかた益なり。この世はつまずきあるによりて災いなるかな。つまずきはかならずきたらん、されどつまずきをきたらする人は災いなるかな。もしなんじの手、または足、なんじをつまずかせば、切りて捨てよ。かたわまたは足なえにて命に入るは、両手、両足ありてとこしえの火に投げ入れらるるよりもまさるなり。もしなんじの目、なんじをつまずかせば抜きて捨てよ。片目にて命に入るは、両目ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりもまさるなり。なんじら慎みてこの小さき者のひとりをも侮るな。我なんじらに告ぐ、彼らの御使いたちは天にありて、天にいますわが父の御顔を常に見るなり」。

福音記者 聖ルカ日

特祷

全能の神よ、主は福音によりて誉れを得たる医者ルカを召して福音記者となし、魂の医者となしたまえり。願わくは、その教えの薬をもって我らの魂の病をいやしたまわんことを、御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 テモ後 四章五―一五

なんじはなにごとにも慎み、苦しみを忍び、伝道者のわざをなし、なんじの務めを全うせよ。我は今、供え物として血をそそがんとす、わが去るべき時は近づけり。われ良き戦いを戦い、走るべき道のりを果たし、信仰を守れり。今よりのち義の冠わがために備われり。かの日に至りて正しきさばきぬしなる主、これを我に賜わん、ただに我にのみならず、すべてその現われを慕う者にも賜うべし。なんじつとめてすみやかに我にきたれ。デマスはこの世を愛し、我を捨ててテサロニケに行き、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行きて、ただルカのみ我とともにおるなり。なんじマ

十月十八日

ルコを連れてともにきたれ、かれは務めのために我に益あればなり。我テキコをエペソにつかわせり。なんじきたる時わがトロアスにてカルポのもとに残しおきたる上着を携えきたれ、また書物、ことに羊皮紙のものを携えきたれ。金細工人アレキサンデル大いに我を悩ませり。主はその行ないに従いて彼に報いたもうべし。なんじもまた彼に心せよ、彼ははなはだしく我らの言葉に逆いたり。

福音書　ルカ　一〇章一―七

この事ののち、主ほかに七十人をあげて、みずから行かんとする町々ところどころへ、おのれにさきだち、ふたりずつをつかわさんとして言いたもう、「刈り入れは多く、働きびとは少なし。このゆえに刈り入れの主に、働きびとをその刈り入れ場につかわしたまわんことを求めよ。行け、見よ、我なんじらをつかわすは、小羊をおおかみのなかに入るがごとし。さいふも袋もくつも携うな。また道にてたれにもあいさつすな。いずれの家に入るとも、まず平安この家にあれと言え。もし平安の子、そこにおらば、なんじらの祝する平安はその上にとどまらん。もししからずば、その平安はなんじらに帰らん。その家にとどまりて、与うる物を食い飲みせよ。働きびとのその価を得るはふさわしきなり」。

使徒聖シモン・聖ユダ日

特祷

全能の神よ、主は使徒と預言者の基の上に公会を建て、イエス＝キリストを隅の親石となしたまえり。願わくは彼らの教えによりて我ら心を一つにし、御心にかのう清き宮となることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書　ユダ　一―八

イエス＝キリストのしもべにしてヤコブの兄弟なるユダ、ふみを召されたる者、すなわち父なる神に愛せられ、イエス＝キリストのために守らるる者に送る。願わくは、あわれみと平安と愛と、なんじらに増さんことを。愛する者よ、われ我らがともにあずかる救いにつき、励みてなんじらに書き送らんとせしが、聖徒のひとたび伝えられたる信仰のために戦わんことを勧むる書を、なんじらに贈るを必要と思えり。そは敬

虔ならずして我らの神の恵みを好色に変え、唯一の主なる我らの主イエス＝キリストをいなむ者ども、もぐり入りたればなり。彼らがこのさばきを受くべきことは昔よりあらかじめしるされたり。なんじらは、もとよりすべての事を知れど、我さらになんじらをして思いいださしめんとする事あり、すなわち主エジプトの地より民を救いいだして、のちに信ぜぬ者をほろぼしたまえり。またおのが位を保たずしておのが居所を離れたる御使いを、大いなる日のさばきまで暗やみのうちに、とこしえの縄もて看守したまえり。ソドム、ゴモラおよびその回りの町々もまたこれと同じく、淫行にふけり、背倫の肉欲に走り、とこしえの火の刑罰をうけてかがみとせられたり。かくのごとく、かの夢みる者どもも肉を汚し、権威ある者を軽んじ、とうとき者をのしる。

福音書　ヨハ　一五章一七―二七

イエス弟子たちに言いたもう、「これらの事を命ずるは、なんじらの互いに相愛せんためなり。世もしなんじらを憎まば、なんじらよりさきに我を憎みたることを知れ。なんじらもし世のものならば、世はおのがものを愛するならん。なんじらは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。このゆえに世はなんじらを憎む。わがなんじらに、『しもべはその主人より大いならず』と告げし言葉をおぼえよ。人もし我を責めしならば、なんじらをも責め、わが言葉を守りしならば、なんじらの言葉をも守らん。すべてこれらのことをわが名のゆえになさん、それは我をつかわしたまいし者を知らぬによる。我きたりて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪言いのがるべきようなし。我を憎むものはわが父をも憎むなり。我もし、たれもいまだ行なわぬ事を彼らのうちに行なわざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今ははや我をもわが父をも見たり、また憎みたり。これは彼らの律法に、『人々ゆえなくして、我を憎めり』としるしたる言葉の成就せんためなり。父のもとよりわがつかわさんとする助け主、すなわち父よりいずる真理の御霊のきたらんとき、我につきてあかしせん。なんじらもまた初めより我とともにありたればあかしするなり」。

諸聖徒日

特　祷

全能の神よ、主は選びたまいし者を結び合わせ、御子・われらの主キリストのからだなる公会につらね、その交わりにあずからしめたまえり。願わくは我らに恵みを与え、主の聖徒の模範に従いて、常に清きことを行ない、ついに主を愛する者のために備えたまいし大いなる喜びにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　黙　七章二一―一二

我またほかのひとりの御使いの、生ける神の印を持ちて日のいずるかたより登るを見たり、かれ地と海とをそこのう権を与えられたる四人の御使いに向かい、大声に呼ばわりて言う、「われらが我らの神のしもべの額に印するまでは、地をも海をもそこのうえをも損なうな」。われ印せられたる者の数を聞きしに、イスラエルの子らのもろもろのやからのうちにて印せられたるもの合わせて十四万四千あり。ユダのやからのうちにて一万二千印せられ、ルベンのやからのうちにて一万二千、ガドのやからのうちにて一万二千、アセルのやからのうちにて一万二千、ナフタリのやからのうちにて一万二千、マナセのやからのうちにて一万二千、シメオンのやからのうちにて一万二千、レビのやからのうちにて一万二千、イサカルのやからのうちにて一万二千、ゼブルンのやからのうちにて一万二千、ヨセフのやからのうちにて一万二千、ベニヤミンのやからのうちにて一万二千印せられたり。この後われ見しに、見よ、もろもろの国・やから・民・国語のうちより、たれも数え尽くすことあたわぬ大いなる群衆、白き衣をまといて手に棕櫚の葉をもち、御位と小羊との前に立ち、大声に呼ばわりて言う、「救いは御位に座したもう我らの神と小羊とにこそあれ」。御使いみな御位および長老たちと四つの生き物との回りに立ちて、御位の前にひれ伏し神を拝して言う、「アーメン、賛美・栄光・知恵・感謝・尊き・力・勢い、世々限りなく我らの神にあれ、アーメン」。

福音書　マタ　五章一一―一二

イエス群衆を見て、山に登り、座したまえば、弟子たちもとにきたる。イエス口を開き、教えて言いたもう、「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。幸いなるかな、悲しむ者。その人は慰められん。幸いなるかな、柔和なる者。その人は地を継がん。幸いなるかな、義に飢えかわく者。その人は飽くことを得ん。幸いな

るかな、あわれみある者。その人はあわれみを得ん。幸いなるかな、心の清き者。その人は神を見ん。幸いなるかな、平和ならしむる者。その人は神の子となえられん。幸いなるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。わがために人、なんじらを罵り、また責め、偽わりてさまざまの悪しきことを言うときは、なんじら幸いなり。喜び喜べ、天にてなんじらの報いは大いなり。なんじらより先にありし預言者たちをも、かく責めたりき」。

聖洗式

聖洗式はなるべく主日またはその他の祝日の公祷のときに行なう。

幼な子は出生の後なるべく早く聖堂につれて来て、洗礼を受けさせなければならない。幼な子の洗礼には、おのおの教父母三人を立てる。男の子には教父二人、教母一人、女の子には教父一人、教母二人とする。壮年が洗礼を受けるときは、司祭は本人がキリスト教の要理を充分理解したかどうかを試問し、またこれに祈りと断食をもって、この聖奠を受けることを勧める。壮年の洗礼には少なくとも二人の教父母を立てる。

聖洗盤には清水を満たす。

司祭は次のように言う。洗礼を受ける者が幼な子である時は、〔　〕内の語を用い、壮年であるときは、〔　〕内の語を省く。両者がともに洗礼を受けるときは、その間に、必要に応じて「及び」を入れて用いる。

この人〔幼な子〕はすでに洗礼を受けしや否や

まだ受けていないときは、教父母は「いまだ受けず」とこたえ、明らかでないときは「明らかならず」と言う。

次に司祭は言う。

愛する兄弟よ、我らの救い主キリストの教えたまいしごとく、人は水と霊とによりて新たに生まれざれば神の国に入ることあたわず。ゆえになんじら父なる神に祈り、この人々をあわれみ、その生まれつかぬものを与え、水と聖霊との洗礼を授け、キリストの聖公会に入れ、その生きたる肢となしたまわんことを、ひたすら願うべし

勧告

特禱

ここで司祭は次の祈りをする。

とこしえにいます全能の神よ、大いなるあわれみによりて、このしもべを顧み、聖霊をもってこれを洗い、これを清め、これをして主の怒りをまぬかれ、キリストの公会なる箱舟に入らしめたまえ。願わくは信仰を堅くし、望みをいだき、愛を深くして、この世の荒波を越え、ついに限りなき命の岸に至りて、世々主とともに、みくらに座することを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖言

司祭　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

司祭　聖マタイの福音書第二十八章十八節以下の言葉をきくべし

会衆　主に栄光あらんことを

イエス進みきたり彼らに語りて言いたもう、「我は天にても地にても、すべての権を与えられたり。さればなんじら行きて、もろもろの国びとを弟子となし、父と子と聖霊の名によりてバプテスマを施し、わがなんじらに命ぜしすべての事を守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまで常になんじらとともにあるなり」。

会衆　主に感謝し奉る

感謝

次に一同左の感謝を唱える。

天の父・全能の神よ、我らを召して主の恵みを知る知識をさずけ、主を信ずる信仰を与えたまえることを慎みて感謝し奉る。願わくはこの信仰をいよいよ堅くしたまえ。また願わくはこの人々に聖霊を与えて、新たに生まれ限りなき救いの世継ぎとなることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう

主イエス＝キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

誓約

次に司祭は洗礼を受ける者に言う。洗礼を受ける者が幼な子のときは教父母に言う。

洗礼を受けんとて、ここにきたれる兄弟〔洗礼を受けさせんとて、この幼な子を連れきたれる兄弟〕よ、いま聞きしごとく、会衆はなんじら〔幼な子〕のために祈りをささげ、主イエス＝キリストなんじら〔幼な子〕を受け、なんじら〔幼な子〕の罪をゆるし、天の国と限りなき命を与えたまわんことを願えり。キリストは福音のうちに、この願いを許すことを約したまえり。ゆえになんじらも〔教父母なるなんじらも幼な子の成長して自らこれを約束しうるまでかわりて〕約束せざるべからず。されば我なんじらに問わん

ここで司祭は次のように問い、洗礼を受ける者はおのおの答える。幼な子のときは教父母がかわって答える。

問　なんじ悪魔とそのわざを捨て、この世の虚栄・貪欲を離れ、肉の悪欲を去り、これらのものに惑わざることを努むるか

答　我ことごとくこれを捨て、神の助けによりて惑わざることを努む

問　なんじ天地の造り主・全能の父なる神を信ずるか

答　なんじ又、そのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ずるか。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にしものうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん。なんじこれを信ずるか。なんじ又、聖霊を信ずるか。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ずるか

答　我すべてこれを堅く信ず

問　なんじこの信仰をもって洗礼を受くることを願うか

答　我これを願う

問　されば、なんじ生涯、神の御心に従い、その戒めを守ることを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

水の聖別

次に司祭は聖洗盤の水を聖別する。

司祭　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司祭　なんじら心を挙げよ
会衆　我ら心を主に挙げん
司祭　主なる神に感謝し奉るべし
会衆　そは正当にしてなすべきことなり
至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正当にしてなすべき務めなり。ことに主の愛子イエス＝キリストは我らの罪を赦さんがために、尊き御わきより水と血とを流し、又その弟子に命じ、なんじら行きて万国の民を弟子となし、父と子と聖霊の名によりてバプテスマを施せと仰せたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの会衆の祈りを聞こし召し、聖霊によりてこの水を聖別して罪を洗うしるしとなし、この水にて洗礼を受くる者に主の恵みを豊かにくだし、常に主の子供のうちにおらしめたまえ。御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。願わくは御子と聖霊とともに栄光世々限りなく全能の父にあらんことを。アーメン

祈祷

あわれみ深き神よ、願わくはこの人々の古きアダムを葬り、新しき人をよみがえらせたまえ。アーメン
願わくは肉の悪欲は死に、霊に属するものは生きて、ますます盛んならしめたまえ。アーメン
願わくは悪魔と世と肉に勝つ力を与えたまえ。アーメン
願わくはわが務めによりて主にささぐる世々統べ治めたもう神・あわれみ深き主よ、願わくはものを受け、天のもろもろの徳をあたえ、限りなき幸いをもって報いたまえ。アーメン

授洗

次に司祭は洗礼を受ける者を聖洗盤に近づかせ、教父母に言う。

この人（幼な子）に名をつけよ

教父母の一人、名を告げる。次に司祭は本人を水に入れるか、または頭に水を注ぎながら、その名を呼んで、左のように言う。次の二つの「アーメン」は司式者だけが言う。

――（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗礼を施す　アーメン

司祭はまた言う。

我この人（幼な子）をキリストの群れに受け、その額に十字架の形をしるす（ここで額に十字架の形をしるす）。このしるしは、キリストの十字架を恥とせず、生涯キリストのしもべとなり、また忠義なる兵卒となり、その旗もとにありて、勇ましく罪と世と悪魔とに向かいて戦うことを表わすものなり　アーメン

感謝

司祭は言う。

兄弟よ、この人々〔幼な子〕はすでに新たに生まれ、キリストの公会につがれたり。ゆえに全能の神にこの恵みを謝し、また心を合わせてこの人々〔幼な子〕のために祈り、生涯今日のごとく過ごさせたまわんことを願うべし

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ。国も力も栄えも世々に父のものなればなり　アーメン

司祭は言う。

いとあわれみ深き父よ、聖霊によりてこの人々〔幼な子〕を新たに生まれしめ、これを子となし、聖公会の肢となならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人々〔幼な子〕罪に死に、義に生き、キリストの死と葬りにあずかり、古き人を十字架につけて、ことごとく罪を滅ぼすことを得させたまえ。また御子の死にあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖公会の人々とともに、限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

勧告

受洗者が幼な子であるときは、司祭は次の勧めをする。

教父母に告ぐ

なんじらこの幼な子にかわりて、悪魔とそのわざを捨て、神を信じ、神に仕うることを約束せり。ゆえに幼な子の道理をわきもうる年ごろに至らば、このおごそかなる約束をこれに教うるは、なんじらの義務なり。されば幼な子に聖書の教えをきかせ、ことに使徒信経・主の祈り・十戒を学ばせ、その他、魂を養うに必要なるものを教え、良くこれを育て、キリストの道にかのう正しき行ないを習わすべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリストの我らのために死にて、よみがえりたまいしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によみがえり、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

司祭はまた言う。

この幼な子、使徒信経・主の祈り・十戒をおぼえ、また公会問答を学びたるうえ、主教に願いて堅信式を受けしむべし

受洗者が壮年であるときは、司祭は次の勧めをする。

いま洗礼によりてキリストを着たる兄弟に勧む

なんじらはキリストを信ずるによりて、神の子また光の子となりたれば、慎みてその信仰するところにそむかず、常に光の子のごとく歩むべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリスト我らのために死にて、よみがえりたまいしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によみがえり、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

洗礼を受けた壮年は、遠からず主教から堅信式を受けて聖餐にあずからなければならない。

条件洗礼式語

洗礼を受けたことの明きらかでない者に聖洗式を行なうときは、授洗の式語として次の語を用いる。「アーメン」は司式者だけが言う。

なんじ、もし洗礼を受けざりしならば、――（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗礼を施す　アーメン

緊急洗礼

やむをえない時は、聖洗式を私宅または病室で行なう。
緊急の場合には司祭は臨席者とともに主の祈りを唱え、洗礼を受ける者の頭に水を注ぎながら次のように言う。司祭に支障のあるときは他の聖職またはだれでもこれを行なってよい。
「アーメン」は司式者だけが言う。

――（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗礼を施す　アーメン

次に左の感謝をささげる。

いとあわれみ深き父よ、聖霊によりてこの人（幼な子）を新たに生まれしめ、これを子となし、聖公会の肢とならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人（幼な子）罪に死に、義に生き、キリストの死と葬りにあずかり、古き人を十字架につけて、ことごとく罪を滅ぼすことを得させたまえ。また御子の死にあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖公会の人々とともに限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

この受洗者が緊急状態を脱した場合は、本人を聖堂に連れて来て次の式を行なう。
その時には教父母を要する。その教会の司祭が自ら洗礼を行なったときは、次のように言って聖言に移る。

我、――（年月日・場所）において、証人の前にて聖公会の式に従い、この人（幼な子）に洗礼を施せり

もし司祭が自らその式を行なわなかったときは、正当にこれを行なったか否かを尋ねる。司祭はまず次のように問う。

この人（幼な子）はたれに洗礼を受けしか

答　――

この人（幼な子）の名は何と言うか

答　――

その時の証人はたれなりしか

答　――

この人（幼な子）は、水にて洗礼を施されしか

水で洗礼を施されたときは次のように言う。

答　しかり

この人（幼な子）は、父と子と聖霊の御名によりて洗礼を施されしか

この語を用いて洗礼を施されたときは次のように言う。

答　しかり

正当に洗礼を受けたことが明らかならば、司祭は次のように言う。明らかでないときは条件洗礼を施す。

我いま会衆に告ぐ、――はすでに正当に洗礼を受けたりと認む

聖言

司祭　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

司祭　聖マタイの福音書第二十八章十八節以下の言葉をきくべし

会衆　主に栄光あらんことを

イエス進みきたり彼らに語りて言いたもう、「我は天にても地にても、すべての権を与えられたり。さればなんじら行きて、もろもろの国びとを弟子となし、父と子と聖

霊の名によりてバプテスマを施し、わがなんじらに命ぜしすべての事を守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまで常になんじらとともにあるなり」。

会衆　主に感謝し奉る

誓約

次に司祭は洗礼を受けた者、または教父母に言う。

問　なんじ神とこの会衆の前にて（幼な子にかわりて）約束すべし

なんじ悪魔とそのわざを捨て、この世の虚栄・貪欲を離れ、肉の悪欲を去り、これらのものに惑わざることを努むるか

答　我ことごとくこれを捨て、神の助けによりて惑わざることを努む

問　なんじ天地の造り主・全能の父なる神を信ずるか

答　なんじ又、そのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ずるか。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん。なんじこれを信ずるか。なんじ又、聖霊を信ずるか。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ずるか

答　我すべてこれを堅く信ず

問　されば、なんじ生涯、神の御心に従い、その戒めを守ることを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

次に司祭は言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

我この人（幼な子）をキリストの群れに受け、その額に十字架の形をしるす（ここで額に十字架の形をしるす）。このしるしは、キリストの十字架を恥とせず、生涯キリストのしもべとなり、また忠義なる兵卒となり、その旗もとにありて、勇ましく罪と世と悪魔とに向かいて戦うことを表わすものなり　アーメン

司祭は次の感謝を唱える。

いとあわれみ深き父よ、聖霊によりてこの人（幼な子）を新たに生まれしめ、これを子となし、聖公会の肢とならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人（幼な子）罪に死に、義に生き、キリストの死と葬りにあずかり、古き人を十字架につけて、ことごとく罪を滅ぼすことを得させたまえ。また御子の死にあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖公会の人々とともに、限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

受洗者が幼な子であるときは、司祭は次の勧めをする。

教父母に告ぐ

なんじらこの幼な子にかわりて、悪魔とそのわざを捨て、神を信じ、神に仕うることを約束せり。ゆえに幼な子の道理をわきもうる年ごろに至らば、このおごそかなる約束をこれに教うるは、なんじらの義務なり。されば幼な子に聖書の教えをきかせ、ことに使徒信経・主の祈り・十戒を学ばせ、その他、魂を養うに必要なるものを教え、良くこれを育て、キリストの道にかのう正しき行ないを習わすべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリストの我らのために死にて、よみがえりたまいしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によみがえり、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

司祭はまた言う。

この幼な子、使徒信経・主の祈り・十戒をおぼえ、また公会問答を学びたるうえ、主教に願いて堅信式を受けしむべし

受洗者が壮年であるときは、司祭は次の勧めをする。

なんじはキリストを信ずるによりて、神の子また光の子となりたれば、愼みてその信仰するところにそむかず、常に光の子のごとく歩むべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリスト我らのために死にて、よみがえりたまいしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によみがえり、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

公会問答

堅信式を受ける前に学ぶ。

一問　あなたの教名は何といいますか

答　――といいます

二問　だれがその名をつけましたか

答　洗礼を受けて、キリストの肢・神の子・天国の世継ぎとされたとき、教父母がつけました

三問　そのとき、教父母はあなたのために何をしましたか

答　わたくしにかわって、三つのことを約束しました

第一は、悪魔とそのわざ、この世の虚栄・貪欲・肉の悪欲を捨てること

第二は、使徒信経の信仰箇条を信じること

第三は、生涯、神の御心に従い、その戒めを守ること

四問　あなたはこの約束を守る責任がありますか

答　その責任を感じ神の助けによってこの約束を守ります。また天の父なる神が救い主イエス＝キリストによって、わたくしをこの救いの道に召したもうたことを心から感謝し、神の恵みによって、生涯この道を離れないように祈ります

五問　使徒信経を唱えなさい

答　我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず
我はそのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ず
やどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん
我は聖霊を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ず　アーメン

六問　使徒信経の主意は何ですか

答　第一は　わたくしと万物とを造られた父なる神を信じること
第二は　わたくしと万民とを贖われた子なる神を信じること
第三は　わたくしとすべて神に選ばれた民とをきよめられる聖霊なる神を信じること

七問　あなたが守ることを、教父母が代わって約束した神の戒めは、いくつありますか

答　十あります

八問　それを言いなさい

答　それは出エジプト記第二十章にしるされた神の言葉です
我はなんじの神・主なり。なんじをエジプトの地、その奴隷たる家より導きいだしたる者なり
第一　なんじ我のほかなにものをも神とするなかれ
第二　なんじ、おのれのために、上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの形に似せて偶像を作り、これにひ

れ伏し仕うるなかれ
第三　なんじの神・主の名を、みだりに言うなかれ
第四　なんじ安息日を聖として忘るるなかれ
第五　なんじ父と母とを敬え
第六　なんじ殺すなかれ
第七　なんじ姦淫するなかれ
第八　なんじ盗むなかれ
第九　なんじ偽りの証しを立つるなかれ
第十　なんじ、むさぼるなかれ

九問　この十戒は何を教えていますか
答　十戒は第一に神に対する義務、第二に隣人に対する義務を教えています

一〇問　神に対する義務とは何ですか
答　神に対する義務とは、神を信じ、神をおそれ、心を尽くし、精神を尽くし思いを尽くし、力を尽くして神を愛し、また礼拝・感謝・祈祷をささげ、心から信頼し、御名と御言葉を敬い、生涯、忠実に神に仕えることです

二問　隣人に対する義務とは何ですか
答　隣人に対する義務とは、自分を愛するように人を愛し、人にしてもらいたいと思うことは、人にもしてあげ、父母を愛し、敬い、助け、権威を持つ者に従い、教師・聖職・主人・目上の人を敬い、言葉や行ないで人を害せず、人との交わりに真実をつくし、人を恨むこと、憎むこと、盗むこと、悪口を言うこと、うそを言うことをせず、節制・貞操を守り、人のものをほしがらず、職業をはげんで自活し、神の定めたもう身分に応じて、自分の義務を尽くすことです

三問　あなたは自分の力でこれらの事をすることはできません。神の特別な恵みを受けて、始めてこれらの戒めを守り、神に仕えることができます。それゆえいつも熱心に神の恵みを祈らねばなりません。主の祈りを唱えなさい
答　天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我

らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

三問　この祈りによって、あなたは神に何を願いますか

答　すべての良いものを与えられる天の父なる神に祈り、わたくしとすべての人が恵みによって、正しく神を拝み、神に仕え、神に従うことのできるように願います。また魂とからだに必要なものを願い求め、神がわたくしたちの罪をゆるし、魂とからだを守って、すべての危難をふせぎ、罪と悪と悪魔を退け、限りなき死からのがれさせていただくように願います。そして神がわたくしたちを愛し、主イエス＝キリストによってこれらのことをなさると信じますから、アーメン（どうぞ、そのようにして下さい）と言います

四問　キリストが公会のために建てられた聖奠は、いくつありますか

答　救いのためにだれにも必要な聖奠はただ二つです。すなわち洗礼と聖餐です

五問　聖奠とは何ですか

答　聖奠とは、わたくしたちが、目に見えなる霊の恵みにあずかる方法、またその保証として、キリストが自ら定められたものです。

六問　一つの聖奠を、いくつの部分に分けることができますか

答　目に見える外のしるしと、内なる霊の恵みの二つです

七問　洗礼の、目に見える外のしるしは何ですか

答　水です。水で、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けられます

八問　洗礼の、内なる霊の恵みは何ですか

答　罪に死に、義に新しく生まれることです。わたくしたちはもともと罪のうちに生まれ、怒りの子でしたが、洗礼によって恵みの子とされました。洗礼を受ける人に必要なことは何ですか

九問　悔い改めと信仰です。悔い改めて罪を捨て、信仰をもって、神がこの聖奠

により、その人に約束されたことをかたく信じることです

二〇問　これらのことのできない幼な子に、なぜ洗礼を施しますか

答　教父母が幼な子にかわって、この二つのことを約束するからです。幼な子は成長してから、この約束を守らなければなりません

二一問　主は何のために、聖餐の聖奠を定められましたか

答　キリストの死のいけにえと、それによって受ける恵みを常に記念させるためです

二二問　聖餐の、外のしるしは何ですか

答　パンとぶどう酒です。主はこれを受けることを命じられました

二三問　このしるしの示すものは何ですか

答　キリストのからだと血です。信徒は聖餐で真実にこれを受けます

二四問　これにあずかることによって、わたくしたちはどんな恵みを受けますか

答　わたくしたちのからだがパンとぶどう酒によって強められるように、わたくしたちの魂は、キリストのからだと血によって強められます

二五問　聖餐にあずかるには、どんな準備が必要ですか

答　自分をよく省みて、次のようにただすことです

過去の罪をまことに悔やみ、行ないを改める決心をしているかどうか

キリストの死を感謝し、キリストによって示された神の愛を真実に信じているかどうか。そしてすべての人を愛しているかどうか

聖職は主日に少年少女を集め、聖書を引いて、ねんごろにこの問答を教え、父母、教父母はつとめて少年少女をこれに出席させなければならない。彼らが相当の年齢に達し、この問答をよく学んだのち堅信式を受けさせなければならない。

堅信式（信徒按手式）

洗礼を受けて道理をわきまえることのできる年になった人に手をおく式である。
この式を受ける者は、あらかじめ公会問答を学ばなければならない。
司祭は堅信式を受けようとする者の教名、氏名、生年月日、受洗年月日、場所、司式者名をしるして主教に提出する。
堅信式を受ける者は、おのおの教父母一人または他の適当な立会人一人とともに、主教の前に立つ。会衆は座につき、主教は次のように言う。

序言

愛する兄弟よ、公会はキリストの使徒たちの模範にならいて堅信式を行のうなり。すなわち使徒行伝第八章にかくしるされたり

ここに散らされたる者ども、経めぐりて、
町にくだりて、キリストのことを伝う。ピリポが神の国とイエス＝キリストの御名
とにつきて宣べ伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。エルサレ
ムにおる使徒たちは、サマリヤびと神の御言葉を受けたりと聞きて、ペテロとヨハ
ネとをつかわしたれば、彼らくだりて人々の聖霊を受けんことを祈れり。これ主イ
エスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだそのひとりにだに下らざりしなり。ここにふたりの者かれらの上に手をおきたれば、みな聖霊を受けたり

聖書はかく按手と祈祷によりて、聖霊の特別なる賜物の与えらるることを教う。かかる賜物は、ただ神によりてのみ与えらるるものなれば、すでに、洗礼によりて神の子とせられし者、いま按手によりて聖霊にて強められんことを全能の神に祈るべし

再宣誓

聖洗式につづいて堅信式を行なうときはこれを省く。
主教は次のように言う。

わが子よ、この按手を受けんと願う者は、洗礼のおごそかなる誓いに基づきて、悪魔とそのわざを捨て、キリスト教の信仰箇条を信じ、生涯、神の御心に従い、その戒めを守る約束を堅めざるべからず。されば我なんじらに問わん。なんじ今、神とこの会衆の前にてこの約束を堅むるか

堅信式を受ける者はおのおの答える。

われこの約束を堅む

堅信（按手）

一同立つ。

主教　我らの助けは主の御名にあり
会衆　主は天地を造りたまえり
主教　主の御名はほむべきかな
会衆　とこしえに至るまでほめたとうべし
主教　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
主教　我ら祈るべし
とこしえにいます全能の神よ、主はさきに水と聖霊とをもって、このしもべらを新たに生まれしめ、そのすべての罪をゆるしたまえり。願わくは聖霊をもって彼らを強め、もろもろの賜物を与えたまえ。彼らに知恵と悟りの霊、深慮と力の霊、主を知る知識と主を敬う霊を授け、また主をかしこむ霊をもって常にみたしたまえ。アーメン

次に教父母または立会人は堅信式を受ける者を導いて主教の前にひざまずかせる。

主教はおのおのの頭に手をおいて言う。
次の二つの「アーメン」は司式者だけが言う。

――（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに手をおく　アーメン
主よ、天の恵みをもってこのしもべを守りたまえ。常に主に属し、日々ますます聖霊に満たされ、ついに御国に至ることを得させたまえ　アーメン

主教　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
主教　我ら祈るべし

会衆はひざまずき、一同主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ。国も力も栄えも世々に父のものなればなり　アーメン

次に主教は言う。

御心にかのう良き志を立て、これを行なわせたもう全能の神よ、我いま使徒たちの模範に従い、このしもべらに手をおきて主の慈愛を示せり。願わくは父よ、御手をもって彼らをおおい、聖霊をもって常に彼らを導き、ますます御言葉を悟り、これに従い、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

祝福

主教は次の語を用いて新たに堅信式を受けた者を祝福する。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み、なんじらの上に臨み、常になんじらとともにあらんことを。アーメン

堅信式を受けた者、またはその準備を終えて主教から特別の許可を受けた者でなければ、聖餐にあずかることはできない。

聖婚式

結婚しようとするものはこの式文によって結婚の本義、神の恵みおよび夫婦の責務につき司牧者から学ばなければならない。司祭は公祷の時次の予告を二回する（一回は主日に限る）。但し教区主教の許可があるときは予告を省いてもよい。

「――と――遠からず結婚せんとす。もし故障を知る者あらば申し立つべし。これ第一回の予告なり。」結婚する者が在籍教会を異にするときは、双方で同一の予告をする。結婚の当日、新郎・新婦は立会人とともに聖堂に来て定められた所に、新郎は右、新婦は左に立ち、司祭は次のように言う。

愛する兄弟よ、今われら神と会衆との前に集まりたるは、この男とこの女に夫婦の神聖なる縁を結ばしめんがためなり。そもそも結婚は人いまだ罪を犯さざる前に、神の定めたまいし尊きことにして、キリストとその教会の一体なることの型なり。キリストも自らガリラヤのカナにて婚宴につらなり、始めて奇跡を行ないてこれを祝したまい、聖書もこれを尊ぶべしとねんごろに勧めたり。ゆえに結婚はみだりに、軽々しくなすべきにあらず、神をおそれ、慎みてうやうやしくこれをなすべし

このふたりいま神聖なる縁を結ぶためにここにきたれり。もしこの結婚について故障

ありと知る者あらば今ここにて申し立つべし。しからざれば後日に至りてさらに何事をも言うべからず

次に司祭は結婚する人に言う。

我なんじらふたりに命ず。なんじら、もしこの結婚について故障あることを知らばこれを隠さず、すべての人の心の秘密あらわるべき、さばきの日に答うるごとく、今ここにて言い表わすべし。神の言葉にそむきて結びたる縁は、神のそわせたもうにあらず、その結婚は不法なりと知るべし

もし結婚の故障を申し立て、その証拠をあげる者があれば、結婚式を延期する。故障がない時は司祭は新郎に言う。

――（教名）なんじこの女をめとり、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。又これを愛し、これを慰め、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限りほかの者に依らず、この女のみにそうことを願うか

新郎は答える。

我これを願う

司祭は新婦に言う。

――（教名）なんじこの男にとつぎ、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。またこれに従い、これに仕え、これを愛し、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限りほかの者に依らず、この男のみにそうことを願うか

新婦は答える。

我これを願う

司祭は言う。

この男にめあわすために、この女をわたす者はたれか

ここで親またはその代理者は新婦の右手をとって司祭にわたす。司祭は受けて新郎に授ける。

新郎は新婦の手をとり司祭に従って言う。

われ神の定めに従いてなんじをめとる。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

両人手をはなす。新婦は右手で新郎の右手をとり、司祭に従って言う。

われ神の定めに従いてなんじにとつぐ。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、なんじに従い、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

両人手を放す。指輪を用いるときは、新郎は指輪を司祭の祈祷書の上に置く。司祭は指輪を祝福するとき次のように言う。

主よ、願わくはこの指輪を祝し、これを与うる者と受くる者とを恵み、生涯、相愛して過ごさせたまわんことを。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

新郎は司祭から指輪を受けて新婦の左手の無名指にはめ、これを持ちながら司祭に従って言う。

指輪を用いないときは、かっこ内の語を省く。

父と子と聖霊の御名によりて、「この指輪をもって」なんじをめとり、わが物をなんじのものとす　アーメン

新郎新婦はひざまずく。司祭は言う。

我ら祈るべし

とこしえにいます神・万民を造り、万民を守り、すべての霊なる恵みをさずけ、限りなき命を与えたもう主よ、願わくは今主の名によりて祝するこのふたりのしもべに幸いを下したまえ。今「指輪をしるしとして」立てし誓いを常にまもり、互いに愛し、互いに親しみ、ともに主の律法に従うことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は両人の右手を合わせて言う。

神の合わせたまえる者は、人これを離すべからず

次に司祭は会衆に告げる。「アーメン」は司祭だけが言う。

――と――（教名）夫婦の神聖なる縁を結び、神と会衆との前にて、ともに誓いを立て、かつ「指輪を授受し」互いに手をとり合いて証しをなせり。ゆえにわれ父と子と聖霊の名によりて、彼らの夫婦たることを示す　アーメン

司祭は次の言葉で、結婚した者を祝福する。

願わくは父なる神・子なる神・聖霊なる神、なんじらを祝し、常になんじらを守りたまわんことを。願わくは主あわれみをもってなんじらを顧み、霊の恵みをもってなんじらを飽かせ、むつまじくこの世を渡り、後の世には限りなき命に至らせたまわんこ

とを。アーメン

次に新郎・新婦は司祭に従い至聖所の入口に行ってひざまずく。その間に次の詩篇の一つを歌いまたは唱える。

詩百二十八篇

一　主を恐るる者はさいわいなり＝　その道を歩む者はみなさいわいなり

二　なんじおのが手の勤労の実をくろうべし＝　なんじは幸いを得、また安らかなるべし

三　なんじの妻は家の奥におりて、多くの実を結ぶぶどうの木のごとく＝　なんじの子らは食卓をかこみてオリブの若木のごとし

四　見よ、主を恐るる者は＝　かくさいわいを得ん

五　主はシオンよりなんじを祝し＝　なんじ世にあらん限りエルサレムの幸いを見んことを

六　なんじおのが子らの子を見＝　イスラエルの上に平安あらんことを

父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩六十七篇

一　願わくは神われらを恵み祝したまわんことを＝　御顔の光を我らの上に照らしたまわんことを

二　こはなんじの道のあまねく地に知られ＝　なんじの救いのもろもろの国に知られんためなり

三　神よ、民らはなんじに感謝し＝　もろもろの民はなんじをほめたとうべし

四　国々はたのしみ、また喜びうとうべし＝　なんじは公平をもて民らをさばき、地の上なる国々を治めたまえばなり

五　神よ、民らはなんじに感謝し＝　もろもろの民はなんじをほめたとうべし

六　地は産物をいだせり＝　神・われらの神はわれらを祝したまえり

七　神はわれらを祝したまえり＝　地のもろもろのはて、ことごとく神をおそるべし

父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

つづいて聖餐式を行なわないときは、司祭は両人に向かって言う。

司祭　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司祭　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司祭　主よ、このふたりのしもべを救いたまえ
会衆　彼ら主にたよれり
司祭　主よ、天より彼らを助けたまえ
会衆　常に彼らを守りたまえ
司祭　彼らのために堅固なる城となりたまえ
会衆　彼らの敵を防ぎたまえ
司祭　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司祭　我ら祈るべし

次に司祭は言う。但し聖餐式を行なうときは以下の祈りを祝福の前に用いる。

天の父なる神よ、このしもべらを祝し、主の御言葉を学びてこれを行なわしめたまえ。願わくは、彼ら主の守りをこうむり、常に御心に従い、生涯主の愛におることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

新婦が子を生む年を過ぎているときは次の第一の祈りを省く

天の父よ、人のふゆるは主の恵みによれり。願わくはこの夫婦を恵みて子を産ましめ、又ともに長きよわいを保ち、操をまもり、互いに愛し、御心のままにそのこどもを育て、御栄えをあらわすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

神よ、主は結婚を聖別し、これをもってキリストとその教会は霊なる結婚によりて一体なることを示したまえり。願わくは、いつくしみをもってこのふたりを顧み、主の御言葉に従いて互いに愛し、互いに敬い、つつしみと和らぎとを保つことを得させたまえ。主よ、彼らを祝して限りなき御国に至らせたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は次のように言って両人を祝福する。

願わくは全能の神、なんじらに豊かなる恵みを注ぎ、なんじらを清め、なんじらを祝し、なんじらの身も魂も御心にかない、生涯相愛して世を過ごさせたまわんことを。

アーメン

結婚した者は当日または、なるべく早い機会に陪餐しなければならない。

聖　餐　式

結婚式につづいて聖餐式を行なうときは次の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特　祷

天の父なる神よ、主は結婚によりてふたりの者を一体となしたもう。願わくはこのしもべらを清め祝し、忠実にその誓いを守り生涯相愛して安らかにこの世を過ごさせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　五章二五―三三

夫たる者よ、キリストの教会を愛し、これがためにおのれを捨てたまいしごとく、なんじらも妻を愛せよ。キリストのおのれを捨てたまいしは、水の洗いをもて言葉によりて教会を清め、これを聖なるものとしてしみなく、しわなく、すべてかくのごときたぐいなく、清き、きずなき尊き教会を、おのれの前に建てんためなり。かくのごとく夫はその妻をおのれの体のごとく愛すべし。妻を愛するはおのれを愛するなり。おのれの身を憎む者はかつてあることなし、皆これを育で養う、キリストの教会におけるもまたかくのごとし。我らは彼の体の肢なり。「このゆえに人は父母を離れ、その妻に合いてふたりのもの一体となるべし」。この奥義は大いなり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。なんじらおのおの、おのれのごとくその妻を愛せよ。

妻もまたその夫を敬うべし。

福音書 マル 一〇章六―九

イエス言いたもう、「開びゃくの初めより『人を男と女とに造りたまえり』。『かかるゆえに人はその父母を離れて、ふたりのもの一体となるべし』。されば、はやふたりにはあらず、一体なり。このゆえに神の合わせたもうものは、人これを離すべからず」。

夫婦の義務について説教がないときは、司祭は次の勧告の全部または一部を用いてもよい。

勧告

すでに結婚したる者、または結婚せんとする者は、夫婦の義務にかかわる聖書の言葉を聞くべし

聖パウロ、エペソ書第五章に結婚せし者に命じていわく

夫たる者よ、キリストの教会を愛し、これがためにおのれを捨てたまいしごとく、なんじらも妻を愛せよ。キリストのおのれを捨てたまいしは、水の洗いをもて、ことばによりて教会を清め、これを聖なる者として、しみなく、しわなく、すべてかくのごとき、たぐいなく、清き傷なき尊き教会を、おのれの前に建てんためなり。かくのごとく夫はその妻をおのれのからだのごとく愛すべし、妻を愛するは、おのれを愛するなり。おのれの身をにくむ者はあらず、かつてあることなし。皆これを育て養う、キリストの教会におけるも、またかくのごとし。我らは彼のからだの肢なり。「このゆえに人は父母を離れ、その妻に合いて、ふたりのもの一体となるべし」。この奥義は大いなり、わが言うところはキリストと教会とを指せるなり。なんじらおのおの、おのれのごとくその妻を愛せよ

又コロサイ書に次のごとくいえり

夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦きをもてこれをあしろうな

又キリストの使徒にして、妻帯せし聖ペテロが結婚せし者にいえる言葉を聞くべし

夫たる者よ、なんじらその妻を、おのれより弱き器のごとくし、知識に従いてともに住み、命の恵みをともに継ぐ者としてこれを尊べ。これなんじらの祈りに妨げなからんためなり

以上読みし言葉は、夫が妻に対してなすべき義務を示すものなり、次に妻たるもの

も、夫に対してなすべき義務を学ぶべし。これも聖書に明らかにしるされたり

聖パウロ、エペソ書第五章のうちに次のごとく教う

妻たる者よ、主に従うごとくおのれの夫に従え。キリストは自ら、からだの救い主にして、教会のかしらなるごとく、夫は妻のかしらなればなり。教会のキリストに従うごとく、妻もすべてのこと夫に従え

また言わく

妻もまたその夫を敬うべし

又コロサイ書のうちに次の短き教えあり。いわく

妻たるものよ、その夫に従え、これは主にある者のなすべきことなり

聖ペテロも良く教えて言わく

妻たる者よ、なんじらその夫に従え、たとい御言葉に従わぬ夫ありとも、なんじらの清く、かつ、うやうやしき行状を見て、言葉によらず妻の行状によりて、救いに入らんためなり。なんじらは髪を編み、金を掛け、ころもを装うごとき、うわべのものを飾りとせず、心のうちの隠れたる人、すなわち柔和、しとやかなる霊の朽ちぬ物を飾りとすべし、これこそは神の前にて価とうときものなり。むかし神に望みを置きたる清き女たちも、かくのごとくその夫に従いて、おのれを飾りたり。すなわちサラが、アブラハムを主と呼びてこれに従いしごとし。なんじらも善を行ないて、何事にもおののき恐れずば、サラの子たるなり

産後感謝式

産婦は肥立ったとき、聖堂にきて定められた場所にひざまずく。司式者は立って次のように言う。

全能の神は大いなる恵みをもってなんじを守り、出産せしめたまえり。ゆえに、いま真心をもって感謝し奉るべし

次に左の詩篇の一つを用いる。

詩百二十七篇

一 主家を建てたもうにあらずば、建つる者の勤労はむなし＝ 主城を守りたもうにあらずば、見張りびとのさめおるはむなしきことなり

二 なんじら早く起き、おそく伏して辛苦の糧を食ろうはむなしきなり＝ 主はその愛する者を眠れるときにも満たしたもう

三 見よ、子らは主の与えたまえる嗣業なり＝ 胎の実はその報いのたまものなり

四 年若きときの子らは矢のごとし＝ ますらおの手にある矢のごとし

五 矢の満ちたる矢筒を持つ人はさいわいなり＝ 彼らは門にありてあだと物言うときはずかしめられじ

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ
始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩百十六篇 一―二、四―八

一 われ主をいつくしむ＝ わが声とわが願いをききたまえばなり
二 主耳をわれに傾けたまえり＝ われ世にある限り主を呼びまつらん
四 その時われ主の御名をよべり＝ 「主よ、わが魂をすくいたまえ」と
五 主は恵み豊かにして正しくましませり＝ われらの神はあわれみふかし
六 主は愚かなる者を守りたもう＝ わが低くせられし時われをすくいたまえり
七 わが魂よ、なんじの安きにかえれ＝ 主は豊かになんじをあしらいたまえり
八 なんじはわが魂を死より救い、わが目を涙より、わが足をつまずきより助けいだしたまえり

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主よ、この姉妹を救いたまえ
会衆　彼は主にたよれり
司式者　彼のために堅固なる城となりたまえ
会衆　彼の敵を防ぎたまえ

司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら祈るべし

全能の神よ、この姉妹を救い、つつがなく出産の苦しみと危うきとを過ごさせたまいしことを感謝し奉る。慈悲ふかき父よ、願わくはこの姉妹をして、今の世においては忠実に主に仕え、後の世においては限りなき栄光をうくることを得させたまえ。この感謝と祈祷を主イエス＝キリストによりてささげ奉る。アーメン

ここで適当な祈りを用いてもよい。
産後感謝をする人は信施をささげる。当日またはなるべく早い機会に聖餐を受けなければならない。

病者訪問式

病人がある時は司祭に通知しなければならない。司祭は病人の状態に応じて次の式の全部または一部を用いる。

訪問

司祭は病人の家に入るとき、次のように言う。

願わくは平安なんじらにあらんことを

司祭は病人のそばで言う。

司祭　主よ、あわれみたまえ

答　キリストよ、あわれみたまえ

司祭　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司祭　主よ、このしもべを救いたまえ

答　彼は主にたよれり

司祭　主よ、天より彼に助けを与えたまえ

答　常に御力をもって守りたまえ

司祭　あだなす者に勝たしめたまえ

答　悪しき者をしりぞけたまえ

司祭　主よ、堅固なる城となりて彼を守りたまえ

答　彼の敵を防ぎたまえ

司祭　主よ、我らの祈りをききたまえ

答　我らの声を主の御前に至らせたまえ

司祭　我ら祈るべし

主よ、願わくはあわれみをもってこのしもべを顧み、その心を励まし、主にたよる信

仰を強め、あだを防ぎて、常に安らかに守りたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神・あわれみ深き救い主よ、病になやむこのしもべに恵みを与えたまわんことを。アーメン

願わくはこの苦しみによりて、おのが弱きを悟り、ますます信仰を強め、まことの悔い改めに至ることを得させたまえ。アーメン

病のいゆること御心ならば、生涯主をおそれ、主の栄光をあらわすことを得させたまえ。アーメン

生くるも死ぬるも常に主に属し、御心に従い、ついに限りなき命に入り、主とともに住ましめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

信仰と祈祷の勧め

司祭は病人に公会の信仰を堅く守ることを勧める。また神と親しく交わる機会を与えられたことを悟らせ、主の十字架を思い、祈祷と代祷をすることを勧め、ともに使徒信経を唱える。

使徒信経

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず

我はそのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより生ける人と死ねる人をさばきたまわん

我は聖霊を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ず　アーメン

懺悔の勧め

司祭は病人に自らをよく省みて、過去の罪をまことに悔やみ、行ないを改める決心をしているかどうか、キリストの死を感謝し、キリストによって示された神の愛を真実に信じているかどうか、そしてすべての人を愛しているかどうかを、ただすことを勧める。

また他人から受けた害を心から赦し、他人に害を加えたことがあればその赦しを求め力の及ぶ限り償うこと、また財産、貸借の処理、寄進等を明らかにしておくことを勧める。病人が自責のため安心を得ない時は、つまびらかに罪を懺悔することを勧める。罪の懺悔はいつでもすべきことであるが、病のときは特にその必要がある。懺悔のときは家人を退けて病人は次のように言う。

我は父と子と聖霊なる神に罪を懺悔し奉る。（ここで司祭に罪を告白する）我はこれらおよび多くの記憶せざる罪をまことに悔やみ、これを改善せんと堅く決心し、師父の教えと赦罪の宣告をせつに願う

司祭は懺悔をきき、適当な指導をあたえて次の赦罪を告げる。

願わくは主その大いなるあわれみによりて、なんじの罪を赦したまわんことを。

アーメン

我らの主イエス＝キリストはまことに罪を悔やみ、主を信ずるすべての人に罪の赦しを告ぐる権威を公会にのこしたまえり。われ今、主のゆだねたまえる権威により、父と子と聖霊の御名によりて、なんじのすべての罪の赦しを宣言す。アーメン

この懺悔と赦罪は他の場合に用いてもよい。

病者の陪餐

人は、いつ死に臨んでも不安がないように、聖堂でしばしば聖餐にあずからなければならぬ。司祭はこのことを会衆に教えなければならない。

聖堂に来ることのできない病人が、自宅で聖餐にあずかることを望むならば、司祭に申し出る。司祭は聖品を病床に奉持して授けるか、または病者聖餐式を行なう。そのときは次の特祷・使徒書・福音書または当日のものを用いる。

式を短縮する必要がある時は次の順序による——懺悔・赦罪・聖別・陪餐・祝祷。さらに急を要するときは聖別と分餐語だけでよい。但し聖品を奉持したときは聖別を用いない。

特祷

とこしえにいます全能の父よ、主はいのちと健康を与えたもう。願わくはこの病めるしもべのためにささぐる我らの祈りを聞こし召し、御心ならばその病をいやし、主の宮にて感謝をささぐることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後　一章三、四

ほむべきかな、我らの主イエス＝キリストの父なる神、すなわちもろもろの慈悲の父、

すべての慰めの神、われらをすべての悩みのうちに慰め、我らをしてみずから神に慰められるる慰めをもて、もろもろの悩みにおる者を慰むることを得しめたもう。

福音書　マタ　一一章二八

イエス言いたもう、「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ、われなんじらを休ませません」。

老衰等で聖堂に来ることのできない者にもこの方法を用いてよい。やむを得ない事情で聖品を受けることができない者は霊的にこれにあずかることができる。

病者按手

病人が希望するときは司祭はこの式を行なう。抹油の直前にこれを用いてもよい。

救い主なる神よ、このしもべを顧みたまえ。願わくは罪より救い、身と魂の苦しみを除き、その病をいやして感謝をささぐることを得させたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次に司祭は病人の頭に手を置いて言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに手をおく、願わくは主イエス＝キリストそのあわれみによりてなんじの病をいやしたまわんことを　アーメン

ここで祝祷を用いてもよい。

病児按手

司祭　主よ、あわれみたまえ

答　キリストよ、あわれみたまえ

司祭　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司祭　神よ、あわれみたまえ

答　主よ、幼な子を守りたまえ

司祭　主よ、我らの祈りをききたまえ

答　我らの声を主の御前に至らせたまえ

司祭　我ら祈るべし

主イエスよ、主は幼な子をいだきて、これを祝したまえり。願わくはこの幼な子を祝し、その病をいやし、生涯主に仕うることを得させたまえ。アーメン

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもって天の使いと世の人との位を立て、その務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる使いに命じて、地にあるこの幼な子を守らしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に司祭は幼な子の頭に手を置いて言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに手をおく。願わくは御子イエス、その大いなるいつくしみによりて、なんじの病をいやしたまわんことを　アーメン

司祭は次の語をもって幼な子を祝福する。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み常になんじとともにあらんことを。

アーメン

抹油

抹油には主教の聖別した純粋のオリブ油を用いる。やむをえないときには、司祭が油を聖別する祈りによって聖別してもよい。

愛する兄弟よ、抹油にかかわるヤコブ書第五章の言葉を聞くべし

なんじらのうちに病める者あるか、その人教会の長老たちを招け。彼らは主の名により、その人に油をぬりて祈るべし。さらば信仰の祈りは病める者を救わん。主かれを起こしたまわん。もし罪を犯ししことあらば赦されん

司祭は右の親指を聖油に浸し、次の語を用いて病人の額または胸に十字架の形をするす。

「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに抹油す　アーメン

司祭はまた言う。

神よ、願わくは今、油ぬられししもべの罪を赦し、御心にかなわばその病をいやしたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭はここで親指をぬぐう。
次に司祭は次の語をもって病人を祝福する。

願わくは主なんじを祝し、なんじを守りたまわんことを。願わくは主、御顔をもってなんじを照らし、なんじを恵みたまわんことを。願わくは主御顔をなんじに向け、限りなく平安を与えたまわんことを。アーメン

この式と病者の陪餐を同時に行なうときは、陪餐をさきにする。

司祭が油を聖別する祈り

いつくしみ深き全能の神よ、主は御子を世にくだし？我らをして命を得しめ、かつ豊かに得させたもう。願わくは聖霊をもってこの油を祝しきよめ、これを受くる者、御子の贖いのいさおによりて強められ、罪の赦しと病のいやしを受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

病者のための諸祈祷

次の祈りを適当に用いてよい。

一　病児のため

全能の神・慈悲の父よ、生死を定むる力はただ主にあり。あわれみをもって、いま病み悩む幼な子をみそなわしたまわんことを、ひたすら祈り奉る。願わくは主のよしとしたもう時にそのからだの苦しみをのぞき、主の救いを施したまえ。又その命をながろうること御心にかなわば、忠実に主に仕え、生涯よき行ないをもって主の栄光をあらわす器とならしめたまえ。もし御心にかなわずば、主イエスにありて眠れる者の常に楽しむ所に入らせたまえ。主イエス＝キリストの愛によりてこいねがい奉る。

アーメン

二　病危篤なる者のため

慈悲の父・慰めのもとなる神よ、我らが悩むとき主のほかに助くる者なし。我らこのしもべのために助けを求め奉る。願わくはあわれみをもってみそなわし、肉体は衰う

るとも、聖霊の恵みをもってますますその魂を強めたまえ。願わくはまことに罪を悔やみ、御子イエスを堅く信ずる心をあたえ、世を去る前にその罪をことごとく消し、天において全く赦したまえ。御心にかなわば、今にても主はこのしもべを起こしてながらえしめたもう。されどその容体たのみ少なく見ゆるゆえに、願わくは主の助けをこうむりて臨終の用意をととのえ、主に親しみ、安らかに世を去るのち、その魂かぎりなき御国に入ることを得させたまえ。御子・われらの救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

三　死に臨める人のため

全能の神よ、全うせられたる義人の魂は、肉体を離るる後も主とともにおりて生きながろう。今われらの愛する兄弟の魂を、世の造り主・慈悲ふかき救い主にゆだね、これを尊きものと認めたまわんことをこいねがい奉る。願わくは世の罪を除くためにほふられたまいし小羊の血にて洗い、この世にて肉の欲、サタンのいざないによりて受けし汚れを清め、傷なき者となりて主の御前にいずることを得させたまえ。御子・われらの主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

四　安心を得ざる人のため

慈悲の父・なぐさめのもとなる神よ、あわれみをもってこのしもべの悩みを顧みたまわんことをこいねがい奉る。願わくはこのしもべ、おのれを知り、主の怒りとあわれみを悟り、ほかのものにたよらずして、ただ主にたより、すべてのいざないに勝ち、その心のいゆることを得させたまえ。願わくはしもべを守りてあだを恐ることなからしめ、御顔の光をあらわして平安を与えたまえ。主イエス＝キリストのとりなしによりてこいねがい奉る。アーメン

五　病床に集まれる者のため

とこしえにいます全能の神・あわれみふかき主よ、願わくは我らの命のはかなきことを深く感じ、聖霊の導きによりて常に行ないを清くし、世にありて主に仕うること終わらば、良心の責めもなく、聖会をも離れず、信仰と望みを堅くし、主に喜ばれ、人を愛する心をいだきて、先祖に加わることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

六　快方に向こうときの感謝

人の命をつかさどりたもう全能の神よ、この兄弟の病を快方に向かわしめ、我らの悲しみを喜びに変えたまいし恵みを感謝し奉る。主はこのしもべを見捨てたまわず、天より慰めを下し、苦しみに耐え、御定めに従う心をあたえ、おりにかのう助けを得させたまえり。願わくはますます恵みをくわえ、その療養を祝し、からだと魂とを健やかにし、喜びて主の宮に上り、供え物をささげて主のもろもろの恵みを感謝することを得しめたまえ。父と聖霊とともに栄光ある主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

七　病者の用うる祈り

世の救い主よ、主は十字架と尊き血にて我らを贖いたまえり。願わくは我らを救い、我らを助けたまえ　アーメン

病者のために適当なる聖語

一　病のいやし　列王紀略下五章一―一四　マタイ伝八章五―一三　ルカ伝四章三八―四〇

二　神への信頼　詩篇二七、四六、九一、一二一　箴言三章一一―二六　イザヤ書二六章一

三　神の守り　詩篇三〇、三四

四　神の助けを求むる祈り　詩篇四三、八六、一四三

五　痛悔　詩篇五一、一三〇

六　感謝と賛美　詩篇一〇三、一四六　イザヤ書一二章

七　試練　ヨブ記三三章一四―三〇　イザヤ書五三章　マタイ伝二六章三六―四六　ルカ伝二三章二七―四九

八　苦しむ者の模範なるキリスト　イザヤ書五五章

九　神は悔い改めと信仰を勧めたもう　イザヤ書一―一二

一〇　八つの祝福の教え　マタイ伝五章一―一二

一一　施しと備え　ルカ伝一二章三二―四〇

一二　良き牧者なるキリスト　詩篇二三　ヨハネ伝一〇章一―一八

一三　復活　ヨハネ伝二〇章一―一八、二〇章一九―三一　コリント後書四章一三―五章九

一四　**贖罪**　ロマ書五章一―一一、八章一八―三九
一五　**キリスト信徒の愛**　コリント前書一三章
一六　**信仰の恵み**　エペソ書三章一二―二一、六章一〇―二〇
一七　**忍耐**　ヤコブ書五章一〇―二〇
一八　**神の愛**　ヨハネ第一書三章一―七、四章九―二一
一九　**来世**　黙示録七章九―一七、二一章一―七、二二章一―五
二〇　**受難前の主の最後の教え**　ヨハネ伝一四章、一五章、一六章、一七章
二一　**臨終における信徒の望み**　申命記三三章二七　ヨハネ伝三章一六　コリント後書四章一六―五章一　黙示録二一章三―七

死に臨める者のための祈り

司祭が臨席しないときは信徒が用いる。

司式者　父なる神よ
答　しもべをあわれみたまえ
司式者　子なる神よ

答　しもべをあわれみたまえ
司式者　聖霊なる神よ
答　しもべをあわれみたまえ
司式者　至聖なる三位一体の神よ
答　しもべをあわれみたまえ
司式者　すべての罪と悪、および苦しみより
答　主よ、救いたまえ
司式者　主の肉体と成りたまいしこと、十字架と苦しみ、尊き死と葬りにより
答　主よ、救いたまえ
司式者　栄光ある復活と昇天、また聖霊の降臨により
答　主よ、救いたまえ
司式者　主なる神よ、我ら罪びとの願いをきき、しもべの魂を悪の力と、とこしえの死より救いいだしたまえ
答　主よ、ききたまえ

司式者　願わくはあわれみをもってすべての罪を赦したまえ
答　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは安らかなるいこいを与えたまえ
答　主よ、ききたまえ
司式者　願わくは主の聖徒とともに御国の喜びにあずからしめたまえ
答　主よ、ききたまえ
司式者　世の罪を除きたもう神の小羊よ
答　彼をあわれみたまえ
司式者　世の罪を除きたもう神の小羊よ
答　彼をあわれみたまえ
司式者　世の罪を除きたもう神の小羊よ
答　主の平安をあたえたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

答　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にましますわれらの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者は言う。

我ら祈るべし
とこしえにいます全能の神よ、願わくはこのしもべの魂を、すべての悪ともろもろのきずなより解き放ちて、主の聖徒とともにとこしえの御国にて安らかにいこわせたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司式者が司祭のときは次のように言う。

[illegible]わくは、あわれみ深き全能の神、なんじの罪をことごとく赦し、聖霊の恵みと力を与えて限りなき命に至らせたまわんことを。アーメン

死期の迫ったときには次のように言う。

キリストを信ずる者の魂よ
なんじを造りたまいし全能の父なる神の御名により
なんじを贖いたまいしイエス＝キリストの御名により
なんじをきよめたまいし聖霊の御名により
安らかにゆくべし
願わくは神なんじをパラダイスに伴いて安らかにいこわせたまわんことを。アーメン

逝去直後の祈り

あわれみ深き救い主よ、我ら今、肉体を離れし主のしもべの魂を御手にゆだね奉る。願わくは主の贖いたまいししもべを忘るることなく、あわれみの御手をのべて彼をいだき、とこしえの平安を与え、主の聖徒とともに住まわせたまえ。アーメン

葬送式

この式は洗礼を受けない者・明らかに大罪を犯して悔い改めない者・自殺した者には用いない。
司式者は棺を迎え、これにさきだって聖堂あるいは墓に行くとき、次の聖語の一節または数節を歌いあるいは唱える。

葬祷

主言いたもう、我はよみがえりなり、命なり、我を信ずるものは死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこしえに死なざるべし　ヨハネ伝一一章二五、二六節

われ知る、我を贖う者は生く、後の日にかれ必ず地のうえに立たん。わがこの皮、この身の朽ち果てん後、われ肉を離れて神を見ん。われ自ら彼を見たてまつらん。わが目かれを見んに、知らぬ者のごとくならじ　ヨブ記一九章二五―二七節

我らは何をも携えて世にきたらず、また何をも携えて世を去ることあたわず。主あたえ、主取りたもうなり、主の御名はほむべきかな　テモテ前書六章七節、ヨブ記一章二一節

聖堂に入りあるいは墓に行って次の詩の一篇または二、三篇を歌いあるいは唱える。

詩九十篇

一　主よ、なんじは我らの住みかなり＝
二　山いまだ成りいでず、なんじいまだ地と世界を造りたまわざりし時より、なんじは神なり＝　とこしえよりとこしえまで、なんじは神なり
三　なんじ人をちりにかえらしめ＝　「人の子よ、なんじらかえれ」と言いたもう
四　なんじの目には、ちとせもすでに過ぐるきのうのごとく＝　また夜の間のひとときにおなじ
五　なんじは彼らを流れ去らしめたもう＝　彼らはひと夜の夢のごとく、あしたに、はえいずる青草のごとし
六　あしたに、はえいでて栄え＝　ゆうべには、しおれて枯るるなり
七　我らはなんじの怒りによりて消えうせ＝　なんじの憤りによりておじまどう
八　なんじ我らの不義を御前におき＝　われらの隠れたる罪を御顔の光のなかにおきたまえり
九　我らのもろもろの日はなんじの怒りのもとに過ぎ去り＝　我らがすべての年の尽くるはひと息のごとし
一〇　我らが世にあるは七十年に過ぎず＝　あるいは健やかにして八十年にいたらん　されどその誇るところは、ただ悩みと悲しみとのみ＝　その去りゆくことすみやかにして我らもまた飛び去るなり
一一　なんじの怒りの力を知るものはたれぞ＝　なんじをかしこみ恐れ、その憤りを知るものはたれぞ
一二　願わくは我らにおのが日をかぞうることをおしえ＝　知恵の心を得しめたまえ
一三　主よ、かえりみたまえ、いつまで怒りたもうや＝　願わくはなんじのしもべらをあわれみたまえ
一四　あしたに我らをなんじのいつくしみにて飽きたらしめ＝　世を終わるまで喜び楽しませたまえ
一五　我らを苦しめたまえる日、我らが災いにあいし年の多きをおもい＝　我らの喜びの日を長からしめたまえ

一六 みわざをなんじのしもべらにしめし＝ なんじの栄光をその子らにあらわした
まえ
一七 我らの神・主の恵みを我らの上にくだし＝ 我らの手のわざを我らの上に栄えし
めたまえ、我らの手のわざを栄えしめたまえ
主よ、とこしえの平安を＝ 彼にあたえ
絶えざる御光をもて＝ 照らしたまえ

詩三十九篇

一 われ言えり、「われ舌をもて罪を犯さざらんために、わが道をつつしみ＝ 悪しき
者のわが前におる間はわが口にくつわをかけん」と
二 われ默して語らず、わが口を堅くとざせり＝ されどわが悩みなおつのれり
三 わが心わがうちに熱くなり、思いつづくるほどに火もえたり＝ かくてわれ舌を
もていえり
四 「主よ、願わくはわが終わりとわが日の数とを知らしめたまえ＝ わが命のはか
なきを知らしめたまえ
五 見よ、なんじわがすべての日をつかのまに過ぎ去らしめたもう＝ わがいのち御
前にては、なきにひとし
げにすべての人はむなし＝ 人の世にあるは影にことならず
六 彼らのさわぎ立つはむなし＝ その積みたくわえしもの、たれの手におさまるを
知らず
七 主よ、われ今なにをか待たん＝ わが望みはなんじにあり
八 願わくはわがすべてのとがより我を助けいだしたまえ＝ 愚かなる者にそしらる
ることなからしめたまえ
九 われは默して口を開かず＝ そは、なんじかくなさしめたまえばなり
一〇 願わくはなんじの下したまえる災いを取り去りたまえ＝ われなんじの御手にう
ち懲らさるるによりて滅ぶるばかりなり
一一 なんじ罪を責めて人を懲らし、その慕い喜ぶものを、しみの食ろうごとく消えう
せしめたもう＝ げにすべての人はむなし
一二 主よ、願わくはわが祈りをきき、わが叫びに耳をかたむけたまえ＝ わが涙を見

て默したもうなかれ
我はなんじに身を寄する旅びとなり＝　わがすべての先祖のごとく宿れる者なり
三　我ここを去りてうせんとす＝　願わくは見すぐして我をさわやかならしめたまえ」

主よ、とこしえの平安を＝　彼にあたえ
絶えざる御光をもて＝　照らしたまえ

詩百三十篇

一　主よ、われ深き淵よりなんじをよぶ＝　主よ、願わくはわが声を聞き、わが願いに耳をかたむけたまえ
二　主よ、なんじもし、もろもろの不義に目をとめたまわば＝　主よ、たれかよく立つことを得んや
三　されどなんじにゆるしあり＝　されば人にかしこまれたもうべし
四　われ主を待ち望む、わが魂はまちのぞむ＝　我は御言葉によりてのぞみをいだく
五　わが魂の主を待つは見張りびとの暁を待つにまさる＝　げに見張りびとの暁を待つにまさるなり
六　イスラエルよ、主によりて望みをいだけ＝　主にはいつくしみあり、また豊かなるあがないあり
七　主はイスラエルをすくい＝　そのもろもろのよこしまより、あがないたまわん
八　主よ、とこしえの平安を＝　彼にあたえ
絶えざる御光をもて＝　照らしたまえ

ここでコリント前書第一五章二〇節から二八節、三五節から三八節、および四二節から五八節まで、またはコリント後書第四章一六節から第五章一〇節までを朗読する。

まさしくキリストは死人のうちよりよみがえり、眠りたるものの初穂となりたまえり。それ死の人によりてきたりしごとく、死人のよみがえりもまた人によりていできたれり。すべての人アダムによりて死ぬるごとく、すべての人キリストによりて生くべし。しかしておのおのそのついでに従ごう。まず初穂なるキリスト、次はそのきたりたもうときキリストに属する者なり。つぎに終わりきたらん。その時キリストはもろもろの権能・権威・権力を滅ぼして国を父なる神にわたしたもうべし。彼はすべて

敵をその足の下におきたもうまで王たらざるを得ざるなり。いやはての敵なる死もまた滅ぼされん。神はよろずの物を彼の足の下に従わせたまいたればなり。よろずの物を彼に従わせたりとのたもう時は、よろずの物を従わせたまいし者のそのうちになきこと明らかなり。よろずの物かれに従う時は、子もまたみずからよろずの物をおのれに従わせたまいし者に従わん。これ神はよろずの物においてよろずの事となりたまわんためなり。されど人あるいは言わん、死人いかにしてよみがえるべきか、いかなる体をもてきたるべきかと。愚かなる者よ、なんじのまくところの物まず死なずば生きず。またそのまくところのものは後に成るべき体をまくにあらず、麦にてもほかの穀にてもただ種粒のみ。しかるに神は御心に従いてこれに体を与え、おのおのの種にその体を与えたもう。死人のよみがえりもまたかくのごとし。朽つる物にてまかれ、朽ちぬものによみがえらせられ、卑しきものにてまかれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱きものにてまかれ、強きものによみがえらせられ、血気の体をまくにあらず、霊の体にてまかれ、霊の体によみがえらせられん。血気の体あるごとく、また霊の体あり。しるして、はじめの人アダムは生ける者となれりとあるがごとし。しかして終わりのアダム は命を与うる霊となれり。霊のものは先にあらず、かえって血気のものさきにありて霊のもの後にあるなり。第一の人は地よりいでて土に属し、第二の人は天よりいでたる者なり。この土に属するものにすべて土に属するものは似、この天に属するものにすべて天に属するものは似るなり。我ら土に属するものの形をもてるごとく、天に属するものの形をももつべし。兄弟よ、我これを言わん、血肉は神の国を継ぐことあたわず、朽つるものは朽ちぬものを継ぐことなし。見よ、我なんじらに奥義を告げん、我らはことごとく眠るにはあらず、終わりのラッパの鳴らん時みなたちまちまたたく間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬものによみがえり、我らは化するなり。そはこの朽つるものは朽ちぬものを着、この死ぬるものは死なぬものを着るべければなり。この朽つるもの朽ちぬものを着、この死ぬるもの死なぬものを着んとき、「死は勝ちにのまれたり」としるされたる言葉は成就すべし。「死よ、なんじの勝ちはいずこにかある。死よ、なんじの針はいずこにかある」。死の針は罪なり、罪の力は律法なり。されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス＝キリストによりて勝ちを与えたもう。さればわが愛する兄弟よ、堅くして動くことなく、つねに励みて主のわざを努めよ、な

んじらその労の主にありてむなしからぬを知ればなり。

または

このゆえに我らはきおちせず、我らが外なる人はやぶるれども、内なる人は日々に新たなり。それ我らが受くるしばらくの軽き悩みは、きわめて大いなるとこしえの重き光栄を得しむるなり。われらの顧みるところは、見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものはしばらくにして、見えぬものはとこしえに至るなり。我らは知る、我らの幕屋なる地上の家破るれば、神の賜う建物、すなわち天にある、手にて造らぬ、とこしえの家あることを。我らはその幕屋にありて嘆き、天よりたもう住みかをこの上に着んことをせつに望む。これを着るときは裸にてあることなからん。我らこの幕屋にありて重荷を負えるごとくに嘆く、これを脱がんとにあらでこの上に着んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の命にのまれんためなり。我らをこの事にかのうものとなし、その証として御霊を賜いし者は神なり。このゆえに我らはつねに心強し、かつ身におるうちは主より離れおるを知る、見ゆるところによらず、信仰により て歩めばなり。かく心強し、願うところはむしろ身を離れて主とともにおらんことなり。されば身におるも身を離るるも、ただ御心にかなわんことを努む。我らはみな必ずキリストのさばきの座の前にあらわれ、善にもあれ、悪にもあれ、おのおのその身になしたることに従いて報いを受くべければなり。

一同立つ。

司式者　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ

司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主よ、しもべのさばきにかかわりたもうなかれ

会衆　そは生けるものひとりだに御前に義とせらるるはなし
司式者　主よ、とこしえの平安を彼にあたえたまえ
会衆　絶えざる御光をもて照らしたまえ
司式者　われ生ける者の地において主のいつくしみを見るたのみなくば
会衆　わが望みはいかにぞや
司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者　我ら祈るべし

次に左の祈りの全部または一部を用いる。さらに諸聖徒日、復活前日、三位一体後第十二主日の特祷等、適当な祈りを選んで用いてもよい。

全能の神よ、主にありて世を去る者の霊、主とともに生きながらえ、主を信ずるものの魂、肉の重荷をおろすのち、主とともにおりて楽しむ。願わくは主のしもべ（――）をあわれみ、この世にておかせる罪をことごとく赦し、終わりの日に彼を正しき者とともによみがえらせ、天の御国に至り、主の聖徒とともに住まわせたまえ。

我らの贖い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神よ、全うせられたる義人の魂は主とともに生きながらう。我ら今、主のしもべ・愛する兄弟の魂を、世の造り主・慈悲ふかき救い主にゆだね、これを尊きものと認めたまわんことをこいねがい奉る。願わくは世の罪を除くためにほふられたまいし小羊の血にて洗い、この世にて肉の欲、悪魔のいざないによりて受けし汚れを清め、傷なき者となりて主の御前にいずることを得させたまえ。また我ら世にある者、おのが命のはかなきを悟り、その日をかぞえ、限りなき命に至る知恵を得させたまえ。ひとりの御子・我らの主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

万民の父なる神よ、世を去りし兄弟のために祈り奉る。願わくは主の平安をかれに与え、とこしえの御光をもって彼を照らし、いつくしみ深き知恵と全能の御力とをもって、主のまったき御旨を成し遂げたまわんことを、主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

願わくは罪を去りし者の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

聖餐式

葬祷につづいて聖餐式を行なうときは次の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特祷

すべての人の造り主・贖い主なる神よ、願わくは主のしもべ（——）の魂をみそなわし、御子の苦しみのいさおによりて、その量るべからざる恵みを受け、終わりの日に世を去りしすべての忠義なるしもべとともに、喜びて主の御顔を仰ぎ見ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　テサ前　四章一三―一八

兄弟よ、すでに眠れる者のことにつきては、なんじらの知らざるを好まず、望みなきほかの人のごとく嘆かざらんためなり。我らの信ずるごとく、イエスもし死にてよみがえりたまいしならば、神はイエスによりて眠りにつきたる者を、イエスとともに連れきたりたもうべきなり。我ら主の言葉をもてなんじらに言わん、我らのうち主のきたりたもう時に至るまで生きて残れる者は、すでに眠れる者に決して先だたじ。それ主は号令と御使いのおさの声と神のラッパとともに、みずから天より下りたまわん。その時キリストにある死人まずよみがえり、後に生きて残れる我らは彼らとともに雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、かくていつまでも主とともにおるべし。されればこれらの言葉をもて互いに相なぐさめよ。

福音書　ヨハ　六章三七―四〇

イエス言いたもう、「父の我に賜うものはみな我にきたらん、我にきたる者は我これをしりぞけず。それわが天より下りしは、わが心をなさんためにあらず、我をつかわしたまいし者の御心をなさんためなり。我をつかわしたまいし者の御心は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終わりの日によみがえらすることこれなり。わが父の御心は、すべて、子を見て信ずる者のとこしえの命をうることこれなり。われ終わりの日にこれをよみがえらすべし」。

告別

葬祷または聖餐式につづいて次の告別を用いてもよい。
司式者は棺のかたわらに立って次のように言う。

われ堅く信ず、死も命も、御使いも権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、このほかの造られたるものも、我らの主キリスト＝イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを
われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。されば生くるも死ぬるも我らは主のものなり。それキリスト死にてまた生きたまいしは、死にたる者と生ける者との主とならんためなり
ロマ書八章三八、三九節

わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えにゆく
ロマ書一四章八、九節

司式者　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ

司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン
ヨハネ伝一四章二節

司式者　主よ、よみの門より

会衆　彼の魂をすくいたまえ

司式者　彼を安らかにいこわせたまえ

会衆　アーメン

司式者　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

司式者　我ら祈るべし

常に我らをあわれみて赦したもう神よ、願わくは御定めによりて世を去りし主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、彼をあだの手に渡すことなく、御使いに命じてパラダイスに迎え入れしめたまえ。彼は主を望み、主を信じたれば、主の大いなるいつくしみによりて限りなき喜びをうることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神・慈悲の父よ、悲しむ者に御力を与えたまわんことを、せつに祈り奉る。願わくはすべての思い煩いを主にゆだね、主の愛の慰めを悟ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司式者　主よ、とこしえの平安を彼にあたえ

会衆　絶えざる御光をもて照らしたまえ

司式者　彼を安らかにいこわせたまえ

会衆　アーメン

司式者　願わくは世を去りし者の魂、主のあわれみにより て安らかにいこわんことを

会衆　アーメン

埋葬

墓に行き棺をおろす間、司式者は墓のかたわらに立って、次の語を唱えまたは会衆とともに歌う。

女より生まれし者はその日少なくして、なやみ多し。そのきたること花のごとくにして散り、その馳すること影のごとくにしてとどまらず

我ら、いのちの半ばにも死に臨む、我らの罪を怒りたもうことは、まことに正し。されど主のほかに、たれにか助けを求むべき

至聖なる神・いと強き主・聖にしてあわれみ深き救い主よ、我らを限りなき死の苦しみに至らせたもうなかれ

我らの心の秘密を知りたもう主よ、我らの祈りにあわれみの耳を閉じたもうなかれ

至聖なる主・いと強き神・聖にしてあわれみ深き救い主・とこしえにいます正しきさばき主よ、我らを赦し、臨終のとき死のなやみのために主を離ることなからしめたまえ

ここで司式者が次のように言うとき、かたわらに立つ者は棺の上に土を投じる。

全能の神、大いなるあわれみをもって、我らが愛するこの兄弟を召したまいたれば、今生のかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし、終わりの日よみがえりと後の世の命とを主イエス＝キリストによりて堅く望む。主イエス世をさばかんとて大いなる威光をもって再びきたりたもうとき、地および海の中より死人を呼びいだし、万物をおのれに従わせうる力をもって、主にありて眠れる者の卑しきからだを変え、その栄光のからだにかたどらしめたもうべし

ここで司式者は次の語を歌いまたは唱える。

天より声ありて我にもの言うを聞けり。いわく、なんじこの言葉をしるせ。今よりのち主にありて死ぬる死人は幸いなり。御霊も言いたもう、彼らはその働きをやめて休まん

司式者　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ

司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にましますわれらの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者は言う。

我ら祈るべし

神よ、主のいつくしみは量りがたし。願わくは世を去りし主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、彼を光と喜びの御国に至らせ、聖徒の交わりに入ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

我らの主イエス＝キリストの父・あわれみ深き神よ、主イエスは、我はよみがえりなり、命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこ

しえに死なざるべしと教え、また主にありて眠れる者につきて、望みなき人のごとく嘆くなかれと使徒聖パウロによりて教えたまえり。願わくは父よ、我らを罪の死より義の命によみがえらせ、この世を去るとき、主イエスにありて安らかにいこうことを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

願わくは世を去りし者の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

火葬・水葬の時にもこの式を用いる。火葬の時には、「今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」とあるのを「今そのかばねを火にゆだね」とし、水葬のときには、「今そのかばねを海にゆだね」とする。遺骨埋葬の時には「今その遺骨を地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」と言う。

墓地聖別

聖別してない墓地に埋葬するときは「女より生まれし者……」の前に司祭は次の祈りを用いる。

主イエス＝キリストよ、主はヨセフの備えし新しき墓にねむり、これを御民のために望みの伏しどとして清めたまえり。願わくはこの墓地を清め、ここに葬らるるしもべらの休み所となして、彼らを安らかにいこわせたまえ。主はよみがえり、また命にして、父と聖霊とともに世々限りなく生きて統べ治めたもうなり。アーメン

幼年葬送式

この式は洗礼を受けた幼な子に用いる。
司式者は棺を迎え、これにさきだって聖堂あるいは墓に行くとき、次の聖語の一節または数節を歌いあるいは唱える。

葬　　祷

主言いたもう、我はよみがえりなり、命なり、我を信ずるものは死ぬとも生きん。およそ生きて我を信ずる者はとこしえに死なざるべし　ヨハネ伝一一章二五、二六節

なんじら慎みてこの小さき者のひとりをも侮るな。我なんじらに告ぐ、彼らの御使いたちは天にありて、天にいますわが父の御顔を常に見るなり　マタイ伝一八章一〇節

我らは何をも携えて世にきたらず、また何をも携えて世を去ることあたわず。主あたえ、主取りたもうなり、主の御名はほむべきかな　テモテ前書六章七節、ヨブ記一章二一節

聖堂に入りまたは墓に行って次の詩を歌いあるいは唱える。

詩二十三篇

一　主はわが牧者なり＝　我は乏しきことなからん
二　主は我をみどりの野に伏さしめ＝　いこいのみぎわにともないたもう
三　主はわが魂を生かし＝　御名のために正しき道にみちびきたもう
四　たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれじ＝　なんじ我とともにいまし、なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ
五　なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝　わがこうべに油を注ぎたもう、わが杯はあふるるなり
六　われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝　我はとこしえに主の宮のうちに住まわん

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

ここで聖マルコの福音書第一〇章一三節から一六節までを朗読する。

イエスのさわりたまわんことを望みて、人々幼な子らを連れきたりしに、弟子たちいましめたれば、イエスこれを見、憤りて言いたもう、「幼な子らの我にきたるを許せ、

とどむな、神の国はかくのごとき者の国なり。まことになんじらに告ぐ、おおよそ幼**な子のごとくに**神の国を受くる者ならずば、これに入ることあたわず」。かくて幼**子をいだき、手をその上におきて祝したまえり。**

一同立つ。

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを

司式者　我ら祈るべし

主イエス＝キリストよ、主は幼な子をいだきて祝したまえり。我ら主のいつくしみを堅く信じて、この幼な子を主の大いなる愛の御手にゆだね奉る。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

命のもとなる全能の神よ、主の摂理はくすしく、いつくしみは量りがたし。願わくはこの幼な子のために嘆くしもべらを慰め、この世にては主を信じ、主に仕え、とこしえの御国にては彼とともに主の約したまえる幸いにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで適当な祈りおよび次の語を用いてもよい。

司式者　主の御前にはみち足れる喜びあり
会衆　主の右にはもろもろの楽しみ、とこしえにあり

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

聖餐式

葬祷につづいて聖餐式を行なうときは次の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特祷

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもって天の使いと世の人との位を立て、その務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる御使いに命じて、地にある我らを守らしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　黙　五章一一―一四

我また見しに、御位と生き物と長老たちとの回りにおる多くの御使いの声を聞けり。その数、千々万々にして、大声に言う、「ほふられたまいし小羊こそ力と富と知恵と勢いと尊きと栄光と賛美とを受くるにふさわしけれ」。我また天に、地に、地の下に、海にあるよろずの造られたる物、またすべてそのうちにある物の言えるを聞けり。いわく、「願わくは御位に座したもう者と小羊とに賛美と尊きと栄光と力と世々限りなくあらんことを」。四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝せり。

福音書　ヨハ　一章四七―五一

イエス、ナタナエルのおのがもとにきたるを見、これをさして言いたもう、「見よ、これまことにイスラエルびとなり、そのうちに偽りなし」。ナタナエル言う、「いかにして我を知りたもうか」。イエス答えて言いたもう、「ピリポのなんじを呼ぶまえに、我なんじがいちじくの木の下におるを見たり」。ナタナエル答う、「ラビ、なんじは神の子なり、なんじはイスラエルの王なり」。イエス答えて言いたもう、「我なんじがいちじくの木の下におるを見たりと言いしによりて信ずるか、なんじこれよりもさらに大いなる事を見ん」。また言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、天ひらけて人の子の上に神の使いたちの上り下りするをなんじら見るべし」。

告別

葬祷または聖餐式につづいて次の告別を用いてもよい。
司式者は棺のかたわらに立って、会衆とともに次の詩を歌いまたは唱える。
詩の前に司式者または始唱者は次の語を用い、栄光の頌の後には一同で用いる。

彼は主より幸いをうけ　その救いの神より義をうくべし

詩二十四篇

一　地とそれに満てるものは主のものなり＝　世界とそのなかに住むものは主のもの
なり
二　主はその基を大海の上にすえ＝　これを大川の上にさだめたまえり
三　主の山に登るべき者はたれぞ＝　その聖所に立つべき者はたれぞ
四　手きよく心いさぎよき者ぞその人なる＝　むなしきことを仰ぎ望まず、偽りの誓
いをせざる者ぞその人なる
五　かかる人は主より幸いをうけ＝　その救いの神より義をうくべし
六　これぞ神を慕う者のやからなる　ヤコブの神の御顔を求むる者のやからなる
七　門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝　栄光の王いりた
まわん
八　栄光の王はたれなるか＝　力を持ちたもう主なり、戦いに勇ましき主なり
九　門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝　栄光の王いりた
まわん

一〇　この栄光の王はたれなるか＝　万軍の主、これぞ栄光の王なる

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　罪なきゆえになんじは我を受けたまえり

会衆　**なんじは、とこしえに我を御顔の前におきたもうなり**

司式者　**主なんじらとともにいますことを**

会衆　**主なんじの霊とともにいますことを**

司式者　我ら祈るべし

いつくしみ深き全能の神よ、主は洗礼を受けて新たに生まれ、御定めによりて世を去りし幼な子に限りなき命を与えたもう。願わくは我らに御恵みを与え、この世にて忠実に主に仕え、ついに天の御国にて彼らとともに、とこしえの幸いにあずかることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に司祭は言う。

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

埋葬

墓に行き棺をおろす間、司式者は墓のかたわらに立って次の語を唱えまたは会衆とともに歌う。

女より生まれし者はその日少なくして、なやみ多し。そのきたること花のごとくにして散り、その馳すること影のごとくにしてとどまらず

主は牧者のごとくその群れを養い、そのかいなにて小羊をいだき、これをそのふところにいれて携え、乳をふくまする者を柔らかに導きたまわん

なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん

ここで司式者が次のように言うとき、かたわらに立つ者は棺の上に土を投じる。

全能の神、大いなるあわれみをもって我らが愛するこの幼な子を召したまいたれば、今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし、終わりの日のよみがえりと後の世の命とを主イエス＝キリストによりて堅く望む。主イエス世をさばかんとて大いなる威光をもって再びきたりたもうとき、万物をおのれに従わせる力をもって、主にありて眠れる者の卑しきからだを変え、その栄光のからだにかた

どらしめたもうべし

ここで司式者は次の語を歌いまたは唱える。

彼らは神の御位のまえにありて、昼も夜もその聖所にて神に仕う。みくらに座したもう者は、彼らの上に幕屋を張りたもうべし
彼らは重ねて飢えず、重ねてかわかず、日も熱も彼らを侵すことなし
御位の前にいます小羊はかれらを牧して命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より涙をぬぐいたもうべし

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　幼な子の我にきたるを許せ
会衆　神の国はかくのごとき者の国なり
司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者、　我ら祈るべし

いとあわれみ深き父よ、我らこの幼な子の魂を慈悲の御手にゆだね奉る。願わくは我らに恵みを与え、この世にて主をおそれ、主を愛し、この世を去るとき、主のいつくしみによりて平安にいこうことを得させたまえ。願わくは終わりの日のよみがえりの時、彼とともに我らを御心にかのう者と認め、御子イエス＝キリストより、わが父に祝せられたる者よ、きたりて世の初めより、なんじらのために備えられたる国を継げとの御声をきく幸いにあずからしめたまえ。我らの贖い主イエス＝キリストによりて

こいねがい奉る。アーメン

全能の神・慈悲の父よ、悲しむ者に御力を与えたまわんことをせつに祈り奉る。願わくはすべての思い煩いを主にゆだね、主の愛の慰めを悟ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は言う。

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

大斎懺悔式

この式は大斎始日その他主教の定める日に用いる。ただし詩五十一篇を省き、以下を嘆願の「キリストよ、我らの願いをききたまえ」につづけてもよい。

一同ひざまずき次の詩を歌いまたは唱える。

詩五十一篇

一　ああ神よ、願わくはなんじのいつくしみによりて我をあわれみ＝　なんじの豊かなるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消したまえ

二　わが不義をことごとくあらい去り＝　我をわが罪よりきよめたまえ

三　我はわがとがを知る＝　わが罪は常にわがまえにあり

四　我はひとえになんじに罪をおかし、御前に悪しきことをおこなえり＝　さればなんじの宣告はなんじのさばきはあやまりなし

五　見よ、我よこしまのうちに生まれ＝　わが母罪のうちにありて我をはらみたりき

六　なんじはわがうちにまことを求めたもう＝　さればわが心ふかく知恵を知らしめたまえ

七　ヒソプをもて我を清めたまえ、さらば我きよくならん＝　われを洗いたまえ、さらばわれ雪よりもしろくならん

八　願わくはわれに喜びと楽しみとをみたし＝　なんじが砕きし骨を喜ばせたまえ

九　願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝　わがすべての不義をけしたまえ

一〇　神よ、わがために清き心をつくり＝　わがうちに直き霊をあらたにおこしたまえ

一一　我を御前より捨てたもうなかれ＝　なんじのきよき霊を我より取りたもうなかれ

一二　なんじの救いの喜びを我にかえし＝　自由の霊にて我をささえたまえ

一三　さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝　罪びとはなんじに帰りきたるべし

一四　神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝　わが舌は声たからかになんじの救いをうたわん

一五　主よ、わがくちびるを開きたまえ＝　さらばわが口なんじの誉れをあらわさん

一六　なんじはいけにえを好みたまわず＝　たといわれ燔祭をささぐともなんじ喜びたまわず

一七　神の求めたもう供え物は砕けたるたましいなり＝　神よ、なんじは砕けたる悔い改めし心を軽しめたもうまじ

一八　願わくは御心に従いてシオンをさきわいずきたまえ

一九　その時なんじ正しきいけにえと燔祭と全き燔祭とを喜びたまわん＝　かくて人々なんじの祭壇に雄牛をささげん

司式者　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ

司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめた

まえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主よ、しもべを救いたまえ

会衆　我ら主にたよれり

司式者　主よ、天より助けをくだしたまえ

会衆　大いなる力をもって常に我らを守りたまえ

司式者　救いの神よ、我らを助けたまえ

会衆　御栄えのために我らを救い、御名のゆえに我ら罪びとをあわれみたまえ

司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者　我ら祈るべし

主よ、あわれみをもって我らの祈りを聞こし召し、その罪を懺悔する者をことごとく赦したまえ。願わくは罪のために良心の責められる者は、慈悲ふかき主より赦しをこうむりて、全く安んずることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

慈悲ふかき父・全能の神よ、主は造りたまいし物を一つも憎まず、すべての人を深くあわれみ、罪びとの死ぬるを好まずして、その悪を離れ救わるることを喜びたもう。願わくはあわれみをもって我らのとがを赦したまえ。我らはまことに罪に悩み、その重荷に耐えがたし。父よ、我らを受け、我らを慰めたまえ。主は常にあわれみあり、ただ主のみ罪を赦したもう。慈悲ふかき主よ、我らを赦したまえ。贖いたまえるしもべを赦したまえ。願わくは土くれのごとき罪びとをさばきたもうなかれ。我らはおのれの卑しきを知り、自らの罪を深く悲しめり。主よ、怒りたもうことなく、今すみやかに我らを助け、後の世に限りなく主とともにおらしめたまえ。主イエス＝キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

次に一同、次の祈りを用いる。

慈悲ふかき主よ、我らをかえしたまえ、我ら主に帰らん。主よ、顧みたまえ、いま悲

しみと祈りと断食とをもって主に帰るしもべを顧みたまえ。主はあわれみふかく、恵み満ち、ながく忍びたもう。主は罰せらるべき者をも赦し、怒りの中にもあわれみを忘れたまわず。慈悲ふかき主よ、願わくは赦したまえ、主の民を赦したまえ。主のゆずりを滅ぶるに任かせたもうなかれ。恵みに富みたもう主よ、大いなるあわれみをもって我らを顧み、我らの祈りを聞こし召したまえ。御子イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る　アーメン

次に司式者は言う。

願わくは主われらを祝し、我らを守りたまえ。願わくは主御顔をもって我らを照らし、我らを恵みたまわんことを。願わくは主御顔を我らに向け、限りなく平安をあたえたまわんことを。アーメン

説教のないとき、司式者は次の勧告を詩五十一篇または嘆願の前に用いてもよい。

兄弟よ、むかし公会には明らかに大罪を犯したる者を大斎の初めに当たり、会衆の前にて懲らしむるならいあり。これ、この世にて罰せらるるとも、主の日に救われんため、また他人にも戒めとなりて罪を犯すことを恐れしめんためにして、罪に対する神の大

いなる怒りと、悔い改めざる者にきたるべきさばきとを思い、罪と怠りとを嘆き、行ないを改むることを決心し、神のあわれみを願うためなり。

今や木の根におのは置かる、ゆえにすべて良き実を結ばざる木は切られて火に投げ入れらる。主の日のきたるはぬすびとの夜きたるがごとし、人々平和無事なりと思うとき滅びたちまちきたらん、主言いたもう、「その時かれら我を呼ばん、されど我こたえじ。ひたすら我を求めん、されど我に会わじ。彼ら知識を憎み、主をおそるる事を喜ばず、わが勧めに従わず、すべてわが懲らしめを卑しめたるによりてなり」と。門を閉じて後たたくは遅れたり、さばきのときあわれみを願うはおそし。その時かれらの罪を正しく定めたもう主は、いと恐るべき声にて言いたまわん、「のろわれたる者よ、我を離れて悪魔とその使いらのために備えられたる消えざる火に入れ」と。

ゆえに兄弟よ、救いの日の過ぎざるうちに慎むべし、夜きたらば、たれも、わざをなすことあたわず。されば光あるうちに光を信じ、光の子のごとく歩むべし。神の恵みをなみするなかれ。神は大いなるあわれみをもって我らを悔い改めに導き、また真心をもって帰る者の罪を赦すことを約したまえり。我ら罪を犯したれども、我らをとり

なす義なるイエス＝キリスト父のまえにあり、彼は我らの罪のために、なだめの供え物なり。彼は我らのとがのために傷つけられ、我らの不義のために打たれたまえり。ゆえにあわれみ深き主に帰るべし。必ず我らを受け、我らの罪を赦したもうことを疑うなかれ。常に主にならいてへりくだり、耐え忍び、愛する心をいだき、聖霊の導きに従い、主の栄光をあらわし、感謝して主に仕うることを努むべし。願わくは大いなるあわれみによりて、我らを御国に至らせたまわんことを　アーメン

聖職按手式

序言

聖書ともろもろの古書を研究すれば、キリストの公会に使徒時代より主教・司祭・執事の職位ありしこと明らかなり。しかしてこの職位はいにしえより大いに重んずるところにして、なにびとたりとも、あえて、みずからほしいままに行のうことを許さず。必ずまず召され、試みられ、適当なる者と認められ、公祷式と正当なる有権者の按手により立てられたる者にかぎられたり。日本聖公会においても、長くこの職位を維持し、うやうやしくこれを行のうものなり。ゆえに、まず召され、試みられ、次の式に従いて立てられたる者、または聖公会の主教により立てられたる者にあらざれば、日本聖公会の主教・司祭・執事と認め、その職を行のうことを得ず。また法規に定めたる年齢の者にあらざればこれらの職に任命すべからず

主教自ら調査し、あるいは他の証明によって、執事志願者または司祭志願者が品行

正しく罪過のないことをつまびらかにし、また試験して、その人が聖書に通じ、法規に定めた学識があることを認めたときは次の式に従って、会衆の前で執事・司祭に任じることができる。

この式は聖職按手節に行なう。必要のときは主日または他の祝日あるいは平日に行なってもよい。

執事按手

あまねく教会の祈祷と立証を求めるため、教区主教が教区内各教会および各教区にあらかじめ公告した日に、早祷が終わってから、主教指名の聖職が執事の職分のこと、その職位の公会に必要なこと、信徒はこれを尊敬すべきこと等を示す説教をする。説教が終わって主教は祭壇に近い座に着く。一人の司祭は正服を着けた志願者を伴い聖所の入口に立って次のように推薦する。

師父よ、この人々を執事（デヤコン）の職に任ぜんことを願う

主教は言う。

今なんじが推薦する人々は品行正しく学問あり、その職責を尽くして神の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つるに適当なりや

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、また試験してかくのごとき者なりと思う

次に主教は会衆に言う。

兄弟よ、もしこの人々に著しき罪、または執事とせらるるに故障あることを知る者あ

らば、いま神の御名によりて申し立つべし

もし著しい罪、または故障があると申し立てる者があれば、その按手を中止して事の明白になるまで待たなければならない。

主教は言う。

我ら執事の職に任ずるに適当と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで一同黙祷し、嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に主教は立って左の願いを加える。

主教　願わくは今、執事の職に任ぜらるるこのしもべらを祝し、主の恵みを彼らに注ぎ、その務めを正しく行ないて聖公会の徳を建て、御名の栄光をあらわさせたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

次に聖餐式を行ない、左の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特祷

全能の神よ、主はくすしき摂理をもって聖公会のうちに聖職を立て、その位を分かち、また使徒たちを導きて、最初の殉教者聖ステパノと他の人々を執事の職に選ばしめたまえり。今この職に召されたるしもべらを見そなわしたまわんことをこいねがい奉る。願わくは主の道の真理をもって彼らを満たし、清き生涯をもって彼らを装い、忠実に主に仕え、その教えと行ないとをもって御名の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　テモ前　三章八―一三

執事もまた同じく謹厳にして、言葉を二つにせず、大酒せず、恥ずべき利をとらず、きよき良心をもて信仰の奥義を保つものたるべし。まず彼らを試みて責むべき所なくば、執事の職に任ずべし。女もまた謹厳にして人をそしらず、みずから制してすべての事にまめやかなる者たるべし。執事はひとりの妻の夫にしてこどもとおのが家とをよく治むる者たるべし。よく執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト＝イエスにおける信仰につきて大いなる勇気をうるなり。

または　使　六章二―七

ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う、「我ら神の言葉をさしおきて食卓に

仕うるはよろしからず。されば兄弟よ、なんじらのうちより御霊と知恵とにて満ちたるよき聞こえある者七人を見いだせ、それにこの事をつかさどらせん。我らは、もっぱら祈りをなす事と御言葉に仕うる事とを努めん」。集まれるすべての者この言葉を良しとし、信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上におけり。かくて神の言葉ますます広まり、弟子の数エルサレムにてはなはだ多くなり、祭司のうちにも信仰の道に従えるもの多かりき。

ここで主教は座につき、志願者に次のように問う。

主教　なんじらこの職に任ぜられんとするは、聖霊の感化によると信じ、神に仕え、その栄光をあらわし、主の民の徳を建つるためなりと信ずるか

答　我これを信ず

主教　なんじらこの職に召さるるは、主イエス＝キリストの御心にかない、また日本聖公会の律法にかなえりと思うか

答　しか思う

主教　なんじら聖書は神より与えられ、主イエス＝キリストによりて成就されたる神の啓示を我らに伝うるものなりと信ずるか

答　我これを信ず

主教　なんじら教会に集まる人々に、聖書を熱心に読み聞かすことを努むるか

答　我これを努む

主教　そもそも執事の職務は礼拝のさい、ことに聖餐を分け与うるとき、司祭を助け、また聖書を読み、少年・少女に公会問答を教え、司祭欠席のとき幼な子に洗礼を施し、主教の許しあらば説教することなどなり。また、病める者・貧しき者・弱き者を尋ね、その住所・姓名・その他の状況を司祭に報告し、会衆および他の人の信施をもって救助にあずからしむることも執事の務めなり。なんじら喜びてこれをなすか

答　われ神の助けによりてこれをなさん

主教　なんじら慎みておのれと家族との行ないをキリストの道にかなわせ、力の及ぶ限りキリストの群れの良き模範となることを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

主教　なんじらの上に立てられたる主教と司祭を敬い、これに服し、喜びてその正しき勧告に従うか

答　われ神の助けによりてこれをなさん

主教は立って言う。

愛する兄弟よ、いま主の公会にて執事の職に召されし主のしもべらを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

ここで一同ひざまずいて黙祷する。

主教　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

主教　なんじら心を挙げよ

会衆　我ら心を主に挙げん

主教　主なる神に感謝し奉るべし

会衆　そは正当にしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正当にしてなすべき務めなり。ことに主は大いなるいつくしみによりて、働きびとを刈り入れ場に送り、このしもべらを公会の執事の職に召したまいしことを感謝し、御名をほめ奉る。願わくは聖霊を彼らに満たし、七つの賜物によりて、忠実にその約束を守り、慎みへりくだりて務めをはげみ、謹厳にして清き良心を保たしめ、御子キリストによりて彼らを強めたまわんことを。願わくは栄光世々限りなく父と子と聖霊にあらんことを。アーメン

ここで志願者は主教の前にひざまずき、会衆は立つ。主教は両手を各志願者の頭において言う。

「アーメン」は司式者だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、神の公会において執事の職を行のう権威をなんじに授く　アーメン

主教はおのおのに新約聖書を渡して言う。

神の公会において福音を読み、また主教の許しあらば説教する権威をなんじに授く

次に主教の指名した新執事は福音書を読む。

福音書　ルカ　一二章三五―三八

イエス言いたもう、「なんじら腰に帯し、ともしびをともしておれ。主人、婚宴より帰りきたりて戸をたたかば、ただちに開くために待つ人のごとくなれ。主人のきたるとき、目をさましおるを見らるるしもべどもは幸いなるかな。我まことになんじらに告ぐ、主人、帯してそのしもべどもを食事の席に着かせ、進みて給仕すべし。主人、夜の半ばごろもしくは夜の明くるころにきたるとも、かくのごとくなるを見らるるしもべどもは幸いなり」。

主教は聖餐式をつづける。新執事は主教とともに聖餐を受ける。

祝福の前に次の祈りを用いる。

もろもろの良き物を与えたもう全能の神よ、大いなる恵みをもってこのしもべらを受け、主の公会の執事の職に用いたもうことを感謝し奉る。願わくは彼ら常に慎みへりくだり、怠りなくその職を行ない、快く公会のおきてに従い、良心の責めなく、御子キリストにありてますます強くなり、正しくこの務めを行のうことを得させたまえ。我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。願わくは誉れと栄え、世々限りなくイエス＝キリストにあらんことを。アーメン

主教は正当な理由があるときのほか、新執事が一年以上在職しなければ司祭に按手しない。

司祭按手

あまねく教会の祈祷と立証を求めるため、教区主教が教区内各教会および各教区にあらかじめ公告した日に、早祷が終わってから、主教指名の聖職が司祭の職分のこと、その職位の公会に必要なこと、信徒はこれを尊敬すべきこと等を示す説教をする。説教が終わって主教は祭壇に近い座につく。一人の司祭は正服を着けた志願者を伴い次のように推薦する。

師父よ、この人々を司祭（プレスブテロ）の職に任ぜんことを願う

主教は言う。

今なんじが推薦する人々は品行正しく学問ありて、その職責を尽くして神の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つるに適当なりや

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、また試験してかくのごとき者なりと思う

次に主教は会衆に言う。

兄弟よ、今日この人々を司祭の職位に任ぜんとす。我らはすでに彼らを試験して、正しくこの職に召され、またその職務を行のうに適当なる者と思う。しかれども、もしこの人々に著しき罪、またはこの職位に任ぜらるるに故障あることを知る者あらば、いま神の御名により申し立つべし

もし著しい罪または故障があると申し立てる者があれば、その按手を中止して事の明白になるまで待たなければならない。

主教は言う。

我ら司祭の職に任ずるに適当と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで一同黙祷し、嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に主教は立って左の願いを加える。

主教　願わくは今、司祭の職に任ぜらるるこのしもべらを祝し、主の恵みを彼らに注ぎ、その務めを正しく行ないて聖公会の徳を建て、御名の栄光をあらわさせたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

次に聖餐式を行ない、左の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特祷

もろもろの良き物を与えたもう全能の神よ、主は聖霊をもって公会のうちに聖職を立

て、その位を分かちたまえり。いま司祭の職に召されたるこのしもべらを見そなわし
たまわんことをこいねがい奉る。願わくは主の道の真理をもって彼らを満たし、清き
生涯をもって彼らを装い、忠実に主に仕え、その教えと行ないをもって御名の栄光を
あらわし、聖公会の徳を建つることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治め
たもう救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　四章七―一三

我らはキリストの賜物の量りにしたがいて、おのおの恵みを賜わりたり。されば言え
ることあり、「かれ高きところに上りしとき、多くのとりこをひきい、人々に賜物を
賜えり」と。すでに上りしと言えば、まず地の低き所まで下りしにあらずや。下りし
者はすなわちよろずの物に満たんために、もろもろの天の上に上りし者なり。彼はあ
る人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師として与
えたまえり。これ聖徒を全うして務めを行ないわせ、キリストのからだを建て、我らを
してみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち
足れるほどに至らせんためなり。

福音書　マタ　九章三六―三八

イエス群衆を見て、その飼う者なき羊のごとく悩み、かつ倒るるをいたくあわれみ、
ついに弟子たちに言いたもう、「刈り入れは多く働きびとはすくなし。このゆえに刈
り入れの主に働きびとをその刈り入れ場につかわしたまわんことを求めよ」。

または　ヨハ　一〇章一―一六

イエス言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、羊のおりに門より入らずして、ほかよ
り越ゆる者は、盗びとなり、強盗なり。門より入る者は、羊の羊飼いなり。門守は彼
のために開き、羊はその声をきき、彼はおのれの羊の名を呼びてひきいだす。ことご
とくその羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。ほ
かの者には従わず、かえって逃ぐ、ほかの者どもの声を知らぬゆえなり」。イエスこ
の譬を言いたまえど、彼らその何事を語りたもうかを知らざりき。このゆえにイエス
また言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我は羊の門なり。すべて我よ
り先にきたりし者は盗びとなり、強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なり、お
およそ我によりて入る者は救われ、かつ出入りをなし、草をうべし。盗びとのきたる

は盗み、殺し、滅ぼさんとするの外なし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり。我は良き羊飼いなり、良き羊飼いは羊のために命を捨つ。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとは、おおかみの来たるを見れば羊を捨てて逃ぐ、――おおかみは羊をうばいかつ散らすゆえなり。彼は雇いびとにて、その羊を顧みぬなり。我は良き羊飼いにしてわがものを知り、わがものは我を知る、父の我を知り、我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨つ。我にはまたこのおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声をきかん、ついに一つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

ここで会衆は座につき、主教は座して言う。

兄弟よ、なんじらが召されたる職位のいと尊く、いと重きことを試験の時にも学び、今また説教にても福音書・使徒書のうちにても聞けり。我も主イエス＝キリストの名によりて重ねてなんじらに勧む。なんじらこの位のいかに尊く、この職のいかに重きかを思うべし。なんじらは主の使い・主の斥候・主の家づかさとなりて、主の家族を教え、これを戒め、これを養い、これを守り、また散りたるキリストの羊を集め、この悪しき世にある主の子供らを尋ね、キリストの限りなき救いに導くことを努むべき者なり。ゆえに、なんじら心にしるして常に忘るることなかれ。なんじらが預かる宝はまことに大いなり。これキリストの羊にして尊き血をもって買いたまいしものなり。なんじらが仕うべき教会は主の花嫁・主のからだなり。もしその教会あるいはその信徒が、なんじらの怠りによりて害をうけ、またはつまずくことあらば、その罪のいかに大いにして、その罰のいかに恐るべきかを悟るべし。ゆえに神の子供ら、キリストの花嫁・キリストのからだに対するなんじらの職務をよく考え、苦労をいとわず、力を尽くして、なんじらの預かる会衆を導き、彼ら相ともにますます神を信じ、神を知り、ついにキリストにありて全き者となり、誤れる信仰・よこしまの行ないを入るべき余地なきに至らしむるよう努むべし。なんじらの職務はかくのごとく尊くして容易ならざるものなれば、深く心をくばり、思いを巡らしてこれに当たり、なんじらをこの尊き職位に召したまいし主に忠義を尽くし、自らつまずかず、また他人をつまずかせざるよう慎むべし、しかれどもこれを願う志とこれをなす力とはおのれよりのものにあらず、ただ神の賜物なれば、ひたすら聖霊を求めざるべからず。また人々の救い

にかかわるこの重き職務は、聖書の教えとこれにかのう行ないとによらずして尽くすことあたわざれば、ねんごろに聖書を学び、努めておのれと家族との行ないをその戒めにかなわせ、また力の及ぶ限り、この世の思いわずらいを捨つべし。思うになんじらすでに自らこれらのことをよくはかり、力を尽くしてその身をこの職にゆだね、一心にこれに従事することを神の恵みによりて決心したるならん。またなんじら、これがために、必らず救い主イエス＝キリストのとりなしによりて常に父なる神に祈り、聖霊の助けを求め、また日々聖書を読み、これを味わい、これによりてますますその職に熟達し、絶えずなんじらと家族との行ないを清めて、キリストの教えにかのう良き模範となることを努むるならん

我いま神とその公会の名をもって、なんじらに問わん。これ、この会衆なんじらの誓約を聞きてなんじらの心を知り、またなんじらも一層その務めを励まんためなり

主教　なんじらこの職に召さるるは主イエス＝キリストの御心にかない、また日本聖公会の律法にかなえりと思うか

答　しか思う

主教　なんじら聖書はイエス＝キリストによりて限りなき救いをうるに必要なる教えをことごとく載せたりと信ずるか。またこの聖書をもってなんじらにゆだねられたる人々を教え、かつ聖書をもって証明し得ざることは何をも限りなき救いに必要として教えざることを決心したるか

答　我かく信じ、また神の恵みによりてかくなさんと決心せり

主教　なんじら神の命じたまいしごとく、また公会が神の命によりて奉ずるごとく、常に励みて教理を教え、聖奠を行ない、キリストの戒めを説き、なんじが預かる会衆にこれを守ることをねんごろに教うるか

答　われ神の助けによりてかくなさん

主教　なんじら神の御言葉にそむく異なる教えを教会より払い去り、健やかなる者と病める者とのわかちなく、公けにも私にも、すべての信徒を戒しめ、また勧むることを努むるか

答　われ神の助けによりてかくなさん

主教　なんじら世と肉との思い図りを捨て、祈りを励み、聖書を読み、その研究の助けとなる学問をなすことを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

主教　なんじら慎みておのれと家族との行ないをキリストの道にかなわせ、力の及ぶかぎりキリストの群れの良き模範となることを努むるか

答　われ神の助けによりてこれをなさん

主教　なんじら力を尽くしてキリストの民、ことになんじらの預かる会衆の間の平和と愛を常に保たしむることを努むるか

答　われ神の助けによりてこれをなさん

主教　なんじらの上に立てられたる主教を敬い、喜びてその正しき勧告に従い、その正しき裁決に服するか

答　われ神の助けによりてかくなさん

主教は立って言う。「アーメン」は主教だけが言う。

願わくはこの志をなんじらに与えたまいし全能の神、これらの事を成し遂ぐる力を与え、なんじらの心に始めたまいしみわざを全うしたまわんことを、主イエス＝キリストによりて願う　アーメン

主教はまた言う。

愛する兄弟よ、いま公会にて司祭の職に召されし主のしもべらを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

一同ひざまずいて黙祷する。

黙祷の後に、主教と会衆は交互に次の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

聖霊を求むる歌

一　みたまよ　くだりて　ながつくりましし
　こころに　めぐみを　あふれしめ　たまえ

二　ななの　たまものの　あぶらを　そそぎて
　いのちの　いずみを　ひらき　のましめよ

三　こころの　くらきを　てらし　みちびきて
　けがれも　はじをも　とりのぞき　たまえ

四　わがうちにやどり　やすきをたもたせ
　　そとべより　おそう　あたを　ふせぎてよ
五　ちちみこ　みたまの　みつの　くらい　なる
　　ひとりの　みかみを　さとらしめたまえ
六　ちちみこの　おくる　みたま　みちびけば
　　かみの　みさかえを　とこしえにうたわん　アーメン

主教　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
主教　なんじら心を挙げよ
会衆　我ら心を主に挙げん
主教　主なる神に感謝し奉るべし
会衆　そは正当にしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正当にしてなすべき務めなり。主は大いなるいつくしみによりて、ひとりの御子イエス＝キリストを与え、我らの贖い主・限りなき命の与え主となしたまえり。御子はその死をもって我らの贖いを成就し、天に昇りしのち使徒・預言者・伝道者・教師・牧師を送り、その働きによりて全地にわたりて大いなる群れをあつめ、御名の誉れをあらわしたまえり。かく大いなる恵みをたれ、今また救いのために定めたまえる同じ職位にこのしもべらを召したまいしことを感謝し、主をほめたたえ、主を拝み奉る。願わくは聖霊をもって彼らを満たし、ここにてもいずこにても、主の御名を呼ぶ者、つねにこの恵みを感謝し、日々信仰に進み、またこの仕えびとら及びその預かる教会、常に御名をほめ、ますます御国をひろむることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで志願者は主教の前にひざまずき会衆は立つ。主教は両手を各志願者の頭におきて言う。臨席の司祭も主教とともに手をおく。「アーメン」は主教だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて我なんじに手をおく。なんじ神の公会にて司祭の職位に

つき、その務めを行のうために、聖霊を受けよ。なんじ、たれの罪をゆるすともその罪ゆるされ、たれの罪を定むるともその罪定められるべし。なんじ忠実に神の言葉をわかち、聖奠を施すことを努むべし　アーメン

主教はおのおのに聖書を渡して言う。

なんじの預かる教会に神の言葉を宣べ、聖奠を行のう権威を授く

次にニケヤ信経を歌いまたは唱える。主教はつづいて聖餐式を行なう。新司祭は主教とともに聖餐を受ける。

祝福の前に次の祈りを用いる。

いつくしみ深き全能の父よ、願わくはこのしもべらに天の恵みをくだし、義の衣をもって彼らを装い、その宣ぶる御言葉むなしくならず、豊かに良き実を結ぶことを得させたまえ。また願わくは彼ら御言葉を宣べ、あるいはこれに基づきて教うるとき、我ら救いの道としてこれを受け、言葉と行ないをもって御栄えをあらわし、御国をひろむることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

執事按手式と司祭按手式とをあわせ行なうときは、まず執事志願者を推薦し、次に司祭志願者を推薦する。嘆願は一度だけ用い、特祷は順に二つとも用いる。使徒書はエペソ書第四章七節―一三節までを朗読し、後直ちに執事志願者を試問して任職する。次にそのひとり福音書、マタイ伝第九章三六節―三八節まで、またはルカ伝第一二章三五節―三八節までを朗読し、終わって司祭志願者を試問して任職する。

主教按手

あまねく教会の祈祷と立証を求めるため、主教会が各教区に、また当該教区主教あるいは管理主教がその教区内各教会に、あらかじめ公告した日に、早祷が終わってから、司式主教は聖餐式を行ない、次の特祷を用いる。

特祷

全能の神よ、主は御子イエス＝キリストをもって、聖なる使徒たちにもろもろの良き賜物をさずけ、主の群れを養うことを命じたまえり。願わくは主の民を牧するすべての主教、忠実に御言葉を宣べ、正しく公会を治め、信徒ら喜びてこれに従い、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に主教の一人は使徒書を、他の一人は福音書を、歌いまたは朗読する。

使徒書　テモ前　三章一―七

「人もし監督の職を慕わば、これ良きわざを願うなり」とは、信ずべき言葉なり。それ監督は責むべき所なく、ひとりの妻の夫にして自ら制し、慎み、品行正しく、旅びとをねんごろにもてなし、よく教え、酒をたしなまず、人を打たず、寛容にし、争わず、金をむさぼらず、よくおのが家を治め、謹厳にして子どもを柔順ならしむる者たるべし、（人もしおのが家をおさむることを知らずば、いかでか神の教会を扱うことを得ん）。また新たに教えに入りし者ならざるべし、おそらくは高慢になりて悪魔と同じさばきを受くるに至らん。外の人にもよき聞こえある者たるべし、しからずばそしりと悪魔のわなとに陥らん。

または　使　二〇章一七―三五

パウロ、ミレトより人をエペソにつかわし、教会の長老たちを呼びて、そのきたりし時、かれらに言う、「わがアジヤにきたりし初めの日より、いかなるさまにて常になんじらとともにおりしかは、なんじらの知るところなり。すなわち謙そんの限りをつくし、涙を流し、ユダヤびとのはかりごとによりて迫りきし試練に耐えて主に仕え、益となることは何くれとなくはばからずして告げ、公けにても家々にてもなんじらを教え、ユダヤびとにもギリシヤびとにも、神に対して悔い改め、我らの主イエスに対して信仰すべきことを証しせり。見よ、今われは心からめられて、エルサレムに行く。

かしこにていかなることの我に及ぶかを知らず。ただ聖霊いずれの町にても我に証して、なわめと悩みと我を待てりと告げたもう。されど我わが走るべき道のりと、主イエスよりうけし務め、すなわち神の恵みの福音を証しすることを果さんためには、もとより命をも重んぜざるなり。見よ、今われは知る、さきになんじらのうちを経巡りて御国を宣べ伝えしわが顔を、なんじら皆ふたたび見ざるべきを。このゆえに、我きょうなんじらに証しす、我はすべての人の血につきていさぎよし。我ははばからずして神の御旨をことごとくなんじらに告げしなり。なんじらみずから心せよ、またすべての群れに心せよ、聖霊はなんじらを群れのなかに立てて監督となし、神のおのれの血をもて買いたまいし教会を牧せしめたもう。われ知る、わがいで去るのち、荒きおおかみなんじらのうちに入りきたりて群れを惜しまず、またなんじらのうちより も、弟子たちをおのが方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。さればなんじら目をさましおれ。三年のあいだわが夜も昼も休まず、涙をもてなんじらおのおのを訓戒せしことをおぼえよ。われ今なんじらを、主およびその恵みの御言葉にゆだぬ。御言葉はなんじらの徳を建て、すべての清められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。われは人の金銀、衣服をむさぼりしことなし。この手はわが必要にそなえ、また我とともなる者に備えしことをなんじらみずから知る。我すべてのことにおいて例を示せり、すなわちなんじらもかく働きて、弱きものを助け、また主イエスのみずから言いたまいし、『与うるは受くるよりも幸いなり』との御言葉を記憶すべきなり」。

福音書　ヨハ　二一章一五―一七

イエス、シモン＝ペテロに言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、なんじこの者どもにまさりて我を愛するか」。ペテロ言う、「主よ、しかり、わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが小羊をやしなえ」。またふたたび言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」。ペテロ言う、「主よ、しかり、わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが羊を飼え」。三たび言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」。ペテロ三たび、「われを愛するか」と言いたもうを憂いて言う、「主よ、知りたまわぬところなし。わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが羊をやしなえ」。

または　ヨハ　二〇章一九―二三

この日、すなわち一週の初めの日の夕べ、弟子たちユダヤびとを恐るるによりて、おる所の戸を閉じおきしに、イエスきたり彼らのうちに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。かく言いてその手とわきとを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。イエスまた言いたもう、「平安なんじらにあれ、父の我をつかわしたまえるごとく、我もまたなんじらをつかわす」。かく言いて、息を吹きかけ言いたもう、「聖霊をうけよ。なんじらたれの罪を赦すともその罪ゆるされ、たれの罪をとどむるともその罪とどめらるべし」。

または　マタ　二八章一八―二〇

イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう、「われは天にても地にても、すべての権を与えられたり。さればなんじら行きて、もろもろの国びとを弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、わがなんじらに命ぜしすべてのことを守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまでつねになんじらとともにあるなり」。

ニケヤ信経が終わって、司式主教は祭壇に近い座につく。他の二人の主教は正服の一部を着けた被選主教を伴い次のように推薦する。

師父よ、この人を主教の職に任ぜんことを願う

司式主教は所定の証明書を朗読させ、また被選主教に次の誓約をさせる。

神の御名によりて、アーメン。日本聖公会――教区の主教に選挙せられたる我――必ず日本聖公会の教理・訓戒・拝式を守ることを誓う。神よ、願わくはイエス＝キリストによりて助けたまわんことを

次に司式主教は言う。

兄弟よ、聖書にしるせるごとく、我らの救い主キリストは十二使徒を選び、これをつかわす前に、よもすがら祈りたまえり。またアンテオケにありし弟子たちも、パウロとバルナバに手をおきてつかわす前に、断食と祈祷をなせり。ゆえに我らもこの人を立て、聖霊の召したもう所におくらんとするに当たり、救い主キリストと使徒たちの模範にならい、全能の神に祈るべし

ここで嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に司式主教は立って左の願いを加える。

司式者　願わくはこの兄弟を祝し、御恵みをくだして、正しくその務めを尽くし主の公会の徳を建て、御名の誉れと栄光をあらわさせたまわんことを

会衆　主よ、ききたまえ

嘆願の「キリストよ、我らの願いをききたまえ」につづいて司式主教は次の祈りを用いる。

もろもろの良きものを与えたもう全能の神よ、主は聖霊をもって公会のうちに聖職を立て、その位を分かちたまえり。いま主教の職に召されたるこのしもべを見そなわしたまわんことをこいねがい奉る。願わくは主の道の真理をもって彼を満たし、清き生涯をもって彼を装い、忠実に主に仕え、その教えと行ないをもって御名の栄光をあらわし、聖公会の徳を建て、良くこれを治めしめたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主イエス＝キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は座につき、司式主教は座して被選主教に問う。

兄弟よ、聖書においても、いにしえの公会のおきてにおいても、軽々しく人に手をおくことを戒め、キリストが尊き血をもって買いたまいし公会を治むる権威をみだりに与うることを禁じたり。ゆえに今この務めをなんじにゆだねんとするに当たり、次の箇条をもってなんじに問わん。これなんじが神の公会において、いかに行なわんとするかを会衆とともに試み、かつ証しせんがためなり

司式者　なんじこの職に召さるるは主イエス＝キリストの御心にかない、また日本聖公会の律法にかなえりと思うか

答　しか思う

司式者　なんじ聖書はイエス＝キリストによりて限りなき救いをうるに必要なる教理をことごとく載せたりと信ずるか。また聖書をもってなんじにゆだねられたる人々を教え、かつ聖書をもって証明し得ざることは何をも限りなき救いに必要として教えざることを決心したるか

答　我かく信じ、また神の恵みによりてかくなさんと決心せり

司式者　さればなんじねんごろに聖書をきわめ、これを悟らんことを神に祈り、その正しき教えをもって人をさとし、反対者を服せしむることを努むるか

答　われ神の助けによりてかくなさん

司式者　なんじ神の御言葉にそむく異なる教えを公会より払い去り、また公けにも私にも人々に勧めてこの事をなさしむるか

答　われ神の助けによりてかくなさん

司式者　なんじ神に逆ろう心と世の欲とを捨て、神をうやまい、正義を行ない、身を修めて人々の模範となり、敵する者をしてなんじをそしる余地なからしめんとするか

答　われ神の助けによりてこれをなさん

司式者　なんじ力を尽くしてすべての人の間に平和と愛を保たしめ、また神の言葉と公会のおきてに従いて人々を治めんとするか

答　われ神の助けによりてこれを努む

司式者　なんじ慎みて、人に手をおきて聖職に任じ、これをつかわすことを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

司式者　なんじキリストのために、貧しき者・寄るべなき者を柔和にあしろうことを努むるか

答　われ神の助けによりてこれを努む

司式主教は立って言う。「アーメン」は司式主教だけが言う。

願わくはこの志をなんじに与えたまいし天の父・全能の神、これらの事を成し遂ぐる力を与え、なんじの心に始めたまいしみわざを全うし、終わりの日に責むべきところなからしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりて願う　アーメン

司式主教はまた言う。

愛する兄弟よ、いま公会にて主教の職に召されし主のしもべを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

一同ひざまずいて黙祷する。

黙祷ののちに被選主教は正服の残部を着ける。

次に司式主教と会衆は、交互に左の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

聖霊を求むる歌

一　みたまよ　くだりて　ながつくりましし
こころに　めぐみを　あふれしめたまえ

二　あなの　たまものの　あぶらを　そそぎて
一　いのちの　いずみを　ひらき　のましめよ
三　こころの　くらきを　てらし　みちびきて
　けがれも　はじをも　とりのぞき　たまえ
四　わが　うちに　やどり　やすきを　たもたせ
　そとべより　おそう　あたを　ふせぎてよ
五　ちち　みこ　みたまの　みつの　くらい　なる
　ひとりの　みかみを　さとらしめ　たまえ
六　ちち　みこの　おくる　みたま　みちびけば
　かみの　みさかえを　とこしえに　うたわん
　　アーメン

司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者　なんじら心を挙げよ
会衆　我ら心を主に挙げん
司式者　主なる神に感謝し奉るべし
会衆　そは正当にしてなすべきことなり

司式主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父、とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正当にしてなすべき務めなり。主はその大いなるいつくしみによりて、ひとりの御子イエス＝キリストをあたえて我らの贖いを成就し、天に昇りしのち使徒・預言者・伝道者・教師・牧師を送り、その働きによりて公会の徳を建てたまいしことを感謝し奉る。願わくは聖霊をもって今このしもべを満たし、つねに喜びて平和の福音をひろめ、またその権威を用いて人をほろぼさず、かえって人をたすけ、ついに主の家族をやしのう忠実なるしもべと認められ、限りなき喜びに入ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで被選主教は、司式主教の前にひざまずき、会衆は立つ。司式主教は臨席主教

ともに被選主教の頭に手をおき、司式主教は言う。「アーメン」は司式主教だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて我なんじに手をおく。なんじ神の公会にて主教の職位につき、その務めを行のうために聖霊を受けよ　アーメン

なんじこの按手によりて受けし神の恵みをますます盛んならしむることを努めよ。神の我らに賜える霊は臆する霊にあらず、力と愛と慎みの霊なり

次に司式主教は新主教に聖書を渡して言う。

なんじこれを読むことと、人を勧め教うることを努め、これにしるせることをよく考え、ひたすらこれに心を寄せてなんじの進歩をあらわすべし。なんじおのれを慎み、また教えに心して、常にこれらのことを努めよ。さらばなんじおのれを救い、またなんじに聞く者を救わん。なんじキリストの群れの牧者となりて、おおかみとなるなかれ。これを養いてこれを食ろうなかれ。弱き者を助け、病をいやし、傷つける者をいたわり、捨てられし者をみちびき帰し、迷える者をたずね求むべし。なんじ人をあわれむにゆるやかに過ぎず、人を懲らすにあわれみを忘るるなかれ。さらば大牧者の現われたもうとき、その御手より朽ちざる栄光の冠を受けん。我らの主イエス＝キリストによりて　アーメン

司式主教は聖餐式をつづける。新主教もともに聖餐を受ける。祝福の前に次の祈りを用いる。

いつくしみ深き全能の父よ、願わくはこのしもべに天の恵みをくだし、聖霊をもって彼をみたし、主の御言葉を宣べ伝え、よく忍び、よく教え、熱心に人を戒め、人を勧むることを得させたまえ。また言葉と行ない、愛と信仰、聖潔と節制をもって信徒の模範となり、走るべき道のりを走り、終わりの日に正しきさばき主より義の冠を受くることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

主教就任式

主教会議長またはその指名を受けた司式主教は座につき、就任する主教は二名の司祭を従えて聖所の入口に立つ。司式主教は指定した者に、就任主教の主教按手の証を朗読させる。終わって司式主教は会衆に言う。

兄弟よ、いま我ら神の御前にありて、我らの敬愛する主教――師をこの教区に迎え、その就任式をなさんとす。ゆえに我ら心をあわせ、うやうやしく神の恵みを祈るべし

一同ひざまずく。

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式主教は立って言う。

司式者　主よ、主のしもべ――を救いたまえ
会衆　彼は主にたよれり
司式者　願わくは聖所より助けを彼におくりたまえ
会衆　天より力を彼に与えたまえ
司式者　主よ、彼のために堅固なる城となりたまえ
会衆　彼の敵を防ぎたまえ
司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら祈るべし

司式主教は次の祈りをする。

全能の父・主なる神よ、主はこのしもべを召し、この教区の牧者・主教となしたまえり。願わくは聖霊の恵みによりて、正しくその務めを尽くし、公会の聖奠を行ない、

ゆだねられたる群れを治め導くことを得させたまえ。また教えと行ないをもって、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は立つ。就任主教は管理主教に導かれて司式主教の前に立つ。司式主教は就任主教の指に指輪をはめる。次に司式主教は就任主教に牧杖を渡して言う。

なんじこれを受け、なんじに与えられし権威をもって、ゆだねられたる群れを導くしるしとせよ

就任主教は牧杖を右手にもち、司式主教の導きに従って主教座につき、牧杖を陪侍司祭に渡す。次に常置委員長は就任主教に左のように言う。

尊き師父よ、――教区常置委員長たる我――、当教区の聖職と信徒を代表し、ここに師父を迎え、父と子と聖霊の御名によりて、師父を我らの主教と仰ぎ、その権威に服従することを約す。願わくは主なる神、今よりいつまでも、なんじのいずると入るとを守りたまわんことを

就任主教はその座から次のように言う。

愛する兄弟よ、われ神の摂理と恵みによりて、キリストの公会の主教に選ばれ、御旨により、いま日本聖公会――教区の主教職に就任す。われ御力にたより、至誠と全力を尽くしてことに当たらんことを期す。されど我ひとりにてこの重任を全うすることあたわず。なんじらよろしく主にありて心を同じゅうし、相和らぎ、力をあわせ、神の栄光をあらわし、公会の徳を建て、福音の宣揚につとむべし。われ今これがために祈らん

就任主教は祭壇の前に立って言う。

主教　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

主教　我ら祈るべし

一同ひざまずき、就任主教は自己のために祈る。

わが主・わが神よ、主はくすしき摂理と大いなる恵みをもって、しもべを召し、使徒たちよりの唯一の聖公会の主教に選び、この教区につかわしたまいしことを感謝し奉る。我いま身と魂を主にささげ、力の限り主に仕えまつるべし。願わくは絶えずしも

べを守り、常にまことの信仰に堅く立ち、清き良心を保ち、すべての良き徳に富むことを得させたまえ。願わくは我をあわれみ、力と愛と慎みとをもって、臆せず御心に従い、この尊き務めを行ない、主の群れを牧することを得させたまえ。我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に就任主教は立って教区のために祈る。

天地万物を統べ治めたもう全能の神よ、あわれみをもってこの教区に祝福をくだしたまえ。願わくは聖職と他の伝道者に熱心と知識をさずけ、すべての信徒に必要なる恵みを増し加えたまえ。幼き者を祝してこれを守り、信仰あつき者を強めてその数を増し、病める者を慰めてこれをいやし、悪に陥るものを呼びかえして善に向かわしめ、眠れる者をさまし、倒れたる者を起こし、悔ゆる者をゆるし、この教区のすべての未信者を主の救いに入らしめたまえ。また願わくは我らこころを一つにして聖公会の発展をはかり、声を合わせて、聖徒に伝えられし信仰の道を言い表わすことを得させ、異端・分裂・党派を生ずることなく、すべての者、聖霊のたもう平和と喜び、謙そんと愛をもって主に仕え、相交わり、主の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つることを得させたまえ。我らの救い主・唯一のとりなし・主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

就任主教は次の祈りをもって会衆を祝福する。

願わくはとこしえの契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを、死人のうちよりよみがえらせたまいし平和の神、その喜びたもうところをイエス＝キリストによりてなんじらのうちに行ない、御心を行なわしめんために、すべての良きことにつきてなんじらを全うしたまわんことを。願わくは世々限りなく栄光、主にあらんことを。アーメン

礼拝堂聖別式

礼拝堂を聖別するときは、あらかじめその敷地、建物その他付属物件について負債のないこと、および日本聖公会の所有に属することを証明する書類を添えて教区主教に願い出なければならない。主教は聖別に支障のないことを認めたとき、日を定めてこの式を行なう。

当日会衆は堂の外で主教と他の聖職を迎え、教会委員の一人は主教に言う。

師父よ、この堂を聖別せんことを願う

主教は言う。

願いのごとくこの堂を聖別すべし。愛する兄弟よ、父と子と聖霊なる全能の神われらとともにいまして、我らのささぐるこの堂をきよめたまわんことを祈るべし

主よ、変わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをともない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

主教は他の聖職とともに次の詩を歌いまたは唱えながら堂の外側をめぐる。入口で歌いまたは唱えてもよい。詩の前に司式者または始唱者は次の語を用い、栄光の頌の後にはこれを一同で用いる。以下詩百二十二篇、詩五十一篇もこれにならう。

神の恐るべきさまは＝　その聖所よりあらわる

詩六十五篇

一　神よ、シオンにてなんじをほめたとうるはふさわし＝　人はなんじに誓いをはたさん

二　祈りを聞きたもうものよ＝　もろびとは罪を悔いてなんじにきたらん

三　我らおのがとがになやむとき＝　なんじ我らをきよめたまわん

四　なんじに選ばれ、なんじに近づけられて、大庭に住もう者はさいわいなり＝　我らはなんじの家、なんじの聖なる宮の恵みにて飽くことをえん

五　救いの神よ、なんじは恐るべきみわざをもて我らを救い、我らに答えたまわん＝　なんじは地のもろもろのはて、また海のはてにある者ののぞみなり

六　神は大能をおび＝　その御力によりて、もろもろの山を堅く立たしめたもう

七　海のひびき大波のひびきをしずめ＝　もろもろの民の騒ぎをしずめたまえり

八　されば地のはてに住める人々も、なんじのもろもろのしるしを見ておそる＝　なんじ、あしたとゆうべのいずる所をも喜びうたわしめたもう

九　なんじ地に臨みて水そそぎ＝　大いにこれを豊かにしたまえり
　　神の川に水みちたり＝　なんじかく備えをなして穀物を彼らにあたえたまえり

一〇　なんじ田みぞを豊かにうるおし、うねをととのえ＝　むらさめにてこれを和らげ、そのもえいずるを祝したまえり

一一　なんじ御恵みをもて年の冠としたまえり＝　なんじの道にはあぶらしたたる

一二　野の牧場はうるおい＝　小山は喜びにかこまる

一三　牧場はみな羊の群れを着、もろもろの谷は穀物におおわれたり＝　彼らはみな喜びて呼ばわりまた歌う

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン
神の恐るべきさまは＝　その聖所よりあらわる

次に主教は堂の入口に立って言う。

とこしえにいます全能の神よ、主のいまさざる所なく、主の働きたまわざる所なし。願わくは主の建てたまいしこの堂をまもり、悪の力を退け、常に聖霊の働きによりて御心にかのう礼拝をささぐることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

主教は牧杖の石突きで堂のとびらを三度たたいて言う。

門よ、なんじらのこうべを挙げよ。とこしえの戸よ、あがれ、栄光の王いりたまわん

執事または教会委員の一人、堂の内から言う。

栄光の王はたれなるか

主教は言う。

力を持ちたもうたけき主なり、戦いにたけき主なり。万軍の主、これぞ栄光の王なる

主教はまた言う。

開けよ、開けよ、開けよ

執事または教会委員は内からとびらを開いて言う。

これぞ主の門なる。正しき者は内にいるべし

主教は牧杖で入口に十字架の形をしるして言う。

平安この堂に、又すべてここに入る者にあらんことを、父と子と聖霊の御名によりて

アーメン

次に左の詩を歌いまたは唱えながら、主教と他の聖職は聖所の入口まで進む。会衆はこれに従って堂に入る。詩の前後に次の語を用いる。

ほむべきかな＝　主の御名によりてきたる者

詩百二十二篇

一　人われに向かいて、「いざ主の家に行かん」と言えるとき我よろこべり＝　エル
二　サレムよ、我らの足はなんじの門のうちに立てり
三　エルサレムよ、なんじはかたく立ち＝　しげくつらなりたる町なり
四　もろもろのやから、主のやから、かしこに上りきたりて主の御名に感謝す＝　こ
　れイスラエルの定めなり
五　かしこにさばきの御位もうけらる＝　これダビデの家のみくらなり
六　エルサレムのために平安をいのれ＝　「エルサレムを愛する者をさかえしめた
　まえ
七　なんじの石がきのうちに平安あり＝　なんじのもろもろの殿のうちに幸いあらん
八　わが兄弟わが友のために言わん＝　「なんじのうちに平安あらんことを」と
九　我らの神・主の家のために＝　我なんじの幸いをもとめん

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン
ほむべきかな＝　主の御名によりてきたる者

主教は聖所の入口にひざまずく。
ざまずく。
主教と会衆は交互に次の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

聖霊を求むる歌

一　みたまよ　くだりて　ながつくりましし
　こころに　めぐみを　あふれしめたまえ
二　ななの　たまものの　あぶらを　そそぎて

いのちの いずみを　ひらき のましめよ
三　こころの くらきを　てらし みちびきて
けがれも はじをも　とりのぞき たまえ
四　わが うちに やどり　やすきを たもたせ
そとべより おそう　あたを ふせぎてよ
五　ちちみこ みたまの　みつの くらい なる
ひとりの みかみを　さとらしめ たまえ
六　ちちみこの おくる　みたま みちびけば
かみの みさかえを　とこしえに うたわん
アーメン

次に主教の指名した司祭が一同とともに嘆願を歌いまたは唱える。天下の聖公会のための願いの後に、主教は立って左の願いを加える。

主教　願わくはこの堂を祝し、御使いに命じて守らしめたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ

主教　願わくは御名の栄光のために、この堂と祭壇を祝しきよめたまわんことを
会衆　主よ、ききたまえ

ここで主教はひざまずき、司祭は嘆願をつづける。嘆願が終わって一同立つ。主教と他の聖職は次の詩を歌いまたは唱えながら堂内を一巡する。詩の前後に次の語を用いる。

主よ、ヒソプをもて我をきよめたまえ、さらば我きよくならん　我を洗いたまえ、さらば雪よりも白くならん

詩五十一篇

一　ああ神よ、願わくはなんじのいつくしみによりて我をあわれみ＝　なんじの豊かなるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消したまえ
二　わが不義をことごとくあらい去り＝　我をわが罪よりきよめたまえ
三　我はわがとがを知る＝　わが罪は常にわがまえにあり
四　我はひとえになんじに罪をおかし、御前に悪しきことをおこなえり＝　さればなんじの宣告はなんじの義をしめし、なんじのさばきはあやまりなし
五　見よ、我よこしまのうちに生まれ＝　わが母罪のうちにありて我をはらみたりき

六　なんじはわがうちにまことを求めたもう＝　さればわが心ふかく知恵を知らしめたまえ

七　ヒソプをもて我を清めたまえ、さらば我きよくならん＝　我を洗いたまえ、さらばわれ雪よりもしろくならん

八　願わくはわれに喜びと楽しみとをみたし＝　なんじが砕きし骨を喜ばせたまえ

九　願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝　わがすべての不義を消したまえ

一〇　神よ、わがために清き心をつくり＝　わがうちに直き霊をあらたに起こしたまえ

一一　我を御前より捨てたもうなかれ＝　なんじのきよき霊を我より取りたもうなかれ

一二　なんじの救いの喜びをわれにかえし＝　自由の霊にて我をささえたまえ

一三　さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝　罪びとはなんじに帰りきたるべし

一四　神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝　わが舌は声たからかになんじの救いをうたわん

一五　主よ、わがくちびるを開きたまえ＝　さらばわが口なんじの誉れをあらわさん

一六　なんじはいけにえを好みたまわず＝　たといわれ燔祭をささぐるともなんじ喜びたまわず

一七　神の求めたもう供え物は砕けたるたましいなり＝　神よ、なんじは砕けたる悔い心を軽しめたもうまじ

一八　願わくは御心に従いてシオンをさきわい＝　エルサレムの石がきを、ふたたびきずきたまえ

一九　その時なんじ正しきいけにえと燔祭と全き燔祭とを喜びたまわん＝　かくて人々なんじの祭壇に雄牛をささげん

父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

主よ、ヒソプをもて我をきよめたまえ、さらば我きよくならん＝　我を洗いたまえ、さらば我雪よりも白くならん

主教は再び聖所の入口に行き、会衆はひざまずく。

主教　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

主教　我ら祈るべし

御名のためにささぐる物を清めたもう神よ、願わくはこの堂に恵みをくだし、主の御名を呼ぶすべての者を助けたまえ。御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

天地万物を統べたもう至聖なる父・全能の神よ、願わくは主の大いなるいつくしみにより、聖なる奥義を行なわしめんとて、三位一体の栄光のために建てしこの堂を聖別し、御光をもって照らしたまえ。願わくはこの教会の信徒をまもりて公会の信仰を堅く保たせ、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は立つ。

祭壇の聖別

主教は祭壇に行きながら次の語を唱える。

われ神の祭壇にゆき、またわが喜びよろこぶ神にゆかん

主教は会衆に向かって言う。

愛する兄弟よ、全能の神、我らの祈りを聞こし召し、聖なるいけにえのためにこの祭壇を清め、主のしもべらのささぐる供え物を聖別したまわんために、また主イエス＝キリストの御名によりてささぐる祈り、香の煙のごとく御前に昇らんために祈るべし

主教　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

主教　なんじら心を挙げよ

会衆　我ら心を主に挙げん

主教　主なる神に感謝し奉るべし

会衆　そは正当にしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正

当にしてなすべき務めなり。我らは卑しきしもべなれども、御名の栄光のためにこの祭壇をささげ奉る。願わくはこれを祝し、きよめ別かち、我らの供え物ことに感謝賛美のいけにえを受けたまわんことをこいねがい奉る。また我らの救い主イエス＝キリストのからだと血の聖奠にあずかり、みな恵みと力とに満たされ、限りなき命をうるに至らせたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に十字架、燭台その他祝福すべき物があれば、主教はそれらを祝福して祭壇に置かせる。

洗礼盤の聖別

主教は他の聖職を伴い洗礼盤に行きながら次の語を唱える。

主教　川あり、その流れ神の都を喜ばしめ、いと高き者の住みたもう聖所をよろこばしむ

会衆　なんじら全世界を巡りて

主教　すべての人に洗礼をほどこせ

会衆　我ら祈るべし

全能の神よ、願わくは我らのささぐるこの洗礼盤をみそなわし、聖霊によりてこれを清め、ここにて洗礼を受くる者を洗いきよめ、主のあわれみによりて、すべての罪の赦しを受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

洗礼を受くる者のため

もろもろの徳と恵みの源なる全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにこの洗礼盤を清め、ここにて信仰を告白し、生まれかわりの洗いを受くる者に限りなき命を得させたまえ。御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖書台および説教壇の聖別

主教は補式聖職を伴い聖書台および説教壇に行きながら次の語を唱える。

主教　我なんじのさとしを語り、なんじの道に心をとめん

会衆　わが道の光なり

主教　我ら祈るべし

全能の神よ、主は真理をもってしもべらの心を照らしたもう。願わくはこの聖書台と説教壇を祝し、ここに立つ者に知恵・悟り・深慮の霊をみたし、御力を与えて、とこしえの命の福音を宣べ伝うることを得させたまえ。また願わくは教えを受くる者を恵み、御言葉を悟り、ついに、我は道なり、真理なり、命なりとのたまいし主のみもとに至ることを得させたまえ。我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

主教は補式聖職とともに至聖所の入口に行く。

罪を懺悔する者のため

主教は次の語を唱える。

我はわがとがを知る、わが罪は常にわが前にあり

主教　もしおのれの罪を言いあらわさば

会衆　神はまことにして正しければ、我らの罪を赦したまわん

主教　我ら祈るべし

主よ、主の民、もし罪を犯さば主に帰り、ここにて罪を懺悔し、祈り、願い、神の小羊の血にて洗いきよめられ、その信仰によりて義と認めらるることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

堅信式を受くる者のため

主教は次の語を唱える。

末の世に至りて、わが霊をすべての人にそそがん

主教　ペテロとヨハネ彼らの上に手をおきしに

会衆　彼らみな聖霊を受けたり

主教　我ら祈るべし

主よ、主は使徒たちに聖霊をくだし、また彼らが手をおく者に同じ聖霊を与えたまえり。願わくは我らの祈りを聞こし召し、ここにて堅信式を受くる者に聖霊をくだし、その宮となさしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖婚式をあぐる者のため

主教は次の語を唱える。

人を造りたまいし者、始めよりこれを男と女とに造りたまえり。ゆえに人はその妻と

合いて、ふたりのもの一体となるべし

主教　神の合わせたもうものは

会衆　人これを離すべからず

主教　我ら祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、願わくはこの所にて聖婚式をあぐる者、唯一の主によりて一体とせられ、愛と誠と操を保ち、信仰をもって子どもをそだて、健やかに、幸いに、命ながく、ついに天の御国に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖餐を受くる者のため

主教は次の語を唱える。

われは命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでもかわくことなからん

主教　わが肉はまことの食い物、わが血はまことの飲み物なり

会衆　わが肉を食し、わが血を飲む者は我におり、我もまた彼におる

主教　我ら祈るべし

主よ、願わくはここにてキリストの尊きからだと血の聖奠を受くる者、まことの悔い改めと信仰と愛をもって、主のふるまいにあずかり、天の祝福に満たされ、罪のゆるしと主の苦しみによりてきたるもろもろの恵みを受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

この聖堂にて祈るすべての人のため

主教は祭壇に向かい次の語を唱える。

なんじらが、わが名によりて願うことは、我みなこれをなさん

主教　主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ

主教　我ら祈るべし

ほめ奉るべき主よ、願わくはこの堂にて主に近づき、御手より受けし恵みを感謝し、御名をほめ、罪を懺悔し、からだと魂とに必要なるものを願う人々、みな信仰をあつくし、うやうやしく主を拝み、主に喜ばれ、主の良しとしたもう賜物を受くることを

得させたまえ。これらのことをほむべき救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に主教は牧杖を左手に持って至聖所の入口に立ち、会衆に向かって言う。「アーメン」は主教だけが言う。

神の公会にて我にゆだねられし権威により、この堂を神にささぐ。今より後この聖堂を世俗の用に供せず、神によりて清められし物は、公会の礼拝と聖奠のために用いらるるなり。我いま父と子と聖霊の御名によりて、この堂の聖別せられしことを宣言す

アーメン

主教は座につき、一人の司祭に聖別の証を朗読させ、終われば立ってこれを祭壇の上におき、会衆に向かって言う。

主教　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
主教　主よ、エルサレムの宮のために
会衆　我らのうちになせしみわざを堅からしめたまえ

いつくしみ深き全能の神、願わくはこの聖堂につどえるなんじらを知恵と悟りの霊にて満たし、正しき信仰を保たせ、望みと愛とをもて終わりまで耐え忍ぶことを得させたまえ。又ここにてもいずこにても、なんじらの祈りをきき、なんじらの罪を赦し、悪より救い、ついに天のうたげにあずかることを得させたまえ。アーメン

つづいて聖餐式を行ない、次の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特祷

いと恵み深き神よ、天も地も主をいれ奉るに足らず。願わくはいつくしみをもって、この聖堂を御名の栄光のために用い、ここにて主に呼ばわる者をみちびき、霊と真理にて主を拝み、その行ないによりて主をほめたとうることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　黙示二一章二―五

我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる花嫁のごとく備えして、神のもとをいで、天より下るを見たり。また大いなる声の御位よりいずるを聞けり。

いわく、「見よ、神の幕屋、人とともにあり、神、人とともに住み、人、神の民となり、神みずから人とともにいまして、彼らの目の涙をことごとくぬぐい去りたまわん。今よりのち死もなく、悲しみも、叫びも、苦しみもなかるべし。さきのものすでに過ぎ去りたればなり」。かくて御位に座したもうものの言いたもう、「見よ、我すべてのものを新たにするなり」。また言いたもう、「書きしるせ、これらの言葉は信ずべきなり、まことなり」。

福音書 マタ 二一章一〇―一六

イエス、エルサレムに入りたまえば、都こぞりて騒ぎ立ちて言う、「これはたれなるぞ」。群衆いう、「これガリラヤのナザレよりいでたる預言者イエスなり」。イエス宮に入り、その内なるすべての売り買いする者を追いいだし、両替する者の台・はとを売る者の腰掛けを倒して言いたもう、『わが家は祈りの家ととなえらるべし』としるされたるに、なんじらはこれを強盗の巣となす」。宮にてめしい、足なえどもみもとにきたりたれば、これをいやしたまえり。祭司長・学者らイエスのなしたまえる不思議なるわざと宮にて呼ばわり、「ダビデの子にホサナ」と言いおることどもとを見、憤りて、イエスに言う、「なんじ彼らの言うところを聞くか」。イエス言いたもう、「しかり『みどり子、乳のみ子の口に賛美を備えたまえり』とあるをいまだ読まぬか」。

主教は祝福の前に次の祈りを用いる。

全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにささげられしこの聖堂にて主に祈る人の願いを聞こし召し、豊かなる恵みを与えたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

牧師任命式

主教は祭壇のかたわらに進み、牧師候補者および他の聖職と教会委員二名（一名は聖堂のかぎを持つ）とは聖所の入口に向かって立つ。主教が臨席しえない時は、司祭に代理させてもよい。

主教は立って次のように言う。

愛する兄弟よ、我らここに集まりたるは、司祭――師をこの教会の牧師に任ぜんがためなり。我いまこれに任命書を授けんとす。されどこの任命について故障ありと知る者あらば今申し立つべし

故障を申し立てる者があれば主教はこの式を中止するか否かを判定する。中止する理由がなければ任命書を朗読する。

任命書授与の後、教会委員は新任牧師にかぎを渡して言う。

当教会は司祭――師を牧師として受け、その証しとして当教会の信徒にかわり、この堂のかぎを呈す

新任牧師はかぎを受けて次のように言う。

我この聖堂のかぎをなんじらより受けたり。我いま父と子と聖霊の御名によりて忠実なる牧者たらんことを約す

主教　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

主教　我ら祈るべし

主よ、変わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをともない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ。アーメン

主教は新任牧師を聖所の内に入らせ、聖書・祈祷書、および法憲法規を渡して言う。

なんじこれを受けて神の言葉を伝え、礼拝をつかさどり、教会を牧するよりどころとせよ。また何事にも、なんじにゆだねられたる群れの模範となることを努むべし

次に左の詩篇の一つを歌いまたは唱える。

詩六十八篇

一　神よ、立ちたまえ、願わくはそのあだはことごとく散らされ＝　神をにくむ者は
御前より逃げ去らんことを
二　煙の追いやらるるごとく彼らを追いやりたまえ＝　悪しき者は火の前にろうの溶
くるごとく、神の御前にてほろびんことを
三　されど正しき者にはよろこびあり＝　神の御前にて楽しみ喜びて踊らん
四　神の御前に歌い、御名をほめたたえよ＝　雲に乗りたもう者に向かいてうたえ
五　きよき住まいにましますは＝　みなしごの父、やもめの守りなり
六　神は寄るべなきものを家族のうちにおらしめ、めしゅうどを解きて栄えしめたもう＝　されどそむく者はうるおいなき地に住むなり
七　神よ、なんじは民にさきだちていで＝　また荒れ野を進みゆきたまいき
八　そのとき神の御前に地はふるい、天は激しく雨を降らせたり＝　シナイの山すら
神・イスラエルの神の御前にふるいうごけり
九　神よ、なんじは豊かなる雨をふらせ＝　なんじの嗣業の地の疲れ衰えたるとき、
これを立てなおしたまえり
一〇　なんじの民はその中に住まいをえたり＝　神よ、なんじは恵みをもて貧しき者に
食物をあたえたまえり
一一　主はみことのりを下したまえり＝　そのおとずれを宣ぶる多くの女は群れをなして言う
一二　「もろもろの王たちは逃げ去る、逃げ去る」と＝　家におる女たちはその獲物を
わかつ
一三　なんじら羊のおりの中にとどまるとも＝　はとの翼のしろがねにおおわれ、その
毛のこがねにおおわるるがごとくならん
一四　全能者かしこにて王たちを散らしたまえり＝　そのときサルモンの山に雪ふれり
一五　バシャンの山は大いなる山なり＝　バシャンの山は峰重なれる山なり

一六 峰かさなれる山よ、なんじいかなれば神の住まいに選びたまえる山をねたみ見る
や＝ されど主はとこしえにこの山に住みたまわん
一七 主はちよろずのいくさ車もてシナイよりきたり＝ 聖所に入りたまえり
一八 なんじはとりこを率いて高き山にのぼり＝ 人々より、またそむく者より礼物を
受けたまえり、主なる神ここに住みたまわんためなり
一九 日ごとに我らをささえたもう主はほむべきかな＝ 神は我らのすくいなり
二〇 我らの神は救いの神なり＝ 死よりのがるるは主なる神による
二一 神はあだのこうべを砕きたまわん＝ 悪の道をあゆむ者の髪毛おおき頂を打ちく
だきたまわん
二二 主言いたまえり、「われバシャンより彼らを携えかえり＝ 海の深き所よりたず
さえかえらん
二三 かくてなんじの足をそのあだの血にてあらい＝ これをなんじの犬の舌になめし
めん」と
二四 神よ、人はなんじの進み行きたもうを見たり＝ わが神・わが王の聖所に進み行
きたもうを見たり
二五 歌うものは前に行き、琴ひく者はあとにしたがい＝ 鼓うつおとめはその中にあ
りて言う
二六 「大いなるつどいにて神をほめよ＝ イスラエルの源よりいずる者よ、主をほめ
まつれ」と
二七 かしこに年若きベニヤミンさきだてり、その群れの中にユダの君たち、ナフタリのきみたち、ゼ
ブルンの君たちあり
二八 神よ、御力を奮い起こしたまえ＝ 我らのために行ないたまいし神よ、
御力をしめしたまえ
二九 王たちなんじに礼物をささぐ＝ これエルサレムなるなんじの宮のためなり
三〇 願わくは葦のなかに住む獣をいましめたまえ＝ もろもろの民の雄牛と子牛の群れをい
ましめたまえ
みつぎ物をむさぼる者をふみつけ＝ 戦いを好むもろもろの民を散らしたまえ
三一 青銅をエジプトより携えきたらせ＝ エチオピヤにはあわただしく神に向かいて

手をのべさせたまえ

三　地のもろもろの国よ、神に向かいてうたえ＝　主をほめうたえ

三三　いにしえよりの天の天に乗りたもう者に向かいてうたえ＝　見よ、主は御声をいだしたもう、勢いある御声をいだしたもう

三四　なんじら力を神に帰せよ＝　そのみいつはイスラエルの上にとどまり、御力は雲のなかにあり

三五　神の恐るべきさまはその聖所よりあらわる＝　イスラエルの神はその民に力と勢いとを与えたもう、神はほむべきかな

父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩二十六篇

一　主よ、願わくは我をさばきたまえ、我はわが全きによりてあゆみたり＝　我また迷うことなく主に寄りたのめり

二　主よ、我をしらべまた試みたまえ＝　わが心と思いとをねりきよめたまえ

三　そはなんじのいつくしみわが目の前にあり＝　我はまことによりてあゆめり

四　我は欺く人とともにすわらず＝　偽りかざる者とともにあゆまず

五　われ悪をなす者のつどいをにくみ＝　悪しき者とともにすわらじ

六　われ手を洗いて罪なきを示さん＝　かくて主よ、我なんじの祭壇をめぐり

七　感謝のうたを高らかにうたい＝　なんじのくすしきみわざを、ことごとく宣べつたえん

八　主よ、我なんじのいます家をしたい＝　なんじが栄光のとどまる所をいつくしむ

九　願わくは我を罪びととともに捨てず＝　わが命を血を流す者とともに取り去りたもうなかれ

一〇　かかる人の手には悪しきくわだてあり＝　その右の手はまいないにて満つ

一一　されど我はわが全きによりて歩まん＝　願わくは我をあがない、我をあわれみたまえ

一二　わが足は平らかなるところに立つ＝　われ大いなるつどいにて主をほめまつらん

三　父と子と聖霊に＝　栄光あれ

始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

主教　律法はモーセによりて与えられ
会衆　恵みと真理とはイエス＝キリストによりてきたれり
一同　主は万物の上にありて世々誉れを受くべき神なり
主教　我ら祈るべし

すべてのよき賜物をあたえたもう全能の神よ、主は聖公会のうちに聖職を立て、その位を分かちたまえり。今この会衆をゆだねられたるしもべに恵みを与えたまわんことを、せつに祈り奉る。願わくは主の道の真理をもって彼をみたし、清き行ないをもって彼を装い、忠実に主に仕えしめ、御名の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つることを得させたまえ。ひとりのとりなしイエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

主イエスよ、主は公会をあがない、我は世の終わりまで常になんじらとともにあるなりと使徒たちに約したまえり。願わくはこの宮にて祈祷と賛美をささげんとてつかわされたるしもべの務めを祝したまえ。我らの岩・我らのあがない主よ、このしもべの口の言葉・心の思いを常に御心にかなわしめたまえ。アーメン

祝福

願わくは、とこしえの契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを死人のうちよりよみがえらせたまいし平和の神、その喜びたもうところをイエス＝キリストによりてなんじらのうちに行ない、御心を行なわしめんために、すべての良きことにつきてなんじらを全うしたまわんことを。願わくは世々限りなく栄光、主にあらんことを。アーメン

すべての信徒を清めたもう聖霊なる神よ、この会衆に恵みをくだし、限りなき福音の光をもって彼らを照らし、真理を愛する愛をその心につぎ、ますます熱心に主に仕えしめ、もろもろの善をもって養い、また大いなる恵みをもって絶えずこの幸いにおらしめたまえ。父と子と一体の神にましますほむべき聖霊を世々あがめ奉らん。

アーメン

次に新任牧師は祭壇の前にひざまずき、自己のために祈る。

わが主・わが神よ、しもべは主をわが屋根のしたに入れまつるに足らぬ者なり。されど主はしもべを召して祭壇に仕うることを許したもう。我いま身をも魂をも主にささげ、力のかぎり主に仕え奉るべし。願わくはつねに御言葉を記憶し、聖霊の光に照らされ、教えと行ないとによりて、主の生けるまことの言葉を示し、正しく聖奠を行ない、今ゆだねられたる民を救いの道に進ましむることを得させたまえ。主よ、つねに我とともにいましてわが務めを助けたまわんことを、父と聖霊とともに世々限りなく統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

新任牧師は立って言う。

牧師　主なんじらとともにいますことを

会衆　主なんじの霊とともにいますことを

牧師　我ら祈るべし

全能の神よ、主は使徒と預言者の基のうえに公会をたて、イエス＝キリストをすみの親石となしたまえり。願わくは聖霊の感化によりて信徒らみな心を一つにし、相和らぎ、御心にかのう清き宮となることを得させたまえ。ことにこの会衆の上に主の恵みを豊かにくだし、彼らをして一心に聖公会の進歩を図り、声を合わせて聖徒に伝えられし信仰の道を言い表わすことを得させ、異端分派を生ずることなく、高ぶる者の足に踏まれ、悪しき者の手に倒さるることなからしめたまえ。また願わくはこの世を安らかに治め、主の公会に平安をあたえ、つねに喜びて主につかえ、真実と平和の道をあゆみ、ついに限りなき栄光にある聖徒の数に入れらるることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に新任牧師は説教をする。説教が終わって聖餐式を司式する。

付録

家族の朝の祈り

聖書を読み、使徒信経を唱えて、次の祈りをする。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

全能の神よ、主は我らを顧み、昨夜も我らの身と家を守り、もろもろの災いを防ぎたまえり。これらの恵みのために主をほめ奉る。願わくは今日も我らを守り、我らを導きて、御心にかのう良きわざをなし、御名の栄光を現わさしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで他の祈りをしてもよい。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに

に限りなくあらんことを。アーメン

家族の夕の祈り

聖書を読み、使徒信経を唱えて、次の祈りをする。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

天の父よ、我らを守りて、恵みのうちに今日も過ごさせたまいしこと（特に――）を感謝し奉る。主よ、我ら今まことに罪を悔やみ、悲しみて懺悔す。（ここでしばらく一日の反省をする）主よ、我らをあわれみ赦したまえ。願わくは今晩われらを守り、すべての危うきを防ぎ、安き眠りをさずけて明日の務めをなす力を養わせたまえ。また我らの教会を祝し、親族・友人・隣人に恵みをくだし、貧しき者・病める者・不幸なる者を慰め助け、また主を知らざる人々を救いに導きたまえ。主イエス＝キリストにより てこいねがい奉る。アーメン

ここで他の祈りをしてもよい。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン

家族の朝・夕の祈りに用うるに適当なる祈り

	ページ
平安のため	七四、八五
めぐみのため	七四
みたすけのため	八五
聖職のため——降臨節第三主日	一七四
聖職と信徒のため	一〇四
万民のため	一〇八
一般的に用うる感謝	一二五
公会のため——受苦日の第二・第三特祷	二五九
三位一体後第二十六主日	三三四
三位一体後第二十二主日	三四六
使徒聖シモン・聖ユダ日	三九五
諸聖徒日	三九八
聖書研究——降臨節第二主日	一七二
降臨節第三主日	一七四
福音記者　使徒聖マタイ日	三八九
福音記者聖マルコ日	三六九
福音記者聖ルカ日	三九三
福音記者　使徒聖ヨハネ日	一八三
敬神——三位一体後第七主日	三一五
キリストの模範——復活前主日（受難）	二二八
復活後第二主日（きよき生涯）	二七九
顕現後第六主日（きよき生活）	二〇四
導きのため——聖霊降臨日	二九一
三位一体後第四主日	三〇九
顕現後第一主日	一九四
三位一体後第十九主日	三四〇
顕現後第四主日	二〇〇
大斎第二主日	二一八
三位一体後第十八主日	三三八
赦しと救いのため——三位一体後第二十一主日	三四四
三位一体後第二十四主日	三五〇
大斎前第三主日	二〇六
大斎第四主日	二二三
神への信頼——三位一体後第八主日	三一七
顕現後第二主日	一九六
三位一体後第二主日	三〇四

午祷

一同立ち、準備の黙祷の後に次の唱和を用いる。

司式者　神よ、すみやかに我らを救いたまえ
会衆　主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ
一同　父と子と聖霊に栄光あれ、始めにありし如く、今あり、世々限りなくあるなり
アーメン

ここで次の聖歌を歌いまたは唱える。

一　まことの　みかみは　みひかりを　はなち
うつろう　このよを　しろしめし　たもう

二　つみの　ほのお　けし　あしき　おもい　さり
みとたまを　まもり　やすきを　えさせよ

三　みちちと　みたまと　とわに　ひとつなる
みこイエスに　よりて　いのり　たてまつる
アーメン

ここで次の詩の全部または一部を歌いあるいは唱える。

詩百十九篇　八一―九六、九七―一一二、一一三―一二八

八一　わが魂はなんじの救いを慕いて絶え入るばかりなり＝　われは御言葉によりての
ぞみをいだく
八二　わが目は御誓いを待ち望みておとろう＝　われ言えり、「なんじいずれの時われ
を慰むるや」と
八三　我は煙の中の皮袋のごとくなりぬ＝　されどなお、なんじのおきてをわすれず
八四　なんじのしもべはいつまでしのぶべきや＝　なんじいずれの時われを責むる者を
さばきたもうや
八五　高ぶるもの我をおとしいれんとて穴をほれり＝　彼らはなんじの律法にしたがわ
ざるなり
八六　なんじの戒めはみなまことなり＝　彼らは偽りをもて我を責む、願わくは我を助
けたまえ
八七　彼らは地にてほとんど我をほろぼさんとせり＝　されど我はなんじの戒めを捨て

ざりき、

八八　願わくはなんじのいつくしみによりて我を生かしたまえ＝　さればわれ御口より
いずるあかしをまもらん

八九　主よ、御言葉はさだまれり＝　天にてとこしえにさだまれり

九〇　なんじのまことはよろず世におよぶ＝　なんじ地を定めたまえば、地はかたく立
てり

九一　これらのものは御定めに従い、常にありてきょうにいたる＝　よろずのものは、
なんじのしもべなればなり

九二　なんじの律法わが喜びとならざりしならば＝　我はわが悩みのうちに滅びたりし
ならん

九三　我つねになんじの戒めをわすれじ＝　なんじこれをもて我を生かしたまえばなり

九四　我はなんじのものなり、願わくは我を救いたまえ＝　我なんじの戒めをもとめた
ればなり

九五　悪しき者は我を滅ぼさんとして待ち伏せたり＝　されど我はただなんじのあかし
をおもいめぐらす

九六　我もろもろの全きに、はてあるを見たり＝　されどなんじのいましめは、きわま
りなし

九七　我なんじの律法をいつくしむことといかばかりぞや＝　我ひねもすこれをふかくお
もう

九八　なんじの戒めはつねに我とともにあり＝　我をわがあだにまさりてさとからしむ

九九　我はなんじのあかしを深くおもう＝　ゆえに我すべての師にまさりて知恵おおし

一〇〇　我はなんじの戒めをまもりたり＝　ゆえに老いたる者にまさりて事をわきもうる
なり

一〇一　われ御言葉を守らんためにわが足をとどめ＝　もろもろの悪しき道にゆかしめず

一〇二　我なんじの定めを離れざりき＝　なんじ我を教えたまいたればなり

一〇三 御言葉の味わいはわが口に甘きこといかばかりぞや＝　蜜の甘きにまされり
一〇四 我なんじの戒めによりて知恵をえたり＝　このゆえに偽りのすべての道をにくむ
一〇五 なんじの御言葉はわが足のともしびなり＝　わが道のひかりなり
一〇六 われなんじの正しき定めをまもらん＝　我これを誓いかつかたくせり
一〇七 我いたくくるしめり＝　主よ、願わくは御言葉に従いて我をいかしたまえ
一〇八 主よ、願わくは賛美の供えものをうけ＝　なんじの定めをおしえたまえ
一〇九 わが命はつねにあやうし＝　されど我なんじの律法をわすれず
一一〇 悪しき者わがためにわなをもうけたり＝　されど我なんじの戒めより迷いいでず
一一一 なんじのあかしはとこしえにわが嗣業なり＝　これわが心のよろこびなり
一一二 我なんじのおきてに心をかたむけ＝　終わりに至るまでたえずこれをまもらん
　父と子と聖霊に＝　栄光あれ
　始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

一一三 我ふたごころの者をにくむ＝　されどなんじの律法をいつくしむ
一一四 なんじはわが隠れが、わが盾なり＝　われ御言葉によりて望みをいだく
一一五 悪をなす者よ、我をはなれ去れ＝　我わが神のいましめを守らん
一一六 御誓いに従い、我をささえてながらえしめたまえ＝　わが望みにつきて恥なからしめたまえ
一一七 我をささえたまえ、さらば我安らかなるべし＝　我つねになんじのおきてに心をそそがん
一一八 すべておきてより迷いいずる者をなんじかろしめたもう＝　彼らの欺きはむなしければなり
一一九 なんじは地のすべての悪しき者を金かすのごとくみなしたもう＝　されば我なんじのあかしをあいす
一二〇 わが身はなんじを恐るるによりてふるう＝　我はなんじのさばきをおそる
一二一 我は正と義とを行ないたり＝　我を捨てて、しいたぐる者にゆだねたもうなかれ
一二二 なんじのしもべのなかだちとなりて我をまもり＝　高ぶる者の我をしいたぐるを許したもうなかれ

二三 わが目はなんじの救いを待ちのぞみておとろう＝　なんじの正しき誓いを慕うに
　よりてなり
二四 願わくはなんじのいつくしみに従いてなんじのしもべをあしらい＝　我になんじ
　のおきてをおしえたまえ
二五 我はなんじのしもべなり＝　我に知恵を与えてなんじのあかしを知らしめたまえ
二六 今は主の働きたもうべきときなり＝　彼らはなんじの律法をやぶれり
二七 ゆえに我なんじのいましめをあいし＝　こがねよりも混じりなきこがねよりもま
　さりて、これをしとう
二八 ゆえに我なんじのもろもろの戒めによりてあゆみ＝　すべての偽りの道をにくむ
　始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

司式者は次の聖語を朗読する。

すべてのこと試みて良きものを守り、すべて悪のたぐいに遠ざかれ

テサロニケ前書五章二一、二二節

会衆　主に感謝し奉る

司式者　われ常に主を祝いまつらん
会衆　われ常に主を祝いまつらん
司式者　主をたとうる言葉はわが口に絶えじ
会衆　主を祝いまつらん
司式者　父と子と聖霊に栄光あれ
会衆　われ常に主を祝いまつらん
司式者　主はわが牧者なり、我は乏しきことなからん
会衆　主は我をみどりの野に伏さしめたもう
司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら祈るべし

特　祷

ここで当日の特祷を用いる。つづいて次の祈り、伝道のためその他の代祷を用いてもよい。

いと恵みふかき我らの主・われらの神イエスよ、主はわれら罪に死に義に生きんがため、昼のころ、十字架のうえにて大いなる苦しみを受けたまえり。願わくは主の十字架を記憶せしめ、この世にてきよき生涯をおくり、後の世にて主の栄光にあずかることを得させたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次に左のように言う。

司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら主を祝いまつらん
会衆　主に感謝し奉る
司式者　願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン

終祷

一同立ち、準備の黙祷の後に次の唱和を用いる。

司式者　願わくは全能の神、今夜われらを安らかにいこわせたまわんことを
会衆　アーメン

司式者は次の聖語を朗読する。

兄弟よ、慎みて目をさましおれ。なんじらのあだなる悪魔、ほゆるししのごとく、経めぐりて、のむべきものを尋ぬ。なんじら信仰を堅うして彼を防げ

ペテロ前書五章八、九節

会衆　主に感謝し奉る

司式者　我らの助けは主の御名にあり
会衆　主は天地を造りたまえり

一同ひざまずいて次の懺悔をする。ただしすでに晩祷序式または聖餐式準備で懺悔を用いたときは、これを省いて「神よ、すみやかに我らを救いたまえ」に移る。

父と子と聖霊なる全能の神よ、われら思いと言葉と行ないにて多くの罪を犯せしことを悲しみ懺悔し奉る。願わくは全能の神、我らをあわれみ、われらの罪をことごとく赦し、限りなき命に至らせたまわんことを。アーメン

司祭は立って次のように言う。

願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪をことごとく赦し、聖霊の恵みと力とを与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを

会衆　アーメン

司式者　救いの神よ、我らを帰えしたまえ

会衆　我らに向かいて御怒りをやめたまえ

司式者　神よ、すみやかに我らを救いたまえ

会衆　主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

一同立って次のように言う。

父と子と聖霊に栄光あれ、始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり　アーメン

司式者　なんじら主をほめまつれ

会衆　主の御名をほめまつるべし

ここで次の詩の全部または一部を歌いあるいは唱える。

詩　四　篇

一　わが義の守りなる神よ、わが呼ばわるときに聞きたまえ＝　わが悩みしとき、なんじ我をくつろがせたまえり、願わくは我をあわれみ、わが祈りにこたえたまえ

二　人々よ、なんじらいつまでわが誉れをきずつけ＝　むなしきことを好み、偽りを慕いもとむるや

三　されど知れ、主は神を敬う人をきよめ別ちて、おのがものとなしたまいしを＝　われ呼ばわらば主はききたまわん

四　なんじら怒るとも罪をおかすなかれ＝　伏しどにておのが心にかたりて、もだせなんじら主によりたのめ

五　多くの人は言う、「我らに良き事を示すものなきや＝　主よ、願わくは御顔の光をのぼらせて我らを照らしたまえ」と

七　なんじはわが心に喜びを与えたまえり＝　かれらの穀物と酒との豊かなるときの
　　喜びにまされり
八　われ安らかに伏しまた眠らん＝　主よ、ただなんじのみ我を安らかにおらしめた
　　もう

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩三十一篇　一―五

一　主よ、我なんじに寄り頼む、願わくはとこしえに恥なからしめたまえ＝　なんじ
　　の義をもて我を助けたまえ
二　なんじの耳をかたむけ、すみやかに我を救いたまえ
　　となり、われを救う堅固なる城となりたまえ
三　なんじはわが岩わが城なり＝　御名のために我をみちびきたまえ
　　げに、
四　願わくはひそかに設けられたる網より、我を引きいだしたまえ＝　そはなんじは
　　わが避けどころなればなり

五　わが魂をなんじの御手にゆだぬ＝　主よ、まことの神よ、なんじは我をあがない
　　たまえり

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩九十一篇

一　いと高き者のもと、その隠れ場にすまい＝　全能者の陰にやどるものあり
二　かれ主に言わん＝　「なんじはわが避け所、わが城、わが寄り頼む神なり」と
三　神なんじをかりゅうどのわなより助けいだし＝　恐ろしき疫病よりのがれしめた
　　まわん
四　主その羽をもてなんじをおおい、なんじその翼の下にかくれん＝　主のまことは
　　盾なり、こだてなり
五　夜は驚くべきことあり＝　昼はとびきたる矢あり
六　暗きにはしのびよる疫病あり、真昼には激しきほろびあり＝　されどなんじ恐る
　　ることあらじ

七　千人なんじのかたわらに倒れ、万人なんじの右にたおる＝　されどその災いはなんじに近づくことなからん

八　なんじの目はただこの事をながめ見るのみ＝　なんじ悪しき者のむくいを見ん

九　なんじは主を避けどころとし＝　いと高き者をその住まいとなせり

一〇　されば災いなんじにいたらず＝　悩みなんじの天幕にちかづかじ

一一　そは主なんじのために御使いにおおせ＝　なんじが歩むもろもろの道にて、なんじを守らせたまえばなり

一二　彼ら手にてなんじをささえ＝　なんじの足を石にふれざらしめん

一三　なんじはししとまむしとを踏み＝　若きししとへびとを足の下に踏みにじらん

一四　彼われを愛して離れざるゆえに我これを救わん＝　彼わが名を知るゆえに我これをまもらん

一五　彼われを呼ばばわれ答えん＝　我その悩みの時にともにおりて彼を助け、彼にほまれを得させん

一六　われ長き命をもて彼をみち足らしめ＝　わが救いを彼に示さん

父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

ここで次の聖歌を歌いまたは唱える。

一　このひも おわりぬ　よの つくりぬしよ
　こよいも まもりて　やすらに ふさせよ

二　サタナを しりぞけ　おそれを のぞきて
　きよらに いこわせ　みまもりを たまえ

三　みちちと みたまと　とわに ひとつ なる
　みこイエスによりて　いのり たてまつる
　アーメン

司式者は次の聖語を朗読する。

主よ、なんじは我らのうちにいます。我らはなんじの名をもてとなえらるる者なり。
我らを捨てたもうなかれ
エレミヤ記一四章九節

会衆　主に感謝し奉る

司式者　神よ、我らをひとみのごとく守り
会衆　主の翼のかげにかくしたまえ

次にシメオンの頌または詩百三十四篇を歌いあるいは唱える。

シメオンの頌

一　主よ、今こそ御言葉にしたがいて＝　しもべを安らかに行かしめたもうなれ
二　わが目は、はや＝　主の救いを見たり
三　これもろもろの民の前に＝　備えたまいしもの
四　異邦人をてらすひかり＝　御民イスラエルの栄光なり
父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

詩百三十四篇

一　よる主の家に立ち主に仕うるもろもろのしもべよ＝　主をほめまつれ
二　なんじら聖所に向かいて手をあげ＝　主をほめまつれ
三　願わくは主シオンよりなんじを祝したまわんことを＝　主は天地を造りたまえり
父と子と聖霊に＝　栄光あれ
始めにあり、今あり＝　世々限りなくあるなり　アーメン

ここで一同ひざまずく。

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

司式者　主よ、今夜われらを守りたまえ
会衆　罪を犯すことなからしめたまえ

司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら祈るべし
いと高きみくらにいます主よ、願わくは天の光をもって夜の暗きを照らし、光の子とせられし我らを守りて、暗きわざに組することなからしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に左の祈りまたはその他の祈りを用いてもよい。

生ける神の御子・主イエス＝キリストよ、主は墓にいこい、墓をきよめて御民のために望みの伏しどとなしたまえり。願わくは主の苦しみのもととなりし我らの罪を深くあわれみ、我らのからだ、ちりに伏すとき、我らの魂、主とともに生くることを得させたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン
あわれみ深き神よ、願わくはともにいまして目さむるまで我らを守り、このはかなき世にて疲れし我ら、とこしえに変わることなき主にたよりて安ろうことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に左のように言う。

司式者　主よ、我らの祈りをききたまえ
会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ
司式者　我ら主を祝いまつらん
会衆　主に感謝し奉る
司式者　願わくは父と子と聖霊なる全能の神、我らをさきわい守りたまわんことを
会衆　アーメン

日本聖公会組織成立記念日祈祷

早祷・晩祷または聖餐式に用いる。
早祷序式または晩祷序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

万軍の神よ、願わくは帰りたまえ。天より望み見てこのぶどうの木をかえりみたまえ。なんじが右の手にて植えたまえるものを守り、おのがために強くなしたまえる枝を守りたまえ

詩八〇篇一四、一五節

なんじらはもはや旅びとまた宿りびとにあらず、聖徒と同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト＝イエス自らそのすみの親石たり

エペソ書二章一九、二〇節

平日に聖餐式を行なうときは、次の特祷・使徒書・福音書を用いる。
主日およびその他の祝日、大斎始日には当日の特祷の次にこの特祷を用いる。

特祷

全能の神よ、主は福音の光をもってわが国を照らし、我らを召して使徒たちよりの聖公会にありて主に仕えしめたまえり。願わくはこの恵みをますます感謝し、正しく信仰の道を歩むことを得させたまえ。また願わくはすべて御名を唱うる者を導き、御子にありて全く一つになる時をすみやかにきたらせたまえ。父と聖霊とともに一体の神まわんことをこいねがい奉る。アーメン

使徒書　エペ　二章一三―二二

さきに遠かりしなんじら今キリスト＝イエスにありて、キリストの血によりて近づくことを得たり。彼は我らの平和にしておのが肉により、さまざまの戒めと定めより成る律法を廃して二つのものを一つとなし、恨みなる隔ての中がきをこぼちたまえり。これは二つのものをおのれにおいて一つの新しき人に造りて平和をなし、十字架によりて恨みを滅ぼし、またこれによりて二つのものを一つのからだとなして神と和らがしめんためなり。かつきたりて、遠かりしなんじらにも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べたまえり。そはキリストによりて我ら二つのもの一つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。さればなんじらはもはや、旅びとまた宿りびとにあらず、聖

徒と同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト＝イエスみずからそのすみの親石たり。おのおのの建て物、彼にありて建て合わせられ、いやましに聖なる宮、主のうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊によりて神の御住まいとなるなり。

福音書　ヨハ　一七章一四―二一

イエス祈りて言いたもう、「我は御言葉を彼らにあたえたり、しかして世は彼らを憎めり、われの世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬによりてなり。わが願うは、彼らを世より取りたまわんことならず、悪より免れしめたまわんことなり。我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならず。真理にて彼らを清め別かちたまえ、なんじの御言葉は真理なり。なんじ我を世につかわしたまいしごとく、我も彼らを世につかわせり。また彼らのために我はおのれをきよめ別かつ、これ真理にて彼らもきよめ別かたれんためなり。我かれらのためのみならず、その言葉によりて我を信ずる者のためにも願う、これみな一つとならんためなり。父よ、なんじ我にいまし、我なんじにおるごとく、彼らも我らにおらんためなり、これなんじの我をつかわしたまいしことを世の信ぜんためなり」。

聖餐式では祝福の前に、早祷・晩祷では第三特祷の次に左の祈り用いる。

とこしえにいます全能の神よ、くすしき摂理をもって、わが国にも聖公会のえだを植え、これを守り育てたもうことを感謝し奉る。願わくはあわれみをもって我らの罪とあやまちと怠りとを赦し、聖徒のひとたび伝えられたる信仰の道を堅くまもり、ますます深く父と御子を知り、聖霊によりて聖なる宮に建て合わせられ、御名の栄光をあらわし、かつ御国を広むることを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

収穫感謝

早祷・晩祷または聖餐式に用いる。
早祷序式または晩祷序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

神は知恵をもって地をさだめ、悟りをもって天をすえたまえり。その知識によりて源はわきいで、雲は露を注ぐなり

箴言三章一九、二〇節

なんじの宝となんじがすべての成りいで物の初なりをもて神をあがめよ。さらばなんじの倉は満ちて余り、なんじの酒ぶねは新しき酒にてあふれん

箴言三章九、一〇節

すべてのこと感謝せよ。これイエス＝キリストによりて神のなんじらに求めたもうところなり

テサロニケ前書五章一八節

平日に聖餐式を行なうときは、次の特祷・使徒書・福音書を用いる。
主日およびその他の祝日には当日の特祷の次にこの特祷を用いる。

特祷

恵みふかき神よ、源はわきいで、雲は露をそそぎ、まくとき去り、刈る時きたるは主の御わざによれり。今年も地に物をおい茂らせ、刈り入れを豊かならしめ、またもろもろの恵みを施したまえることを感謝し奉る。願わくはこの大いなる恵みに感じ、生涯行ないを清くし、慎みて主に仕うることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。願わくは父と子と聖霊に世々栄光あらんことを。アーメン

使徒書　ガラ　六章七―一〇

神は侮るべき者にあらず、人のまくところは、その刈るところとならん。おのが肉のためにまく者は肉によりて滅びを刈りとり、御霊のために御霊によりてとこしえの命を刈りとらん。われら善をなすにうまざれ、もしたゆまずば、時いたりて刈り取るべし。このゆえにおりにしたがいて、すべての人ことに信仰の家族に善をおこなえ。

福音書　マタ　五章四三―四八

イエス言いたもう、「なんじの隣を愛し、なんじのあだを憎むべし」と言えることあるをなんじら聞けり。されど我はなんじらに告ぐ、なんじらのあだを愛し、なんじらを責むる者のために祈れ。これ天にいますなんじらの父の子とならんためなり。天の

父はその日を悪しき者の上にも、よき者の上にものぼらせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせたもうなり。なんじらおのれを愛する者を愛すとも、何の報いをか得べき、取税人もしかするにあらずや。兄弟にのみあいさつすとも何のまさることかある、異邦人もしかするにあらずや。さらばなんじらの天の父の全きがごとく、なんじらも全かれ」。

伝道祈祷

早祷・晩祷または聖餐式に用いる。
早祷序式または晩祷序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

神はキリストにありて世をおのれと和らがしめ、その罪をこれにおわせず、かつ和らがしむる言葉を我らにゆだねたまえり　コリント後書五章一九節

なんじら行きて、もろもろのくにびとを弟子となし、父と子と聖霊の名によりて洗礼を施し、わがなんじらに命ぜしすべてのことを守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまで常になんじらとともにあるなり　アーメン　マタイ伝二八章一九、二〇節

刈り入れは多く働きびとは少なし。このゆえに刈り入れの主に働きびとをその刈り入れ場につかわしたまわんことを求めよ　マタイ伝九章三七、三八節

早祷には詩九十五篇にかえて詩九十六篇を用いる。
詩　篇　第七十二篇
第一日課　イザ　四二章一―一七
第二日課　ロマ　一〇章

晩祷には詩九十七篇、百十五篇を用いる。
第一日課　イザ　六〇章一―一六
第二日課　使　一七章二二―三一
主の祈りの次に司式者は立つ。

司式者　主よ、あわれみを我らに現わしたまえ
会衆　主の救いをあたえたまえ
司式者　主よ、正しきをもって主の仕えびとを装いたまえ
会衆　主の聖徒を喜ばせたまえ
司式者　主よ、もろもろの国を主のゆずりとなしたまえ
会衆　地のはてまで御国とならしめたまえ
司式者　主よ、御言葉をいだしたまえ
会衆　さらば伝うる者いや増さん
司式者　彼らの声を全地にひびかしめたまえ
会衆　その言葉を地のはてにまで至らせたまえ
司式者　主のみわざをしもべらに示したまえ
会衆　主の栄光をその子らに現わしたまえ
司式者　主の麗しきを我らの上に臨ましめたまえ
会衆　我らの手のわざを堅からしめたまえ
司式者　主なんじらとともにいますことを
会衆　主なんじの霊とともにいますことを
司式者　我ら祈るべし

神よ、一つの血筋より万民をいだして地の全面に住ましめ、また御子をくだして、遠き者にも近き者にも、やわらぎを宣べしめたまえり。願わくはわが国の人々を恵みて主を探ることを得させたまえ。またすみやかに約束を遂げ、万国の民に御霊をそそぎたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

教会振起のため

主よ、願わくは御民の心を励まし、多くの良き行ないの実を結び、豊かに主より報いを受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

早祷の「恵みのため」の祈り、または晩祷の「みたすけのため」の祈りをここに用いる。次に司式者はひざまずき、左の祈りを用いる。

伝道のため

全能の神よ、御子イエス＝キリストは使徒たちに、あまねく世界を巡りてすべての人に福音を宣べ伝えよと命じたまえり。願わくは召されて公会にある者を導き、こころよくこの御言葉に従いて福音を人々に教え、救いの道を万国にひろむることを深く望ましめたまえ。天の父よ、願わくは主を知らず、飼う者なき羊のごとく散り離れたる異邦人をあわれみ、働く者を刈り入れ場におくり、天の力をもってこれを強め、その働きを祝し、ついに異邦人のかず満ち、イスラエルの人のことごとく救わるる時をきたらしめたまえ。また願わくはすべてキリストの名を唱うる者、みな主にありて心を一つにし、熱心に祈り、豊かに供え物をささげて御国をひろめ、御栄えを現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主キリストの御名により てこいねがい奉る。アーメン

主教のため

全能の神よ、主は御子イエス＝キリストをもって、聖なる使徒たちにさまざまの良き賜物をさずけ、主の群れを飼うことを命じたまえり。願わくは主の民を牧するすべての主教、忠実に御言葉を宣べ、正しく公会を治め、信徒ら喜びてこれにしたがい、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

伝道者のため

慈悲ふかき父よ、主を知らざる人々のうちに働くしもべらの上に、天の恵みをくだしたまえ。願わくは正しきをもって彼らを装い、その口に御言葉を満たし、その語るところ、むなしくならず、つねに実を結ぶことを得させたまえ。また願わくは力と愛と慎みの霊をあたえ、患難と辛苦に耐うる力を添え、その行ないと教えとをもって主の栄光を現わし、人々を救いに導くことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

信徒のため

全能の神よ、主は迷える者にまことの教えの光をあらわし、正しき道に帰らせたも

う。願わくはキリストの公会につらなりたる人々、みなその奉ずるところにかなわざるものを去り、もっぱらこれにかのうものを追い求むることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

未信者のため

万民の造り主・あわれみ深き神よ、主は造りたまいし者をことごとく愛し、罪びとの死ぬるを好まず、主に帰りて生くることを喜びたもう。願わくは未信者・異端者をあわれみ、そのかたくなるを和らげ、御言葉を軽んずる心を除きたまえ。ほめ奉るべき主よ、彼らをまことのイスラエルびととともに救い、一つの群れとなし、ひとりの羊飼いに従わせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

平日に聖餐式を行なうときは、「神よ、一つの血筋より」（六三三ページ）の祈りを特祷とし、次の使徒書・福音書を用いる。

使徒書　エペ　二章一一―二二

されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行ないたる、かの割礼ありととのうる者に無割礼ととなえらるるなんじら、さきにはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属するもろもろの契約にあずかりなく、世にありて望みなく、神なき者なりき。されどさきに遠かりしなんじら今キリスト＝イエスにありて、キリストの血によりて近づくことを得たり。彼はわれらの平和にして、おのが肉により、さまざまの戒めと定めより成る律法を廃して二つのものを一つとなし、恨みなる隔ての中がきをこぼちたまえり。これは二つのものをおのれにおいて一つの新らしき人に造りて平和をなし、十字架によりて恨みをほろぼし、またこれによりて二つのものを一つの体となして神と和らがしめんためなり。かつきたりて、遠かりしなんじらにも平和を宣べ、近き者にも平和を宣べたまえり。そはキリストによりて我ら二つのものが一つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。されば、なんじらはもはや旅びとまた宿りびとにあらず、聖徒と同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト＝イエスみずからそのすみの親石たり。おのおのの建物、かれにありて建て合わせられ、いやましに聖なる宮、主のうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊によりて神の御住ま

いとなるなり。

福音書　ヨハ　一〇章七―一六

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我は羊の門なり。すべて我よりさきにきたりし者は、盗びとなり強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なりおおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入りをなし、草をうべし。盗びとのきたるは盗み、殺し、滅ぼさんとするのほかなし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり。我はよき羊飼いなり、よき羊飼いは羊のために命を捨つ。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとは、おおかみのきたるを見れば羊を捨てて逃ぐ、――おおかみは羊をうばいかつ散らす――彼は雇いびとにてその羊を顧みぬゆえなり。我はよき羊飼いにして、わがものを知り、わがものは我を知る、父の我を知り我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨つ。我にはまたこのおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声をきかん、ついに一つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

洗礼志願式

志願者は聖堂の入口に立つ。
司式者は次のように問い、志願者はおのおのそれに答える。

問　なんじ天地の造り主・唯一のまことの神を信ずるか
答　我これを信ず
問　なんじ迷信を捨て、偶像を拝むことをやめたるか
答　我これをやめたり
問　なんじキリストの道を学び、洗礼を受くる備えをなさんと願うか
答　我これを願う
問　なんじ努めて聖公会の礼拝に列するか
答　我これをつとむ

次に司式者は志願者おのおのに言う。「アーメン」は司式者だけが言う。

我なんじを受けて聖公会の洗礼志願者となす

願わくはこのよき志を起こさせたまえる全能の神、なんじに御力をあたえて、これを全うせしめたまわんことを、主イエス＝キリストによりて願う　アーメン

次に司式者は左の勧めをする。

なんじらは洗礼志願者となれり。ゆえに今より必ず妄信を去り、不義のわざを捨て、慎みて身を修めざるべからず。また聖書の教えを学び、日々聖霊の助けを祈り、罪に勝つ力と真理を悟る知識とをひたすら願わざるべからず

ここで志願者はひざまずく。司式者は次の祈りをする。

慈悲の父・全能の神よ、このしもべらを導きて、まことの道に帰る決心をなさしめたまえることを感謝し奉る。願わくは我らの祈りをきき、このしもべらの心をひらきて明らかに主を知ることを得させたまえ。また天よりの力をあたえて、まことに悔い改め、信仰を保ち、ついに洗礼を受くることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

伝道師認可式

司祭は志願者を主教または主教の指名を受けた司祭の前に伴い、次のように推薦する。

この人々を日本聖公会の伝道師に任ぜんことを願う

主教は言う。

なんじこの人々のことを調査し、品行正しく聖書に通じたる者と認むるか

司祭は答える。

しかり。この人々を調査し、伝道師の職に適する者と認む

主教は次のように言う。

わが子よ、なんじら神の公会にて伝道師とならんと欲せば、よろしくその責任の重きを熟考し、その職を尽くす力を全能の神に求むべし。おおよそ伝道師たる者は、怠らず聖書を説き、ねんごろに洗礼志願者を教え、未信者または道を離れんとする者を導き、聖公会の法規に定めたる職務を熱心に尽くすべし。さればなんじらに問わん

主教　なんじ怠らず聖書を研究し、これを教うることを努むるか

答　我これを努む

主教　なんじ慎みてなんじの主教・司祭に従うか

答　我これに従わん

ここで会衆はひざまずく。

主教　主よ、主のしもべを救いたまえ

会衆　彼は主にたよれり

主教　その口に知恵を語らしめたまえ

会衆　その舌に公平を宣べしめたまえ

主教　そむける者に主の道を教えしめたまえ

会衆　さらば罪びと主に帰らん

主教　主よ、彼の眼を開きたまえ

会衆　さらば律法の奥義を見ることを得ん

主教　主のさとしをもって彼をみちびきたまえ

会衆　主の栄光のうちに彼を入れたまえ

主教　主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ

主教　我ら祈るべし

すべての良き賜物をあたえたもう全能の神よ、御名をあまねく世に現わすことを我らに命じたまえり。願わくはこのしもべに恵みをくだし、伝道師の職務を尽くさしめ、御言葉をしらぶる知恵を与え、これを教うる力を授けたまえ。また言葉をつつしみ、行ないを清くし、罪びとを主に導くことを努め、また常に主の慰めをこうむりて危うきを忍び、なやみに耐え、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に主教は認可状を与えて次のように言う。

父と子と聖霊の御名により、神の公会の伝道師の職務を行のうことを認可す。なんじ正しく神の御言葉を伝うることを努めよ

次に主教は左の祝福を用いる。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み、なんじらの上に臨み、常になんじらとともにあらんことを。アーメン

女執事任命式

志願者を推薦する司祭は主教に向かって次のように言う。

師父よ、この人々を女執事の職に任ぜんことを願う

主教は言う。

なんじが推薦する人々は、品行正しく、聖書に通じ、この務めを尽くして神の栄光を現わし、聖公会の徳を建つるに適当なりや。これは大いに慎むべきことなり

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、この職に適する者なりと認む

主教は言う。

さればなんじ今ここに集まりたる人々に、女執事にかかわる言葉を告ぐべし

司祭は会衆に向かって言う。

兄弟よ、我らの救い主イエス＝キリスト、肉体となりて世にいましし時、主に仕えたる多くの女たちあり。よみがえりたまえる後にも、主は彼らをしてこの喜びのおと

ずれを弟子たちに告げ知らしめたまえり。また聖パウロは福音のために我とともに努めたる女たちを助けよとピリピびとに書きおくり、ロマびとにはケンクレヤの教会の執事なる我らの姉妹フィベをなんじらに薦むと言いおくれり

これによりて、女執事の職務につき聖公会の法規に定められたるところは、司祭の指示をうけて病める者を訪ね、貧しき者を助け、女とこどもとに信仰の道を教え、御国を広むることなり。この人々はかかる職務に任ぜられんためにここにきたれるなり

次に主教は言う。

兄弟よ、この人々はすでに法規に定めたる手続きにしたがいたり。もしこの人々女執事となるに故障ありと知る者あらば、いま神の御名により申し立つべし

故障を申し立てる者がない時は次のように言う。

主教　我ら女執事の職に任ずるに適当と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで会衆はひざまずく。

主教　主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆　我ら主にたよれり

主教　天の御位にいますものよ

会衆　われ主にむかいて目を挙ぐ

主教　しもべその主の手に目をそそぎ

会衆　はしためその主婦の手に目をそそぐがごとし

主教　我ら祈るべし

とこしえにいます神よ、主は昔より清き女の働きをよみしこれを祝したまえり。願わくは女執事の職に任ぜられんとするこの姉妹をあわれみ、その願いをゆるし、励みてわざをなし、喜びて主に仕え、主の栄光を現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

主教と会衆は座につき、志願者は立つ。主教は次のように問う。

主教　神の公会にて女執事の職を願う姉妹よ、いまなんじらと全会衆の聞きしごとく、この務めは、悩める者・貧しき者を慰め、弱き者を助け、迷える者を導き、また御言葉と聖奠をつかさどる聖職を助くるものなれば、なんじらその責任のいかに重きかを熟考したるか

答　しかり

主教　なんじらこの世の心づかいを捨て、おのが行ないをキリストの道にかなわせ、日々怠らずその聖なる務めを行のうか

答　神のたすけによりてこれを努めん

主教　なんじらこの志を成し遂ぐる恵みを日々祈り求むるか

答　我かくなさん

次に主教は立って言う。

願わくはこの良き志を起こさせたまえる全能の神、なんじらに御力を与えてこれを遂げさせたまわんことを、主イエス＝キリストによりて願う。アーメン

ここで志願者はひざまずき、主教はおのおのに次のように言う。

「アーメン」は主教だけが言う。

父と子と聖霊の御名により、我なんじを神の公会の女執事たる職に任ず　アーメン

ここで会衆はひざまずく。

主教　主よ、あわれみたまえ

会衆　キリストよ、あわれみたまえ

主教　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

主教は次のように言う。

聖霊の光をもつて御民の心を照らしたまいし神よ、この姉妹も同じ聖霊の賜物によりてそのなすべきことを悟り、これを成し遂ぐる恵みを受くることを得させたまえ。また主の慰めをうけ、もろもろの試みをしのび、つねに励みて弱き者・苦しむ者に仕えしめたまえ。願わくはすべてこの職務に召されたる者を祝し、互いに労を負い、ついに御国の喜びに入ることを得させたまえ。救い主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神よ、主は柔和・しとやかなる霊をもって飾りとすべしと教えたまえり。願わくはこの姉妹をして主キリストにならい、柔和と寛容とをもって装い、謙そんと忠実とをもって主に仕えしめたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

願わくは望みの神、信仰よりいずるすべての喜びと平安とをなんじらに満たしめ、聖霊の力によりて望みをますます豊かならしめたまわんことを。アーメン

逝去者記念

逝去者記念聖餐式

特　祷

すべての人の造り主・贖い主なる神よ、願わくは主のしもべ（――）の魂をみそなわし、御子の苦しみのいさおによりて、その量るべからざる恵みを受け、終わりの日に世を去りしすべての忠義なるしもべとともに、喜びて主の御顔を仰ぎ見ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後　四章一六―五章四

我らは気落ちせず、我らが外なる人は破るれども、内なる人は日々に新たなり。それ我らが受くるしばらくの軽き悩みは、きわめて大いなるとこしえの重き光栄を得しむるなり。我らの顧みるところは見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるも

のはしばらくにして、見えぬものはとこしえに至るなり。我らは知る、我らの幕屋なる地上の家破るれば、神の賜う建物、すなわち天にある、手にて造らぬ、とこしえの家あることを。我らはその幕屋にありて嘆き、天より賜う住みかをこの上に着んことをせつに望む。これを着るときは裸にてあることなからん。我らこの幕屋にありて重荷を負えるごとくに嘆く、これを脱がんとにあらでこの上に着んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の命にのまれんためなり。

福音書　ヨハ　五章二四―二八

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、わが言葉をききて我をつかわしたまいし者を信ずる人は、とこしえの命をもち、かつさばきに至らず、死より命に移れるなり。まことに、まことになんじらに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでにきたれり、しかして聞く人は生くべし。これ父みずから命を持ちたもうごとく、子にもみずから命をもつことを得させ、また人の子たるによりてさばきする権を与えたまいしなり。なんじらこれを怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききていずる時きたらん」。

幼年逝去者の記念聖餐式には、幼年葬送式中の聖餐式の特祷・使徒書・福音書を用いる。

逝去者記念式

家庭でこの式を用いてもよい。

司式者　父と子と聖霊の御名によりて　アーメン

司式者　主よ、あわれみたまえ
会衆　キリストよ、あわれみたまえ
司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

司式者　天にます我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ　アーメン

詩二十三篇

一　主はわが牧者なり＝　我は乏しきことなからん
二　主は我をみどりの野に伏さしめ＝　いこいのみぎわにともないたもう
三　主はわが魂を生かし＝　御名のために正しき道にみちびきたもう
四　たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれじ＝　なんじ我とともにいまし、
　　なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ
五　わが杯はあふるるなり＝　わがこうべに油を注ぎたもう、
　　なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝
六　われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝　我はとこしえに主の宮のうちに住まわん

主よ、とこしえの平安を＝　彼にあたえ
絶えざる御光をもて＝　照らしたまえ

詩八十四篇

一　万軍の主よ＝　なんじの御住まいはいかに愛すべきかな

二　わが魂は絶えいるばかりに主の大庭をしたいてよろこびうとう
三　万軍の主・わが王・わが神よ＝　なんじの祭壇のほとりに、すずめも宿りをえ、
　　つばめもそのひなを入るる巣をえたり
四　なんじの家に住むものはさいわいなり＝　かかる人はつねに、なんじをたたえまつらん
五　なんじを力とする者はさいわいなり＝　そのこころシオンの大路にある者はさいわいなり
六　彼らは涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉あるところとなす＝　また前の雨はもろもろの恵みをもてこれをおおえり
七　彼らは力より力にすすみ＝　ついにシオンに至りて神にまみゆ
八　主よ、万軍の神よ、ヤコブの神よ、耳を傾けたまえ
九　神よ、我らの盾なる者をみそなわし＝　なんじに油そそがれし者の顔をかえりみたまえ

一〇　なんじの大庭に住もう一日は千日にもまされり＝　われは悪の天幕におらんよりはむしろわが神の家の門守とならんことをねごうなり

一一　そは主なる神は日なり盾なり＝　主は恩と栄光をあたえ、直くあゆむ者によき物を拒みたもうことなし

一二　万軍の主よ＝　なんじに寄り頼む者はさいわいなり主よとこしえの平安を＝　彼にあたえ絶えざる御光をもて＝　照らしたまえ

ここでヨハネ伝第一四章一節から一三節までを朗読する。

イエス言いたもう、「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えに行く。もし行きてなんじらのために所を備えば、またきたりてなんじらをわがもとに迎えん、わがおる所になんじらもおらんためなり。なんじらはわが行く所にいたる道を知る」。トマス言う、「主よ、いずこに行きたもうかを知らず、いかでその道を知らんや」。イエス彼に言いたもう、「われは道なり、真理なり、命なり、我によらではたれにても父のもとに至る者なし。なんじら、もし我を知りたらばわが父をも知りしならん。今よりなんじらこれを知る、すでにこれを見たり」。ピリポ言う、「主よ父を我らに示したまえ、さらば足れり」。イエス言いたもう、「ピリポ、我かく久しくなんじらとともにおりしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、いかなれば『われらに父を示せ』と言うか。我の父におり、父の我にいたもうことを信ぜぬか。わがなんじらに言う言葉はおのれによりて語るにあらず、父われにいましてみわざを行ないたもうなり。わが言うことを信ぜよ、われは父におり、父は我にいたもうなり。もし信ぜずば、わがわざによりて信ぜよ。まことに、まことになんじらに告ぐ、我を信ずる者はわがなすわざをなさん、かつこれよりも大いなるわざをなすべし、われ父に行けばなり。なんじらがわが名によりて願うことは、我みなこれをなさん、父、子によりて栄光を受けたまわんためなり」。

次に左の祈りをする。ただし幼年逝去者のときはこれを用いない。

世々限りなくいます主・命のもとなる神よ、主の御名は、世を去れる者にも、世にある者にも、ひとしくあがめられたもう。我ら、やすみに入れる主のしもべ（――）の

ゆえによりて御名をほめ奉る。願わくはパラダイスおよびこの世にある、主の全公会に御光を放ち、天よりの慰めをあたえたまえ。願わくは我らをあわれみ、よき模範をのこせる主のしもべの跡をふみ、主を愛し、主に仕え、ついに彼らとともにとこしえの喜びに入ることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

幼年逝去者のときは次の祈りを用いる。

主イエス＝キリストよ、この世にいましし時、幼な子をいだきて祝し、天国はかくのごとき者の国なりと教えたまえり。願わくはいつくしみ深き御手をもって主が招きたまいし幼な子たちの、今もなお主によろこばれ、御守りのうちにあることを信ぜしめ、我らをして、つねに主のなぐさめを感謝し、御名をあがむる心を増させたまえ。父と聖霊とともに唯一の神にましまして世々限りなく統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

つづいて以下の祈りをする。

主イエス＝キリストよ、主は十字架の死によりて死の針を除きたまえり。願わくはしもべらをして主を信じ、主にありて安らかに眠り、主の御姿に目ざむることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々限りなく一体の神にましまします主のあわれみによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神よ、主は選びたまいし者を結び合わせ、御子われらの主キリストのからだなる公会に連ねたまえり。願わくは我らに恵みをあたえ、主の聖徒の模範にしたがいて常に清きことを行ない、ついに主を愛する者のために備えたまいし大いなる喜びにあずかることを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

願わくはあわれみ深き全能の神、すべて主を信じて世を去りし者に光明と平安とをあたえ、とこしえの命に至らせたまわんことを。アーメン

救主降生一九五九年改定

詩篇

詩篇

一日早祷

第一篇

一　悪しき者のはかりごとに歩まぬ人はさいわいなり＝　罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいなり

二　かかる人は主の律法をよろこび＝　昼も夜もこれをおもう

三　かかる人は流れのほとりに植えし木のごとし＝　時いたりて実を結び、葉もまたしおれず、そのなすところみなさかえん

四　悪しき人はしからず＝　風の吹き去るもみがらのごとし

五　されば悪しき者はさばきに耐えず＝　罪びとは正しき者のつどいに立つことを得ざるべし

六　主は正しき者の道を知りたもう＝　されど悪しき者のみちはほろびん

第二篇

一 いかなれば国々はあいむすび＝ 民らはむなしきことをはかるや
二 地の王らは立ちかまえ＝ つかさらはともにはかり、主とその油そがれし者に
さからいて言う
三 「我らそのなわを断ち＝ その綱を捨てん」と
四 天に座するもの笑いたまわん＝ 主かれらをあざけりたもうべし
五 かくて主は憤りをもてもの言い＝ 激しき怒りをもて彼らをおじ惑わしめて言い
たもう
六 「我わが王を立てたり＝ わが聖なる山シオンに立てたり」と
七 われ主の詔を宣べん＝ 主われに言いたもう、「なんじは わが子なり、きょう我
なんじを生めり
八 我に求めよ、さらばもろもろの国をなんじの嗣業としてあたえ＝ 地のはてをも
なんじのものとしてあたえん
九 なんじ鉄のつえをもてかれらを打ちやぶり＝ 陶工のうつわのごとくに打ちくだ

かん」と
一〇 さればもろもろの王よ、なんじらさとかれ＝
一一 おそれをもて主につかえ＝ おののきをもて御足に口づけせよ
一二 しからずば主いかりをはなち＝ なんじら道にてほろびん
その憤り、すみやかに燃ゆればなり＝ すべて主に寄り頼む者はさいわいなり

第三篇

一 主よ、我に敵する者いかにおおき＝ 我に逆らいて起こり立つ者のかずおおし
二 多くの人われにつきて言う＝ 「神かれを助くることなし」と
三 されど主よ、なんじは我を囲める盾なり＝ わが栄えなり、わがかしらをもたげ
たもうものなり
四 われ声をあげて主に呼ばわる＝ 主その聖なる山より我にこたえたもう
五 われ伏して眠り、また目をさます＝ 主われをささえたもうなり
六 われを囲みて立ち構うる者を我はおそれじ＝
七 主よ立ちたまえ、わが神よわれを救いたまえ＝ なんじわがすべての敵のほおを

八　打ち、悪しき者の歯を折りたもうなり
救いは主にあり＝　願わくはみめぐみなんじの民にあらんことを

第四篇

一　わが義の守りなる神よ、わが呼ばわるときに聞きたまえ＝　わが悩みしとき、なんじ我をくつろがせたまえり、願わくは我をあわれみ、わが祈りにこたえたまえ
二　人々よ、なんじらいつまでわが誉れをきずつけ＝　むなしきことを好み、偽りをたのみ
慕いもとむるや
三　されど知れ、主は神を敬う人をきよめ別ちて、おのがものとなしたまいしを＝
われ呼ばわらば主はききたまわん
四　なんじら怒るとも罪をおかすなかれ＝　伏しどにておのが心にかたりて、もだせ
五　なんじら正しきいけにえをささげよ＝　なんじら主によりたのめ
六　多くの人は言う、「我らによき事を示すものなきや＝　主よ、願わくは御顔の光
をのぼらせて我らを照らしたまえ」と
七　なんじはわが心に喜びを与えたまえり＝　かれらの穀物と酒との豊かなるときの
喜びにまされり
八　われ安らかに伏しまた眠らん＝　主よ、ただなんじのみ我を安らかにおらしめたもう

第五篇

一　主よ、願わくはわがことばに耳をかたむけ＝　わが嘆きにみこころをとめたまえ
二　わが王、わが神よ、わが叫びの声をききたまえ＝　我なんじにいのればなり
三　主よ、朝ごとになんじわが声をききたまわん＝　われ朝ごとにいけにえの備えして、なんじを待ちのぞむべし
四　なんじは悪しきことを喜びたもう神にあらず＝　悪しき人はなんじのみもとにとどまるを得ざるなり
五　高ぶる者はなんじの前に立つことをえず＝　なんじはすべて悪を行のう者をにくみたもう
六　なんじは偽りをいう者をほろぼしたもう＝　主は血をながす者、あざむく者をにくみたもうなり

七　されどわれは豊かなるみいつくしみによりて、なんじの家に入らん＝　我はなんじをかしこみつつ聖なる宮にむかいておがまん

八　主よ、願わくはなんじの義をもて我をみちびき＝　なんじの道をわが前に直くしたまえ、われに敵するものおおければなり

九　彼らの口にはまことなく、心にては滅びをはかる＝　そののどは開きし墓、その舌はへつらいを言う

一〇　神よ、願わくは彼らにおのが罪を負わせ＝　そのはかりごとによりて自ら倒れしめたまえ

そのとがの多きによりて彼らを追いいだしたまえ＝　彼らはなんじにそむきたればなり

一一　されどすべてなんじに寄り頼む者をよろこばせたまえ

らせたまえ

なんじは彼らを守り＝　御名を愛する者をなんじによりて喜ばせたまえ

一二　主よ、なんじは正しき者をさきわいたまわん＝　盾をもて囲むごとく恵みをもて

かこみたまわん

一日晩祷

第六篇

一　主よ、願わくは憤りをもて我を責めたもうなかれ

らしめたもうなかれ＝　はげしき怒りをもて我を懲

二　主よ、我をあわれみたまえ、我しぼみ衰うるなり＝　主よ、我をいやしたまえ、

わが骨わななきふるう

三　わが魂さえも、いたく震いわななく＝　主よ、かくていつまで我を責めたもうや

四　主よ、かえりみてわが命をすくいたまえ＝　なんじのいつくしみによりて我をた

すけたまえ

五　そは死にありてはなんじを思いいずることなし＝　よみにありては、たれかなん

じをほめたたえん

六　われ嘆きによりてつかれたり＝　夜ごとに涙をもてわが伏しどをただよわせ、わ

がしとねをひたせり

七 わが目は憂いによりておとろえ＝ もろもろのあだのゆえに老いぬ

八 なんじら悪を行のう者ことごとく我をはなれよ＝ 主はわが泣くこえを聞きたまいたり

九 主わが願いをききたまえり＝ 主わが祈りをうけたもう

一〇 わがもろもろのあだは恥じて大いにおじまどい＝ たちどころに恥じてしりぞかん

第七篇

一 主・わが神よ、我なんじに寄りたのむ＝ 願わくはすべて追いせまる者よりわれを救い、我をたすけたまえ

二 しからずば彼ししのごとく我をかき裂き＝ 助くる者なき間にわれを引きゆかん

三 主・わが神よ、もし我この事をなししならんには＝ もしわが手によこしまのまつわりおらんには

四 もし悪をもてわが友に報いしならんには＝ あだびとの物を、ゆえなくかすめし

ことあらんには

五 あだする者のわれを追い捕うるにまかせ＝ わが命を土にふみにじり、わが魂をちりに置くにまかせよ

六 主よ、御怒りをもて起き、わがあだの憤りに向かいて立ちたまえ＝ わがために目をさましたまえ、なんじはさばきを仰せいだしたまえり

七 もろもろの民のつどいをなんじのまわりにあつめ＝ その上なる高みくらに座したまえ

八 主はもろもろの民をさばきたもう＝ 主よ、わが正しきとわが誠とに従いて我をさばきたまえ

九 願わくは悪しき者の悪を断ちて、正しき者をかたく立たせたまえ＝ 正しき神よなんじは人の心と思いをさぐり知りたもう

一〇 わが盾をとるものは神なり＝ 神はこころ直き者をすくいたもう

一一 神は正しきさばき主なり＝ 日ごとに憤りをおこしたもう神なり

一二 人もし立ち帰らずば神はその剣をとぎ＝ その弓を張りてかまえたまわん

一三　また死の武器をそなえ＝　その矢に火を添えたまわん
一四　見よ、悪しき人はよこしまをはらみ＝　害悪をやどし、いつわりを生むなり
一五　また穴を掘りてふかくし＝　おのが作れるその穴におちいる
一六　その害悪はおのがこうべにかえり＝　その暴虐はおのがかしらにくだる
一七　われ主に向かいてその義にふさわしき感謝をささげ＝　いと高き主の御名をほめうたわん

第八篇

一　主・われらの神よ、なんじの御名は地にあまねくしてとうときかな＝　その栄光は天にあり
二　幼な子、乳のみ子もなんじをほめたとう＝　なんじはあだびとと恨みを報ゆる者とをおし静めんために、敵に備えてとりでをもうけたまえり
三　我なんじの指のわざなる天を見るに＝　なんじの設けたまえる月と星とをみるに
四　人はいかなる者なれば、これを御心に留めたもうや＝　人の子はいかなる者なれば、これを顧みたもうや

五　ただ少しく人を神より低くつくり＝　栄光と誉れとをこうむらせ
六　またこれに御手のわざを治めしめ＝　よろずのものをその足の下に置きたまえり
七　すべての羊、牛また野の獣もしかり＝　空の鳥、海の魚、もろもろの海路を通うものまで皆しかなしたまえり
八　主・われらの神よ＝　なんじの御名は地にあまねくしてとうときかな

二日早祷

第九篇

一　われ心を尽くして主に感謝し＝　もろもろのくすしきみわざを宣べつたえん
二　我なんじによりて、喜びたのしまん＝　いと高き者よ、なんじの御名をほめうたわん
三　わがあだ、しりぞくとき＝　つまずき倒れて御前にほろびたり
四　なんじはわが正しき訴えをまもり＝　御位に座して正しきさばきをなしたまえり
五　なんじもろもろの国民を責め、悪しきものをほろぼし＝　世々限りなくかれらの

名を消し去りたまえり

六　あだは絶えはててその跡あれすたれ＝　なんじのくつがえしたまえる、もろもろの町はうせて、これを思いいずるものだになし

七　主はとこしえに御位に座したもう＝　さばきのために、その御位を設けたまえり

八　主は正しきをもて世をさばき＝　公平をもてもろもろの民にさばきをおこないたもう

九　主はしいたげらるる者のとりでなり＝　悩みの時のとりでなり

一〇　御名を知るものはなんじに寄りたのむ＝　主よ、なんじを尋ぬる者の捨てられしことなければなり

一一　シオンに住みたもう主に向かいてほめうたえ＝　そのみわざをもろもろの民のなかに宣べつたえよ

一二　血をながす者にあだをかえしたもう者は、苦しむ者を心にとめたもう＝　その叫びを忘れたまわず

一三　我を死の門より救いいだしたもう主よ＝　我をにくむ者よりわが受くる悩みを見たまえ

一四　さらば我なんじのすべての誉れを述ぶるをえん＝　またシオンの娘の門にてなんじの救いをよろこばん

一五　国々の民はおのが作れる穴におちいり＝　その隠し設けたる網におのが足をとらえらる

一六　主はおのれを知らしめ、さばきを行ないたまえり＝　悪しき人はおのが手にて作れるわなにかかれり

一七　悪しき人はよみに去り行くべし＝　神を忘るる国々の民もまたしからん

一八　貧しき者は常にわすれらるるにあらず＝　苦しむ者の望みもとこしえには絶ゆることなし

一九　主よ、立ちたまえ、願わくは勝ちを人にえしめたもうなかれ＝　御前にて国々の民にさばきをうけしめたまえ

二〇　主よ、願わくは彼らに恐れをおこさしめたまえ＝　国々の民に、おのれのただ、人なることを知らしめたまえ

第十篇

一 ああ主よ、なんじ何とてはるかに立ちたもうや＝ なんぞ悩みのときにかくれたもうや

二 悪しき人は高ぶりて貧しき者をはげしく攻む＝ かれらを自ら企てしはかりごとに捕われしめたまえ

三 悪しき人はおのが心の願いをほこり＝ むさぼる者は主をのろい、主を捨つ

四 悪しき人はほこり高ぶりて神をたずねもとめず＝ すべてその思いに「神なし」とせり

五 かれの道はつねにさかえ、なんじのさばきを見ることをせず＝ 彼はそのもろもろの敵を口さきにて吹く

六 かくておのが心のうちに言う、「われは動かさるることなし＝ 世々われに災いなかるべし」と

七 その口はのろいと偽りと、しいたげに満ちたり＝ その舌の下には、そこないとよこしまとあり

八 かれは村里の忍びやかなる所にひそみ、隠れたる所にて罪なきものをころす＝ その目はひそかに寄るべなき者をうかがう

九 隠れ場におるししのごとくひそみ待ち、貧しき者を捕えんと伏しねろう＝ 貧しき者をその網に引きいれてとろう

一〇 寄るべなき者は彼の力によりて＝ 打ちくだかれ、よろめきたおる

一一 かれ心のうちに言う＝ 「神はわすれたり、神はその顔をかくせり、神は見ることなかるべし」と

一二 主よ、立ちたまえ、神よ、御手をあげたまえ＝ 苦しむ者を忘れたもうなかれ

一三 いかなれば悪しき者は神をあなどるや＝ なんぞ心のうちに、「なんじはとがむることをせじ」と言うや

一四 なんじは見そなわしたもう＝ なやみと苦しみを見て、これを御手に取りあげたもう

寄るべなき者は身をなんじにゆだぬ＝ なんじは昔よりみなしごを助けたもうものなり

一五　願わくは悪しき者と悪を行のう者の腕を折りたまえ＝　その悪を一つだに残らぬ
までに探りいだしたまえ
一六　主はとこしえに王なり＝　国々の民はほろびて主の御国より跡をたたん
一七　主よ、なんじは柔和なる者のねがいを聞き＝　彼らの心をつよくしたまわん
一八　なんじ耳をかたむけて聞き、みなしごと、しいたげらるる者とのためにさばき
をなし＝　地につける人のふたたびおびやかすこと、なからしめたまわん

第十一篇

一　われは主に寄りたのめり＝　なんじらなんぞ我に向かいて言うや、「鳥のごとく
山にのがれよ
二　見よ、悪しき者は弓を張り、弦に矢をつがえ＝　暗きにかくれ、心なおき者を射
んとするなり
三　基みなくずれたり＝　正しき者なにをかなしえん」と
四　主はその聖なる宮にいます、主のみくらは天にあり＝　その目は人の子を見、そ
のまぶたは彼らをこころみたもう
五　主は正しき者と悪しき者をこころみ＝　そのみこころは暴虐をこのむ者をにくみ
たもう
六　主は悪しき者のうえに火と硫黄を降らせたまわん＝　燃ゆる風はかれらの杯に受
くべきものなり
七　主は正しくして正しきことを愛したもう＝　直き者はその御顔をあおぎみん

二日晩祷

第十二篇

一　ああ主よ、助けたまえ、そは神を敬う人は絶え＝　誠ある者は人の子のなかより
消えうせたり
二　人はみな偽りをもてその隣と相かたり＝　くちびるをもてへつらい、ふたごころ
をもてもの言う
三　主よ、すべてへつらいを言うくちびると＝　大いなることを語る舌を断ちたまわ
んことを

四　彼らは言う、「われら舌をもて勝ちをえん＝　このくちびるはわがものなり、たれか我らに主たらんや」と
五　主いいたもう、「貧しき者かすめられ、乏しきもの嘆くがゆえに我いま立たん＝　彼らをその慕い求むるやすきにおかん」と
六　主の言葉は清きことばなり＝　地に設けたる炉にてねり、七たび清めたる白がねのごとし
七　主よ、我らをまもり＝　われらを助けて、とこしえにこのやからより免れしめたまえ
八　悪しき者ここやかしこにあるくなり＝　人の子のなかに卑しきことあがめらるればなり

第十三篇

一　ああ主よ、かくていつまでぞや、なんじとこしえにわれを忘れたもうや＝　いつまで御顔をかくしたもうや
二　いつまでわれは心に悲しみをいだき、ひねもす魂に痛みを負うべきか＝　いつまであだはわれに勝ちほこるや
三　主わが神よ、我を顧みて答えたまえ＝　わが目を明らかにしたまえ、おそらくはわれ死のねむりにつかん
四　おそらくはわがあだ言わん、「我かれに勝てり」と＝　おそらくはわが敵わが動かさるるによりてよろこばん
五　されど我はなんじのいつくしみに寄りたのみ＝　わが心はなんじの救いによりてよろこばん
六　われ主に向かいてうたわん＝　我を豊かにあしらいたまいたればなり

第十四篇

一　愚かなる者は心のうちに「神なし」と言えり＝　かれらは腐れたり、憎むべき事をなせり、善を行のうものなし
二　主は天より人の子をのぞみ＝　さとき者、神をたずぬる者ありやと見たまえり
三　みな迷いいでてことごとくけがれたり＝　善をなす者なし、ひとりだになし
四　不義を行のう者はみな悟りなきか＝　かれらはもの食うごとくわが民をくらい、

また主を呼ぶことをせざるなり
五　見よ、彼らは大いにおそれん＝　神は正しき者とともにいませばなり
六　なんじらは貧しき者のはかりごとを侮りはずかしむ＝　されど主はその避けどころなり
七　願わくはシオンよりイスラエルの救いのいでんことを＝　主その民をふたたび栄えしめたもうとき、ヤコブは喜びイスラエルはたのしまん

三日早祷

第十五篇

一　主よ、なんじの幕屋のうちに宿るべき者はたれぞ
き者はたれぞ
二　直く歩み義を行のう者ぞその人なる
三　心よりまことを言う者ぞその人なる
かかる人は舌をもてそしらず、その友をそこなわず＝　またその隣をはずかしむる言葉をあげもちいず

四　神に捨てられし者を見ていとい軽んじ、主を恐るる者をとうとび＝　誓いしことはおのれに災いとなるも変うることなし
五　金を貸して利をとらず、まいないを受けて罪なき者をそこのうことをせざるなり＝　かかる人はとこしえに動かさるることなかるべし

第十六篇

一　神よ、願わくは我を守りたまえ＝　我なんじに寄りたのむ
二　われ主に言えり、「なんじはわが主なり＝　なんじのほかにわが幸いはなし」と
三　地にある聖徒はすぐれたる者なり＝　わがきわめてよろこぶものなり
四　主にかえてほかの神をとるものの悲しみはいやまさん＝　われ彼らのささぐる血の灌祭をささげず、その名を口に唱うることをせじ
五　主はわが嗣業なり、またわが杯に受くべきものなり＝　なんじはわが領地をまもりたまわん
六　測りなわはわがために楽しき地に落ちたり＝　げに我よき嗣業を得たるかな
七　我はさとしを授けたもう主をほめまつらん＝　夜はわが心またわれをおしう

八　われ常に主をわが前におけり＝　主わが右にいませば、われ動かさるることなか
　　るべし
九　このゆえにわが心は楽しみ、わが魂はよろこぶ＝　わが身もまたやすらかなり
一〇　なんじは我をよみに捨てたまわず＝　なんじを敬うものを墓に下らせたまわざる
　　なり
一一　なんじは命の道をわれに示したもう＝　なんじの前には満ち足れる喜びあり、な
　　んじの右にはもろもろの楽しみとこしえにあり

第十七篇

一　ああ主よ、正しき訴えをきき、わが叫びに御心をとめたまえ＝　偽りなきくちび
　　るよりいずるわが祈りに耳をかたむけたまえ
二　願わくは御前よりいずる宣告われを義とし＝　なんじの目、正しきを見たまわん
　　ことを
三　なんじわが心を試み、また夜われに臨み、我をただしたもうとも、なにの悪をも
　　見いだしたまわざるべし＝　わが口は罪を犯すことなし
四　行ないのことを言わば＝　我なんじのくちびるの言葉にしたがいて、暴逆の道を
　　さけたり
五　わが歩みは堅くなんじの道にたち＝　わが足はよろめくことなかりき
六　神よ、我なんじをよべり、なんじ我にこたえたまわん＝　願わくは耳を傾けてわ
　　が述ぶるところを聞きたまえ
七　願わくはなんじのたえなるいつくしみを現わしたまえ＝　なんじは右の手をもて
　　なんじにたよる者をそのあだよりすくいたもう
八　願わくは我をひとみのごとく守り＝　御翼の陰にかくしたまえ
九　我をかすむる悪しき者をふせぎ＝　我を囲みてわが命をそこなわんとするあだよ
　　りのがれしめたまえ
一〇　彼らはあわれみの心をとじ＝　その口をもて誇りがにもの言えり
一一　彼らは我を追いつめ、我をとりかこみ＝　地に投げ倒さんと目をとむ
一二　彼らはかき裂かんといらだつししのごとく＝　隠れたる所にひそみ待つ若きしし
　　のごとし

一三 主よ、立ちたまえ、願わくは彼らに立ち向かいてこれをたおし＝　御剣をもて悪
しき者よりわが命をすくいたまえ
一四 主よ、御手をもて我を助けいだしたまえ＝　この世のものをおのが受くべき分と
なす人々より助けいだしたまえ
彼らはなんじのたくわえたまいしものにて、その腹をみたされんことを＝　彼ら
の子はすべてのものに満ちたりて、その富を幼な子にのこすなり
一五 されどわれは義にありて御顔をみん＝　目さむる時みかたちをもて飽き足ること
を得ん

三日晩祷

第十八篇

一 わが力なる主よ＝　我なんじをいつくしむ
二 主はわが岩、わが城、われを救う者、わが神、わが寄り頼む岩なり＝　わが盾、
わが救いの角、わが高きやぐらなり

三 われほめたたうべき主をよびまつり＝　あだびとより救わるるなり
四 死のつな我をめぐり＝　滅びの激しき流れわれをおそえり
五 よみの綱われをかこみ＝　死のわな我にたちむかえり
六 われ悩みのうちにありて主をよび、わが神にさけびたり＝　主はその宮よりわが
声を聞きたまえり、御前にてわがよびし声はその耳にいれり
七 このとき主いかりたもうによりて地はふるいうごきたり
八 煙その鼻よりたち上り、火その口よりいでて焼きつくし＝　燃えさかる炭火うち
より吹きいでたり
九 主は天をたれて下りたもう＝　その御足の下は暗きことはなはだし
一〇 主はケルブに乗りてとび＝　風の翼にてかけりたまえり
一一 主はやみをおおいめぐらして幕となし＝　黒き雲をおおいとなしたまえり
一二 そのみまえの輝きによりて黒雲ひらけ＝　ひょうと燃ゆる炭と降りきたれり
一三 主は天にいかずちをとどろかせたまえり＝　いと高き者の声いでて、ひょうと燃
ゆる炭と降りきたれり

一四　主は矢を放ちて彼らをうちちらし＝いなずまを放ちて、彼らを打ちやぶりたまえり

一五　かかるときに海の底みえ、地の基あらわれいでたり＝ああ主よ、なんじの怒りとなんじの鼻のいぶきによりてなり

一六　主は高きより手をのべて我をとらえ＝大水より引きあげたまえり

一七　わが強きあだと我を憎むものより我を助けいだしたまえり＝彼らは我にまさりていとつよかりき

一八　わが災いの日に彼ら迫りきたれり＝されど主はわが支えとなりたまいき

一九　主は我をたずさえて広きところにいだし＝我を喜びたもうがゆえに我を助けたまえり

二〇　主はわが正しきに従いて賜物をたまい＝わが手のきよきに従いて報いたまえり

二一　そはわれ主の道をまもり＝わが神よりはなるる悪をなさず

二二　そのすべてのおきてはわがまえにあり＝我その定めを捨てしことなければなり

二三　われ神の御前に責むべき所なく＝おのれをまもりて不義をはなれたり

二四　このゆえに主はわが正しきに報い＝その目の前にわが手の清きに従いてむくいたまえり

二五　なんじ誠ある者には誠ある者となり＝全きものには全きものとなり

二六　清きものには清きものとなり＝ひがむ者にはひがむ者となりたもう

二七　なんじ苦しめる民をすくい＝高ぶる目をひくくしたもう

二八　なんじわがともし火をともし＝わが神・主わが暗きをてらしたまわん

二九　我なんじによりて敵を打ち破り＝わが神によりて城壁をおどりこゆ

三〇　げに神の道は全く、主の言葉はまことなり＝主はすべて寄り頼む者のたてなり

三一　主のほかに神はたれぞや＝われらの神のほかに岩はたれぞや

三二　神は力をわれに帯させ＝わが道を安らかならしめたまえり

三三　神はわが足をめじかの足のごとくし＝我を高き所に立たせたもう

三四　神はわが手を戦いにならわせ＝わが腕に青銅の弓をひくことを得しめたもう

三五　なんじの救の盾をわれに与えたまえり＝なんじ右の手をもてわれを支え、我を助けて大いならしめたまえり

三六 なんじわが歩む所を広くしたまえり＝　かくてわが足よろめかざりき
三七 我あだを追いてこれに追いせまり＝　彼らの滅ぶるまでは帰ることをせざりき
三八 われ彼らを刺し貫きたれば、彼ら立つことをえず＝　わが足のもとにたおれたり
三九 なんじ戦いのために力を我に帯びさせ＝　我に逆ろう者をわがもとに服せしめたまいたればなり
四〇 なんじわがあだの背をわれに向けたまえり＝　されば我を憎むものを我ほろぼしたり
四一 彼ら叫びたれども救うものなく＝　主に向かいて叫びたれども答えたまわざりき
四二 我かれらを打ち砕きて風の前のちりのごとくし＝　ちまたの泥のごとくに打ち捨てたり
四三 なんじ我を民の争いより助けいだし、国々のかしらとなしたまえり＝　わが知らざりし民も我につかえたり
四四 彼らわが事をききて、ただちに我にしたがい＝　異邦の人々きたりておもねり仕えたり
四五 異邦の人々は打ちしおれ＝　その城よりおののきいでたり
四六 主は生きていませり、わが岩はほむべきかな＝　わが救いの神はあがむべきかな
四七 わがためにあだをむくい＝　異邦の人々を我に服せしめたまいしはこの神なり
四八 神は我をあだより救いたまえり＝　げになんじは我に逆ろう者の上に我をあげ、荒らぶる人より我を助けいだしたまえり
四九 このゆえに主よ、我もろもろの国びとのなかにてなんじをたたえ＝　御名をほめうたわん
五〇 主は大いなる勝利をその王にあたえ＝　油そそがれし者ダビデとその末とに世々限りなくいつくしみをたもう

第十九篇　四日早祷

一 もろもろの天は神の栄光をあらわし＝　大空は御手のわざをしめす
二 この日ことばをかの日につたえ＝　この夜知識をかの夜におくる

三　語らずいわず＝　その声きこゆることなし
四　されどその響きは全地にあまねく、その言葉は地のはてにまで及べり＝　神は日
のため天に幕屋を設けたまえり
五　日は花婿がその殿をいずるがごとく＝　ますらおがその道を喜びはしるに似たり
六　そのいで立つや天のはてよりし、その巡り行くや天のはてにいたる＝　物として
その暖まりをこうむらざるはなし
七　主のおきては全くして魂を生きかえらしめ＝　主のあかしは堅くして愚かなる者
をさとからしむ
八　主のさとしは直くして心をよろこばしめ＝　主の戒めは清くしてまなこを明らか
ならしむ
九　主を恐るる道は清くして世々に絶ゆることなく＝　主のおきてはまことにしてこ
とごとくただし
一〇　これは金よりも、多くの純金よりも慕わしく＝　蜜よりもはちの巣のしたたりよ
りもあまし
一一　なんじのしもべはこれらによりて戒めをうく＝　これらを守らば大いなる報いあ
らん
一二　たれかおのれのあやまちを知り得んや＝　願わくは我をかくれたるとがより解き
はなちたまえ
一三　願わくはなんじのしもべを守りて、ことさらなる罪を犯さしめず、これをわが主
たらしめたもうなかれ＝　さればわれ傷なきものとなりて、大いなるとがを免る
ることをえん
一四　ああ主よ、わが岩よ、わが贖いぬしよ＝　わが口の言葉、わが心の思いを御心に
かなわしめたまえ

第二十篇

一　願わくは主なやみの日になんじにこたえ＝　ヤコブの神の御名なんじを守りたま
わんことを
二　聖所より助けをなんじにおくり＝　シオンより力をなんじに与えたまわんことを
三　なんじのもろもろの供え物をみこころにとどめ＝　なんじの燔祭をうけたまわん

ことを

四　なんじの心の願いをゆるし＝　なんじのはかりごとをことごとく遂げしめたまわんことを

五　我らなんじの勝利を喜び歌い、我らの神の御名によりて旗をたてん＝　願わくは主なんじの求めをことごとく遂げしめたまわんことを

六　我いま知る、主その油そそがれし者を救いたもうを＝　主は右の手による大いなる勝利にて、そのきよき天より彼にこたえたまわん

七　あるいは車をたのみ、あるいは馬をたのみとするものあり＝　されど我らはわが神・主の御名をほこらん

八　彼らはかがみ、またたおる＝　されどわれらは起きて直く立てり

九　主よ、王に勝利をあたえ＝　我らが呼ぶときこたえたまえ

第二十一篇

一　主よ、王はなんじの助けによりて大いによろこばん

二　なんじかれの心の願いをゆるし＝　そのくちびるの求めをいなみたまわざりき

三　なんじ彼のために良き賜物をそなえ＝　純金の冠を彼のこうべにいただかせたまえり

四　かれ命を求めしになんじこれをあたえ＝　そのよわいを世々限りなからしめたまえり

五　なんじの助けによりてその栄光おおいなり＝　なんじは尊きとみいつとを彼に与えたまえり

六　なんじ彼をとこしえに幸いなるものとなし＝　御前にて楽しませたまえり

七　王は主に寄りたのめり＝　いと高き者のいつくしみをこうむるがゆえに動かさることなからん

八　なんじの手はそのもろもろのあだを尋ねいだし＝　なんじの右の手はなんじを憎むものを尋ねいだすべし

九　なんじきたるときは彼らを燃ゆる炉のごとくにせん＝　主は激しき怒りによりて彼らをのみたまわん、火は彼らをくらいつくさん

一〇　なんじ彼らの末を地より絶ち＝　彼らの種を人の子のなかよりほろぼさん
一一　彼らはなんじに向かいて悪しきことをくわだて＝　はかりごとをめぐらすとも、
　　これを遂げざるべし
一二　なんじ彼らを逃げはしらせ＝　その顔に向かいて弓をひかん
一三　主よ、御力を現わしてみずからを高くしたまえ＝　我らはなんじの御力をほめうたわん

四日晩祷

第二十二篇

一　わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまいしや＝　いかなれば遠く離れて、我を救わず、わが嘆きの声を聞きたまわざるか
二　ああわが神、われ昼よばわれどもなんじ答えたまわず＝　夜よばわれども我やすきを得ず
三　されどなんじは聖なり＝　なんじはイスラエルの賛美の上に座したもう
四　我らの先祖はなんじに寄りたのめり＝　彼ら寄り頼みたれば、なんじこれを助けたまえり
五　彼らなんじを呼びて救いを得たり＝　なんじに寄りたのみて恥を受けしことなかりき
六　されど我らは虫にして人にあらず＝　世にそしられ民にいやしめらる
七　すべて我を見るものは我をあざけりわらい＝　くちびるをそらし、こうべを振りて言う
八　「彼は主に寄りたのめり、主たすくべし＝　主かれを喜びたもうがゆえに助くべし」と
九　されどなんじは我を母の胎より取りいだしたまえる者なり＝　母の胸にありしとき、すでになんじは我を守りたまえり
一〇　われ生まれいでし時よりなんじに委ねられたり＝　わが母われを生みし時よりなんじはわが神なり
一一　我に遠ざかりたもうなかれ＝　悩みちかづきて助くるものなし

多くの雄牛われをめぐり＝　バシャンの力強き雄牛われを囲めり
彼らは口をあけて我にむかえり＝　獲物をかき裂き、ほえたけるししのごとし
われ水のごとく注ぎいだされ、わが骨はことごとくはずれ＝　わが心はろうのごとくなりて胸のうちに溶けたり
わが力はかわきて陶器のくだけのごとく、わが舌はあごにひたつけり＝　なんじ我を死のちりに伏させたまえり
犬われをめぐり、悪しきものの群れわれをかこみ＝　わが手わが足を刺しつらぬけり
わが骨はことごとくあらわになりぬ＝　悪しきもの目をとめてわれを見る
彼らたがいにわが衣をわかち＝　わが下着をくじにす
主よ、遠く離れいたもうなかれ＝　わが助けよ、願わくはとくきたりて我を助けたまえ
願わくはわが魂を剣より助けいだし＝　わが命を犬のたけき勢いより免れしめたまえ
われをししの口より救いいだしたまえ＝　悩めるわが魂を野牛の角よりすくいたまえ
われなんじの御名をわがはらからに宣べつたえ＝　なんじをつどいにてほめたたえん
主を恐るる者よ、主をほめたたえよ＝　ヤコブのもろもろの末よ、主をあがめ、イスラエルのもろもろの末よ、主をかしこめ
主は悩める者の苦しみを軽んじ捨てたまわず＝　御顔をおおうことなく、その叫ぶときに聞きたもうなり
大いなるつどいにて我なんじをほめたとう、これなんじよりいずるなり＝　主を恐るる者の前にてわが誓いを主にはたさん
貧しき者はくらいて飽くことを得、主を尋ね求むる者は主をほめたたえん＝　願わくはなんじらの心とこしえに生きんことを
地のはてまでもみな思いいだして主にかえり＝　もろもろの国のやからは皆みまえに伏しおがまん

二八 国は主のものなり＝ 主はもろもろの国びとを統べ治めたもう
二九 地にありて誇り高ぶる者もみな主をおがみ＝ ちりに下る者とおのが命を長ろうることあたわざる者も皆その御前にひざまずかん
三〇 民の末は主につかえ＝ 主のことは世々に語りつたえらるべし
三一 彼らは主の救いを宣べん＝ こは主のみわざなりと、後に生まるる民につたえん

第二十三篇

一 主はわが牧者なり＝ 我は乏しきことなからん
二 主は我をみどりの野に伏さしめ＝ いこいのみぎわにともないたもう
三 主はわが魂を生かし＝ 御名のために正しき道にみちびきたもう
四 たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれじ＝ なんじ我とともにいまし、なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ
五 なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝ わがこうべに油を注ぎたもう、わが杯はあふるるなり
六 われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝ 我はとこしえに主の宮のうちに住まわん

五日早祷

第二十四篇

一 地とそれに満てるものは主のものなり＝ 世界とそのなかに住むものは主のものなり
二 主はその基を大海の上にすえ＝ これを大川の上にさだめたまえり
三 主の山に登るべき者はたれぞ＝ その聖所に立つべき者はたれぞ
四 手きよく心いさぎよき者ぞその人なる＝ むなしきことを仰ぎ望まず、偽りの誓いをせざる者ぞその人なる
五 かかる人は主より幸いをうけ＝ その救いの神より義をうくべし
六 これぞ神を慕う者のやからなる ヤコブの神の御顔を求むる者のやからなる
七 門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝ 栄光の王いりたまわん

八 栄光の王はたれなるか＝ 力を持ちたもう主なり、戦いに勇ましき主なり
九 門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝ 栄光の王いりたまわん
一〇 この栄光の王はたれなるか＝ 万軍の主、これぞ栄光の王なる

第二十五篇

一 主よ、我わが魂をなんじに挙ぐ＝ わが神よ、われなんじに寄りたのめり
二 願わくは我に恥をおわしめたもうなかれ＝ わがあだの我に勝ち誇ることなからしめたまえ
三 なんじを待ちのぞむ者をはずかしめず＝ みだりに誠を捨つる者をはずかしめたまえ
四 主よ、なんじの大路をわれにしめし＝ なんじの道をわれにおしえたまえ
五 我をなんじのまことに導き、われを教えたまえ＝ なんじはわが救いの神なり、
我ひねもすなんじを待ちのぞむ
六 主よ、なんじのあわれみといつくしみを忘れたもうなかれ＝ これいにしえより
絶えざるものなればなり
七 わが若き時の罪とわがとがとは思いいでたもうなかれ＝ 主よ、なんじの恵みの
ゆえにいつくしみに従いて我を思いいでたまえ
八 主は恵み深くして直くましませり＝ ゆえに罪びとに道をおしえたもう
九 へりくだる者にその道をしめしたまわん
一〇 主の道はすべていつくしみなり、まことを守るものにはしかるなり
一一 主よ、御名のためにわがとがをゆるしたまえ＝ わがとがは大いなればなり
一二 主を恐るる者はたれなるか＝ 主は選ぶべき道を彼にしめしたまわん
一三 かかる人はさかえ＝ その末は地をつぐべし
一四 主のしたしみは主を恐るる者とともにあり＝ 主はその契約を彼らにしめしたまわん
一五 わが目はつねに主にむこう＝ 主はわが足を網より取りいだしたまわん
一六 願わくは我をかえりみ、我をあわれみたまえ＝ 我ひとりわびしく、また苦しみ

おるなり
一七 願わくはわが心の憂いをゆるめ＝ 我を災いよりのがれいでしめたまえ
一八 わが悩み、わが苦しみをかえりみ＝ わがすべての罪をゆるしたまえ
一九 わがあだを見たまえ、彼らの数はおおし＝ 彼らいたく我をにくめり
二〇 我をまもり我を助けたまえ＝ 我に恥を受けしめたもうなかれ、我はなんじに寄
りたのめり
二一 願わくは全きと直きをもて我を守りたまえ＝ 我なんじを待ちのぞめり
二二 神よ、願わくはイスラエルをあがないたまえ＝ すべての憂いより救いいだしたまえ

第二十六篇

一 主よ、願わくは我をさばきたまえ、我はわが全きによりてあゆみたり＝ 我また
迷うことなく主に寄りたのめり
二 主よ、我をしらべまた試みたまえ＝ わが心と思いとをねりきよめたまえ
三 そはなんじのいつくしみわが目の前にあり＝ 我はまことによりてあゆめり
四 我は欺く人とともにすわらず＝ 偽り飾るものとともにあゆまず
五 われ悪をなす者のつどいをにくみ＝ 悪しき者とともにすわらじ
六 われ手を洗いて罪なきを示さん＝ かくて主よ、我なんじの祭壇をめぐり
七 感謝のうたを高らかにうたい＝ なんじのくすしきみわざを、ことごとく宣べつ
たえん
八 主よ、我なんじのいます家をしたい＝ なんじが栄光のとどまる所をいつくしむ
九 願わくは我を罪びととともに捨てず＝ わが命を血を流す者とともに取り去りた
もうなかれ
一〇 かかる人の手には悪しきくわだてあり＝その右の手はまいないにて満つ
一一 されど我はわが全きによりて歩まん＝ 願わくは我をあがない、我をあわれみた
まえ
一二 わが足は平らかなるところに立つ＝ われ大いなるつどいにて主をほめまつらん

五日晩祷

第二十七篇

一　主はわが光、わが救いなり、我たれをかおそれん＝　主はわが命のとりでなり、
　わが恐るべき者はたれぞや
二　悪しき者、わが敵、わがあだおそいきたりて我をそしるとき＝　彼らはつまずき
　かつ倒れん
三　たといいくさびと営をつらねて我を攻むるとも、わが心おそれじ＝　たとい戦い
　起こりて我を攻むるとも我になおたのみあり
四　われかつて一つの事を主にこえり＝　我なおこれをもとむべし
　願わくは世にあらん限りは主の家にすみ＝　主のうるわしきを仰ぎ、その宮にて
　主にまみえんことを
五　主は悩みの日にその仮り宮のうちに我を潜ませ、その幕屋の奥にわれをかくし＝
　岩の上に我を高く置きたまわん
六　今わがこうべは我をめぐれるあだの上に高くあげらるべし＝　このゆえにわれ主
　の幕屋にて喜びのいけにえをささげ、歌をもて主をほめたたえん
七　主よ、われ声をあげてさけぶ時ききたまえ＝　またあわれみて我にこたえたまえ
八　「なんじらわが顔をたずね求めよ」とのたまえるとき、わが心なんじに言えり＝
　「主よ、われなんじの御顔をたずねもとめん」と
九　願わくは御顔をかくしたもうなかれ＝　怒りてなんじのしもべを遠ざけたもうな
　かれ
　なんじはわがたすけなり＝　わが救いの神よ、われを追いいだし我を捨てたもう
　なかれ
一〇　わが父母われをすてたり＝　されど主は我をむかえたまわん
一一　主よ、なんじの道を我におしえ我を平らかなる道にみちびきたまえ＝　われに敵
　する者おおければなり
一二　偽りのあかしをなすもの暴言を吐くもの、我に逆らいて起こりたてり＝　願わく
　は我をあだに渡してその心のままになさしめたもうなかれ
一三　われ生ける者の地にて＝　主のいつくしみを見んことを信ず
一四　主を待ち望め、雄々しかれ、なんじの心をかとうせよ＝　必ずや主を待ちのぞめ

第二十八篇

一　ああ主よ、我なんじを呼ばん、わが岩よ、願わくは我に向かいて默したもうなかれ＝　なんじ默したまわば、おそらくはわれ墓に下るものと等しからん
二　我なんじに向かいて叫ぶとき、わが願いの声をききたまえ＝　至聖所に向かいて手をあぐるとき聞きたまえ
三　よこしまなる人また悪を行のう者とともに我を取り去りたもうなかれ＝　彼らはその隣とやわらぎを語れども、心にはそこないをいだけり
四　そのわざに従い、そのなす悪に従いて彼らにむくいたまえ＝　その手のわざに従いて報い、その受くべきものをあたえたまえ
五　彼らは主のもろもろのみわざ、その御手のわざをかえりみず＝　このゆえに主かれらを打ち倒して建てたもうことなからん
六　主はほむべきかな＝　わが祈りの声をききたまえり
七　主はわが力、わが盾なり＝　わがこころ主に寄りたのめり
八　われ助けを得たればわが心いたくよろこぶ＝　われ歌をもて主をほめまつらん
九　主はその民のちからなり＝　その油そそがれし者の救いの城なり
願わくは主の民を救い、主のゆずりをさきわいたまえ＝　彼らを養いてとこしえにいだきたすけたまえ

第二十九篇

一　神の子らよ、主にささげまつれ＝　栄えと力とを主にささげまつれ
二　御名にふさわしき栄光を主にささげまつれ＝　清き装いもて主をおがみまつれ
三　主の御声は水のうえにあり＝　栄光の神いかずちをとどろかせ、主大水の上にとどろかせたもう
四　主の御声はちからあり＝　主の御声はみいつあり
五　主の御声は香柏を折りくだく＝　主レバノンの香柏を折りくだきたもう
六　主レバノンを子牛のごとく踊らせ＝　シリオンを若き野牛のごとく踊らせたもう
七　主の御声はいなずまをひらめかす＝　主の御声は野を震わせ、主カデシの野を震わせたもう
八　主の御声はかしの木を吹き上げ、また林をはだかにす＝　その宮にあるすべてのものの呼ばわりて言う、「栄光なるかな」と

一〇 主は洪水のうえに座したもう＝　主はみくらに座してとこしえに王なり
一一 主よ、御民に力をあたえたまえ＝　平安をもてその民をさきわいたまえ

六日早祷

第三十篇

一 主よ、我なんじをあがめん、なんじ我を起こしたまえり＝　なんじはわがあだの、わがことによりて喜ぶをゆるしたまわざりき
二 わが神・主よ、我なんじに呼ばわれり＝　なんじ我をいやしたまえり
三 主よ、なんじわが魂をよみよりあげたまえり＝　われを生き返らせて墓に下らせたまわざりき
四 主の聖徒よ、主をほめうたいまつれ＝　その聖なる御名に感謝せよ
五 その怒りはただしばしにて、その恵みは命とともにながし＝　夜はよもすがら泣き悲しむとも、あしたにはよろこびうたわん
六 われ安らかなりし時に言えり＝　「我はとこしえに動かさるることなからん」と
七 主よ、なんじ恵みをもて我を山のごとく堅く立たせたまえり＝　なんじ御顔を隠したまいたれば、我おじまどいたり
八 主よ、我なんじに呼ばわれり＝　我ひたすら主にねがえり
九 「われ墓に下らばわが死、何の益あらん＝　ちりはなんじをほめたたえんや、なんじのまことを宣べつたえんや
一〇 主よ聞きたまえ、我をあわれみたまえ＝　主よ、願わくはわが助けとなりたまえ」と
一一 なんじわが嘆きを踊りにかえ＝　わが荒布を解き、よろこびをもてわが帯としたまえり
一二 わが魂は主をほめうたいて黙することなからん＝　わが神・主よ、我とこしえになんじに感謝せん

第三十一篇

一 主よ、我なんじに寄り頼む、願わくはとこしえに恥なからしめたまえ＝　なんじの義をもて我をたすけたまえ

二　なんじの耳をかたむけ、すみやかに我を救いたまえ＝　願わくはわが寄り頼む岩
　となり、われを救う堅固なる城となりたまえ
三　げに、なんじはわが岩わが城なり＝　御名のために我をみちびきたまえ
四　願わくはひそかに設けられたる網より、我を引きいだしたまえ＝　そはなんじは
　わが避けどころなればなり
五　わが魂をなんじの御手にゆだぬ＝　主よ、まことの神よ、なんじは我をあがない
　たまえり
六　なんじはむなしき偶像に心を寄する者を憎みたもう＝　我はただ主に寄りたのむ
七　我はなんじのいつくしみを喜びたのしまん＝　なんじわが苦しみをかえりみ、わ
　が悩みを御心にとめたまえり
八　なんじ我をあだの手に渡したまわず＝　わが足を広き所に立たせたまえり
九　われ迫り苦しめり、主よわれをあわれみたまえ＝　わが目は憂いによりて衰え、
　身も魂もおとろえぬ
一〇　わが命は悲しみによりて消えゆき、わが年は嘆きによりて過ぎ去れり＝　わが力
　は苦しみによりて衰え、わが骨は枯れはてたり
一一　我もろもろのあだにそしられ、隣人はわれをおそる＝　相知る者には忌みはばか
　られ、町にて我を見る者は避けてのがる
一二　我は死にたる者のごとく、人の心に忘れられ＝　破れたる器物のごとくなれり
一三　げに我は多くの人のそしりを聞き、至る所におそれあり＝　彼ら我に逆らいてと
　もに図り、わが命を取らんとたくらむなり
一四　されど主よ、我なんじに寄りたのむ＝　われ言えり、「なんじはわが神なり」と
一五　わが時はすべてなんじの御手にあり＝　願わくは我をあだの手より、また我に追
　い迫る者より助けいだしたまえ
一六　なんじのしもべの上に御顔の光をかがやかせ＝　なんじのいつくしみをもて我を
　すくいたまえ
一七　主よ、我に恥を負わしめたもうなかれ、そは我なんじをよべばなり＝　願わくは
　悪しき者に恥を受けしめ、口をつぐみてよみに行かしめたまえ
一八　偽りのくちびるをつぐましめたまえ＝　彼らは高ぶりと侮りをもてみだりに正し

き者をののしればなり

一九　なんじを恐るる者のために蓄えたまえるいつくしみは大いなるかな＝　なんじに寄り頼む者のために人の子の前にて施したまえるいつくしみは大いなるかな

二〇　なんじ彼らを御前のひそかなる所に隠して、人のはかりごとよりまぬかれしめ＝　仮り宮のうちにひそませて、舌の争いを避けしめたもう

二一　主はほむべきかな＝　敵に囲まれし町におるごとくわが悩まされしとき、主はくすしき愛をわれに現わしたまえり

二二　われ驚きあわてしとき言えり、「我はなんじの目の前より追われたり」と＝　されど我、なんじに呼び求めしに、なんじわが願いをききたまえり

二三　なんじらもろもろの聖徒よ、主をいつくしめ＝　主はまことある者を守り、高ぶる者にきびしく報いたもう

二四　主を待ちのぞむ者よ、雄々しかれ＝　なんじらみな心をつよくせよ

六日晩祷

第三十二篇

一　そのとがを赦されたる者は幸いなり＝

二　主によりて不義を負わせられざる者は幸いなり＝　その罪をおおわれたる者は幸いなり

三　われ罪を言いあらわさざりし時、わが身は疲れおとろえたり＝　我ひねもすうめき苦しみたればなり

四　なんじの御手は昼も夜もわが上にありて重し＝　わが力は夏のひでりに会いしごとく、かわきおとろえたり

五　われ御前にてわが罪をみとめ＝　わが不義をおおわざりき　われ言えり、「わがとがを主に言いあらわさん」と＝　かくてなんじわが犯せる罪をゆるしたまえり

六　されば神を敬う者は皆なんじにいのるべし＝　大水あふれ流るる悩みの時も、彼らの身におよばじ

七　なんじはわが隠れがなり＝　なんじわが悩むときわれを守り、救いをもて我をかこみたまわん

八　我なんじを教え、なんじを行くべき道にみちびき＝　わが目をなんじに留めてさとさん

九　なんじわきまえなき馬のごとく、うさぎ馬のごとくなるなかれ＝　彼らはくつわたづなのごとき具をもて引きとめずば、従いきたることなし

一〇　悪しき者は悲しみおおし＝　されど主に寄り頼む者はいつくしみにてかこまれん

一一　正しき者よ、主をよろこび楽しめ＝　すべて心の直き者よ、喜びよばわるべし

第三十三篇

一　正しき者よ、主によりてよろこべ＝　賛美は直き者にふさわしきなり

二　琴をもて主を賛美せよ＝　十弦の琴をもて主をほめうたえ

三　新しき歌を主に向かいてうたい＝　喜びの声をあげて、たくみに琴をかきならせ

四　主の御言葉はなおし＝　その行ないたもうところまことなり

五　主は義と公平とをこのみたもう＝　主のいつくしみはあまねく地にみつ

六　もろもろの天は主の御言葉によりて成り＝　天の万軍は主の口の息によりて造られたり

七　主はかめの中に集むるごとく海の水をあつめ＝　深き淵を倉におさめたまえり

八　全地は主をおそるべし＝　世に住めるもろもろの人は主を恐れかしこむべし

九　主いいたまえばその事成り＝　仰せたまえばその事さだまれり

一〇　主はもろもろの国のはかりごとをむなしくし＝　もろもろの民の企てをくじきたもう

一一　主のはかりごとはとこしえに立ち＝　その御心の思いは世々にいたる

一二　主をおのが神とする国はさいわいなり＝　主の嗣業に選ばれたる民はさいわいなり

一三　主は天より見おろし＝　すべての人の子らを見たもう

一四　そのいます所よりのぞみ＝　地に住むもろもろの人をみそなわしたもう

一五　主はすべて彼らの心をつくり＝　そのなすことをことごとくかんがみたもう

一六　王者はいくさびと多きをもて救いをえず＝　勇士ちから大いなるをもて助けをえざるなり

一七　馬は勝利に益なく＝　その大いなる力も人を助くることなからん

一六　見よ、主の目は主をおそるる者の上にあり＝　そのいつくしみをのぞむ者の上にあり

一七　こは主かれらの魂を死よりすくい＝　ききんの時にも彼らをながらえしめたまわんがためなり

一八　我らの魂は主を待ちのぞむ＝　主はわれらの助け、われらの盾なり

一九　我らは聖なる御名に寄り頼めり＝　われらの心は主にありてよろこばん

二〇　主よ、我らなんじを待ちのぞめり＝　願わくはいつくしみを我らにくだしたまえ

第三十四篇

一　われ常に主をほめまつらん＝　主をたとうる言葉はわが口にたえじ

二　わが魂は主によりてほこらん＝　苦しめる者よ、聞きてよろこべ

三　我とともに主をあがめよ＝　我らともに御名をたたえまつらん

四　われ主を尋ねたれば主われにこたえ＝　もろもろの恐れより助けいだしたまえり

五　主を仰ぎ見て光をえよ＝　さらばなんじらの顔は恥じ赤らむことなし

六　この苦しむ者叫びたれば主これをきき＝　すべての悩みより救いいだしたまえり

七　主の使いは主を恐るる者のまわりにあり＝　営をつらねてこれをたすく

八　なんじら主の恵みふかきを味わい知れ＝　主に寄り頼む者は幸いなり

九　主の聖徒よ、主をおそれよ＝　主を恐るる者には乏しきことなし

一〇　若きししは乏しくして飢うることあり＝　されど主をたずぬる者は良きものに欠くることなし

一一　子らよ、きたりて我にきけ＝　主を恐るべきことをなんじらに教えん

一二　命を慕う者はたれなるか＝　幸いを見んとて命ながきを好む者はたれなるか

一三　なんじの舌をおさえて悪につかしめず＝　なんじのくちびるをおさえて偽りを言わざらしめよ

一四　悪を離れて善をおこない＝　やわらぎを求め、せつに追いもとめよ

一五　主の目は正しき者をかえりみ＝　その耳は彼らの叫びにかたむく

一六　主の御顔は悪をなす者にむかい＝　その跡を地より断ちほろぼしたもう

一七　正しきもの叫びたれば主これをきき＝　そのすべての悩みより助けいだしたもう

一八　主は心のいたみ悲しめる者にちかくいまし＝　魂の悔いくずおれたる者をすくい

たもう

一九　正しき者はなやみおおし＝　されど主はすべてその中より助けいだしたもう

二〇　主は彼のすべての骨を守りたもう＝　その一つだに折らるることなし

二一　悪は悪しき者をころさん＝　正しき人をにくむ者は罪せらるべし

二二　主はそのしもべらの魂をあがないたもう＝　主に寄り頼む者はひとりだに罪せらるることなからん

七日早祷

第三十五篇

一　主よ、願わくは我と争う者とあらそい＝　われと戦う者とたたかいたまえ

二　盾と大盾とをとり＝　わが助けに立ちいでたまえ

三　やりと投げやりをとりて我に追い迫るものの道をふさぎ＝　我に向かいて「我はなんじの救いなり」と言いたまえ

四　わが命を求むるもの恥を得ていやしめられ＝　我をそこなわんと計るもの退けられて、あわてふためかんことを

五　彼らは風の前のもみがらのごとく＝　主の御使いによりて追いやられんことを

六　彼らの道は暗くかつすべらかになり＝　主の御使いによりて追われんことを

七　彼らはゆえなく我を捕えんとてひそかに網をふせ＝　われを滅ぼさんとて穴をほりたり

八　願わくは思いよらぬ間に彼らのほろびきたり＝　おのがふせたる網に捕えられ、みずから穴に落ちいりて滅びんことを

九　かくてわが魂は主によりてよろこび＝　その救いをよろこばん

一〇　わがすべての骨は言わん＝　「主よ、たれかなんじにたぐうべき者あらんや　なんじは弱き者を力強きものよりすくい＝　苦しむ者、貧しき者をかすめ奪う者より助けいだしたもう」と

一一　こころ悪しきあかしびと起こり＝　わが知らざることをなじり問う

一二　彼らは悪をもてわが善にむくい＝　わが魂をよるべなきものとせり

一三　されど我かれらが病みしときに荒布をつけ、食を断ちてわが身を苦しめたり＝

我はこうべを深くたれていのれり
一四　こはわが友わが兄弟になせるにことならず＝　母の喪にありて嘆くがごとく悲しみうなだれてあゆめり
一五　されど彼らはわが倒れんとせしとき喜びつどい＝　わが知らざる悪しきもの集まりきたり、われを責めてやまざりき
一六　彼らはいよいよ汚れし言葉にてあざけり＝　我に向かいて歯をかみならせり
一七　主よ、いつまでいたずらに見すごしたもうや＝　願わくはわれを彼らの暴逆より救い、わが命を若きししよりまぬかれしめたまえ
一八　われ大いなるつどいにてなんじに感謝し＝　多くの民の中にてなんじをほめたたえん
一九　偽りて我にあだする者のわがゆえに喜ぶことを許したもうなかれ＝　ゆえなくして我をにくむ者のたがいに目くばせすることなからしめたまえ
二〇　彼らは平和をかたらず＝　欺きの言葉をつくり、国のうちに穏やかに住もう者をそこなわんとはかる

二一　彼らわれに向かいて口をあけひろげ＝　「見よや見よや、われらの目これを見たり」と言えり
二二　主よ、なんじすでにこれを見たまえり、願わくは默したもうなかれ＝　主よ、我に遠ざかりたもうなかれ
二三　わが神よ、わが主よ、起きたまえ、醒めたまえ＝　願わくはわがために裁きをなし、わが訴えをいれたまえ
二四　主よ、わが神よ、なんじの義にしたがいて我をさばきたまえ＝　わがことにより、彼らに喜びを得しめたもうなかれ
二五　彼らに心のうちにて、「見よ、これわが願いしところなり」と言わしめたもうなかれ＝　「我かれを飲み尽くせり」と言わしめたもうなかれ
二六　願わくはわが災いを喜ぶもの、恥じてあわてふためき＝　我に向かいて誇りがに高ぶる者、恥とはずかしめをこうむらんことを
二七　わが義とせらるるを望む者をば喜びうたわしめ＝　「主は大いなるかな、そのしもべの幸いを喜びたもう」と、つねに言わしめたまえ

二六　かくてわが舌はなんじの義をかたり＝　ひねもす、なんじの誉れを宣べん

第三十六篇

一　悪しきものの心のうちに罪はかたりて言う＝　「わが目には神を恐るるのおそれなし」と

二　彼は心のままに、みずからおもねりて言う＝　「わがよこしま現わるることなく、憎まるることなからん」と

三　その口の言葉はよこしまなり、いつわりなり＝　知恵を軽んじ善を行のうことをやめたり

四　彼はその伏しどにて、よこしまなることをはかり＝　良からぬ道に立ちとどまりて悪をきらわず

五　主よ、なんじのいつくしみは天にいたり＝　なんじのまことは雲にまでおよぶ

六　なんじの正しきは神の山のごとく、なんじのさばきは大いなる淵のごとし＝　主よ、なんじは人と獣とを救いたもう

七　神よ、なんじのいつくしみはとうときかな＝　人の子はなんじの翼のかげに避けどころをうるなり

八　彼らはなんじの家の豊かなるによりて飽くことをえん＝　なんじはその喜びの川の水を彼らに飲ましめたもう

九　そは命の泉はなんじにあり＝　我らはなんじの光によりてひかりを見ん

一〇　願わくはなんじを知る者に絶えずいつくしみをほどこし＝　心なおき者に絶えず救いをほどこしたまえ

一一　願わくは高ぶる者の足われを踏みみ＝　悪しき者の手われを追い払うを許したもうなかれ

一二　よこしまを行のう者はかしこに倒れたり＝　彼ら打ち伏せられてまた立つことあたわず

七日晩祷

第三十七篇

一　悪をなす者のゆえに心をなやますなかれ＝　不義をおこのう者をねたむなかれ

二　彼らはやがて草のごとくおとろえ＝　青菜のごとく打ちしおるべし
三　主に寄り頼みて善をおこなえ＝　さらばなんじこの国に住みて安きをたのしまん
四　主によりてよろこべ＝　主はなんじの心の願いを許したまわん
五　なんじの道を主にゆだねよ＝　かれに寄り頼まばこれをなしとげたまわん
六　主は光のごとくなんじの義をあきらかにし＝　真昼のごとくなんじの正しきを明らかになしたまわん
七　なんじ主の御前にしずまり、耐え忍びて主を待ちのぞめ＝　おのが道を歩みて栄ゆるものと、悪しきはかりごとを遂ぐる人のゆえに心を悩むるなかれ
八　怒りをやめ、憤りをすてよ＝　心を悩むるなかれ、これ悪に至るのみなり
九　悪を行のう者は断ちほろぼされ＝　主を待ち望むものは国をつぐべし
一〇　悪しき者は久しからずしてうせ＝　なんじつぶさにその所を尋ぬるとも、おらざるべし
一一　されど柔和なる者は国をつぎ＝　豊かに栄えてたのしまん
一二　悪しき者は正しき者に逆らいてはかりごとをめぐらし＝　これに向かいて歯がみせり
一三　されど主は悪しき者を笑いたもう＝　彼の日きたるを見たまえばなり
一四　悪しき者は剣をぬき、弓をはりて＝　貧しき者と乏しき者とを倒し、直く歩む者をころさんとす
一五　されどその剣はおのが胸をさし＝　その弓は折らるべし
一六　正しき人の持てる物、よし少なくとも＝　多くの悪しき者の豊かなるにまされり
一七　悪しき者の腕は折らるべし＝　されど主は正しき者を助けささえたもう
一八　主は全き者のもろもろの日を知りたもう＝　彼らの嗣業はとこしえにいたらん
一九　かれら災いに会うとき恥をこうむらず＝　ききんの時にも飽くことを得ん
二〇　悪しき者はほろび＝　主のあだは牧場の栄えの枯るるごとくうせ、煙のごとく消えゆくなり
二一　悪しき者はもの借りてかえすあたわず＝　正しき者はめぐみあり、かつほどこしあとう
二二　神の祝したもう人は国をつぎ＝　神ののろいたもう人は断ちほろぼさるべし

三三　人の歩みは主によりてさだめらる＝　主は彼にその喜びたもう道をかたく歩ませたもう

三四　たといその人倒るることありとも、全く打ち伏せらるることなし＝　主かれの手を助けささえたまえばなり

三五　我むかし年若くして今老いたり＝　されど正しき者の捨てられ、あるいはその末の糧を請い歩くを見しことなし

三六　正しき者はつねに恵みあり、かつ貸しあとう＝　その子らはさいわいなり

三七　悪をはなれて善をなせ＝　さらばなんじとこしえにながらえん

三八　主は正義を愛し、その聖徒をすてたまわず＝　彼らはとこしえに守り助けられ、悪しき者の末は断ちほろぼさるべし

三九　正しき者は国をつぎ＝　その中に住まいてとこしえにおよばん

三〇　正しき者の口は知恵をかたり＝　その舌は正義をのぶ

三一　その心には神のおきてあり＝　その歩みはひと歩みだにすべることなし

三二　悪しき者は正しき者をうかがい＝　これを殺さんとはかる

三三　主は正しき者を悪しき者の手にゆだねたまわず＝　さばきの時にも罪に定めたもうことあらじ

三四　主を待ち望みてその道を守れ、さらばなんじを上げて国を継がせたもう＝　なんじ悪しき者の断ちほろぼさるるを見ん

三五　われ悪しき者の高ぶるを見たり＝　レバノンの香柏のそびえ立つがごとし

三六　されどわれ再びきたりしに、見よ、彼はおらざりき＝　我これを尋ねしかど見いだすことあたわざりき

三七　全き人に目をそそぎ、直き人を見よ＝　おだやかなる人には世つぎあり

三八　罪をおかす者はことごとくほろぼされ＝　悪しき者の子らは断たるべし

三九　正しき者の救いは主よりいず＝　主は彼らの悩みのときの避けどころなり

四〇　主は彼らを助け、彼らを解きはなちたもう＝　悪しき者より解きはなちて救いたもう、主をその避け所とすればなり

八日早祷

第三十八篇

一 主よ、願わくは憤りをもて我を責めたもうなかれ＝ 激しき怒りをもて我を懲らしめたもうなかれ

二 なんじの矢われにあたり＝ なんじの御手いたく我をおさえたり

三 なんじの怒りによりてわが肉には全きところなく＝ わが罪によりてわが骨には健やかなるところなし

四 わが不義はわがこうべをすぎて高く＝ 重荷のごとく負いがたし

五 わが傷悪しきにおいを放ちて腐れただれたり＝ わが愚かなるによりてなり

六 われ折れかがみていたくうなだれたり＝ 我ひねもす悲しみあるく

七 わが腰はことごとく焼くるがごとく＝ わが肉に全きところなし

八 われ衰え果てていたく打ちくだかれ＝ 心の激しき騒ぎによりてうめきさけぶなし

九 主よ、わがすべての願いはなんじに知られ＝ わが嘆きはなんじに隠るることなし

一〇 わが胸はいたく騒ぎ、わが力はおとろえ＝ わが眼の光もまたわれを離れたり

一一 わが友、わが親しめる者はわが災いを見て遠ざかり＝ わがはらからもまたはるかに立てり

一二 わが命を求むる者はわなをもうけ＝ 我をそこなわんとする者は滅ぼすことを語り、またひねもす図りてあざむかんとす

一三 されど我は耳しいのごとくきかず＝ 口を開かぬおしのごとし

一四 げに我は聞かざる人のごとく＝ そしりを口にせぬ人のごとし

一五 主よ、我なんじを待ちのぞむ＝ 主・わが神よ、なんじかならず答えたもうべし

一六 われは祈る、「願わくは彼らわがことによりてよろこぶことなく＝ わが足のすべらんとき、我に向かいて誇ることなからしめたまえ」と

一七 われ倒るるばかりになりぬ＝ わが苦しみはたえずわが前にあり

一八 我みずから不義をいいあらわし＝ わが罪のためにかなしまん

一九 ゆえなくして我に敵するもの力たけく＝ ゆえなく我をにくむ者おおし

二〇 悪をもて善に報ゆる者わがあだとなれり＝ われ良き事にしたごうゆえなり

二一 主よ、願わくは我を捨てたもうなかれ＝ わが神よ、われに遠ざかりたもうな

かれ

三　わが主、わが救いよ＝　とくきたりて我を助けたまえ

第三十九篇

一　われ言えり、「われ舌をもて罪を犯さざらんために、わが道をつつしみ＝　悪しき
者のわが前におる間はわが口にくつわをかけん」と
二　われ默して語らず、わが口を堅くとざせり＝　されどわが悩みなおつのれり
三　わが心わがうちに熱くなり、思いつづくるほどに火もえたり＝　かくてわれ舌を
もて言えり
四　「主よ、願わくはわが終わりとわが日の数とを知らしめたまえ＝　わが命のはか
なきを知らしめたまえ
五　見よ、なんじわがすべての日をつかのまに過ぎ去らしめたもう＝　わがいのち御
前にては、なきにひとし
六　げにすべての人はむなし＝　人の世にあるは影にことならず
彼らのさわぎ立つはむなし＝　その積みたくわえしもの、たれの手におさまるを
しらず
七　主よ、われ今なにをか待たん＝　わが望みはなんじにあり
八　願わくはわがすべてのとがより我を助けいだしたまえ＝　愚かなる者にそしらる
ることなからしめたまえ
九　われは默して口を開かず＝　そは、なんじかくなさしめたまえばなり
一〇　願わくはなんじの下したまえる災いを取り去りたまえ＝　われなんじの御手にう
ち懲らさるるによりて滅ぶるばかりなり
一一　なんじ罪を責めて人を懲らし、その慕い喜ぶものを、しみの食ろうごとく消えう
せしめたもう＝　げにすべての人はむなし
一二　主よ、願わくはわが祈りをきき、わが叫びに耳をかたむけたまえ＝　わが涙を見
て默したもうなかれ
一三　我はなんじに身を寄する旅びとなり＝　わがすべての先祖のごとく宿れる者なり
我ここを去りてうせんとす＝　願わくは　見すぐして　我をさわやかならしめたま
え」

第四十篇

一 われ耐えしのびて主を待ちのぞみたり＝
まえり　主は耳をかたむけてわが叫びを聞きた

二 主われを滅びの穴と泥沼よりとりいだし＝
かたくしたまえり　わが足を岩の上におき、わが歩みを

三 主は新しき歌をわが口におき、我らの神に賛美をささげしめたもう＝　多くの人
はこれを見て恐れ、かつ主に寄りたのまん

四 主をおのが頼みとする人はさいわいなり＝　高ぶる者にたよらず、迷いいでて偽
りの神に従う者に、たよらざる人はさいわいなり

五 わが神・主よ、なんじのなしたまえるくすしきみわざと我らのための御思いはい
と多し＝　げになんじにたぐうべきものなし
我はこれを宣べ伝えんとすれども＝　かぞえ尽くすことあたわず

六 なんじはいけにえと供え物を喜びたまわず、わが耳を開きたまえり＝　なんじ
は燔祭と罪祭を求めたまわず

七 その時われ言えり、「見よ、われ行かん＝
わが神よ、われは御心に従うことをたのしむ＝　なんじの律法はわが心のうちに
あり」と

九 われ大いなるつどいにて救いの喜ばしきおとずれを語れり＝　見よ、我くちびる
を閉じず、主よなんじこれを知りたもう

一〇 我なんじの救いをわが心のうちに秘めおかず、なんじの真実と救いを宣べつたえ
たり＝　我なんじのいつくしみとまことを大いなるつどいにてかくさざりき

一一 主よ、なんじのあわれみを我に惜しみたもうなかれ＝　いつくしみとまことをも
て常に我をまもりたまえ

一二 かぞえがたき災い我をかこみ＝　わが不義われに追い迫り、もの見ることあたわ
ぬまでになりぬ
わが罪の多きことわがかしらの毛にもまさり＝　わが心消えうするばかりなり

一三 主よ、願わくはわれを救いたまえ＝　主よ、とくきたりて我をたすけたまえ

一四 願わくはわが命をたずね滅ぼさんとする者みな恥じあわてんことを＝　わがそこ

なわるるを喜ぶもの皆うしろに退きて恥をおわんことを

一五 願わくは我に向かいて、「見よや、見よや」という者おどろき＝ おのが恥によりておののかんことを

一六 願わくはなんじを尋ね求むるもの、皆なんじによりて楽しみ喜ばんことを＝ なんじの救いを慕うもの、常に「主は大いなるかな」ととなえんことを

一七 我は貧しくかつともし＝ されど主われをかえりみたもう

なんじはわが助けなり、我を救いたもう者なり＝ ああわが神よ、願わくはためらいたもうなかれ

八日晩祷

第四十一篇

一 貧しき者をかえりみる人はさいわいなり＝ 主かかる者をわざわいの日にたすけたまわん

二 主これを守り、これをながらえしめたまわん、彼はこの地にありて幸いなる者となえらる＝ なんじ彼をあだの心のままになさせたまわず

三 主は彼が病の床にあるときこれをたすけ＝ わずろう時、その病をことごとくいやしたまわん

四 われ言えり、「主よ、あわれみて我をいやしたまえ＝ 我なんじに向かいて罪を犯したり」と

五 わがあだ我をそしりて言う＝ 「彼いずれのときに死に、いずれのときにその名ほろびん」と

六 彼また我を見んとてきたるとき、偽りをかたり＝ よこしまをその心に蓄らせ、そとにいでてはこれを述ぶ

七 すべて我をにくむ者たがいにささやき＝ わがために災いを思いめぐらす

八 彼ら言う、「大いなる災い彼につきまといたり＝ かれ倒れ伏してふたたび立つことなからん」と

九 わが頼みとせし者わが糧をくらいし親しき友さえも＝ 我にそむきてそのくびすをあげたり

一〇 主よ、願わくは我をあわれみたまえ＝　われを起こして彼らに報ゆることを得さ
せたまえ
一一 わがあだ我に打ち勝ちしことなし＝　これによりてわれ知る、なんじ我をいつく
しみたもうことを
一二 なんじわが全きによりて我をささえ＝　我をとこしえに御前におきたもう
一三 イスラエルの神・主はほむべきかな＝　とこしえよりとこしえまでほむべきかな
アーメン、アーメン

第四十二篇

一 神よ、しかの谷川を慕いあえぐがごとく＝　わが魂もなんじを慕いあえぐなり
二 わが魂はかわけるごとくに神を慕う、生ける神をぞしとう＝　いずれの時にか我
ゆきて御顔をあおがん
三 彼ら絶え間なくわれに向かいて、「なんじの神はいずこにありや」と言う＝　我
はただ涙のみ夜昼そそぎてわが糧とせり
四 我むかし群れをなして祝いの日を守る多くの人とともにゆき＝　喜びと賛美の声
をあげて、彼らを神の家にともないたり
五 われ今これらのことを思いおこし＝　わがうちより魂を注ぎいだすなり
わが魂よ、なんじなんぞうなだるるや＝　わがうちに思いみだるるや
なんじ神を待ちのぞめ＝　我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり
六 わが魂はわがうちにうなだる＝　されば我はヨルダンの地、またヘルモンの地、
ミサルの山よりなんじをおもいいず
七 なんじの大滝のひびきによりて淵々よびこたえ＝　なんじの波、なんじの大波こ
とごとくわが上をこえゆけり
八 されど昼は主そのいつくしみを施したまわん＝　夜は主の歌われとともにあり、
これわが命の神にささぐるいのりなり
九 我わが岩なる神に言わん、「なんじなんぞ我を忘れたまいしや＝　我なんぞあだ
のしいたげによりて悲しみゆくや」と
一〇 わが身はいたく傷つけられ、わが敵われをののしれり＝　彼ら絶え間なく我に向
かいて言う、「なんじの神はいずこにありや」と

二　わが魂よ、なんじなんぞうなだるるや＝　なんぞわがうちに思いみだるるや
三　なんじ神を待ちのぞめ＝　我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり

第四十三篇

一　神よ、願わくは我をさばき、神を恐れざる民に向かいてわが訴えを守りたまえ＝
　偽り多きよこしまなる人より我を助けいだしたまえ
二　なんじはわが寄り頼む神なり、なんぞ我を捨てたまいしや＝　我なんぞあだのし
　いたげによりてかなしみゆくや
三　願わくはなんじの光となんじのまことを放ちて、我をみちびき＝　なんじの聖な
　る山とその幕屋とに行かしめたまえ
四　さらばわれ神の祭壇にゆき、またわが喜びよろこぶ神にゆかん＝　神よ、わが神
　よ、われ琴をもてなんじをほめたたえん
五　わが魂よ、なんじなんぞうなだるるや＝　なんぞわがうちに思いみだるるや
　なんじ神を待ちのぞめ＝　我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり

九日早祷

第四十四篇

一　神よ、なんじはむかし我らの先祖たちの日にみわざをなしたまえり＝　我らこれ
　を耳にきけり、先祖たちこれを我らに告げたりき
二　なんじ御手をもて国々の民を追いしりぞけ、我らの先祖たちを植え＝　もろもろ
　の民を悩まして我らの先祖たちをはびこらせたまえり
三　彼らはおのが剣によりて国を獲しにあらず＝　おのが腕によりて勝ちを得しにあ
　らず
　ただなんじの右の手、なんじの御腕、なんじの御顔の光によれり＝　そはなんじ
　彼らを恵みたまいたればなり
四　神よ、なんじはわが王なり＝　なんじの御定めによりてヤコブは勝ちをえたり
五　我らはなんじによりて敵をたおし＝　我らに逆らいて起こり立つ者を御名により
　て踏みにじるべし
六　そは我わが弓に寄りたのまず＝　わが剣もまた我を救うことあたわざればなり

七　なんじ我らを敵よりすくい＝　我らをにくむ者をまどわしめたまえり
八　我らはつねに神によりてほこれり＝　我らとこしえになんじの御名に感謝せん
九　されど今はなんじ我らを捨てて恥をおわせたまえり＝　我らのいくさびとと、ともにいでゆきたまわず
一〇　なんじ我らを敵の前より退かせたまえり＝　我らをにくむ者その心のままに我らをかすめうばえり
一一　なんじ我らをほふらるる羊のごとくし＝　我らを国々の民の中にちらしたまえり
一二　なんじ僅かなる価にてその民をうり＝　高き価を求めたまわざりき
一三　なんじ我らを隣人にそしらしめ＝　我らをめぐる者にあざけり侮らしめたまえり
一四　もろもろの国のなかに我らを笑いぐさとなし＝　もろもろの民のなかに笑いものとなしたまえり
一五　わがはずかしめ、ひねもすわが前にあり＝　わが恥わが顔をおおえり
一六　これ我をそしり我をののしる者のことばによれり＝　我にあだし、我に恨みを報ゆる者のゆえによれり
一七　これらのこと皆われらに臨めども、なおなんじを忘れず＝　我らなんじの契約にもとらざりき
一八　我らの心そむかず＝　我らの歩みなんじの道をはなれざりき
一九　されどなんじは山犬の住みかにて我らをきずつけ＝　暗やみをもて我らをおおいたまえり
二〇　我らもし我らの神の御名を忘れたらんには＝　あるいは我らの手をあだし神に伸べしことあらんには
二一　神はこれを見いだしたまわざらんや＝　神はこころの隠れたることをも知りたもうなり
二二　我らはひねもすなんじのために死にわたされ＝　ほふられんとする羊のごとくせられたり
二三　主よ、さめたまえ、いかなれば眠りたもうや＝　起きたまえ、我らをとこしえに捨てたもうなかれ
二四　いかなれば御顔をかくしたもうや＝　いかなれば我らがうくる悩みとしいたげと

を忘れたもうや
二五 我らの魂はかがみてちりに伏し＝ 我らの身は土につきたり
二六 願わくは起きて我らをたすけ＝ なんじのいつくしみのゆえをもてすくいたまえ

第四十五篇

一 わが心は麗わしきことにてあふる、我は王のために わが歌をよみいでん＝ わが
舌はすみやかに物書く人のふでなり
二 なんじは人の子らにまさりて麗わし、みやびそのくちびるにあふる＝ このゆえ
に神はとこしえになんじをさきわいたまえり
三 ますらおよ、その栄え、その威をもて＝ なんじの剣を腰におぶべし
四 なんじまことと正しきとのために威儀をもて勝ちて乗りすすめ＝ なんじの右の
手なんじに恐るべきことをおしえん
五 なんじの矢は鋭くして王のあだの胸をつらぬき＝ もろもろの民はなんじのもと
にたおる
六 神より賜わりしなんじの位はとこしえに立ち＝ 王のつえは公平のつえなり
七 なんじは義を愛し悪をにくむ＝ このゆえに神なんじの神は喜びの油をなんじの
友にまさりて、
八 なんじの衣にはみな没薬、蘆薈、肉桂のかおりあり＝ 琴の音は象牙の殿よりい
でてなんじをよろこばしむ
九 なんじの尊き女のうちには王たちのむすめあり＝ きさきはオフルのこがねを飾
りてなんじの右にたつ
一〇 娘よ、聞け、目を注げ、なんじの耳をかたむけよ＝ なんじの民となんじの父の
家をわすれよ
一一 さらば王はなんじの麗わしきをしたわん＝ 王はなんじの主なり、これを伏しお
がめ
一二 ツロの民は贈り物をもてきたり＝ 民のうちの富める者もまたなんじの恵みを請
いもとめん
一三 王の娘は殿のうちにて栄えかがやき＝ その衣は金をもておりなせり
一四 彼は色麗わしき衣を着て、王のもとにみちびかる＝ これに伴えるおとめもその

あとにしたがいゆかん

一三 彼らは喜びと楽しみとをもてみちびかれ＝
一六 なんじの子らは先祖たちに代わりて立ち＝
一七 我なんじの名をよろず代に知らしめん＝ ゆえにもろもろの民は世々限りなくなんじに感謝すべし

第四十六篇

一 神は我らの避け所なり、ちからなり＝ 悩めるときのいと近きたすけなり
二 さればたとい地は変わるとも＝ 山は海の真中にうつるとも
三 よしその水はあわだちて鳴りとどろき＝ その騒ぎによりて山はゆるぐとも我らはおそれじ
四 川あり、その流れ神の都をよろこばしむ
五 神その中にいませば都はうごかじ＝ 神は朝つとにこれをたすけたまわん
六 もろもろの国はさわぎ立ち、国々は揺りうごけり＝ 神その声をいだしたまえば地は溶けさる
七 万軍の主は我らとともにあり＝ ヤコブの神は我らの高きやぐらなり
八 きたりて主のみわざを見よ＝ 主は多くの恐るべきことを地になしたまえり
九 主は地のはてまでも戦いをやめしめ＝ 弓を折り、やりを断ち、いくさ車を火にて焼きたもう
一〇 「なんじら静まりて我の神たるを知れ＝ 我は国々のうちにあがめられ、全地にあがめらるべし」
一一 万軍の主は我らとともにあり＝ ヤコブの神は我らの高きやぐらなり

九日晩祷

第四十七篇

一 もろもろの民よ、手をうちならせ＝ 神に向かいて喜びの歌を高らかにうたえ
二 主はいと高し、またおそろし＝ 全地をしろしめす大いなる王にましませり
三 主はもろもろの民をわれらにしたがわせ＝ 国々を我らの足もとにまつろわせた

まえり

四　主はわれらのために嗣業を選びたまえり＝
　ほまれなり

五　神は喜びさけぶ声とともにのぼり＝　主はラッパの声とともにのぼりたまえり

六　ほめうたえ、神をほめうたえ＝　ほめうたえ、我らの王をほめうたえよ

七　神は全地の王なり＝　歌をもてほめたたえよ

八　神は国々の民を統べ治めたもう＝　神はその聖なる御座にすわりたもう

九　もろもろの民の君たちはつどいきたりて、アブラハムの神の民となれり＝　地のもろもろの盾は神のものなり、神はいとうときかな

第四十八篇

一　主は大いなり、いたくたたえられたもうべし＝　我らの神の都にてほめられたもうべし

二　主の聖なる山は高くうるわし、喜びを全地にあとう＝　北のはてなるシオンの山は大いなる王のみやこなり

三　そのもろもろのとりでのうちに神はおのれをあらわし＝　堅き守りとなりたまえり

四　見よ、王たちは相つどい＝　ともに進みきたれり

五　されど都を見ておどろき＝　恐れてたちまちのがれさりり

六　おののき彼らにのぞみ＝　その苦しみは子を産まんとする女のごとし

七　なんじは東風をおこし＝　タルシシの舟をやぶりたまえり

八　我らさきに聞きしことを、いま万軍の主の都われらの神の都にて見ることをえたり＝　神はこの都をとこしえに堅く立てたまわん

九　神よ、我らはなんじの宮につどい＝　そのうちにてみいつくしみをおもえり

一〇　神よ、なんじの誉れはその御名のごとく地のはてにまでおよべり＝　なんじの右の手は正しきにて満てり

一一　なんじのもろもろのさばきによりてシオンの山はよろこび＝　ユダの娘たちはたのしむべし

一二　シオンのまわりをあゆみ＝　あまねく巡りてそのやぐらをかぞえよ

三 その石がきに心をとめ、そのもろもろのとりでを見よ＝ なんじらこれを次の代
に語り伝えんためなり
一四 この神は世々限りなく我らの神なり＝ とこしえに我らをみちびきたまわん

第四十九篇

一 もろもろの民よ聞け＝ すべて地に住むもの耳をそばだてよ
二 卑しきものも尊きものも聞け＝ 富めるもの貧しき者もともにきくべし
三 わが口は知恵を語り＝ わが心はさときことをおもわん
四 われ耳をたとえにかたむけ＝ 琴をならしてわがなぞをときあかさん
五 悩みの日にも我いかでおそるべき＝ 追いせまる者の悪われを囲むとも、いかで
おそるべき
六 おのが富をたのむものも＝ 宝多きをほこるものも
七 たれひとりおのれをあがのうことあたわず＝ 命の価を神に払うことをえず
八 命をあがのうには価いと高し＝ これを払うことごとく払うことを得ざるなり
九 たれひとり、とこしえに生きながろうることあたわず＝ また墓に入らざるもの
なし
一〇 賢き者も死に、愚か者も、しれ者もひとしくほろび＝ その富をほかの人にのこ
すことは常に見るところなり
一一 彼らはその地におのが名をおわせたり＝ されど墓こそ彼らのとこしえの家、世
世の住みかなれ
一二 人は栄華のうちに長くとどまらず＝ 滅びうするけもののごとし
一三 これ愚かなることを心のたのみとする者の道なり＝ おのが分をよろこびとする
人のはてなり
一四 かれらは羊の群れのごとくに、よみのものとさだめられ＝ 死はこれが牧者とな
らん
彼らはただちに墓に下りて、その形きえうせ＝ 墓はかれらの家とならん
一五 されど神はわが魂をよみの力よりあがなうべければなり＝ そは神われを受けたもう
一六 なんじ人の富むときおそるるなかれ＝ その家のさかえ加わらんときおどろくな

かれ
一七 かれ死ぬるときは何ひとつ携え行くことあたわず＝ その栄えは彼に従いてよみ
に下ることあらじ
一八 かかる人は生きながろうるほどに、おのれを幸いと思えども＝ またみずからを
豊かにして、人にほめらるとも
一九 彼は先祖たちの世にゆかん＝ 絶えて光を見ざるべし
二〇 人は栄華のうちに長くとどまらず＝ 滅びうするけもののごとし

十日早祷

第五十篇

一 全能の神・主みことのりし＝ 日のいずる所より日の入る所まで、あまねく地を
よびたまえり
二 神は光をはなち＝ 麗わしきのきわみなるシオンよりはなちたまえり
三 我らの神はきたりて默したまわじ＝ 火その御前に物を焼きつくし、あらしその
まわりに吹きあれん
四 神はその民をさばかんために＝ 上なる天を呼び、また地をよびたまわん
五 「わが聖徒をわがもとにあつめよ＝ いけにえをもて我と契約を立てし者をあつ
めよ」と
六 もろもろの天は神の義をあらわさん＝ 神はみずからさばきびとなり
七 「わが民よ、聞け、我もの言わん、イスラエルよ、我なんじに向かいてあかしを
なさん＝ われは神・なんじの神なり
八 わがなんじを責むるはいけにえのゆえにあらず＝ なんじの燔祭はつねにわがま
えにあり
九 我はなんじの家より雄牛をとらず＝ なんじの囲いより雄やぎをとるまじ
一〇 林のもろもろの獣はわがものなり＝ よろずの岡の家畜もみなしかり
一一 われは空のすべての鳥をしる＝ 野の生き物も皆わがものなり
一二 たといわれ飢うるともなんじに告げじ＝ 世界とその中に満つるものはわがもの
なればなり

一三　われいかで雄牛の肉をくらい＝　いかで雄やぎの血を飲まんや
一四　感謝のいけにえを神にささげよ＝　なんじの誓いをいと高き者にはたせ
一五　悩みの日にわれをよべ＝　我なんじを救わん、なんじ我をあがむべし」
一六　されど神は悪しき者に言いたもう＝　「なんじ何のかかわりありて、わがおきてを述べ、わが契約を口にするや
一七　なんじは戒めをにくみ＝　わが言葉を捨てされり
一八　なんじ盗びとを見ればこれを友とし＝　姦淫を行のう者のなかまとなれり
一九　なんじその口を悪にわたし＝　なんじの舌は欺きを組み成せり
二〇　なんじ座して兄弟をそしり＝　おのが母の子をののしれり
二一　なんじこれらのことをなししをわれ黙しいたれば、なんじ我をおのれに似たるものと思えり＝　されど今われなんじを責めて、その罪をなんじの目の前につらぬべし
二二　神を忘るるものよ、今このことをおもえ＝　しからずば我なんじをかき裂かんとき助くるものあらじ

二三　感謝のいけにえをささぐる者は我をあがむ＝　おのれの行ないを慎む者には、われ神の救いをあらわさん」

第五十一篇

一　ああ神よ、願わくはなんじのいつくしみによりて我をあわれみ＝　なんじの豊かなるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消したまえ
二　わが不義をことごとくあらい去り＝　我をわが罪よりきよめたまえ
三　我はわがとがを知る＝　わが罪は常にわがまえにあり
四　我はひとえになんじに罪をおかし、御前に悪しきことをおこなえり＝　さればなんじの宣告はなんじの義をしめし、なんじのさばきはあやまりなし
五　見よ、我よこしまのうちに生まれ＝　わが母罪のうちにありて我をはらみたりき
六　なんじはわがうちにまことを求めたもう＝　さればわが心ふかく知恵を知らしめたまえ
七　ヒソプをもて我を清めたまえ、さらば我きよくならん＝　我を洗いたまえ、さらばわれ雪よりもしろくならん

八 願わくはわれに喜びと楽しみとをみたし＝ なんじが砕きし骨を喜ばせたまえ
九 願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝ わがすべての不義を消したまえ
一〇 神よ、わがために清き心をつくり＝ わがうちに直き霊をあらたに起こしたまえ
一一 われを御前より捨てたもうなかれ＝ なんじの きよき霊を我より取りたもうなかれ
一二 なんじの救いの喜びをわれにかえし＝ 自由の霊にて我をささえたまえ
一三 さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝ 罪びとはなんじに帰りきたるべし
一四 神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝ わが舌は声たからかになんじの救いをうたわん
一五 主よ、わがくちびるを開きたまえ＝ さらばわが口なんじの誉れをあらわさん
一六 なんじはいけにえを好みたまわず＝ たといわれ燔祭をささぐともなんじ喜びたまわず
一七 神の求めたもう供え物は砕けたる霊なり＝ 神よ、なんじは砕けたる悔いし心を軽しめたもうまじ
一八 願わくは御心に従いてシオンをさきわいずきたまえ
一九 その時なんじ正しきいけにえと燔祭と全き燔祭とを喜びたまわん＝ かくて人々なんじの祭壇に雄牛をささげん

第五十二篇

一 力ある者よ、なんじいかなれば、神を敬う人に災いを与えしことをほこるや＝ なんじはひねもす人を滅ぼさんとくわだつるなり
二 偽りを行のうものよ＝ なんじの舌は鋭きかみそりのごとし
三 なんじは善よりも悪をたしなみ＝ 正しきを言うよりも偽りを言うをこのむ
四 なんじはすべて滅ぼす言葉をこのむ＝ ああ、欺きの舌なるかな
五 されど神はとこしえになんじを砕き、なんじを捕えて幕屋より引きいだし＝ 生ける者の地よりなんじの根をたやしたまわん
六 正しき者はこれを見ておそれ＝ かつ彼を笑いて言わん

七　「神をおのが力となさざる人を見よ＝
おのが力となせり」と
八　されど我は神の家にある青きオリブの木のごとし＝　われは世々限りなく神のい
つくしみに寄りたのまん
九　なんじのみわざによりて我とこしえになんじに感謝し＝　神を敬う人の前にて御
名をのべ伝えん、これよろしきにかなえばなり

十日晩祷

第五十三篇

一　愚かなるものは心のうちに「神なし」と言えり＝　彼らは腐れたり、憎むべき悪
を行なえり、善をおこのう者なし
二　神は天より人の子をのぞみ＝　さとき者、神をたずぬる者ありやと見たまえり
三　みな離れ去りて、ことごとくけがれたり＝　善をなす者なし、ひとりだになし
四　悪を行のうものは悟りなきか＝　彼らはもの食うごとく、わが民をくらい、また
神を呼ぶことをせざるなり
五　見よ、彼らは、かつてなき大いなる恐れにとらわれたり。これ神、あしき者の骨
を散らしたもうゆえなり＝　神かれらを捨てたまいしによりて、かれらは恥をこ
うむらん
六　願わくはシオンよりイスラエルの救いのいでんことを＝　神その民をふたたび栄
えしめたもうとき、ヤコブは喜びイスラエルはたのしまん

第五十四篇

一　神よ、願わくは御名によりて我をすくい＝　御力をもてわがためにさばきを行な
いたまえ
二　神よ、わが祈りをききたまえ＝　わが口の言葉に耳をかたむけたまえ
三　高ぶる者は我に逆らいて起こりたち、あらぶる人はわが命をもとむ＝　彼らは神
をおのが前におかざるなり
四　見よ、神は我をたすくるものなり＝　主はわが命をまもる者なり
五　主はわがあだに災いをもて報いたまわん＝　なんじのまことによりて彼らを滅ぼ

したまえ

六　われ喜びていけにえをなんじにささげん＝
　ろしきにかなえばなり
七　主はすべての悩みより我を救い＝　わが目にあだの破るるを見させたまえり

第五十五篇

一　神よ、わが祈りに耳を傾けたまえ＝　わが願いを避けて身を隠したもうなかれ
二　我に御心をとめ、我にこたえたまえ＝　われ悩みによりてつかれはてたり
三　我あだの声と悪しき者のしいたげによりていたく悩めり＝　彼ら災いをもて我に
　迫り、憤りて我をせむるなり
四　わが心わがうちに憂いいたみ＝　死の恐れわれにせまれり
五　恐れとおののき我にのぞみ＝　はなはだしき恐れわれをおおえり
六　われ言う、「願わくは、はとのごとく翼あらんことを＝　さればわれ飛び去りて
　安きをえん
七　見よ、我はるかにのがれ去りて野に住まん＝　我すみやかに、はやてとあらしを

　のがれん」と
九　われ都のうちにあらびと争いをみたり＝　主よ、願わくは彼らを滅ぼし、その言
　葉をみだしたまえ
一〇　彼らは昼も夜も石がきの上を歩きて町をめぐる＝　町のうちにはよこしまと悪し
　きくわだてあり
一一　滅びそのうちにあり＝　しいたげと欺きその広場を離るることなし
一二　我をそしる者はわがあだにあらず＝　もししからば、我これを忍びうるなり
一三　われに向かいて高ぶる者はわが敵たりし者にあらず＝　もししからば、われ身を
　隠して彼を避けしならん
一四　されどこれなんじなり、我と等しきものなり＝　わが友、われと親しきものなり
一五　われらたがいに親しき語らいをなし＝　またともに神の家のうちを歩みたりき
　死かれらに臨み、彼ら生けるままにてよみに下らんことを＝　恐れをもて墓に去
　り行かんことを
一六　されど我は神をよばん＝　主はわれを救いたもうべし

一七　夕べに、あしたに、昼にわれ嘆きうめかん＝　主はわが声をききたもうべし
一八　主はわが戦うとき我を救いいだして、安きを得しめたまわん＝　そは我を攻むる
　　もの多ければなり
一九　神は聞きたまわん、昔より御位に座したもう者は彼らを低くしたまわん＝　彼ら
　　は律法を守らず、神を恐れざればなり
二〇　わが友はその親しき者に手向かい＝　おのが契約をやぶりたり
二一　その言葉は乳のあぶらよりなめらかなれど、その心はたたかいなり＝　その語る
　　ことは油にまさりてやわらかなれども、抜きたる剣にことならず
二二　なんじの重荷を主にゆだねよ、さらばなんじをささえたまわん＝　主は正しき人
　　の動かさるるをゆるしたもうまじ
二三　神よ、なんじは彼らを滅びの穴におとしいれたまわん＝　血をながす者、悪しき
　　者は生きてそのよわいの半ばにも至らざるべし、されど我はなんじに寄り頼まん

十一日早祷

第五十六篇

一　神よ、願わくは我をあわれみたまえ＝　人われを踏みつけ、あだする者ひねもす
　　我をしいたぐ
二　わが敵ひねもす我をふみつけ＝　誇り高ぶりて我と戦うものおおし
三　われ恐るるときなんじに寄り頼まん＝　われ神により御言葉をほめまつらん
四　われ神に寄り頼みたれば恐るることあらじ＝　人われに何をなし得んや
五　ひねもす彼らはわがなす事をさまたげ＝　その思いはことごとく我にわざわいを
　　なす
六　彼らは群れつどいて身をひそめ＝　わが歩みに目をとめてわが命をうかごう
七　神よ、彼らの罪にむくい＝　憤りをもてもろもろの民をたおしたまえ
八　なんじわがさすらいを数えたまえり＝　なんじの皮袋にわが涙をたくわえたまえ、こはみなんじの書にしるさるるにあらずや
九　わが呼び求むる日にはわがあだしりぞかん＝　これによりて神の我を守りたもうことを知る

一〇　われ神によりて御言葉をほめまつらん＝　われ主によりて御言葉をほめまつらん
一一　われ神に寄り頼みたれば恐るることあらじ＝　人われに何をなし得んや
一二　神よ、我はなんじに立てし誓いをはたすべし＝　われ感謝の供え物をなんじにさげん
一三　なんじわが魂を死より救い、われを倒さじとわが足を守りたまえり＝　これ命の光のうちにて神の前にわが歩まんがためなり

第五十七篇

一　我をあわれみたまえ、神よ、我をあわれみたまえ、わが魂はなんじに寄りたのむ＝　我なんじの翼の陰に避けて滅びのあらしの過ぎ去るをまたん
二　我はいと高き神によばわん＝　わがためにすべての事をなしとげたもう神によばわん
三　神はいつくしみとまことを天より送りてわれをすくい＝　われを踏みつくる者を恥ずかしめたまわん
四　我は人の子らをむさぼり食ろうししのうちに伏す＝　その歯はやりのごとく矢のごとく、その舌は鋭きつるぎのごとし
五　神よ、願わくはみずからを天よりも高くしげたまえ
六　彼らはわが足を捕えんとて網を設く、わが魂はうなたる＝　彼らはわが道に穴を堀りたり、しかしてみずからその中におちいれり
七　わが心さだまれり＝　われ歌いまつらん、たたえまつらん
八　わが魂よ、さめよ。琴よ、立琴よ、さめよ＝　我しののめを呼びさまさん
九　主よ、我もろもろの民のなかにてなんじに感謝し＝　国々のなかにてなんじをほめうたわん
一〇　そはなんじのいつくしみは大いにして天にまでいたり＝　なんじのまことは雲にまでおよぶ
一一　神よ、願わくはみずからを天よりも高くしたまえ＝　なんじの御栄えを全地の上にあげ

第五十八篇

一 力ある者よ、なんじらまことに義を宣べ＝ 公平をもて人の子をさばくや
二 いな、なんじらは心に悪しきことをはかり＝ その手は地にてあらびをおこのうなり
三 悪しき者は胎を離るるやまよいいで＝ 生まれいずるやあやまちを犯し、いつわりを言う
四 彼らの毒はへびのどくのごとし＝ 彼らは耳ふさぐ耳しいのまむしのごとし
五 魔術を行のう者のこえをきかず＝ たくみに呪文を唱うとも聞かざるまむしのごとし
六 神よ、彼らの口の歯を折りたまえ＝ 主よ、若きししのきばを抜きくだきたまえ
七 願わくは彼らを流れ行く水のごとくに消えうせしめ＝ 踏みにじらるる草のごとく枯れはてしめたまえ
八 また溶けて消えゆくかたつむりのごとくならしめ＝ 時ならず生まれて日を見ぬ子のごとくならしめたまえ
九 なんじらの釜いまだいばらの火を受けざるにさきだち＝ 青きも燃えたるも、ともにつむじ風にて吹き去らるるごとくならしめたまえ
一〇 正しき者はあだ返さるるを見てよろこび＝ その足を悪しき者の血にてあらわん
一一 かくて人は言うべし、「げに正しき者にむくいあり＝ げに、さばきを行ないたもう神はいますなり」と

十一日晩祷

第五十九篇

一 神よ、願わくは我をあだより助けいだしたまえ＝ われに逆らいて起こりたつ者よりまもりたまえ
二 悪を行のう者より我を助けいだし＝ 血に飢えし人より我をすくいたまえ
三 見よ、彼らはひそみ隠れてわが命をうかがい、たけき者むれつどいてわれを攻む＝ 主よ、こは我にとががあるにあらず、われに罪あるにあらず、
四 彼ら走りまわりて、備えをなし、あやまちなきに我をそこなわんとす＝ 願わく

は目をさまし見てわれを助けたまえ
五 万軍の神なる主よ、なんじはイスラエルの神なり＝ 願わくは目をさまして、も
ろもろの国民を罰し、悪をたくらむ者をひとりだに残したもうなかれ
六 彼ら日ごと夕べにかえりきたり＝ 犬のごとくほえて町を経あるく
七 見よ、彼らは口にてほえ、またうなり＝ 「たれかこれを聞かんや」と言う
八 されど主よ、なんじは彼らをわらい＝ もろもろの国民をあざわらいたもう
九 わが力よ、我なんじをほめまつらん＝ 神よ、なんじはわがとりでなり
一〇 わが神はいつくしみをもて我を迎えたまわん＝ わが神は我にあだの破るるを見
させたまわん
一一 彼らを殺したもうなかれ、こはわが民の忘れざらんためなり＝ 主、われらの盾
よ、御力をもて彼らをよろめき倒れしめたまえ
一二 願わくは彼らその口の罪、くちびるのことばにより＝ 高ぶりのわなに陥らんこ
とを
一三 彼らの語るのろいと偽りにより、憤りをもて彼らを滅ぼして跡なからしめ＝ 神
のヤコブを治めたもうことを地のはてにまで知らしめたまえ
一四 彼らは日ごと夕べに帰りきたり＝ 犬のごとくほえて町を経あるく
一五 彼らは行きめぐりて食い物をあさり＝ 飽くことなくば怒りてうなるなり
一六 されど我はなんじの御力をうたい＝ あしたに声をあげてなんじのいつくしみを
うたいまつらん
なんじはわが悩みの日にとりでとなりたまえり＝ わが避け所となりたまえり
一七 わが力よ、我なんじをほめうたわん＝ 神よ、なんじはわがとりで、我をいつく
しみたもう神なり

第六十篇

一 神よ、なんじ我らを捨て、我らの守りを破りたまえり＝ なんじは憤りたまえ
り、願わくはふたたび我らを起こしたまえ
二 なんじ国を震わせてこれを裂きたまえり＝ 願わくはその多くの割れ目をふさぎ
たまえ、地は揺りうごくなり
三 なんじはその民を耐えがたき苦しみにあわせ＝ 人をよろめかす酒を我らに飲ま

せたまえり
四　なんじ一つの旗をなんじを恐るる者のために＝　射手をのがれし者をそのもとに集めたまえり
五　なんじの愛したもう者を救わんために＝　右の御手をもて勝ちをあたえ、我らにこたえたまえ
六　神はその聖所にて言いたまえり＝　「我いたく喜びてシケムを分かち、スコテの谷をあたえん
七　ギレアデはわがもの、マナセはわがものなり＝　エフライムはわがかぶと、ユダはわがつえなり
八　モアブはわが足だらいなり、エドムにはわがくつを投げん＝　ペリシテに向かいてはわれ勝ちどきをあげん」と
九　われを堅固なる町に進ましむるものはたれぞ＝　われをエドムに導かんものはたれぞ
一〇　神よ、なんじは我らを捨てたまいしにあらずや＝　神よ、なんじは我らのいくさびとともにいでゆきたまわず
一一　願わくは助けを我にあたえて敵にむかわしめたまえ＝　人の助けはむなしければなり
一二　我らは神によりて勇ましくはたらかん＝　われらの敵を踏むものは神なればなり

第六十一篇

一　神よ、願わくはわが叫びを聞き＝　わが祈りに耳をかたむけたまえ
二　わが心くずおるる時、地のはてよりなんじを呼ばん＝　なんじ我をみちびきて高き岩にいたらせたまえ
三　なんじはわが避けどころなり＝　われをあだより守る堅固なるやぐらなり
四　我をとこしえになんじの幕屋にすまわせ＝　御翼の下にかくしたまえ
五　神よ、なんじはわがもろもろの誓いを聞き＝　御名を恐るる者にたもう嗣業を我に与えたまえり
六　願わくは王の命を長からしめ＝　その年のよわいを世々に至らせたまわんことを
七　神の御前にその位をとこしえにたもたしめ＝　いつくしみとまことをもて彼をま

もりたまえ

八 さらば我とこしえに御名をほめうたい＝ 日ごとにわがもろもろの誓いをはたさん

十二日早祷

第六十二篇

一 わが魂は默してただ神をまつ＝ わが救いは神よりいずるなり

二 神こそわが岩、わがすくいなれ＝ わがとりでなればわれいたくは動かされじ

三 なんじらいずれの時まで人に押しせまるや＝ なんじら傾ける石がきのごとく、揺り動けるまがきのごとく相ともに人を倒さんとするか

四 彼らは人を尊き位より落さんとのみはかり＝ 偽りを喜び、その口にては祝いその心にてはのろう

五 わが魂は默してただ神をまつ＝ わが望みは神よりいずればなり

六 神こそわが岩、わがすくいなれ＝ わがとりでなれば我は動かされじ

七 わが救い、わが誉れは神にあり＝ 神はわが力の岩、わが避けどころなり

八 民よ、いかなる時にも神に寄りたのめ＝ その御前になんじらの心を注ぎいだせ、神はわれらの避けどころなり

九 げに低き人はむなしく、高き人はいつわりなり＝ 彼らをはかりに置かば、みな上にあがりて息よりもかろし

一〇 しいたげをもて頼みとするなかれ、かすめ奪うをもてほこるなかれ＝ 富の増し加わるときはこれに心をよするなかれ

一一 力は神にあり＝ 神ひとたびこれをのたまえり、我ふたたびこれを聞けり

一二 ああ主よ、いつくしみもまたなんじにあり＝ なんじは人おのおののわざに従いて報いをなしたもう

第六十三篇

一 神よ、なんじはわが神なり、わが魂はかわきて、なんじをたずねもとむ＝ 水なき、かわき衰えたる地にあるごとく、わが身はなんじをこいしとう

二 さらば我、聖所にありてなんじに目をそそぎ＝ 御力と御栄えとをみたり

三　なんじのいつくしみは命にもまされり＝　わがくちびるは、なんじをほめまつらん
四　われ生くるかぎり、なんじをほめ＝　わが手をあげて御名をよびまつらん
五　われ床にありてなんじをおもいいで＝　夜のふくるまに、なんじをふかくおもわん
六　かかるとき、わが魂は髄とあぶらにてみたされたるごとく飽くことをえ＝　わが口は喜びのくちびるをもてなんじをほめたたえん
七　なんじはわがたすけなり＝　我なんじの翼の陰にてよろこびうたわん
八　わが魂はなんじを慕いてはなれず＝　なんじの右の手はわれをささえたもう
九　されどわが命を滅ぼさんとてたずね求むるものあり＝　彼らは地の深きところにゆかん
一〇　また、剣の刃にわたされ＝　山犬のえじきとならん
一一　されど王は神をよろこび、神によりて誓いを立つる者はみなほこることを得ん＝　偽りを言うものの口はふさがるべし

第六十四篇

一　神よ、わが嘆くときわが声をききたまえ＝　わが命を守りてあだの恐れより免れしめたまえ
二　願わくは我を隠して悪しき者のひそかなるはかりごとよりのがれしめ＝　よこしまなる者のたくらみより、免れしめたまえ
三　彼らは剣のごとくおのが舌をとぎ＝　苦き言葉を矢のごとくはなつ
四　彼ら隠れたるところより罪なきものを射んとす＝　にわかにこれを射ておそるることなし
五　彼らたがいに悪しき企てを変うることなく、ともにはかりて、ひそかにわなをもうけんとす＝　かくて言う、「たれか我らを見破ることを得んや」と＝
六　たれか我らの罪を探りいだし得んや＝　我らはいと巧みにはかりごとをめぐらせり」と、げに人の内なる思いと心はふかし
七　されど神は矢をもて彼らを射たもうべし＝　彼らはにわかにきずをうけん
八　彼らの舌のゆえによりて神は彼らを滅ぼしたまわん＝　これを見る者みなかしら

をふらん
九　かかる時もろもろの人は恐れ、神のみわざを宣べつたえ＝　そのなしたまえるこ
とをかんごうべし
一〇　正しき者は主を喜びてこれに寄りたのみ＝　すべて心直き者はみなほこるべし

十二日晩祷

第六十五篇

一　神よ、シオンにてなんじをほめたとうるはふさわし＝　人はなんじに誓いをはた
さん
二　祈りを聞きたもうものよ＝　もろびとは罪を悔いてなんじにきたらん
三　我らおののがとがになやむとき＝　なんじ我らをきよめたまわん
四　なんじに選ばれ、なんじに近づけられて、大庭に住もう者はさいわいなり＝　我
らはなんじの家、なんじの聖なる宮の恵みにて飽くことをえん
五　救いの神よ、なんじは恐るべきみわざをもて我らを救い、我らに答えたまわん＝
なんじは地のもろもろのはて、また海のはてにある者ののぞみなり
六　神は大能をおび＝　その御力によりて、もろもろの山を堅く立たしめたもう
七　海のひびき大波のひびきをしずめ＝　もろもろの民の騒ぎをしずめたまえり
八　されば地のはてに住める人々も、なんじのもろもろのしるしを見ておそる＝　な
んじ、あしたとゆうべのいずる所をも喜びうたわしめたもう
九　なんじ地に臨みて水そそぎ＝　大いにこれを豊かにしたまえり
神の川に水みちたり＝　なんじかく備えをなして穀物を彼らにあたえたまえり
一〇　なんじ田みぞを豊かにうるおし、うねをととのえ＝　むらさめにてこれを和らげ、
そのもえいずるを祝したまえり
一一　なんじ御恵みをもて年の冠としたまえり＝　なんじの道にはあぶらしたたる
一二　野の牧場はうるおい＝　小山は喜びにかこまる
一三　牧場はみな羊の群れを着、もろもろの谷は穀物におおわれたり＝　彼らはみな喜
びて呼ばわりまた歌う

第六十六篇

一　全地よ、神に向かいて喜びよばわれ＝
二　神に告げまつれ、「なんじのもろもろの
三　御名の栄光を歌い、ほめたたえよ
　　によりて、あだはなんじにおそれしたがわん
四　全地はなんじを拝みてうたい＝　御名をほめうたわん」と
五　きたりて神のみわざをみよ＝　人の子らのうちになしたもうことは、おそるべき
　　かな
六　神は海をかえて、かわける地となしたまえり＝　人々川を歩みて渡り、そのとこ
　　ろにて我らは神をよろこべり
七　神は大能をもてとこしえに統べ治め、その目はもろもろの国民を見たもう＝　そ
　　むく者おのれをあがむべからず
八　もろもろの民よ、我らの神をほめまつれ＝　神をほめたとうる声をきこえしめよ
九　神は我らを生きながらえしめ＝　我らの足のすべるをゆるしたまわず
一〇　神よ、なんじは我らをこころみ＝　しろがねを練るごとくに我らをねりたまえり
一一　なんじ我らを網にひきいれ＝　我らの腰に悩みをおきたまえり
一二　なんじ人々に我らのかしらの上を乗り越えしめたまいき＝　我らは火のなか水の
　　なかを過ぎゆけり
一三　されどなんじその中より我らを引きいだし＝　広き所にいたらしめたまえり
一四　われ燔祭をもてなんじの家にゆき＝　わが誓いをなんじに果たさん
一五　こは、わが悩みに会いしとき＝　わがくちびるにて言いいで、わが口にて誓いし
　　ものなり
一六　われ肥えたるものを燔祭とし、雄羊のいけにえの煙とともになんじにささげ＝
　　雄牛と雄やぎとをそなえまつらん
一七　神をおそるる人よ、皆きたりて聞け＝　われ神のわがために成したまえることを
　　告げん
一八　われ声をあげて神によばわり＝　わが舌をもて敬いあがめたり
一九　われ心に不義をいだきしならば＝　主はわれに聞きたまわざりしならん
二〇　されど、神はまことに聞きたまえり＝　御心をわが祈りの声にとめたまえり
二一　神はほむべきかな、わが祈りをしりぞけたまわず＝　そのいつくしみを我より取

り去りたまわざりき

第六十七篇

一　願わくは神われらを恵み祝したまわんことを＝　御顔の光を我らの上に照らしたまわんことを

二　こはなんじの道のあまねく地に知られ　なんじの救いのもろもろの国に知られんためなり

三　神よ、民らはなんじに感謝し＝　もろもろの民はなんじをほめたとうべし

四　国々はたのしみ、また喜びうたうべし＝　なんじは公平をもて民らをさばき、地の上なる国々を治めたまえばなり

五　神よ、民らはなんじに感謝し＝　もろもろの民はなんじをほめたとうべし

六　地は産物をいだせり＝　神・われらの神はわれらを祝したまえり

七　神はわれらを祝したまえり＝　地のもろもろのはて、ことごとく神をおそるべし

十三日早祷

第六十八篇

一　神よ、立ちたまえ、願わくはそのあだはことごとく散らされ＝　神をにくむ者は御前より逃げ去らんことを

二　煙の追いやらるるごとく彼らを追いやりたまえ＝　悪しき者は火の前にろうの溶くるごとく、神の御前にてほろびんことを

三　されど正しき者にはよろこびあり＝　神の御前にて楽しみ喜びて踊らん

四　神の御前に歌い、御名をほめたたえよ＝　雲に乗りたもう者に向かいてうたえ

五　きよき住まいにましますみなしごの父、やもめのまもりなり

六　神は寄るべなきものを家族のうちにおらしめ、めしゅうどを解きて栄えしめたもう＝　されどそむく者はうるおいなき地に住むなり

七　神よ、なんじは民にさきだちていで＝　また荒れ野を進みゆきたまいき

八　そのとき神の御前に地はふるい、天は激しく雨を降らせたり＝　シナイの山すら神・イスラエルの神の御前にふるいうごけり

九　神よ、なんじは豊かなる雨をふらせ＝　なんじの嗣業の地の疲れ衰えたるとき、

これを立てなおしたまえり
一〇　なんじの民はその中に住まいをえたり＝
食物をあたえたまえり
一一　主はみことのりを下したまえり＝　そのおとずれを宣ぶる多くの女は群れをなして言う
一二　「もろもろの王たちは逃げ去る、逃げ去る」と＝　家におる女たちはその獲物をわかつ
一三　なんじら羊のおりの中にとどまるとも＝　はとの翼のしろがねにおおわれ、その毛のこがねにおおわるるがごとくならん
一四　全能者かしこにて王たちを散らしたまえり＝　そのときサルモンの山に雪ふれり
一五　バシャンの山は大いなる山なり＝　バシャンの山は峰重なれる山なり
一六　峰かさなれる山よ、なんじいかなれば神の住まいに選びたまえる山をねたみ見るや＝　されど主はとこしえにこの山に住みたまわん
一七　主はちよろずのいくさ車もてシナイより聖所に入りたまえり＝　神よ、なんじは恵みをもて貧しき者に
一八　なんじはとりこを率いて高き山にのぼり＝　人々より、またそむく者より礼物を受けたまえり、主なる神ここに住みたまわんためなり
一九　日ごとに我らをささえたもう主はほむべきかな＝　神は我らのすくいなり
二〇　我らの神は救いの神なり＝　死よりのがるるは主なる神による
二一　神はあだのこうべを砕きたまわん＝　悪の道をあゆむ者の髪毛おおき頂を打ちくだきたまわん
二二　主言いたまえり、「われバシャンより彼らを携えかえり＝　海の深き所よりたずさえかえらん
二三　かくてなんじの足をそのあだの血にてあらいめん」と＝　これをなんじの犬の舌になめしめん
二四　神よ、人はなんじの進み行きたもうを見たり＝　わが神・わが王の聖所に進み行きたもうを見たり
二五　歌うものは前に行き、琴ひく者はあとにしたがい＝　鼓うつおとめはその中にありて言う

二六 「大いなるつどいにて神をほめよ＝　イスラエルの源よりいずる者よ、主をほめまつれ」と

二七 かしこに年若きベニヤミンさきだてり、そのの群れの中にユダの君たちあり＝　ゼブルンの君たち、ナフタリのきみたちあり

二八 神よ、御力を奮い起こしたまえ＝　我らのために御力をしめしたまえ　みわざを行ないたまいし神よ、

二九 王たちなんじに礼物をささぐ＝　これエルサレムなるなんじの宮のためなり

三〇 願わくは葦のなかに住む獣をいましめ＝　もろもろの民の雄牛と子牛の群れをいましめたまえ

三一 みつぎ物をむさぼる者をふみつけ＝　戦いを好むもろもろの民を散らしたまえ　青銅をエジプトより携えきたらせ＝　エチオピヤにはあわただしく神に向かいて手をのべさせたまえ

三二 地のもろもろの国よ、神に向かいてうたえ＝　主をほめうたえ

三三 いにしえよりの天の天に乗りたもう者に向かいてうたえ＝　見よ、主は御声をいだしたもう、勢いある御声をいだしたもう

三四 なんじら力を神に帰せよ＝　そのみいつはイスラエルの上にとどまり、御力は雲のなかにあり

三五 神の恐るべきさまはその聖所よりあらわる＝　イスラエルの神はその民に力と勢いとを与えたもう、神はほむべきかな

十三日晩祷

第六十九篇

一 神よ、われを救いたまえ＝　大水流れきたりてわが首にまでおよべり

二 われ立ちどなき深き泥の中にしずめり＝　われ深き水に陥る、大水わが上をあふれすぐ

三 われ叫び疲れて、のどはかわきたり＝　わが目は神を待ちわびておとろえぬ

四 ゆえなくしてわれを憎むものおおし＝　わがかしらの毛よりもおおし　偽りを言いてわれを攻め、我を滅ぼさんとする者の勢いつよし＝　我かすめざり

し物をもつぐのわせらるべきや

五　神よ、なんじはわが愚かなるを知りたもう＝　わがもろもろの罪はなんじにかくれざるなり

六　万軍の主なる神よ、なんじを待ちのぞむ者の、わがゆえによりて、恥ずかしめらるることなからしめたまえ＝　イスラエルの神よ、なんじを求むる者わがゆえによりて恥を負わしめらるることなからしめたまえ

七　我なんじのためにそしりを負い＝　恥はわが顔をおおえり

八　我わがはらからには旅人のごとく＝　わが母の子には他国の人のごとくなれり

九　そはなんじの家を思う熱心われをくらい＝　なんじをそしる者のそしり我におよべばなり

一〇　われ食を断ちて、わが身をくるしめたり＝　されどこれによりて、そしりをうく

一一　われ荒布をころもとなせり＝　されどかれらの語りぐさとなりぬ

一二　門に座する者はわがことをかたる＝　われは酔いたる者に歌いはやされたり

一三　されど主よ、我はなんじにいのる＝　神よ、恵みのときに豊かなるいつくしみによりて、我にこたえたまえ

一四　なんじのまことの救いをもて、泥のなかより我を助けいだして沈まざらしめたまえ＝　我をにくむ者より、また深き水より助けいだしたまえ

一五　大水われをおおうことなく、淵われをのむことなく＝　穴その口をわが上に閉ずることなからしめたまえ

一六　主よ、我に答えたまえ、なんじはいつくしみ深ければなり＝　なんじのあわれみはおおし、我をかえりみたまえ

一七　御顔をなんじのしもべに隠したもうなかれ＝　われ悩み苦しめり、願わくはすみやかに我にこたえたまえ

一八　われに近寄りて我をあがない＝　わがあだのゆえに我をすくいたまえ

一九　なんじはわが受くるそしりと恥とあなどりとを知りたまえり＝　わが敵はみなんじのみまえにあり

二〇　そしりわが心を砕きたれば、我いたく気落ちせり＝　我あわれみを寄するものを待ちたれど、ひとりだになく、慰むるものを待ちたれどひとりをも見ざりき

二二　彼らは苦き草をわが食い物にあたえ＝　わがかわけるときに酢をのませたり
二三　彼らの前なる食卓は網となり＝　そのいけにえの宴はわなとなれ
二四　その目を暗くして見えしめず＝　その腰をつねに震わしめたまえ
二五　なんじの憤りを彼らの上にそそぎ＝　なんじの怒りを彼らに追いしかせたまえ
二六　彼らの家をあれはてしめ＝　その幕屋に人を住まわせたもうなかれ
二七　彼らはなんじが打ちたまいたる者をせめ＝　なんじが傷つけたまいし者を、なおも苦しむるなり
二八　彼らの罰に罰をくわえ＝　彼らをゆるしたもうなかれ
二九　彼らを命の書より消し＝　正しき者とともにしるさることなからしめたまえ
三〇　されどわれは悩み苦しめり＝　神よ、われを救いて高きところに置きたまえ
三一　われ歌をもて神の御名をほめたたえ＝　感謝をもて神をあがめまつらん
三二　主は雄牛よりもこれをよろこび＝　角とひずめある雄牛にまさりてよろこびたまわん
三三　しいたげらるる者はこれを見てよろこべ＝　神を慕うものよ、なんじらの心は生くべし
三四　主は乏しき者の声をきき＝　とらわれしおのが民をかろしめたまわず
三五　天も地も主をほめよ＝　大海とその中に動くあらゆるもの主をほめまつるべし
三六　神はシオンを救い、ユダのもろもろの町をふたたび建てたまわん＝　主のしもべらはそこに住みて、これをおのがものとなさん
三七　そのしもべらの末もまたこれを継ぎ＝　御名をいつくしむ者はそのなかに住まわん

第七十篇

一　主よ、われを救いたまえ＝　主よ、とく、きたりて我を助けたまえ
二　願わくはわが命をたずね滅ぼさんとする者みな恥じあわてんことを＝　わがそこなわるるを喜ぶもの皆うしろに退きて恥を負わんことを
三　我に向かいて、「ああ見よや、見よや」という者おどろき＝　おのが恥によりて恐れんことを
四　なんじを尋ね求むるもの、皆なんじによりて楽しみ喜ばんことを＝　なんじの救

いを懇うもの常に、「主は大いなるかな」ととなえんことを

五 我は貧しくかつともし＝ されど主われをかえりみたもう
六 なんじはわが助けなり、我を救いたもうものなり＝ ああわが神よ、願わくはた
めらいたもうなかれ

十四日早祷

第七十一篇

一 主よ、我なんじに寄りたのむ＝ 願わくはとこしえに恥なからしめたまえ
二 なんじの義をもて我を助けいだし＝ なんじの耳を我にかたむけて、我をすくい
たまえ
三 願わくはなんじわが寄り頼む岩となり、われを救う堅固なる城となりたまえ＝
なんじはわが岩わが城なり
四 わが神よ、悪しき者の手より我をすくいいだし＝ 不義残忍なる人の手より我を
まぬかれしめたまえ
五 主なる神よ、なんじはわがのぞみなり＝ わが幼き時よりのたのみなり
六 われ生まれし時よりなんじに寄りたのめり＝ なんじは我を母の胎より取りいだ
したまえる者なり、我つねになんじをほめたたえん
七 われ多くの人に驚かるる者となれり＝ されど我はなんじをわが堅固なる避けど
ころとなせり
八 なんじをたとうる言葉わが口にみち＝ なんじをほむる言葉ひねもす満つるなり
九 わが年老ゆるとき、我を捨てたもうなかれ＝ わが力衰うるとき、われを離れ去
りたもうなかれ
一〇 わがあだはわがことを語り＝ わが命をうかごう者は互いにはかりて言う
一一 「神は彼を捨てたり＝ 彼を助くる者なし、彼を追いてとらえよ」と
一二 神よ、我に遠ざかりたもうなかれ＝ わが神よ、とくきたりて我をたすけたまえ
一三 願わくはわが敵は恥じ、かつおとろえ＝ 我をそこなわんとする者はそしりと恥
とにおおわれんことを
一四 されど我はたえず望みをいだき＝ いよいよ、なんじをほめたたえん

二五　わが口はひねもすなんじの義となんじの救いのみわざを語らん＝　我その数を知らざればなり

一六　我は主なる神の大能のみわざをかたり＝　ただなんじの義のみをほめたたえん

一七　神よ、なんじ我を幼きときより教えたまえり＝　われ今なおなんじのくすしきみわざを宣べつたえん

一八　神よ、われ老いて、しらがになるとも、我を離れたもうなかれ＝　さらばなんじの大能を世々に宣べつたえん

一九　神よ、なんじの力と義は高き天におよぶ＝　なんじは大いなることをなしたまえり、神よ、たれかなんじに等しき者あらんや

二〇　なんじわれらを多くの重き悩みにあわせたまえり＝　されどなんじふたたび我を生かし、地の深き所よりあげたまわん

二一　なんじ我をいよいよ大いならしめ＝　ふたたび我をなぐさめたまわん

二二　わが神よ、われまた立琴をもてなんじをほめ、なんじのまことをほめたたえん＝　イスラエルの聖者よ、われ琴をもてなんじをほめうたわん

二三　なんじをほめ歌うとき、わがくちびるは喜びよばわり＝　なんじの救いたまえるわが魂もまた大いによろこばん

二四　わが舌もまたひねもすなんじの義を語らん＝　我をそこなわんとする者、恥じあわつればなり

第七十二篇

一　神よ、願わくは　なんじの正義を王にあたえ　なんじの義を王の子にあたえたまえ

二　彼は義をもてなんじの民をさばき＝　公平をもて苦しむ者をさばかんことを

三　山と岡は義によりて＝　なんじの民を栄えしめんことを

四　彼は苦しむ民の訴えをきき＝　乏しき者を救い、しいたぐる者を砕かんことを

五　彼は日と月のあらん限り＝　世々生きながらえんことを

六　彼は刈りとれる牧に降る雨のごとく＝　地をうるおすむらさめのごとくならんことを

七　彼の世に義はさかえ＝　月うするとも全き平和の保たれんことを

八　そのまつりごとは海より海にいたり＝　川より地のはてにおよばんことを
九　敵はその前にかがみ＝　あだはちりをなめんことを
一〇　タルシシおよび島々の王たちは、みつぎをおさめ＝　シバとセバの王たちは礼物をささげんことを
一一　もろもろの王はその前にひれふし＝　もろもろの民はかれに仕えんことを
一二　彼は乏しき者をその叫ぶときにすくい＝　助けなき者、苦しむ者をすくわん
一三　彼は弱き者と乏しき者をあわれみ＝　乏しき者の命をすくうべし
一四　彼らの命を、しいたげとあらびよりあがなわん＝　彼らの血は御前にてとうとし
一五　彼の命の長からんことを＝　人はシバのこがねをささげて彼のために常に祈り、ひねもす彼を祝わんことを
一六　国のうちに穀物は豊かにみのり、山の頂にまで穂波はそよぎ＝　その実はレバノンのごとく、町の人々は地の草のごとく栄えんことを
一七　かれの名はつねに絶えず＝　かれの誉れは日とともに久しからんことを　人は彼によりてさいわいをえ＝　もろもろの国民はかれを幸いなる者ととなえんことを
一八　ただイスラエルの神のみ、くすしきみわざをなしたもう＝　主なる神はほむべきかな
一九　その栄光の名は世々にほむべきかな＝　その栄光、全地に満ちんことを、アーメン、アーメン

十四日晩祷

第七十三篇

一　神はイスラエルに向かいてめぐみあり＝　こころ清き者に向かいてまことにめぐみあり
二　されどわが足はつまずかんとし＝　わが歩みはすべらんとせり
三　こは、われ悪しき者の栄ゆるを見＝　誇れる者をねたみしによる
四　彼らには苦しみなく＝　その身は健やかにしてつややかなり
五　彼らは他の人のごとく憂いにおらず＝　悩みに会うことなし

六　このゆえに高ぶりは飾りのごとくその首をめぐり＝　あらびは衣のごとく彼らを
　おおえり
七　かれら肥えふとりてその目とびいで＝　その心は愚かなる思いにみてり
八　彼らはあざけり悪意をもてもの言い＝　また高ぶり、しいたげをもておどす
九　その口を天に向けてさからい＝　その舌を地にあまねくゆかしむ
一〇　このゆえに民はひるがえりて彼らをほめ＝　彼らにあやまちなしとせり
一一　彼らは言う、「神いかでさとらんや＝　いと高き者いかで知らんや」と
一二　見よ、彼らは悪しきものなり＝　常に安らかにしてその富ましくわわれり
一三　まことに我はいたずらに心をきよめ＝　罪を犯さずして手をあらいたり
一四　我ひねもす打たれ＝　朝ごとに責めをうけたり
一五　我もし、「かかることを述べん」と言いたらんには＝　なんじの子らの代を誤らせしならん
一六　我これを知らんとして思いめぐらしたるに＝　悟りがたくしてなやみたり
一七　われ神の聖所にゆき＝　ついに彼らのいやはてをさとりえたり

一八　まことになんじは彼らをなめらかなるところに置き＝　滅びにおとしいれたもう
一九　げに彼らはまたたく間にやぶれ＝　恐れをもてことごとくうせ去るなり
二〇　目さめて見ればかれらは夢のごとし＝　なんじ目をさますとき彼らの影をかろしめん
二一　わが魂はいたみ＝　わが心はさされたり
二二　われ愚かにしてさとりなく＝　御前にありて獣にひとしかりき
二三　されど我つねになんじとともにあり＝　なんじわが右の手をたもちたまえり
二四　なんじのさとしをもて我をみちびき＝　後に我を受けてほまれを得させたまわん
二五　なんじのほかに我たれをか天にもたん＝　地にはなんじのほかにわがしとうものなし
二六　わが身とわが心とはおとろう＝　されど神はわが心のちから、わがとこしえの嗣業なり
二七　見よ、なんじに遠ざかる者はほろびん＝　なんじにそむく者はなんじこれをほろぼしたもう

十四日晩侍

二八　神に近づきまつるは我によきことなり＝　われは主なる神を避け所とし、そのもろもろのみわざを宣べつたえん

第七十四篇

一　神よ、いかなればなんじ我らをとこしえに捨てたまいしや＝　いかなればなんじの牧の羊に御怒りの煙あがれるや

二　願わくは昔なんじが買い求め、なんじがあがないて嗣業の民となしたまえる公会をおもいいで＝　なんじが住みたもうシオンの山を思いいでたまえ

三　とこしえの滅びの跡に御足を向けたまえ＝　あだは聖所のすべての物をこぼちつくせり

四　なんじの敵はなんじの宮のなかにほえたけび＝　おのが旗を立ててしるしとせり

五　彼らは上なる入口にて＝　おのをもて木の格子を切りたおせり

六　また手おのとつちをもて＝　宮の彫り物をことごとく打ちおとせり

七　彼らはなんじの聖所に火をかけ＝　御名の住みかを汚して地にたおせり

八　彼ら心のうちに言う、「我らことごとくこれをこぼたん」と＝　かくて国のうちなる神のもろもろの会堂を焼きつくせり

九　我らのしるしは見えず、預言者もいまはなし＝　いつまでかくあるべきか、我らのうちに知るものなし

一〇　神よ、敵はいつまでかくそしるや＝　あだはなんじの御名をとこしえにけがすや

一一　いかなれば御手を引きたもうや＝　右の御手をふところよりいだしたまわざるや

一二　神はいにしえよりわが王なり＝　救いを世におこないたまえり

一三　なんじ御力をもて海をわかち＝　水の中なる竜のこうべをくだきたまえり

一四　なんじわにのこうべを打ちくだき＝　野にすめる獣に与えて食となしたまえり

一五　なんじは泉と流れとをひらき＝　もろもろの大川を枯らしたまえり

一六　昼もなんじのもの、夜もまたなんじのものなり＝　なんじはもろもろの光と日とをそなえたまえり

一七　あまねく地のもろもろのさかいをたて＝　夏と冬とをつくりたまえり

一八　主よ、あだはなんじをそしり、愚かなる民は御名をけがせり＝　願わくはこのことを思いいでたまえ

一九　なんじのはとの魂を野の荒き獣にわたしたもうなかれ＝　苦しむ者の命をとこしえに忘れたもうなかれ

二〇　なんじの契約をかえりみたまえ＝　地の暗きところはあらぶる人の住まいにて満ちたればなり

二一　しいたげらるる者をはずかしめたもうなかれ＝　悩める者と苦しむ者とに御名をほめたたえしめたまえ

二二　神よ、立ちてなんじの訴えをあげつらい＝　愚かなる者のひねもすなんじをそしるを御心にとめたまえ

二三　なんじの敵の叫びを忘れたもうなかれ＝　なんじに逆らいて起こり立つ者の騒がしき声はたえずあがれり

十五日早祷

第七十五篇

一　神よ、われら感謝す、我らなんじに感謝す＝　我らなんじの御名をよび、なんじのくすしきみわざをかたりあえり

二　われ定めし時のいたるをまち＝　公平をもてさばきをなさん

三　地とこれに住むすべての者よろめくとき＝　地のもろもろの柱をかたく保つはわれなり

四　われ誇れる者に、「ほこるなかれ」と言い＝　悪しき者に、「角をあぐるなかれ」といえり

五　「なんじら角を高くあぐるなかれ＝　首を堅くして高ぶり言うなかれ」といえり

六　上ぐることは東よりにあらず、西よりにあらず＝　また南よりにもあらざるなり

七　ただ神のみ、さばきを行ないたもう＝　神これを下げ、彼を上げたもう

八　主の御手にさかずきあり＝　よきものを混じえたる酒あわだてり

神これを注ぎいだしたまえば＝　地のすべての悪しき者そのおりをも飲みつくすべし

九　されど我はとこしえによろこび＝　ヤコブの神をほめうたわん

一〇　彼は悪しき者のすべての角を切りはなたん＝　正しき者の角はあげらるべし

第七十六篇

一 神はユダに知られたまえり＝ その御名はイスラエルに大いなり
二 サレムのなかにその幕屋あり＝ その御住まいはシオンにあり
三 かしこにて彼は火矢を折り＝ 盾、剣、もろもろの武器をこぼちたまえり
四 なんじは栄光あり＝ とこしえの山よりもとうとし
五 心の強き者もその獲たるものを奪われたり＝ 彼らは眠りに沈み、いくさびとも
皆なすすべなかりき
六 いくさ車と馬とともに深き眠りにつけり＝ ヤコブの神よ、これなんじの怒りに
よりてなり
七 神よ、なんじこそ恐るべきものなれ＝ ひとたび怒りたもうときは、たれか御前
に立ちえんや
八 なんじ天より宣告を下したまえり＝ 地は恐れて黙したり
九 神は立ちてさばきをなし＝ 地のしいたげらるる者を皆すくいたまえり
一〇 げに人の怒りはなんじをほむるにいたらん＝ 怒りの余りはなんじおのれの帯と
なしたまわん
一一 なんじの神・主に誓いを立ててこれを果たせ＝ その回りなるすべての者は、恐
るべき者に礼物をささぐべし
一二 主はもろもろの君たちのいのちを絶ちたまわん＝ 主は地の王たちの恐るべきも
のなり

第七十七篇

一 われ声をあげて神によばわん＝ われ声を神にあげなば聞きたまわん
二 われ悩みの日に主をたずね、夜わが手をのべてたゆむことなかりき＝ わが魂は
慰められるをこばみたり
三 われ神を思いてなげき＝ われ深く思いてわが魂おとろえぬ
四 なんじはわがまぶたを閉じしめたまわず＝ 我はもの言うことあたわぬほどに悩
みたり
五 われ昔の日をおもい＝ いにしえの年をおもいいだせり
六 われ夜、わが心とかたり＝ 深く思いてわが魂をさぐりたり

七　「主はとこしえに捨てたもうや＝　ふたたびめぐみを施したまわざるや
八　そのいつくしみはとこしえに絶えしや　その誓いは世々にすたれしや
九　神は恵みを施すことを忘れたまいしや　怒りをもてそのあわれみを閉じたまいしや」と
一〇　かくてわれ言う＝　「わが悩みはいと高き者の右の手の変わりしことなり」と
一一　われ主のみわざを思いおこさん＝　いにしえの、くすしきみわざをおもいいださん
一二　我またなんじのすべてのみわざを思いめぐらし＝　なんじのなしたまえる事をふかくおもわん
一三　神よ、なんじの道は聖なり＝　われらの神のごとく大いなる神はたれぞや
一四　なんじはくすしきみわざをなしたまえる神なり＝　もろもろの民のうちに御力をしめしたまえり
一五　御腕をもてなんじの民をたすけ＝　ヤコブ、ヨセフの子らをあがないたまえり
一六　神よ、大水なんじを見たり＝　大水なんじを見ておののき、淵もまたふるえり
一七　雲は水をそそぎ、空はひびきをいだし＝　なんじの矢はよもに走りいでたり
一八　なんじのいかずちの声はあらしのうちにありき＝　いなずまは世を照らし、地はふるいうごけり
一九　なんじの大路は海のなかにあり＝　なんじの道は大水のなかにあり、されどなんじの御跡は見えざりき
二〇　なんじその民を羊の群れのごとくみちびきたまえり＝　モーセとアロンとの手によりてみちびきたまえり

十五日晩祷

第七十八篇

一　わが民よ、わが教えをきき＝　わが口の言葉に耳をかたむけよ
二　われ口を開きて、たとえをかたり＝　いにしえよりのなぞを語らん
三　これ我らが聞きしところ、知りしところなり＝　我らの先祖の語り伝えしところ

四　我らこれを子らにかくさず＝　主のもろもろの誉れあるみわざと力と、そのなしたまえるくすしきことをきたらんとする世に告げん

五　主はあかしをヤコブのうちに立て、律法をイスラエルのうちにさだめ＝　これをその子らに告げ知らさんことを我らの先祖に命じたまえり

六　これきたらんとする世、後に生まるる子らがこれを知り＝　みずから立ちてその子らに伝えんためなり

七　彼らをして神によりたのみ＝　神のみわざを忘れず、その戒めを守らしめんためなり

八　またその先祖のごとく、かたくなにしてそむく者とならず＝　その心定まらず、そのたましい神に不忠なる者とならざらんためなり

九　エフライムの子らは武装して弓をとれりも＝　されど戦いの日にうしろをむけたり

一〇　彼らは神の契約をまもらず＝　その律法に従いて歩むことをこばみたり

一一　主のなしたまえることをわすれ＝　彼らに示したまえるくすしきみわざをわすれたり

一二　神はエジプトの国にて、ゾアンの野にて＝　彼らの先祖の前にくすしきみわざをなしたまえり

一三　海をわかちて彼らを過ぎしめ＝　水を積みてうずたかくしたまえり

一四　昼は雲をもて彼らをみちびき＝　夜はよもすがら火の光をもてみちびきたまえり

一五　神は荒れ野にて岩をさき＝　大いなる淵よりくむがごとくに、彼らに飲ましめたまえり

一六　また岩より流れをひき＝　川のごとくに水を流れしめたまえり

一七　しかるに彼らなお罪をかさねて神にさからい＝　荒れ野にていと高き者にそむきたり

一八　またおのが欲のために食をもとめ＝　その心のうちに神をこころみたり

一九　彼らまた神に逆らいていえり＝　「神は荒れ野にて宴を設けたもうをえんや

二〇　岩を打ちたまえば、水ほとばしりいでて流れあふれたり＝　されど糧をも与えたもうを得んや、その民のために肉を備えたまわんや」と

二一　主はこれを聞きて、憤りたまえり＝　火はヤコブに向かいて燃えあがり、怒りは

イスラエルに向かいて立ちのぼれり

三　こは彼ら神を信ぜず＝　その救いの力に寄り頼まざりしゆえなり

三三　されどなお神は大空に命じ＝　天の戸を開きたまえり

三四　彼らの上にマナを降らせてくらわしめ＝　天の穀物をあたえたまえり

三五　人みな御使いの糧をくらえり＝　神は彼らに食物を豊かにおくりたまえり

三六　神は東風を天に吹きおこさしめ＝　御力をもて南の風をみちびきたまえり

三七　神はかれらの上にちりのごとく肉をふらせ＝　海のまさごのごとく翼ある鳥をふらせ

三八　その営の中にくだし＝　その住む所のまわりにおとしたまえり

三九　かくて彼らはくらいて飽きたりぬ＝　神はこれにその望みし物を与えたまえり

三〇　彼らはいまだその欲をはなれず＝　その食い物なお彼らの口にあり

三一　そのとき神の怒りは彼らに向かいて立ちのぼり＝　彼らのうちにていと強き者を殺し、イスラエルのすぐれたる者を打ちたおせり

三二　これらのことありしかど、彼らはなお罪をおかし＝　そのくすしきみわざを信ぜざりき

三三　このゆえに神は彼らの日をむなしくすごさせ＝　その年をおそれつつすごさせたまえり

三四　神かれらを殺したまえるとき彼ら神をたずねね＝　悔やみてねんごろに神をもとめたり

三五　彼らは神のおのが岩なることをさとり＝　いと高き神はおのが贖い主なることをおもいいだせり

三六　されど彼らはただその口をもて神にへつらい＝　その舌をもて神に偽りを言いしのみ

三七　彼らの心は神に向かいて堅からず＝　その契約を守るに忠信ならざりき

三八　されど神はあわれみ満ちたまえば、彼らのとがを赦して滅ぼしたまわず＝　しばしばその御怒りを転じて、ことごとくは憤りを振り起こしたまわざりき

三九　また彼らがただ肉なるをおもい＝　過ぎ去ればふたたび帰りこぬ風なるを思いいだしたまえり

四〇 彼らは野にて神にそむき＝ 荒れ野にて神を憂いしめしこといくたびぞや
四一 彼らかえすがえす神をこころみ＝ イスラエルの聖者の怒りをまねけり
四二 彼らは神の御力をわすれ＝ 敵よりあがなひたまいし日をも思いいださざりき
四三 神はそのもろもろのしるしをエジプトにてあらわし＝ そのくすしきみわざをソアンの野にて行ないたまえり
四四 彼らの川を血にかわらせ＝ その流れより飲むあたわざらしめたまえり
四五 またはえの群れを送りて彼らをくらわせ＝ かわずを送りて彼らをほろぼさせたまえり
四六 神は彼らの作物を青虫にわたし＝ 彼らの勤労の実をいなごにあたえたまえり
四七 ひょうをもて彼らのぶどうの木をからし＝ 霜をもて彼らの桑の木を枯らしたまえり
四八 その家畜をひょうにわたし＝ その群れを燃ゆるいなずまにわたしたまえり
四九 彼らの上に激しき怒りをくだし＝ 憤りと怒りと悩みと、滅びの使いの群れをおくりたまえり

五〇 神はその怒りのほとばしる道を設け、彼らを死よりまぬかれしめず＝ その命を疫病にわたしたまえり
五一 エジプトにてすべてのういごを撃ち＝ ハムの天幕にてかれらの長子をうちたまえり
五二 されどおのれの民を羊のごとくに引きいだし＝ 荒れ野にて群れのごとくにみちびきたまえり
五三 彼らを伴いて恐れなく安らかならしめ＝ 彼らのあだを海におおわしめたまえり
五四 神はかれらを聖なる地にともない＝ その右の手にて獲たまえる山にみちびきたまえり
五五 彼らの前にてもろもろの国びとを追いいだし＝ その地をわかちて嗣業となし、イスラエルのやからをかれらの天幕に住まわせたまえり
五六 されど彼らはいと高き神をこころみ＝ これにそむきてそのもろもろのあかしをまもらず
五七 そむき去りてその先祖のごとくまことをうしない＝ くるえる弓のごとくねじれ

たり
五八　高き所を設けて神の憤りをひき＝　刻める像にて神のねたみを起こしたり
五九　神ききたまいてはなはだしくいかり＝　イスラエルをことごとく退けたまえり
六〇　シロの御住まいをすて＝　人のなかに置きたまいし幕屋を去りたまえり
六一　神おのが力をとりことならしめ＝　その栄光を敵の手にわたし
六二　その民を剣にあたえ＝　その嗣業に向かいてはなはだしくいかりたまえり
六三　彼らの若き男は火に焼きつくされ＝　彼らのおとめには婚姻の歌なかりき
六四　彼らの祭司は剣にたおれ＝　彼らのやもめは喪の嘆きだにせざりき
六五　かかるときに、主は眠りし者のさめしごとく目をさまし＝　酒により て叫ぶ勇士
のごとく立ちたまえり
六六　その敵を撃ちしりぞけ＝　とこしえの恥を彼らにおわせたまえり
六七　またヨセフの天幕をいなみ＝　エフライムのやからをえらばず
六八　ユダのやからをえらび＝　そのいつくしみたもうシオンの山をえらびたまえり
六九　その聖所を高き天のごとく建て＝　とこしえに定めたまえる地のごとく建てたま
えり
七〇　またそのしもべダビデをえらび＝　羊のおりの中より取りたまえり
七一　乳をあとうる雌羊を飼う務めより彼をひきいだし＝　その民ヤコブ、その嗣業イ
スラエルの牧者となしたまえり
七二　かくてダビデは直き心をもて彼らをやしない＝　巧みにその手をもてこれをみち
びけり

十六日早祷

第七十九篇

一　神よ、異邦人はなんじの嗣業の地をおかし＝　なんじの聖なる宮を汚し、エルサ
レムをこぼちて石塚となせり
二　なんじのしもべのしかばねを空の鳥に与えてえさとなし＝　なんじの聖徒の肉を
地の獣にあたえたり
三　その血をエルサレムのまわりに水のごとくながしたり＝　これを葬る人なかりき

四　我らは隣人にそしられ＝　まわりの人々に侮りあざけらるる者となれり
五　主よ、かくていつまでぞや、なんじとこしえに怒りたもうや＝　なんじのねたみ
　　は火のごとく燃ゆるか
六　願わくはなんじを知らざる異邦人をいきどおり＝　御名を呼ばざる国々の上に御
　　怒りをそそぎたまえ
七　彼らはヤコブをほろぼし＝　その住みかをあらしたり
八　我らに先祖のとがを報いたもうことなく、あわれみをもてすみやかに我らを迎え
　　たまえ＝　われらは落されてはなはだしく低くなれり
九　われらの救いの神よ、御名の栄光のために我らをたすけ＝　御名のために我らを
　　救い、われらの罪をのぞきたまえ
一〇　いかなれば異邦人は言う、「かれらの神はいずこにありや」と＝　願わくはなん
　　じのしもべらが流しし血の報いを我らのまのあたりになして、異邦人に知らしめ
　　たまえ
一一　なんじの御前に捕われ人の嘆きのとどかんことを＝　大いなる御力により、死に
　　定められし者を守りてながらえしめたまえ
一二　主よ、我らの隣人のなんじをそしりたるそしりにむくい＝　七倍にしてそのふと
　　ころにかえしたまえ
一三　さらば我らなんじの民、なんじの牧の羊はとこしえになんじに感謝し＝　世々な
　　んじをほめたたえん

第八十篇

一　イスラエルの牧者よ、羊の群れのごとくヨセフを導きたもう者よ、耳をかたむけ
　　たまえ＝　ケルビムの上に座したもう者よ、光をはなちたまえ
二　エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんじの力を振りおこし＝　きたりて我
　　らをすくいたまえ
三　神よ、ふたたび我らをかえし、御顔の光を照らしたまえ＝　さらば我らすくいを
　　えん
四　主よ、万軍の神よ＝　なんじその民の祈りに向かいて、いつまでいかりたもうや
五　なんじ彼らに涙の糧をくらわせ＝　涙をますに満つるほど飲ましめたまえり

六　なんじ我らを隣人のあざけりとなしたもう＝　我らのあだは たがいにあざわらえり
七　万軍の神よ、ふたたび我らをかえし、御顔のひかりを照らしたまえ＝　さらば我らすくいをえん
八　なんじぶどうの木をエジプトより携えいだしこれを植えたまえり
九　なんじその木のために地をひらき＝　深く根ざして国にはびこらせたまえり
一〇　その影はもろもろの山をおおい＝　その枝は大いなる香柏をおおえり
一一　その木は枝を海にまでのべ＝　その若枝を川にまでのべたり
一二　なんじいかなればそのかきをくずし＝　道ゆくすべての人にその実を摘みとらせたもうや
一三　林のいのししはこれをあらし＝　野の獣はみなこれをくろう
一四　万軍の神よ、願わくは帰りたまえ＝　天より望み見てこのぶどうの木をかえりみたまえ
一五　なんじが右の手にて植えたまえるものをまもり＝　おのがために強くしたまえる枝をまもりたまえ
一六　彼らはその木を火に焼き、また切りたおせり＝　願わくは彼ら御顔の怒りにてほろびんことを
一七　御手をその右手の人の上におき＝　おのがために強くしたまえる人の子の上におきたまえ
一八　さらば我らなんじを退き離るることなからん＝　願わくは我らを生かしたまえ、われら御名をよばん
一九　主よ、万軍の神よ、ふたたび我らをかえし、御顔の光を照らしたまえ＝　さらば我ら救いをえん

第八十一篇

一　我らの力なる神に向かいて高らかにうたい＝　ヤコブの神に向かいて喜びの声をあげよ
二　歌をうたい、鼓をうち＝　よき音の琴と立琴をかきならせ

三 新月と満月にラッパを吹き＝ われらの祭りの日に吹きならせ
四 これイスラエルのおきてなり＝ ヤコブの神のさだめなり
五 神さきにエジプトにいで行きたまいしとき、ヨセフの中にこれを立ててさだめと
なしたまえり＝ われ知らざりし言葉をかしこにてきけり
六 「我なんじの肩より重荷をのぞき＝ なんじの手をかごよりまぬかれしめたり
七 なんじ悩めるとき呼びしかば、我なんじをすくえり＝ われ雷のひそむ所にてな
んじに答え、メリバの水のほとりにてなんじをこころみたり
八 わが民よ聞け、我なんじにさとさん＝ イスラエルよ、われ望む、なんじの我に
従わんことを
九 なんじのうちにほかの神なく＝ またなんじ異なる神をおがむことなかれ
一〇 我はエジプトの国よりなんじを携えいだしたるなんじの神・主なり＝ なんじの
口を広くあけよ、われ物をみたしめん
一一 されどわが民はわが声にしたがわず＝ イスラエルはわれを好まず
一二 このゆえに我かれらが心のかたくなるにまかせ＝ その心のままに行くにまか
せたり
一三 望むらくはわが民われに聞きしたがい＝ イスラエルわが道に歩まんことを
一四 我すみやかに彼らのあだを服せしめ＝ わが手を彼らの敵にむけん
一五 主を憎みし者も主にしたがい＝ 彼らの年はとこしえにつづかん
一六 我はいと良き麦をもてなんじらをやしなわん＝ 岩よりいでたる蜜をもてなんじら
を飽かしむべし」

十六日晩祷

第八十二篇

一 神は神のつどいの中にたち＝ もろもろの神の中にてさばきをなしたもう
二 「なんじらはいつまで正しからざるさばきをなし＝ 悪しき者をかたより見るや
三 なんじら弱き者とみなしごに公平をほどこし＝ 苦しむ者と乏しき者のために正
しきさばきをおこなえ
四 弱き者と貧しき者をすくい＝ 彼らを悪しき者の手より助けいだすべし」

五　彼らは知ることなく悟ることなくして、暗き中をさまよえり＝　地のもろもろの
　基はうごきたり
六　われ言う、「なんじらは神なり＝　なんじらは皆いと高き者の子なり
七　されどなんじらは人のごとく死に＝　君たちのごとく倒れん」と
八　神よ、立ちて全地をさばきたまえ＝　もろもろの国はなんじのものなればなり

第八十三篇

一　神よ、黙したもうなかれ＝　神よ、もの言わで静まりいたもうなかれ
二　見よ、なんじのあだは騒ぎたち＝　なんじを憎む者はかしらをあげたり
三　彼らは巧みなるはかりごとをもてなんじの民に立ち向かい＝　ともにはかりてな
　んじの守りたもう者にさかろう
四　彼らは言う、「いざ彼らの国を断ちほろぼし＝　イスラエルの名の記憶せらるる
　ことなからしめん」と
五　彼らは心を一つにしてそむき＝　たがいに誓いをなしてなんじにさかろう
六　彼らはエドムの天幕に住むもの＝　またイシマエルびと、モアブびと、ハガルび
　と
七　ゲバル、アンモン、アマレク＝　ペリシテおよびツロの民なり
八　アッスリヤもまた彼らにくみし＝　ロトの子らのたすけをなせり
九　なんじさきにミデアンになしたまいしごとく彼らになしたまえ＝　キションの川
　にてシセラとヤビンとになしたまいしごとくなしたまえ
一〇　彼らはエンドルにてほろび＝　地のこやしとなれり
一一　彼らの貴人をオレブとゼエブのごとくなし＝　その君たちをゼバとザルムンナの
　ごとくなしたまえ
一二　彼らは言えり＝　「われら神の牧を取りてわがものとなすべし」と
一三　わが神よ、彼らを巻き上げらるるちりのごとくなしたまえ
一四　火の林を焼くがごとく＝　炎の山を燃やすがごとく
一五　なんじのあらしをもて彼らを追い＝　なんじのつむじ風をもて彼らを恐れしめた
　まえ

一六 彼らに恥を満たしめたまえ＝　さらば主よ、彼らなんじの御名をもとめん
一七 彼らをとこしえに恥じおそれしめ＝　あわて惑いて滅びうせしめたまえ
一八 さらば彼らは知るべし＝　御名を主と呼ぶなんじのみ全地をしろしめすいと高き者なりと

第八十四篇

一 万軍の主よ＝　なんじの御住まいはいかに愛すべきかな
二 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭をしたい＝　わが心わが身は生ける神に向かいてよろこびうたう
三 万軍の主・わが王・わが神よ＝　なんじの祭壇のほとりに、すずめも宿りをえ、つばめもそのひなを入るる巣をえたり
四 なんじの家に住むものはさいわいなり＝　かかる人はつねに、なんじをたたえまつらん
五 なんじを力とする者はさいわいなり＝　そのこころシオンの大路にある者はさいわいなり
六 彼らは涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉あるところとなす＝　また前の雨はもろもろの恵みをもてこれをおおえり
七 彼らは力より力にすすみ＝　ついにシオンに至りて神にまみゆ
八 主よ、万軍の神よ、わが祈りをききたまえ＝　ヤコブの神よ、耳を傾けたまえ
九 神よ、我らの盾なる者をみそなわし＝　なんじに油そそがれし者の顔をかえりみたまえ
一〇 なんじの大庭に住もう一日は千日にもまされり＝　われは悪の天幕におらんよりは、むしろわが神の家の門守とならんことをねごうなり
一一 そは主なる神は日なり盾なり＝　主は恩と栄光をあたえ、直くあゆむ者によき物を拒みたもうことなし
一二 万軍の主よ＝　なんじに寄り頼む者はさいわいなり

第八十五篇

一 主よ、なんじは御国に恵みを注ぎたまえり＝　なんじヤコブをふたたび栄えしめたまえり

二　なんじおのが民の不義をゆるし＝　そのもろもろの罪をおおいたまえり
三　なんじすべての怒りをすて＝　そのはげしき憤りを遠ざけたまえり
四　我らの救いの神よ、われらをかえし＝　われらに向かいて御怒りをやめたまえ
五　なんじとこしえに我らを怒りたもうや＝　世々に御怒りを引き延べたもうや
六　ふたたび我らを生かしたまわざるか＝　なんじの民になんじを喜ぶことを得しめたまわざるか
七　主よ、なんじのいつくしみを我らにしめし＝　なんじの救いを我らにあたえたまえ
八　われは主なる神の語りたもうことを聞かん＝　神はその民、その聖徒、主に心を向くる者に平和を語りたもうべし
九　げにその救いは神を恐るる者にちかし＝　かくて栄光は我らの国にとどまらん
一〇　いつくしみとまことと、ともに会い＝　義と平和と互いに口づけせり
一一　まことは地よりはえいで＝　義は天より見おろせり
一二　主は良きものを与えたまわん＝　かくて我らの国は産物をいだすべし
一三　義は主の前にゆき＝　主の歩みたもう跡は道とならん

十七日早祷

第八十六篇

一　主よ、なんじ耳をかたむけて我にこたえたまえ＝　我は貧しく、乏しければなり
二　わが命を守りたまえ、我は神をうやまうものなり＝　なんじに寄り頼むしもべをすくいたまえ
三　なんじはわが神なり、主よ、我をあわれみたまえ＝　我ひねもすなんじに呼ぼう
四　なんじのしもべの魂をよろこばせたまえ＝　主よ、わが魂はなんじをあおぎのぞむ
五　主よ、なんじは恵み豊かにして、赦すことを好みたもう＝　なんじに呼ばわるすべての者を、深くいつくしみたもう
六　主よ、わが祈りに耳をかたむけ＝　わが願いの声をききたまえ
七　我わが悩みの日になんじに呼ばわん＝　なんじ我に答えたもうべし

八　主よ、もろもろの神のうちになんじに等しきものはなく＝　なんじのみわざに等しきわざはなし
九　主よ、なんじの造れるもろもろの国民は御前にきたりて伏しおがまん＝　彼らは御名をあがむべし
一〇　なんじは大いなり、くすしきみわざをなしたもう＝　ただなんじのみ神にましますなり
一一　主よ、なんじの道を我に教えたまえ、我なんじのまことをあゆまん＝　心ひとつに御名をおそれしめたまえ
一二　主よ、わが神よ、われ心を尽くしてなんじに感謝し＝　とこしえに御名をあがめまつらん
一三　そはなんじのいつくしみ我におおいなり＝　なんじわが魂をよみの深き所より助けいだしたまえり
一四　神よ、高ぶれる者はわれに逆らいて起こりたち＝　荒ぶる人の群れはわが命をもとめ、なんじをおのが前に置かざりき
一五　されど主よ、なんじはあわれみと恵みにとみ＝　怒ることおそく、いつくしみとまことに豊かなる神にましませり
一六　我を顧み、我をあわれみたまえ＝　なんじのしもべに御力を与え、なんじのはしためのの子をすくいたまえ
一七　主よ、我に恵みのしるしを現わしたまえ、さらば我を憎むものこれを見て恥をいだかん＝　主よ、なんじは常にわれをたすけ、我をなぐさめたまいたればなり

第八十七篇

一　主の建てたまいし都は聖なる山の上にあり＝
二　まさりてシオンのすべての門を愛したもう
三　神のみやこよ＝　なんじにつきて多くの栄光あること語りつたえられたり
四　我はラハブとバビロンをも我を知るもののうちにあげん＝　ペリシテ、ツロ、エチオピヤを見よ、人々いう、「この者はかしこに生まれたり」と
五　シオンにつきてはかく言わん、「この者、かの者かしこに生まれたり」と＝　いと高き者みずからシオンの基を堅くしたもうなり

六　主は民らをかぞえて＝「この者はかしこに生まれたり」としるしたまわん
七　歌う者、踊る者みな言わん＝「わがもろもろの泉はなんじのうちにあり」と

第八十八篇

一　主よ、わが神よ、われ昼なんじに助けをもとめ＝夜、御前にさけべり
二　願わくはわが祈りを御前にいたらせ＝なんじの耳をわが叫びにかたむけたまえ
三　わが魂は悩みに満ち＝わが命はよみにちかづけり
四　われは墓にくだる者とともにかぞえられ＝力を失える人のごとくなれり
五　われは死ねる者のうちに捨てられし者のごとく＝殺されて墓のうちにある者のごとくなれり
六　またなんじがふたたび心にとめたまわざる人々のごとくなれり＝彼らは御手より断ちほろぼされたるものなり
七　なんじ我をいと深きはかに入れ＝暗きところ深き淵に置きたまえり
八　なんじの怒りはいたく我にせまる＝なんじ、そのもろもろの波をもて我をくるしめたまえり

八　わが親しき者を我より遠ざけ、我を彼らの忌みきろう者となしたまえり＝われは閉じこめられていずることあたわず
九　わが目は悲しみによりておとろえぬ＝主よ、われ日ごとになんじを呼び、なんじに向かいてわがもろ手をのべたり
一〇　なんじ死ねる者にくすしきみわざを現わしたまわんや＝うせたる者立ちてなんじをほめたたえんや
一一　なんじのいつくしみは墓のなかに述べられんや＝なんじのまことは滅びのなかにつたえられんや
一二　なんじのくすしきみわざは暗きに知られんや＝なんじの義は忘れの国に知らるることあらんや
一三　されど主よ、我なんじに向かいてさけべり＝あしたにわが祈りはみまえにいたらん
一四　主よ、なんじいかなれば我を捨てたもうや＝いかなれば我に御顔をかくしたもうや

一五 われ若きときより苦しみて死ぬるばかりなり＝ 我なんじの脅かしにあいておとろえはてたり

一六 なんじの激しき怒りわれをおそい＝ なんじのきびしき脅かしわれを攻めてほろぼせり

一七 これらの事ひねもす大水のごとく我をめぐり＝ ともにきたりて我をかこみふさげり

一八 なんじ我よりわが友と我をいつくしむ者とを遠ざけ＝ わが親しき者を暗きに入れたまえり

十七日晩祷

第八十九篇

一 主よ、我なんじのいつくしみをとこしえに歌わん＝ わが口をもてなんじのまことをよろず代に告げしらせん

二 なんじのいつくしみはとこしえに堅く立てられ＝ なんじのまことは天のごとく堅くさだまれり

三 なんじ言いたもう、「我わが選びし者と契約をむすび＝ わがしもべダビデにちかいたり

四 我なんじのすえを、とこしえに堅うし＝ ん」と

五 主よ、もろもろの天はなんじのくすしきみわざをほめたたえん＝ なんじのまことは聖なる者のつどいにてほめらるべし

六 大空のうちにてたれか主にたぐう者あらんや＝ 神の子らのなかに、たれか主のごときものあらんや

七 神は聖なる者のつどいにてかしこむべきものなり＝ 彼のまわりにあるすべての者にまさりて恐るべきものなり

八 主よ、万軍の神よ、なんじのごとく大能ある者はたれぞや＝ なんじのまことはなんじをめぐりたり

九 なんじ海の荒るるをおさめ＝ その波の立ち上らんときはこれを静めたもう

一〇 なんじラハブを打ちくだきて、殺されし者のごとくし＝ 強き御腕をもてあだを
散らしたまえり
一一 もろもろの天はなんじのもの、地もまたなんじのものなり＝ 世界とそのなかに
満つるものとはなんじの基したまえるものなり
一二 北と南はなんじ造りたまえり＝ タボル、ヘルモンは御名を喜びたたえん
一三 なんじに大能のみうであり＝ なんじの御手は強く、なんじの右の御手はたかし
一四 義と公平はなんじの御位のもといなり＝ いつくしみとまことは御前にさきだち
ゆく
一五 祭りの歌声を知る民はさいわいなり＝ 主よ、彼らは御顔の光のなかをあゆめり
一六 彼らは御名によりてひねもすよろこび＝ なんじの義をほめたとう
一七 彼らの力の輝きはなんじの恵みによりて我らの角はたかく上げら
れん
一八 我らの盾は主のものなり＝ 我らの王はイスラエルの聖者につけり
一九 そのとき 幻をもてなんじの聖徒に 告げたまえり、「われ力ある者に冠をさずけ＝
わが民の中よりひとりを選びてたかくあげたり
二〇 我わがしもべダビデを得＝ これにわが聖なる油をそそげり
二一 わが手は常に彼とともにあり＝ わが腕は彼をつよくせん
二二 あだは彼をあざむくことなく＝ 悪しき者は彼を軽しむることなからん
二三 我かれの前にもろもろの敵をやぶり＝ 彼を憎む者をうちたおさん
二四 わがまことといつくしみは彼とともにあり＝ わが名によりてその角は高く上げ
られん
二五 我また彼の手を海のうえにおき＝ その右の手を川の上におかん
二六 彼われに向かいてよばん＝ 『なんじはわが父なり、わが神、わが救いのいわな
り』と
二七 我また彼をわがういごとなし＝ 地の王たちのうちにていと高きものとなさん
二八 我とこしえにいつくしみを彼がためにたもち＝ これと立てし契約は変わること
なかるべし
二九 我またその末をとこしえにながらえしめ＝ その位を天の日数とひとしからし

めん

三〇　もしその子わが律法をすて＝　またわが定めにしたがいてあゆます

三一　もしわがおきてを破り＝　またわが戒めをまもらずば

三二　我つえをもて彼らのとがをただし＝　むちをもてそのよこしまをただすべし

三三　されど彼よりわがいつくしみを取り去らず＝　わがまことに背くことなからん

三四　我おのが契約をやぶらず＝　わがくちびるよりいでし言葉をかえじ

三五　われひとたび わが聖なることによりて ちかえり＝　われダビデに いつわりを言わじ

三六　その末はとこしえにつづき＝　その位は日のごとく常にわがまえにあらん

三七　また月のごとくとこしえに立てられ＝　大空とともにかたく立たん」と

三八　されどなんじその油そそぎし者を遠ざけてこれを捨て＝　これを激しくいきどおりたまえり

三九　なんじおのがしもべに立てし契約をすて＝　その冠を地に投げうちてけがしたまえり

四〇　なんじその城壁をことごとくやぶり＝　その

四一　かれは道を過ぐるすべての者にかすめられ＝　隣人にのののしらる

四二　なんじ彼が敵の右の手をたかくあげ＝　そのもろもろのあだを喜ばしめたまえり

四三　なんじ彼の剣をうちかえし＝　戦いに立つに堪えざらしめたまいき

四四　なんじその手より王のつえをうばい＝　その位を地に投げおとしたまえり

四五　その年若き日をちぢめ＝　恥をもて彼をおおいたまえり

四六　主よ、いつまでぞや、とこしえに隠れいたもうや＝　いつまで御怒りは火のごとく燃ゆるか

四七　人の命のいかに短きかを思いたまえ＝　なんじいたずらにすべての人の子を造りたまいしや

四八　たれか生きて死を見ざる者あらんや＝　たれかその魂をよみの力より救いうるものあらんや

四九　主よ、なんじはまことをもてダビデに誓いたまえり＝　昔の、みいつくしみはいずこにありや

一七　主よ、なんじのしもべの受くるそしりを御心にとめたまえ＝　我は民らの侮りを
　　わがふところにいだく
一八　主よ、なんじのもろもろのあだは我をそしり＝　なんじに油そそがれし者の足あ
　　とをそしれり
一九　主はとこしえにほむべきかな＝　アーメン、アーメン

十八日早祷

第九十篇

一　主よ、なんじは我らの住みかなり＝　いにしえより世々われらの住みかなり
二　山いまだ成りいでず、なんじいまだ地と世界を造りたまわざりし時より、なんじ
　　は神なり＝　とこしえよりとこしえまで、なんじは神なり
三　なんじ人をちりにかえらしめ＝　「人の子よ、なんじらかえれ」と言いたもう
四　なんじの目には、ちとせもすでに過ぐるきのうのごとく＝　また夜の間のひとと
　　きにおなじ
五　なんじは彼らを流れ去らしめたもう＝　彼らはひと夜の夢のごとく、あしたに
　　はえいずる青草のごとし
六　あしたに、はえいでてさかえ＝　ゆうべには、しおれて枯るるなり
七　我らはなんじの怒りによりて消えうせ＝　なんじの憤りによりておじまどう
八　なんじ我らの不義を御前におき＝　われらの隠れたる罪を御顔の光のなかにおき
　　たまえり
九　我らのもろもろの日はなんじの怒りのもとに過ぎ去り＝　我らがすべての年の尽
　　くるはひと息のごとし
一〇　我らが世にあるは七十年にすぎず＝　あるいは健やかにして八十年にいたらん
　　されどその誇るところは、ただ悩みと悲しみとのみ＝　その去りゆくことすみや
　　かにして我らもまた飛び去るなり
一一　なんじの怒りの力を知るものはたれぞ＝　なんじをかしこみ恐れ、その憤りを知
　　るものはたれぞ
一二　願わくは我らにおのが日をかぞうることをおしえ＝　知恵の心を得しめたまえ

一三　主よ、かえりみたまえ、いつまで怒りたもうや＝　願わくはなんじのしもべらを
　　あわれみたまえ
一四　あしたに我らをなんじのいつくしみにて飽きたらしめ＝　世を終わるまで喜び楽
　　しませたまえ
一五　我らを苦しめたまえる日、我らが災いにあいし年の多きをおもい＝　我らの喜び
　　の日を長からしめたまえ
一六　みわざをなんじのしもべらにしめし＝　なんじの栄光をその子らにあらわした
　　まえ
一七　我らの神・主の恵みを我らの上にくだし＝　我らの手のわざを我らの上に栄えし
　　めたまえ、我らの手のわざを栄えしめたまえ

第九十一篇

一　いと高き者のもと、その隠れ場にすまい＝　全能者の陰にやどるものあり
二　かれ主に言わん＝　「なんじはわが避け所、わが城、わが寄り頼む神なり」と
三　神なんじをかりゅうどのわなより助けいだし＝　恐ろしき疫病よりのがれしめた
　　まわん
四　主その羽をもてなんじをおおい、なんじその翼の下にかくれん＝　主のまことは
　　盾なり、こだてなり
五　夜は驚くべきことあり＝　昼はとびきたる矢あり
六　暗きにはしのびよる疫病あり、真昼には激しきほろびあり＝　されどなんじ恐る
　　ることあらじ
七　千人なんじのかたわらに倒れ、万人なんじの右にたおる＝　されどその災いはな
　　んじに近づくことなからん
八　なんじの目はただこの事をながめ見るのみ＝　なんじ悪しき者のむくいを見ん
九　なんじは主を避けどころとし＝　いと高き者をその住まいとなせり
一〇　されば災いなんじにいたらず＝　悩みなんじの天幕にちかづかじ
一一　そは主なんじのために御使いにおおせ＝　なんじが歩むもろもろの道にて、なん
　　じを守らせたまえばなり
一二　彼ら手にてなんじをささえ＝　なんじの足を石にふれざらしめん

一三　なんじはししとまむしとを踏み＝　若きしし
一四　彼われを愛して離れざるゆえに我これを救わん＝　彼わが名を知るゆえに我これをまもらん
一五　彼われを呼ばばわれ答えん＝　我その悩みの時にともにおりて彼を助け、彼にほまれを得させん
一六　われ長き命をもて彼をみち足らしめ＝　わが救いを彼に示さん

第九十二篇

一　主に感謝するはよきかな＝　いと高き者よ、御名をほめたとうるはいとよきかな
二　あしたになんじのいつくしみをあらわし＝　夜な夜な、なんじのまことを表わすはいとよきかな
三　十弦の琴と立琴をもちい＝　琴のたえなる調べに合わせて　たとうるは　いとよきかな
四　主よ、なんじみわざをもて我を楽しませたまえり＝　われ御手のわざをよろこびうたわん

五　主よ、なんじのみわざは大いなるかな＝　なんじのもろもろの思いはいとふかし
六　鈍き者はこれを知らず＝　愚かなる者はこれをさとらず
七　悪しき者は草のごとくもえいで＝　不義を行のう者はことごとくさかゆともはことごとく散らさるべし
八　彼らはとこしえに滅びに定められたり＝　されど主よ、なんじはとこしえに高きところにましませり
九　ああ主よ、なんじのあだは、見よ、なんじのあだはほろびん＝　不義を行のう者はことごとく散らさるべし
一〇　されど、なんじわが角を野牛のごとく高く上げたまえり＝　われは新しき油をそそがれたり
一一　わが目はわが敵のたおるるを見＝　わが耳はわれを攻むる悪しき者のほろぶるを聞けり
一二　正しき者はしゅろの木のごとくさかえ＝　レバノンの香柏のごとくそだつべし
一三　彼らは宮にうえられ＝　我らの神の大庭にさかゆるなり
一四　彼らは年老いてなお実をむすび＝　豊かにうるおいて緑したたるべし

一五　これ主の直きことをしめすなり＝　主はわが岩なり、主には不義あることなし

十八日晩祷

第九十三篇

一　主は統べ治めたもう＝　みいつを着たまえり
　　主は力を衣とし、帯となしたまえり＝　世界も堅く立ちて動かさるることなし
二　なんじの御位はいにしえより堅くたちぬ＝　なんじはとこしえよりいませり
三　大水は声をあげたり、主よ、大水その声をあげたり＝　大水そのとどろきのこえをあぐ
四　高きにいます主はいとつよし＝　その勢いは多くの水のとどろくにまさり、海の大波にまさるれり
五　なんじの詔はいとかたし＝　主よ、聖なることはとこしえまでなんじの家にふさわしきなり

第九十四篇

一　主よ、あだをかえすはなんじにあり＝　神よ、あだをかえすはなんじにあり、願わくは御光をはなちたまえ
二　世をさばきたもう者よ、立ちたまえ＝　高ぶる者にその受くべき報いをあたえたまえ
三　主よ、悪しき者いつまでほこるや＝　いつまで勝ちほこるや
四　彼らはみだりに言葉をいだして誇りがにかたり＝　すべて不義を行のう者はみずからたかぶれり
五　主よ、彼らはなんじの民をうちくだき＝　なんじの嗣業をくるしむ
六　彼らはやもめと宿りびとの命をとり＝　みなしごをころすなり
七　彼ら言う、「主は見ず＝　ヤコブの神は悟らざるべし」と
八　民のうちのいと鈍き者よ、なんじらさとれ＝　愚かなる者よ、なんじらいずれの日にか、かしこからん
九　耳を植えしもの、聞くことをせざらんや＝　目を造れるもの、見ることをせざらんや

一〇 もろもろの国民を懲らすもの、罰することをせざらんや＝　人に知識を与うるもの、知ることなからんや

一一 主は人の思いをしり＝　そのむなしきことを知りたもう

一二 主よ、なんじの懲らしめたもう人はさいわいなり＝　なんじの律法を教えらるる人はさいわいなり

一三 なんじかかる人を災いの日よりのがれしめて、安きをあたえたまわん＝　悪しき者のためには穴掘らるべし

一四 そは主その民を捨てたまわず＝　その嗣業を見捨てたまわざればなり

一五 正義は正しき者に帰し＝　心直き者はみなそのあとにしたがわん

一六 たれかわがために立ちて悪しき者に向かわんや＝　たれかわがために立ちて悪を行のう者をせめんや

一七 主われを助けたまわざりせば＝　わが魂はとく音なき所に住まいしならん

一八 されどわが足すべりぬと思いしとき＝　主よ、なんじのいつくしみ我をささえたまえり

一九 わがうちに思い煩いの満つるとき＝　なんじの慰め、わが魂をよろこばしむ

二〇 悪しき王たちはなんじに親しむことを得んや＝　彼らはおきてを設け、悪をはかるなり

二一 彼らは相結びて正しき者の命をそこない＝　罪なき者を死にさだむ

二二 されど主はわが高きやぐらとなり＝　寄り頼む岩となりたまえり

二三 主はかれらの不義をその身にむくい、かれらをその悪しきことのゆえに滅ぼしたまわん＝　我らの神・主は彼らを滅ぼしたまわん

十九日早祷

第九十五篇

一 いざ我ら主に向かいてうたい＝　救いの岩に向かいて喜ばしき声をあげん

二 我ら感謝をもてその御前にゆき＝　主に向かい歌をもて喜ばしき声をあげん

三 主は大いなる神なり＝　もろもろの神にまされる大いなる王なり

四 地の深き所みなその手にあり＝　山の頂もまた神のものなり

五　海は神のもの、その造りたもうところなり＝　かわける地もまたその手にてつくりたまえり
六　いざ我ら拝みひれ伏し＝　我らを造れる主の御前にひざまずくべし
七　主は我らの神なり＝　我らはその牧の民、その手のひつじなり
八　きょうなんじら御声をきけよかし＝　なんじらメリバとマサにありし日のごとく心をかたくなにするなかれ
九　その時なんじらの親たち我をこころみ＝　我をためし、わがわざを見たり
一〇　我その世のために憂いて四十年を経たり＝　われ言えり、「彼らは心あやまれる民、わが道を知らざりき」
一一　このゆえにわれ憤りて誓えり＝　「彼らはわが休みに入るべからず」と

第九十六篇

一　新しき歌を主に向かいてうたえ＝　全地よ、主に向かいてうとうべし
二　主に向かいて歌い、御名をほめよ＝　日ごとにその救いを宣べつたえよ
三　国々のなかにその栄光をあらわし＝　もろもろの民の中にそのくすしきみわざを宣べつたえよ
四　主は大いなり、いともほめたとうべきものなり＝　もろもろの神にまさりて恐るべきものなり
五　民らのもろもろの神は皆むなしきものなり＝　されど主はもろもろの天をつくりたまえり
六　誉れとみいつはその御前にあり＝　力と麗わしきとはその聖所にあり
七　もろもろの民のやからよ、主に帰しまつれ＝　栄光と力を主に帰しまつれ
八　その御名にふさわしき栄光を主に帰しまつり＝　供え物をたずさえてその大庭にきたれ
九　清き装いもて主を拝みまつれ＝　全地よ、その御前におののけ
一〇　国々の民のなかに言え＝　「主は統べ治めたもう」と　世界も堅く立ちて動かさるることなし＝　主は公平をもてもろもろの民をさばきたまわん
一一　天は喜び地はたのしみ＝　海とそのなかに満つるものとは鳴りどよみ

三　野原とその中のすべての物とは喜ぶべし＝　林のもろもろの木もまた主の御前に
　よろこびうたわん
一三　そは主きたりたもう＝　地をさばかんとてきたりたまえばなり
　主は義をもて世界をさばき＝　まことをもてもろもろの民をさばきたまわん

第九十七篇

一　主は統べ治めたもう＝　全地はたのしみ、多くの島々はよろこぶべし
二　雲とやみとはそのまわりにあり＝　義と公平とはその御位のもといなり
三　火はその御前にすすみ＝　そのまわりの敵をやきつくす
四　主のいなずまは世界をてらす＝　地はこれを見てふるえり
五　もろもろの山は主の御前にてとけ＝　全地の主の御前にてろうのごとくとけぬ
六　もろもろの天はその義をあらわし＝　もろもろの民はその栄光をみたり
七　すべて刻める像を拝み、空しき者によりて誇る者ははずかしめをうくべし＝　も
　ろもろの神は主の御前にひれ伏さん
八　シオンは聞きて喜び、ユダの娘たちはたのしまん＝　神よ、これなんじのさばき
　のゆえによりてなり
九　主よ、なんじ全地の上にましましていと高く＝　もろもろの神にまさりていとと
　うとし
一〇　主は悪をにくむ者をいつくしみ＝　聖徒の命をまもりて、悪しき者の手より助け
　いだしたもう
一一　光は正しき人のために蒔かれ＝　喜びは心直き者のためにあらわる
一二　正しき人よ、主によりてよろこべ＝　その聖なる御名に感謝せよ

十九日晩祷

第九十八篇

一　新しき歌を主に向かいて歌え、主はたえなることをおこない＝　その右の手その
　聖なる腕をもて、勝利を得たまえり
二　主はその勝利をしらしめ＝　その義をもろもろの国民の前にあらわしたまえり
三　イスラエルの家に向かいて、いつくしみとまことととを忘れたまわず＝　地のはて

もことごとくわが神の勝利を見たり
四　全地よ、主に向かいて喜ばしき声をあげよ＝　声をはなちて喜び歌い、ほめたたえよ
五　琴をもて主をほめ＝　琴の音と歌の声をもてたたえよ
六　ラッパと角笛を吹きならし＝　王なる主の御前に喜ばしき声をあげよ
七　海とそれに満てるもの鳴りどよみ＝　世界とその中に住むもの鳴りどよむべし
八　大水はその手をうち鳴らし＝　もろもろの山はともに主の御前に喜びうたうべし
九　主は地をさばかんためにきたり＝　義をもて世界をさばき、公平をもてもろもろの民をさばきたまわん

第九十九篇

一　主は統べ治めたもう、もろもろの民はおののくべし＝　主はケルビムの上に座したもう、地は震わん
二　主はシオンにましまして大いなり＝　もろもろの民の上にいましてとうとし
三　彼らはなんじの大いなる恐るべき御名をほめたたうべし＝　主は聖なるかな
四　大能の王、義を愛したもうものよ＝　なんじはかたく公平をたて、ヤコブの中にさばきと正しきとをおこないたもう
五　我らの神・主をあがめ、その足台のもとにて拝みまつれ＝　主は聖なるかな
六　その祭司のなかにモーセとアロンとあり、その御名を呼ぶ者のなかにサムエルあり＝　彼ら主を呼びしにこたえたまえり
七　主は雲の柱のうちにいまして彼らに語りたまえり＝　彼らはそのあかしとその賜わりたるおきてを守りたり
八　我らの神・主よ、なんじは彼らに答えたまえり＝　なんじは彼らを赦したもう神にいませり、されどその悪しきわざには報いたまえり
九　我らの神・主をあがめ、その聖なる山にて拝みまつれ＝　我らの神・主は聖なればなり

第百篇

一　全地よ、主に向かいて喜ばしき声をあげよ＝　喜びをいだきて主に仕え、歌いつ

つその御前にきたれ
三　知れ、主こそ神にますなれ＝　我らを造りたまえる者は主にましませば、我らは
そのものなり
我らはその民なり＝　その牧のひつじなり
四　感謝しつつ御門に入り、ほめたたえつつ大庭に入れ＝　感謝して御名をほめたたえよ
五　主は恵み深く、そのいつくしみかぎりなく＝　そのまことよろず世におよぶなり

第百一篇

一　われ誠と正しきにつきてうたわん＝　主よ、我なんじに向かいてうたわん
二　我は全き道に心をとめん、なんじいずれのとき我にきたりたもうや＝　われ直き心をもてわが家のうちをあゆまん
三　我わが目の前に卑しきことをおかず＝　道にそむく者のわざを憎む、そのわざは我にかかわりなし
四　我はひがめる心をいだかず＝　悪を知ることなからん
五　我ひそかにその友をそしる者をほろぼさん＝　高ぶる目、おごれる心のものを忍ばじ
六　我は国のうちのまことある者に目をとめ、我とともに住まわせん＝　全き道を歩む人はわれにつかえん
七　欺く者はわが家のうちに住むことをえず＝　偽りを言う者はわが目の前に立つことをえじ
八　われ朝な朝なこの国の悪しき者をことごとくほろぼし＝　悪を行のう者を主の町よりことごとく断ちのぞかん

二十日早祷

第百二篇

一　主よ、わが祈りを聞きたまえ＝　わが叫びの声を御前にいたらせたまえ
二　わが悩みの日に御顔を隠したもうなかれ＝　なんじの耳を我にかたむけ、わが叫ぶ日にすみやかにこたえたまえ

三　わがもろもろの日は煙のごとく消え＝　わが骨は炉のごとく燃ゆるなり
四　わが心は草のごとく打たれてしおれたり＝　われ糧をくろうことを忘れたり
五　わが骨はわが肉につく＝　わが大いなる嘆きによりてなり
六　我は荒れ野のはげたかのごとく＝　荒れ跡のふくろうのごとし
七　われは夜もねむらず＝　友なくして屋根におるすずめのごとくなれり
八　わがあだはひねもす我をそしる＝　我をあざける者わが名によりてのろう
九　我は糧をくろうごとくに灰をくらい＝　わが飲みものには涙をまじえたり
一〇　こはみななんじの怒りと憤りによりてなり＝　なんじ我をもたげて投げすてたまえり
一一　わが命は夕日の影のごとし＝　我は草のごとくしおれたり
一二　されど主よ、なんじはとこしえに御位に座したもう＝　その御名はよろず世におよばん
一三　なんじ立ちてシオンをあわれみたまわん＝　その定まれる時はきたれり、シオンに恵みを施したもうときなり

一四　なんじのしもべらはシオンの石をもよろこび＝　そのちりをさえいとおしむ
一五　もろもろの国民は主の御名をおそれ＝　地のもろもろの王はその栄えをおそれん
一六　主はシオンをきずき＝　栄光をもてあらわれたまわん
一七　主は乏しき者の祈りをかえりみ＝　彼らの願いを軽しめたまわざるべし
一八　きたらんとする後の世のためにこのことをしるせ＝　さらば後に生まるる民は主をほめたたうべし
一九　主は聖なる高き所より見おろし＝　天より地を見たまえり
二〇　捕われびとの嘆きをきき＝　死に定まれる者を解きはなちたまえり
二一　これ人々シオンにて主の御名をあらわし＝　エルサレムにてその誉れをあらわさんためなり
二二　その時もろもろの民つどいあつまり＝　国々主をおがみまつらん
二三　主はわが力を道の半ばにて衰えしめ＝　わが命を短くしたまえり
二四　われ言えり、「わが神よ、わが命の半ばにて我を取り去りたもうなかれ＝　なんじの年は世々かぎりなし」

二五 なんじいにしえ地の基をすえたまえり＝ 天もまた御手のわざなり
二六 これらは滅びん＝ されどなんじは常にながらえたまわん
これらはみな衣のごとくふるびん＝ なんじこれらを上着のごとく替えたまえば
彼らはうせ去らん
二七 されどなんじは変わることなく＝ なんじの年は終わらざるなり
二八 なんじのしもべらの子は安らかに住み＝ その末は御前に堅く立てらるべし

第百三篇

一 わが魂よ、主をほめまつれ＝ わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名を
ほめまつれ
二 わが魂よ、主をほめまつれ＝ そのすべての恵みをわするるなかれ
三 主はなんじのすべてのとがをゆるし＝ なんじのすべての病をいやし
四 なんじの命を墓よりあがないいだし＝ いつくしみとあわれみを、なんじにこう
むらせたもう
五 主はなんじの生けるかぎり良き物に飽かしめたもう＝ かくてなんじ若やぎてわ
もう
六 主は正しきをおこない＝ すべてしいたげらるる者のために審きをおこないた
もう
七 主はおのれの道をモーセに知らしめ＝ そのみわざをイスラエルの子らに知らし
めたまえり
八 主はあわれみ深くめぐみ深く＝ 怒りたもうことおそく、いつくしみ豊かにまし
ませり
九 つねに責むることをなしたまわず＝ とこしえに怒りをいだきたまわざるなり
一〇 主は我らの罪にしたがいて我らをあしらいたまわず＝ 我らの悪の多きにしたが
いて、報いたまわず
一一 天の地よりも高きごとく＝ 主を恐るる者にたもういつくしみはおおいなり
一二 東の西を離るること遠きごとく＝ 我らよりとがを遠ざけたもうなり
一三 父のその子をあわれむごとく＝ 主はおのれを恐るる者をあわれみたもうなり
一四 主は我らの造られしさまを知り＝ 我らのちりなることを忘れたまわざるなり

一五　人の命は草のごとく＝　その栄えは野の花のごとし
一六　風すぐればうせて跡なく＝　そのありし所に問えど、さらに知らざるなり
一七　されど主のあわれみはとこしえまで主を恐るる者にいたり＝　その
　　正しきは子らのまた子らにいたる
一八　その契約を守るものにおよび＝　その戒めを心にとめて行のうものにおよぶ
一九　主はその御位をもろもろの天に堅くすえたまえり＝　そのまつりごとはよろずの
　　物のうえにあり
二〇　主の御使いよ、主をほめまつれ＝　主の御言葉の声をきき、これを行のう勇士よ、
　　主をほめまつれ
二一　主の万軍よ、主をほめまつれ＝　その御心を行のうしもべらよ、主をほめまつれ
二二　造りたまえるよろずの物よ、そのまつりごとの下なるすべてのところにて主をほ
　　めまつれ＝　わが魂よ、主をほめまつれ

二十日晩祷

第百四篇

一　わが魂よ、主をほめまつれ＝　わが神・主よ、なんじはいと大いなり、誉れと
　　いつとを着たまえり
二　なんじ光を衣のごとくにまとい＝　天を幕のごとくに張りたもう
三　なんじ水の上におのが殿のうつばりをおき＝　雲をおのが車となし、風の翼に乗
　　りあるきたもう
四　なんじ風を使いとなし＝　火と炎をしもべとなしたもう
五　なんじ地を基の上におき＝　とこしえにゆるぐことなからしめたもう
六　なんじ衣におおうごとく、大水にて地をおおいたまえり＝　水はたたえて山の
　　うえを越ゆ
七　なんじ責めたまえば水しりぞき＝　いかずちをとどろかせたまえば、水たちまち
　　去りぬ
八　山はあらわれ、谷は沈み＝　なんじの定めたまえるごとくなれり
九　なんじ水に境を設けて、これを越えしめず＝　ふたたび地をおおうことなからし

めたまえり
一〇　主は泉を谷にわきいでしめたもう＝　その流れは山のあいだにはしる
一一　かくて野のもろもろの獣はその水を飲み＝　野のろばもそのかわきをいやす
一二　空の鳥もそのほとりにすみ＝　こずえの間にさえずりうとう
一三　主は高き殿よりもろもろの山に水そそぎたもう＝　地はみわざの実によりて満ちたりぬ
一四　主は草をはえしめて家畜にあたえ、人に作物をつくらしめたもう＝　かくて人は土より食い物をいだすなり
一五　また人の心を喜ばしむるぶどう酒をつくり＝　人の顔をつややかならしむる油、人の心を強からしむる糧をつくるなり
一六　主の木はゆたかに水そそがれ＝　その植えたまえるレバノンの香柏はうるおいたり
一七　鳥はそのなかに巣をつくり＝　こうのとりは、もみの木をその住まいとせり
一八　野のやぎには高き山あり＝　穴ぐまの隠れがには岩あり

一九　主は月をつくりて季節をつかさどらせたまえり＝　日はその傾くときを知る
二〇　なんじ暗やみを造りたまえば夜あり＝　そのとき林の獣はみな忍び忍びにいできたる
二一　若きししほえてえをあさり＝　神に向かいて食いものをもとむ
二二　日いずれば彼らしりぞき＝　みなその穴に伏す
二三　人はいでてわざをなし＝　その勤労は夕べにまでいたる
二四　主よ、なんじのみわざはいとおおきかな＝　これらはみななんじの知恵にて造りたまえり、地はなんじの造りたまいしものにて満つ
二五　かしこに大いなる広き海あり＝　そのなかに数しられぬもの満ち、小さなる大いなる生けるものあり
二六　舟その上をはしり＝　なんじの造りたまえるわにそのうちにあそびたわむる
二七　彼らはみななんじを待ちのぞむ＝　なんじ良き時に食い物をこれに与えたもう
二八　彼らはなんじの与えたもう物をひろう＝　なんじ御手を開きたまえば、彼ら良き物にあきたりぬ

一九　なんじ御顔をおおいたまえば、彼らはあわてふためく＝　なんじ彼らの息をとり
たまえば、彼らは死にてちりにかえる
二〇　なんじ御霊をいだしたまえば、すべてのものみな造らる＝　なんじ地の面を新た
になしたもう
二一　願わくは主の栄光とこしえにあらんことを＝　主そのみわざを喜びたまわんこ
とを
二二　主地を見たまえば、地はふるい＝　山に触れたまえば山はけむりをいだす
二三　われ生けるかぎり主に向かいてうたい＝　わがながろうるほどはわが神をほめう
たわん
二四　わが思い主によろこばれんことを＝　われ主によりてよろこべばなり
二五　罪びとは地より断ち滅ぼされ、悪しき者またあらざらんことを＝　わが魂よ、主
をほめたたえよ、主をほめまつれ

二十一日早祷

第百五篇

一　主に感謝してその御名をよび＝　そのみわざをもろもろの民のなかに知らしめよ
二　主に向かいてうたえ、主をほめうたえ＝　そのもろもろのくすしきみわざをかた
れ
三　その聖なる御名をほこれ＝　主をたずね求むる者の心はよろこぶべし
四　主とその御力を尋ねもとめよ＝　つねにその御顔をたずねよ
五　そのなしたまえるたえなるみわざをおぼえ＝　くすしきみわざと御口のさばきを
こころにとめよ
六　そのしもべアブラハムの末よ、これをおもえ＝　ヤコブの子らよ、主の選びたま
いし者よ、これを心にとどむべし
七　かれは我らの神・主なり＝　そのみさばきは全地にあり
八　主はとこしえにその契約を御心にとめたまえり＝　その御言葉はよろず世に命じ
たまいしものなり
九　アブラハムと結びたまいし契約なり＝　イサクに与えたまいしちかいなり

一〇 主これを堅くし、ヤコブのためにおきてとなし＝　イスラエルのためにとこしえ
の契約となしたまえり
一一 かくて主は言いたもう、「我なんじにカナンの地をあたえ＝　なんじらの嗣業の
分となさん」と
一二 そのとき彼らはいと少なくして数うるに足らず＝　その地に宿れるものなりき
一三 この国よりかの国に行き＝　この国よりほかの民に行けり
一四 主は人の彼らをしいたぐるを許したまわず＝　彼らのゆえによりて王たちを懲ら
しめたまえり
一五 かくて言いたもう、「わが油そそぎし者にふるるなかれ＝　わが預言者をそこの
うなかれ」と
一六 主はききんを地にまねき＝　人のつえとする糧をことごとくくだきたまえり
一七 また彼らの前にひとりをつかわしたまえり＝　そは売られてしもべとなりしヨセ
フなり
一八 その足はかせにて痛められ＝　その首は鉄のかせにてつながれたり

一九 かくて彼の言いしごとくなるまで＝　主の御言葉かれをこころみたまえり
二〇 王は人をつかわして彼を解き＝　もろもろの民を治むる者はかれをゆるし
二一 彼をその家づかさとなし＝　その宝をことごとくつかさどらせ
二二 心のままにこの国の君たちをみちびき＝　長老たちに知恵をさずけしむ
二三 そのときイスラエルはエジプトにきたり＝　ヤコブはハムの地にやどれり
二四 主は大いにその民を増しくわえ＝　これをその敵よりも強くしたまえり
二五 また敵のこころを変えてその民を憎ましめ＝　おのれのしもべらを欺きあしらわ
しめたまえり
二六 主はそのしもべモーセをおくり＝　その選びたまえるアロンをつかわしたまえり
二七 彼らは主のしるしをハムの地にしめし＝　またその国にくすしきわざをおこな
えり
二八 主はやみをつかわして地を暗くしたまえり＝　されど彼らはその御言葉にしたが
わざりき
二九 主は彼らのすべての水を血にかえ＝　その魚をころしたまえり

三〇 彼らの国には、かわず群れいで＝　王の殿のうちにまで満ちふさがりぬ
三一 主言いたまえば、はえむらがり＝　ぶよそのすべての境にいりきたりぬ
三二 主は雨にかえてひょうを降らせ＝　いなずまを彼らの国にあまねくひらめかせたまえり
三三 彼らのぶどうの木といちじくの木を撃ち＝　その国のもろもろの木を折りくだきたまえり
三四 主言いたまえばいなごきたり＝　数知れぬ青むしきたり
三五 彼らの国のすべての青物を食いつくし＝　その地の実をくいつくせり
三六 主は彼らの国のすべてのういごを撃ち＝　彼らのすべての長子を撃ちたまえり
三七 かくてイスラエルをみちびき金銀を携えていで行かしめたまえり＝　そのやからのうちにひとりの倒るる者もなかりき
三八 エジプトは彼らのいずるをよろこべり＝　彼らを恐るる思いそのうちに起こりたればなり
三九 主は雲を張りておおいとなし＝　夜は火をもて照らしたまえり
四〇 彼ら求むれば主うずらをきたらしめ＝　天の糧にて彼らをあかしめたまえり
四一 岩を開きたまえば、水ほとばしりいで＝　うるおいなき地に川のごとく流れいでたり
四二 そは主その聖なる誓いをわすれず＝　そのしもべアブラハムを覚えたまいたればなり
四三 かくて主はその民を導きて喜びつついでしめ＝　その選べる民を歌いつついで行かしめたまえり
四四 主はもろもろの国びとの地を彼らに与えたまえり＝　彼らはもろもろの民の勤労の実をおのがものとせり
四五 こは彼らがそのさだめに従い、その律法を守らんためなり＝　主をほめまつれ

二十一日晩祷

第百六篇

一 主をほめまつれ、主に感謝せよ＝　その恵みはふかく、そのいつくしみはかぎり

なし

二　たれか主の力あるみわざをかたり＝　そのほむべきことを、ことごとく言いあらわしえんや

三　義を守る人はさいわいなり＝　つねに正しきを行のう者はさいわいなり

四　主よ、なんじの民を恵みたもうとき、われを覚えたまえ＝　彼らを救いたもうとき、我をたすけたまえ

五　さらば我なんじの選びたまえる者のさいわいを見、なんじの国のよろこびをよろこび＝　なんじの嗣業とともにほこることをせん

六　我らも先祖もともに罪をおかせり＝　我らよこしまをなし、悪をおこなえり

七　我らの先祖はエジプトにありしとき、なんじのくすしきみわざに心をとめず＝　なんじの豊かなるいつくしみを思わず、紅海のほとりにていと高き者にそむきたり

八　されど主は御名のゆえをもて彼らを救いたまえり＝　その大いなる御力を知らしめんとてなり

九　また紅海を責めたまいたればかわきたり＝　かくて民を導きて野を行くごとく淵を過ぎ行かしめたまえり

一〇　主は敵の手より彼らをすくい＝　あだの力より彼らを解きはなちたまえり

一一　水その敵をおおいたり＝　そのひとりだに残りし者なかりき

一二　このとき彼ら御言葉を信じ＝　そのほまれをうたえり

一三　されど彼らほどなくそのみわざをわすれ＝　そのおしえを待たず

一四　野にていたくむさぼり＝　荒れ野にて神をこころみたりき

一五　主は彼らの願いをかなえたまえり＝　されど病をおくりて彼らをやせ衰えしめたまえり

一六　民は営のうちにてモーセをねたみ＝　主の聖者アロンをねたみたり

一七　そのとき地ひらけてダタンをのみ＝　アビラムのともがらをおおい

一八　火はこのともがらのなかに燃えおこり＝　炎は悪しき者を焼きつくせり

一九　彼らはホレブの山にて子牛をつくり＝　鋳たる像をおがみたり

二〇　彼らは神の栄光にかえて＝　草をくろう牛の形をつくれり

二一　彼らはおのが救い主なる神をわすれ＝　エジプトにて大いなるわざをなしたまえる神をわすれ

二二　ハムの地にてくすしきみわざをなし＝　紅海のほとりにて恐るべきことをなしたまえる神をわすれたり

二三　このゆえに神は彼らを滅ぼさんとのたまえり＝　されど選びたまえるモーセ、この危うきにのぞみ、御怒りをとめて彼らを滅びよりまぬかれしめたり

二四　彼らは麗わしき地をあなどり＝　主の約したまいしことを信ぜず

二五　その天幕にてつぶやき＝　主の御声にしたがわざりき

二六　このゆえに主は彼らに向かいて御手をあげ＝　野にて彼らをたおれしめ

二七　もろもろの国民のうちにその末を追いやり＝　もろもろの地に彼らを散らさんとのたまえり

二八　彼らはバアルペオルにつかえ＝　むなしき者にささげしいけにえをくらえり

二九　彼らはそのわざをもて主の御怒りをまねきたれば＝　彼らのうちに疫病おこれり

三〇　その時ピネハス立ちてとりなせり＝　かくて疫病はやみぬ

三一　これによりてピネハスは義とせられ＝　世々とこしえにおよべり

三二　彼らはメリバの水のほとりにて主の御怒りを引きおこせり＝　彼らのためにモーセもわざわいにあえり

三三　彼ら神の御霊をいからせ＝　モーセくちびるにてみだりにもの言いたればなり

三四　彼らは主の命じたまえることにしたがわず＝　もろもろの民をほろぼさず

三五　かえってもろもろの国民とまじわり＝　彼らのわざにならい

三六　おのがわなとなりし彼らの偶像につかえ＝　そのむすこ娘を悪霊にささげ

三七　罪なき血、すなわちカナンの偶像にささげたるおのがむすこ娘の血をながしぬ＝　かくて国は血にてけがされたり

三八　かく彼らのわざはみずからをけがし＝　その行ないは姦淫なりき

三九　このゆえに主の怒りその民に向かいて燃えあがり＝　その嗣業をにくみたまえり

四〇　彼らをもろもろの国民の手にわたしたまえり＝　彼らはおのれを憎む者におさめられたり

四一　彼らはあだにしいたげられ＝　その力のもとに打ち伏せられたり

四三 主はしばしば彼らを助けたまえり＝　されど彼らはことさらにそむき、そのよこしまによりて卑しきものとせられたり

四四 されど主は彼らの叫びをきき＝　その悩みをかえりみたまえり

四五 その契約を彼らのためにおもいいで＝　いつくしみ豊かなるにより、御心を変えたまえり

四六 彼らをとりこにしたる者どもの心をかえ＝　彼らをあわれましめたまえり

四七 我らの神・主よ、我らを救い、もろもろの国民のうちより集めたまえ＝　我らは御名に感謝し、なんじをほめたたえてほこらん

四八 イスラエルの神・主はとこしえよりとこしえまでほむべきかな＝　すべての民はアーメンと唱うべし、主をほめまつれ

二十二日早祷

第百七篇

一 主に感謝せよ＝　その恵みは深く、そのいつくしみはかぎりなし

二 主に贖われし者はしか言うべし＝　主は彼らを悩みよりあがないたまえり

三 彼らをもろもろの国より取り＝　東西北南より集めたまえり

四 人なき荒れ野にさまよい＝　その住むべき町にいたる道を見いださざる者あり

五 彼ら飢えまたかわき＝　魂そのうちにおとろえたり

六 かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝　主かれらをその悩みより助けいだしたまえり

七 主は彼らを直き道にみちびき＝　住むべき町に行かしめたまえり

八 彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝　人の子らになしたまえるくすしきみわざによりて、主に感謝せんことを

九 主はかわける者をみちたらしめ＝　飢えたる者を良きものにて飽かしめたまえばなり

一〇 暗きと死の陰におるものあり＝　苦しみと鎖につながれたり

一一 彼らは神の言葉にそむき＝　いと高き者の教えをかろしめたり

一二 主は苦役をもてその心を低くしたまえり＝　彼ら倒れたれど助くる者なかりき

一三　かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝　主かれらをその悩みより助けいだし
たまえり
一四　主は暗きと死の陰より彼らを導きいだし＝　そのかせをこぼちたまえり
一五　彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝　人の子らになしたまえるくすしきみわ
ざによりて、主に感謝せんことを
一六　主は青銅の門をこぼち＝　鉄の貫の木を断ち切りたまえばなり
一七　おのが罪ふかき行ないによりて病み＝　おのがよこしまによりてなやむ者あり
一八　彼らはすべての食い物をきらい＝　死の門にちかづきたり
一九　かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝　主かれらをその悩みより助けいだし
たまえり
二〇　主はその御言葉をつかわして彼らをいやし＝　その滅びより助けいだしたまえり
二一　彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝　人の子らになしたまえるくすしきみわ
ざによりて、主に感謝せんことを
二二　彼ら感謝のいけにえをささげ＝　喜びの歌をもてそのみわざを言いあらわさんこ
とを
二三　舟にて海にうかび＝　大海にてわざをいとなむ者あり
二四　彼ら主のわざを見＝　淵にてそのくすしきみわざを見たり
二五　主命じて荒き風を吹きおこし＝　海の波をあげしめたまえり
二六　彼ら天にのぼり、また淵にくだり＝　悩みによりて肝をうしなえり
二七　こなたかなたにかたむき＝　酔いたる者のごとくよろめきて、そのなすところを
知らず
二八　かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝　主かれらをその悩みより助けいだし
たまえり
二九　主はあらしをしずめ＝　波を穏やかになしたまえり
三〇　かくて彼らはその静まれるをよろこべり＝　主は彼らをその望む港にみちびきた
まえり
三一　彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝　人の子らになしたまえるくすしきみわ
ざによりて、主に感謝せんことを

三　彼ら民の集会にて主をあがめ＝　長老のつどいにて主をほめたとうべし
三三　主は川を野にかわらせ＝　泉をかわける地にかわらせ
三四　肥えたる地を塩の地にかわらせたもう＝　そのなかに住める民の悪によりてなり
三五　主はまた荒れ野を池にかわらせ＝　かわける地を泉にかわらせたもう
三六　主は飢えたる者をそこに住まわせ＝　かしこに町をたてたり
三七　彼らは畑にたねをまき＝　ぶどう園を設けて豊かなる実を得たり
三八　主の祝福によりて彼らはいたくふえひろがり＝　主はその家畜の減ることをゆるしたまわず
三九　彼らがしいたげと悩みと悲しみにより＝　その数少なくなり、かついやしめられ、しとき
四〇　主はもろもろの君に侮りをそそぎ＝　道なき荒れ地にさまよわせたまえり
四一　されど主は貧しき者を悩みのうちよりあげ＝　そのやからを羊の群れのごとくならしめたまえり
四二　直き者はこれを見てよろこび＝　もろもろの悪はその口をふさげり
四三　すべて賢き者はこれらのことに心をよせ＝　主のいつくしみをさとるべし

二十二日晩祷

第百八篇

一　神よ、わが心さだまれり＝　われ歌いまつらん、たたえまつらん、わがたましいよ、さめよ
二　琴よ、立琴よ、さめよ＝　我しののめを呼びさまさん
三　主よ、我もろもろの民のなかにてなんじに感謝し＝　国々のなかにてなんじをほめうたわん
四　そはなんじのいつくしみは大いにして天の上にいたり＝　なんじのまことは雲にまでおよぶ
五　神よ、みずからを天よりもたかくし＝　御栄えを全地の上にあげたまえ
六　なんじの愛したもう者を救わんために＝　右の御手をもて助け、我に答えたまえ
七　神はその聖所にて言いたまえり＝　「我いたく喜びてシケムをわかちスコテの谷

をあたえん

八　ギレアデはわがもの、マナセはわがものなり＝　エフライムはわがかぶと、ユダ
　はわがつえなり
九　モアブはわが足だらいなり、エドムにはわがくつを投げん＝　ペリシテに向かい
　てはわれ勝ちどきをあげん」と
一〇　我を堅固なる町に進ましむるものはたれぞ＝　我をエドムに導くものはたれぞ
一一　神よ、なんじは我らを捨てたまいしにあらずや＝　神よ、なんじは我らのいくさ
　びととともにいで行きたまわず
一二　願わくは助けを我にあたえて敵に向かわしめたまえ＝　人の助けはむなしければ
　なり
一三　我らは神によりて勇ましくはたらかん＝　我らの敵を踏むものは神なればなり

第百九篇

一　わがほめまつる神よ＝　默したもうなかれ
二　彼らは悪しき口と欺きの口をあけて我にむかい＝　偽りの舌をもてわれにかたり
三　恨みの言葉をもて我をなやまし＝　ゆえなく我を攻めたり
四　われ愛するに彼らかえりてわが敵となる＝　されど我かれらのために祈るなり
五　彼らは悪をもてわが善にむくい＝　恨みをもてわが愛にむくゆるなり
六　願わくは彼の上に悪しき人をたて＝　訴うる者に彼を訴えしめたまえ
七　彼さばかるる時は、罪あるものとせられ＝　その祈りも罪とせられんことを
八　その日は少なくなり＝　その富はほかの人にとられ
九　その子らはみなしごとなり＝　その妻はやもめとなるべし
一〇　その子らはさすらいて物をこい＝　その荒れたる住まいより追いいだされんこ
　とを
一一　その持てるすべての物は貸し主にうばわれ＝　その勤労の実は見知らぬ人にかす
　められ
一二　彼に恵みをほどこす者ひとりだになく＝　そのみなしごをあわれむ者もなく
一三　その末は絶えはて＝　その名は次の代にて消えうせんことを
一四　その先祖の罪は主の御前におぼえられ＝　その母の罪はぬぐい去られず

一五 これらはつねに主の御前におかれ＝　地にてかれを覚ゆる者なからしめたまえ
一六 そは彼あわれみを施すことを思わず＝　かえって貧しき者、乏しき者、心痛める
者を責めて殺さんとしたればなり
一七 彼はのろうことを好む、ゆえにのろいを彼に臨ましめたまえ＝　彼は恵むことを
好まず、ゆえに恵みを彼より遠ざけたまえ
一八 彼は衣のごとくにのろいを着たり＝　されればのろい水のごとく彼の身にしみ、油
のごとくその骨にしみ入らんことを
一九 おのれの着たる衣のごとくのろいを着＝　帯のごとくつねにまとわんことを
二〇 我を責むる者にかくのごとくむくい＝　我に逆らいて悪しきことを言う者の、主
より受くる報いとなしたまえ
二一 されど主なる神よ、御名のために我をかえりみたまえ＝　なんじのいつくしみ深
きによりて我をすくいたまえ
二二 我は貧しくしてともし＝　わが心わがうちにてもだえくるしむ
二三 我は夕日の影のごとく去りゆき＝　またいなごのごとく吹き去らるるなり
二四 わがひざは断食によりてよろめき＝　わが身はやせおとろう
二五 我は彼らにそしらるる者となれり＝　かれら我を見るとき、かしらを振る
二六 わが神・主よ、願わくは我をたすけ＝　なんじのいつくしみによりて我をすくい
たまえ
二七 これ、なんじの御手のわざなるを彼らに知らしめたまえ＝　主よ、なんじこれを
なしたまえり
二八 彼らはのろえどもなんじは祝したもう＝　我を攻むる者をはずかしめ、なんじの
しもべを喜ばせたまえ
二九 我を責むる者、はずかしめを着＝　おのが恥を上着のごとくまとわんことを
三〇 我はわが口をもて大いに主に感謝し＝　多くの人のなかにて主をほめまつらん
三一 主は貧しき者の右に立ち＝　彼を死に定むる者より救いたまえばなり

二十三日早祷

第百十篇

一 主わが主に言いたもう＝「我なんじのあだをなんじの足台とするまで、わが右に座すべし」と

二 主はなんじの力あるつえをシオンよりいだしたまわん＝ なんじはもろもろのあだのなかにて王となるべし

三 なんじ聖なる山に軍勢を率いる日に、民は喜びておのれをささげん＝ なんじの若き者はあしたの胎よりいずる露のごとくなんじにきたらん

四 主は誓いを立てて御心を変えたもうことなし＝「なんじはメルキゼデクの位にしたがいてとこしえに祭司たり」と

五 主はなんじの右にあり＝ その怒りの日に王たちを打ちやぶりたまわん

六 主はもろもろの国のなかにてさばきを行ないたまわん＝ しかばねをもてこれを満たし、広き地を統ぶるおさたちを打ちやぶりたまわん

七 彼は道のほとりの川よりくみて飲み＝ かくてそのこうべをあげん

第百十一篇

一 主をほめまつれ＝ 我は直き者のつどいにて、また公会にて心を尽くして主に感謝せん

二 主のみわざはおおいなり＝ そのみわざを慕う者はみなこれをかんがえきわむ

三 そのみわざは誉れとみいつに満てり＝ その正しきはとこしえにうすることなし

四 主はそのくすしきみわざを人の心に留めしめたまえり＝ 主は恵みありあわれみ深し

五 主はおのれを恐るる者に糧をあたえたもう＝ その契約をとこしえに御心にとめたまわん

六 主はもろもろの国民の領地をおのが民にあたえ＝ そのみわざの力をこれに現わしたまえり

七 その御手のわざはまことなり、正しきなり＝ そのもろもろのみさとしは変わることなし

八 これらは世々限りなく堅くさだめられ＝ まことと正しきをもておこなわる

九 主はその民にあがないをほどこし、その契約をとこしえに立てたまえり＝ その御名は聖にしてあがむべきなり

一〇 主を恐るるは知恵のはじめなり＝ これを行のう者はみな明らかなる悟りを得ん
主の誉れはとこしえにうすることなし

第百十二篇

一 主をほめまつれ＝ 主を恐れてその戒めをいたく喜ぶ者はさいわいなり
二 かかる人の末は地にてつよく＝ 正しき者のやからはさいわいをえん
三 富と宝はその家にあり＝ その正しきはとこしえにうすることなし
四 正しき者のために暗きなかにも光あらわる＝ 主は恵み豊かにあわれみ満ち、かつただし
五 恵みをほどこし貸すことをなす者はさいわいなり
行のう者はさいわいなり
六 正しき者はとこしえに動かさるることなく＝ また忘らるることなからん
七 彼は悪しきおとずれをおそれず＝ その心は主に寄り頼みてゆるがず
八 その心は堅く立ちて恐ることなく＝ 敵につきての願いをついに見るべし
九 彼は惜しみなくほどこし、貧しき者にあとう＝ その正しきはとこしえにうすることなく、その角は誉れをうけてあげられん
一〇 悪しき者はこれを見て怒り、歯がみしつつ溶けさらん＝ 悪しき者の願いはほろぶべし

第百十三篇

一 主をほめまつれ＝ 主のしもべよ、ほめまつれ、主の御名をほめまつれ
二 今よりとこしえに至るまで主の御名はほむべきかな＝ 日のいずるところより日の入るところまで主の御名はほめらるべし
三 主はもろもろの国民の上にありて高く＝ その栄光は天よりもたかし
四 我らの神・主にたぐうべき者はたれぞや＝ 主は高きところにいまし天と地をはるかに見おろしたもう
五 主は貧しき者をちりよりあげ＝ 乏しき者をあくたよりあげたもう
六 彼らをもろもろの君たちとともにすわらせ＝ その民の君たちとともにすわらせたまわん

九 また子を産まぬ女に家をあたえ、多くの子らの喜ばしき母たらしめたもう＝ 主をほめまつれ

二十三日晩祷

第百十四篇

一 イスラエルの民エジプトをいで＝ ヤコブの家、異なる言葉の民をはなれしとき
二 ユダは主の聖所となり＝ イスラエルは主の所領となれり
三 海はこれを見て逃げ＝ ヨルダンはうしろにしりぞけり
四 山は雄羊のごとくおどり＝ 小山は小羊のごとくおどれり
五 海よ、なんじ何とて逃ぐるや＝ ヨルダンよ、なんじ何とてうしろにしりぞくや
六 山よ、何とて雄羊のごとくおどるや＝ 小山よ、何とて小羊のごとくおどるや
七 地よ、なんじの主の御前にふるえ＝ ヤコブの神の御前におののけ
八 主は岩を池にかわらせ＝ 石を泉に変わらせたもう

第百十五篇

一 主よ、栄光を我らに帰するなかれ、我らに帰するなかれ＝ なんじのいつくしみとまことのゆえによりて、ただ御名にのみ帰したまえ
二 いかなればもろもろの国民はいう＝ 「かれらの神はいずこにありや」と
三 我らの神は天にいまし＝ 御心のままにすべてのことをおこないたもう
四 彼らの偶像はしろがねとこがねなり＝ 人の手のわざなり
五 その偶像は口あれど言わず＝ 目あれど見ず
六 耳あれど聞かず＝ 鼻あれどかがず
七 手あれど取らず足あれど歩まず＝ のどより声をいだすことなし
八 これを造る者はこれにひとしく＝ これに寄り頼む者はみなこれにおなじからん
九 イスラエルよ、主に寄りたのめ＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり
一〇 アロンの家よ、主に寄りたのめ＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり
一一 主を恐るる者よ、主に寄りたのめ＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり
一二 主は我らを御心にとめたまえり＝ 我らをめぐみたまわん
一三 イスラエルの家を恵み、アロンの家をめぐみ＝ 小さなるも大いなるも、主を恐

るる者をめぐみたまわん
一四　願わくは主なんじらを増しくわえ＝　なんじらとその子らを増し加えたまわんこ
　とを
一五　天地を造りたまいし主＝　なんじを恵みたまわんことを
一六　天は主の天なり＝　されど地は人の子らにあたえたまえり
一七　死にたる人は主をほむることなし＝　音なきところに下れる者は主をたたうるこ
　となし
一八　されど我らは今よりとこしえに至るまで主をたたえん＝　主をほめまつれ

二十四日早祷

第百十六篇

一　われ主をいつくしむ＝　わが声とわが願いをききたまえばなり
二　主耳をわれに傾けたまえり＝　われ世にある限り主を呼びまつらん
三　死の綱われをまとい、よみの苦しみ我をとらえたり＝　われは悩みとうれいに会
　えり
四　その時われ主の御名をよべり＝　「主よ、わが魂をすくいたまえ」と
五　主は恵み豊かにして正しくましませり＝　われらの神はあわれみふかし
六　主は愚かなる者を守りたもう＝　わが低くせられし時われをすくいたまえり
七　わが魂よ、なんじの安きにかえれ＝　主は豊かになんじをあしらいたまえり
八　なんじはわが魂を死よりすくい＝　わが目を涙より、わが足をつまずきより助け
　いだしたまえり
九　我は生ける者の国にてながらえ＝　主のみまえに歩まん
一〇　「われ大いになやめり」と言えり＝　されど我なお信じたり
一一　我あわてしときに言えり＝　「すべての人はいつわりなり」と
一二　我なにを主にささげん＝　いかにしてそのもろもろの恵みにむくいんや
一三　われ救いの杯をとり＝　主の御名を呼びまつらん
一四　我わが誓いを主に果たさん＝　主のすべての民の前にてはたさん
一五　主の聖徒の死ぬることなり　主のとうとしと見たもうものあり＝

一六 主よ、まことに我はなんじのしもべなり＝ 我はなんじのはしためのこにしてなんじのしもべなり、なんじわがなわめを解きたまえり
一七 われ感謝のいけにえをなんじにささげ＝ 主の御名を呼びまつらん
一八 われわが誓いを主に果たさん＝ 主のすべての民の前にてはたさん
一九 エルサレムよ、なんじのなかにて、主の家の大庭のなかにて果たさん＝ 主をほめまつれ

第百十七篇

一 もろもろの国よ、主をほめまつれ＝ もろもろの民よ、主をたたえまつれ
二 我らにたもういつくしみはおおいなり＝ 主のまことはとこしえに絶ゆることなし、主をほめまつれ

第百十八篇

一 主に感謝せよ、主の恵みはふかし＝ その いつくしみはとこしえに絶ゆることなし
二 イスラエルは、いざ言うべし＝ 「そのいつくしみは、とこしえに絶ゆることなし」と
三 アロンの家は、いざ言うべし＝ 「そのいつくしみは、とこしえに絶ゆることなし」と
四 主を恐るる者は言うべし＝ 「そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし」と
五 われ悩みのなかより主によばわれり＝ 主われに答え、我を解きはなちたまえり
六 主われとともにいませば、我におそれなし＝ 人われに何をなし得んや
七 主われとともにいまして我を助けたもう＝ されば我をにくむ者のほろぶるを我は見るべし
八 主に寄り頼むはよし＝ 人にたよるよりもまさりてよし
九 主に寄り頼むはよし＝ もろもろの王にたよるよりもまさりてよし
一〇 もろもろの国民は我をかこめり＝ われ主の御名によりて彼らをほろぼさん
一一 彼らは我をかこめり、げに彼らは我をかこめり＝ われ主の御名によりて彼らをほろぼさん
一二 彼らは、はちのごとく我をかこみ、いばらの火のごとく燃えあがれり＝ われ主

の御名によりて彼らをほろぼさん
一三 われ押し迫られて倒れんとせり＝　されど主われを助けたまえり
一四 主はわが力、わが歌なり＝　主はわが救いとなりたまえり
一五 なんじら正しき者の天幕にあがる喜びの勝ちうたを聞くべし＝　「主の右の手は
勇しき働きをなしたもう
一六 主の右の手は高くあがり＝　主の右の手は勇しき働きをなしたもう」
一七 我は死ぬることなからん＝　ながらえて主のみわざを言いあらわさん
一八 主はいたく我を懲らしたまえり＝　されど死にはわたしたまわざりき
一九 わがために義の門をひらけ＝　我そのうちに入りて主に感謝せん
二〇 これは主の門なり＝　正しき者はそのうちに入るべし
二一 我なんじに感謝せん＝　なんじ我に答えて、わが救いとなりたまえばなり
二二 家造りの捨てたる石は隅の親石となれり＝　これ主のなしたまえることにして、
二三 われらの目には、くすしきことなり
二四 これ主の設けたまえる日なり＝　我らはこの日によろこび楽しまん
二五 主よ、願わくは我らを救いたまえ＝　主よ、我らを栄えしめたまえ
二六 主の御名によりてきたる者はさいわいなり＝　我ら主の家よりなんじらを祝す
二七 主は神なり、我らに光をあたえたまえり＝　祭りの列をつくり、枝をたずさえて
祭壇の角にいたれ
二八 なんじはわが神なり、我なんじに感謝せん＝　なんじはわが神なり、我なんじを
たたえまつらん
二九 主に感謝せよ、主は恵みふかし＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

二十四日晩祷

第百十九篇

各区分ごとに栄光の頌を用いる。

一 おのが道を直くする者はさいわいなり＝　主の律法をあゆむ者はさいわいなり
二 主のもろもろのあかしをまもり＝　心を尽くして主をたずね求むる者はさいわい
なり

三 かかる人は悪をおこなわず＝ 主の道をあゆむなり
四 主よ、なんじ戒めを我らにあたえ＝ ねんごろにこれを守らしめたまえり
五 願わくは なんじわが道を かたくたて＝ なんじのおきてを 守らしめ たまわんこ
とを
六 我なんじのもろもろの戒めに目をとめん＝ さらばわれ恥ずることあらじ
七 我なんじの正しき定めをまなばん＝ さらば直き心をもてなんじに感謝せん
八 我はなんじのおきてをまもらん＝ 我を捨てさりたもうなかれ

九 若き人は何によりてかその道をきよめん＝ 御言葉によりて慎むのほかぞなき
一〇 われ心を尽くしてなんじを尋ねもとめん＝ 願わくはなんじの戒めより迷いいで
しめたもうなかれ
一一 我なんじの御言葉をわが心にたくわえたり＝ なんじに向かいて罪を犯さざらん
ためなり
一二 主よ、なんじはほむべきかな＝ 願わくはなんじのおきてを我におしえたまえ

一三 我なんじの口よりいずるもろもろの定めを宣べ＝ わがくちびるをもてこれをつ
とう
一四 我なんじのあかしの道をよろこぶ＝ もろもろの宝をよろこぶがごとし
一五 我なんじの戒めをおもい＝ なんじの道に目をとめん
一六 我はおきてをよろこび＝ 御言葉を忘ることなからん

一七 願わくはなんじのしもべを豊かにあしらいたまえ＝ 我ながらえて御言葉をまも
らん
一八 なんじわが目をひらき＝ なんじの律法のうちなるくすしきことを我に見させた
まえ
一九 われは世にある旅人なり＝ 我になんじの戒めをかくしたもうなかれ
二〇 われ常になんじの定めをしたい＝ わが魂は絶えいるばかりなり
二一 なんじの戒めより迷いいずる＝ 高ぶる者、のろわれし者をなんじ責めたもう
二二 我なんじのあかしをまもりたり＝ 彼らのそしりと侮りを我より取り去りたまえ

もろもろの君は座して相はかり、我をそこなわんとす＝　されどなんじのしもべはおきてをふかくおもわん

なんじのもろもろのあかしは我をよろこばせ＝　我をさとすものなり

わが魂はちりに伏す＝　御言葉にしたがいて我を生かしたまえ

我わが歩める道を語りしとき、なんじ我に答えたまえり＝　なんじのおきてを我ににおしえたまえ

なんじの戒めの道を我に悟らしめたまえ＝　我なんじのくすしきみわざをふかくおもわん

わが魂は悲しみによりて溶けゆく＝　願わくは御言葉にしたがいて我をつよくしたまえ

偽りの道を我より遠ざけ＝　ねんごろになんじの律法をおしえたまえ

我はまことの道をえらび＝　なんじのもろもろの定めをわがまえにおけり

我なんじのあかしを慕いてはなれず＝　主よ、願わくは我を恥ずかしめたもうな

かれ

なんじわが悟りをひろくしたまわん＝　さらば我なんじの戒めの道をはしるべし

二十五日早祷

主よ、願わくはなんじのおきての道を我に教えたまえ＝　われ終わりに至るまでこれを守らん

われに知恵をあたえたまえ＝　さらば我なんじの律法を守り、心を尽くしてこれにしたがわん

我になんじの戒めの道を歩ましめたまえ＝　我その道をたのしめばなり

わが心をなんじのあかしに寄らしめたまえ＝　むさぼりに傾かしめたもうなかれ

わが目をそむけて むなしきことを見ざらしめ＝　なんじの道にて我を生かしたまえ

なんじのしもべに御誓いをかたくしたまえ＝　これなんじを恐るる者のためなり

わが恐るるそしりをのぞきたまえ＝　なんじのさばきは正しければなり

四〇 我なんじの戒めをしたえり＝　願わくはなんじの義をもて我を生かしたまえ

四一 主よ、なんじのいつくしみを我にくだし＝　御誓いに従いてなんじの救いをきたらしめたまえ

四二 さらば我をそしる者に我は答うることをえん＝　われ御言葉に寄りたのめばなり

四三 またわが口よりまことの言葉を取り去りたもうなかれ＝　我なんじのさばきをのぞめばなり

四四 我たえずなんじの律法をまもり＝　とこしえまでこれをまもらん

四五 われ恐れなくあゆまん＝　我なんじの戒めをもとめたればなり

四六 我また王たちの前になんじのあかしを語らん＝　しかして我は恥ずかしめらるることなからん

四七 我なんじの戒めをよろこぶ＝　我これを愛すればなり

四八 我わが愛するなんじの戒めをとうとび＝　なんじのおきてをふかくおもわん

四九 願わくはなんじのしもべにたまいし御言葉をおぼえたまえ＝　なんじこれにより
て我に望みをいだかしめたまえり

五〇 これわが悩みのときのちからなり
なんじの御誓い我を生かしたり＝　されど我なんじの律法をはなれず

五一 高ぶる者大いに我をあざわらえり＝　これによりて我はちからをえたり

五二 主よ、我いにしえよりのなんじの定めを思いいだし＝　これなんじの律法を捨てし悪しき者のゆえになり

五三 我は激しき怒りをおこせり＝　わが旅路の家にてこれをうとうてなり

五四 なんじのおきてはわが歌となれり＝

五五 主よ、われ夜なんじの御名をおぼえ＝　なんじの律法をまもれり

五六 我なんじの戒めをまもりたり＝　ゆえにこの恵みを得たるなり

五七 主はわが受くべき分なり＝　我なんじの御言葉をまもることを約す

五八 われ心を尽くしてなんじの恵みを請いもとむ＝　願わくは御誓いにしたがいて我

を恵みたまえ
五九　我なんじのすべての道をおもい＝　足をかえしてなんじのあかしに向かわん
六〇　我すみやかにしてためらわざりき＝　これなんじの戒めを守らんとすればなり
六一　悪しき者のなわ我にまつわるとも＝　我なんじの律法をわすれず
六二　われ夜半に起きいでてなんじに感謝せん＝　なんじの正しきさばきによりてなり
六三　我はなんじを恐るるものの友なり＝　なんじの戒めを守る者のともなり
六四　主よ、なんじのいつくしみは地にみてり＝　願わくはなんじのおきてを我におしえたまえ

六五　主よ、なんじ恵みをほどこし＝　御言葉に従いてしもべをあしらいたまえり
六六　我なんじの戒めを信じたり＝　願わくはわれに悟りと知識をおしえたまえ
六七　われ苦しまざるさきには迷いいでたり＝　されど今は御言葉をまもる
六八　なんじは善にして善を行ないたもう＝　願わくはなんじのおきてを我におしえたまえ

六九　高ぶる者いつわりをもて我にのぞめり＝　われ心を尽くしてなんじの戒めをまもらん
七〇　彼らの心は肥えふとりてあぶらのごとし＝　されど我はなんじの律法をよろこぶ
七一　苦しみに会いしは我に良きことなり＝　これによりて我なんじのおきてをまなびえたり
七二　なんじの口の律法はわがためによし＝　あまたのこがねしろがねにまされり

二十五日晩祷

七三　なんじの御手はわれを造り、われを形づくれり＝　願わくは悟りを与えて我になんじの戒めを学ばしめたまえ
七四　なんじを恐るる者はわれを見てよろこばん＝　われ御言葉によりて望みをいだけばなり
七五　主よ、我はなんじのさばきの正しきを知る＝　またなんじは、まことの故により て我を苦しめたまえり

七六　願わくはなんじのしもべにたまいし御言葉により＝　なんじのいつくしみをもて
我をなぐさめたまえ
七七　なんじのあわれみを我に臨ませ、我を生かしたまえ＝　なんじの律法はわがよろ
こびなればなり
七八　高ぶる者に恥をこうむらせたまえ、彼らは偽りをもて我をくつがえしたり＝　さ
れど我はなんじの戒めをふかくおもわん
七九　なんじを恐るる者を我に帰らしめたまえ＝　彼らはなんじのあかしをさとらん
八〇　わが心を全くしてなんじのおきてを守らしめたまえ＝　さらばわれ恥をこうむる
ことなからん
八一　わが魂はなんじの救いを慕いて絶え入るばかりなり＝　われは御言葉によりての
ぞみをいだく
八二　わが目は御誓いを待ち望みておとろう＝　われ言えり、「なんじ いずれの時われ
を慰むるや」と
八三　我は煙の中の皮袋のごとくなりぬ＝　されどなお、なんじのおきてをわすれず
八四　なんじのしもべはいつまでしのぶべきや＝　なんじいずれの時われを責むる者を
さばきたもうや
八五　高ぶるもの我をおとしいれんとて穴をほれり＝　彼らはなんじの律法にしたがわ
ざるなり
八六　なんじの戒めはみなまことなり＝　彼らは偽りをもて我を責む、願わくは我を助
けたまえ
八七　彼らは地にてほとんど我をほろぼさんとせり＝　されど我はなんじの戒めを捨て
ざりき
八八　願わくはなんじのいつくしみによりて我を生かしたまえ＝　さればわれ御口より
いずるあかしをまもらん
八九　主よ、御言葉はさだまれり＝　天にてとこしえにさだまれり
九〇　なんじのまことはよろず世におよぶ＝　なんじ地を定めたまえば、地はかたく立

てり

九一　これらのものは御定めに従い、常にありてきょうにいたる＝　よろずのものは、

なんじのしもべなればなり

九二　なんじの律法わが喜びとならざりしならば＝　我はわが悩みのうちに滅びたりし

ならん

九三　我つねになんじの戒めをわすれじ＝　なんじこれをもて我を生かしたまえばなり

九四　我はなんじのものなり、願わくは我を救いたまえ＝　我なんじの戒めをもとめた

ればなり

九五　悪しき者は我を滅ぼさんとして待ち伏せたり＝　されど我はただなんじのあかし

をおもう

九六　我もろもろの全きに、はてあるを見たり＝　されどなんじのいましめは、きわま

りなし

九七　我なんじの律法をいつくしむこといかばかりぞや＝　我ひねもすこれを、ふかく

おもう

九八　なんじの戒めはつねに我とともにありてきょうにいたる＝　よろずのものは、

九九　我はなんじのあかしを深くおもう＝　ゆえに我すべての師にまさりて知恵おおし

一〇〇　我はなんじの戒めをまもりたり＝　ゆえに老いたる者にまさりて事をわきもうる

なり

一〇一　われ御言葉を守らんためにわが足をとどめ＝　もろもろの悪しき道にゆかしめず

一〇二　我なんじの定めを離れざりき＝　なんじ我を教えたまいたればなり

一〇三　御言葉の味わいはわが口に甘きこといかばかりぞや＝　蜜の甘きにまされり

一〇四　我なんじの戒めによりて知恵をえたり＝　このゆえに偽りのすべての道をにくむ

二十六日早祷

一〇五　なんじの御言葉はわが足のともしびなり＝　わが道のひかりなり

一〇六　われなんじの正しき定めをまもらんと誓いかつかたくせり

一〇七　我いたくくるしめり＝　主よ、願わくは御言葉に従いて我を生かしたまえ

一〇八 主よ、願わくは賛美の供えものをうけ＝
なんじの定めをおしえたまえ
一〇九 わが命はつねにあやうし＝ されど我なんじの律法をわすれず
一一〇 悪しき者わがためにわなをもうけたり＝ されど我なんじの戒めより迷いいでず
一一一 なんじのあかしはとこしえにわが嗣業なり＝ これわが心のよろこびなり
一一二 我なんじのおきてに心をかたむけ＝ 終わりに至るまでたえずこれをまもらん

一一三 我ふたごころの者をにくむ＝ されどなんじの律法をいつくしむ
一一四 なんじはわが隠れが、わが盾なり＝ われ御言葉により望みをいだく
一一五 悪をなす者よ、我をはなれ去れ＝ 我わが神のいましめを守らん
一一六 御誓いに従い、我をささえてながらえしめたまえ＝ わが望みにつきて恥なからしめたまえ
一一七 我をささえたまえ、さらばわれ安らかなるべし＝ 我つねになんじのおきてに心をそそがん
一一八 すべておきてより迷いいずる者をなんじかろしめたもう＝ 彼らの欺きはむなしければなり
一一九 なんじは地のすべての悪しき者を金かすのごとくみなしたもう＝ されば我なんじのあかしをあいす
一二〇 わが身はなんじを恐るるによりてふるう＝ 我はなんじのさばきをおそる

一二一 われは正と義とを行ないたり＝ われを捨てて、しいたぐる者にゆだねたもうなかれ
一二二 なんじのしもべのなかだちとなりて我をまもり＝ 高ぶる者の我をしいたぐるを許したもうなかれ
一二三 わが目はなんじの救いを待ちのぞみておとろう＝ なんじの正しき誓いを慕うによりてなり
一二四 願わくはなんじのいつくしみに従いてなんじのしもべをあしらい＝ 我になんじのおきてをおしえたまえ
一二五 我はなんじのしもべなり＝ われに知恵をあたえて、なんじのあかしを知らしめ

たまえ
一三六　今は主の働きたもうべきときなり＝　彼らはなんじの律法をやぶれり
一三七　ゆえに我なんじのいましめをあいし＝　こがねよりも混じりなきこがねよりもま
　さりて、これをしとう
一三八　ゆえに我なんじのもろもろの戒めによりてあゆみ＝　すべての偽りの道をにくむ

一三九　なんじのあかしはいとくすし＝　ゆえにわが魂これをまもる
一四〇　御言葉うち開くれば光をはなち＝　愚かなる者に知恵をあとう
一四一　われ口を広くあけてあえぎもとめ＝　なんじのいましめをしたえり
一四二　願わくは顧みて我をめぐみ＝　御名を愛する者につねにしたもうごとく、我にな
　したまえ
一四三　御言葉によりてわが歩みをととのえ＝　もろもろのよこしまを我に主たらしめた
　もうなかれ
一四四　我を人のしいたげよりあがないたまえ＝　さらば我なんじの戒めをまもらん

一四五　願わくは御顔の光をなんじのしもべの上に照らし＝　なんじのおきてを我におし
　えたまえ
一四六　わが目の涙は川のごとくにながる＝　人なんじの律法を守らざればなり

一四七　主よ、なんじはただしく＝　なんじのさばきはなおし
一四八　なんじ正しきをもてそのあかしを立て＝　こよなきまことをもて立てたまえり
一四九　わが熱心われを焼きつくせり＝　わが敵なんじの御言葉を忘るればなり
一五〇　なんじの誓いはいとかたし＝　ゆえになんじのしもべはこれをあいす
一五一　我はいと小さき者にて人にあなどらる＝　されどなんじの戒めをわすれず
一五二　なんじの義はとこしえに義なり＝　なんじの律法はまことなり
一五三　悩みと憂い我にのぞめり＝　されどなんじのいましめはわがよろこびなり
一五四　なんじのあかしはとこしえに正し＝　願わくは知恵をあたえて、我を生きながら
　えしめたまえ

二十六日晩祷

一四五 われ心を尽くして呼ばわる＝ 主よ、我に答えたまえ、我なんじのおきてをまもらん

一四六 我なんじに呼ばわる＝ 願わくは我を救いたまえ、我なんじのあかしをまもらん

一四七 われ朝まだき起きいでて呼ばわる＝ われ御言葉によりて望みをいだく

一四八 夜の時のきたらぬに先だちて我は目ざめ＝ なんじの御言葉によりて、わが声をききたまえ＝ 主よ、なんじの

一四九 願わくはなんじのいつくしみによりて、わが声をききたまえ＝ なんじの誓いをおもう

さばきによりて、我を生かしたまえ

一五〇 悪しき企てをもて我に追いせまる者ちかづけり＝ 彼らはなんじの律法にとおく

離る

一五一 されど主よ、なんじは我に近くいます＝ なんじのすべてのいましめは、まことなり

一五二 これなんじのとこしえに立てたまえるところなり＝ われ早くよりなんじのあかしによりて知れり

一五三 願わくはわが悩みを見て我をすくいたまえ＝ 我なんじの律法を忘れざればなり

一五四 わが訴えを聞きて我をあがない＝ 御言葉にしたがいて我を生かしたまえ

一五五 救いは悪しき者より遠くはなる＝ 彼らはなんじのおきてを求めざればなり

一五六 主よ、なんじのあわれみはおおいなり＝ なんじの義により我を生かしたまえ

一五七 われを攻むる者、われに敵する者おおし＝ されど我なんじのあかしを離るることなかりき

一五八 我まことなき者を見て忌みきろう＝ 彼らなんじの御言葉を守らざればなり

一五九 わがいかになんじの戒めを愛するかを思いたまえ＝ 主よ、なんじのいつくしみに従いて我を生かしたまえ

一六〇 なんじの御言葉はことごとくまことなり＝ なんじの正しき定めはとこしえに絶ゆることなし

一六一　もろもろの君はゆえなくして我を責む＝
　をおそる
一六二　我なんじの御言葉をよろこぶ＝　大いなる獲物を得たる人のごとし
一六三　われ偽りを憎み、これを忌みきろう＝　されどなんじの律法をあいす
一六四　われ一日に七たびなんじをほめたとう＝　なんじの正しきさばきのゆえによりて
　なり
一六五　なんじの律法を愛するものには大いなるやすきあり＝　彼らをつまずかするもの
　なし
一六六　主よ、我なんじの救いをのぞみ＝　なんじのいましめをおこのう
一六七　わが魂はなんじのあかしをまもる＝　我はいたくこれを愛す
一六八　我なんじの戒めとなんじのあかしをまもる＝　わがすべての道はみまえにあれば
　なり
一六九　主よ、願わくはわが呼ぶ声を御前にいたらせ＝　御言葉にしたがいて我に知恵を
　あたえたまえ
一七〇　わが願いを御前にいたらせ＝　御言葉にしたがいて我をたすけたまえ
一七一　わがくちびるは賛美をいだすべし＝　なんじ我にみおきてを教えたまえばなり
一七二　わが舌は御言葉をうとうべし＝　なんじのすべてのいましめは義なればなり
一七三　なんじの御手をつねにわが助けとなしたまえ＝　我なんじの戒めをえらびたれば
　なり
一七四　主よ、我なんじの救いをしとう＝　なんじの律法はわがよろこびなり
一七五　願わくは我をながらえしめたまえ、さらばなんじをほめまつらん＝　なんじの定
　め我をたすけんことを
一七六　我は失われたる羊のごとく迷いいでぬ＝　なんじのしもべを尋ねたまえ、我なん
　じのいましめを忘れざればなり

二十七日早祷

第百二十篇

一 われ悩みに会いて主に呼ばわる＝ 主われにこたえたまわん
二 「主よ、願わくは偽りのくちびるより我をのがれしめ＝ 欺きの舌より助けいだしたまえ」
三 欺きの舌よ、なんじに何をあたえられ＝
四 ますらおの鋭き矢なり＝ えにしだのあつき炭なり
五 わざわいなるかな、我はメセクにやどり＝ ケダルの天幕のかたわらに住めり
六 われは安きをにくむ者とともにながく住めり＝ 我はやすきを願えども我もの言えば彼ら戦いをなさんとす

第百二十一篇

一 われ山に向かいて目をあげん＝ わが助けはいずこよりきたるべきぞ
二 わが助けは主よりきたる＝ 主は天地を造りたまえり
三 主はなんじの足の動かさるるを許したまわず＝ なんじを守る者はまどろみたもうことなし
四 見よ、イスラエルを守りたもう者はまどろむこともなく＝ 眠ることもなからん
五 主はなんじを守るものなり＝ 主はなんじの右手をおおう陰なり
六 昼は日なんじを撃たず＝ 夜も月なんじを撃たじ
七 主はなんじを守りてもろもろの災いをまぬかれしめ＝ なんじの命をまもりたまわん
八 主はなんじのいずると入るとをまもり＝ 今よりとこしえに至るまでまもりたまわん

第百二十二篇

一 人われに向かいて、「いざ主の家に行かん」と言えるとき我よろこべり＝
二 サレムよ、我らの足はなんじの門のうちに立てり
三 エルサレムよ、なんじはかたく立ち＝ しげくつらなりたる町なり
四 もろもろのやから、主のやから、かしこに上りきたりて主の御名に感謝す＝ これイスラエルの定めなり
五 かしこにさばきの御位もうけらる＝ これダビデの家のみくらなり
六 エルサレムのために平安をいのれ＝ 「エルサレムを愛する者をさかえしめた

まえ
七 なんじの石がきのうちに平安あり＝ なんじの殿のうちに幸いあらん
ことを」と
八 わが兄弟、わが友のために言わん＝「なんじのうちに平安あらんことを」と
九 我らの神・主の家のために＝ 我なんじの幸いをもとめん

第百二十三篇

一 天の御位にいますものよ＝ われなんじに向かいて目をあぐ
二 見よ、我らはわが神・主に目をそそぎ＝ 我らをあわれみたまわんことをまつ
しもべその主の手に目をそそぎ＝ はしためその主婦の手に目をそそぐがごとし
三 主よ、我らをあわれみたまえ、我らをあわれみたまえ＝ 我らにあなどり満ちあ
ふれたればなり
四 心づかいなき者のはずかしめ我らの魂にあふれ＝ 高ぶる者のあなどり満ちあふ
れぬ

第百二十四篇

一 主もし我らとともにいまさざりしならん
二 人々われらに逆らいて起こりたつとき＝ 主もし我らとともにいまさざりしなら
んには
三 彼らの怒り我らに向かいておこりしとき＝ 我らを生けるままにてのみしならん
四 大水われらを押し流し、われらの魂をうち越え＝ さか巻く水われらの上をうち
五 こえしならん
六 主はほむべきかな＝ 我らを彼らの歯に渡してかみくらわせたまわざりき
七 我らは鳥取りのわなをのがるる鳥のごとくにのがれたり＝ わなは破れて我らは
のがれたり
八 我らの助けは主の御名にあり＝ 主は天地をつくりたまえり

第百二十五篇

一 主に寄り頼む者はシオンの山のごとく＝ 動かさるることなくしてとこしえにあ
るなり
二 エルサレムを山のかこめるごとく＝ 主は今よりとこしえにその民をかこみたま

わん

三 悪のつえは正しき者の領地にとどまることなかるべし＝ かくて正しき者はその
手をのべて悪をおこなわず

四 主よ、願わくは良き人をめぐみ＝ こころ直き者をさきわいたまえ

五 されど翻りておのが曲れる道に入る者は、悪をなす者とともに主これを去らしめ
たまわん＝ 願わくはイスラエルに平安あらんことを

二十七日晩祷

第百二十六篇

一 主シオンをふたたび栄えしめたまいしとき＝ われらは夢みる者のごとくなりき

二 そのとき我らの口にわらい満ち＝ 我らの舌によろこびの声みちたり
もろもろの国民のなかにて言えるものありき＝ 「主は彼らのために大いなる事
をなしたまえり」と

三 主は我らのため大いなることをなしたまえり＝ かくて我らはよろこべり

四 主よ、願わくは我らをふたたびさかえしめ＝ ネゲブの川のごとくに栄えしめた
まえ

五 涙とともにまくものは＝ 喜びとともに刈りとらん

六 種をたずさえ涙を流していで行くものは＝ 束をたずさえ喜びてかえりきたらん

第百二十七篇

一 主家を建てたもうにあらずば、建つる者の勤労はむなし＝ 主城を守りたもうに
あらずば、見張りびとのさめおるはむなしきことなり

二 なんじら早く起き、おそく伏して辛苦の糧をくろうはむなしきことなり
いつくしみたもう者を眠れるときにも満たしたもう

三 見よ、子らは主の与えたまえる嗣業なり＝ 胎の実はその報いのたまものなり

四 年若きときの子らは矢のごとし＝ ますらおの手にある矢のごとし

五 矢の満ちたる矢筒を持つ人はさいわいなり＝ 彼らは門にありてあだと物言うと
きはずかしめられじ

第百二十八篇

一　主を恐るる者はさいわいなり＝　その道を歩む者はみなさいわいなり
二　なんじおのが手の勤労の実をくろうべし＝　なんじは幸いを得、また安らかなるべし
三　なんじの妻は家の奥におりて、多くの実を結ぶぶどうの木のごとく＝　なんじの子らは食卓をかこみてオリブの若木のごとし
四　見よ、主を恐るるものは＝　かくさいわいをえん
五　主はシオンよりなんじを祝し＝　なんじ世にあらん限りエルサレムの幸いを見んことを
六　なんじおのが子らの子を見＝　イスラエルのうえに平安あらんことを

第百二十九篇

一　「彼らはしばしばわが若きときより我をなやませり」＝　今イスラエルはかく言うべし
二　「彼らはしばしばわが若きときより我をなやませり＝　されど我に勝つことを得ざりき
三　耕す者はわが背をたがやし＝　そのうねをながくせり」と
四　主は正しくましませり＝　悪しき者のなわを断ちたまえり
五　シオンをにくむ者ははじを受け＝　みな退けられんことを
六　彼らは屋根のうえの草のごとく＝　育たざるさきに枯れんことを
七　これを刈る者はその手に満たず＝　これをつかぬる者はその束ふところに満たざるなり
八　かたわらを過ぐる者、「主の恵みなんじらの上にあれ」と言わず＝　「主の御名によりてなんじを祝す」といわず

第百三十篇

一　主よ、われ深き淵よりなんじをよぶ＝　主よ、願わくはわが声を聞き、わが願いに耳をかたむけたまえ
二　主よ、なんじもし、もろもろの不義に目をとめたまわば＝　主よ、たれかよく立つことを得んや
三　されどなんじにゆるしあり＝　されば人にかしこまれたもうべし

五　われ主を待ち望む、わが魂はまちのぞむ＝
六　わが魂の主を待つは見張りびとの暁を待
　つにまさるなり
七　イスラエルよ、主によりて望みをいだけ＝
　るあがないあり
八　主はイスラエルをすくい＝　そのもろもろの
　罪よこしまより、あがないたまわん

第百三十一篇

一　主よ、わが心おごらず、わが目たかぶらず＝
　我におよばぬ大いなる事とくすし
　きわざをなさざりき
二　我はわが魂を静め、また安らかならしめたり＝
　わが魂は母の胸にある幼な子の
　ごとく安らかなり
三　イスラエルよ、主にたより＝　今よりとこしえに望みをいだけ

二十八日早祷

第百三十二篇

一　主よ、願わくはダビデをおもい＝　その忍び苦しみをおぼえたまえ
二　ダビデ主に誓いをたて＝　ヤコブの全能者にちかいて言う
三　「我わが家に入らず＝　わが伏しどにのぼらず
四　わが目を眠らしめず＝　わがまぶたを閉じしめず
五　主のために所をたずねいだし＝　ヤコブの全能者のために住まいを見いだすまで
　にいたらん」と
六　見よ、我らエフラタにてこれを聞き＝　ヤアルの野にてこれを見いだせり
七　「我らはその住まいにゆき＝　その足台の前にひれ伏さん」
八　主よ、立ちてなんじの休みどころに入り＝　なんじの契約の箱とともに入りた
　まえ
九　なんじの祭司たちは義を着＝　なんじの聖徒はみな喜び呼ぼうべし
一〇　なんじのしもべダビデのために＝　なんじに油そそがれし者の顔をしりぞけたも
　うなかれ

二　主、堅くダビデに誓いたまいたれば、これにたごうことあらじ＝「我なんじの
　身よりいでし者をなんじの位に座せしめん
三　なんじの子らわが教うる契約とあかしをまもらば＝　彼らの子らもまたとこしえ
　になんじの位に座すべし」
一三　主はシオンをえらび＝　おのが住まいにせんと望みたまえり
一四　「これはとこしえにわが休みどころなり＝　我ここに住まわん、そは我これを望め
　ばなり
一五　我シオンの糧をゆたかに祝し＝　食物をもてその貧しき者を飽かしめん
一六　われ救いをその祭司たちに着せん＝　その聖徒はみな喜び呼ばうべし
一七　われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん＝　わが油そそぎし者のため
　にともし火をそなえたり
一八　我かれのあだに恥を着せん＝　されど彼の冠はかがやかん

第百三十三篇

一　見よ、はらからの相むつむはいかによきかな＝　相ともにおるはいかにたのしき
　かな
二　この楽しみはこうべに注がれたる尊き油のひげに流れ＝　アロンのひげに流れ、
　その衣のえりにまで流れしたたるがごとし
三　またヘルモンの露くだりてシオンの山に流るるがごとし＝　主はかしこに幸いを
　下し、限りなき命を与えたまえばなり

第百三十四篇

一　よる主の家に立ち主に仕うるもろもろのしもべよ＝　主をほめまつれ
二　なんじら聖所に向かいて手をあげ＝　主をほめまつれ
三　願わくは主シオンよりなんじを祝したまわんことを＝　主は天地を造りたまえり

第百三十五篇

一　なんじら主をほめまつれ、主の御名をほめまつれ＝　主のしもべらよ、主をほめ
　たたえよ
二　なんじらは主の家に立つものなり＝　我らの神の大庭に立つものなり
三　主は恵み深し、なんじら主をほめたたえよ＝　主のあわれみは大いなり、その御

名をほめうたえ
四 そは主おのがためにヤコブをえらび＝　イスラエルを選びておのがものとなした
まえり
五 われ主の大いなるを知り＝　我らの主のもろもろの神にまされるを知れり
六 主はその御心にかのう事をことごとくなし＝　天にも地にも海にも淵にもこれを
なしたもうなり
七 主は地のはてより雲をのぼらせ＝　雨のためにいなずまを造り、その倉より風を
いだしたもう
八 主はエジプトのういごを撃ち＝　人より獣にいたるまでこれを撃ちたまえり
九 エジプトよ、主はなんじの中にしるしとくすしきみわざとをおくり＝　パロとそ
のしもべらに臨ませたまえり
一〇 主は多くの国民を撃ち＝　また勢いある王たちをうち殺したまえり
一一 アモリびとの王シホン、バシャンの王オグをころし＝　カナンのすべての国を撃
ちたまえり
一二 主はその地をゆずりとし＝　その民イスラエルの嗣業としてあたえたまえり
一三 主よ、なんじの御名はとこしえに絶ゆることなし＝　主よ、なんじの誉れはよろ
ず世におよばん
一四 主はその民のためにさばきをなし＝　そのしもべらにあわれみをしめしたまわん
一五 もろもろの国の偶像はしろがねとこがねなり＝　人の手のわざなり
一六 彼らは口あれど言わず＝　目あれど見ず
一七 耳あれど聞かず＝　またその口に息あることなし
一八 これを造る者はこれにひとしく＝　これに寄り頼む者はみなこれに同じからん
一九 イスラエルの家よ、主をほめまつれ＝　アロンの家よ、主をほめまつれ
二〇 レビの家よ、主をほめまつれ＝　主を恐るる者よ、主をほめまつれ
二一 エルサレムに住みたもう主はシオンにてほむべきかな＝　主をほめまつれ

二十八日晩祷

第百三十六篇

一 主に感謝せよ、主はめぐみふかし＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

二 もろもろの神の神に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

三 もろもろの主の主に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

四 ただひとりくすしきわざをなしたもう者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

五 知恵をもてもろもろの天を造りたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

六 地を水の上に敷きたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

七 大いなる光を造りたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

八 昼をつかさどらするために日を造りたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

九 夜をつかさどらするために月ともろもろの星を造りたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一〇 エジプトのういごを撃ちたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一一 イスラエルをエジプトより導きいだしたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一二 御腕をのばし強き御手をもてこれを引きいだしたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一三 紅海を二つに分けたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一四 イスラエルをしてそのなかを渡らしめたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一五 パロとその軍勢を紅海のうちに倒したまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

その民をみちびきて荒れ野を過ぎ行かしめたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

大いなる王たちを撃ちたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

名ある王たちを殺したまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

アモリびとの王シホンを殺したまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

バシャンの王オグを殺したまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

彼らの地を嗣業として与えたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

そのしもベイスラエルに嗣業としてこれを与えたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

我らが卑しかりしときに覚えたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

我らを敵より助けいだしたまえる者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

すべての生ける者に食い物をあたえたもう者に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

天の神に感謝せよ＝　そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

第百三十七篇

我らバビロンの川のほとりにすわり＝　シオンを思いいでて涙をながしぬ

そのあたりにやなぎあり＝　我らこれに琴をかけたり

我らをとりこにせしもの我らに歌をもとめたり＝　我らを苦しむる者おのれを喜ばせんとて、「シオンの歌一つうたえ」と言えり

われら異国にあり＝　いかで主の歌をうたわんや

エルサレムよ、もし我なんじを忘れなば＝　わが右の手その巧みをわすれよかし

六 もし我なんじを思いいださず、もし我エルサレムをわがすべての喜びのきわみとなさずば＝

七 主よ、願わくはエルサレムの日にエドムの人々の言いしことを御心にとめたまえ＝「これを払いのぞけ、その基までも払いのぞけ」と彼らは言えり

八 バビロンの娘、我らをほろぼす者よ＝ なんじが我らになししごとく、なんじに報ゆる人はさいわいなり

九 なんじのみどりごを取りて＝ 岩に投げうつ者はさいわいなり

第百三十八篇

一 主よ、我は心を尽くしてなんじに感謝し＝ もろもろの神の前にてなんじをほめうたわん

二 我なんじの聖なる宮に向かいて伏しおがみ＝ なんじのいつくしみとまことのゆえによりて御名に感謝せん そはなんじ御名と御言葉をたかくし＝ よろずのものにまさりて高くしたまいたればなり

三 なんじわが呼ばわりし日に我にこたえ＝ わが魂の力を増しくわえたまえり

四 主よ、地のすべての王はなんじをほめたたえん＝ 彼らはなんじの口のもろもろの言葉をききたればなり

五 彼らは主のもろもろの道につきて歌わん＝ 主の栄光おおいなればなり

六 主は高くましませども、卑しきものを顧みたもう＝ されどまた高ぶる者を遠きより知りたまえり

七 たといわれ悩みのなかを歩むともなんじわれを生かし＝ 御手を伸べてわがあだの怒りを防ぎ、その右の御手われを救いたもう

八 主はわがために御心をなし遂げたまわん＝ 主よ、なんじのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし、願わくはなんじの御手のわざを捨てたもうなかれ

二十九日早祷

第百三十九篇

一 主よ、なんじは我をさぐり＝ 我を知りたまえり

二　なんじはわがすわるをも立つをも知り＝
もう
三　なんじはわが歩むをもわが伏すをも探りいだし＝　わがもろもろの道をことごと
く知りたまえり
四　我ひとことも語らざるさきに＝　主よ、なんじことごとく知りたもう
五　なんじは前より、うしろより我をかこみ＝　わが上に御手をおきたもう
六　かかる知識はいとくすしくして我に過ぐ＝　また高くしておよぶことあたわず
七　我いずこに行きてなんじの御霊をはなれんや＝　我いずこに行きてなんじの御前
をのがれんや
八　われ天にのぼるともなんじかしこにいまし＝　我わが床をよみに設くとも、なん
じかしこにいます
九　われあけぼのの翼をかりてとび＝　海のはてに至りて住むとも
一〇　かしこにてなおなんじの手、我をみちびき＝　なんじの右の手、我をささえたま
わん
一一　「やみ我をことごとくおおい＝　我をかこむ光は夜となれ」とわれ言うとも
一二　なんじにはやみも暗きことなく、夜も昼のごとくかがやく＝　なんじには暗きも
光も異なることなし
一三　なんじはわがはらわたをつくり＝　またわが母の胎にてわれを組み成したまえり
一四　我なんじをほめたたえん、なんじは恐るべくまたくすしければなり　なんじのみわざはく
すし、なんじ我をことごとく知りたもう
一五　われ隠れたる所にて造られ、地の深き所にてたえにつづり合わされしとき＝　わ
が骨なんじに隠るることなかりき
一六　わがからだいまだ組み成されざるに、なんじの目は早くよりこれを見たまえり＝
わがために設けたまいし月日の、いまだ一日もなかりしとき、その月日はことご
とくなんじの書にしるされたり
一七　神よ、なんじのもろもろの御思いは我に尊きこといかばかりぞや＝　その御思い
のすべくくりはいかに大いなるかな
一八　我これを数えんとすれどもその数は砂よりもおおし＝　われ目さむるときもなお

なんじとともにあり
一九　神よ、なんじ悪しき者を殺したまわんことを＝　血をながす者はわれを離れ去らんことを
二〇　彼らは悪しき企てをもてなんじにさからい＝　高ぶりて悪をおこのうなり
二一　主よ、我はなんじを憎む者をにくみ＝　なんじに逆らいて起こり立つ者をいとうにあらずや
二二　我いたく彼らをにくみ＝　彼らをわがあだとなすなり
二三　神よ、願わくは我を探りてわが心を知り＝　われを試みてわがもろもろの思いを知りたまえ
二四　我によこしまなる道のありやなしやを見＝　我をとこしえの道にみちびきたまえ

第百四十篇

一　主よ、願わくは悪しき人より我を助けいだし＝　われを守りて荒らぶる者よりのがれしめたまえ
二　彼らは心のうちに悪しきことをくわだて＝　絶えず戦いをおこす
三　彼らはへびのごとくおのが舌をするどくし＝　そのくちびるにはまむしの毒あり
四　主よ、われを守りて悪しき人の手よりのがれしめ＝　わが足をつまずかせんと計る荒らぶる人よりのがれしめたまえ
五　高ぶる者はわがために落し穴を設け、綱をもてあみをはり＝　道のほとりにわなを伏せたり
六　われ主に言えり、「なんじは わが神なり＝　主よ、願わくは わが祈りの声をきたまえ
七　わが救いの力、主なる神よ＝　なんじは戦いの日にわがこうべをおおいたまえり
八　主よ、悪しき人の願いを許したもうなかれ＝　その悪しき企てを遂げしめたもうなかれ
九　我を囲む者そのこうべをあぐ＝　彼らはそのくちびるの悪しき言葉にて、みずから打ちひしがれんことを
一〇　燃ゆる炭かれらの上に落ち＝　彼らは深き穴に投げ入れられて、ふたたび起きずることあたわざらしめたまえ

二　悪しきことを言う者は世に立てられず＝　荒ぶる者はすみやかに災いに追いしか
　れてたおさるべし」と
三　われ知る、主は苦しむ者の訴えをきき＝　貧しき者のために正しきさばきをなし
　たもうことを
三　正しき者はかならず御名に感謝し＝　直き者はみまえに住まわん

二十九日晩祷

第百四十一篇

一　主よ、われなんじを呼べり、願わくはすみやかにきたりたまえ＝　我なんじに呼
　ばわるとき、わが声に耳をかたむけたまえ
二　わが祈りは御前に立ちのぼる香のごとく＝　わが手をあぐることタベのいけにえ
　のごとくなしたまえ
三　主よ、わが口に門もりをおき＝　わがくちびるの戸をまもりたまえ
四　悪しきことにわが心をかたむけず、悪を行のう者とともに悪しきわざにくみする
　ことなからしめ＝　彼らのうまき物をくらわしめたもうなかれ
五　正しき者にいつくしみをもて我を打たせ、また責めさせたまえ＝　されど悪しき
　者の油をわがかしらに注がしめたもうなかれ、わが祈りは絶えず彼らの悪しきわ
　ざにさかろう
六　彼らおのれを罪に定むるものにわたさるるとき＝　主の御言葉のまことなるを知
　るにいたらん
七　裂かれて地に打ちくだかるる岩のごとく＝　かれらの骨はよみの口にまき散らさ
　れん
八　されど主なる神よ、わが目はなんじに向こう＝　我はなんじに寄り頼む、われを
　助けなきままに捨ておきたもうなかれ
九　我を守りて彼らがわがために設くる落し穴をのがれしめ＝　悪を行のう者のわな
　を免れしめたまえ
一〇　悪しき者は皆おのが網に陥らんことを＝　されど我はのがれしめたまえ

第百四十二篇

一　われ声をいだして主によばわり＝
二　われは御前にわが嘆きをそそぎいだし＝　わが悩みをかたる
三　わが息たえんとする時も、なんじわが道を知りたまう＝　人われを捕えんとてわ
　が行く道に落し穴をもうけたり
四　我はわが右に目を注ぎて見たれど、我に心をとむる者ひとりだになし＝　我には
　避け所なく、また我をかえりみるものなし
五　主よ、我なんじに呼ばわりていう＝「なんじはわが避け所、生ける者の地にて
　わが受くべき分なり」と
六　わが叫びに御心をとめたまえ＝　我いと低くせられたればなり
　われを責むる者より助けいだしたまえ＝　彼らは我にまさりて強ければなり
七　願わくは我をひとやよりいだしたまえ＝　さらばわれ御名に感謝せん
　正しき者わが囲りにつどわん＝　なんじ豊かに我をあしらいたもうべければなり

第百四十三篇

一　主よ、願わくはわが祈りをきき、わが願いに耳をかたむけたまえ＝　なんじのま
　ことなんじの正しきをもて我にこたえたまえ
二　なんじのしもべのさばきにかかわりたもうなかれ＝　そは生ける者ひとりだに御
　前に義とせらるるはなし
三　あだは我を攻め、わが命を地にうちくだき＝　死にて久しくなりし者のごとく、
　われを暗き所にすまわせたり
四　わが霊はわがうちに消えうせんとし＝　わが心はわがうちにおとろえ果てたり
五　われはいにしえの日を思いいで、なんじの行ないたまいしすべてのことをかんが
　え＝　なんじの御手のわざをおもう
六　われはなんじに向かいて手をのべ＝　わが魂はかわきたる地のごとくなんじをし
　とう
七　主よ、すみやかに我に答えたまえ、わが霊はおとろう＝　われに御顔を隠したも
　うなかれ、恐らくはわれ墓にくだる者のごとくならん
八　あしたになんじのいつくしみを聞かしめたまえ＝　我なんじに寄りたのめばなり
　わが歩むべき道を知らしめたまえ＝　我わが魂をなんじにあぐればなり

九　主よ、我をわがあだより助けいだしたまえ＝　われ隠れんとしてなんじにはしり
　ゆけり
一〇　なんじはわが神なり、我に御心を行のことを教えたまえ＝　恵みふかき御霊を
　もて、我を平らかなる道にみちびきたまえ
二　主よ、願わくは御名のために我を生かし＝　なんじの義により我を悩みより救
　いいだしたまえ
三　またなんじのいつくしみによりてわがあだを絶ち＝　わが敵をことごとく滅ぼし
　たまえ、我はなんじのしもべなればなり

三十日早祷

第百四十四篇

一　主・わが岩はほむべきかな＝　主はいくさすることをわが手に教え、戦うことを
　わが指におしえたもう
二　主はわが岩、わが城なり＝　わがとりで、我をすくうものなり
　主はわが盾、わが寄り頼むものなり＝　もろもろの民をおのれに従わせたもう
三　主よ、人はいかなる者なればこれを顧みたもうや＝　人の子はいかなる者なれば
　これを御心にとめたもうや
四　人は息にことならず＝　そのながろうる日は過ぎゆくかげにひとし
五　主よ、願わくはなんじの天をたれてくだり＝　御手を山につけて煙をたたしめた
　まえ
六　いなずまを放ちて彼らをちらし＝　なんじの矢を放ちて、彼らをやぶりたまえ
七　上より御手を伸べて我をすくい＝　大水より、異邦人の手より助けいだしたまえ
八　彼らの口は偽りをかたり＝　その右の手は偽りの右の手なり
九　神よ、我なんじに向かいて新らしき歌をうたい＝　十弦の立琴に合わせてなんじ
　をほめうたわん
一〇　なんじは王たちに勝利をあたえ＝　しもべダビデをすくいたもう
一一　願わくは血に飢えしつるぎより我をすくい、異邦人の手より助けいだしたまえ＝
　彼らの口はいつわりを語り、その右の手はいつわりの右の手なり

一三 我らの若きむすこらは、よく育ちたる草木のごとく＝ 我らの娘らは宮造りのた
めに刻まれし、すみの柱のごとくならんことを
一三 我らの倉は満ち足りてさまざまのものをそなえ＝ 我らの羊は野にて千よろずの
子を産まんことを
一四 我らの家畜はみごもり、子を産むに誤ることなく＝ 我らのちまたには悩みの叫
び絶えてなからんことを
一五 かかる恵みをうくる民はさいわいなり＝ 主をおのが神とする民はさいわいなり

第百四十五篇

一 わが神・主よ、我なんじをあがめ＝ 世々限りなく御名をほめまつらん
二 われ日ごとになんじをほめ＝ 世々限りなく御名をほめたたえん
三 主は大いなり、いともほむべきかな＝ その大いなること尋ね知りがたし
四 この代は次の代に向かいてみわざをほめたたえ＝ なんじの大能の働きを宣べつ
たえん
五 我はみいつの栄光ある輝きをおもい＝ くすしきみわざをふかくおもわん
六 人はなんじの恐るべきみわざの力をかたり＝ 我はなんじの大いなることを宣べ
つたえん
七 彼らはなんじの賜いし豊かなる恵みを言いいで＝ なんじの義を声高くほめうた
わん
八 主は恵み深くあわれみに富み＝ また怒りたもうことおそく、いつくしみゆたか
なり
九 主はよろずのものにめぐみあり＝ そのあわれみは造りたまえるすべてのものの
上にあまねし
一〇 主よ、すべてのみわざはなんじに感謝し＝ なんじの聖徒はなんじをほめたた
えん
一一 かれらは御国の栄光をかたり＝ 御力を宣べつたえん
一二 彼らはなんじの大能のはたらきを人の子らにさとらせ＝ 御国の栄光あるかがや
きを知らすべし
一三 なんじの国はとこしえの国なり＝ そのまつりごとはよろず代に絶ゆることなし

主のすべての御言葉はまことなり＝
一四 主はすべて倒れんとするものをささえ＝ かがむ者を直く立たしめたもう
一五 よろずのものの目はなんじを待ち＝ なんじは時にしたがいて彼らに糧をあたえたもう
一六 なんじ御手をひらき＝ もろもろの生けるものの願いを飽かしめたもう
一七 主はそのすべての道にただしく＝ すべてのみわざにめぐみふかし
一八 主はすべておのれを呼ぶものに近くいまし＝ まことをもて呼ぶものに近くましませり
一九 主はおのれを恐るるものの願いを遂げしめ＝ その叫びをききてこれをすくいたもう
二〇 主はすべて主を愛する者を守りたもう＝ されど悪しき者をことごとくほろぼしたまわん
二一 わが口は主のほまれをかたり＝ よろずの者は世々限りなくその聖なる御名をほめまつるべし

第百四十六篇

一 なんじら主をほめまつれ＝ わが魂よ、主をほめまつれ
二 われ生ける限り主をほめまつり＝ わがながろうるほどはわが神をほめうたわん
三 もろもろの君にも人の子にも寄り頼むなかれ＝ そは彼らに助けあることなし
四 その息いで行けば彼は土にかえる＝ その日かれのもろもろの企てはほろぶ
五 ヤコブの神をおのが助けとする者はさいわいなり＝ その望みをおのが神・主におく者はさいわいなり
六 神は天地と海とそのなかなるすべてのものを造り＝ とこしえにまことをまもりたもう
七 しいたげらるる者のために正しきさばきをおこない＝ 飢えたる者に食い物をあたえたもう
八 主は捕われたる人を解き放ちたもう＝ 主はめしいの目をひらきたもう
主はかがむ者を直く立たせたもう＝ 主は正しき者をいつくしみたもう
九 主は宿りびとを守り、やもめとみなしごをささえたもう＝ されど悪しき者の道

を滅ぼしたもう
一〇 シオンよ、なんじの神・主は世々とこしえに統べ治めたまわん＝　主をほめまつれ

三十日晩祷

第百四十七篇

一 主をほめまつれ、我らの神をほめ歌うはよきことなり＝　主は恵み深し、主をほめ歌うはふさわしきことなり
二 主はエルサレムをきずき＝　イスラエルのさすらえる者をあつめたもう
三 主は心のくだかれし者をいやし＝　その傷をつつみたもう
四 主は星のかずをさだめ＝　すべてこれに名をあたえたもう
五 我らの主は大いなり、また力にとみたもう＝　その知恵ははかりがたし
六 主はしいたげられたる者をたこうし＝　悪しき者を地に投げすてたもう
七 主に感謝してうたえ＝　琴にあわせて我らの神をほめうたえ
八 主は雲をもて天をおおい、地のために雨をそなえ＝　もろもろの山に草をはえしめたもう
九 主はくいものを獣にあたえ＝　また鳴くこがらすにあたえたもう
一〇 主は馬の力を喜びたまわず＝　人の足をよみしたまわず
一一 されど主を恐るる者をよろこび＝　そのいつくしみを望む者をよみしたもう
一二 エルサレムよ、主をほめまつれ＝　シオンよ、なんじの神をほめまつれ
一三 主になんじの門の貫の木をかとうし＝　なんじのうちなる子らをさきわいたまえばなり
一四 主はなんじの国のうちに安きをあたえ＝　いと良き麦をもてなんじを飽かしめたもう
一五 主はその戒めを地にくだしたもう＝　その御言葉はすみやかにはしる
一六 主は雪をひつじの毛のごとく降らせ＝　霜を灰のごとくにまきたもう
一七 主は氷をつぶてのごとくに投げうちたもう＝　たれかその寒さに耐ええんや
一八 主御言葉をくだしてこれを溶かし＝　その風を吹かせたまえばもろもろの水はな

がる
一九 主は御言葉をヤコブにしめし＝ もろもろのおきてと定めをイスラエルにしめし
たもう
二〇 主はいずれの国民をもかくあしらいたまいしにあらず＝ 彼らは主の定めを知ら
ざるなり、主をほめまつれ

第百四十八篇

一 主をほめまつれ、もろもろの天より主をほめまつれ＝ もろもろの高き所にて主
をほめまつれ
二 主の御使いよ、みな主をほめまつれ＝ 主の万軍よ、みな主をほめまつれ
三 日よ、月よ、主をほめまつれ＝ かがやく星よ、みな主をほめまつれ
四 いと高き天よ、主をほめまつれ＝ 天のうえなる水よ、主をほめまつれ
五 彼らはみな主の御名をほめまつるべし＝ 主命じたまいたれば彼らは造られたり
六 主かれらをとこしえに堅くたて＝ 越ゆべからざる境をさだめたまえり
七 竜よ、すべての淵よ＝ 地より主をほめまつれ
八 火よ、あられよ、雪よ、霜よ＝ 御言葉にしたごうあらしよ
九 もろもろの山、もろもろの丘よ＝ 実をむすぶ木、すべての香柏よ
一〇 獣ともろもろの家畜よ＝ 地をほうものと翼ある鳥よ
一一 地の王たちともろもろのたみよ＝ 君たちともろもろのつかさびとよ
一二 若き男と若きおんなよ＝ 老いたる人とおさなきものよ
一三 みな主の御名をほめまつるべし＝ 主の御名は高くしてたぐいなく、その栄光は
地よりも天よりも上にあればなり
一四 主はその民のために一つの角をあげたまえり＝ こはもろもろの聖徒、主に近き
イスラエルの民のほめたとうべきものなり、主をほめまつれ

第百四十九篇

一 主をほめまつれ、主に向かいて、新らしき歌をうたえ＝ 聖徒のつどいにて主の
ほまれをうたえ
二 イスラエルはおのれを造りたまいし者をよろこび＝ シオンの子らはおのが王の
ゆえによりてたのしむべし

三　彼ら踊りつつその御名をほめたたえ＝　鼓と琴をもて主をほめうたうべし
四　主はおのが民をよろこび＝　へりくだる者を勝利に輝かせたまわん
五　聖徒を栄光によりてよろこばせ＝　その伏しどにてよろこび歌わしめたまえ
六　その口には神をほむるうたあり＝　その手にはもろ刃のつるぎあり
七　こはもろもろの国にあだをかえし＝　もろもろの民を懲らし
八　彼らの王たちを鎖をもてつなぎ＝　彼らの貴人をくろがねのかせをもていましめ
九　しるされたるさばきを彼らに行のうためなり＝　これもろもろの聖徒の誉れなり、主をほめまつれ

第百五十篇

一　主をほめまつれ、聖所にて神をほめまつれ　大能の働きのゆえをもて神をほめまつれ＝　御力のあらわるる大空にて神をほめまつれ

二　大能の働きのゆえをもて神をほめまつれ＝　すぐれて大いなることのゆえにより　て神をほめまつれ

三　ラッパの声をもて神をほめまつれ＝　十弦の琴と立琴とをもて神をほめまつれ

四　鼓と踊りをもて神をほめまつれ＝　緒琴と笛をもて神をほめまつれ

五　音のたかきシンバルをもて神をほめまつれ＝　鳴りひびくシンバルをもて神をほめまつれ

六　息ある者はみな主をほめまつれ＝　主をほめまつれ

昭和三十四年十一月三十日　初　版発行
昭和四十五年五月三十一日　第十四版発行

著作兼発行者　日本聖公会教務院

発行所　日本聖公会出版事業部
東京都渋谷区東一丁目四番二一号
郵便番号　一五〇

印刷者　河北印刷株式会社